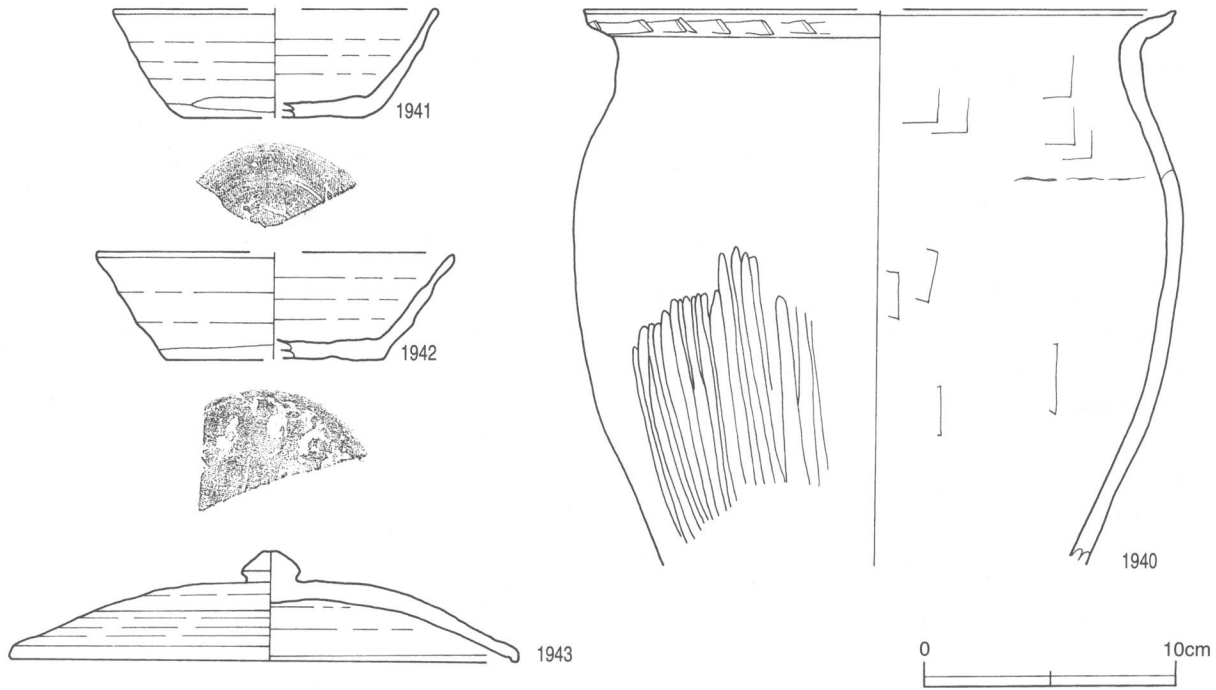


遺物 土師器片42点、須恵器片37点、鉄滓1点が出土している。第557図1940の土師器甕は北東部の覆土上層から、1941の須恵器坏は覆土中から、1942の須恵器坏は東部の床面から、1943の須恵器蓋は竈内から、それぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から8世紀中葉と推定される。



第557図 第483号住居跡出土遺跡実測図

第483号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第557図 1940	甕 土師器	A [23.4] B (22.0)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、体部中位に最大径をもつ。頸部はくの字状に折れ、口縁端部はつまみ上げられている。	口縁部横ナデ。口縁部外面ヘラ状工具による押し引き。体部下半ヘラ磨き。体部内面ヘラ当て痕。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	30% PL239
1941	坏 須恵器	A [12.7] B 4.3 C [7.1]	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	精良、砂粒・雲母 青灰色 良好	30% PL238
1942	坏 須恵器	A [14.0] B 4.2 C [8.6]	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部雑なヘラナデ、回転ヘラ切り痕。	砂粒・雲母・白色粒子 緑灰色、普通	30% PL238
1943	蓋 須恵器	A 20.2 B 4.4 F 2.3 G 1.3	天井部は高く、なだらかに口縁部にいたる。口縁端部はわずかにつまみだされている。つまみは擬宝珠状を呈する。	天井部回転ヘラ削り。つまみ貼り付け後ロクロナデ。口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・ 白色粒子 青灰色 良好	80% PL238 火罨あり。

第484号住居跡（第558図）

位置 調査区域の北西端部、B3j2区。

規模と平面形 長軸2.92m、短軸2.74mの方形である。

主軸方向 N-11°-E

壁 壁高は8~12cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、踏み固められた面はみられない。地山を平坦に掘り込んで、床面としている。

竈 削平がひどいため、覆土も薄く、確認することができなかった。

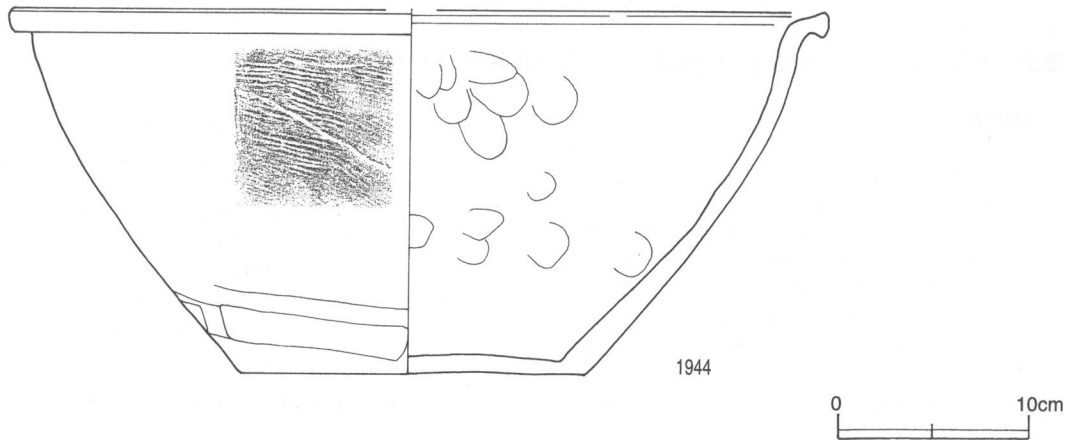
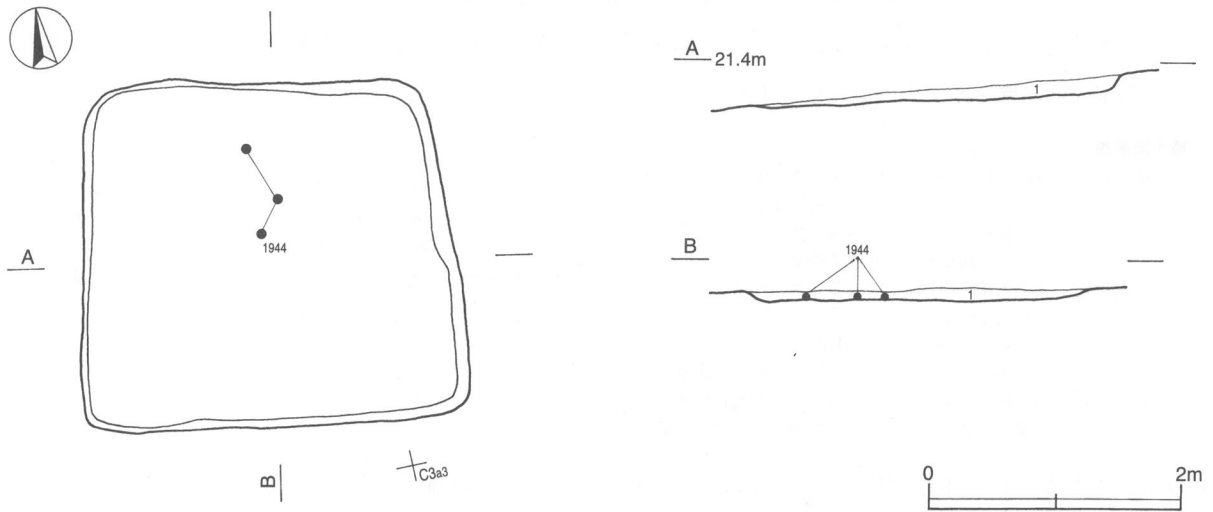
覆土 覆土は薄いうえ、単一層のため自然堆積か人為堆積かは不明である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片9点、須恵器片14点が出土している。第558図1944の須恵器鉢は、中央部と北部の床面から出土した破片が接合したものである。

所見 本跡から出土した遺物は非常に少なく、時期を判断するのは困難である。図示した鉢は、体部がわずかに丸みを帯びており、器高が低いこと、口縁端部のつくりなどから、8世紀中葉までの所産と思われる、本跡の廃絶時期もこの時期と推定される。



第558図 第484号住居跡・出土遺跡実測図



第484号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第558図 1944	鉢 須恵器	A [41.5] B 18.6 C 17.5	体部は丸みをもち、外傾して立ち上がる。口縁部は短く外側に屈曲し、ほぼ水平になる。口縁端部は上下につまみ出されている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面横位の平行叩き、内面指頭押圧。体部下端手持ちヘラ削り。底部磨滅のため調整不明。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	60% P L 239

第485号住居跡 (第559・560図)

位置 調査区域の北西端部，B 3 j6区。

規模と平面形 長軸5.10m，短軸3.90mの長方形である。

主軸方向 N-3°-E

壁 壁高は20~42cmで、ほぼ直立する。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。地山を平坦に掘り込んで、床面としている。

竈 北壁の中央部に設けられている。規模は、焚口部から煙道部までの長さ128cm，袖部最大幅148cmである。袖部は、黄褐色粘土で構築されている。煙道部は、北壁を幅101cm，奥行44cmにわたり三角形に掘り込んでいる。煙道は40度の傾きで立ち上がる。焚口部から火床部は、長径88cm，短径73cmの楕円形に確認面から深さ40cmほど掘り込んでいる。火床面と内壁は5~10cmの厚さで赤変硬化しており、長期間使用されたものと思われる。火床部は北壁ラインの内側に位置する。

竈土層解説

- |        |   |          |  |
|--------|---|----------|--|
| 1 暗褐色  | 黄褐色粘土小ブロック少量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量    | 6 にぶい赤褐色 | 焼土粒子中量，焼土中ブロック・焼土小ブロック少量，焼土大ブロック・炭化材微量 |
| 2 暗褐色  | 黄褐色粘土小ブロック少量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量        | 7 黒褐色    | 焼土粒子少量，焼土小ブロック・炭化材・炭化物・炭化粒子微量          |
| 3 灰黄褐色 | 黄褐色粘土小ブロック多量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量                | 8 灰黄褐色   | 黄褐色粘土中ブロック中量，焼土粒子微量                    |
| 4 黒褐色  | 焼土粒子・黄褐色粘土粒子少量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子微量   | 9 暗赤褐色   | 赤変硬化した内壁                               |
| 5 灰褐色  | 焼土粒子中量，焼土小ブロック・黄褐色粘土粒子少量，焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子微量 | 10 暗褐色   | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粘土中ブロック微量         |
|        |   | 11 暗赤褐色  | 赤変硬化した火床                               |

ピット 1か所。P 1は南壁寄りの中央部に位置するピットで、径50cmの円形，深さ18cmの，出入口施設に伴うピットと思われる。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量

覆土 8層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

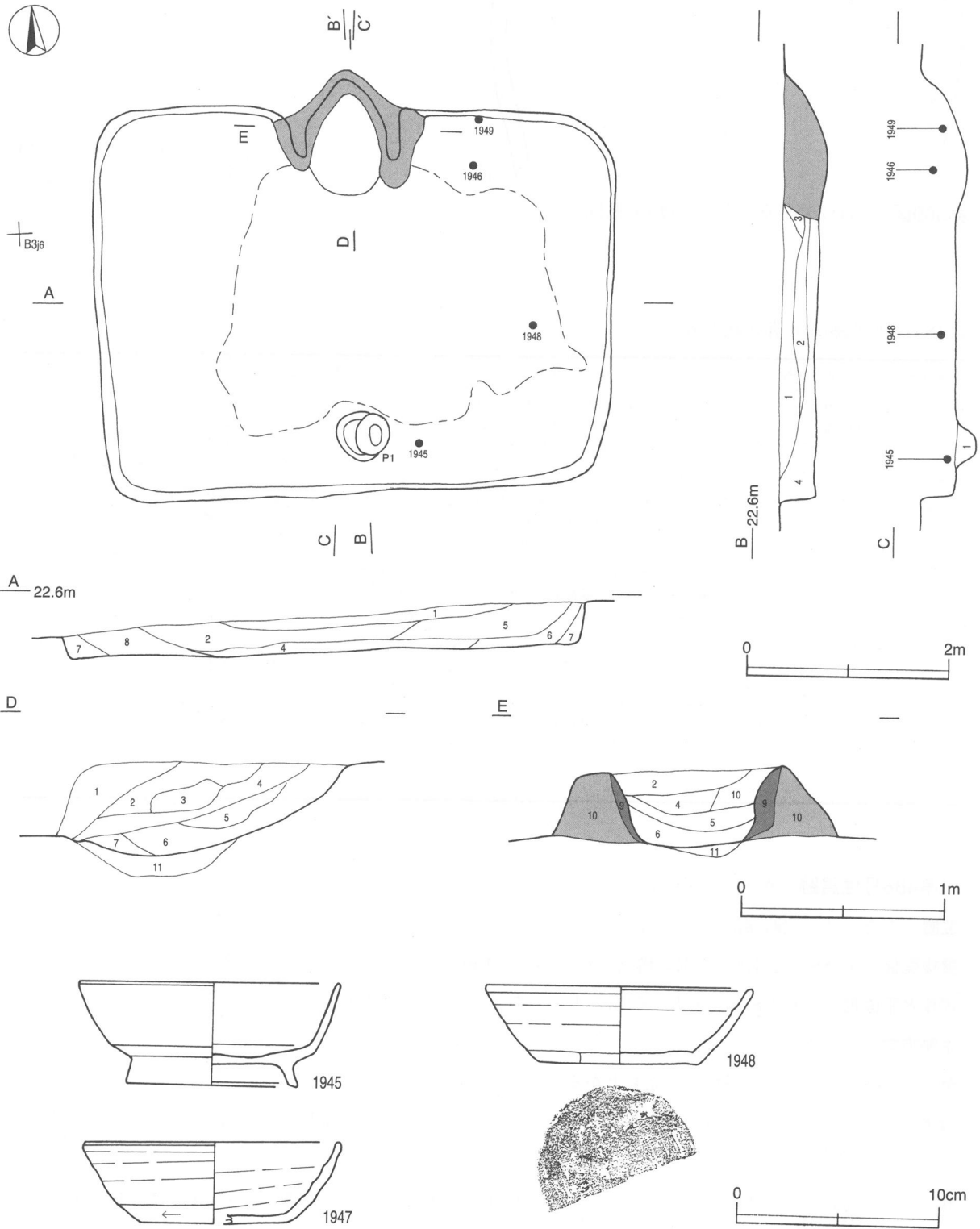
土層解説

- |          |  |          |  |
|----------|--|----------|--|
| 1 暗褐色    | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量                | 5 暗褐色    | ローム粒子・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・黄褐色粘土粒子微量  |
| 2 黒褐色    | ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 | 6 暗褐色    | 焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化材・炭化物・炭化粒子・黄褐色粘土粒子微量 |
| 3 にぶい黄褐色 | ローム粒子・焼土大ブロック・焼土小ブロック・炭化物・黄褐色粘土中ブロック微量   | 7 にぶい黄褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粘土粒子微量              |
| 4 暗褐色    | ローム粒子・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化材・炭化粒子・黄褐色粘土小ブロック微量 | 8 暗褐色    | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粘土粒子微量      |

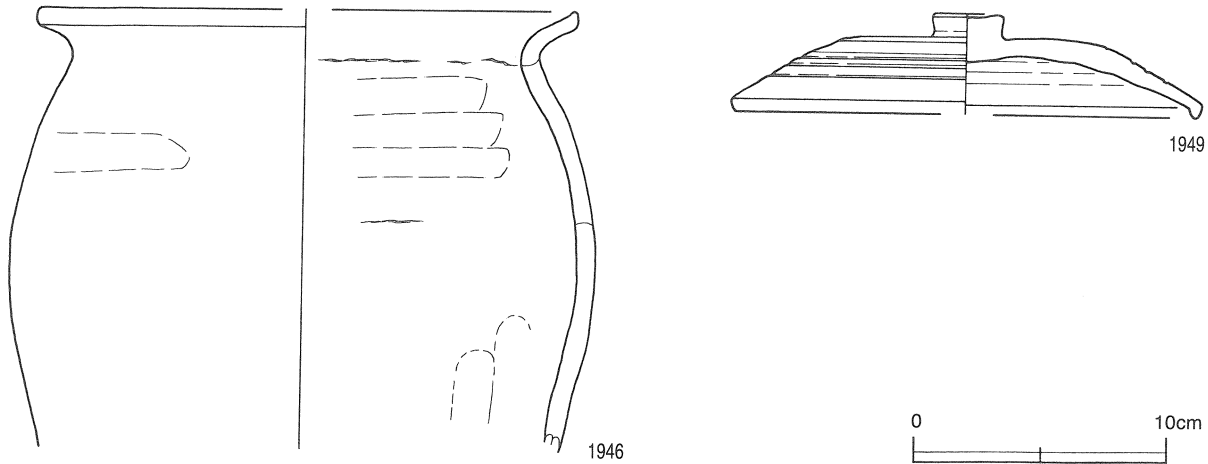
遺物 土師器片229点，須恵器片125点が出土している。大部分が覆土中から出土しており，床面からのものはない。第559図1945の須恵器高台付坏は中央部の南寄り覆土下層から，1946の土師器甕は北東部の覆土上層から，1947の須恵器坏は覆土中から，1948の須恵器坏は中央部の東寄り覆土中層から，1949の須恵器蓋は北壁際

の覆土中層からそれぞれ出土している。

**所見** 本跡は人為堆積であること、遺物は投棄された状況であること、出土土器等から、8世紀中葉には廃絶されていたものと推定される。



第559図 第485号住居跡・出土遺跡実測図



第560図 第485号住居跡出土遺跡実測図

第485号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第559図 1945	高台付 須恵器	A 12.9 B 5.3 D 8.5 E 1.3	底部と体部の境に稜をもつ。体部はわずかに内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。高台は、わずかに外に開く。	磨滅のため、内・外面の調整不明瞭。高台貼り付け。	粗い、砂粒・雲母・長石・角礫 褐色 不良	80% P L239
第560図 1946	甕 土師器	A [21.2] B (17.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は丸みがある。頸部はくの字状におれ、口縁端部はつまみ上げられる。	口縁部横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母・長石 明褐色 普通	30%
第559図 1947	坏 須恵器	A 12.7 B 4.0 C 7.2	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。口縁端部に平坦面をもつ。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部多方向のへら削り。	粗い、長石・角礫・白色針状物 灰色、普通	40% P L238
1948	坏 須恵器	A [13.1] B 3.8 C 7.9	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。口縁部は丸くおさまる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部1方向のへら削り、外周にへらナデ。	砂粒・長石・角礫・白色針状物 灰色、普通	40% P L238
第560図 1949	蓋 須恵器	A [18.6] B 4.0 F 2.7 G 1.0	天井部は高く、断面は台形を呈す。口縁端部は短く屈曲する。つまみは高いボタン状である。	天井部回転へら削り、つまみ貼り付け後ロクロナデ。口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	30% P L239

第486号住居跡（第561・562図）

位置 調査区域の北西端部，C 3 b3区。

重複関係 第488号住居跡の上部に構築されており，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸2.87m，短軸2.64mの方形である。

主軸方向 N-38°-E

壁 壁高は12~26cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 南東壁・北西壁の一部の壁下を巡っている。上幅7~10cm，下幅3~6cm，深さ4cmで，断面はU字形である。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。住居が重複している部分はローム粒子と焼土粒子混じりの黒褐色土で貼床され，その他の部分は地山を床面としている。

竈 北東壁の中央部に設けられている。規模は，焚口部から煙道部までの長さ73cm，袖部最大幅96cmである。

袖部はわずかに地山を掘り残して構築されている。煙道部は、北壁を幅65cm、奥行き58cmにわたり三角形に掘り込んである。煙道は48度の傾きで立ち上がる。火床部は、長径50cm、短径39cmの楕円形に確認面から30cmの深さで掘り込んでおり、地山を利用している。火床部は北東壁ラインの外側に位置する。

**竈土層解説**

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 黄褐色粘土小ブロック中量, ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, 焼土大ブロック・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子微量

**ピット** 1か所。P1は東コーナー部に位置する。長径47cm、短径34cmの楕円形で、深さ18cmのピットである。覆土に焼土や炭化材が含まれていること、竈の覆土中から出土した破片とP1から出土した破片が接合することから、竈から掻き出したものを捨てたピットである可能性もある。

**ピット土層解説**

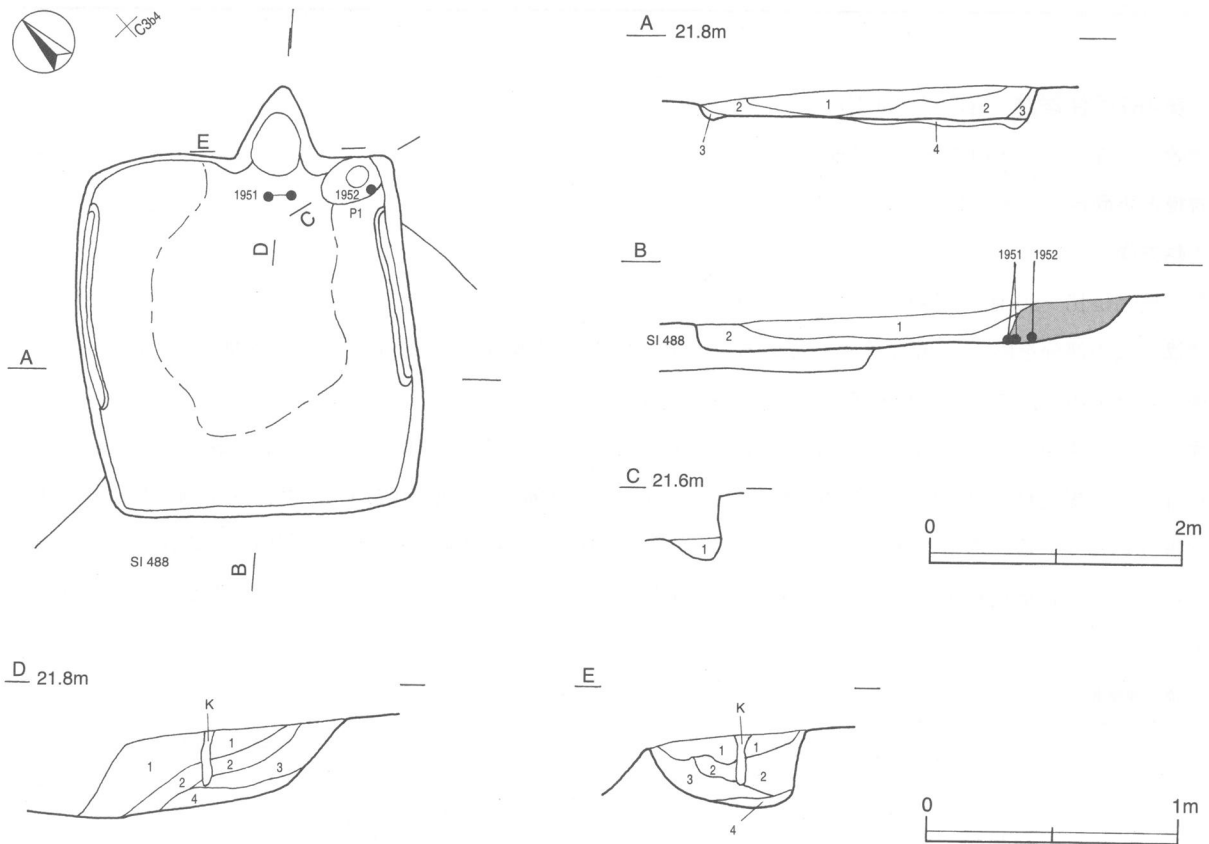
- 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック少量, ローム小ブロック・焼土大ブロック 焼土粒子・炭化材・炭化粒子微量

**覆土** 3層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と思われる。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 4 に近い黄褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量(貼床)

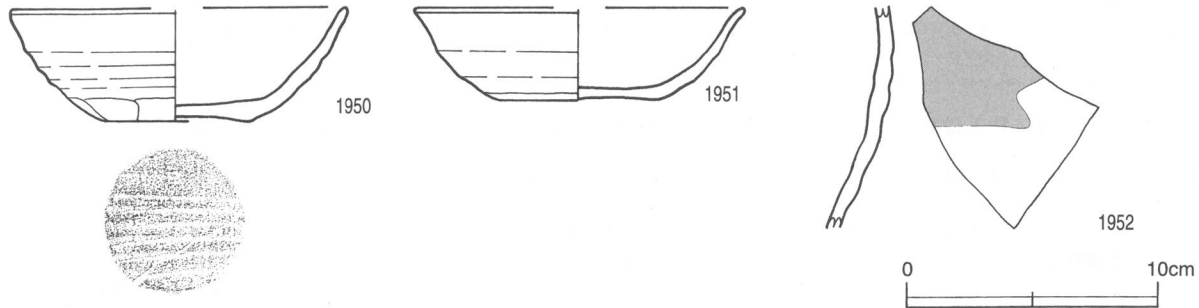
**遺物** 土師器片118点、須恵器片39点、灰釉陶器片1点が出土している。出土土器の器種構成をみると、食膳具類は全体的に少ないが、土師器・須恵器共にほぼ同数の破片が出土しており、煮沸具は土師器の方が多い。第562図1950の土師器坏は、竈の覆土中から出土した破片とP1から出土した破片が接合したものである。



第561図 第486号住居跡実測図

1951の土師器坏は竈前面部の床面から、1952の灰釉陶器長頸瓶はP 1の底面から出土している。1952は二次焼成を受けている。

所見 本跡の時期は、出土土器や遺構の重複関係から9世紀中葉と推定される。



第562図 第486号住居跡出土遺物実測図

第486号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第562図 1950	坏 土師器	A [13.4] B 4.5 C 5.8	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	60% P L 239
1951	坏 土師器	A [13.1] B 3.6 C [6.3]	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端・底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙色 普通	50%
1952	長頸瓶 灰釉陶器	B (8.8)	体部片。	体部内・外面ロクロナデ。外面施釉。	砂粒、胎土 灰白色、 外面灰オリブ釉 良好	5%

第487号住居跡 (第563・564図)

位置 調査区域の北西端部，C 3 b6区。

規模と平面形 長軸4.13m，短軸3.65mの長方形である。

主軸方向 N-11°-E

壁 壁高は15~20cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 竈の部分を除いて，壁下を巡っている。上幅9~13cm，下幅4~8cm，深さ5cmで断面はU字状である。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。地山を平坦に掘り込んで，床面としている。

竈 北壁の中央部に設けられている。規模は，焚口部から煙道部までの長さ120cm，袖部最大幅144cmである。袖部は，黄褐色粘土ブロックを主体に構築されている。煙道部は，北壁を幅75cm，奥行き43cmにわたり三角形に掘り込んでいる。煙道は30度の傾きで立ち上がる。火床部は，径40cmの円形に確認面からの深さ36~42cmほど掘り込み，黄褐色粘土ブロックを含んだ暗褐色土を埋土してつくっている。火床部は北壁ラインの内側に位置する。

竈土層解説

- |        |  |        |   |
|--------|--|--------|---|
| 1 黒褐色  | ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量         | 4 暗赤褐色 | 焼土中ブロック・焼土小ブロック少量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂粒微量 |
| 2 暗褐色  | 白色粘土小ブロック少量，ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粘土小ブロック微量 | 5 暗褐色  | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粘土小ブロック微量                |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，ローム粒子・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子・白色粘土粒子微量 | 6 黄褐色  | 黄褐色粘土中ブロック多量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量                    |

- 7 暗赤褐色 焼土粒子・黄褐色粘土中ブロック中量, 焼土小ブ  
ロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 黄褐色粘土小ブロック少量, 炭化粒子微量

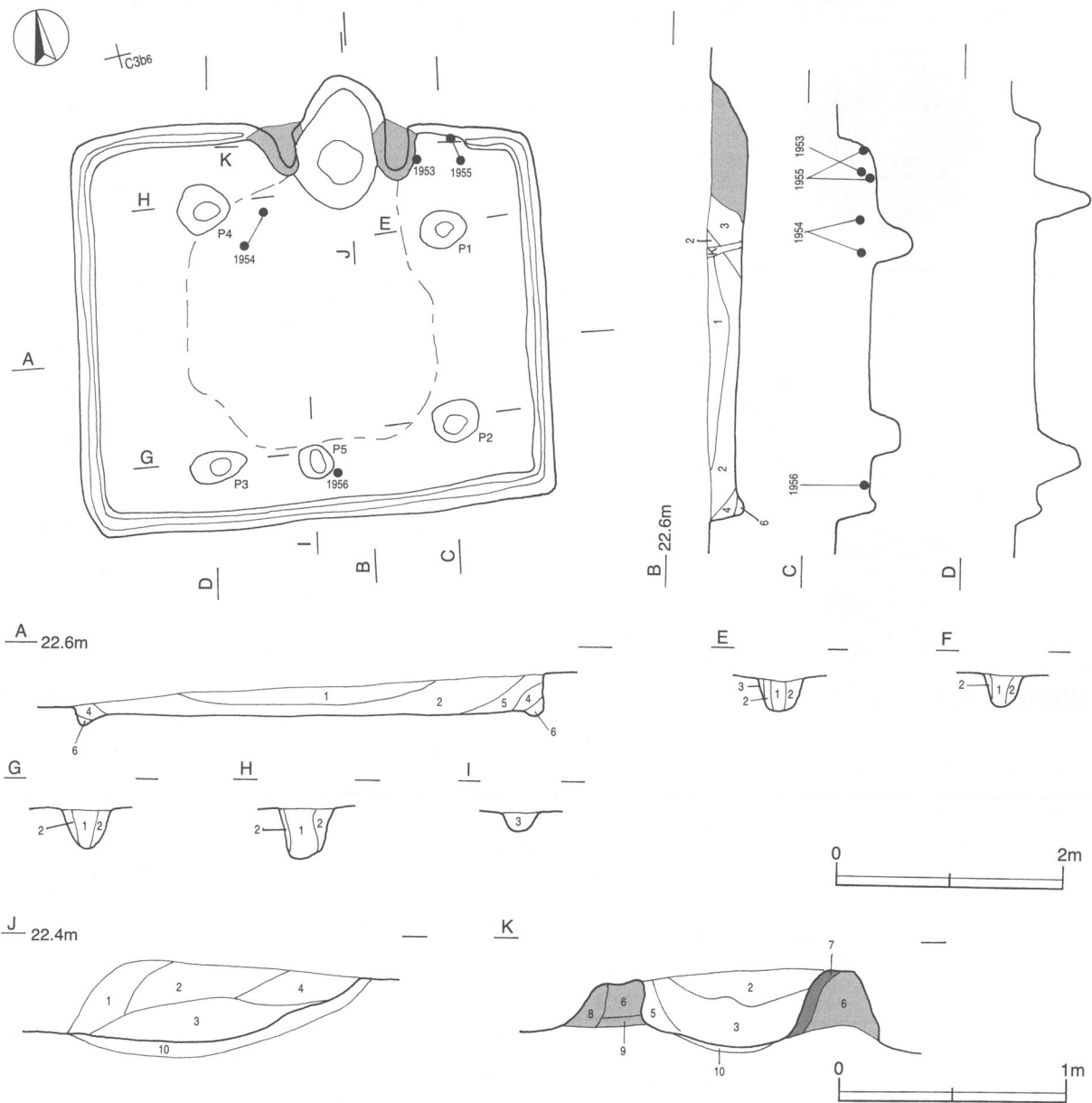
- 9 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 暗褐色 黄褐色粘土小ブロック中量, 焼土粒子少量, 炭化  
物・炭化粒子微量 (掘り方)

ピット 5か所 (P1~P5)。P1・P2・P4は径40~45cmの円形, 深さ30~50cmである。P3は長径63cm, 短径49cmの楕円形, 深さ30cmである。これらは規模や配置から主柱穴と考えられる。P5は, 長径32cm, 短径25cmの楕円形, 深さ22cmで, 南壁寄りの中央部に位置し, 出入口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・  
黄褐色粘土小ブロック微量
- 2 黄褐色 黄褐色粘土小ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子  
微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粘土小ブロック微量

覆土 6層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と思われる。



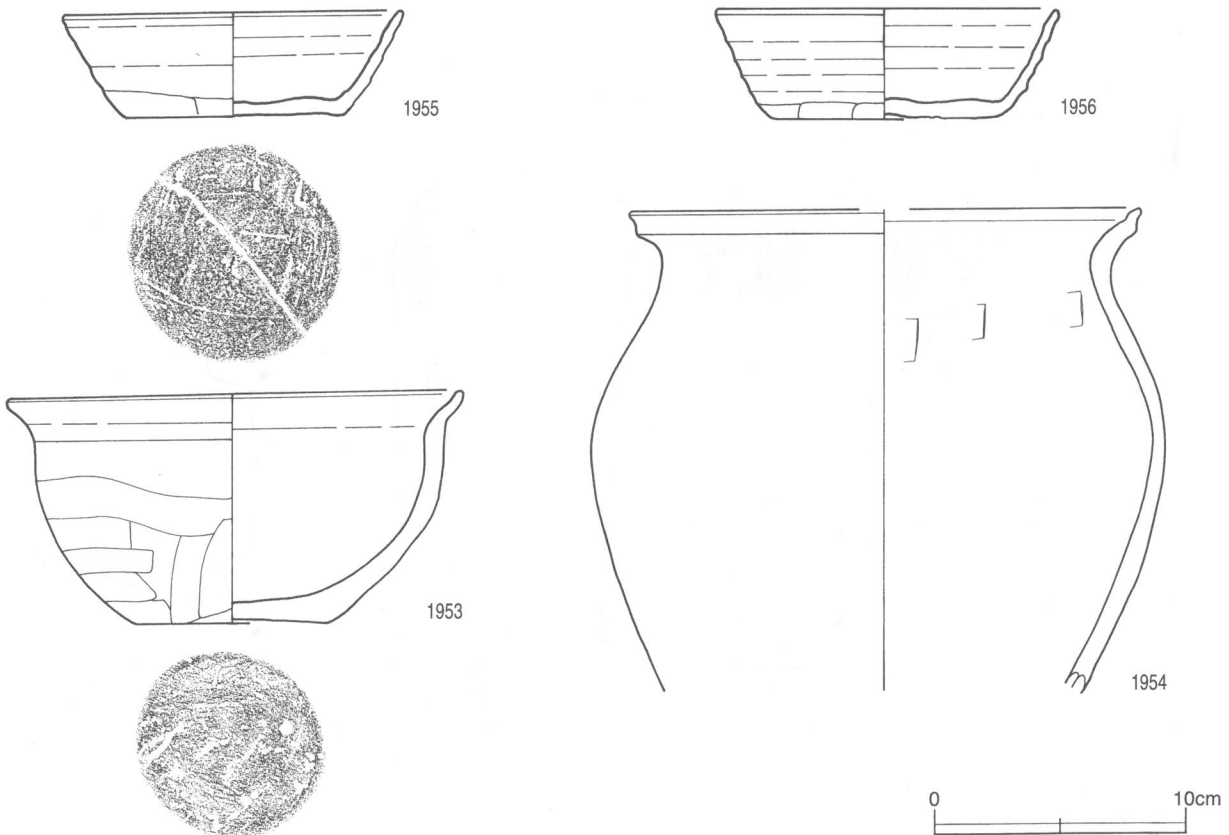
第563図 第487号住居跡実測図

土層解説

- |       |  |       |                                   |
|-------|--|-------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量                  | 4 黒褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量               |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子微量          | 5 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 白色粘土少量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | 白色粘土粒子微量                          |

遺物 土師器片74点, 須恵器片31点が出土している。第564図1953の土師器鉢は竈東袖付近の覆土下層から, 1954の土師器甕は北部の覆土中層から, 1955の須恵器坏は北壁際の床面から, 1956の須恵器坏はP 5付近の床面から, それぞれ出土している。

所見 本跡の時期は, 出土土器から8世紀中葉と推定される。



第564図 第487号住居跡出土遺物実測図

第487号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第564図 1953	鉢 土師器	A 18.3 B 9.3 C 7.6	平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部ヘラナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	70%
1954	甕 土師器	A [20.5] B (19.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は丸みがあり, 体部上位に最大径をもつ。頸部はくの字状に折れ, 口縁端部はつまみ上げられている。	口縁部横ナデ。口縁部内・外面ヘラナデ。内面ヘラ当て痕。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄橙色 普通	30% P L239
1955	坏 須恵器	A [13.4] B 4.2 C 8.6	平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部にいたる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部多方向のヘラ削り。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	60% P L239
1956	坏 須恵器	A [13.6] B 4.4 C [9.0]	平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部にいたる。口縁端部は細くすぼむ。外面のロクロ目が強い。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り, 回転ヘラ切り痕。	粗い, 雲母・長石・角礫, 灰オリーブ色 普通	70% P L239

第488号住居跡（第565・566図）

位置 調査区域の北西端部，C 3 b3区。

重複関係 本跡の上部に第486号住居が構築されており，本跡が古い。

規模と平面形 東西軸は4.48mである。南半分が調査区域外のため，南北軸は不明であるが，確認できるだけで，2.43mである。平面形は方形または長方形になるものと考えられる。

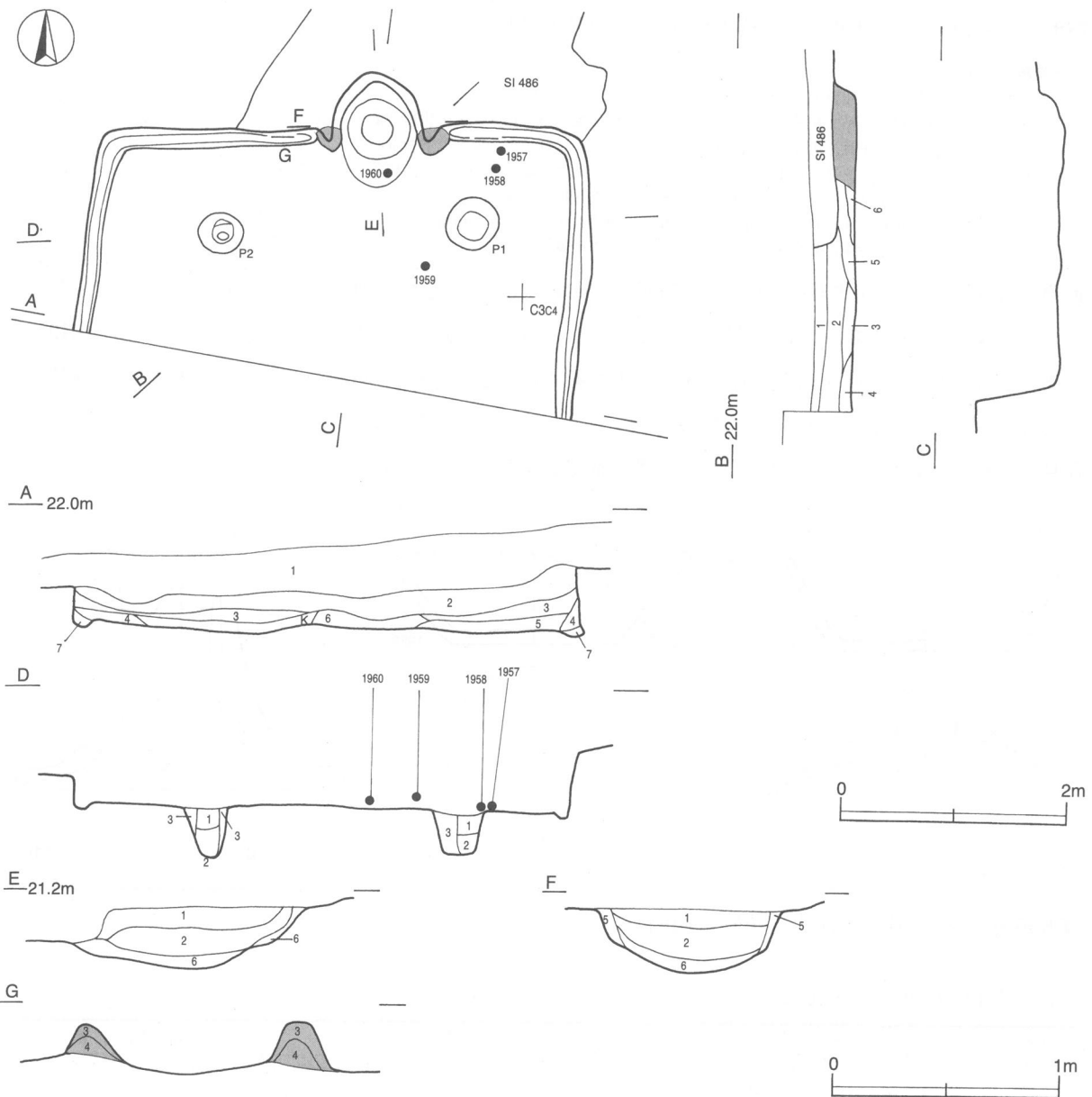
主軸方向 N-6°-E

壁 壁高は23~56cmで，ほぼ直立する。

壁溝 竈の部分を除いて，壁下を巡っている。上幅9~15cm，下幅4~8cm，深さ5cmで，断面はU字状である。

床 ほぼ平坦で，踏み固められている部分は見られない。地山を平坦に掘り込んで，床面としている。

竈 北壁の中央部に設けられている。規模は焚口部から煙道部までの長さ101cm，袖部最大幅115cmである。袖部の基部は地山を掘り残し，先端部には黄褐色粘土を芯にして周りに暗褐色土を貼り付けて構築されている。



第565図 第488号住居跡実測図



煙道部は、北壁を幅100cm、奥行き78cmにわたり三角形に掘り込んでいる。煙道は30度の傾きで立ち上がる。火床部は、径28cmの円形に確認面からの深さ28cmほど掘り込んで、地山を利用している。火床部は北壁ライン上に位置する。

**竈土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粘土小ブロック微量
- 2 暗赤褐色 黄褐色粘土粒子少量，ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物炭化粒子微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化物・炭化粒子・黄褐色粘土小ブロック微量
- 4 にがい黄褐色 黄褐色粘土中ブロック多量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粘土小ブロック微量
- 6 暗褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・黄褐色粘土小ブロック微量

**ピット** 2か所（P1・P2）。P1・P2は径45cm・35cmの円形，深さ40cm・45cmである。それぞれ北東部と北西部に位置し，位置と規模から主柱穴と考えられる。

**ピット土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 黄褐色粘土小ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 にがい黄褐色 黄褐色粘土小ブロック中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

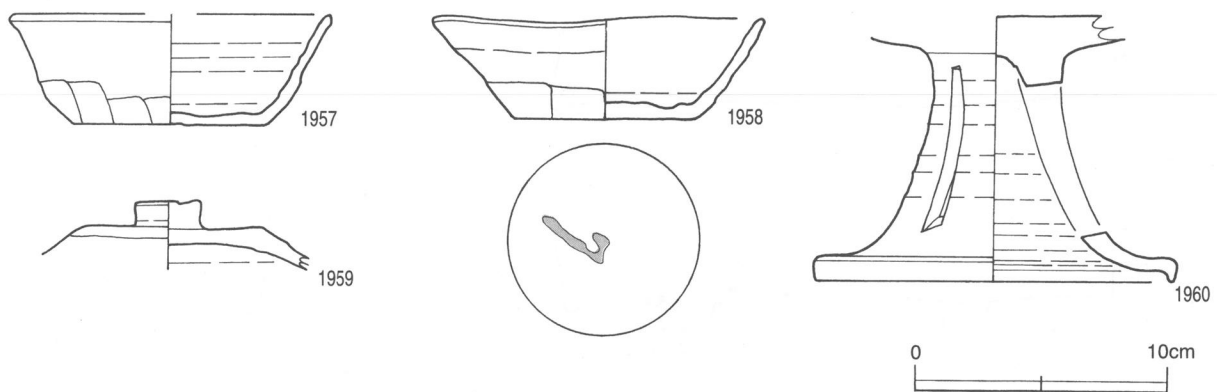
**覆土** 7層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

**土層解説**

- 1 黒褐色 炭化物・炭化粒子中量，ローム粒子・焼土小ブロック微量
- 2 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子少量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量
- 3 暗褐色 粘土粒子中量，炭化物・炭化粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 4 褐色 粘土小ブロック・粘土粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 にがい黄褐色 黄褐色粘土中ブロック多量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 炭化粒子少量，炭化物・黄褐色粘土小ブロック微量

**遺物** 土師器片85点，須恵器片63点，灰釉陶器片1点が出土している。器種構成では土師器85点の内5点だけが坏で，他はすべて甕である。須恵器63点の内49点が坏・盤・高台付坏で，他の7点が甕である。第566図1957・1958の須恵器坏は北東部の床面から，1959の須恵器蓋はP1付近の覆土下層から，1960の須恵器高盤は竈焚口付近の覆土下層から，それぞれ出土している。

**所見** 本跡の時期は，出土土器から8世紀後葉と推定される。



第566図 第488号住居跡出土遺物実測図

第488号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第566図 1957	須恵器 坏	A 12.8	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部で外反する。口縁端部は肥厚する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・雲母・長石 灰オリーブ色 普通	50% PL239
		B 4.4				
		C 7.6				

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第566図 1958	坏 須恵器	A 13.2 B 4.0 C 7.6	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさまる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	80% P L 239 底部外面朱書「□」
1959	蓋 須恵器	B (2.7) F 2.5 G 1.1	天井部片。天井頂部は高く水平である。つまみは高めのボタン状である。	天井部回転ヘラ削り。つまみ貼り付け後、ロクロナデ。天井部内面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	40% P L 239
1960	高盤 須恵器	B (10.7) D 14.0	脚部片。脚部は外方に開き、裾部で大きく反り、水平面をもつ。端部は垂下し、断面三角形を呈する。	脚部内・外面ロクロナデ。透かしは3孔。	砂粒・長石・白色粒子 青灰色、良好	40% P L 239

### 第489号住居跡（第567・568図）

**位置** 調査区域の北端部，B 5 d1区。

**重複関係** 第490号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

**規模と平面形** 長軸3.40m，短軸3.30mの方形である。

**主軸方向** N-10°-W

**壁** 壁高は32～40cmで，外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。地山を平坦に掘り込んで，床面としている。

**竈** 北壁の中央部に設けられている。両袖部は攪乱を受け，遺存しない。規模は，焚口部から煙道部までの長さ88cm，推定される袖部幅111cmである。煙道部は，北壁を幅102cm，奥行き52cmにわたり，丸みを帯びた三角形に掘り込んでいる。煙道は，35度の傾きで立ち上がる。火床部は，地山を確認面から42cmの深さに掘り込んでつくっている。

#### 竈土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量
- 3 暗褐色 焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量，ローム粒子・焼土小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム中ブロック・焼土中ブロック微量
- 5 暗褐色 砂粒少量，焼土小ブロック微量
- 6 褐色 焼土粒子・砂粒少量
- 7 暗褐色 砂粒中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

**ピット** 2か所（P 1・P 2）。P 1は長径70cm，短径54cmの楕円形，深さ13cm，P 2は径45cmの円形，深さ17cmである。いずれも南壁際の，P 1は東寄りに，P 2は西寄りに位置している。性格は不明である。

#### ピット土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量

**覆土** 12層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

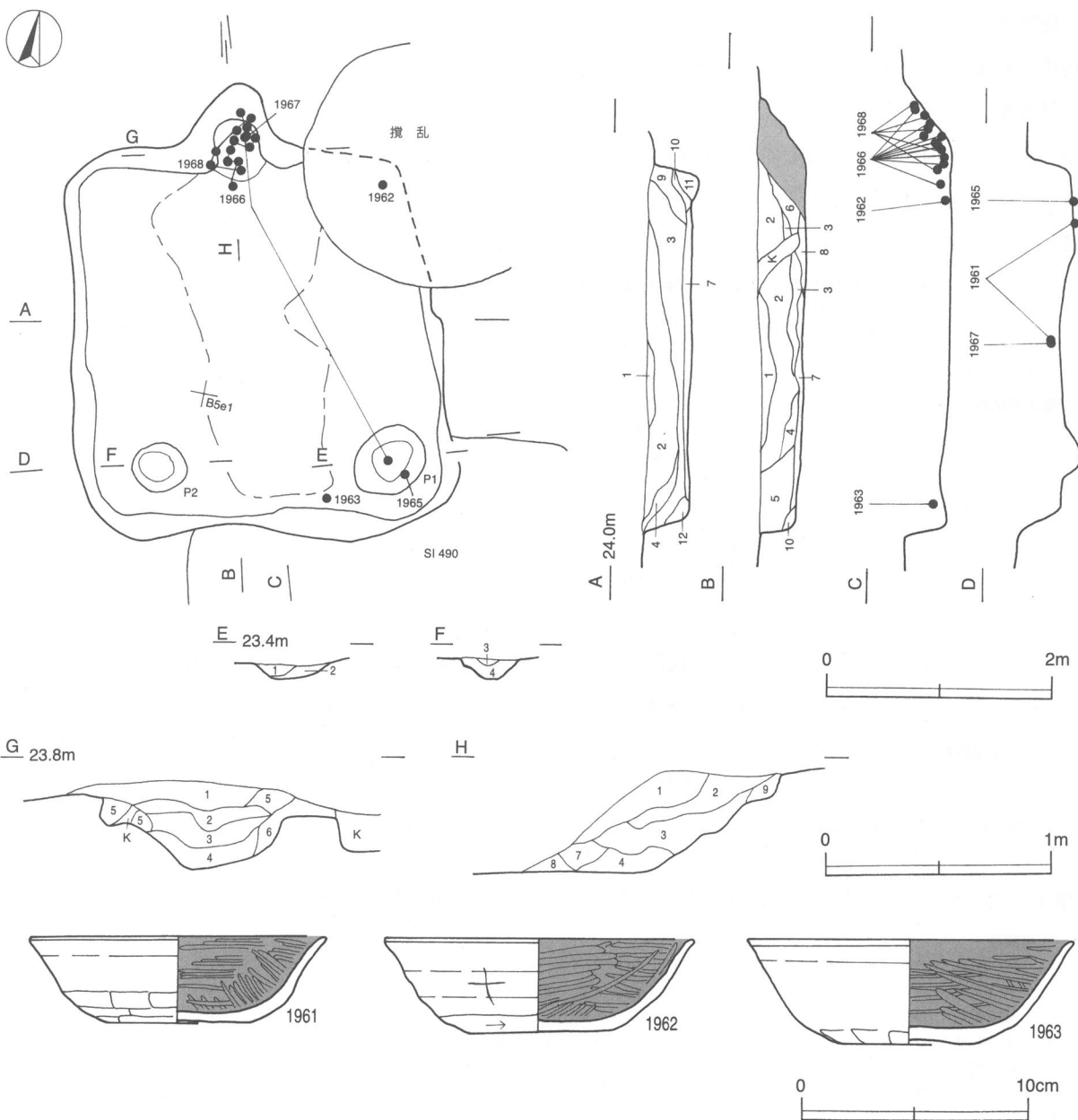
#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子・砂粒少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量，ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 5 極暗褐色 ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，ローム大ブロック微量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子微量

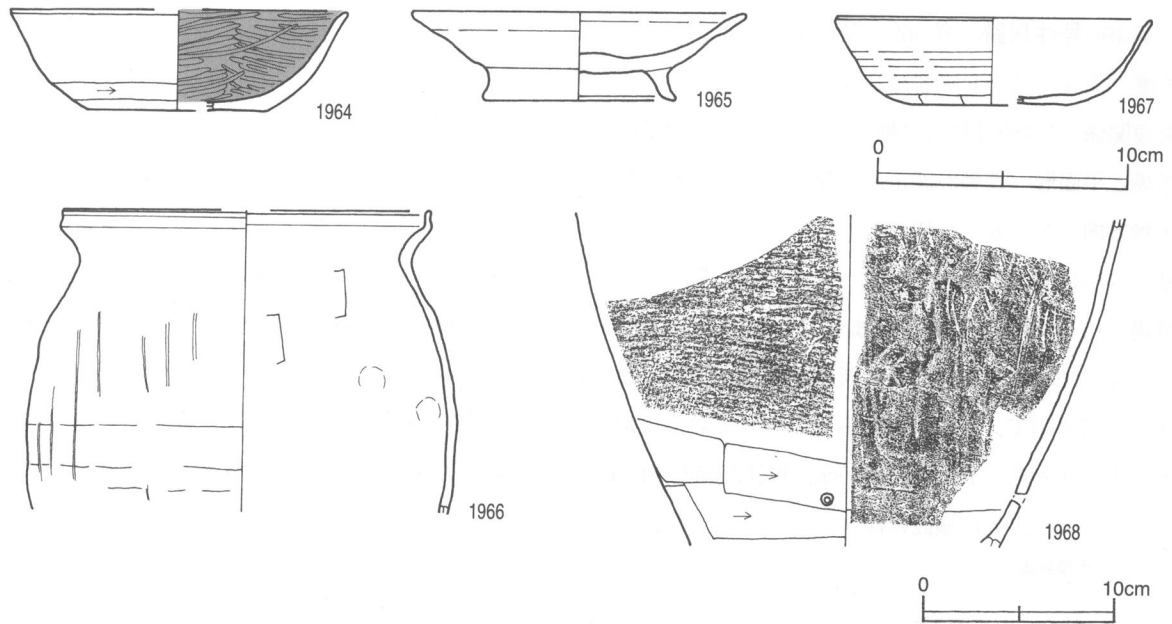
- 9 黒褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, ローム中ブロック微量
- 11 褐色 ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量, ローム大ブロック微量
- 12 暗褐色 ローム中ブロック少量

**遺物** 土師器片202点, 須恵器片67点, 灰釉陶器片1点, 石器1点(砥石)が出土している。第568図1966の土師器甕, 1967の須恵器坏は竈の覆土下層からそれぞれ出土している。1968の須恵器鉢は, 竈内の覆土上層から覆土下層にかけて出土した破片が接合したものである。1962の土師器坏は北東コーナー部の覆土下層から正位で, 1963の土師器坏は南壁際の覆土下層から逆位で, それぞれ出土している。1965の土師器高台付皿はP1の覆土中から, 1964の土師器坏は覆土中からそれぞれ出土している。1961の土師器坏は, 竈の覆土下層とP1の覆土下層から出土した破片が接合したものである。

**所見** 本跡の時期は, 重複関係と出土土器から, 9世紀後葉と推定される。



第567図 第489号住居跡・出土遺物実測図



第568図 第489号住居跡出土遺物実測図

第489号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第567図 1961	坏 土師器	A 13.2 B 3.8 C 6.2	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り、内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・赤色粒子 黒褐色 普通	90% P L 239 体部外面煤付着
1962	坏 土師器	A 13.8 B 4.1 C 6.2	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り、内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	90% P L 239 体部外面ヘラ記号「+」
1963	坏 土師器	A 14.6 B 4.6 C 5.8	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き、黒色処理。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 橙色 普通	75% P L 239
第568図 1964	坏 土師器	A [13.4] B 3.9 C [7.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り、内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙色 普通	20% P L 239
1965	高台付皿 土師器	A 13.4 B 3.5 D 7.7 E 1.2	体部から口縁部一部欠損。高台はハの字状に開く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後、ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英 橙色 普通	80% P L 239
1966	甕 土師器	A [19.5] B (15.8)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ヘラナデ。内面指頭押圧後ナデ、一部ヘラナデ。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 にぶい橙色 普通	40% P L 240
1967	坏 須恵器	A [12.6] B 3.5 C [6.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り、内面ヘラ磨き。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・雲母・石英 明褐色	25% 二次焼成
1968	鉢 須恵器	B (17.4)	体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面擬格子目叩き、下位ヘラ削り。内面同心円状の当て具痕。	砂粒・雲母・石英 明赤褐色 普通	20%、体部下位径0.5cmの穿孔あり

**第490号住居跡**（第569・570図）

**位置** 調査区域の北端部，B 5 e1区。

**重複関係** 第489号住居に掘り込まれており，本跡が古い。

**規模と平面形** 長軸3.20m，短軸3.16mの方形である。

**主軸方向** N - 6° - W

**壁** 壁高は34～38cmで，外傾して立ち上がる。

**壁溝** 第489号住居に掘り込まれている部分及び北東コーナー部を除いて，壁下を巡っている。上幅9～16cm，下幅4～12cm，深さ4cmで，断面は緩やかなU字形である。

**床** ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。地山を平坦に掘り込んで，床面としている。

**ピット** 1か所。P1は長径45cm，短径27cmの楕円形，深さ14cmで，南壁寄りの竈に対する位置で確認されていることから，出入口施設に伴うピットと思われる。

**ピット土層解説**

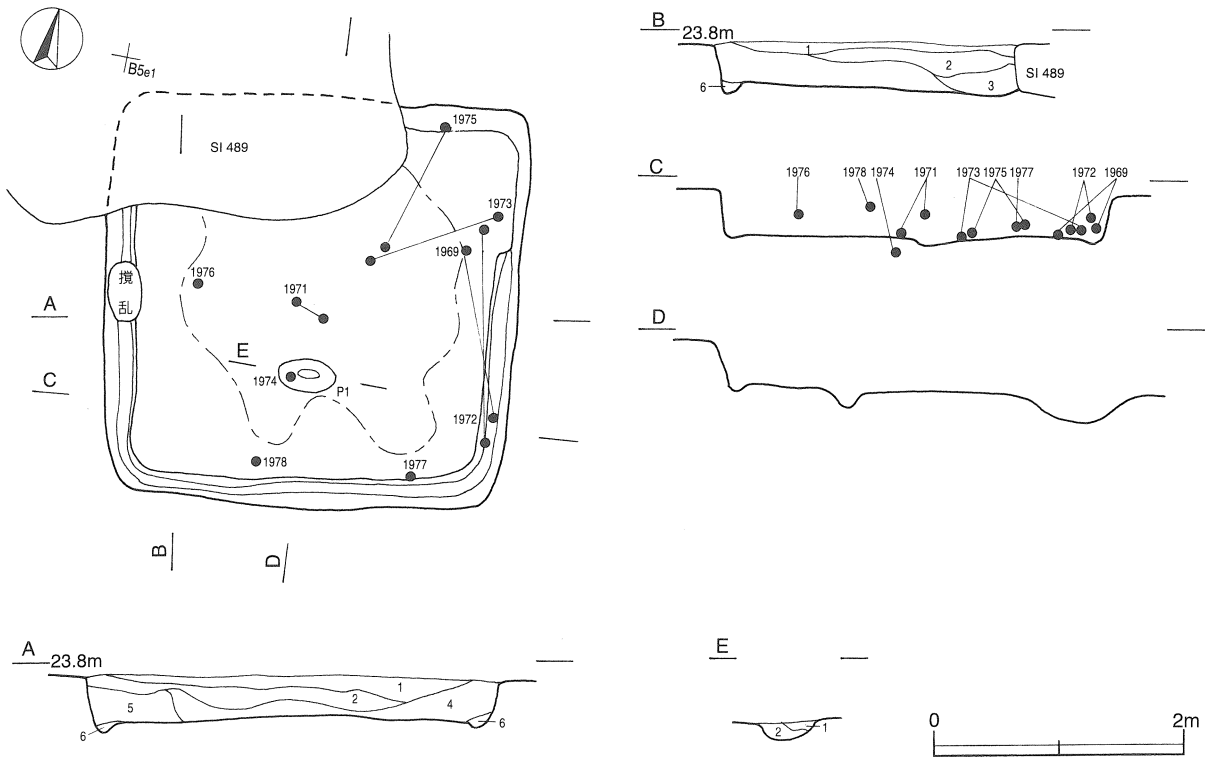
- 1 褐色 ローム中ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量

**覆土** 6層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗赤褐色 ローム小ブロック中量，ローム粒子・焼土小ブロック少量，ローム中ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土小ブロック少量，炭化物微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック多量，ローム中ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量
- 5 黒色 ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
- 6 褐色 ローム粒子中量

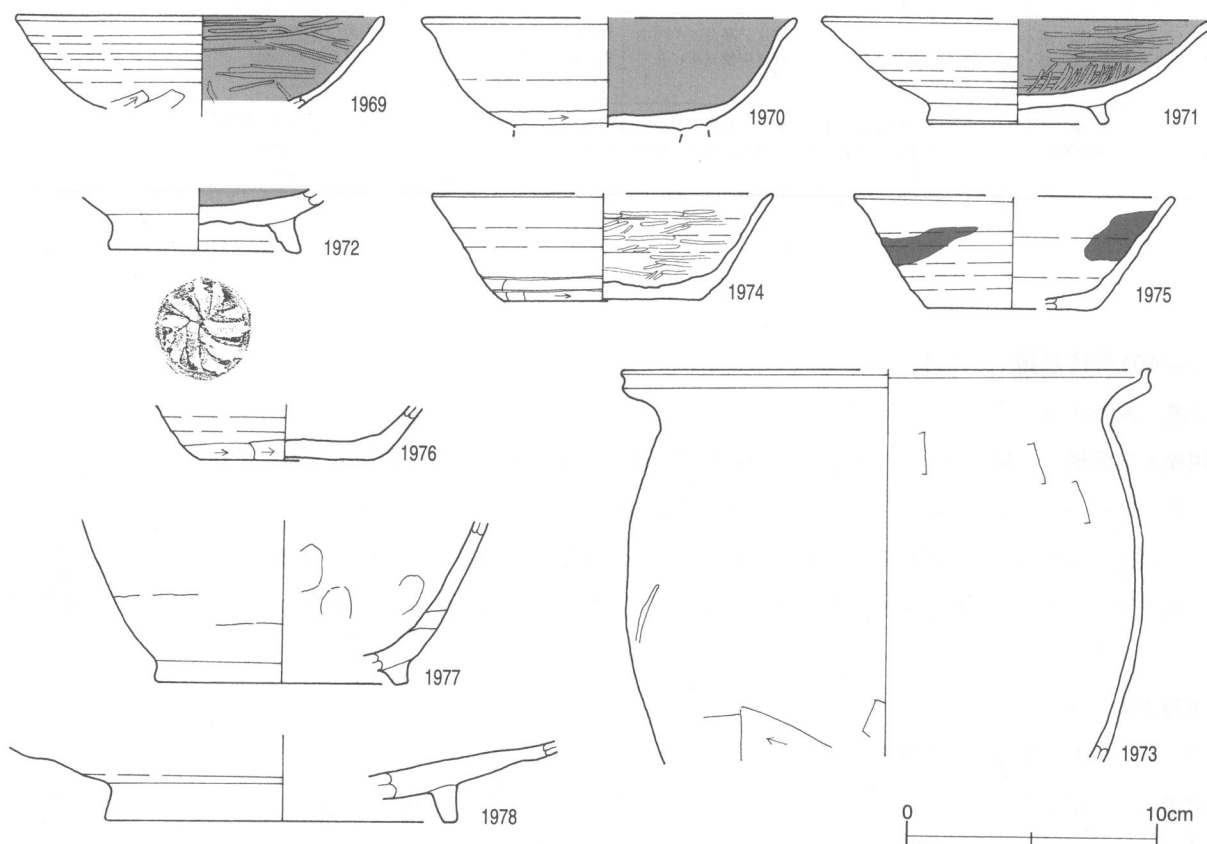
**遺物** 土師器片71点，須恵器片33点，灰釉陶器片1点，石器1点（砥石）が出土している。第570図1974の土師器坏はP1の覆土中から，1976の須恵器坏は中央部西寄りの覆土中層から，1977の須恵器長頸瓶は南壁際の覆土下層から，1978の灰釉陶器盤は南壁際の覆土中層からそれぞれ出土している。1969の土師器坏は，東壁付近



第569図 第490号住居跡実測図

の床面と東壁下の壁溝内から出土した破片が接合したものである。1971の土師器高台付皿は、中央部の覆土中層と覆土下層から出土した破片が接合したものである。1972の土師器高台付坏は、東壁際の覆土中層と中央部北東寄りの覆土下層から出土した破片が接合したものである。1973の土師器甕は、東壁際の覆土下層から出土した破片と中央部北東寄りの床面から出土した破片が接合したものである。1975の須恵器坏は、北壁際の覆土下層と中央部北東寄りの覆土下層から出土した破片が接合したものである。1970の土師器高台付椀は、覆土中から出土している。

**所見** 本跡の時期は、重複関係と出土土器から、9世紀後葉と推定される。



第570図 第490号住居跡出土遺物実測図

第490号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第570図 1969	坏 土師器	A 14.8 B (3.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。内面へら磨き、黒色処理。	砂粒・雲母・石英にぶい褐色普通	50% P L 239
1970	高台付椀 土師器	A [15.0] B 4.4	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。高台部欠損。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転へら削り。底部回転へら削り、高台貼り付け痕を残す。内面黒色処理。	小礫・砂粒・雲母・赤色粒子黄褐色普通	30%
1971	高台付皿 土師器	A [15.6] B 4.2 D 7.2 E 0.7	高台部から口縁部の破片。高台はハの字状に短く開く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部内面へら磨き。底部回転へら切り痕を残す、回転へら削り。高台貼り付け後、ロクロナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母褐色普通	50% P L 240
1972	高台付坏 土師器	B (2.5) D 7.6 E 1.5	高台部から体部下位の破片。高台はハの字状に開く。	体部内面へら磨き。底部へら状工具先端による風車状ナデ。高台貼り付け後、ロクロナデ。内面黒色処理。	砂粒・赤色粒子明赤褐色普通	20% P L 240

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第570図 1973	甕 土師器	A [21.2] B (15.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く屈曲する。端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ、下位ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・石英にぶい黄褐色 普通	20% P L 240
1974	坏 土師器	A [13.6] B 4.2 C 7.6	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、緩やかに外反して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り、内面ヘラ磨き。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	50% P L 239
1975	坏 須恵器	A [12.8] B 4.5 C 6.8	底部から口縁部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、外周部ナデ。	砂粒・雲母・石英 灰黄色 普通	50% P L 239 体部内・外面 煤付着
1976	坏 須恵器	B (2.2) C 6.6	底部から体部下位の破片。平底。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部2方向のヘラ削り。	角礫・砂粒・雲母・石英 褐灰色、普通	40%
1977	長頸瓶 須恵器	B (6.4) D [10.0] E 1.0	高台部から体部の破片。高台はハの字状に短く開く。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部内面指頭押圧後、ナデ。高台貼り付け後、ロクロナデ。外面輪積み痕あり。	砂粒・雲母 黄灰色 普通	10% P L 240
1978	盤 灰釉陶器	B (3.3) D [14.0] E 2.1	高台部から体部の破片。高台部はハの字状に開く。体部は外方に開き、外反する。	体部内・外面ロクロナデ。高台貼り付け後、ロクロナデ。	砂粒・黒色粒子 灰黄色 普通	10%

### 第491号住居跡（第571・572図）

**位置** 調査区域の北端部，B 5 f1区。

**規模と平面形** 長軸3.68m，短軸3.35mの長方形である。竈の東側と西側に棚状施設が付設されている。東側の棚は幅91cm，奥行き43cmの長方形で，4cmの厚さに粘土粒子と砂粒を含む黄褐色土を貼り付けている。床面からの高さは35cmで，確認面からの深さは8cmである。西側の棚は幅92cm，奥行き48cmの長方形で，3cmの厚さに粘土ブロックと粘土粒子を含む黄褐色土を貼り付けている。床面からの高さは32cmで，確認面からの深さは14cmである。

**主軸方向** N-6°-E

**壁** 壁高は45～50cmで，外傾して立ち上がる。

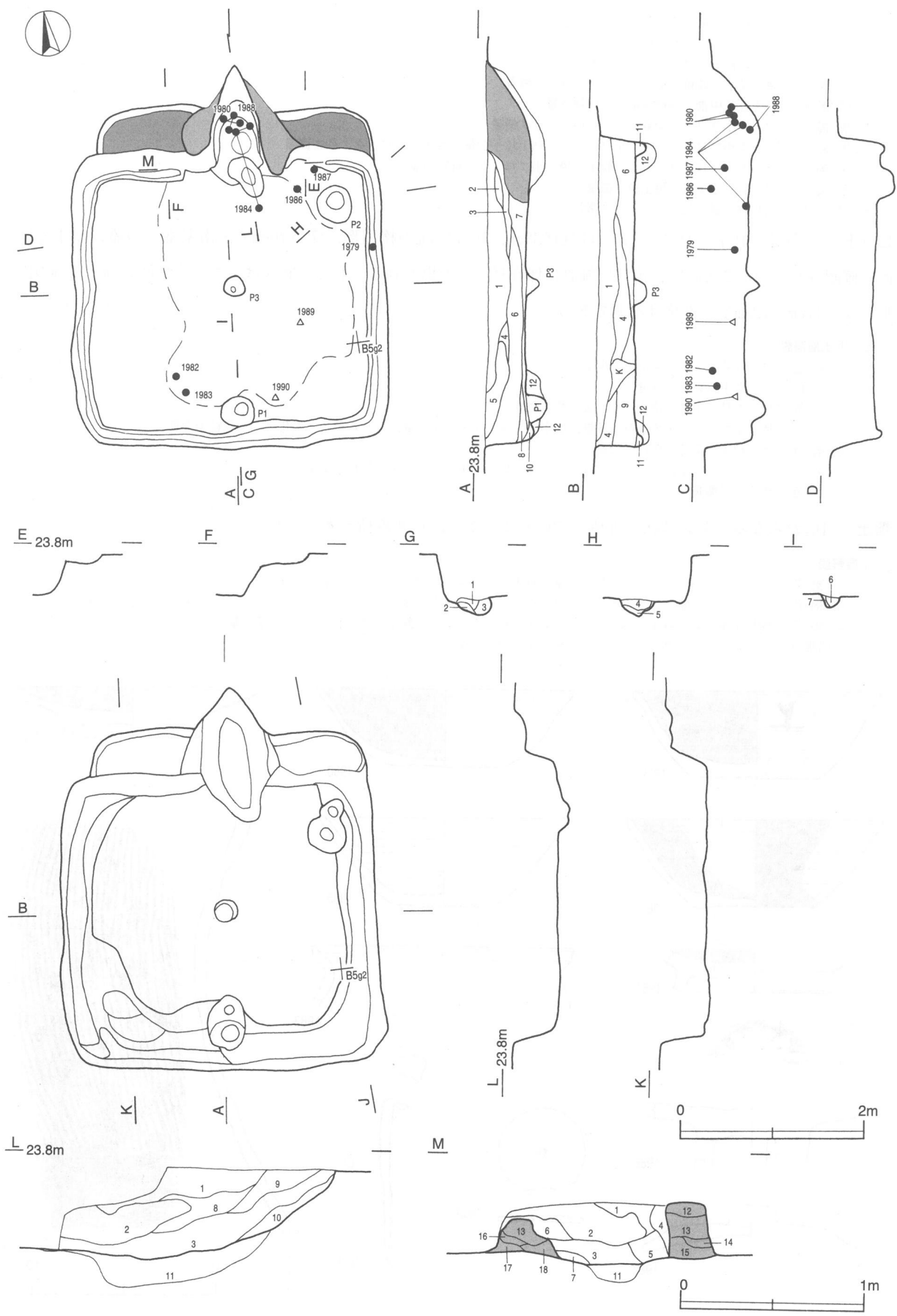
**壁溝** 竈の部分を除いて壁下を巡っている。上幅7～20cm，下幅3～12cm，深さ7cmで，断面はU字形である。

**床** ほぼ平坦で，竈の前面からP 1付近にかけて踏み固められている。中央部は地山を床としているが，その外周部は貼床である。貼床は，壁に沿って幅31～77cm，確認面から深さ40～53cmほど溝状に掘り込み，ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を含んだ褐色土を埋土して構築されている。

**竈** 北壁の中央部に設けられている。規模は，焚口部から煙道部までの長さ129cm，袖部最大幅132cmである。袖部はロームブロック・粘土粒子混じりの暗褐色土及び黒褐色土で構築されている。煙道部は，北壁を幅107cm，奥行き89cmにわたり三角形に掘り込んでいる。煙道は，40度の傾きで立ち上がる。火床部は，長径97cm，短径32cmの楕円形に確認面から65cmほど掘り込み，ロームブロックを含んだ褐色土を埋土してつくっている。火床面は，北壁ラインの外側に位置する。

#### 竈土層解説

- 1 暗褐色 砂粒中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 2 にぶい黄褐色 粘土粒子・砂粒多量，焼土小ブロック微量
- 3 極暗褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，焼土中ブロック微量
- 4 暗褐色 砂粒多量
- 5 暗褐色 砂粒中量，焼土粒子微量
- 6 黒褐色 砂粒中量，焼土粒子少量
- 7 暗褐色 焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 8 褐色 粘土粒子中量，焼土小ブロック・砂粒少量



第571图 第491号住居跡実測图



- 9 褐色 粘土粒子多量, 焼土小ブロック・砂粒少量
- 10 褐色 ローム中ブロック中量
- 11 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量(掘り方)
- 12 黒褐色 焼土粒子・砂粒少量, ローム中ブロック微量
- 13 暗褐色 粘土粒子中量, 砂粒少量, 炭化物微量
- 14 黒褐色 ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量
- 15 黒褐色 ローム小ブロック・焼土小ブロック・粘土粒子少量, 焼土中ブロック・砂粒微量
- 16 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・砂粒少量
- 17 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 18 黒褐色 炭化物少量, 焼土小ブロック微量

ピット 3か所 (P1~P3)。P1は長径38cm, 短径30cmの楕円形, 深さ16cmで, 南壁寄りの竈に対する位置で確認されていることから, 出入口施設に伴うピットと思われる。P2・P3は, それぞれ径39cm・22cmの円形, 深さ17cm・12cmで, 性格は不明である。

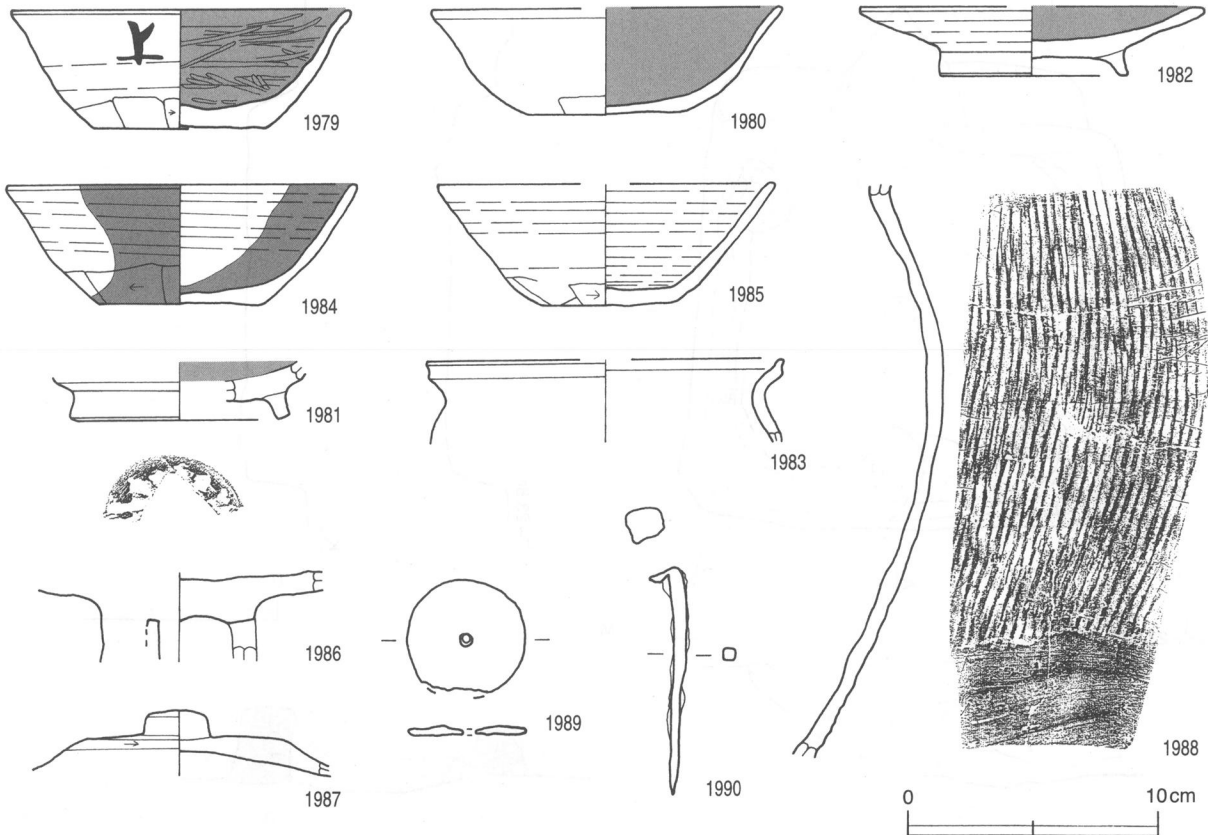
ピット土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量
- 2 褐色 ローム中ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量, 焼土中ブロック・砂粒中量, ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・焼土粒子微量
- 7 褐色 焼土粒子微量

覆土 11層からなる。レンズ状に堆積していることから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック少量
- 3 黒褐色 砂粒中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
- 4 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量



第572図 第491号住居跡出土遺物実測図

- 5 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物微量
- 6 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子中量, ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量, 炭化物微量
- 7 黒褐色 砂粒多量, 焼土粒子・粘土粒子中量, 焼土小ブロック少量
- 8 黒褐色 砂粒多量, 焼土小ブロック中量, ローム小ブロック少量
- 9 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量
- 10 黒褐色 ローム粒子少量
- 11 黒褐色 ローム粒子中量
- 12 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子少量, ローム中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量 (貼床)

**遺物** 土師器片261点, 須恵器片167点, 鉄器2点 (紡錘車・釘), 鉄滓2点が出土している。第572図1979の土師器坏は東壁際の覆土下層から横位で出土しており, 体部外面に正位で「上」の墨書が認められる。1980の土師器坏は竈内の覆土中から, 1982の土師器高台付皿は中央部南西寄りの覆土上層から, 1983の土師器甕は南壁付近の覆土上層から, 1986の須恵器高盤は北壁付近の覆土上層から, 1987の須恵器蓋は北壁際の覆土中層から, 1988の須恵器甕は竈内の覆土中からそれぞれ出土している。1982は逆位で出土している。1989の鉄製紡錘車は中央部東寄りの覆土中層から, 1990の釘は南壁付近の覆土中層からそれぞれ出土している。1984の須恵器坏は, 竈内の覆土中層と竈焚口部付近の床面から出土した破片が接合したものである。1981の土師器高台付坏, 1985の須恵器坏はそれぞれ覆土中から出土している。

**所見** 本跡の時期は, 遺構の形態と出土土器から, 9世紀後葉と推定される。

第491号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第572図 1979	坏 土師器	A 13.6 B 4.8 C 6.8	底部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。内面へら磨き, 黒色処理。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 にぶい赤褐色, 普通	70% PL240 体部外面墨書 正位「上」カ
1980	坏 土師器	A [14.0] B 4.2 C [6.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は緩やかに外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部1方向のへら削り。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 橙色, 普通	20% PL240
1981	高台付坏 土師器	B (2.3) D [8.4] E 1.1	高台部から体部下端の破片。高台はハの字状に開く。	体部内面へら磨き。底部へら状工具先端による風車状ナデ。高台貼り付け後, ロクロナデ。内面黒色処理。	砂粒・石英 灰褐色 普通	15%
1982	高台付皿 土師器	A [14.0] B 3.2 D 7.5 E 1.3	高台部から口縁部の破片。高台はハの字状に開く。体部から口縁部にかけ, 内彎気味に開く。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。底部回転へら削り。高台貼り付け後, ロクロナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 褐色 普通	30% PL240
1983	甕 土師器	A [14.2] B (3.3)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり, 頸部で屈曲する。口縁端部はつまみ上げられ, 棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 暗赤褐色 普通	5%
1984	坏 須恵器	A 14.0 B 4.8 C 6.4	底部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部にいたる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部1方向のへら削り。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 灰黄褐色, 普通	80% PL240 体部内・外面 煤付着
1985	坏 須恵器	A [13.6] B 4.9 C 5.2	底部から口縁部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部にいたる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部多方向のへら削り。	砂粒・雲母・石英 灰オリーブ色 普通	30% PL240
1986	高盤 須恵器	B (3.6) E 2.2	脚部上位から体部下位の破片。脚部に3孔のへら切り痕を残す。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部, 脚部内・外面ロクロナデ。	砂粒・石英 灰褐色 普通	20%
1987	蓋 須恵器	B (2.6) F 2.5 G 1.1	つまみから口縁部の破片。天井は平坦で, 直線的に開く。つまみは腰高のボタン状。	つまみ, 天井部から口縁部内・外面ロクロナデ。頂部回転へら削り。	粗い, 角礫・砂粒・石英 褐灰色, 普通	40% PL240
1988	甕 須恵器	B (23.0)	体部の破片。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面上位から中位縦位の平行叩き, 下位横位のへら削り。内面指頭押圧後, ナデ。	砂粒・石英・赤色粒子 橙色, 普通	20%

遺物番号	器 種	計 測 値				材 質	特 徴	備 考
		径 (cm)	厚 さ (cm)	孔 径 (cm)	重 量 (g)			
第572図1989	紡 錘 車	4.8	0.4	0.4	(17.2)	鉄	軸棒欠損。	P L 257

遺物番号	器 種	計 測 値				材 質	特 徴	備 考
		長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)			
1990	釘	(9.1)	0.5	0.5	(13.8)	鉄	頭部は薄く叩き伸ばされ、折り曲げられている。	P L 256

#### 第492号住居跡 (第573・574図)

**位置** 調査区域の北端部，B 5 g4区。

**規模と平面形** 長軸3.03m，短軸2.69mの長方形である。

**主軸方向** N-13°-E

**壁** 壁高は30～35cmで，外傾して立ち上がる。

**壁溝** 竈の部分，北壁の一部，北東コーナー部を除いて，壁下を巡っている。上幅9～18cm，下幅6～13cm，深さ6cmで，断面は緩やかなU字形である。

**床** ほぼ平坦で，全体的に踏み固められている。全体が貼床である。貼床は，確認面から深さ40cmほど地山を平坦に掘り込み，その上に厚さ2～8cmほどロームブロック・ローム粒子を含む褐色土を入れて構築されている。

**竈** 北壁の中央部やや東寄りに設けられている。竈土層断面図中，第3・5層は天井部の崩落土層と思われる。規模は，焚口部から煙道部までの長さ117cm，袖部最大幅151cmである。袖部はローム粒子・焼土ブロック・粘土ブロック混じりの褐色土・暗褐色土・黒褐色土で構築されている。煙道部は，北壁を幅95cm，奥行き70cmにわたり三角形に掘り込んでいる。煙道は，40度の傾きで立ち上がる。火床部は，地山を確認面から44cmの深さに掘り込んでつくっている。火床面は，床面より7cmほど下がっており，北壁ラインの内側に位置する。

#### 竈土層解説

- 1 暗褐色 粘土小ブロック少量，砂粒微量
- 2 暗褐色 粘土粒子中量，焼土小ブロック・粘土小ブロック少量
- 3 暗褐色 焼土大ブロック中量，粘土中ブロック・粘土小ブロック少量，砂粒微量
- 4 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物少量
- 5 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量
- 6 黒褐色 焼土中ブロック・焼土粒子少量
- 7 暗褐色 焼土小ブロック中量，焼土中ブロック少量
- 8 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック少量
- 9 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量
- 10 褐色 粘土粒子・砂粒多量
- 11 褐色 砂粒多量，粘土粒子中量，焼土小ブロック少量
- 12 褐色 粘土粒子・砂粒中量

**ピット** 1か所。P 1は径27cmの円形，深さ10cmで，南壁寄りの竈に対する位置で確認されていることから，出入口施設に伴うピットと思われる。

#### ピット土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック微量

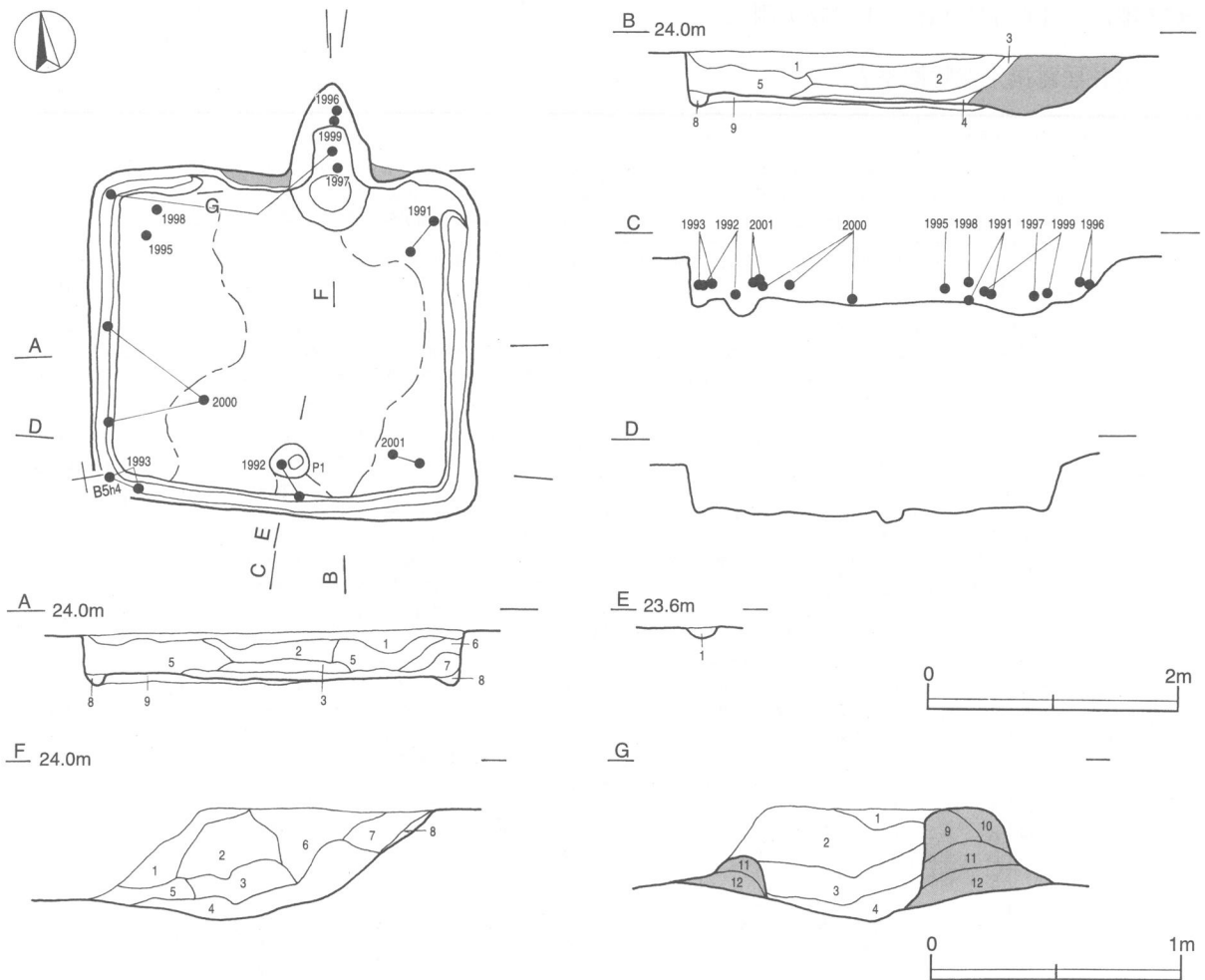
**覆土** 8層からなる。ブロック状に堆積していることから，人為堆積と考えられる。

**土層解説**

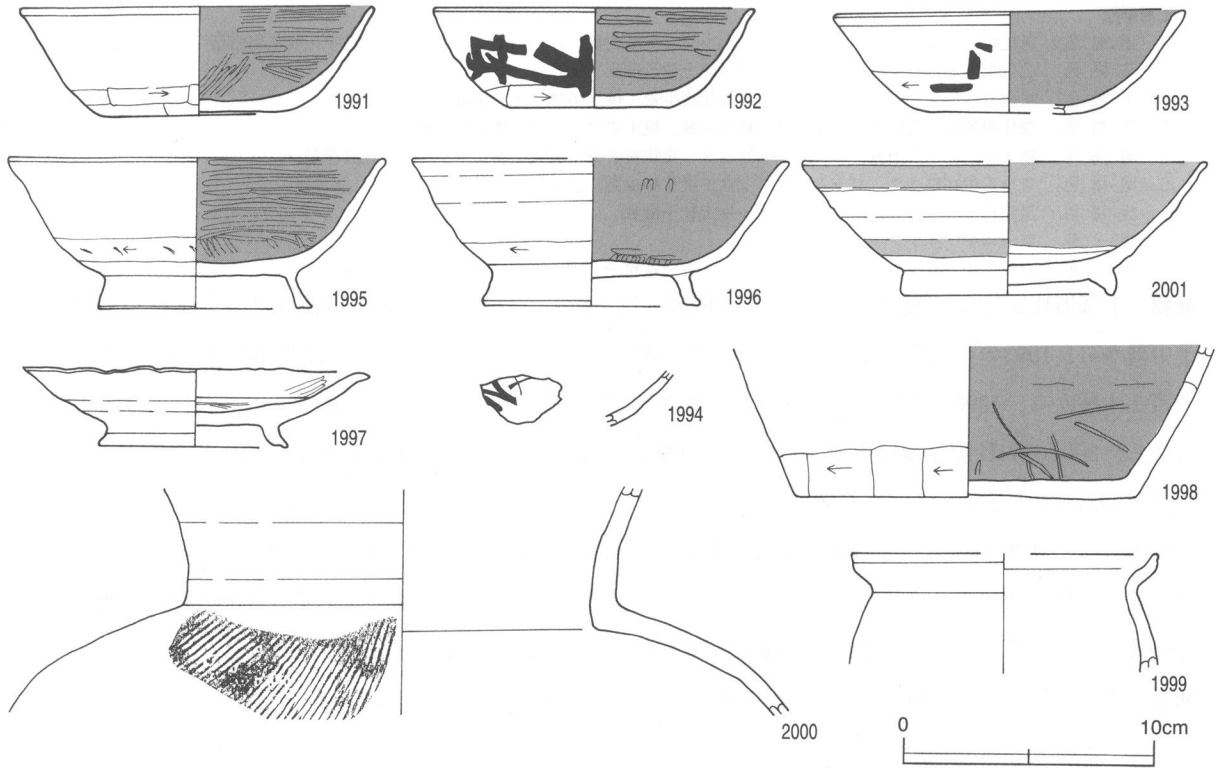
- 1 黒褐色 炭化粒子中量, 焼土小ブロック・粘土小ブロック少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 2 暗褐色 炭化物・炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 炭化粒子中量, ローム小ブロック・炭化物少量, 焼土小ブロック微量
- 4 黒褐色 炭化物多量, 炭化粒子中量, 粘土粒子少量, 焼土中ブロック・焼土粒子微量
- 5 暗褐色 粘土小ブロック中量, ローム小ブロック・炭化粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物微量
- 6 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量
- 7 黒褐色 炭化粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 8 褐色 ローム中ブロック少量
- 9 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土中ブロック少量(貼床)

**遺物** 土師器片267点, 須恵器片109点, 灰釉陶器片11点が出土している。第574図1992の土師器坏は南壁際の覆土中層から, 1993の土師器坏は南西コーナー部の覆土中層から, 1995の土師器高台付椀は北西コーナー部付近の覆土中層から, 1996の土師器高台付椀は竈煙道部付近の覆土中層から, 1997の土師器高台付皿は竈の覆土下層から, 2001の灰釉陶器椀は南東コーナー部の覆土中層から, 1994の土師器坏は覆土中からそれぞれ出土している。1992には「万坏」の文字が横位で墨書されている。1995・1998はいずれも正位で出土している。1991の土師器坏は, 北東コーナー部の覆土下層と床面から出土した破片が接合したものである。1999の土師器甕は, 竈の覆土下層と北西コーナー部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。2000の須恵器甕は, 西壁際の覆土中層と北西コーナー部付近の覆土中層から出土した破片が接合したものである。

**所見** 本跡の時期は, 遺構の形態と出土土器から, 9世紀後葉と推定される。



第573図 第492号住居跡実測図



第574図 第492号住居跡出土遺物実測図

第492号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第574図 1991	坏 土師器	A 13.8 B 4.3 C 6.5	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り、内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。	石英・赤色粒子 橙色 普通	80% P L 240
1992	坏 土師器	A 12.8 B 4.0 C 6.0	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り、内面ヘラ磨き、黒色処理。	雲母・石英 にぶい黄橙色 普通	70% P L 240 体部外面墨書 横位「万坏」
1993	坏 土師器	A 14.0 B 4.2 C 6.0	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英・赤 色粒子 橙色、普通	80% P L 240 体部外面墨書 「口」
1994	坏 土師器	B ( 2.0)	体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。	砂粒・赤色粒子 橙色 普通	5% P L 247 体部外面墨書 「本」
1995	高台付 碗 土師器	A 15.2 B 6.0 C 8.5	体部から口縁部一部欠損。高台はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り、内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後、ロクロナデ。体部下端爪痕。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 明褐色 普通	60% P L 240
1996	高台付 碗 土師器	A [13.8] B 5.8 C 8.6 E 1.3	体部から口縁部一部欠損。高台はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り、内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後、ロクロナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 明褐色	40% 二次焼成
1997	高台付 皿 土師器	A 14.0 B 3.1 D 7.6 E 0.7	体部から口縁部一部欠損。高台はハの字状に開く。体部から口縁部にかけて内彎気味に開き、わずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後、ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙色 普通	65% P L 240
1998	鉢 土師器	B ( 6.0) C 13.5	底部から体部下位の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面下位ヘラ削り、内面ナデ、一部ヘラナデ。底部ヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・雲母 明褐色 普通	10%

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第574図 1999	甕 土師器	A [12.2] B (4.7)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母・石英にぶい赤褐色普通	5% P L 240
2000	甕 須恵器	B (8.9)	体部から頸部の破片。体部は内彎して立ち上がり、頸部で強く屈曲する。	頸部内・外面ロクロナデ。体部外面斜位の平行叩き。	砂粒・石英にぶい黄色普通	10%
2001	椀 灰釉陶器	A 15.4 B 5.4 C 8.4	高台部から口縁部の破片。高台は三角形で短く、ハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後、ロクロナデ。口縁部内・外面、体部内面施釉。刷毛塗り。	砂粒、胎土にぶい黄色、灰黄釉普通	40% P L 240

### 第493号住居跡（第575図）

**位置** 調査区域の北端部，B 5 e7区。

**規模と平面形** 長軸3.16m，短軸2.98mの方形である。

**主軸方向** N-4°-E

**壁** 壁高は12～18cmで，外傾して立ち上がる。

**壁溝** 竈の部分及び南壁を除いて，壁下を巡っている。上幅5～15cm，下幅3～9cm，深さ7cmで，断面はU字形である。

**床** ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。地山を平坦に掘り込んで，床面としている。

**竈** 北壁の中央部に設けられている。規模は，焚口部から煙道部までの長さ92cm，袖部最大幅123cmである。袖部はローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・砂粒・粘土粒子混じりの暗褐色土で構築されている。煙道部は，北壁を幅103cm，奥行き74cmにわたり，丸みを帯びた三角形に掘り込んでいる。煙道は，35度の傾きで立ち上がる。火床部は，径43cmの不整形に確認面から30cmほど掘り込み，ロームブロック・焼土粒子を含んだ暗褐色土を埋土してつくっている。煙道部西寄りからは，下から土師器坏片及び土師器甕片，逆位の土師器坏，須恵器甕の体部片が重ねられて出土している。土器が火熱を受けていること及び出土状況から，支脚として使用されたと考えられる。

#### 竈土層解説

- 1 暗褐色 砂粒中量，焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量，焼土大ブロック・焼土中ブロック・灰中量
- 3 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量，焼土中ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 6 暗褐色 焼土粒子・砂粒中量，焼土小ブロック・粘土粒子少量
- 7 暗褐色 焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 8 黒褐色 焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量
- 10 暗褐色 砂粒中量，ローム粒子・粘土小ブロック少量，焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 11 暗褐色 焼土粒子・砂粒少量
- 12 暗褐色 焼土粒子少量（掘り方）

**ピット** 1か所。P 1は長径33cm，短径26cmの楕円形，深さ10cmで，南壁際の竈に対する位置で確認されることから，出入口施設に伴うピットと思われる。

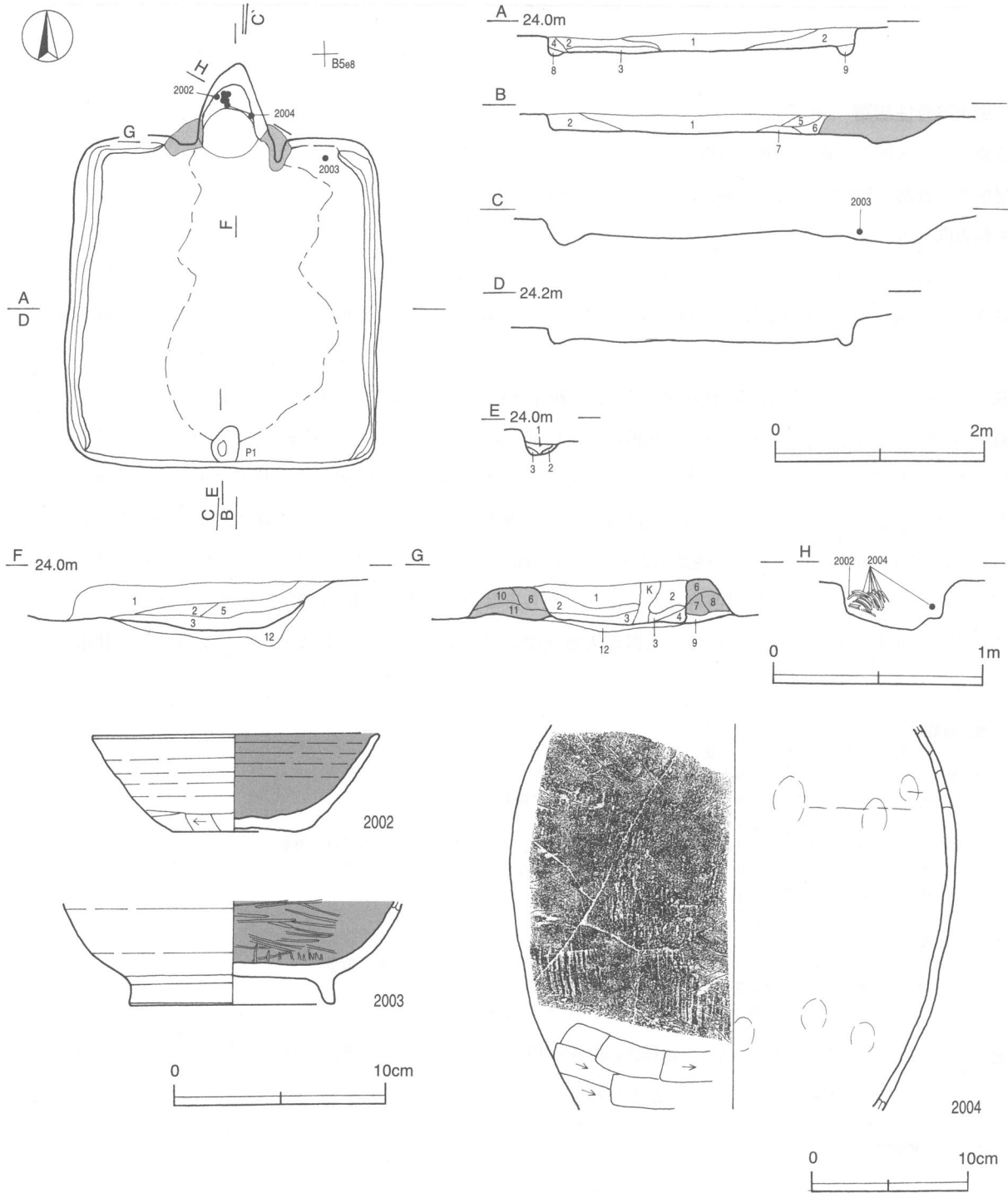
#### ピット土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量，ローム中ブロック・焼土粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量

覆土 9層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・焼土小ブロック少量
- 4 褐色 ローム中ブロック中量
- 5 暗褐色 粘土小ブロック少量，砂粒微量
- 6 暗褐色 焼土粒子・粘土粒子少量，砂粒微量
- 7 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 8 暗褐色 ローム粒子少量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量



第575図 第493号住居跡・出土遺物実測図

**遺物** 土師器片116点，須恵器片17点が出土している。第575図2002の土師器坏，2004の須恵器甕は竈内の煙道部やや西寄りから重ねられて出土している。2003の土師器高台付椀は，北東コーナー部の覆土中層から出土している。

**所見** 本跡の時期は，遺構の形態と出土土器から，9世紀後葉と推定される。

第493号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第575図 2002	坏 土師器	A 13.7 B 4.5 C 6.0	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部にいたる。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後，多方向のヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 橙色	95% PL240 二次焼成
2003	高台付椀 土師器	B (5.0) D 9.8 E 1.2	高台部から体部の破片。高台はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がる。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り，内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後，ロクロナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英・ 赤色粒子 橙色 普通	40%
2004	甕 須恵器	B (24.1)	体部の破片。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面縦位の平行叩き，下位横位のヘラ削り。内面指頭押後，ナデ。	砂粒・雲母・石英・ 赤色粒子 にぶい黄橙色	20% 二次焼成

第494号住居跡 (第576～578図)

**位置** 調査区域の北端部，B 5 h6区。

**重複関係** 第496号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

**規模と平面形** 長軸4.00m，短軸3.56mの長方形である。

**主軸方向** N - 9° - E

**壁** 壁高は28～30cmで，外傾して立ち上がる。北壁には粘土が貼り付けられている。

**壁溝** 竈の部分と北壁を除いて，壁下を巡っている。上幅7～13cm，下幅3～8cm，深さ6cmで，断面は緩やかなU字形である。

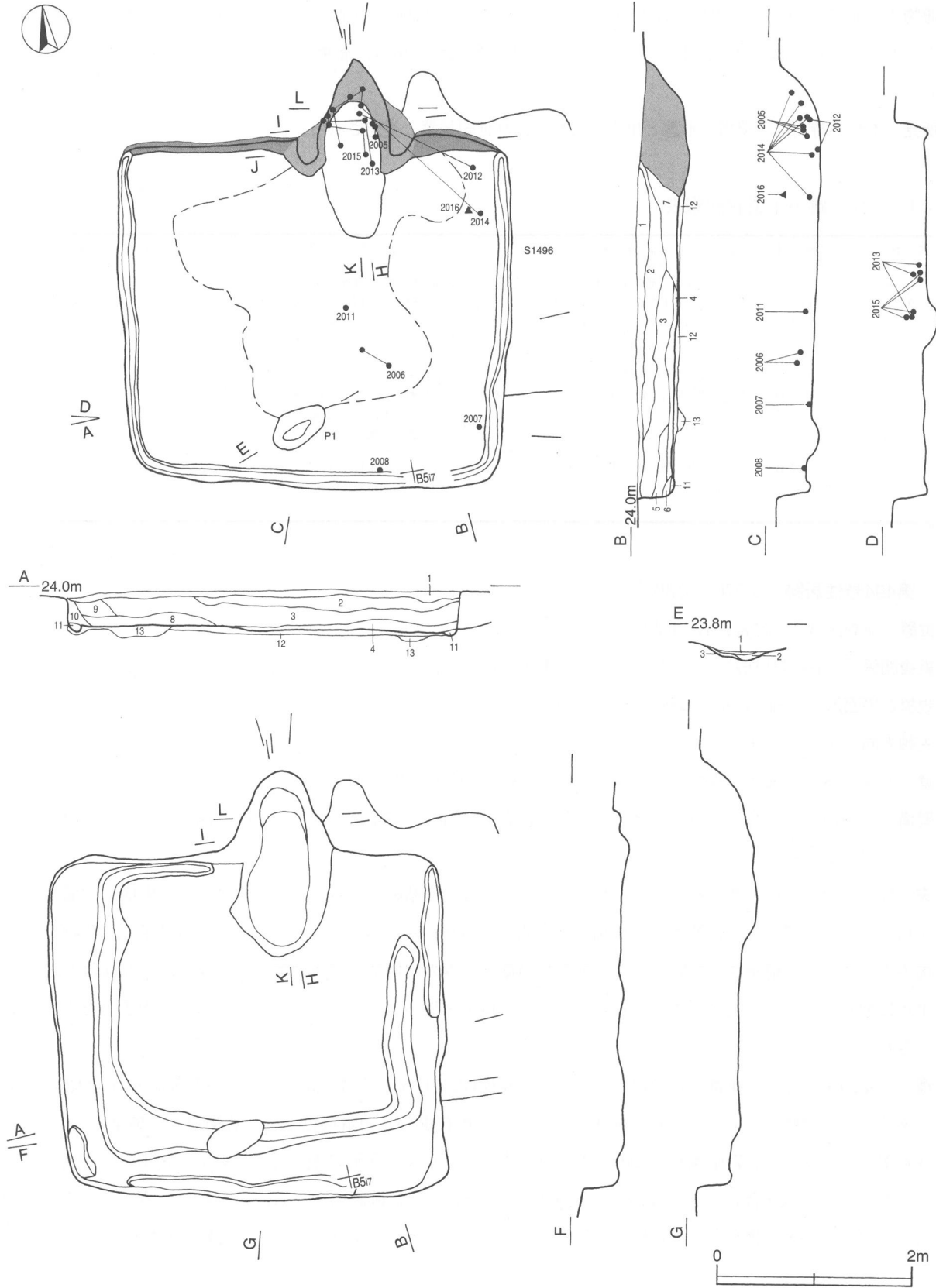
**床** ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。床面は全面貼床である。周辺部の貼床は，壁溝の内側部分を幅14～40cm，確認面からの深さ38～43cmほど壁溝状に掘り込み，ロームブロック・ローム粒子・炭化物を含む褐色土を埋土して構築されている。この壁溝状の掘り込みの内側部分は確認面からの深さ37～45cmほど地山を平坦に掘り込み，その上に厚さ3～6cmほどローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を含む暗褐色土を入れて構築されている。

**竈** 北壁の中央部やや東寄りに設けられている。規模は，焚口部から煙道部までの長さ185cm，袖部最大幅127cmである。袖部は焼土ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒混じりの暗褐色土及び黄褐色土で構築されている。煙道部は，北壁を幅117cm，奥行き79cmにわたり，丸みを帯びた三角形に掘り込んでいる。煙道は，40度の傾きで立ち上がる。火床部は，長径138cm，短径62cmの不整楕円形に確認面から41cmほど掘り込み，ローム粒子・焼土ブロック・炭化物を含んだ暗褐色土で埋土してつくっている。煙道部からは，土製支脚が出土している。

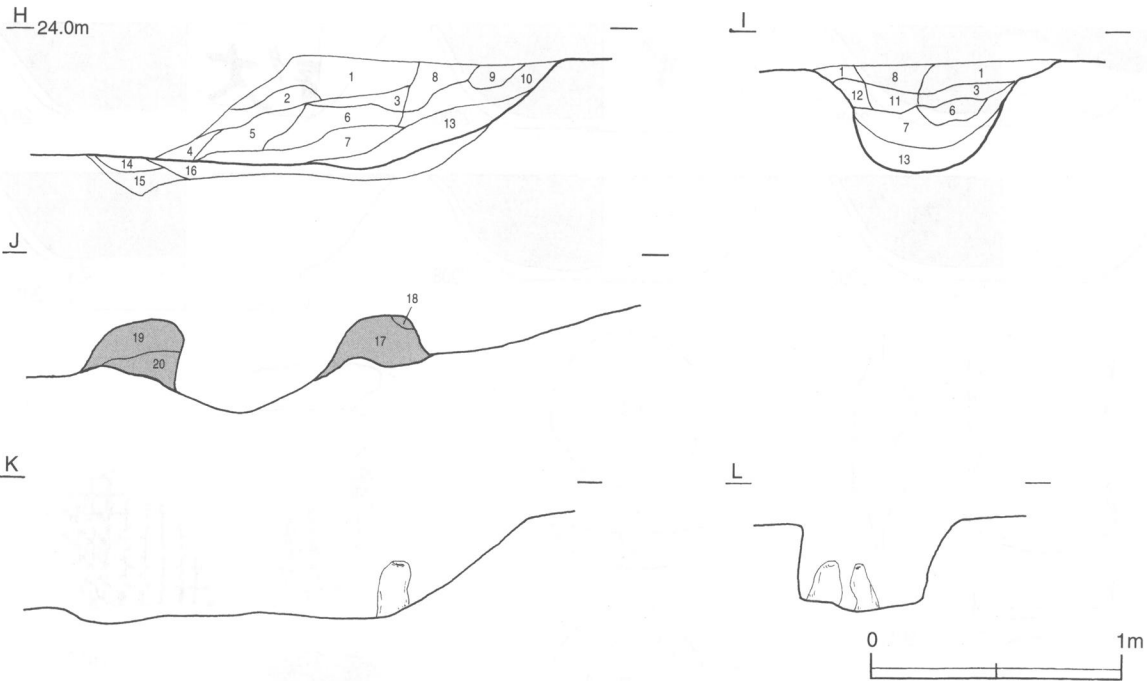
竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子少量，砂粒微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子少量，砂粒微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック・粘土粒子少量，砂粒微量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・粘土小ブロック・粘土粒子少量，砂粒微量
- 5 暗褐色 粘土粒子中量，焼土粒子・炭化物・砂粒少量
- 6 にぶい赤褐色 焼土中ブロック少量，粘土粒子・砂粒微量





第576图 第494号住居跡実測图 (1)



第577図 第494号住居跡実測図 (2)

- 7 暗赤褐色 焼土小ブロック中量
- 8 黒色 焼土小ブロック少量
- 9 赤褐色 焼土小ブロック多量
- 10 にぶい赤褐色 焼土小ブロック少量
- 11 暗褐色 焼土小ブロック中量, 炭化物少量
- 12 暗褐色 砂粒中量, 焼土粒子少量
- 13 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量, 焼土中ブロック少量
- 14 暗褐色 炭化物中量, 焼土小ブロック少量 (掘り方)
- 15 黒褐色 炭化物多量, ローム粒子・焼土小ブロック少量 (掘り方)
- 16 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・砂粒中量, 粘土粒子少量 (掘り方)
- 17 暗褐色 焼土粒子中量, 焼土中ブロック・焼土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量, 炭化物微量
- 18 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量
- 19 にぶい黄褐色 砂粒中量, 焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子少量
- 20 暗褐色 粘土粒子・砂粒少量

ピット 1か所。P1は長径62cm, 短径35cmの楕円形, 深さ10cmで, 南壁寄りの竈に対する位置で確認されていることから, 出入口施設に伴うピットと思われる。

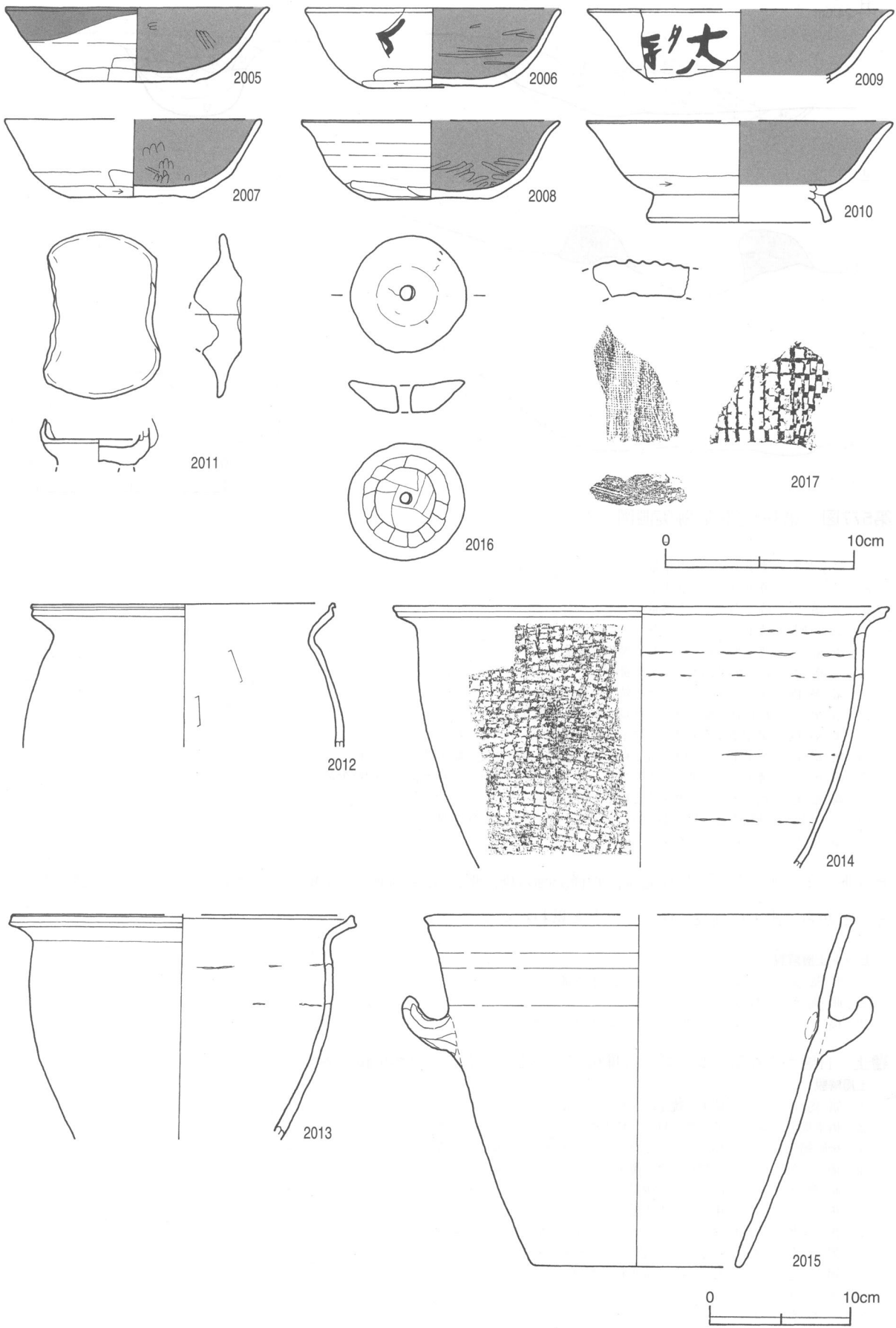
ピット土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック中量
- 3 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

覆土 11層からなる。レンズ状に堆積していることから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック少量
- 2 極暗褐色 焼土粒子少量, ローム粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量
- 4 褐色 ローム中ブロック・焼土中ブロック・炭化物少量
- 5 暗褐色 ローム大ブロック少量
- 6 褐色 ローム中ブロック中量
- 7 褐色 砂粒中量, 粘土中ブロック少量, 砂粒微量
- 8 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・砂粒少量
- 9 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量
- 10 褐色 ローム大ブロック中量
- 11 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 12 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 (貼床)
- 13 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化物微量 (貼床)



第578図 第494号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片338点, 須恵器片133点, 灰釉陶器片1点, 土製品1点(紡錘車), 瓦1点が出土している。第578図2005の土師器坏, 2010の土師器高台付坏, 2013の土師器甕, 2014の須恵器鉢, 2015の須恵器甌は竈の覆土中からそれぞれ出土している。2006の土師器坏は中央部南東寄りの覆土中層から, 2007の土師器坏は東壁付近の覆土下層から, 2008の土師器坏は南壁付近の覆土下層から, 2011の土師器耳皿は中央部の覆土下層から, 2016の紡錘車は北東コーナー部付近の覆土上層からそれぞれ出土している。2012の土師器甕は, 北東コーナー部の床面と竈の覆土中から出土した破片が接合したものである。2009の土師器坏, 2017の平瓦は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 貼床の下から壁溝と思われる溝が検出された。この溝から推定される規模は本跡より一まわり小さいことから, 本跡は壁を拡張した住居である可能性がある。また, 北壁に粘土が貼り付けてあることから棚が設けられていた可能性がある。本跡の時期は, 重複関係と出土土器から, 9世紀後葉と推定される。

第494号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第578図 2005	坏 土師器	A 14.2 B 4.0 C 6.2	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り, 内面へら磨き。底部回転へら削り。内面黒色処理。	雲母・赤色粒子 赤褐色 普通	95% 口縁部油煙付着
2006	坏 土師器	A 13.7 B 4.2 C 6.7	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り, 内面へら磨き。黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙色 普通	90% P L240 体部外面墨書正位「万」カ
2007	坏 土師器	A [13.8] B 4.2 C 6.6	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部にいたる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り, 内面へら磨き, 底部回転へら削り。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 明赤褐色, 普通	45% P L240
2008	坏 土師器	A [13.8] B 4.2 C 6.4	底部から口縁部の破片。平底。体部は外反して立ち上がり, 口縁部にいたる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部回転へら削り。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	40% P L240
2009	坏 土師器	A [16.6] B (3.9)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 明黄褐色 普通	15% P L249 体部外面墨書正位「口大」
2010	高台付坏 土師器	A [16.6] B 5.4 D [9.4] E 1.5	高台部から口縁部の破片。高台はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は緩やかに外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。高台貼り付け後, ロクロナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	15% P L241
2011	耳皿 土師器	A 8.8 B (2.6)	高台部から口縁部一部欠損。体部から口縁部にかけて外反気味に開き, 2側面で内側に丸く折り曲げられている。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。高台貼り付け後, ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 黄橙色	60% P L241 二次焼成
2012	甕 土師器	A 21.2 B (10.0)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は屈曲する。端部はつまみ上げられ, 棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 明褐色 普通	10% P L241
2013	甕 土師器	A [24.0] B (15.8)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は屈曲する。端部は上下に突出している。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。内面輪積み痕あり。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 橙色	5% P L241 二次焼成
2014	鉢 須恵器	A 35.0 B (18.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は屈曲する。端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面格子目叩き, 内面ナデ。輪積み痕あり。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 にぶい黄色 普通	60% P L241
2015	甌 須恵器	A [30.6] B 24.9 C [14.8]	底部から口縁部の破片。無底式。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部は緩やかに外反する。端部は横方向につまみ出されている。L字状の把手が付く。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。把手部ナデ。内面指頭押圧。	砂粒・雲母・石英 黄灰色 普通	20% P L241

遺物番号	器種	計測値					材質	特徴	備考
		上面径 (cm)	下面径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
2016	紡錘車	6.2	3.2	1.7	0.7	53.5	土製	断面逆台形。	P L 250

遺物番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
2017	平瓦	( 6.3)	( 5.4)	1.8	(78.7)	凸面格子目叩き, 凹面布目痕。	

**第496号住居跡 (第579・580図)**

**位置** 調査区域の北端部, B 5 h7区。

**重複関係** 第494号住居に掘り込まれており, 本跡が古い。

**規模と平面形** 長軸は2.90mで, 東西軸は1.03mだけが確認できた。方形と推定される。

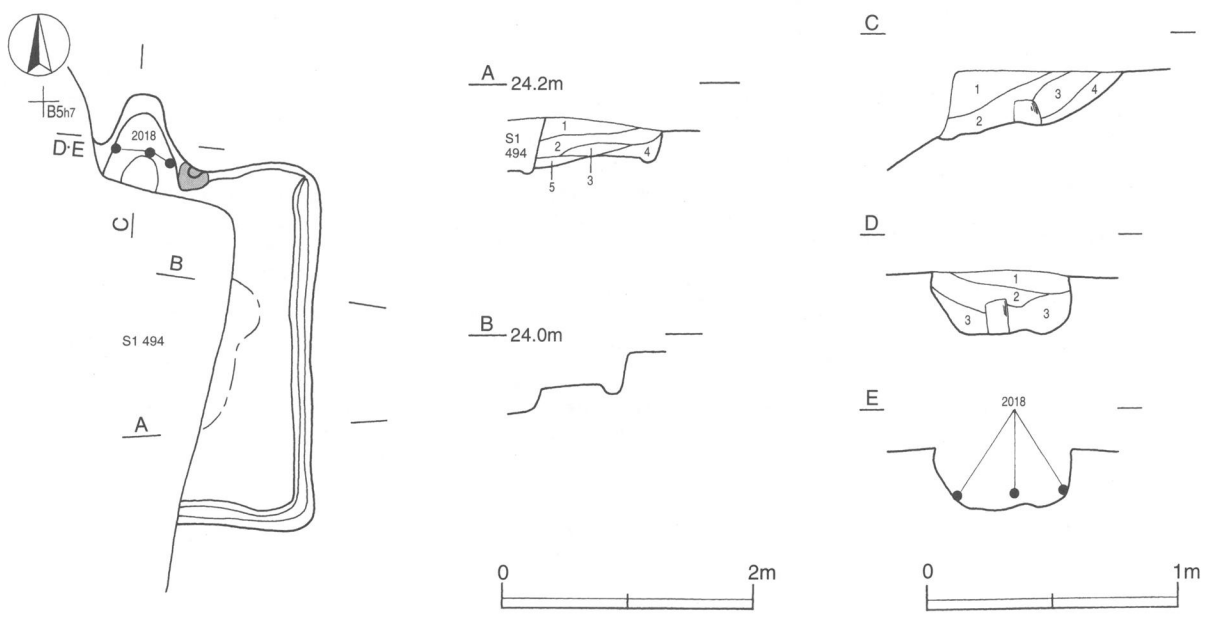
**主軸方向** N-2°-E

**壁** 壁高は26~31cmで, 外傾して立ち上がる。

**壁溝** 東壁下及び南壁下を巡っている。上幅7~12cm, 下幅3~7cm, 深さ3cmで, 断面は緩やかなU字形である。

**床** 全体的に平坦である。地山を平坦に掘り込んで, 床面としている。

**竈** 北壁に設けられている。西袖部と火床部の一部は第494号住居に掘り込まれ, 遺存しない。規模は, 焚口部から煙道部までの確認できた長さ76cm, 確認できた袖部幅92cmである。東袖部はロームブロック・粘土ブロック混じりの褐色土で構築されている。煙道部は, 北壁を確認できた幅75cm, 奥行き63cmにわたり, 丸みを帯びた三角形に掘り込んでいる。煙道は, 30度の傾きで立ち上がる。火床部は, 地山を確認面から27cmの深さに掘り込んでつくっている。



第579図 第496号住居跡実測図

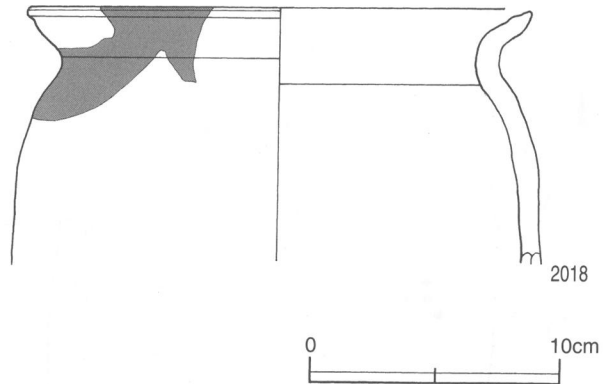
**竈土層解説**

- 1 黒褐色 砂粒中量, 焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量, 焼土中ブロック・焼土小ブロック少量, 炭化物微量
- 3 暗褐色 焼土粒子中量, 焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 4 褐色 焼土粒子・砂粒少量, 焼土中ブロック微量

**覆土** 5層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・砂粒少量
- 5 褐色 粘土中ブロック・砂粒少量



**遺物** 土師器片25点, 須恵器片6点が出土している。第580図2018の土師器甕は竈の覆土下層から出土している。

**第580図** 第496号住居跡出土遺物実測図

**所見** 本跡の時期は、重複関係と出土土器から、9世紀中葉と推定される。

**第496号住居跡出土遺物観察表**

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第580図 2018	甕 土師器	A 20.3 B (10.0)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり,口縁部は屈曲する。端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	10% PL241 口縁部外面煤 付着

**第497号住居跡 (第581図)**

**位置** 調査区域の北西端部, B 3 h6区。

**規模と平面形** 東西軸は3.50mで, 南北軸は北半分が調査区域外のため, 1.70mが確認できただけである。方形または長方形と考えられる。

**主軸方向** N-5°-E

**壁** 壁高は18~40cmで, 外傾して立ち上がる。

**壁溝** 東壁の壁下を巡っている。上幅10cm, 下幅4cm, 深さ5~10cmで, 断面はU字形である。

**床** ほぼ平坦で, 踏み固められた部分は見られない。中央部は貼床で, そのほかの部分は地山面をそのまま利用した床である。貼床は, 中央部に径110cmの隅丸方形と思われる形で確認面から55cmの深さに掘り込み, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土を埋土して構築されている。

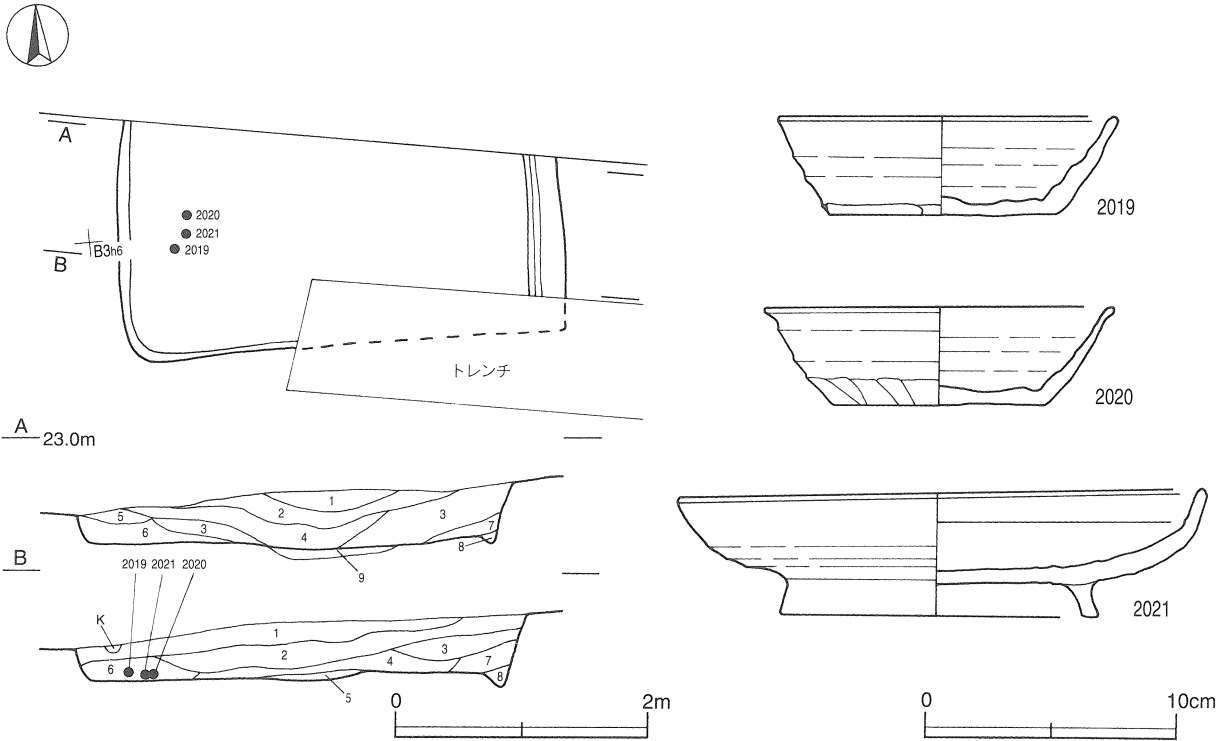
**覆土** 8層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 にぶい黄褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 (貼床)

**遺物** 土師器片13点、須恵器片21点が出土している。第581図2019・2020の須恵器坏、2021の須恵器盤は西壁よりの覆土最下層から出土している。

**所見** 本跡の時期は、出土土器から8世紀中葉と推定される。



第581図 第497号住居跡・出土遺物実測図

第497号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第581図 2019	坏 須恵器	A 13.4	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。底部から体部への立ち上がり部分の器壁が厚い。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部外面下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。	粗い、砂粒・雲母・長石・角礫 灰色、普通	100% P L241
		B 4.0				
		C 9.1				
2020	坏 須恵器	A 13.8	平底。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は外反し、端部は細くすぼむ。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	80% P L241
		B 4.0				
		C 8.4				
2021	盤 須恵器	A 20.9	体部は丸みをもって外方に開く。口縁部で屈曲し、立ち上がる。高台はハの字状に開く。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端・底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け、ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	80% P L241
		B 5.6				
		D 12.6				
		E 1.5				

第499号住居跡 (第582・583図)

**位置** 調査区域の南東部、H 7 b1区。

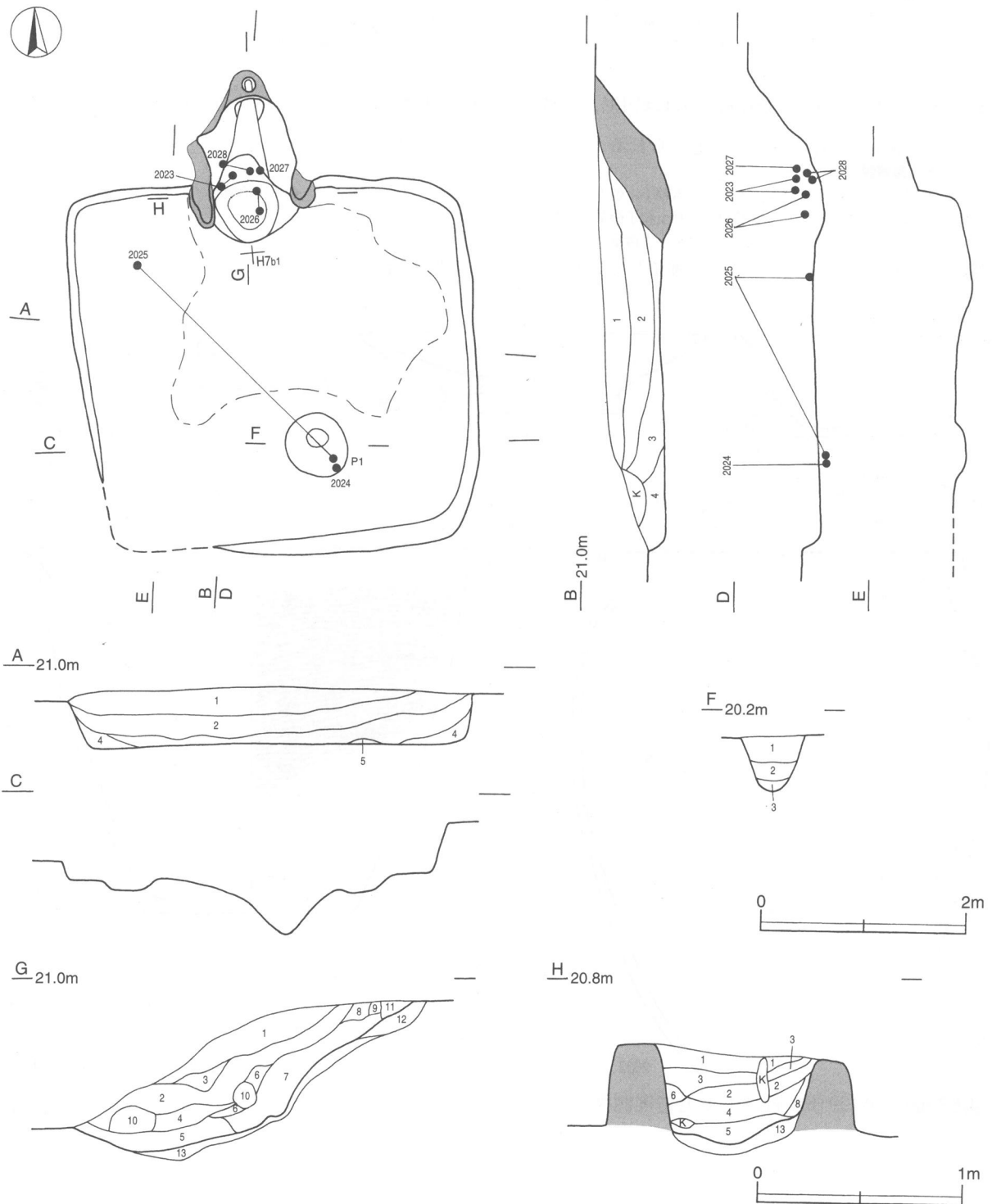
**規模と平面形** 長軸3.90m、短軸3.50mの長方形である。

**主軸方向** N-0°

**壁** 壁高は47~53cmで、ほぼ直立する。

**床** ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。地山を平坦に掘り込んで床面としている。

**竈** 北壁の中央部に設けられている。天井部は崩落しており、袖部・煙道部・煙出し部が残存する。規模は、焚口部から煙道部までの長さ165cm、袖部最大幅は123cmである。袖部は黄褐色粘土と砂粒を含む灰黄褐色土で構築されている。煙道部は、北壁を幅103cm、奥行き105cmにわたり逆U字形に掘り込んでいる。煙道は、40度の傾きで立ち上がる。火床部は、長径85cm、短径60cmの不定形に確認面から80cmの深さまで掘り込み、焼土・炭化物・粘土を含む黒褐色土を埋土してつくっている。火床面は、北壁ライン上に位置する。土層断面図中、第2層は、天井部の崩落土と思われる。



第582図 第499号住居跡実測図



**竈土層解説**

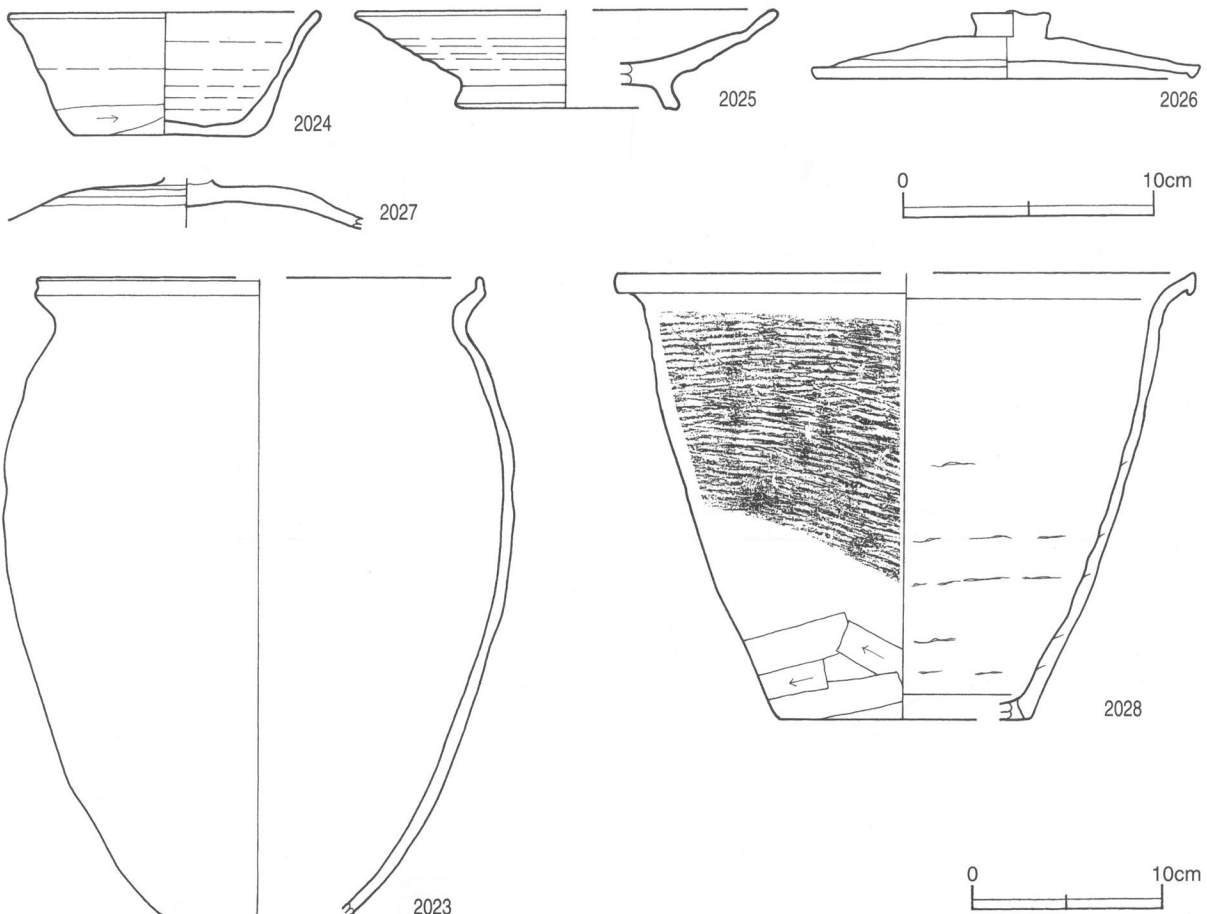
- 1 黒褐色 焼土粒子・粘土粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土小ブロック微量
- 2 にぶい黄褐色 粘土粒子中量, 焼土粒子・粘土小ブロック少量, ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 3 にぶい黄褐色 粘土小ブロック・粘土粒子少量, 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 4 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量, 焼土中ブロック・粘土粒子少量, ローム粒子・焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土小ブロック微量
- 5 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・灰少量, ローム粒子・炭化物・炭化粒子・粘土小ブロック微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土中ブロック・焼土小ブロック中量, 焼土大ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
- 7 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量, 焼土中ブロック少量, ローム粒子・焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土粒子微量
- 8 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 9 暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量, 焼土中ブロック・炭化粒子・粘土小ブロック微量
- 10 灰黄褐色 粘土小ブロック多量, 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化粒子少量, 焼土中ブロック・炭化物微量
- 11 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 12 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, 焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子微量
- 13 黒褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子微量 (掘り方)

ピット 1か所。P1は径36cmのほぼ円形、深さ52cmで、南壁寄りの竈に対する位置で確認されていることから出入口施設に伴うピットと考えられる。

**ピット土層解説**

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化材・炭化物・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 3 暗褐色 粘土粒子少量, 粘土小ブロック微量

覆土 5層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。



第583図 第499号住居跡出土遺物実測図

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化材・炭化物・炭化粒子・粘土小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土小ブロック微量
- 3 暗褐色 粘土粒子少量, 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 にぶい黄褐色 粘土粒子中量, 焼土粒子微量

**遺物** 土師器片196点, 須恵器片180点, 鉄器1点(鏃), 不明鉄製品1点が出土している。第583図2023の土師器甕は, 火床部中央の覆土下層から出土している。2024の須恵器坏は, 南部の床面から出土している。2025の須恵器盤は, 北西部の覆土下層から出土している。2026と2027は須恵器蓋で, いずれも竈火床部の覆土下層から出土している。2028の須恵器甕は, 火床部の底面及び覆土下層から出土した破片が接合したものである。

**所見** 本跡の時期は, 遺構の形態と出土土器から, 9世紀前葉と推定される。

第499号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第583図 2023	甕 土師器	A [22.6] B (33.5)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり, 頸部でくの字状に屈曲する。口縁部は外反して開き, 端部は上方につまみ上げられる。	口縁部, 頸部内・外面横ナデ。体部外面ナデ, 内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 褐色 普通	30% P L241
2024	坏 須恵器	A [12.3] B 4.9 C 7.2	底部から口縁部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。口縁部はやや外反し, 端部は丸く収めている。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。	雲母・石英 灰色 普通	50% P L241
2025	盤 須恵器	A [16.6] B 3.9 D [ 8.8] E 0.9	底部から口縁部の破片。高台欠損。体部は外傾して開き, 弱く屈曲して口縁部にいたる。口縁端部は丸く収めている。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後, 高台貼り付け。	長石・石英 灰色 普通	30% P L241
2026	蓋 須恵器	A [15.0] B 2.7 F 3.1 G 1.1	天井部から口縁部の破片。天井部は頂部が平坦で, 外周部はなだらかに下降し, 口縁部は屈曲して短く垂下する。つまみは腰高のボタン状。	天井頂部は右回りの回転ヘラ削り。外周部, 口縁部内・外面ロクロナデ。	雲母・石英 黄灰色 普通	55% P L241
2027	蓋 須恵器	B ( 2.0) G ( 0.3)	天井部から外周部の破片。つまみ部欠損。天井部は頂部が平坦で, 外周部はなだらかに下降する。	天井頂部は右回りの回転ヘラ削り。外周部内・外面ロクロナデ。	砂粒・石英 黄灰色 普通	30% P L241
2028	甕 須恵器	A [30.0] B 23.4 C [13.4]	底部から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は外方へ開き, 端部は上下に突出する。	口縁部内・外面ナデ。体部外面横位の平行叩き。体部下端横位のヘラ削り。	雲母・長石・黒色粒子 灰黄褐色 良好	35% P L241

(2) 方形竪穴状遺構

**第1号方形竪穴状遺構** (第584図)

**位置** 調査区域の中央部, E 6 g2区。

**規模と平面形** 長軸2.67m, 短軸2.42mの方形である。

**主軸方向** N-9°-W

**壁** 壁高は24~25cmで, 外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で, 北東コーナー付近から南壁にかけて踏み固められている。全面が貼床である。貼床は, 北東及び北西コーナーを確認面から深さ43cmほど長径45~83cm, 短径35~67cmの土坑状に掘り込み, それ以外は確認面から30cmほどの深さで平坦に掘り込み, ローム主体の褐色土を埋土して構築されている。

**ピット** P1は長径27cm, 短径23cmの楕円形, 深さ13cmで, 西壁際に位置することから, 出入口施設に伴うピットと考えられる。

**ピット土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 黒色土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量

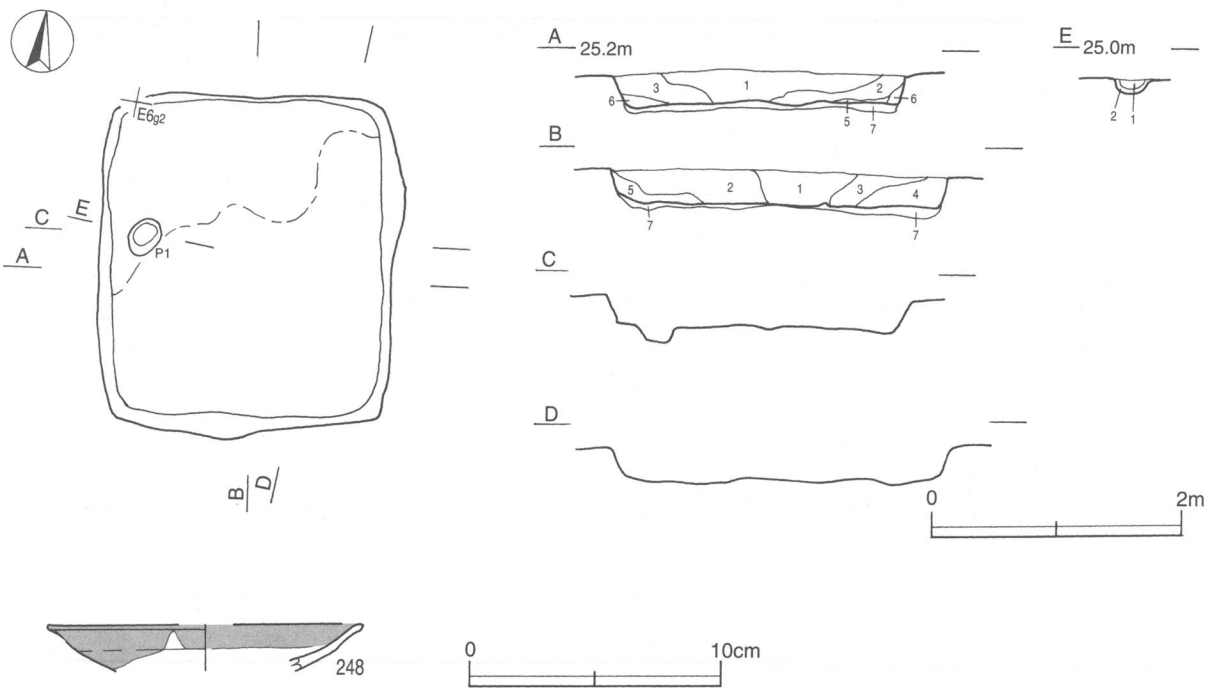
**覆土** 6層からなる。レンズ状の堆積状況から, 自然堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 6 褐色 ローム粒子少量
- 7 褐色 ローム大ブロック多量, 黒色土粒子少量(貼床)

**遺物** 土師器片58点, 須恵器片25点, 灰釉陶器片2点が出土している。出土遺物のほとんどが覆土上層からの出土である。第584図248の灰釉陶器皿は覆土上層から出土している。

**所見** 本跡の時期は, 出土土器から9世紀代と推定される。



**第584図** 第1号方形竪穴状遺構・出土遺物実測図

**第1号方形竪穴状遺構出土遺物観察表**

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第584図 248	皿 灰釉陶器	A [13.4] B (1.9)	口縁部の破片。	口縁部内・外面ロクロナデ。口縁部内・外面に釉葉の雑な刷毛塗り。	緻密, 胎土 灰色 灰オリーブ釉, 良好	5%

**第2号方形竪穴状遺構 (第585図)**

**位置** 調査区域の中央部, E 6 g1区。

**重複関係** 第26号溝に掘り込まれており, 本跡が古い。

**規模と平面形** 長軸3.07m, 短軸3.04mの方形である。

**主軸方向** N-22°-W (長軸方向)

**壁** 壁高は35～45cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

**壁溝** 北西コーナー部及び南壁の一部を除いて、壁下を巡っている。上幅11～15cm、下幅3～9cm、深さ4cm、断面はU字形である。

**床** ほぼ平坦である。全体的に踏み固められている。全面が貼床である。貼床は、全体を確認面から40～50cmほど平坦に掘り込み、ローム主体の褐色土を埋土して構築されている。

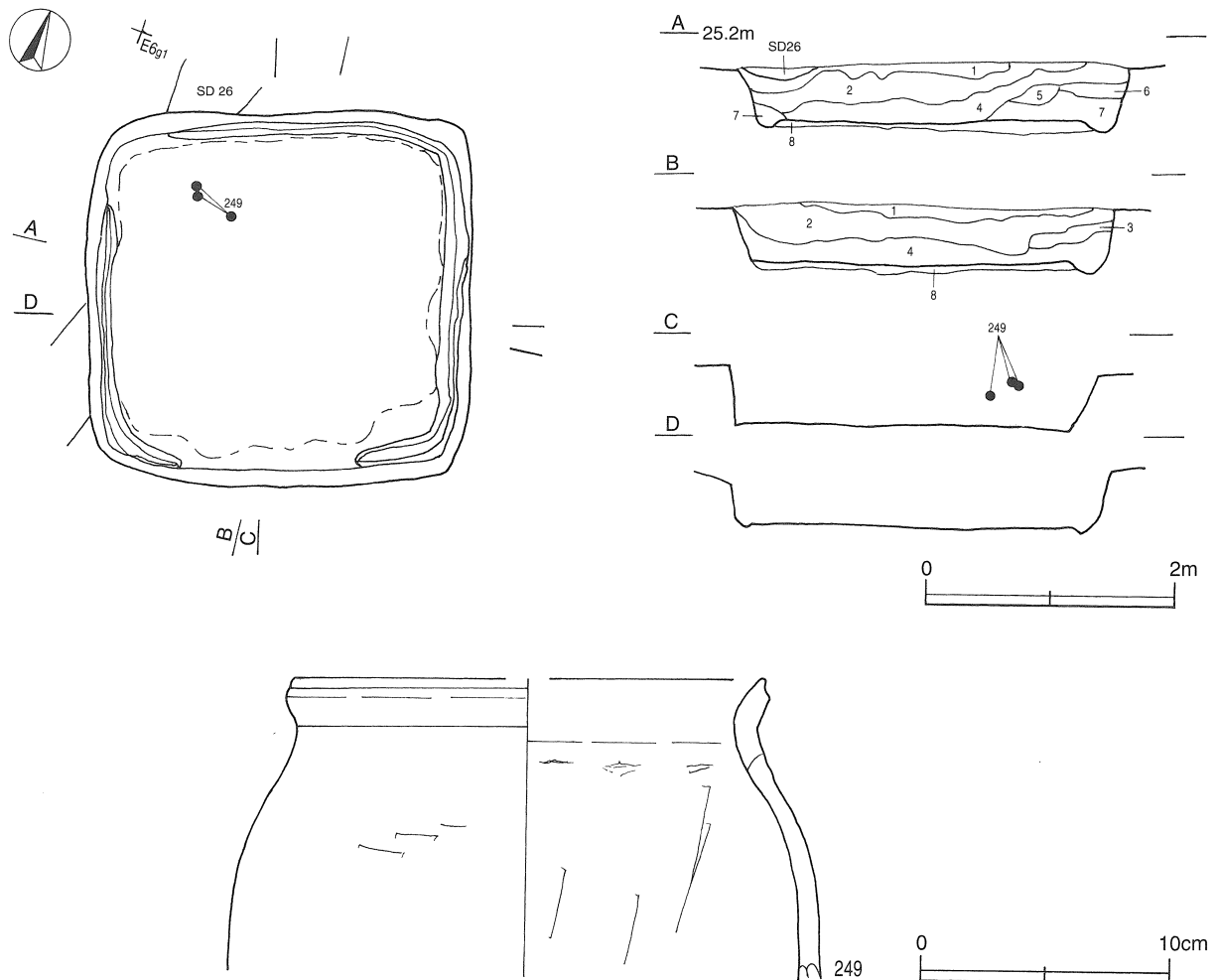
**覆土** 7層からなる。レンズ状の堆積状況から、自然堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
- 4 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム小ブロック・粒子中量、ローム中ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量、ローム中ブロック微量
- 7 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 8 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・黒色土粒子少量（貼床）

**遺物** 土師器片25点、須恵器片5点が出土している。第585図249の土師器甕は、北壁寄りの覆土上層から出土したものが接合している。

**所見** 遺物のほとんどが細片であるため、時期は不明である。



第585図 第2号方形竪穴状遺構・出土遺物実測図

第2号方形竖穴状遺構出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第585図 249	甕 土師器	A [18.6] B (11.8)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し口縁端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ、内面輪積み痕を残す、ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 明赤褐色 普通	5% PL195

第3号方形竖穴状遺構（第586図）

位置 調査区域の中央部，F 8 d3区。

規模と平面形 長軸2.61m，短軸2.44mの方形である。

主軸方向 N-3°-E

壁 壁高は29~32cmで，ほぼ直立する。

壁溝 北壁，西壁，東壁の一部を除いて，壁下を巡っている。上幅8~18cm，下幅4~6cm，深さ4~8cmで，断面はU字形である。

床 ほぼ平坦で，特に踏み固められた部分はない。

ピット 1か所。P1は径45cmの円形，深さ11cmで，性格については不明である。

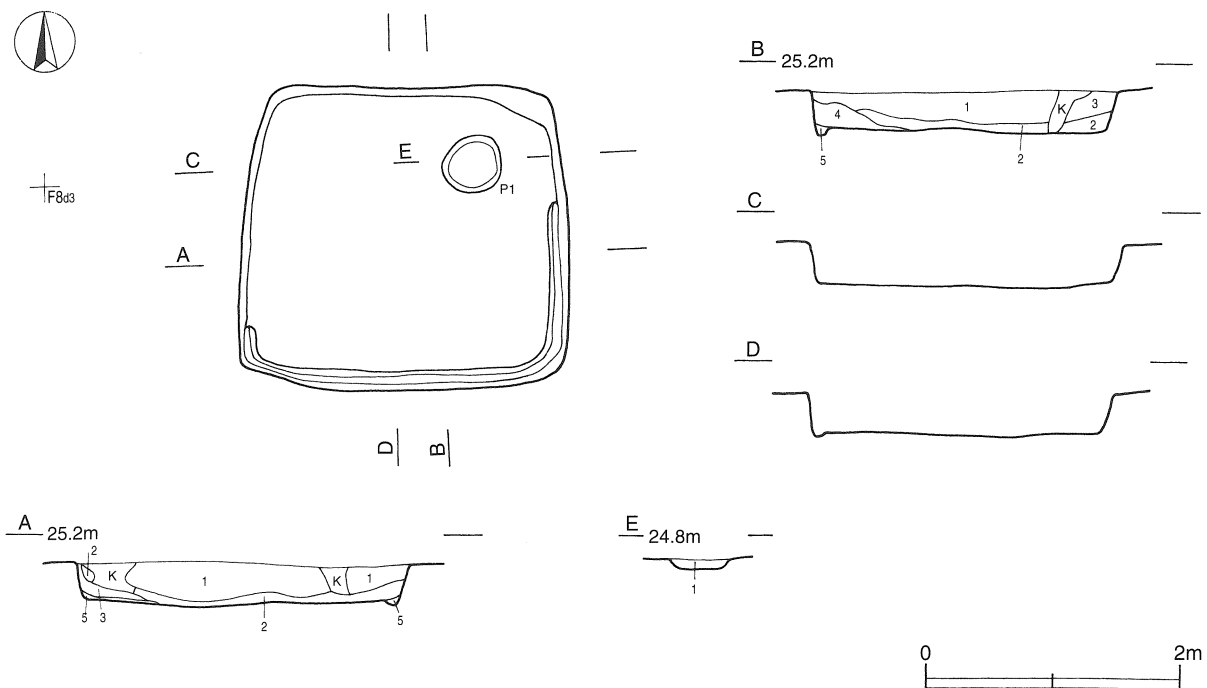
ピット土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

覆土 5層からなる。ロームブロックの含有状況や不規則な堆積状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム大ブロック中量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック中量
- 3 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック中量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量



第586図 第3号方形竖穴状遺構実測図

遺物 土師器片15点，須恵器片11点が出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 他の遺構との重複もなく，ほとんどの遺物が細片であるため，時期を明確にすることは困難である。

#### 第4号方形竪穴状遺構（第587・588図）

位置 調査区域の南東部，G7g0区。

重複関係 第1580号土坑に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.14m，短軸2.72mの長方形である。

主軸方向 N-64°-W

壁 壁高は17~20cmで，ほぼ直立する。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。地山を平坦に掘り込んで，床面としている。

ピット 1か所。P1は径24cmの円形，深さ34cmで，中央部に位置する。

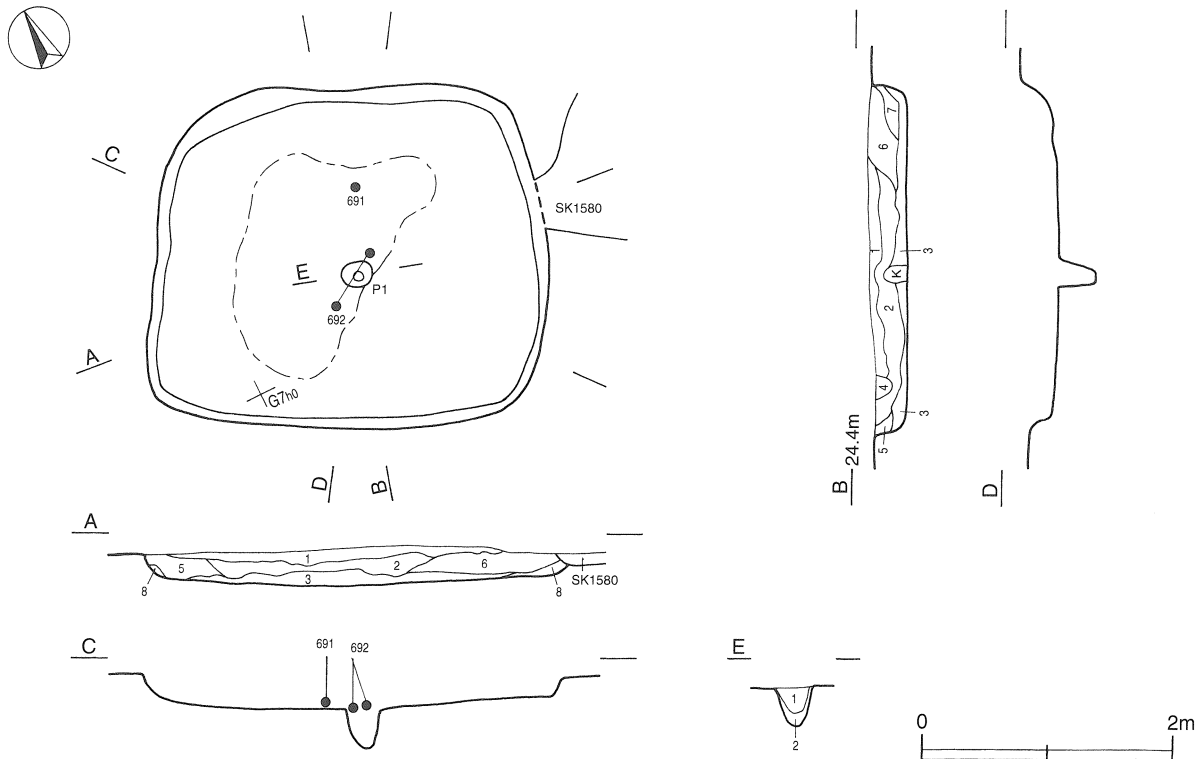
##### ピット土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック多量

覆土 8層からなる。ロームブロック・焼土ブロックの含有状況や不規則な堆積状況から，人為堆積と考えられる。

##### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量，焼土小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
- 4 黒褐色 炭化粒子少量，ローム粒子微量
- 5 褐色 焼土中ブロック少量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 7 黒褐色 ローム中ブロック少量，炭化粒子微量
- 8 褐色 ローム粒子微量



第587図 第4号方形竪穴状遺構実測図

**遺物** 土師器片123点，須恵器片76点が出土している。第588図690の土師器碗は，南西部の覆土中から出土した破片が接合したもので，体部外面に判読不能の墨痕が認められる。691の須恵器高台付皿は，北部の覆土下層から出土している。692の須恵器甕は，中央部の床面から出土した破片が接合したものである。

**所見** 本跡の時期は，出土土器から，9世紀後半と推定される。



第588図 第4号方形竪穴状遺構出土遺物実測図

第4号方形竪穴状遺構出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第588図 690	碗 土師器	A [13.4] B (4.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き，黒色処理。	砂粒・雲母・石英にぶい橙色普通	30% 体部外面墨書「□」
691	高台付皿 須恵器	A 14.0 B 2.6 D 6.4 E 0.6	口縁部は一部欠損。体部は外傾して開き，口縁部にいたる。高台はわずかにハの字状に開く。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，高台貼り付け。	砂粒・雲母・石英 灰色普通	90% P L206
692	甕 須恵器	A [22.4] B (8.5)	体部から口縁部の破片。頸部で屈曲し，口縁部は外反する。口縁端部は上方と外方に突出する。	口縁部，頸部内・外面横ナデ。体部外面縦位の平行叩き。	雲母・石英・黒色粒子 黄灰色普通	10%

### 第5号方形竪穴状遺構（第589図）

**位置** 調査区域の中央部，E 6 b5区。

**規模と平面形** 長軸2.80m，短軸2.76mの隅丸方形である。

**主軸方向** N-9°-W（短軸方向）

**壁** 壁高は25~28cmで，外傾して立ち上がる。

**床** 南東コーナー付近がやや低い。特に踏み固められたところはみられない。地山を平坦に掘り込んで，床面としている。

**覆土** 3層からなる。レンズ状の堆積状況から，自然堆積と考えられる。

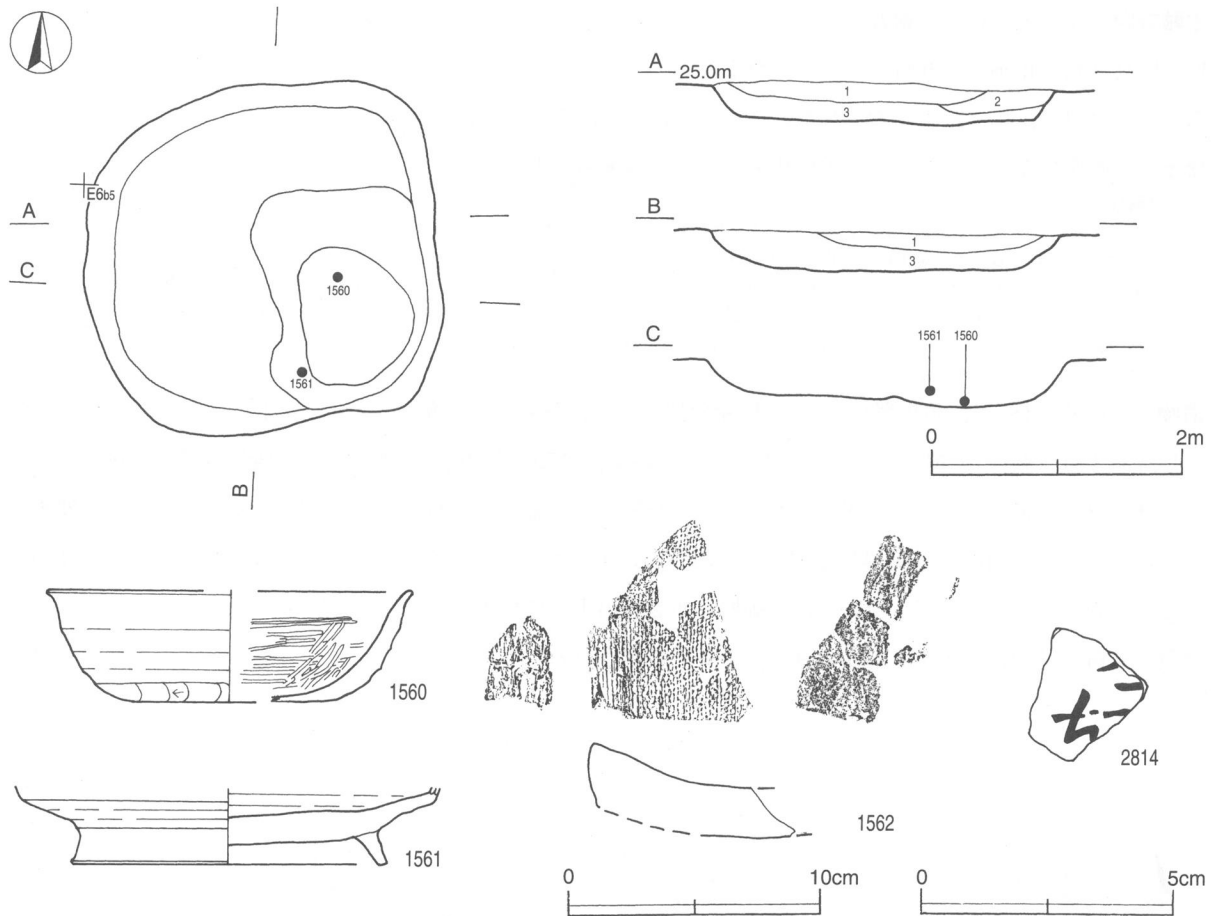
#### 土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量

**遺物** 土師器片191点，須恵器片158点，灰釉陶器片2点，瓦片9点が出土している。遺物の大半は，東側の覆土上層から中層にかけて出土している。このことから，本跡の埋没過程において，遺物が投棄された可能性が考えられる。第589図1560の土師器杯は中央部東寄りの覆土下層から，1561の須恵器盤は南壁寄りの覆土中層から，1562の平瓦は中央部の覆土中層から出土している。なお，2814の須恵器杯は覆土中から出土し，体部外

面正位に「万坏」<sup>カ</sup>の墨書が認められる。

所見 本跡では、壁溝、竈及びピットが確認されなかった。床も特に踏み固められた範囲はみられないことから、居住を目的とした住居とは区別される、堅穴状遺構である。本跡の時期は、出土土器から9世紀後半と推定される。



第589図 第5号方形堅穴状遺構・出土遺物実測図

第5号方形堅穴状遺構出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第589図 1560	坏 土師器	A [13.2] B 4.2 C [6.8]	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部・体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。体部下端手持ちヘラ削り。底部多方向のヘラ削り。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 明赤褐色	20% P L 226 二次焼成
第589図 1561	盤 須恵器	B (3.2) D 12.4 E 1.5	口縁部、高台一部欠損。体部は大きく外方に開く。高台は長く、ハの字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端、底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後ロクロナデ。	粗い、砂粒・雲母・長石・角礫 灰色、普通	80% P L 226
2814	坏 須恵器	B (2.3)	体部の破片。	体部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色、良好	5% 体部外面墨書 正位「万坏」 <sup>カ</sup>

遺物番号	器種	計測値				特徴	備考
		幅(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
1562	平瓦	(8.0)	(8.0)	2.6	(120.1)	凸面ヘラ削り、凹面布目痕。	



**第6号方形竪穴状遺構（第590・591図）**

**位置** 調査区域の中央部，E 6 d3区。

**重複関係** 第433号住居跡を掘り込んでおり，第26号溝，第1044号土坑に掘り込まれている。本跡は第433号住居跡より新しく，第26号溝，第1044号土坑より古い。

**規模と平面形** 長軸3.25m，短軸2.96mの方形である。

**主軸方向** N-8°-W（短軸方向）

**壁** 壁高は40～45cmで，外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で，特に踏み固められたところはない。地山を平坦に掘り込んで，床面としている。

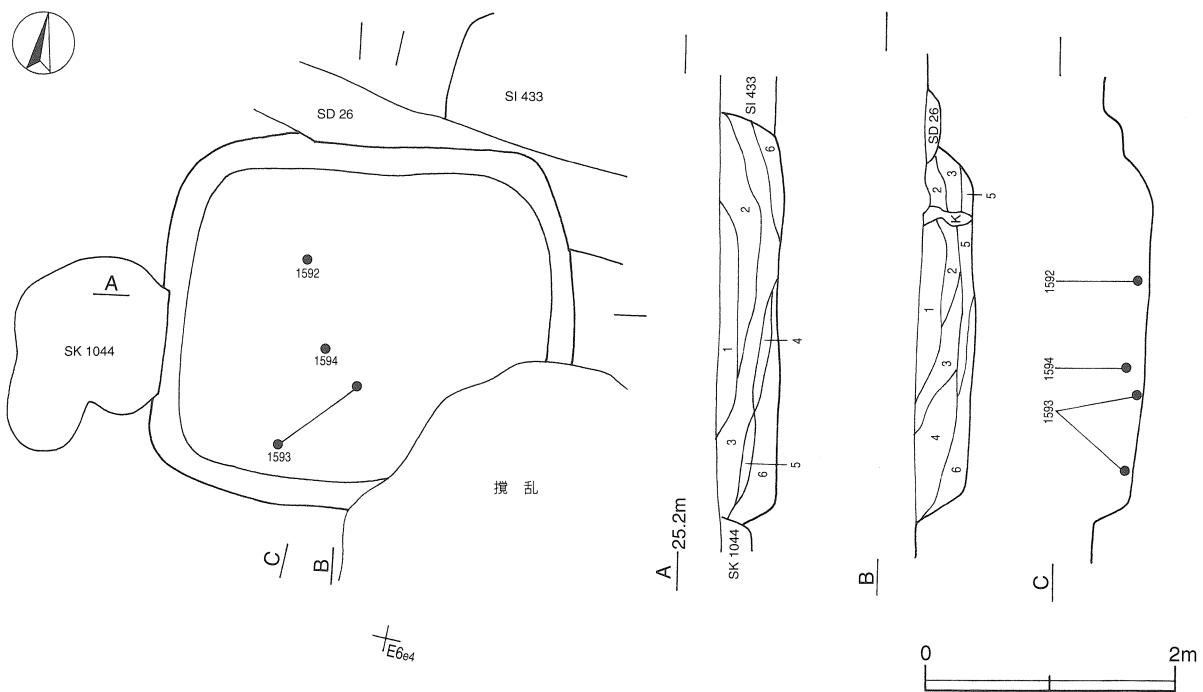
**覆土** 6層からなる。レンズ状の堆積状況から，自然堆積と思われる。

**土層解説**

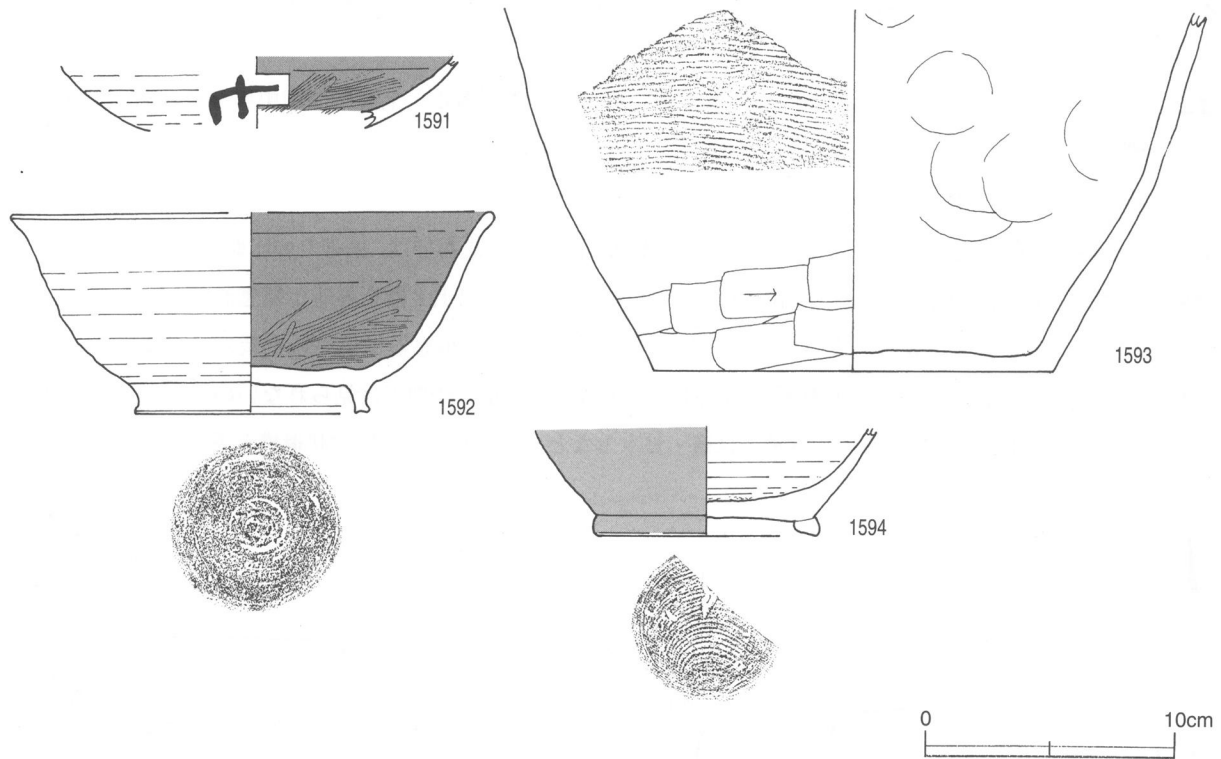
- 1 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
- 6 褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物** 土師器片187点，須恵器片208点，灰釉陶器片3点，鉄器1点（鏃），雲母片岩1点，混入したとみられる黒曜石1点（剥片），縄文土器片2点が出土している。第591図1591の土師器坏は北西部の覆土中層から出土し，体部外面に横位で「七」と墨書されている。1592の土師器高台付椀は中央部北西寄り，1593の須恵器甕は中央部南寄り，1594の灰釉陶器長頸瓶は中央部の，いずれも覆土下層から出土している。なお，墨痕は認められるが，細片のため図示できなかった土師器片が2点出土している。

**所見** 本跡の時期は，出土土器から9世紀中葉と推定される。



第590図 第6号方形竪穴状遺構実測図



第591図 第6号方形竪穴状遺構出土遺物実測図

第6号方形竪穴状遺構出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第591図 1591	坏 土師器	B (2.3)	体部の破片。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き、黒色処理。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 橙色、普通	15% P L 247 体部外面墨書 横位「七」
1592	高台付 碗 土師器	A [19.2] B 8.0 D 9.3 E 1.2	口縁部・体部一部欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。口縁部は外反する。高台はハの字状に開く。	口縁部、体部外面ロクロナデ。体部下端・底部回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き。高台貼り付け後、ロクロナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	55% P L 227
1593	甕 須恵器	B (14.4) C 16.0	底部から体部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面斜位の平行叩き。体部下端横位のヘラ削り。内面ナデ、無文の当て具痕。	砂粒・雲母・長石 灰黄色 普通	20% P L 227
1594	長頸瓶 灰釉陶器	B (4.2) D 8.6 E 0.7	底部から体部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後、高台貼り付け、ロクロナデ。体部外面施釉、刷毛塗り。	砂粒、胎土 灰黄色 灰オリーブ釉 良好	20% P L 227

第7号方形竪穴状遺構 (第592図)

位置 調査区域の北西部, D 4 a0区。

重複関係 第464号住居跡の上部に構築されており, 本跡が新しい。

規模と平面形 南北軸2.40m, 東西軸2.20mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は10cmで, 外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、南寄りが踏み固められている。第464号住居跡と重複している部分の床面は、粘土で貼床されている。

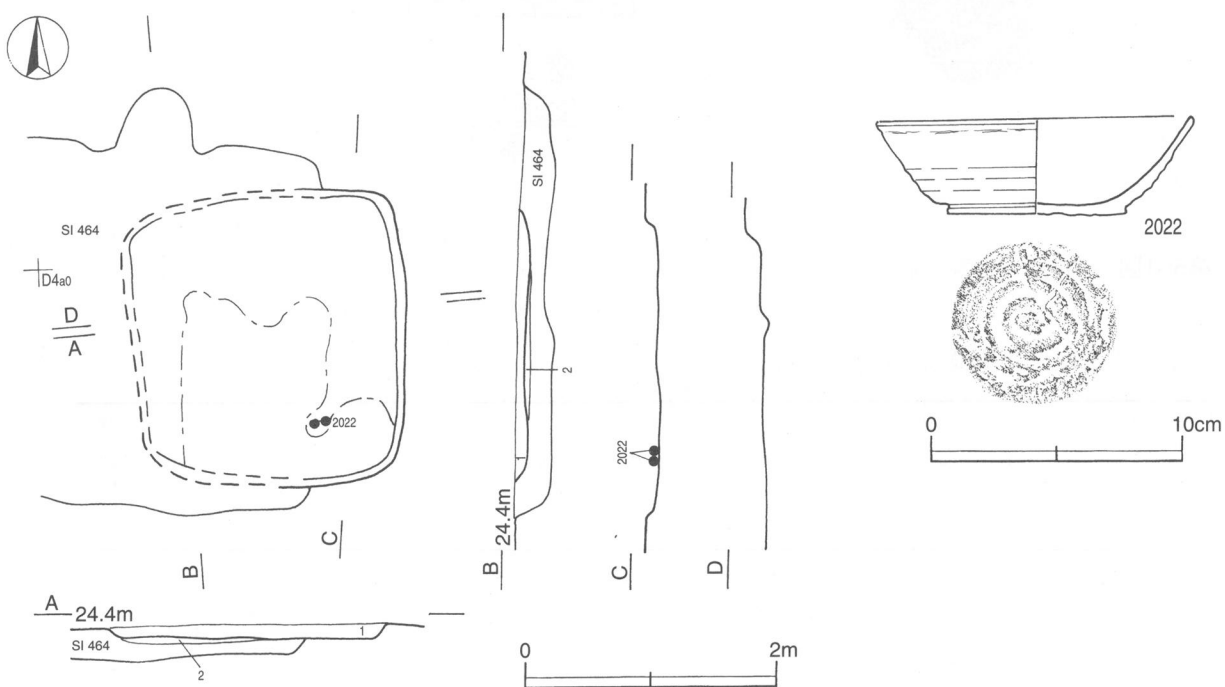
覆土 単一層であるため、人為堆積なのか自然堆積なのかは不明である。土層断面図中第2層は貼床である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック少量，ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 粘土粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量（貼床）

遺物 土師器片21点、須恵器片6点が出土している。第592図2022の須恵器坏は、南寄りの床面から出土している。

所見 本跡は、第464号住居跡の上部に貼床をしてつくられている。出土土器をみると須恵器でもいわゆる土師質須恵器と呼べるような焼成のあまいものが出土している。これらの須恵器は須恵器生産の終末段階のものと思われる。さらに、本跡と第464号住居跡から出土した土器にはあまり時期差は見られないので、本跡の時期は9世紀後葉以降と推定される。また、本跡には竈・ピットなどの痕跡がなく、堅穴状遺構と考えられる。



第592図 第7号方形堅穴状遺構・出土遺物実測図

第7号方形堅穴状遺構出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第592図 2022	坏 須恵器	A 12.6	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。器壁は薄い。雑なヘラ切りのため底部外周に凹凸がある。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。底部雑な回転ヘラ切り。	砂粒・雲母 灰褐色 不良	90%
		B 3.8				
		C 7.2				

(3) 掘立柱建物跡

第14号掘立柱建物跡 (第593図)

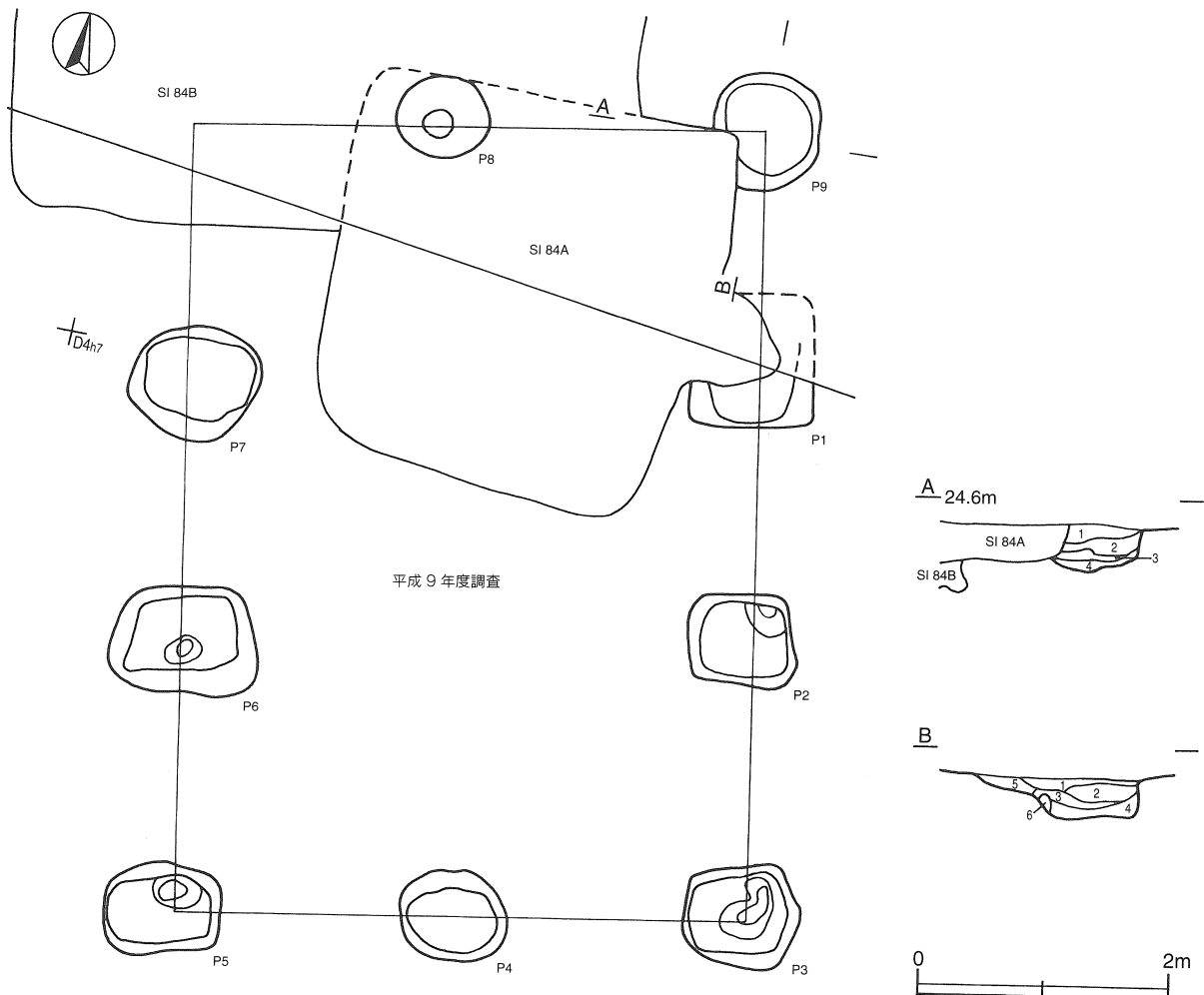
**位置** 調査区域の北西部, D 4 g7・D 4 g8・D 4 h7・D 4 h8区。平成9年度と平成11年度の調査区にまたがって位置していたため, 調査もP 1～P 7を平成9年度に, 残りのP 8・P 9を平成11年度にと, 両年度にわたって実施した。北西3.0mには第15・133・138号掘立柱建物跡等が位置し, 桁行方向を同じくする第137号掘立柱建物跡は, 北へ20.5mのところには位置する。

**重複関係** P 1・P 8・P 9が第84A号住居に掘り込まれている。また, 北西隅の柱穴が第84B号住居に掘り込まれているため検出できなかった。これらのことから, 本跡は第84A・84B号のいずれの住居よりも古い。

**規模** 桁行3間, 梁行2間の側柱建物跡である。桁行6.26m, 梁行4.43mで, 面積は約27.73m<sup>2</sup>である。柱間寸法は桁行2.05～2.15m, 梁行2.10～2.40mである。柱穴は長軸(長径)0.90～1.21m, 短軸(短径)0.51～0.91mの隅丸長方形または楕円形, 深さ0.35～0.65mである。

**桁行方向** N-11°-W

**覆土** 埋土はロームブロック・炭化粒子を含んだ黒褐色土・暗褐色土・褐色土であり, 特に強く叩き締められた状態ではないが互層になっている。柱抜き取り痕は確認できなかった。



第593図 第14号掘立柱建物跡実測図

#### 土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量，ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子中量，ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量

**遺物** 出土していない。

**所見** 本跡の時期は，出土遺物が平成9・11年度調査分を合わせても少量なためとらえにくい。重複している第84A号住居跡が9世紀前葉のなかの新しい段階，第84B号住居が9世紀前葉のなかの古い段階と考えられるので，9世紀前葉の古い段階よりさかのぼる。桁行方向を同じくする第27号掘立柱建物跡が東へ20.0mのところ存在し，規模も一致することから，同時期に機能していた可能性がある。

#### 第15号掘立柱建物跡（第594図）

**位置** 調査区域の北西部，D 4 f4・D 4 f5・D 4 f6・D 4 g4・D 4 g5・D 4 g6・D 4 h5区。平成9年度と平成11年度の調査区にまたがって位置していたため，調査もP 1～P 5を平成9年度に，残りのP 6～P 10を平成11年度にと，両年度にわたって実施した。本跡の北側1.5mには本跡と柱筋を通して第133号掘立柱建物跡が，東側16mには第132号掘立柱建物跡が位置している。

**重複関係** P 8が第138号掘立柱建物のP 4に掘り込まれていることから，本跡の方が古い。

**規模** 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行6.40m，梁行4.46mで，面積は約28.54㎡である。柱間寸法は桁行2.10m，梁行2.20～2.35mである。柱穴はP 7・P 8が一辺0.82mの隅丸方形，深さ0.64m・0.56mで，P 6・P 9・P 10が長軸（長径）1.05～1.08m，短軸（短径）0.80～0.95mの隅丸長方形または楕円形，深さ0.58～0.69mで，大形である。

**桁行方向** N-7°-W

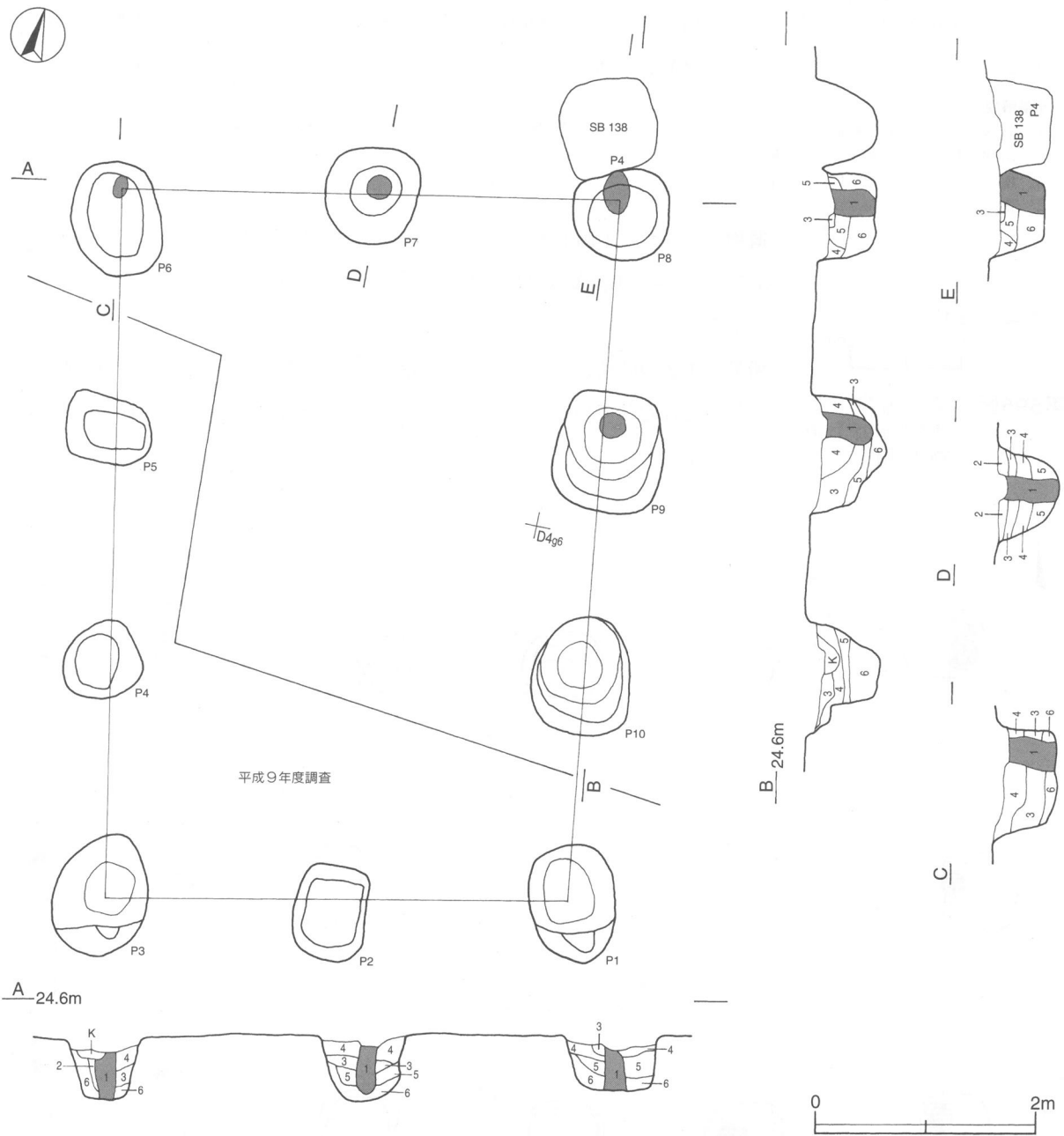
**覆土** 柱抜き取り痕は土層断面図中第1層が相当し，締まりがない。柱抜き取り痕は，P 7～P 9については遺構確認面から確認でき，土層断面でも明瞭に確認できた。第2～6層は埋土である。埋土はロームブロック・炭化粒子を含んだ暗褐色土で互層になっている。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量

**遺物** 出土していない。

**所見** 本跡の時期は，出土遺物が平成9・11年度調査分を合わせても少量なためとらえにくい。本跡は，東へ30mのところに位置する第27号掘立柱建物跡と，桁行方向，規模ともに同様であることから，一連の施設としていた可能性がある。第27号掘立柱建物跡の構築時期は8世紀前葉と考えており，本跡も8世紀前葉と推定される。



第594図 第15号掘立柱建物跡実測図

第52号掘立柱建物跡 (第595・596図)

**位置** 調査区域の南東部，G 8 f2・G 8 f3・G 8 f4・G 8 g2・G 8 g3・G 8 g4区。平成10年度と平成11年度の調査区にまたがって位置していたため，調査もP 1～P 6を平成10年度に，残りのP 7～P 10を平成11年度にと，両年度にわたって実施した。

**規模** 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.50m，梁行4.25mで，面積は約23.38㎡である。柱間寸法は桁行1.70～1.90m，梁行2.00～2.20mである。柱穴は長軸0.62～0.75m，短軸0.52～0.65mの隅丸長方形，深さ0.40～0.50mである。

**桁行方向** N-92°-E

**覆土** 土層断面図中，第1層は柱抜き取り痕に相当し，粘性・しまり共に大変弱いものである。P 7～P 9に

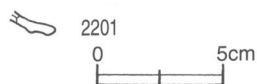
については、遺構確認面から抜き取り痕が確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。第2～7層は埋土である。埋土はロームブロック含んだ暗褐色土・褐色土であり、特に強く叩き締められてはいない。

**土層解説**

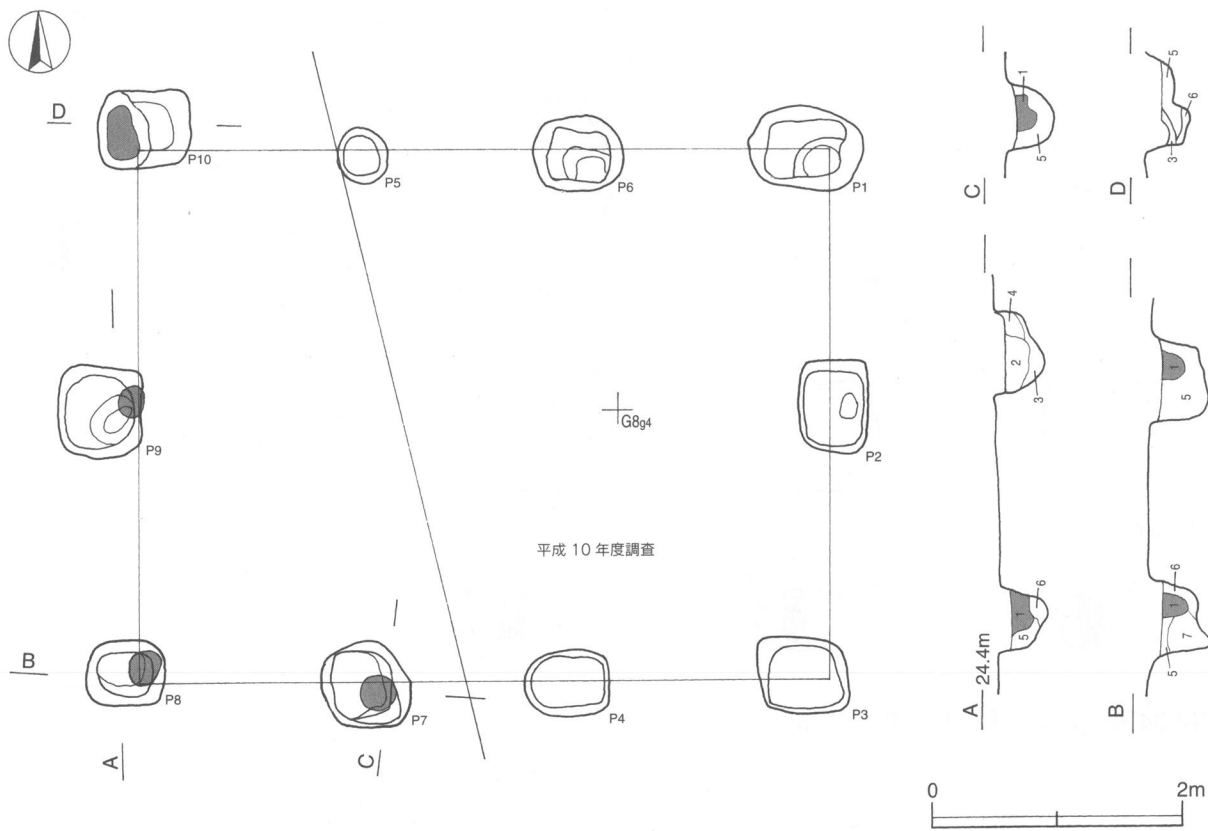
- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子微量     | 5 褐色 ローム小ブロック微量  |
| 2 暗褐色 ローム小ブロック少量 | 6 褐色 ローム大ブロック多量  |
| 3 褐色 ローム中ブロック中量  | 7 暗褐色 ローム中ブロック少量 |
| 4 褐色 ローム中ブロック少量  |                  |

**遺物** P9から土師器甕片3点、P10から須恵器蓋片1点が出土している。第595図2201の須恵器蓋はP10の埋土から出土しており、かえりが残っているものである。

**所見** 本跡の時期については、『第159集』では第54号掘立柱建物跡の関連から9世紀と推定しているが、今回報告分の出土土器などから、8世紀前葉以降に変更する。



**第595図** 第52号掘立柱建物跡出土遺物実測図



**第596図** 第52号掘立柱建物跡実測図

**第52号掘立柱建物跡出土遺物観察表**

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第595図 2201	蓋 須恵器	B (0.9)	口縁部の破片。口縁端部はやや長く伸びる。口縁部内面には短いかえりをもつ。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	5%

### 第54号掘立柱建物跡（第597図）

**位置** 調査区域の南東部，G 8 h2・G 8 h3・G 8 h4・G 8 i2・G 8 i3・G 8 i4区。平成10年度と平成11年度の調査区にまたがって位置していたため，調査もP 1・P 2を平成10年度に，残りのP 3～P 10を平成11年度にと，両年度にわたって実施した。本跡の南には，東梁行の柱筋と東桁行の柱筋が一直線に揃う第92号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** P 4が第312号住居に掘り込まれていることから，本跡の方が古い。

**規模** 桁行3間，梁行2間の総柱建物跡である。桁行7.65m，梁行4.90mで，面積は約37.49m<sup>2</sup>である。柱間寸法は，桁行2.40～2.80m，梁行2.40～2.50mである。『第159集』ではP 1からP 3を第54号掘立柱建物跡として報告しているが，P 3としていたものは今回の調査で，第92号掘立柱建物跡の柱穴であることが判明したので，これを第92号掘立柱建物跡のP 1に変更する。今回の報告はP 3からである。なお，北東隅の柱穴は確認することができなかった。P 3・P 6・P 8～P 10は長軸0.95～1.20m，短軸0.75～0.90mの隅丸長方形，P 5・P 7は一辺が0.80mの隅丸方形，深さ0.45m～0.75mである。

**桁行方向** N-89°-E

**覆土** 土層断面図中，第1層は柱抜き取り痕に相当し，粘性・締まりが弱い。柱抜き取り痕は，P 3・P 6～P 9については遺構確認面から確認でき，土層断面でも明瞭に確認できた。第2～7層は埋土である。埋土は，ロームブロックを含んだ暗褐色土・褐色土で，互層になっており，土層断面図中第3層は特に強く叩き締められている。

#### 土層解説

- |       |            |       |                     |
|-------|------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量    | 5 褐色  | ローム小ブロック少量          |
| 2 褐色  | ローム中ブロック中量 | 6 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量    |
| 3 暗褐色 | ローム中ブロック中量 | 7 褐色  | ローム中ブロック・ローム小ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量    |       |                     |

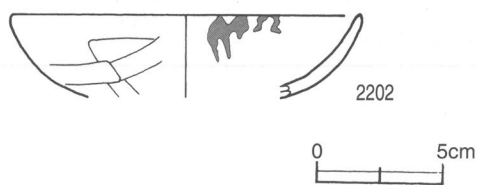
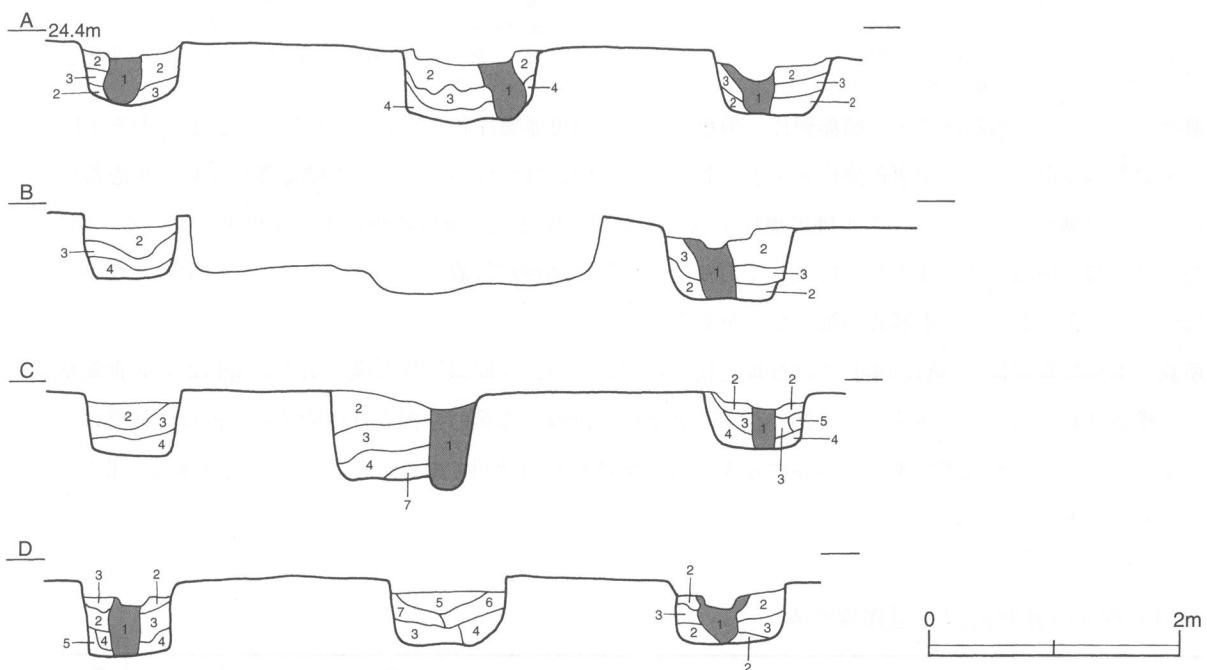
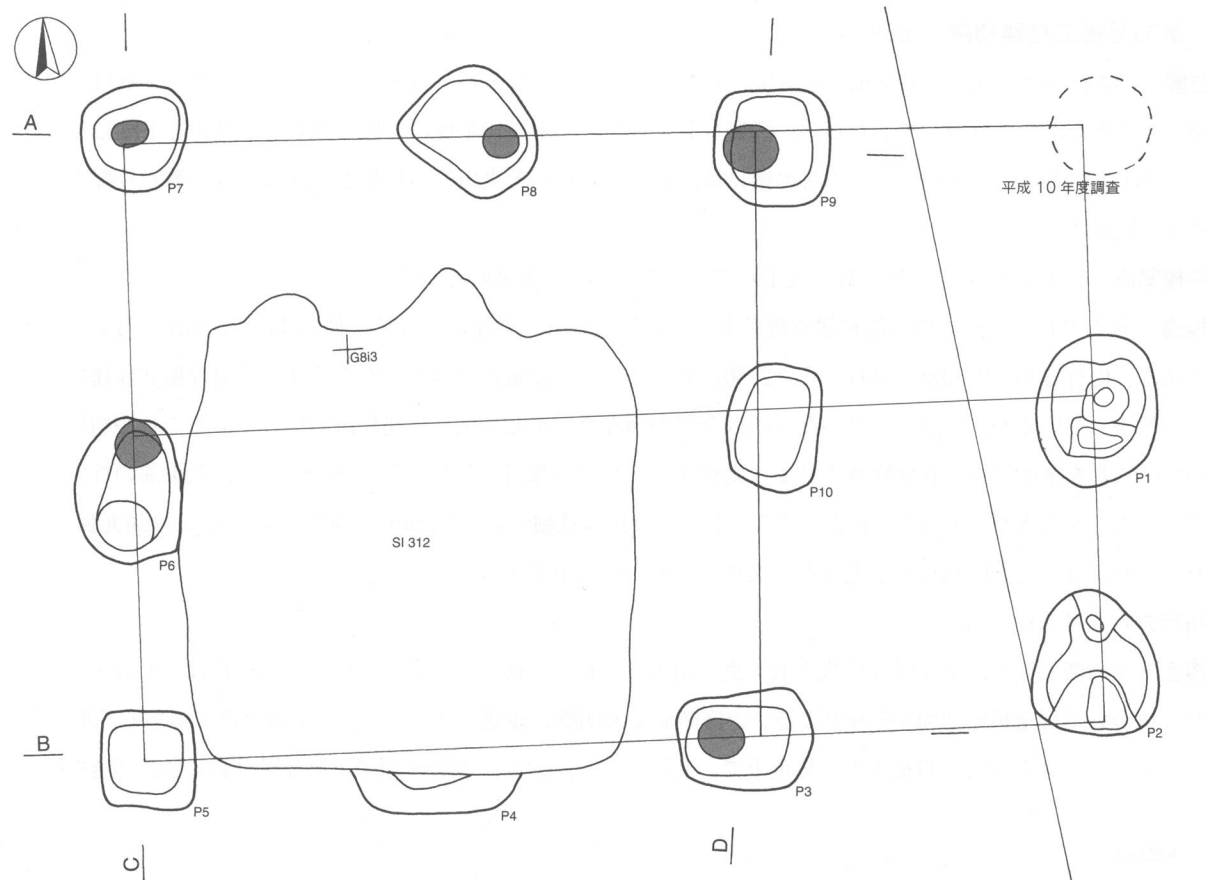
**遺物** P 4から土師器坏片・土師器甕片・須恵器坏片・須恵器甕片各1点・雲母片岩6点，P 5から土師器甕片・須恵器高台付坏片・須恵器甕片各1点，P 7から土師器高台付坏片1点・土師器甕片4点・須恵器坏片1点・須恵器甕片1点，P 9から土師器甕片1点・須恵器坏片2点・須恵器甕片1点が出土している。第597図2202の土師器坏はP 4の埋土から出土しており，口縁部に油煙が付着している。この他に図示できなかった土器には，かえりが付く須恵器蓋の細片などがある。

**所見** 本跡の時期は，『第159集』では9世紀代としているが，今回報告分の埋土出土の遺物から8世紀前葉以後に構築されたものと変更する。本跡の東梁行と南側に位置する第92号掘立柱建物跡の東桁行の柱筋は一直線に揃い，逆L字状の配置であり，後述するように構築時期も同時期であることから，一連の機能を果たしていた可能性がある。

### 第54号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第597図 2202	坏 土師器	A [13.8] B (3.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部にいたる。口縁端部は細くすぼむ。	口縁部・体部外面口クロナデ。体部下 半手持ちヘラ削り。	砂粒・赤色粒子 橙色 普通	5% 口縁部油煙付 着





第597図 第54号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

**第63号掘立柱建物跡 (第598図)**

**位置** 調査区域の中央部、E 7 d7・E 7 d8・E 7 e7・E 7 e8・E 7 f7・E 7 f8区。平成10年度と平成11年度の調査区にまたがって位置していたため、調査もP 1～P 6を平成10年度に、残りのP 7～P 9を平成11年度にと、両年度にわたって実施した。東8.0mには、本跡と桁行方向を同じくする第64号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** 第396号住居跡、第1857号土坑を掘り込んでおり、本跡が新しい。また第605・609・610号土坑・第49号溝に掘り込まれており、本跡が古い。

**規模** 桁行2間、梁行2間の総柱建物跡である。桁行4.34m、梁行3.92mで、面積は約17.01m<sup>2</sup>である。柱間寸法は桁行2.13m・2.20m、梁行1.90m・2.03mである。柱穴はP 3が長軸0.62m、短軸0.45mの隅丸長方形、深さ0.35mである。その他の柱穴は径0.65～0.80mの不整円形、深さ0.25～0.40mである。

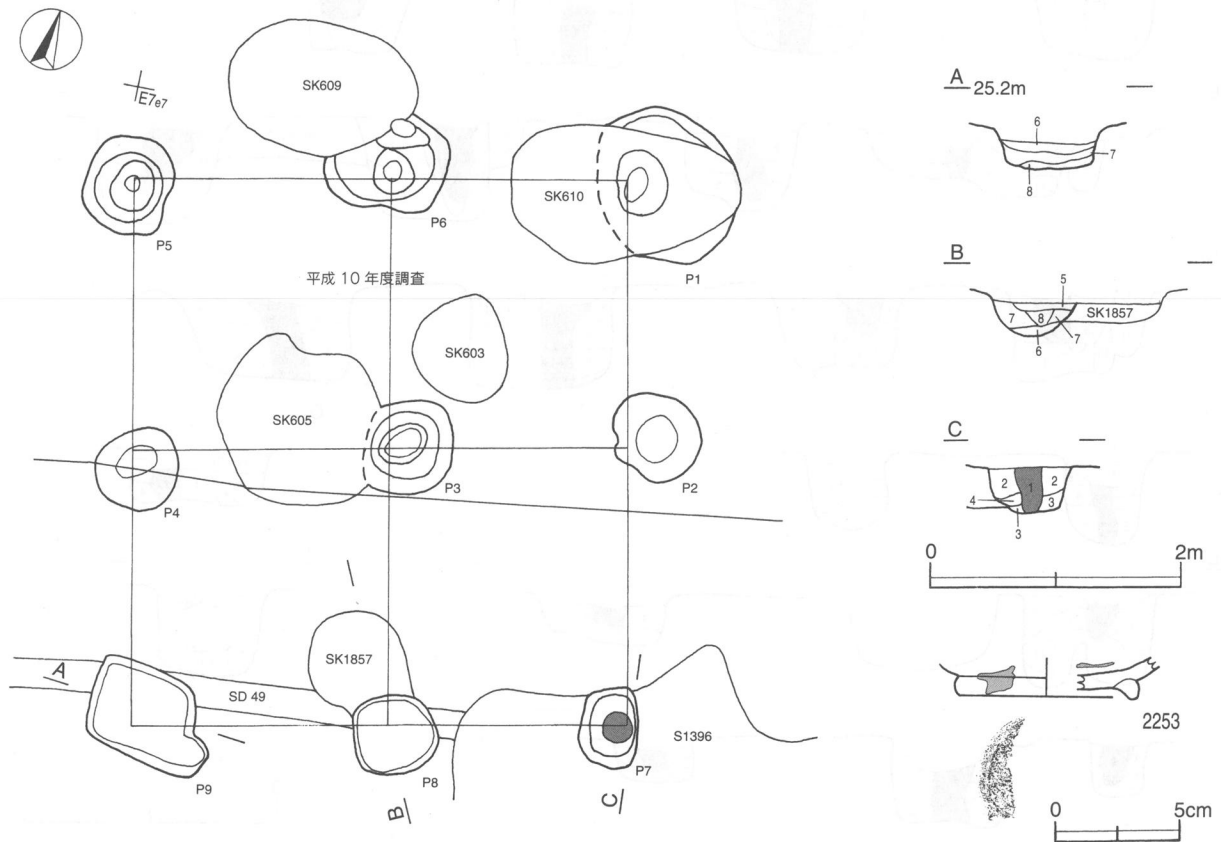
**桁行方向** N-11°-W

**覆土** 土層断面図中、第1層は柱抜き取り痕に相当する。確認できたのはP 7だけである。第2～8層は埋土である。ロームブロックを含んだ暗褐色土・褐色土で、特に強く叩き締められた状態ではないが互層になっている。

**土層解説**

- |        |                  |       |            |
|--------|------------------|-------|------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子中量          | 5 褐色  | ローム粒子中量    |
| 2 暗褐色  | ローム粒子少量          | 6 褐色  | ローム小ブロック中量 |
| 3 暗褐色  | ローム中ブロック・ローム粒子少量 | 7 暗褐色 | ローム中ブロック少量 |
| 4 暗褐色  | 焼土小ブロック微量        | 8 暗褐色 | ローム中ブロック中量 |

**遺物** P 7から土師器甕片1点、P 9から土師器坏片1点・土師器甕片8点・須恵器坏片1点・須恵器甕片3点・灰釉陶器椀片1点が出土している。第598図2253の灰釉陶器皿は、P 9から出土しており、底部は糸切り痕を残し、三日月高台であることから、折戸53号窯式以降のものと思われる。胎土は砂質分が多く、三河・遠江



第598図 第63号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

系かと思われる。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物が平成10・11年度共に少量なためとらえにくい。重複している第1857号土坑跡の時期が9世紀後葉から10世紀代と考えられるので、それ以降の時期となる。出土した灰釉陶器が10世紀代のものと思われるので、本跡の時期も10世紀代と考えられる。

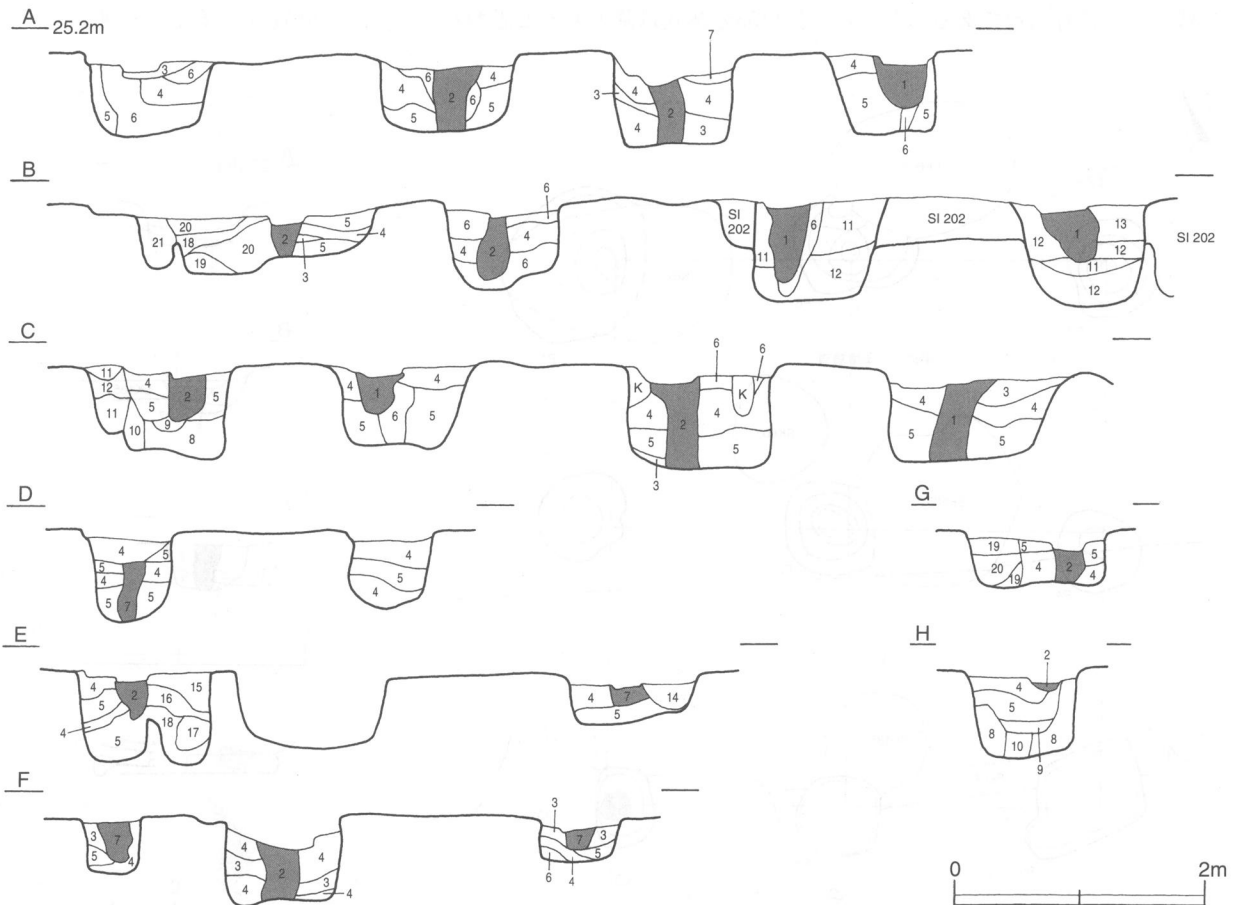
第63号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第598図 2253	皿 灰釉陶器	B ( 1.2) D [ 7.0] E 0.8	高台部の破片。高台は三日月高台。	底部内面重ね焼き痕に釉附着。高台外面に釉垂れあり。底部回転糸切り痕。高台貼り付け後、ナデ。	砂質分が多い。 胎土 灰色 普通	10% 三河・遠江系カ。

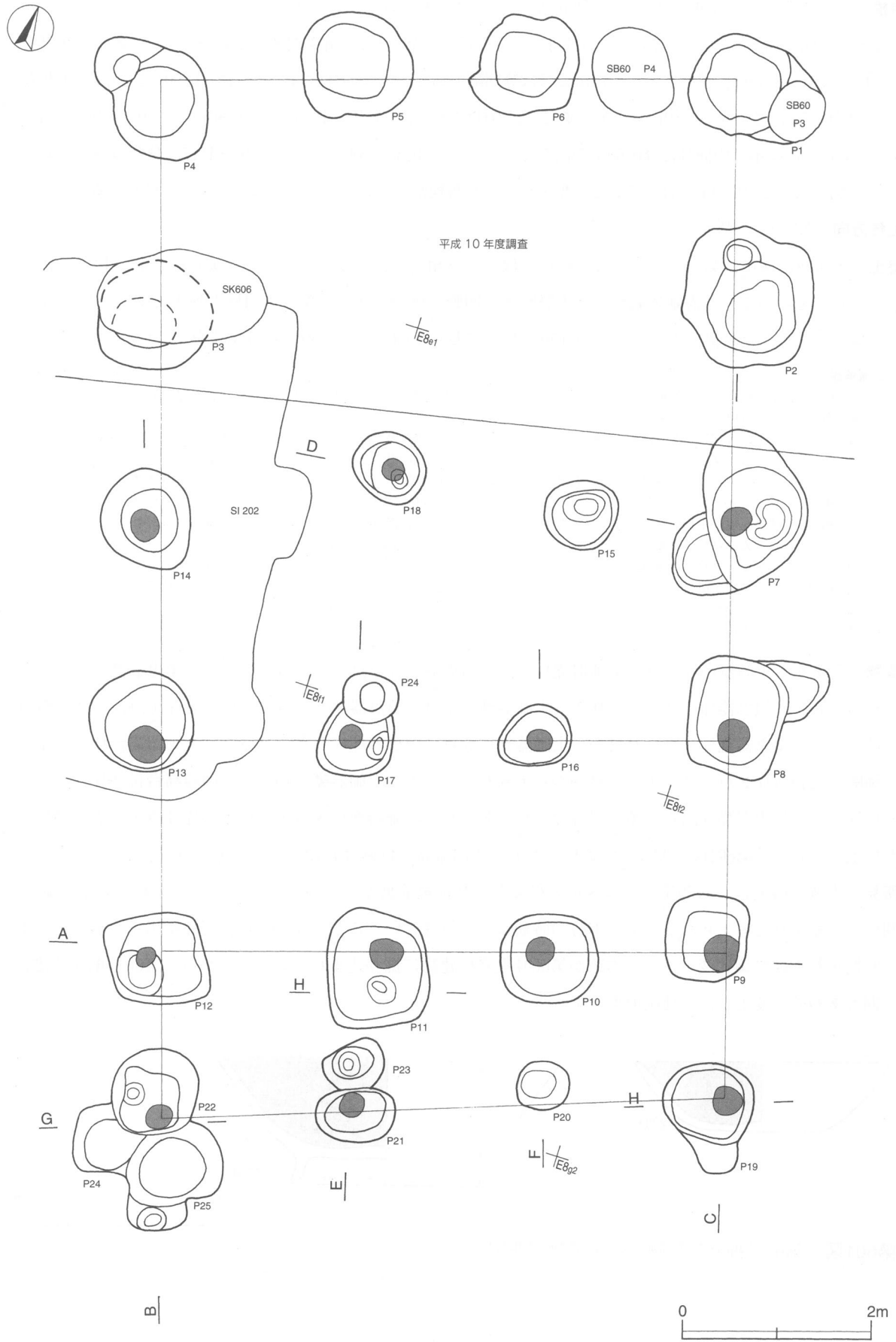
**第64号掘立柱建物跡 (第599~601図)**

**位置** 調査区域の中央部，E 7 d0・E 7 e0・E 7 f0・E 8 d1・E 8 e1・E 8 f1・E 8 f2，E 8 g1区。平成10年度と平成11年度の調査区にまたがって位置していたため，調査もP 1～P 6を平成10年度に，残りのP 7～P 25を平成11年度にと，両年度にわたって実施した。西8.0mには，本跡と桁行方向を同じくする第63号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** 第202号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。また，第60号掘立柱建物跡・第606号土坑に掘り込まれており，本跡が古い。



第599図 第64号掘立柱建物跡実測図 (1)



第600図 第64号掘立柱建物跡実測図 (2)

**規模** 桁行4間，梁行3間の身舎の南梁側に庇が付く建物跡である。桁行は身舎だけで9.33m，1.58mの庇も含めると10.91m，梁行6.30mである。面積は身舎部分だけで約58.78m<sup>2</sup>，庇も含めると約68.73m<sup>2</sup>である。柱間寸法は，桁行2.24～2.40m，梁行2.00～2.10mでほぼ等間隔である。身舎の柱穴は一辺（径）0.90～1.25mの隅丸方形または円形で，深さ0.60～0.80mで大形である。庇の柱穴は両端のP19・P20が一辺0.80m・0.90mの隅丸方形で，深さ0.45m・0.65m，中間柱は径0.60mの円形で，深さは0.50mと小形である。P16・P17は身舎の内部に位置する一辺0.75m，深さ0.40mの柱穴である。他の柱穴より規模が小さいことや，位置から床束と思われる。

**主軸方向** N-16°-W

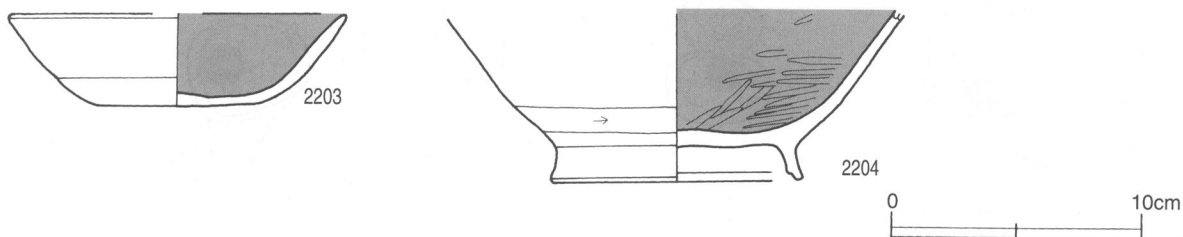
**覆土** 土層断面図中，第1・2・7層が柱抜き取り痕に相当し，しまりが弱い。柱抜き取り痕はP15・P20・P23～P25を除いて，遺構確認面からと土層断面で明瞭に確認できた。第3～21層が埋土である。埋土はロームブロックを含んだ暗褐色土・褐色土が互層になっており，強く叩き締められ版築状を呈している。

**土層解説**

1 暗褐色	粘土中ブロック多量	13 褐色	ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量，焼土小ブロック微量
2 暗褐色	ローム中ブロック少量	14 暗褐色	ローム中ブロック多量，ローム粒子中量
3 褐色	ローム大ブロック少量	15 暗褐色	ローム小ブロック中量
4 褐色	ローム中ブロック中量	16 褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
5 褐色	ローム中ブロック多量，ローム大ブロック中量	17 極暗褐色	ローム小ブロック少量
6 暗褐色	ローム大ブロック中量	18 暗褐色	ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
7 灰褐色	黒色土粒子中量，ローム小ブロック少量	19 極暗褐色	ローム小ブロック中量
8 褐色	ローム中ブロック多量	20 褐色	ローム小ブロック中量
9 褐色	ローム大ブロック多量	21 暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子中量
10 暗褐色	ローム粒子少量		
11 暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック中量		
12 暗褐色	ローム中ブロック多量		

**遺物** P7から土師器坏片2点・土師器甕片3点・須恵器坏片3点・須恵器蓋片1点・須恵器甕片1点・鉄滓1点，P8から須恵器坏片2点，P9から土師器甕片1点，須恵器坏片2点，須恵器甕片1点，P10から須恵器坏片2点・須恵器蓋片3点，P11から土師器甕片6点・須恵器坏片5点，P18から土師器高台付坏片1点・灰釉陶器長頸瓶片2点・鉄滓1点，P19から土師器坏片21点・土師器甕片19点・土師器高台付坏片5点・須恵器坏片7点・須恵器甕片24点・須恵器蓋片2点，P22から土師器甕片8点・須恵器坏片3点・須恵器甕片4点が出土している。第601図2203の土師器坏，2204の土師器高台付碗はP19から出土している。

**所見** 本跡の時期は、『159集』では8世紀後葉から9世紀前葉としている。重複している第202号住居跡の時期は9世紀中葉と考えられるので，本跡の時期はそれ以降ということになり，重複関係や出土土器から，本跡の時期を9世紀後葉に変更する。本跡が第60号掘立柱建物に掘り込まれていたことから，第60号掘立柱建物の時期もあわせて変更し，10世紀前葉とする。



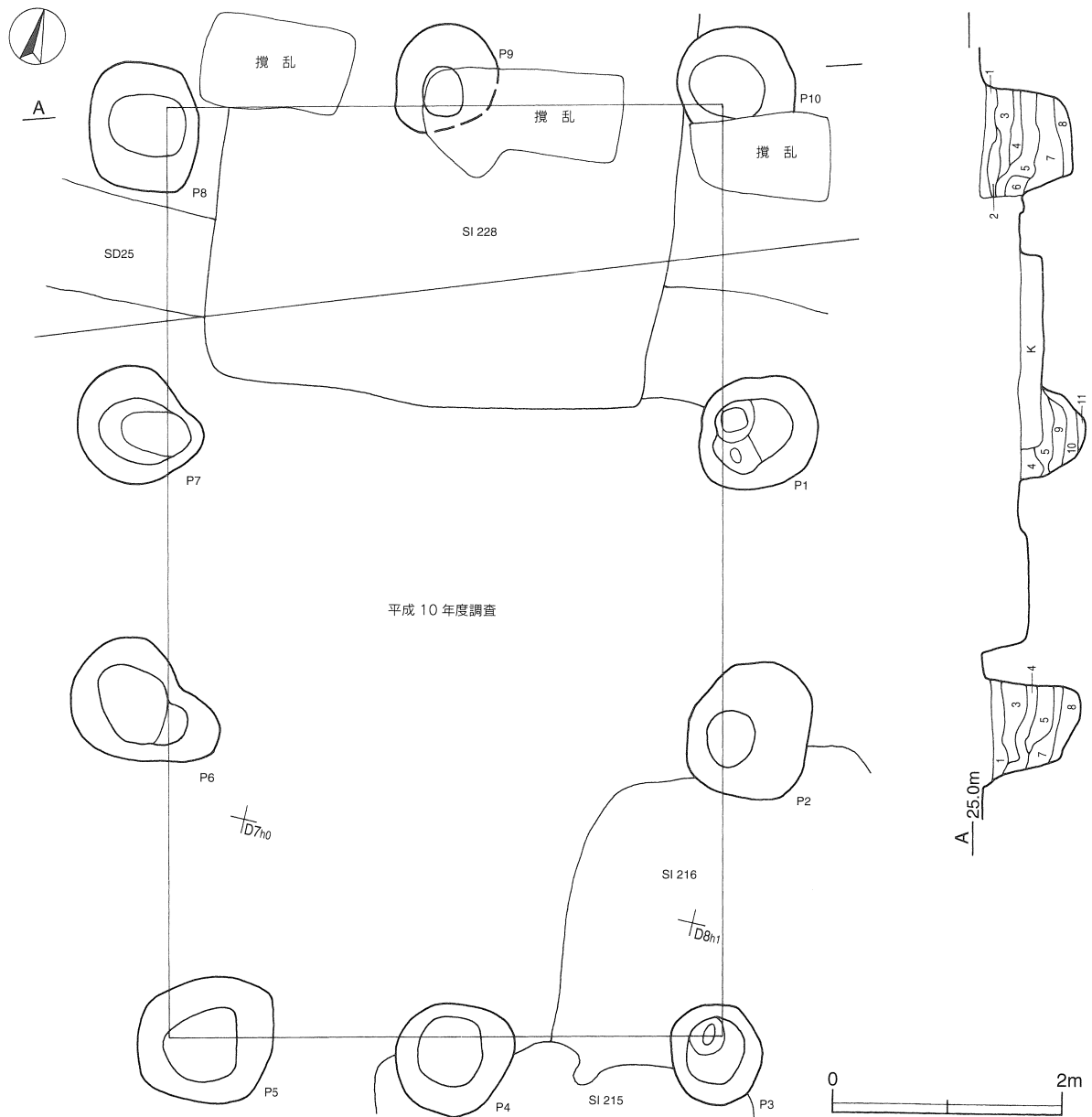
第601図 第64号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第64号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第601図 2203	坏 土師器	A [13.2] B 3.8 C 6.4	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端・底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。	精良、砂粒・雲母にぶい褐色普通	70% P L241
2204	高台付碗 土師器	B (6.8) D 1.5 E [9.8]	底部から体部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。高台はハの字状に開く。接地面内面は内削ぎ状。	体部外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石にぶい褐色普通	30% P L241

第80号掘立柱建物跡 (第602・603図)

位置 調査区域の中央部，D 7 f9・D 7 f0・D 7 g9・D 7 g0・D 7 h0・D 8 h1区。平成10年度と平成11年度の調査区にまたがって位置していたため，調査もP 1～P 7を平成10年度に，残りのP 8～P 10を平成11年度にと，両年度にわたって実施した。



第602図 第80号掘立柱建物跡実測図

**重複関係** 第215・216・228号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。また、第25号溝に掘り込まれており、本跡が古い。

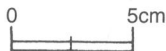
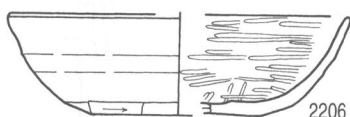
**規模** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行8.12m、梁行4.80mで、面積は38.98㎡である。柱間寸法は、桁行2.70m、梁行2.40mで等間隔である。柱穴は長径（長軸）0.90～1.24m、短径（短軸）0.85～1.05mの楕円形または隅丸長方形で、深さ0.80～0.85mである。

**桁行方向** N-13°-W

**覆土** 埋土はロームブロックを含んだ暗褐色土・褐色土・極暗褐色土が互層になっている。柱抜き取り痕は確認することができなかった。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、ローム大ブロック微量
- 2 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム大ブロック微量
- 5 褐色 ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量
- 6 黒褐色 ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム大ブロック微量
- 8 暗褐色 ローム中ブロック少量
- 9 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 10 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック微量
- 11 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量



**遺物** P 8 から土師器坏片 5 点・須恵器坏片 1 点、P 9 から土師器甕片 3 点・須恵器坏片 4 点・須恵器甕片 6 点・須恵器蓋片 1 点、P 10 から土師器甕片 4 点・須恵器坏片 9 点・須恵器甕片 9 点・須恵器甗片 1 点が出土している。第603図2206の土師器坏はP 8 から出土している。

**所見** 本跡は、9世紀後葉と推定される第215号住居跡を掘り込んでいることから、10世紀前葉以降の時期のものである。出土土器からは第215号住居跡とは時期差はあまりないものと思われ、10世紀前葉と考えられる。本跡の東には、軸方向がほぼ同じな第226号住居跡があり、同時期に機能していたものと思われる。

第603図 第80号掘立柱建物跡出土遺物実測図

**第80号掘立柱建物跡出土遺物観察表**

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第603図 2206	坏 土師器	A [3.4] B 4.0 C [6.6]	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部・体部外面ロクロナデ。体部下端へら削り。内面へら磨き。底部外周回転へら削りで、中央部に回転糸切り痕を残す。	砂粒・雲母 におい褐色 普通	30% PL241

**第81号掘立柱建物跡（第604図）**

**位置** 調査区の中央部、D 6 i2・D 6 i3・D 6 j2・D 6 j3区。南1.5mには第82号掘立柱建物跡が、北4.5mには第22・23号掘立柱建物跡が位置する。

**規模** 桁行2間、梁行1間の側柱建物跡である。桁行4.06m、梁行4.34mで、面積約17.62㎡である。柱間寸法は、桁行2.05～2.10mである。柱穴は径0.60～0.75mの円形で、深さが0.70～0.80mと深いものと、0.40mの浅いものがある。

**桁行方向** N-5°-W

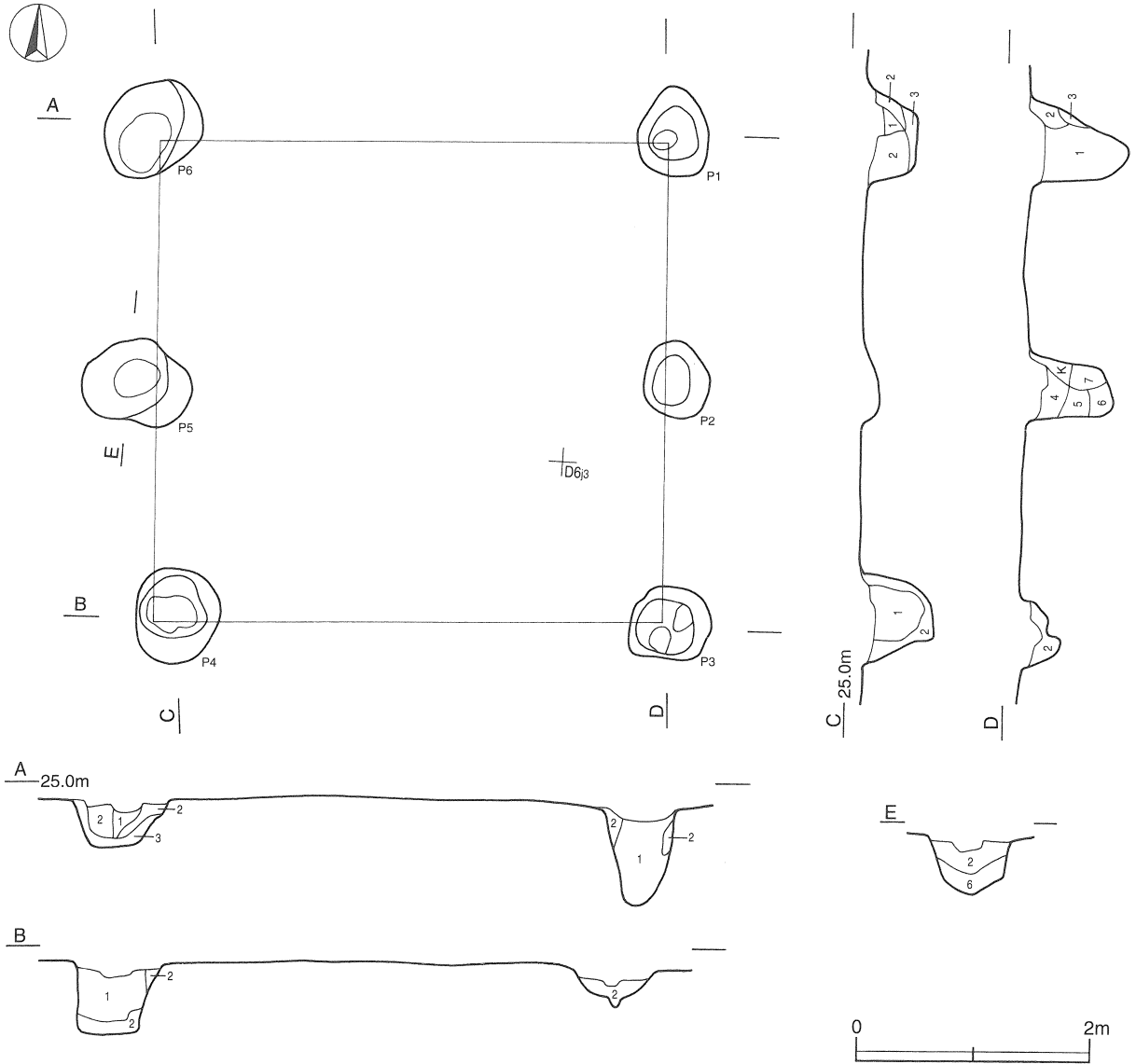
**覆土** すべて柱が抜き取られた後の覆土と思われる。覆土はロームブロックを含む暗褐色土・褐色土であり、しまりはほとんどない。

**土層解説**

- |       |                     |       |                  |
|-------|---------------------|-------|------------------|
| 1 褐色  | ローム中ブロック・ローム小ブロック中量 | 5 褐色  | ローム中ブロック多量       |
| 2 褐色  | ローム小ブロック少量          | 6 暗褐色 | ローム大ブロック・ローム粒子中量 |
| 3 褐色  | ローム大ブロック中量          | 7 暗褐色 | ローム粒子中量          |
| 4 暗褐色 | ローム中ブロック中量          |       |                  |

**遺物** 出土していない。

**所見** 本跡の南1mに位置する第82号掘立柱建物跡と桁行方向がほぼ一致し、桁行の柱筋が一直線に揃う。また、北4mに位置する第23号掘立柱建物跡とも、東桁行の柱筋が1直線に揃うことから、これらは同時期に機能していた可能性がある。



**第604図** 第81号掘立柱建物跡実測図

**第82号掘立柱建物跡** (第605図)

**位置** 調査区の中央部、D6j2・D6j3・E6a2・E6a3・E6b2・E6b3区。本跡の北1.5mには第81号掘立柱建物跡が、北5.5mには第22・23号掘立柱建物跡が位置する。

**規模** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.38m、梁行4.10mで、面積約22.06m<sup>2</sup>である。柱間寸法は、



桁行1.75~1.80m, 梁行2.00~2.10mである。柱穴は長径0.70~0.80m, 短径0.55~0.65mの楕円形で, 深さ0.65~0.85mである。

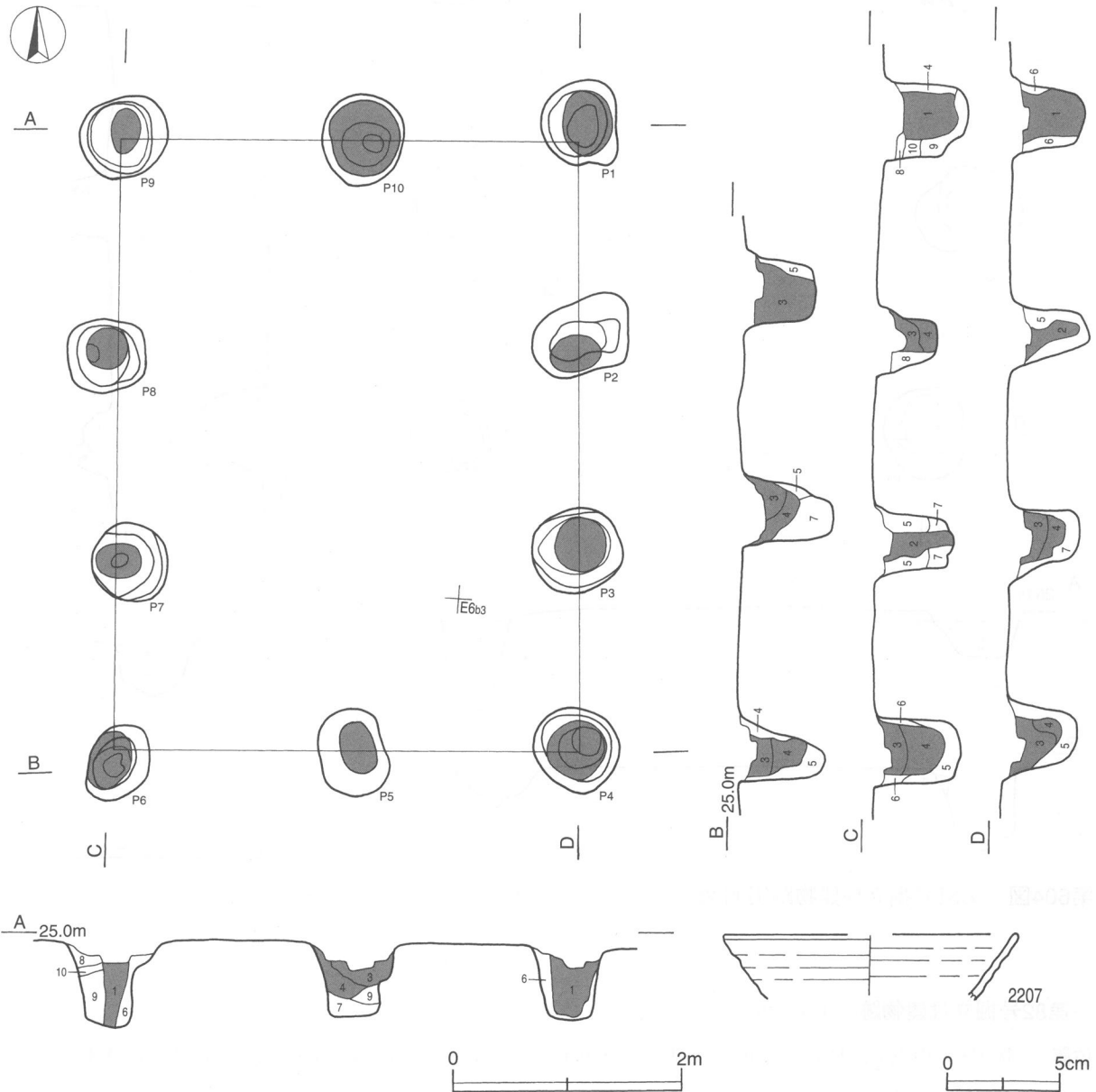
桁行方向 N-3°-W

覆土 柱抜き取り痕はすべての柱穴で確認できた。土層断面図中, 第1~4層が相当し, しまりが弱い。第5~10層が埋土である。埋土はロームブロックを主体とする暗褐色土・褐色土である。

土層解説

- |       |            |       |            |
|-------|------------|-------|------------|
| 1 褐色  | ローム中ブロック中量 | 6 褐色  | ローム大ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム中ブロック少量 | 7 褐色  | ローム大ブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック微量 | 8 褐色  | ローム中ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック少量 | 9 褐色  | ローム粒子少量    |
| 5 暗褐色 | ローム大ブロック少量 | 10 褐色 | ローム大ブロック多量 |

遺物 P1から須恵器甕片2点・須恵器坏片1点, P3から須恵器甕片1点, P4から須恵器甕片1点, P9から土師器甕片1点・須恵器甕片2点, P10から土師器甕片・須恵器坏片各1点が出土している。第605図



第605図 第82号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

2207の須恵器坏はP10から出土している。

**所見** 本跡の北1.0mに位置する第81号掘立柱建物跡と桁行方向がほぼ一致し、桁行の柱筋が一直線に揃う。また、北5mに位置する第23号掘立柱建物跡とも東桁行の柱筋が一直線に揃うことから、これらは同時期に機能していた可能性がある。出土土器からこれらの建物は8世紀後葉には機能していたものと思われる。

### 第82号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第605図 2207	坏 須恵器	A [12.9] B (2.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	10%

### 第84号掘立柱建物跡（第606・607図）

**位置** 調査区域の南部，F 6 h0・F 7 h1・F 7 h2・F 6 i0・F 7 i1・F 7 i2区。本跡の南2.0mには第86～88号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** P12・P13・P14が第335号住居跡を掘り込んでいることから、本跡の方が新しい。

**規模** 桁行4間，梁行3間の側柱建物跡である。桁行8.20m，梁行5.20mで，面積は約42.64m<sup>2</sup>である。柱間寸法は，桁行1.94～2.16m，梁行1.70～1.80mである。P1～P6・P8～P11・P13の柱穴は一辺0.80～1.04mの隅丸方形，深さ0.39～1.10mである。P7・P12長径1.28m・1.08mの不定形，深さ0.61m・0.86mである。

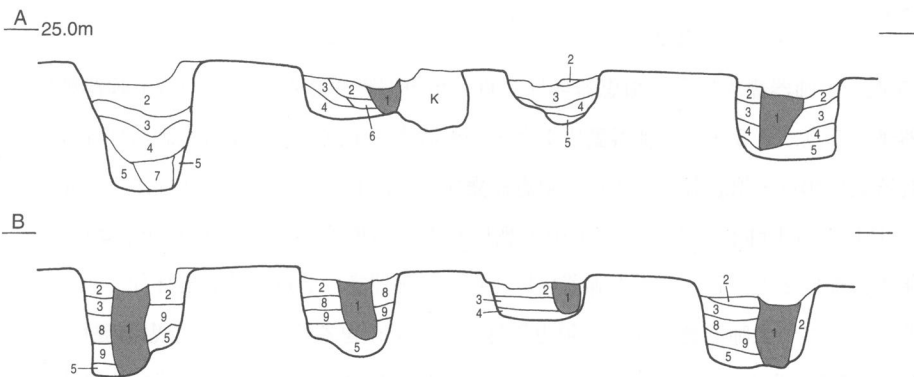
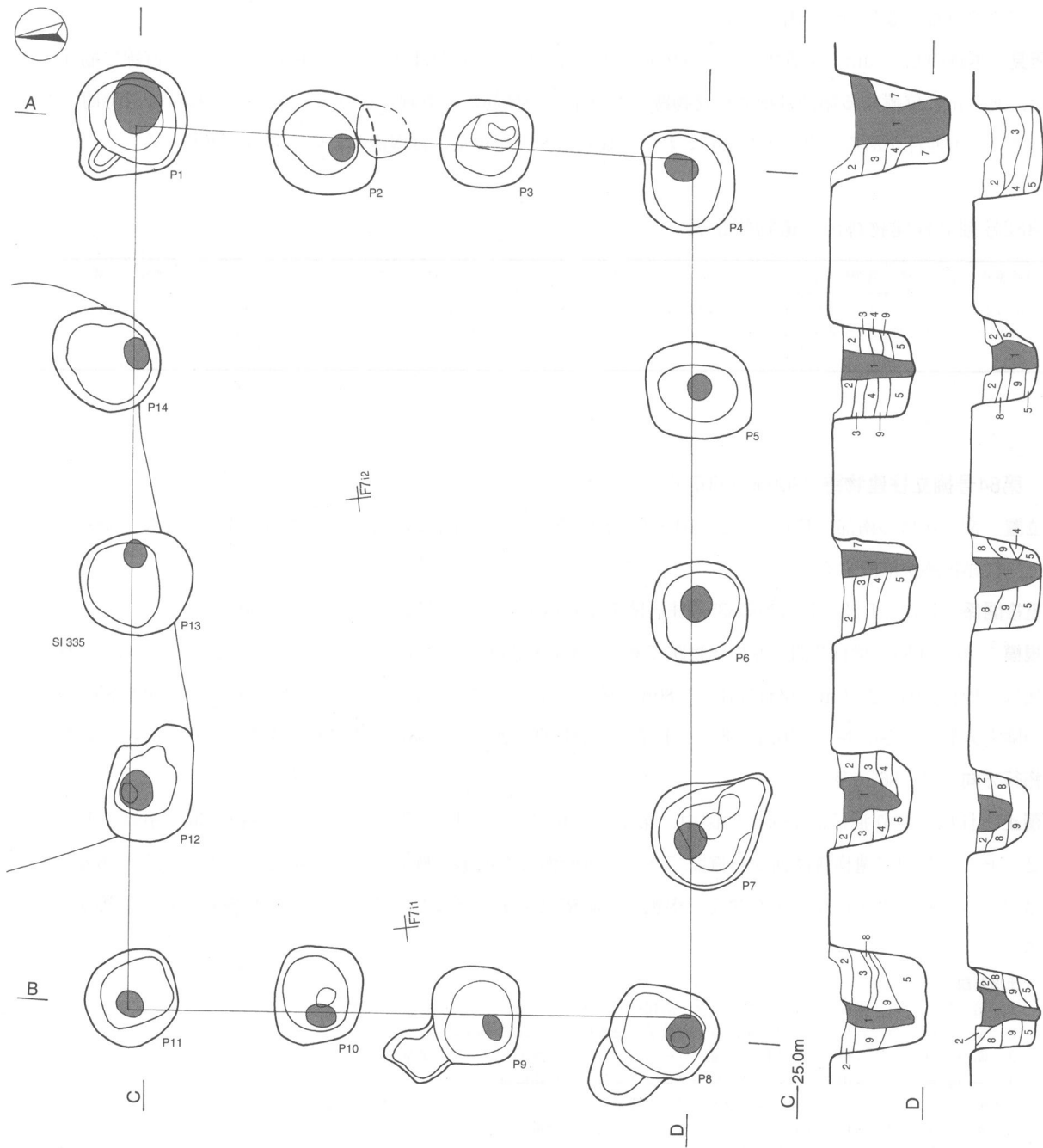
**桁行方向** N-86°-W

**覆土** 柱抜き取り痕は，土層断面図中，第1層が相当し，粘性・締まりが弱い。柱抜き取り痕は，P1・P2・P4～P14で遺構確認面から確認でき，土層断面でも明瞭に確認できた。第2～9層は埋土である。埋土はロームブロック・炭化粒子を含んだ褐色土・暗褐色土が互層になっており，強く突き固められ版築状を呈する。

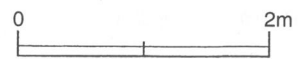
#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック・焼土小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，炭化物微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量，ローム大ブロック微量
- 6 褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 7 褐色 ローム大ブロック中量
- 8 褐色 ローム中ブロック中量
- 9 褐色 ローム大ブロック中量，ローム中ブロック少量

**遺物** P1から土師器坏片5点・土師器甕片12点・須恵器坏片7点・須恵器甕片2点，P2から土師器甕片9点・須恵器坏片1点・須恵器甕片5点，P3から土師器甕片1点・須恵器甕片1点，P4から土師器坏片3点・土師器高台付坏片1点・土師器甕片10点・須恵器坏片4点・須恵器甕片7点，P5から土師器坏片1点・須恵器坏片2点・須恵器甕片1点，P6から土師器坏片1点・土師器甕片6点・須恵器坏片1点・須恵器甕片1点，P7から土師器甕片2点・須恵器甕片2点，P8から土師器坏片4点・土師器甕片9点・須恵器坏片4点・須恵器甕片2点，P9から土師器坏片2点・土師器甕片3点・須恵器坏片3点・須恵器蓋片1点・須恵器甕片1点，P10から土師器坏片3点・土師器甕片2点・須恵器坏片2点・須恵器甕片3点，P13から土師器坏片2点・土師器甕片15点・須恵器坏片1点，P14から土師器坏片1点・土師器甕片14点・須恵器坏片8点・須恵器高台付坏片1点・須恵器甕片7点が出土している。第607図2209の須恵器坏はP14の埋土から出土している。

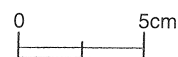
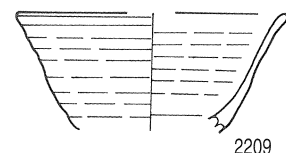


C—25.0m



第606图 第84号掘立柱建物跡実測图

所見 本跡は、8世紀後葉と思われる第335号住居跡を掘り込んでいること、また、埋土から出土した土器が8世紀後葉に属するものであることから、9世紀前葉に機能していたものと思われる。



第607図 第84号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第84号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第607図 2209	坏 須恵器	A [10.6] B (4.7)	体部から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母・石英 黄灰色 普通	20%

### 第85号掘立柱建物跡 (第608・609図)

位置 調査区域の中央部、F 5 d9・F 5 d0・F 6 d1・F 6 d2・F 5 e9・F 5 e0・F 6 e1・F 6 e2・F 5 f9・F 5 f0・F 6 f1・F 6 f2区。南には第99～101号掘立柱建物跡が位置する。

重複関係 第258・259・260号住居跡を掘り込み、第740号土坑に掘り込まれていることから、本跡は第258～260号住居跡より新しく、第740号土坑より古い。

規模 桁行3間、梁行2間の身舎に、四面庇が付く建物跡である。桁行は身舎だけで7.32m、1.10mの庇も含めると11.70mである。梁行は身舎だけで4.20m、1.10mの庇も含めると9.60mである。面積は身舎部分が30.74㎡、庇も含めると112.32㎡である。柱間寸法は、桁行は1.80m・2.50m・3.00mとかなりばらつきがあるのに対し、梁行は2.10mで等間隔である。身舎の柱穴は一辺(径)0.85～1.18mの隅丸方形または円形で、深さ0.60～0.80mである。庇の柱穴は、径0.50～0.90mの円形、深さ0.40～0.60mで、身舎の柱穴より小形である。

桁行方向 N-90°-E

覆土 土層断面図中、第1・7・8・10・13～16層が柱抜き取り痕に相当し、焼土や炭化物が含まれる。柱抜き取り痕は、身舎ではP9を除いて確認することができた。第2～6・9・11・12層は埋土である。埋土はロームブロックを含んだ暗褐色土・褐色土が互層になっており、強く叩き締められて版築状を呈している。

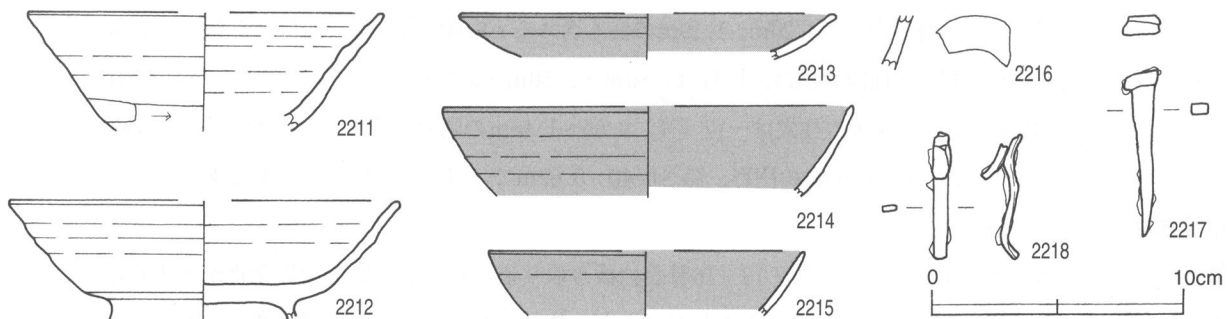
#### 土層解説

1 極暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物中量、ローム中ブロック少量	9 明褐色	ローム大ブロック多量
2 褐色	ローム小ブロック中量	10 明褐色	ローム中ブロック少量、焼土小ブロック微量
3 褐色	ローム中ブロック中量	11 明褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
4 褐色	ロームブロック少量	12 明褐色	ローム中ブロック少量
5 暗褐色	ローム小ブロック少量	13 褐色	ローム大ブロック中量
6 褐色	ローム小ブロック少量	14 褐色	ローム中ブロック多量
7 暗褐色	ローム中ブロック微量	15 暗褐色	ローム小ブロック・炭化粒子少量
8 暗褐色	焼土小ブロック・炭化物少量	16 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量

遺物 P1から土師器坏片・須恵器坏片各3点、土師器甕片・須恵器甕片各1点、P2から土師器坏片1点・須恵器坏片2点、P3から土師器甕片3点・須恵器坏片1点、P4から土師器甕片1点・須恵器坏片2点、P5から土師器坏片3点・土師器甕片6点・須恵器坏片1点・須恵器甕片1点、P7から土師器甕片9点・須恵器坏片6点・須恵器甕片3点・釘1点、P8から土師器坏片7点・土師器甕片1点・須恵器坏片1点・須恵器甕片1点、P9から土師器坏片3点・土師器甕片24点・須恵器坏片1点・須恵器甕片1点・灰釉陶器片1点・釘2点、P10から土師器坏片5点・土師器甕片1点・釘10点、P15から須恵器高台付坏片7点、P16から土師

器甕片1点・須恵器坏片1点・須恵器甕片3点・須恵器蓋片1点、P20から土師器甕片2点、P21から緑釉陶器片1点、P22から土師器坏片1点・土師器甕片9点・須恵器坏片3点・須恵器甕片2点・灰釉陶器片1点・緑釉陶器片1点、P23から土師器坏片3点・土師器甕片2点・須恵器坏片3点・須恵器甕片5点・スサ入り粘土1点、P24から土師器甕片4点・須恵器坏片1点・須恵器甕片1点・緑釉陶器片1点・青磁片1点が出土している。第608図2211の須恵器坏はP23から、2212の須恵器高台付坏はP15から、2213の緑釉陶器皿・2214の緑釉陶器碗・2216の青磁片はP24から、2215の緑釉陶器碗はP9から、2217の釘はP8から、2218の不明鉄製品はP10から出土している。出土遺物は北側の柱穴の柱抜き取り後の覆土から出土しているものが多く、火熱を受けているものが大部分である。

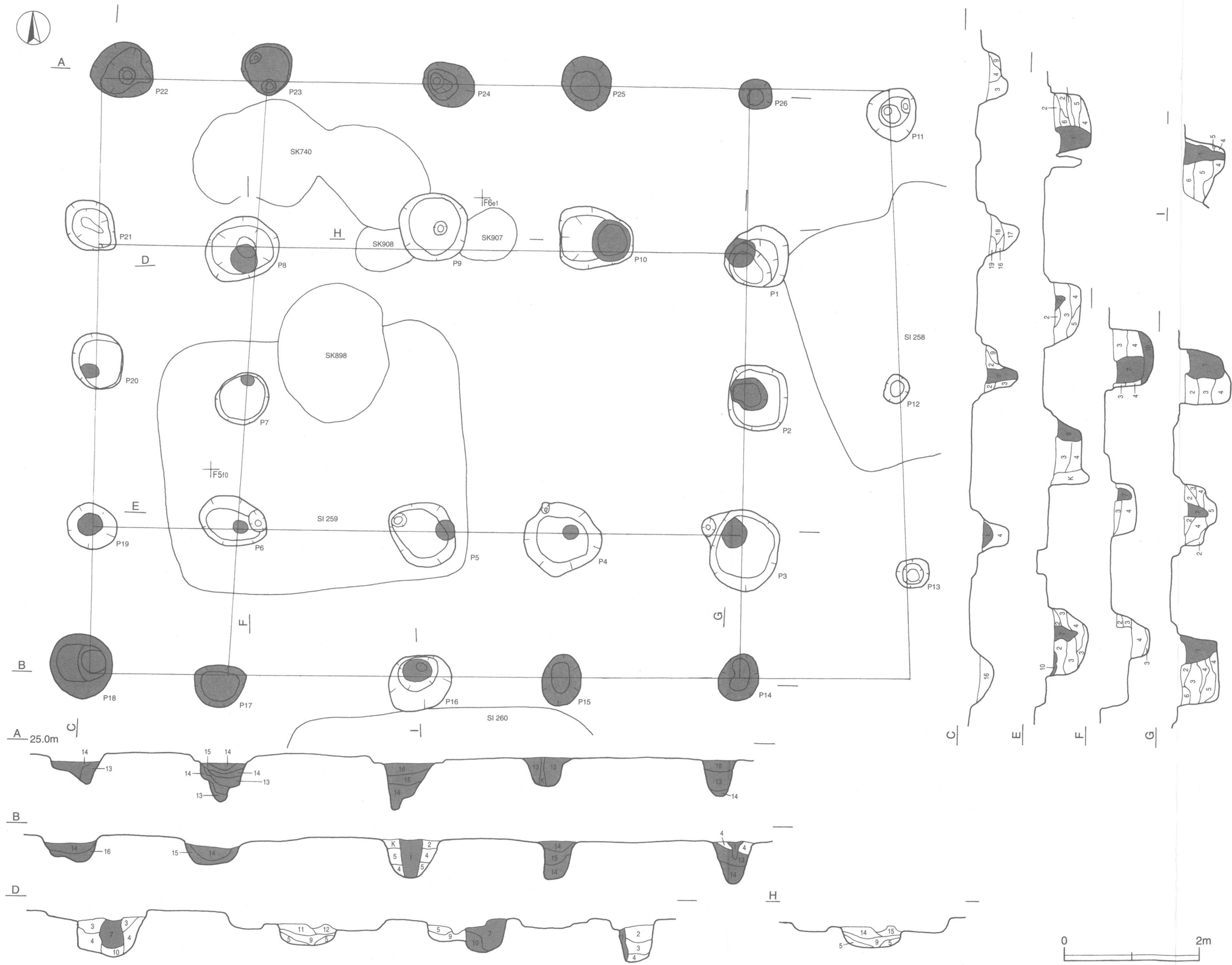
**所見** 本跡は、8世紀後葉と推定される第258号住居跡を掘り込んでいることから、8世紀後葉以降の建物跡である。また、確認段階から焼土と炭化物の層がみられ、P1・P3・P5・P8・P10には抜き取り後の覆土に焼土や炭化物が含まれることから、本跡は焼失したものと思われる。身舎と北庇の間に位置する第740号土坑から火熱を受けた多量の緑釉陶器や青磁が出土している。それらと同類の破片が第740号土坑を挟むP8・P9・P10・P15・P23・P24の柱抜き取り後の覆土からも出土している。このことは、第740号土坑は本跡の焼失後に掘り込まれ、火熱を受けた多量の陶磁器類が投棄されたものであり、この第740号土坑から出土した陶磁器類は、本跡に属していたものであると考えられる。このことから本跡は、9世紀後葉に火災を受けて廃絶したものと考えられる。本跡は、四面庇を持つ建物であり、緑釉陶器や青磁などを保有していたであろうと推測すると、9世紀後葉段階に集落の中心的役割を担っていた仏堂的建物と思われる。



第608図 第85号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第85号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第608図 2211	坏 須恵器	A [13.4] B (4.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し端部は細くすぼむ。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母・長石 灰白色 普通	20%
2212	高台付坏 須恵器	A [15.4] B (4.2) E (0.6)	高台部接地面欠損。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端・底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 灰白色 普通	10% P L242
2213	皿 緑釉陶器	A [14.7] B (1.8)	口縁部の破片。体部は外方に大きく開く。口縁部は外反し、端部は外につまみ出され、平坦面をもつ。	内・外面共に釉が施されているが、強く被熱しているため変色し、調整も不明。	緻密、胎土 灰色 灰オリーブ釉	5% 二次焼成
2214	碗 緑釉陶器	A [16.2] B (3.6)	口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。	内・外面共に釉が施されているが、強く被熱しているため変色し、調整も不明。	緻密、胎土 灰色 灰オリーブ釉	5% 二次焼成



第609图 第85号掘立柱建筑物迹实测图

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第608図 2215	椀 緑釉陶器	A [12.5] B (2.5)	口縁部の破片。口縁部は外傾する。	内・外面共に釉が施されているが、強く被熱しているため変色し、調整も不明。	緻密、胎土 灰色 オリーブ灰色	5% 二次焼成
2216	碗 青磁		体部の破片か。	内・外面施釉。	緻密、胎土 白色	5% 二次焼成 越州窯系

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
2217	釘	6.7	0.7	0.4	7.55	鉄	頭部先端部は、薄く叩き伸ばされ、丸められている。	P L256
2218	不明	(5.1)	0.6	0.2	(3.82)	鉄	板状に伸ばされている。	

### 第86号掘立柱建物跡 (第610・611図)

**位置** 調査区域の南部、F 7 j2・F 7 j3・F 7 j4・G 7 a2・G 7 a3・G 7 a4・G 7 b2・G 7 b3・G 7 b4区。本跡の北3.0mには第84号掘立柱建物跡が、西3.0mには第88号掘立柱建物跡が、東8.0mには第93号掘立柱建物跡が、南12.5mに第119号掘立柱建物跡が、北東15.5mには第105号掘立柱建物跡が位置している。

**重複関係** 第87号掘立柱建物に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

**規模** 桁行4間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行7.90m、梁行5.26mで、面積は約41.55㎡である。柱間寸法は、桁行1.60～2.28m、梁行2.39m・2.55mである。桁行の柱間は、P 4～P 6・P 10～P 12が1.60～1.79mと狭くなっており、外側の柱間が2.22～2.28mと広がっている。P 1は長軸1.42m、短軸1.16m、深さ0.48mの不定形である。P 2～P 6・P 8・P 9・P 12は一辺(径)0.81～1.16mの隅丸方形または円形、深さ0.42～0.78mである。P 7・P 10・P 11は長軸(長径)1.02～1.16m、短軸(短径)0.75～0.92mの隅丸長方形または楕円形、深さ0.62～0.82mである。

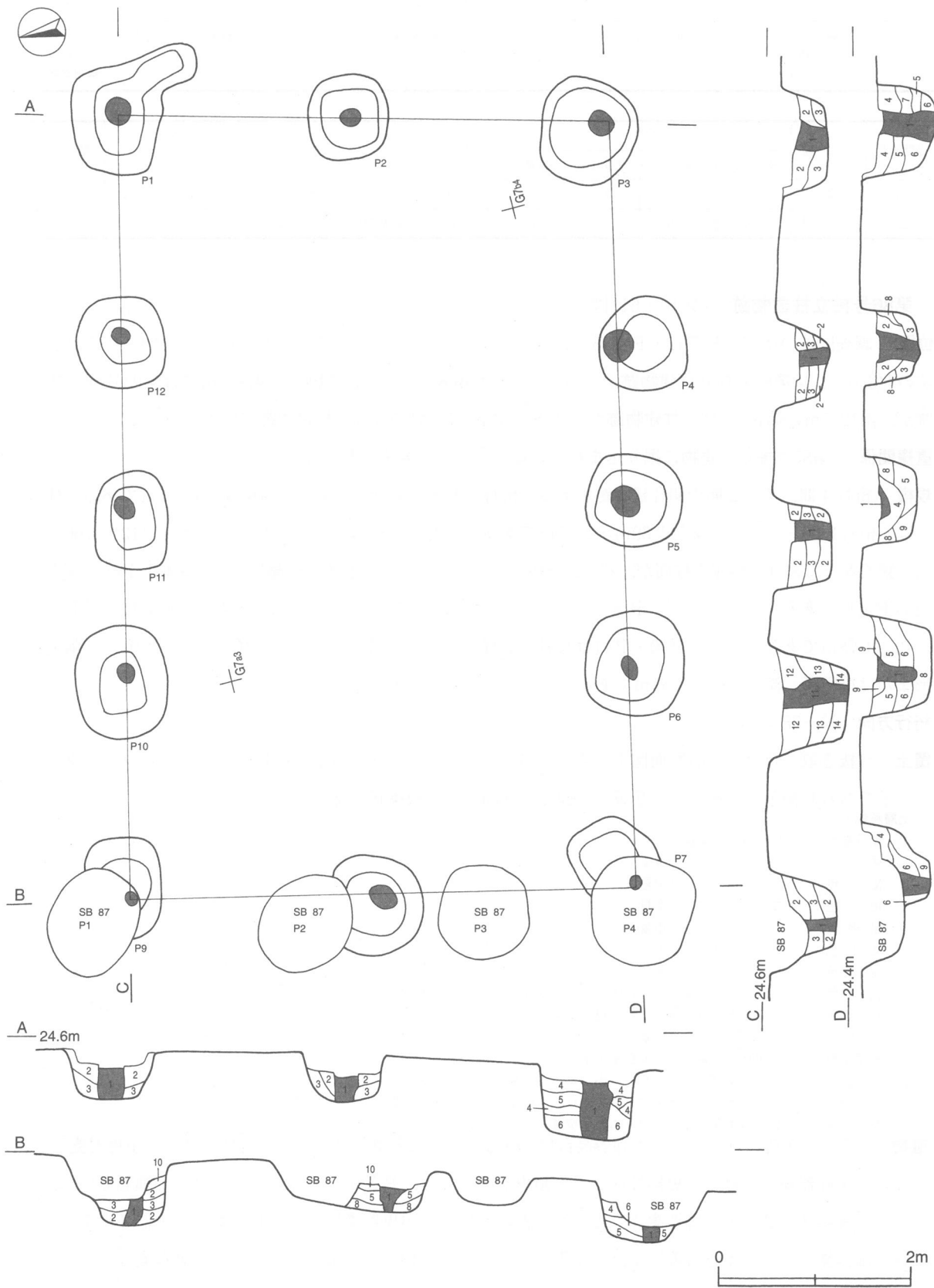
**桁行方向** N-78°-W

**覆土** 柱抜き取り痕は、土層断面図中、第1・11層が相当し、しまりは弱い。埋土は、ロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土・褐色土の互層で、強く突き固められ版築状を呈する。

#### 土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム中ブロック少量
- 3 褐色 ローム中ブロック中量
- 4 褐色 ローム中ブロック多量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック中量
- 6 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量
- 7 褐色 ローム大ブロック多量
- 8 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
- 9 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量
- 10 暗褐色 ローム中ブロック中量
- 11 極暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量
- 12 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック中量、焼土粒子少量
- 13 におい褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック中量、ローム粒子少量
- 14 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量

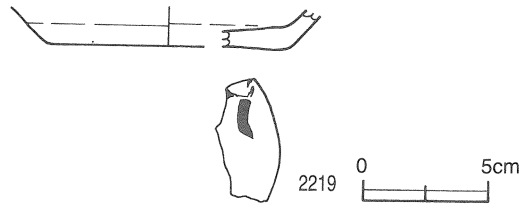
**遺物** P 1から土師器坏片3点・土師器高台付坏片2点・土師器甕片3点・須恵器坏片2点・須恵器甕片1点、P 2から土師器甕片5点・須恵器坏片2点・須恵器甕片1点、P 3から土師器坏片3点・土師器甕片4点、P 5から土師器坏片2点・土師器甕片5点・須恵器坏片1点・須恵器甕片2点、P 6から須恵器坏片1点、P 8から土師器甕片2点・須恵器蓋片1点・須恵器甕片1点、P 10から土師器坏片1点・土師器甕片1点、P 11から土師器坏片1点・土師器甕片13点・須恵器坏片3点・須恵器甕片3点、P 12から土師器甕片5点・須恵器甕片2点が出土している。第611図2219の須恵器坏片はP 7の埋土から出土している。



第610图 第86号掘立柱建物跡実測图



**所見** 本跡は、第93号掘立柱建物跡と建物の規模・桁行方向・柱穴規模・柱筋等ほぼ一致しており、東西棟で並び、また、北東15.5mに位置する9世紀前葉と推定される第105号掘立柱建物跡を含め、L字形に配置されていたと思われる。このことから本跡は、9世紀前葉に機能していたものと考えられる。



第611図 第86号掘立柱建物跡出土遺物実測図

### 第86号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第611図 2219	坏 須恵器	B (1.6) C [9.4]	底部から体部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母・石英 暗灰黄色 普通	10% 底部外面墨書 「□」

### 第87号掘立柱建物跡 (第612図)

**位置** 調査区域の南部，F 7 j1・F 7 j2・G 6 a0・G 7 a1・G 7 a2・G 6 b0・G 7 b1・G 7 b2区。本跡の北2mには第84号掘立柱建物跡が，南10mには第119号掘立柱建物跡が，東28mには第102号掘立柱建物跡が位置している。

**重複関係** 第86・88号掘立柱建物跡を掘り込んでいることから、いずれよりも本跡の方が新しい。

**規模** 桁行4間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行8.32m，梁行4.82mで、面積は40.10㎡である。柱間寸法は、桁行1.85～2.63m，梁行2.30m・2.50mである。桁行の柱間は、P 2～P 4・P 8～P 10が1.55～1.85mと狭くなっており、外側の柱間が2.10～2.60mと広がっている。柱穴は一辺（径）0.74～1.19mの隅丸方形または円形、深さ0.15～0.53mで大形である。

**桁行方向** N-13°-E

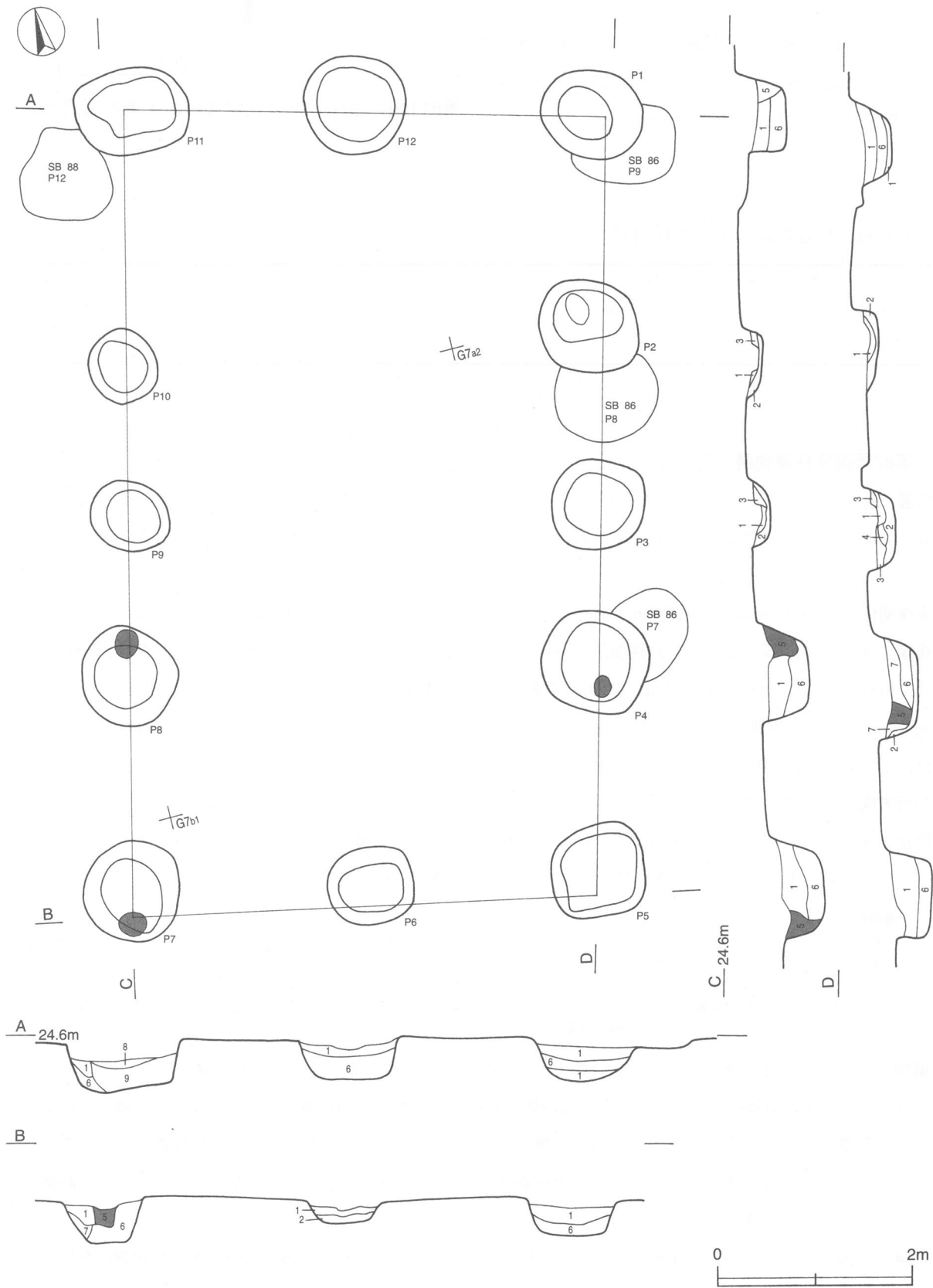
**覆土** 柱抜き取り痕は、土層断面図中、第5層が相当し、しまりは弱い。埋土は、ロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土・褐色土で、特に突き固められた様子は認められない。

#### 土層解説

- |       |                  |       |                       |
|-------|------------------|-------|-----------------------|
| 1 褐色  | ローム小ブロック少量       | 6 褐色  | ローム大ブロック中量            |
| 2 褐色  | ローム中ブロック中量       | 7 暗褐色 | ローム小ブロック中量            |
| 3 明褐色 | ローム中ブロック少量       | 8 褐色  | ローム中ブロック中量            |
| 4 褐色  | ローム粒子少量          | 9 暗褐色 | ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |       |                       |

**遺物** P 2 から土師器甕片 2 点・須恵器甕片 4 点，P 4 から土師器甕片 2 点・須恵器甕片 2 点，P 5 から土師器坏片 1 点・須恵器甕片 1 点，P 6 から土師器甕片 6 点，P 7 から土師器甕片 2 点，P 8 から土師器坏片 1 点・土師器甕片 2 点・須恵器蓋片 1 点・須恵器甕片 7 点，P 11 から土師器坏片 3 点・土師器甕片 5 点・須恵器高台付坏片 1 点・須恵器甕片 6 点，P 12 から土師器坏片 6 点・土師器甕片 3 点・須恵器坏片 2 点・須恵器甕片 1 点が出土している。細片のため図示することができなかった。

**所見** 本跡からの出土土器では細かな時期の判断をするのは困難であるが、第86・88号掘立柱建物跡を掘り込んでいること、南西5.8mに位置する第281号住居跡の主軸方向と本跡の桁行方向が一致することから、9世紀後葉に機能していたものと思われる。



第612图 第87号掘立柱建物跡実測図

### 第88号掘立柱建物跡（第613図）

**位置** 調査区域の南部，F 6 j9・F 6 j0・F 7 j1・G 6 a9・G 6 a0・G 7 a1区。本跡の北2.5mには第84号掘立柱建物跡が，東3.5mには第86号掘立柱建物跡が，東19.0mに第93・108号掘立柱建物跡が，北西24.5mには第105号掘立柱建物跡が，南東13.0mに第119号掘立柱建物跡が，南東30.0mに第96・97・102号掘立柱建物跡が位置している。

**重複関係** 第87号掘立柱建物跡に掘り込まれていることから，本跡の方が古い。

**規模** 桁行4間，梁行3間の側柱建物跡である。桁行8.30m，梁行5.00mで，面積は41.50m<sup>2</sup>である。柱間寸法は，桁行1.91～2.20m，梁行1.51～1.91mである。P 1～P 5・P 7・P 8・P 10～P 13は一辺（径）0.91～1.25mの隅丸方形または円形，P 6・P 9は長径1.10m・1.36m，短径0.89m・1.07mの楕円形，深さ0.35m・0.69mである。P 1とP 2の間の柱穴は攪乱を受けており，確認することはできなかった。

**桁行方向** N-80°-E

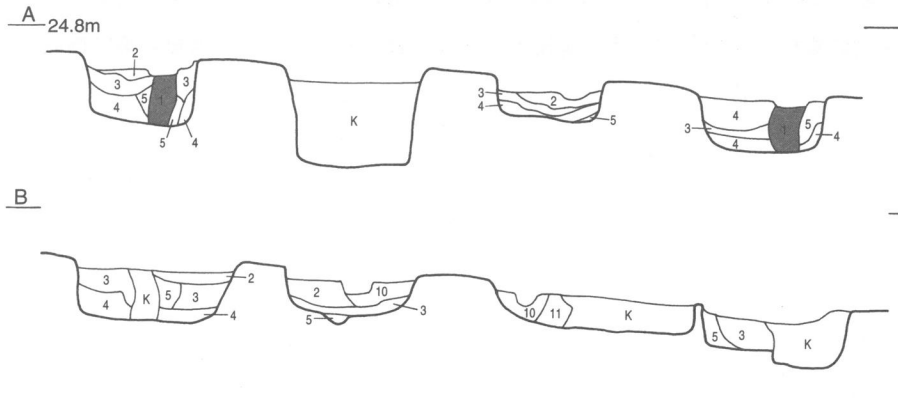
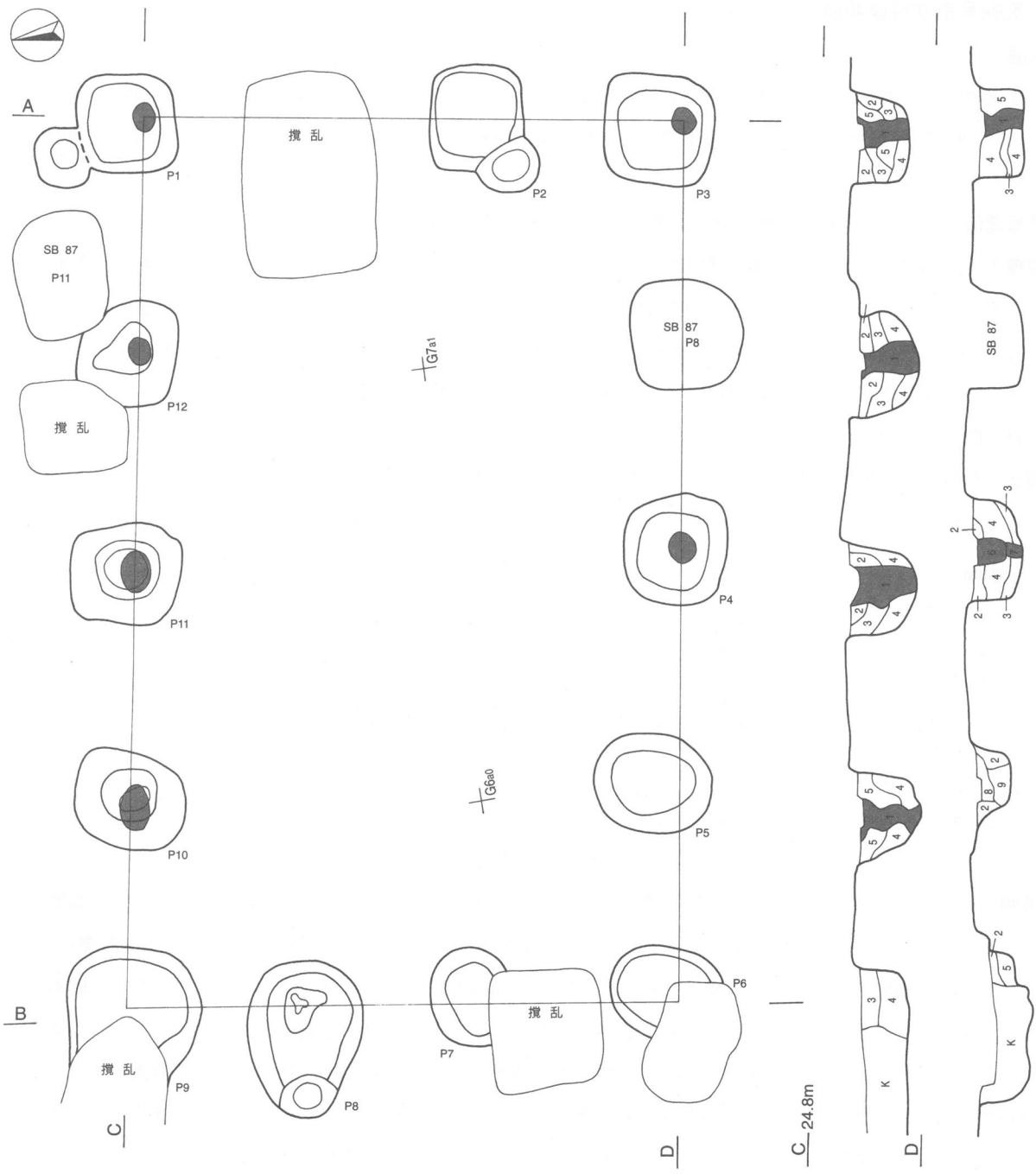
**覆土** 柱抜き取り痕は，土層断面図中，第1・6・7層が相当し，しまりは弱い。第2～5・8～11層が埋土である。埋土は，ロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土・褐色土の互層で，強く突き固められている。

#### 土層解説

1	暗褐色	ローム粒子微量
2	褐色	ローム小ブロック中量
3	暗褐色	ローム中ブロック中量
4	褐色	ローム中ブロック多量，ローム小ブロック中量
5	褐色	ローム小ブロック少量
6	暗褐色	粘土大ブロック多量，ローム小ブロック少量
7	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
8	暗褐色	ローム粒子少量
9	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量
10	暗褐色	ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
11	暗褐色	ローム中ブロック少量

**遺物** P 1から土師器坏片2点・土師器甕片6点・須恵器坏片1点・須恵器甕片2点，P 2から土師器甕片3点・須恵器甕片1点，P 3から須恵器坏片1点・須恵器甕片1点，P 4から土師器甕片4点・須恵器甕片1点，P 5から土師器坏片2点・須恵器甕片2点，P 6から土師器甕片1点・須恵器甕片4点，P 7から土師器甕片3点・須恵器坏片1点・須恵器蓋片1点，P 9から須恵器坏片1点・須恵器甕片1点，P 10から土師器甕片1点・須恵器坏片1点・灰釉陶器片1点，P 11から土師器甕片1点・砥石1点，P 12から土師器甕片4点・須恵器坏片4点・須恵器甕片1点，P 13から土師器甕片1点・須恵器甕片5点，P 14から土師器甕片1点・須恵器坏片1点・須恵器甕片2点が出土している。細片のため図示することができなかった。

**所見** 本跡からの出土土器では細かな時期の判断をするのは困難である。本跡は，北2.5mに9世紀前葉と推定される第84号掘立柱建物跡と建物の規模・桁行方向・柱穴規模等がほぼ一致することから9世紀前葉に機能していた可能性が考えられる。



第613图 第88号掘立柱建物迹实测图

**第89号掘立柱建物跡**（第614・615図）

**位置** 調査区域の北西部，E 5 d2・E 5 e2・E 5 f2・E 5 f3区。本跡の西部は調査区域外になっている。西1.0mには同規模，同方向で第90号掘立柱建物跡が，北西3.5mには同じ桁行方向で第44号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** 第90号掘立柱建物跡と重複するが，柱穴同士の重複がないため，新旧関係は不明である。また，第796号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しく，第29号溝に掘り込まれており，本跡が古い。

**規模** 西部が調査区域外のため，確認できたのは南北に並ぶの柱穴列で，1棟の建物跡の桁行3間と思われる。桁行4.96mで，柱間寸法は1.60～1.70mである。柱穴は一辺0.80～0.85mの隅丸方形で，深さ0.40～0.65mである。

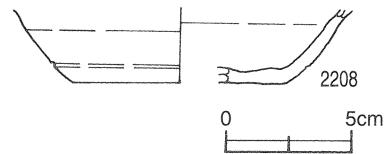
**桁行方向** N-29°-W

**覆土** 土層断面図中，第1・2層が柱抜き取り痕に相当する。抜き取り痕を確認できたのはP3だけである。第3・4層が埋土である。埋土はロームブロック・焼土・炭化粒子を含んだ暗褐色土・黒褐色土が互層になっている。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム大ブロック少量，焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 8 極暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・焼土粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量

**遺物** P3から土師器甕片2点・須恵器坏片9点・須恵器甕片1点が出土している。第614図2208の須恵器坏は，P3から出土している。



**所見** 本跡は，西部が調査区域外のため，東桁行を確認しただけである。

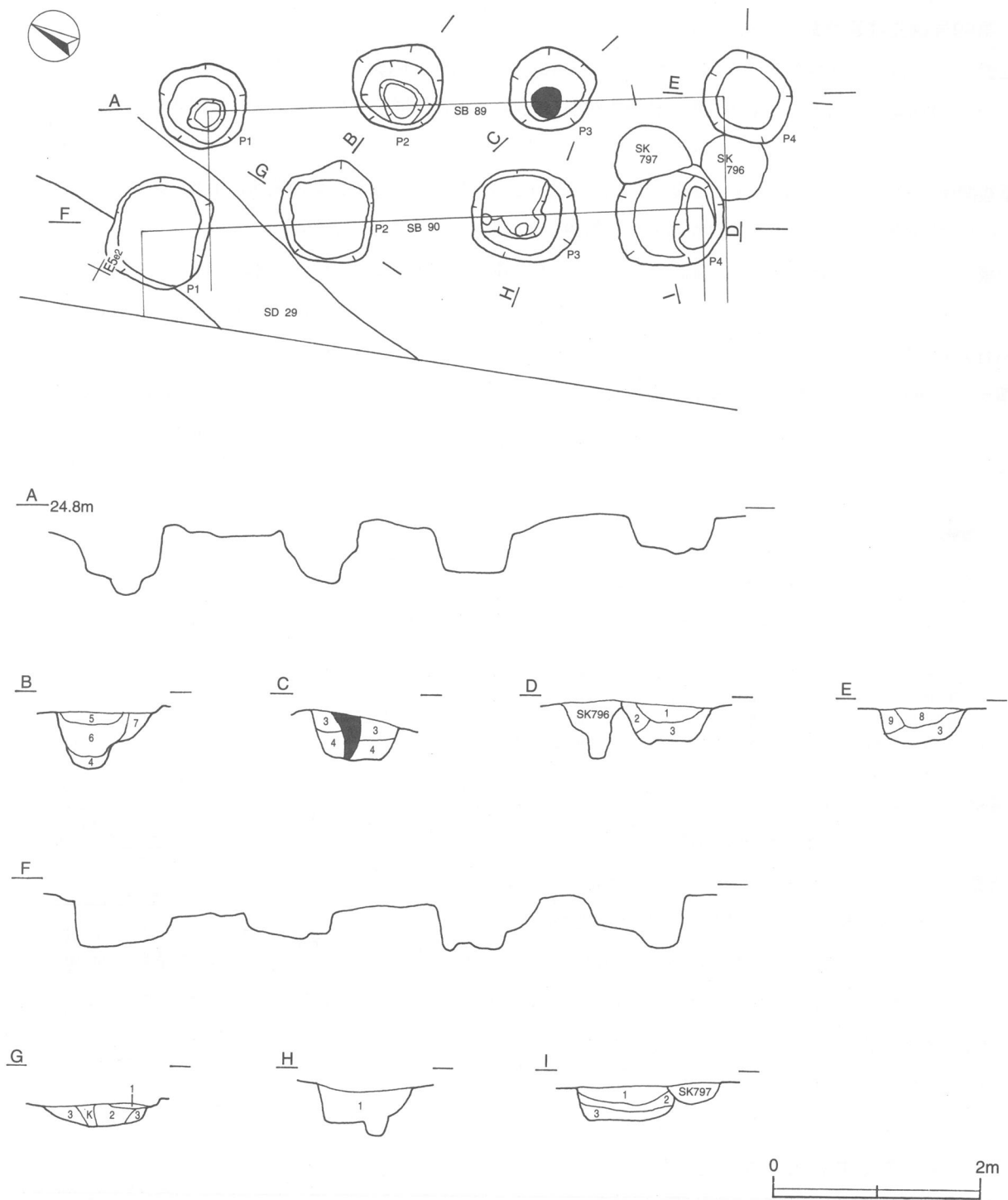
1m西にずれて構築されている第90号掘立柱建物跡とは，新旧関係が判明しないが，建て替えの関係にあるものと思われる。本跡から出土した

**第614図** 第89号掘立柱建物跡出土遺物実測図

土器は少量なうえ，破片であるため時期の断定は困難であるが，8世紀中葉から後葉の範疇と思われる。本跡の時期もこの時期と推測される。南西20mには，桁行方向がほぼ同じ第42号掘立柱建物跡があり，同時期に機能していたものと思われる。

**第89号掘立柱建物跡出土遺物観察表**

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第614図 2208	坏 須恵器	B (2.9) C [8.4]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面クロナデ。底部1方向の手持ちヘラ削り。	粗い，砂粒・雲母・角礫 緑灰色，普通	10%



第615図 第89・90号掘立柱建物跡実測図

**第90号掘立柱建物跡** (第615図)

**位置** 調査区域の北西部, E 5 e2・E 5 f2区。本跡の西部は調査区域外になっている。東1mには同規模, 同方向で第89号掘立柱建物跡が, 北西3.5mには同一の桁行方向で第44号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** 第89号掘立柱建物跡と重複するが, 柱穴同士の重複がないため, 新旧関係は不明である。また, 第796号土坑を掘り込んでおり本跡が新しく, 第797号土坑第29号溝に掘り込まれており, 本跡が古い。

**規模** 西部が調査区域外のため、確認できたのは南北に並ぶ柱穴列で、1棟の建物跡の桁行3間と思われる。桁行4.95mで、柱間寸法は1.60~1.70mである。柱穴は一辺0.85~1.05mの隅丸方形で、深さ0.30~0.45mである。

**主軸方向** N-29°-W

**覆土** すべて抜き取り後の覆土と思われる、ロームブロック・焼土・炭化粒子を含んだ暗褐色土・褐色土である。

**土層解説**

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量、ローム大ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物** 出土していない。

**所見** 本跡は、西部が調査区域外のため、東桁行を確認しただけである。1m東にずれて構築されている第89号掘立柱建物跡とは、新旧関係が判明しないが、建て替えの関係にあるものと思われる。第89号掘立柱建物跡の時期が8世紀中葉から後葉と推測されるので、本跡の時期もこの前後と思われる。南西20.0mには、桁行方向がほぼ同じ第42号掘立柱建物跡があり、同時期に機能していたものと思われる。

### 第91号掘立柱建物跡 (第616・617図)

**位置** 調査区域の南東部、H 8 e4・H 8 e5・H 8 f4・H 8 f5・H 8 g4・H 8 g5区。本跡の西3.8mには南梁行の柱筋が本跡と揃う第107号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** P 9が第315号住居に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

**規模** 桁行4間、梁行3間の側柱建物跡である。桁行7.70m、梁行5.30mで、面積は約40.81㎡である。柱間寸法は、桁行1.60~2.00m、梁行1.50~1.90mである。柱穴は一辺0.85~1.10mの隅丸方形、深さ0.85m~1.10mで、大形である。P 1・P 3~P 5・P 7・P 8は中央部が深くなる二段に掘り込まれている。

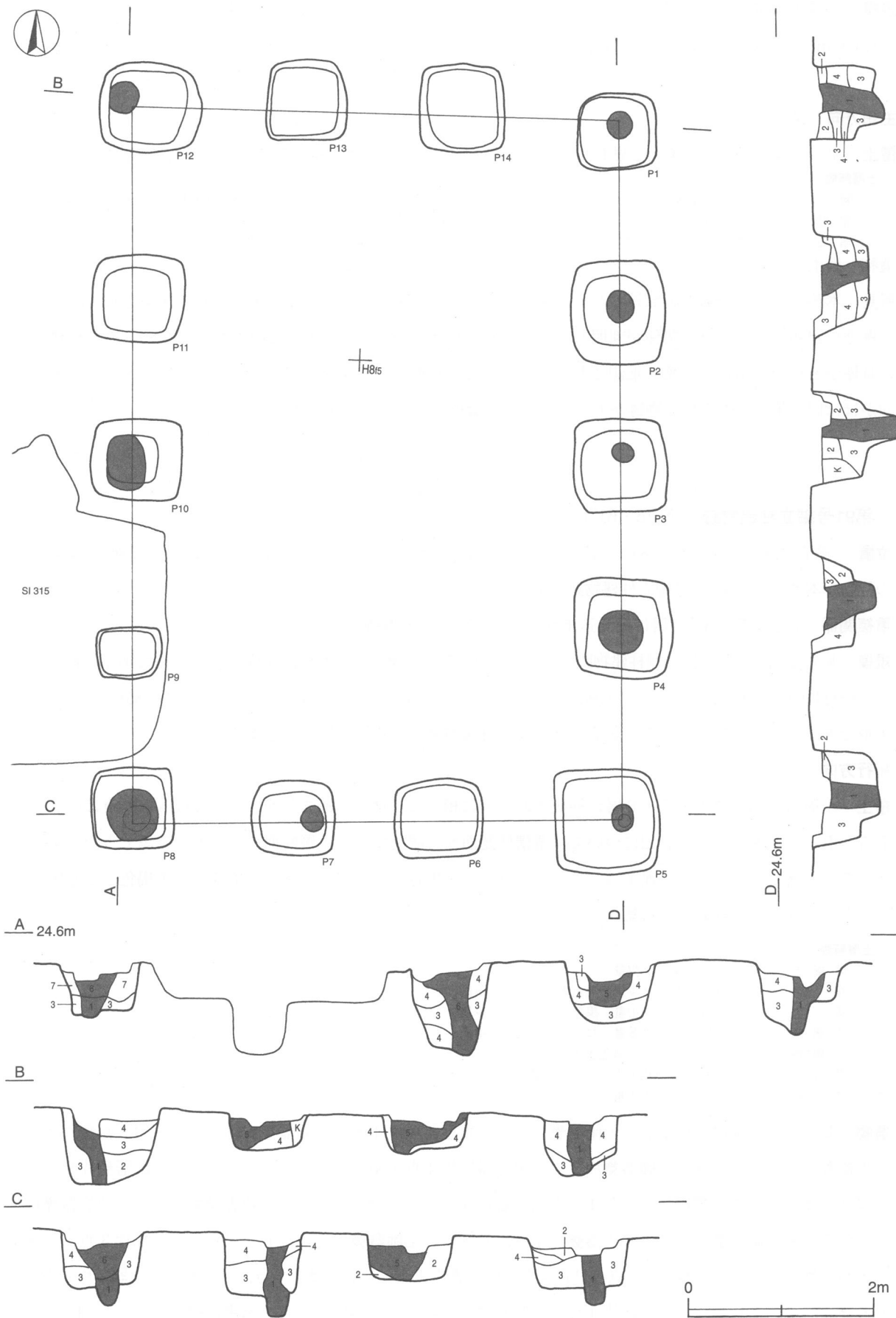
**桁行方向** N-2°-W

**覆土** 土層断面図中第1・5・6層が柱抜き取り痕に相当し、粘性・締まりが弱い。柱抜き取り痕は、P 1~P 5・P 7・P 8・P 10・P 12については遺構確認面から確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。第2~4・7・8層は埋土である。埋土は、ロームブロック・黒色土ブロックを含んだ褐色土・黒褐色土が互層になっており、強く叩き締められ版築状を呈する。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム中ブロック少量、黒色土中ブロック微量
- 3 褐色 ローム中ブロック中量、黒色土中ブロック少量
- 4 黒褐色 黒色土中ブロック多量、ローム中ブロック中量
- 5 暗褐色 ローム中ブロック・黒色土中ブロック中量
- 6 暗褐色 ローム粒子・黒色土小ブロック中量
- 7 褐色 ローム中ブロック少量

**遺物** P 1から土師器坏片1点・土師器甕片8点・須恵器坏片4点・須恵器高台付坏1点・須恵器甕片1点・須恵器蓋片2点、P 2から土師器甕片2点・須恵器坏片4点・須恵器蓋片2点、P 3から土師器甕片9点・須恵器坏片4点・須恵器甕片3点、P 4から土師器坏片2点・土師器甕片2点・須恵器盤片2点・須恵器甕片2点、P 5から土師器甕片5点・須恵器甕片1点、P 6から土師器甕片3点、P 7から土師器甕片3点、P 8から土師器甕片3点・須恵器坏片1点、P 10から土師器甕片4点・須恵器甕片1点、P 11から土師器坏片1点・土師器甕片2点、P 12から土師器坏片4点・土師器甕片4点・須恵器坏片1点・須恵器甕片1点、P 13から土師器坏片1点・土師器甕片2点・須恵器蓋片1点、P 14から土師器甕片1点・須恵器坏片1点が出土している。

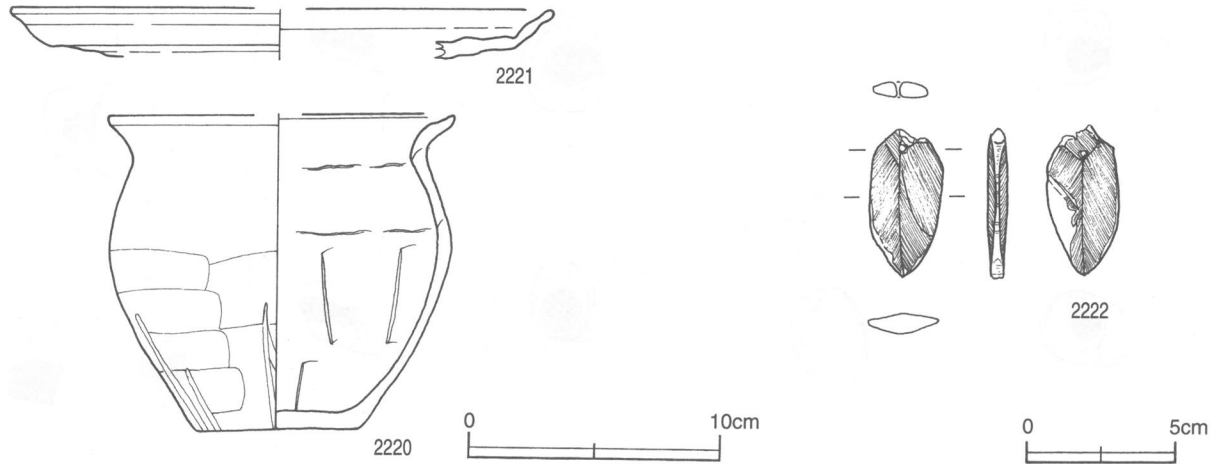


第616图 第91号掘立柱建物跡实测图



第617図2220の土師器小形甕はP 1・P 5・P 8の埋土から、2221の須恵器盤はP 4の埋土から、2222の剣形石製模造品はP 7の埋土から、それぞれ出土している。

**所見** 本跡は、重複関係や出土土器から8世紀代に構築されたものと思われる。本跡の柱穴は隅丸方形の深い掘り方で、柱筋も通りしっかりとしたものであり、建物の規模も他の掘立柱建物と比べて大形である。これらのことからこの建物は「屋」として営まれたものと思われる。なお、西側に隣接する第107号掘立柱建物跡と桁方向がほぼ同じであること、南梁行と柱筋がそろふことなどから同時期に機能していた可能性がある。



第617図 第91号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第91号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第617図 2220	小形甕 土師器	A [13.9] B 12.5 C 6.3	体部は丸みをもつ。頸部はくの字状に折れ、口縁部は外反し、端部はつまみ上げられている。	口縁部横ナデ。体部外面上位ヘラナデ、下端手持ちヘラ削り。内面ナデ。内面ヘラ当て痕。	砂粒・雲母・角礫 暗褐色 普通	40% P L242
2221	盤 須恵器	A [21.4] B (1.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外方に大きく開き、口縁部との境で屈曲して、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面クロコナデ。	砂粒・雲母・長石 灰白色、 不良	5%

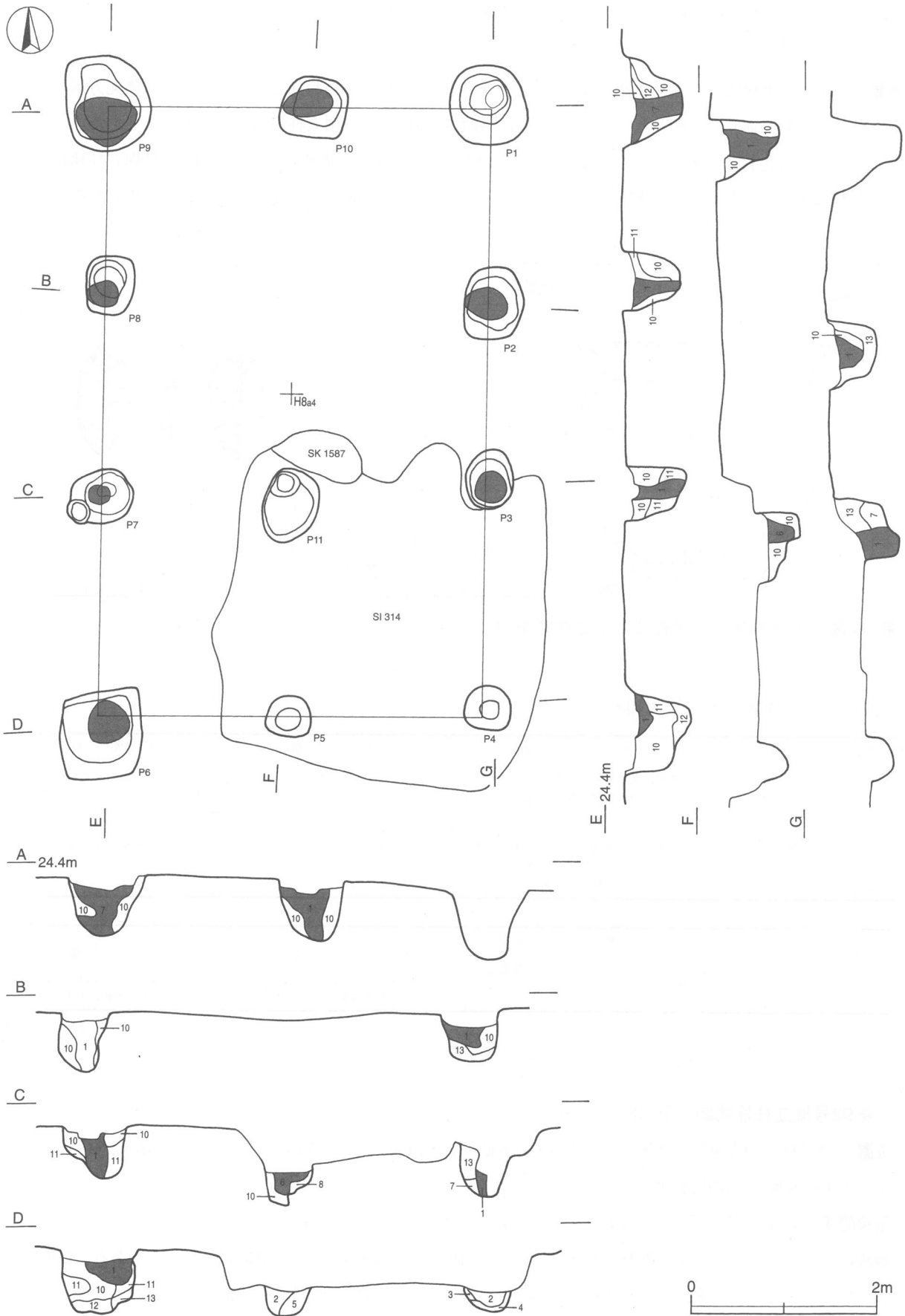
遺物番号	種別	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
2222	剣形模造品	3.9	1.9	0.5	5.5	滑石	断面は菱形に近い。両面とも中央部から斜め下へ擦痕。	P L253

第92号掘立柱建物跡 (第618・619図)

**位置** 調査区域の南東部、G 8 j3・G 8 j4・H 8 a3・H 8 a4区。北側1.5mのところには、本跡の東桁行の柱筋を通す第54号掘立柱建物跡が位置している。

**重複関係** 第314号住居に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

**規模** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行6.53m、梁行4.14mで面積は約27.03㎡である。柱間寸法は、桁行2.0~2.3m、梁行2.0~2.1mである。P 1・P 6・P 9は一辺0.85~1.0mの隅丸方形、P 2・P 3・P 7・P 8・P 10・P 11は一辺0.65~0.80mの隅丸方形である。P 4・P 5は第314号住居跡の貼床を外した後に検出されたもので、柱穴の底面近くが残存しているだけなので、現状では径0.45mの円形の小さな掘り方で



第618图 第92号掘立柱建筑物迹实测图

ある。柱穴の深さは確認面が0.55～0.70mである。

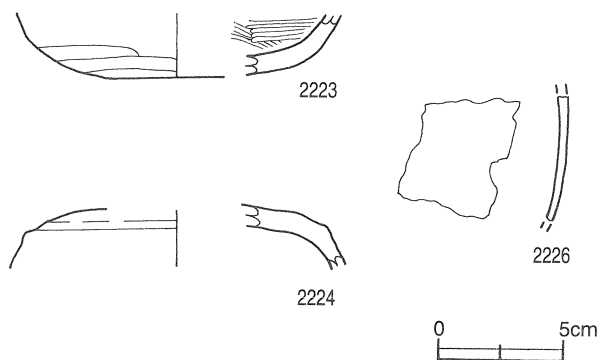
桁行方向 N-0°

**覆土** 土層断面図中、第1・6・7層が柱抜き取り痕に相当し、P2・P6～P10が遺構確認面から確認できた。第2～5層は柱抜き取り後の覆土である。第8～13層が埋土である。埋土は、ロームブロックを含む黒褐色土・褐色土である。

**土層解説**

- |       |                                       |       |                     |
|-------|---------------------------------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック少量                            | 8 黒褐色 | ローム中ブロック少量          |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック・炭化粒子微量      | 9 黒褐色 | ローム中ブロック中量          |
| 3 褐色  | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 褐色 | ローム中ブロック中量          |
| 4 暗褐色 | ローム粒子微量                               | 11 褐色 | ローム小ブロック少量          |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量           | 12 褐色 | ローム大ブロック・ローム中ブロック中量 |
| 6 暗褐色 | 焼土中ブロック中量                             | 13 褐色 | ローム大ブロック多量          |
| 7 黒褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック少量                   |       |                     |

**遺物** 確認面から土師器坏片1点・土師器甕片4点・須恵器坏片1点・須恵器甕片1点、P2から土師器甕片1点・須恵器坏片3点、P6から土師器甕片1点・不明鉄製品1点、P9から土師器坏片1点・土師器甕片3点・須恵器坏片3点、P10から土師器甕片・須恵器坏片・須恵器蓋片各1点、P11から土師器甕片1点・須恵器坏片3点が出土している。第619図2223の土師器坏はP9の埋土から、2224の須恵器坏蓋はP10の埋土から出土している。



第619図 第92号掘立柱建物跡出土遺物実測図

2223は古墳時代に属するもので混入品と思われる。2226の板状鉄製品はP6の埋土から出土している。

**所見** 本跡は、第314号住居跡に掘り込まれていることから、9世紀中葉以前に機能していたと思われる。また、埋土から出土した土器は8世紀前葉に属するものであることから、本跡はこの時期に構築されたと思われる。本跡と第54号掘立柱建物跡は出土遺物から構築時期が同時期と考えられ、さらに、本跡の東桁行の柱筋と第54号掘立柱建物跡の東梁行の柱筋が一直線に並び、逆L字状に配置されていることから、同時期に機能果していたものとする。

第92号掘立柱建物跡出土遺物観察表

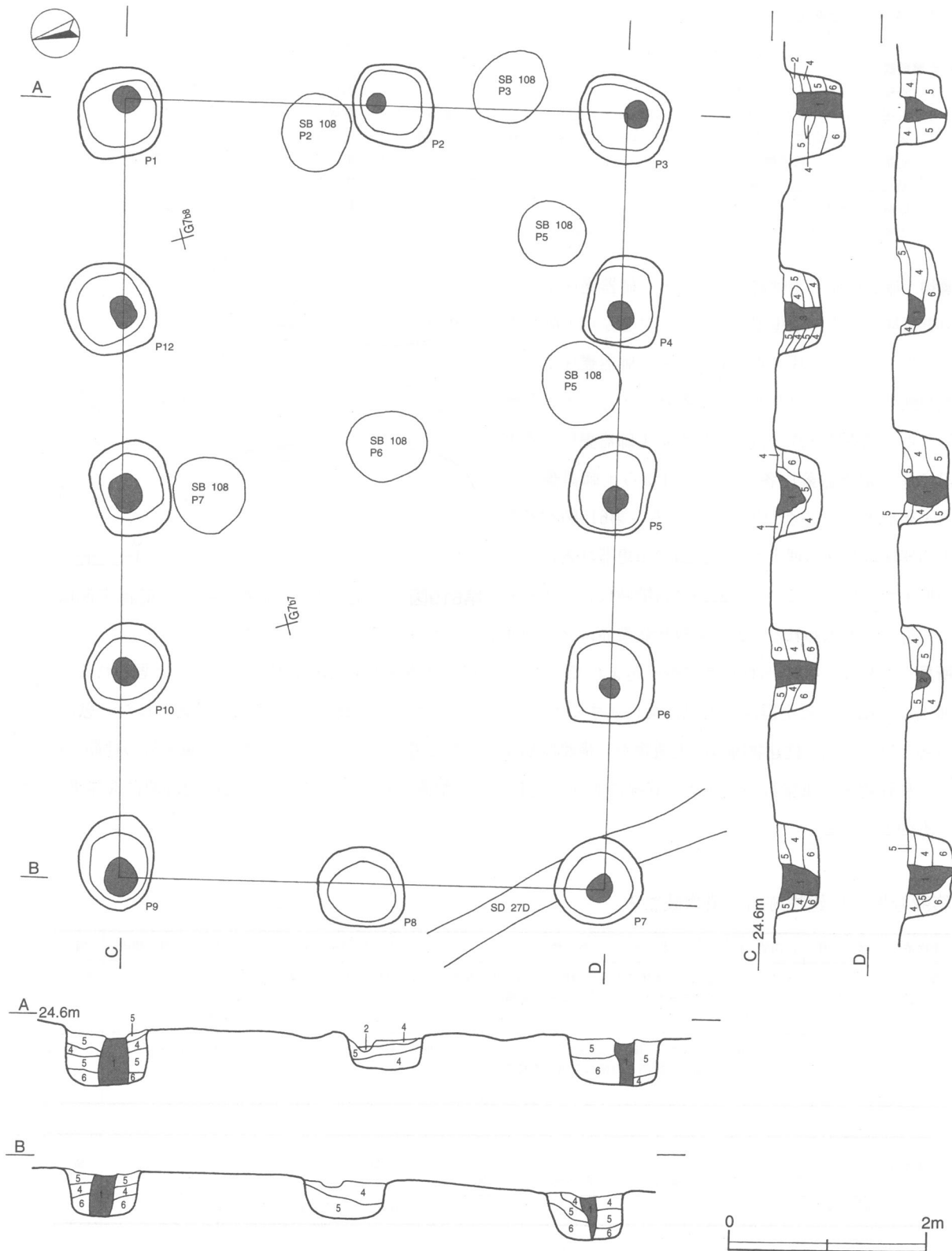
遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第619図 2223	坏 土師器	B (2.5)	底部から体部にかけての破片。丸底。体部は丸みをもって立ち上がる。器壁は厚い。	外面手持ちヘラ削り。内面ヘラ磨き。	砂粒・赤色粒子にぶい 橙色 普通	5%
2224	坏蓋 須恵器	B (2.6)	天井部から口縁部にかけての破片。天井部と口縁部との境に突出した稜をもつ。	内・外面口クロナデ。	砂粒・白色粒子 灰色 普通	5%

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
2226	板状鉄製品	(4.7)	(5.0)	0.3	(23.0)	鉄	板状を呈する。	

第93号掘立柱建物跡 (第620・621図)

位置 調査区域の南部, G 7 a6・G 7 a7・G 7 a8・G 7 b6・G 7 b7・G 7 b8・G 7 c7・G 7 c8区。本跡の北12.5mには第105号掘立柱建物跡が, 西7.0mには第86・88号掘立柱建物跡が並んでおり, いずれも桁行方向が



第620図 第93号掘立柱建物跡実測図

ほぼ同じである。南東3.0mには第96・97・102号掘立柱建物跡が位置している。

**重複関係** 第27D号溝にP7が掘り込まれており、本跡の方が古い。また、第108号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、柱穴同士の重複はないため、新旧関係については不明である。

**規模** 桁行4間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行7.83m、梁行5.08mで、面積は39.77m<sup>2</sup>である。柱間寸法は、桁行1.83~2.04m、梁行2.41m・2.67mである。柱穴は、一辺(径)0.78~0.88mの隅丸方形または円形、深さ0.35~0.60mである。

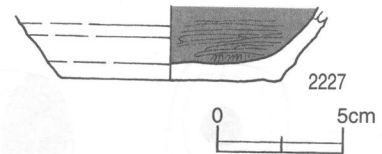
**桁行方向** N-73°-E

**覆土** 柱抜き取り痕は、土層断面図中、第1~3層が相当し、しまりは弱い。第4~6層は埋土である。埋土は、ロームブロックを含む暗褐色土・褐色土・黒褐色土の互層で、強く突き固められている。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム中ブロック中量
- 5 褐色 ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量
- 6 褐色 ローム小ブロック中量

**遺物** P1から土師器坏片2点・土師器甕片12点・須恵器甕片1点、P2から土師器坏片1点・土師器甕片6点・須恵器甕片1点、P3から土師器坏片1点・土師器甕片4点、P4から土師器坏片1点・土師器甕片4点・須恵器甕片3点、P5から土師器甕片1点・須恵器坏片1点、P6から土師器坏片1点・土師器甕片13点・須恵器坏片1点・須恵器甕片3点、P7から土師器甕片7点・須恵器甕片2点、P8から土師器甕片3点・須恵器甕片1点、P9から土師器甕片3点・須恵器甕片1点、P10から土師器甕片2点、P11から須恵器甕片2点が出土している。第621図2227土師器坏は、P5の埋土から出土している。



第621図 第93号掘立柱建物跡出土遺物実測図

**所見** 本跡からの出土遺物では細かな時期の判断をするのは困難である。本跡は、9世紀中葉と推定される第105号掘立柱建物跡と桁行方向・柱穴規模等がほぼ一致する。また、本跡は、建物の規模・桁行方向・柱穴規模等がほぼ一致する第86号掘立柱建物跡と東西に並んでいる。このことから本跡と第86・105号掘立柱建物跡は、L字形に配置され、同時期に機能を果たしていたものと考えられる。

**第93号掘立柱建物跡出土遺物観察表**

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第621図 2227	坏 土師器	B (3.0) C [8.8]	底部から体部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面口ロナデ。体部・底部内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り痕を残す。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 にぶい黄橙色、普通	20%

**第94号掘立柱建物跡 (第622・623図)**

**位置** 調査区域の南東部、G7j0・G8j1・G8j2・H7a0・H8a1・H8a2・H7b0・H8b1・H8b2区。東3.6mには第92号掘立柱建物跡が、東には第54号掘立柱建物跡が位置する。

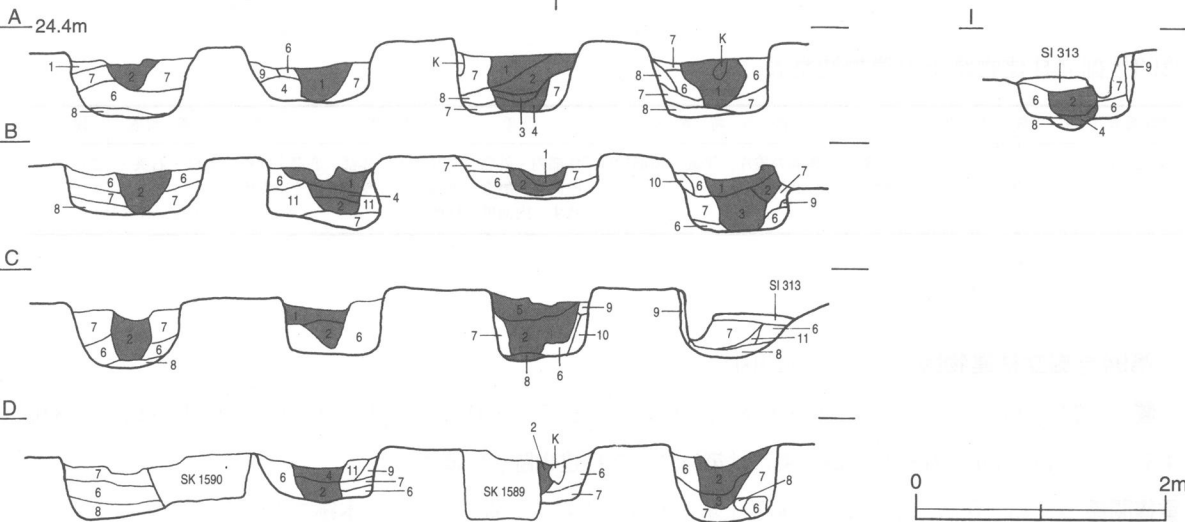
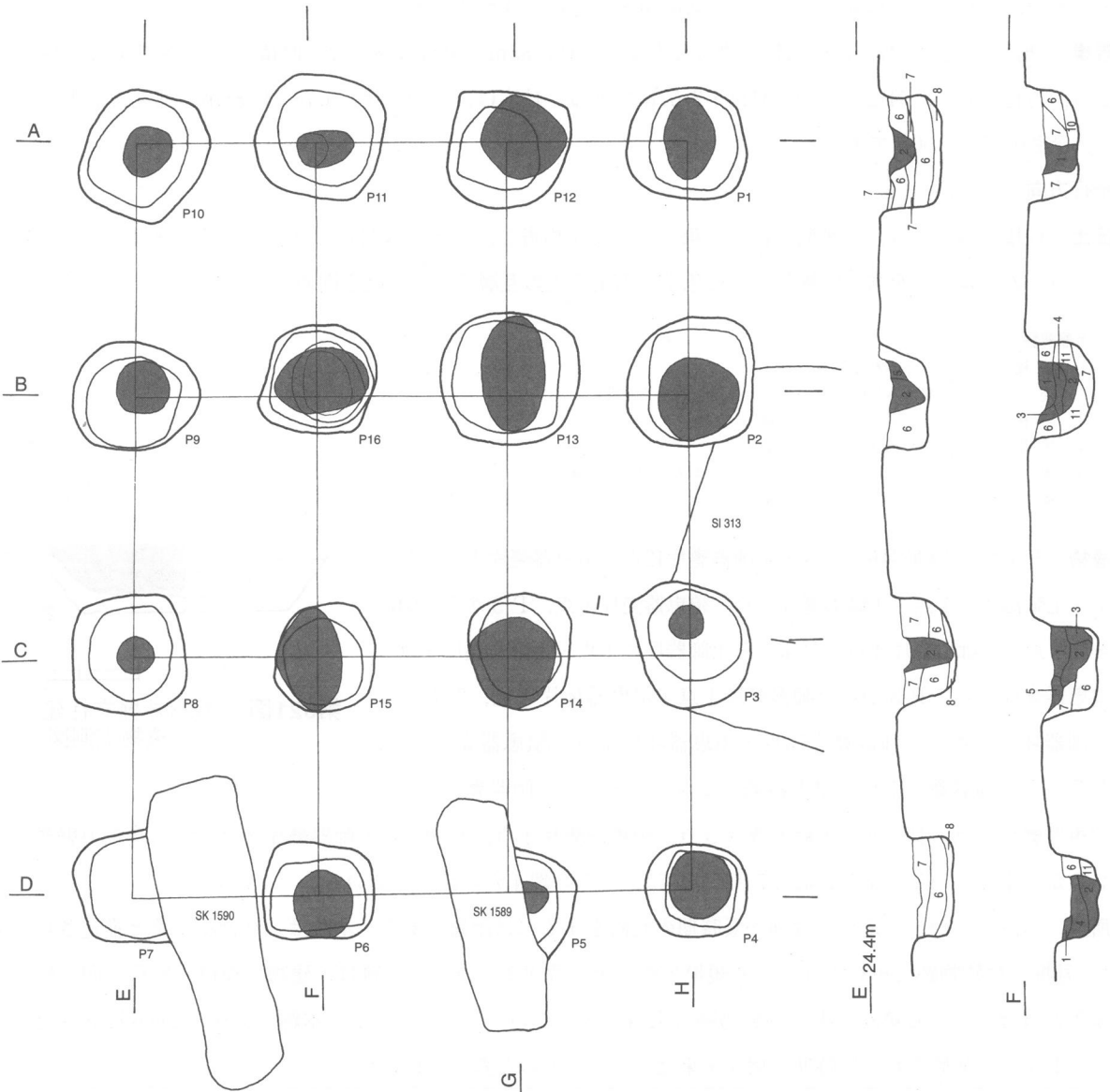
**重複関係** 第313号住居、第1589・1590号土坑に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

**規模** 桁行3間、梁行3間の総柱建物跡である。桁行6.35m、梁行4.75mで、面積は約30.16m<sup>2</sup>である。柱間寸

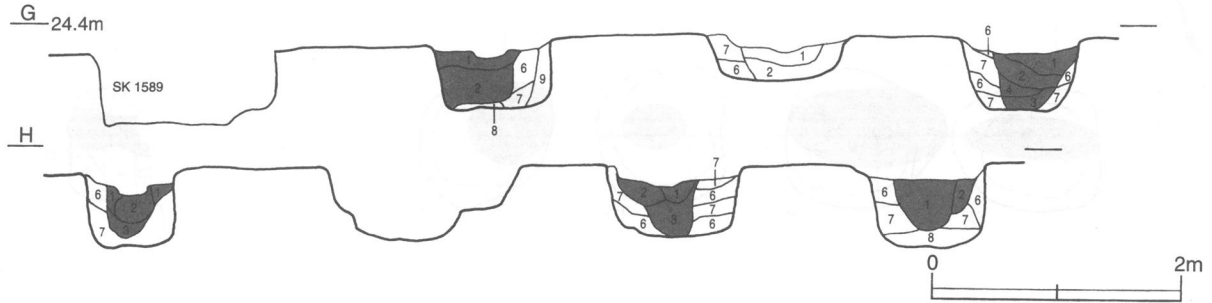


G8<sub>1</sub>

G8<sub>2</sub>



第622图 第94号掘立柱建物迹实测图 (1)



第623図 第94号掘立柱建物跡実測図 (2)

法は、桁行2.00～2.20m，梁行1.50～1.60mである。柱穴は一辺0.90～1.10mの隅丸方形，深さはP 6・P 13が0.35～0.40mと浅く，他は0.50～0.70mである。

桁行方向 N-2°-W

覆土 土層断面図中，第1～5層が柱抜き取り痕に相当し，その他の層は埋土である。埋土は，ロームブロックを含む極暗褐色土・暗褐色土・褐色土の互層で，強く叩き締められて版築状を呈している。

土層解説

1 暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3 暗褐色	ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
4 褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム大ブロック微量
5 黒褐色	ローム粒子少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
6 褐色	ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・炭化粒子微量
7 暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化物微量
8 極暗褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
9 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
10 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
11 暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック微量

遺物 P 1 から土師器甕片 4 点・須恵器甕片 1 点，P 2 から須恵器坏片 1 点・須恵器甕片 2 点，P 5 から土師器甕片 1 点，P 8 から土師器坏片 2 点，P 11 から土師器甕片 1 点，P 13 から土師器甕片 2 点，P 16 から土師器甕片 1 点が出土している。細片のため図示できなかった。

所見 本跡は，第313号住居跡に掘り込まれていることから，9世紀後葉以前には廃絶されていたと思われる。南東20.0mに位置する第109号掘立柱建物のような大規模な「屋」と同時に存在し機能していた可能性が高い。

第95号掘立柱建物跡 (第624・625図)

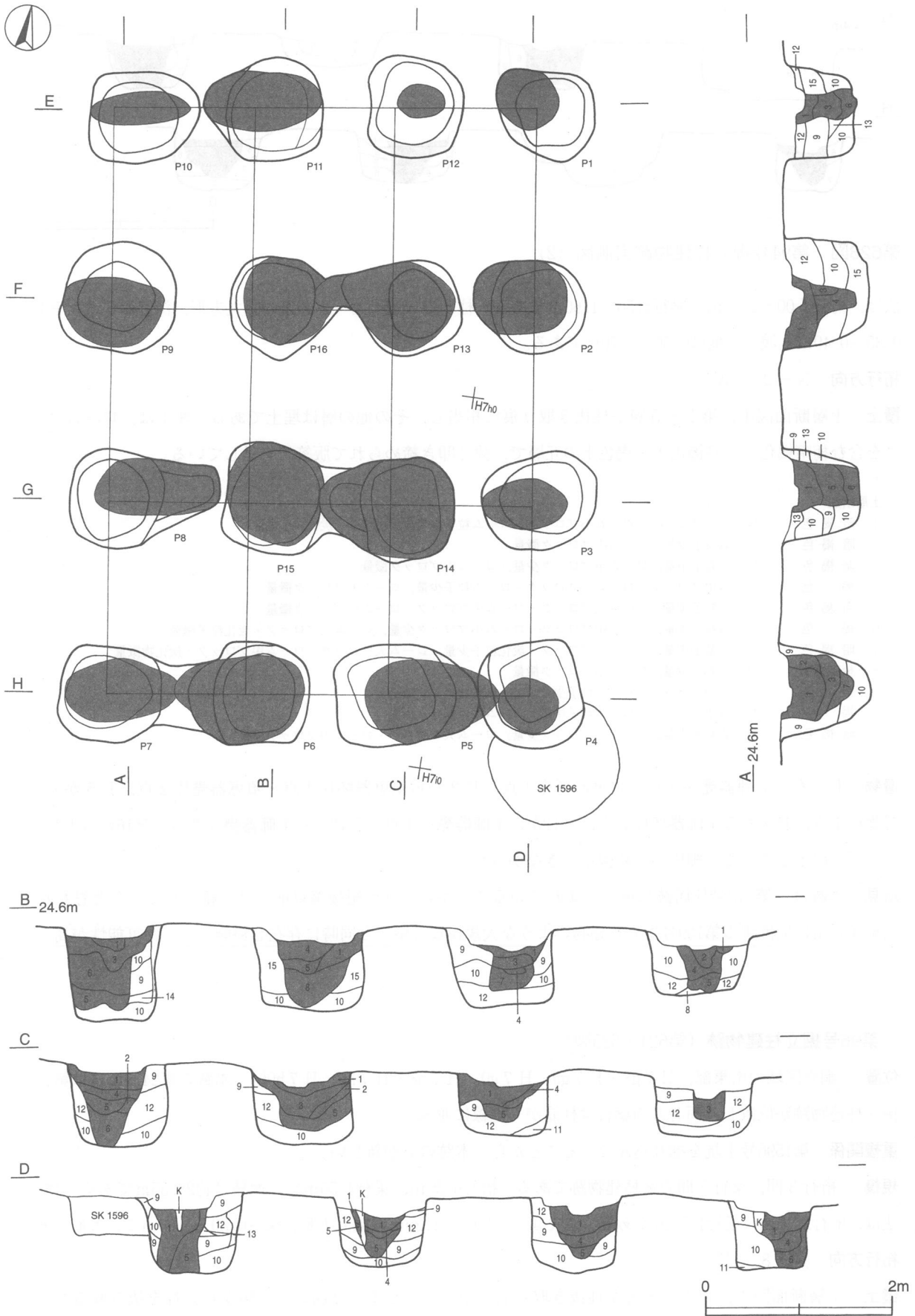
位置 調査区域の南東部，H 7 g8・H 7 g9・H 7 g0・H 7 h8・H 7 h9・H 7 h0区。本跡の東24.5mには第107号掘立柱建物跡が位置し，両者の南梁行は柱筋が一直線に並ぶ。

重複関係 第1596号土坑を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

規模 桁行3間，梁行3間の総柱建物跡である。桁行6.30m，梁行4.50mで，面積は約28.35㎡である。柱間寸法は，桁行2.10m，梁行1.50mである。柱穴は一辺1.00～1.20mの隅丸方形，深さ0.80～1.00mで，大形である。

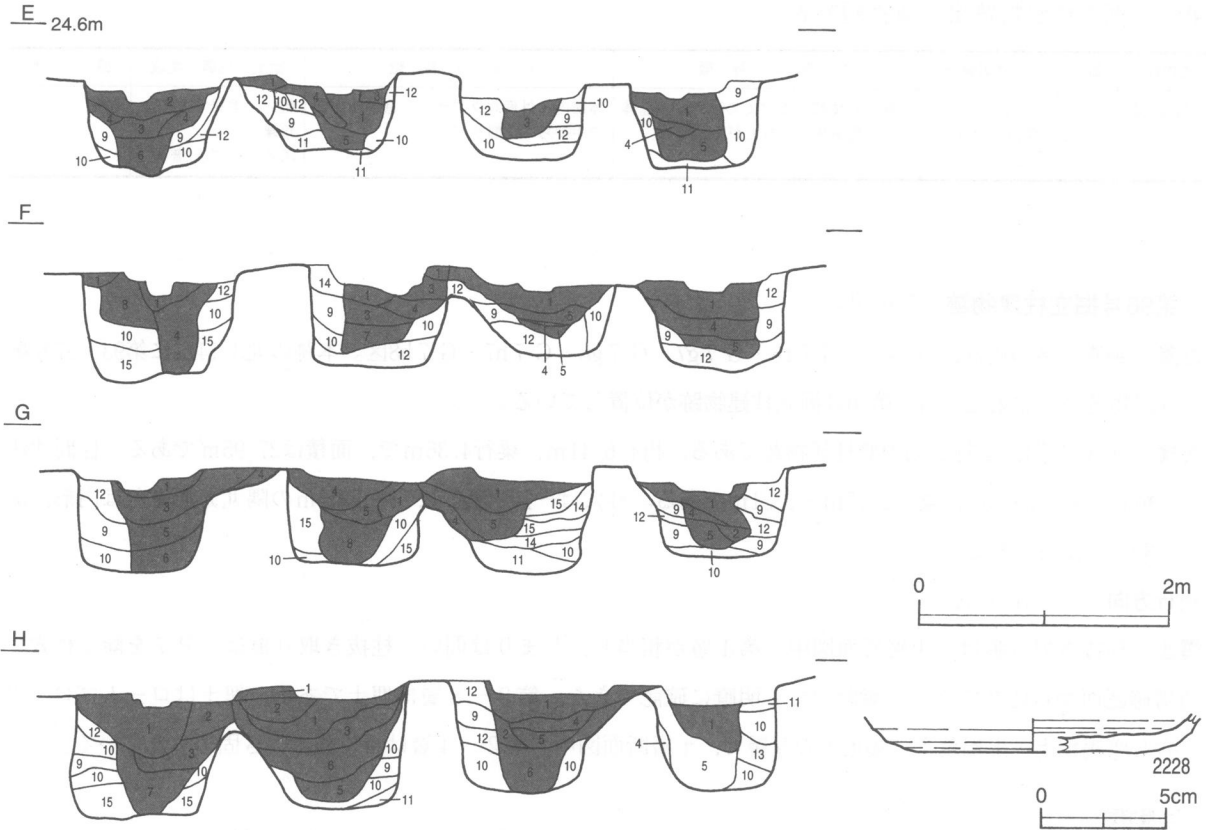
桁行方向 N-8°-W

覆土 土層断面図中，第1～8層が柱抜き取り痕に相当し，しまりは弱い。土層から，柱を抜き取るために，P 5・P 7・P 8・P 16は柱の東側を，P 1～P 3・P 6・P 11・P 13・P 14は柱の西側を掘り込んでいることが確認できた。覆土の状況から抜き取った後は，人為的に埋められたものと思われる。第9～15層は埋土であ



第624图 第95号掘立柱建物跡実测图





第625図 第95号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

る。埋土は、ロームブロック・黒色土粒子を含む暗褐色土・褐色土の互層で、強く叩き締められ版築状を呈する。

土層解説

- |        |  |
|--------|--|
| 1 暗褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量           |
| 2 暗褐色  | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・黒色土粒子微量          |
| 3 黒褐色  | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量                              |
| 4 暗褐色  | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量                  |
| 5 褐色   | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム大ブロック微量            |
| 6 褐色   | ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, ローム大ブロック微量         |
| 7 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・焼土粒子微量                |
| 8 褐色   | ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量                     |
| 9 褐色   | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量                            |
| 10 褐色  | ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量, ローム大ブロック・炭化粒子微量    |
| 11 褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック・黒色土粒子少量, ローム大ブロック微量   |
| 12 褐色  | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム大ブロック・炭化粒子・黒色土粒子微量 |
| 13 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・黒色土粒子微量          |
| 14 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 黒色土粒子微量               |
| 15 褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム大ブロック・炭化粒子微量    |

遺物 P 1 から土師器甕片 2 点・須恵器坏片 1 点, P 2 から土師器高坏脚部片 2 点・須恵器甕片 1 点, P 3 から土師器甕片 3 点・須恵器蓋片 1 点, P 4 から土師器甕片 1 点, P 5 から土師器甕片 2 点, P 6 から土師器甕片 2 点, P 7 から土師器甕片 3 点, P 8 から土師器甕片 1 点・須恵器甕片 1 点, P 9 から土師器甕片 3 点, P 10 から土師器坏片 1 点・須恵器甕片 3 点, P 11 から土師器甕片 1 点, P 12 から土師器甕片 1 点, P 13 から土師器高坏片 1 点, P 14 から土師器甕片 5 点, P 15 から土師器甕片 1 点, P 16 から須恵器甕片 1 点が出土している。第 625 図 2228 の須恵器坏は, P 1 の埋土から出土している。

所見 本跡は, 想定される建物の構造と出土遺物から 8 世紀中葉には「倉」として機能していたものと思われる。

第95号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第625図 2228	坏 須恵器	B (1.5) C [6.8]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部1方向の手持ちヘラ削り。	粗い、雲母・長石・角礫 灰オリーブ色、普通	5%

第96号掘立柱建物跡 (第626図)

**位置** 調査区域の南部、G7f7・G7f8・G7g7・G7g8・G7h7・G7h8区。本跡の北3.14mに第93・97号掘立柱建物跡が、北東22.0mに第86号掘立柱建物跡が位置している。

**規模** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行6.41m、梁行4.36mで、面積は27.95㎡である。柱間寸法は、桁行1.94～2.25m、梁行2.15m・2.21mである。柱穴は一辺(径)0.74～1.02mの隅丸方形または円形、深さ0.30～0.73mである。

**桁行方向** N-5°-E

**覆土** 柱抜き取り痕は、土層断面図中、第1層が相当し、しまりは弱い。柱抜き取り痕は、P7を除く柱穴で遺構確認面から確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。第2～8層は埋土である。埋土はロームブロックを含む暗褐色土・黒褐色土・褐色土の互層で、土層断面図中、第2～4層は特に強く突き固められている。

土層解説

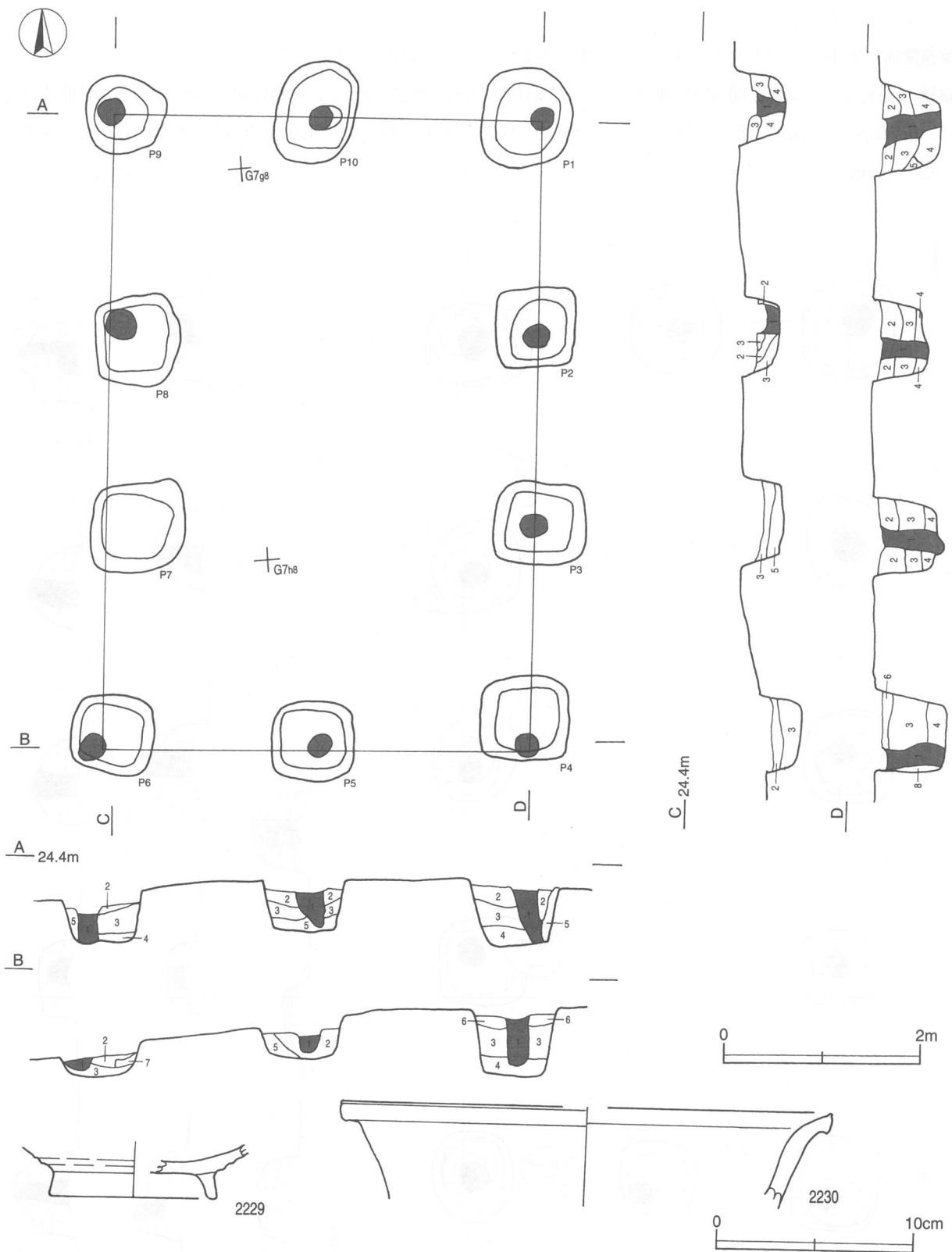
1 暗褐色	ローム粒子少量	5 褐色	ローム大ブロック多量
2 褐色	ローム中ブロック中量	6 黒褐色	ローム小ブロック多量
3 黒褐色	ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量	7 褐色	ローム小ブロック中量
4 黒褐色	ローム中ブロック多量	8 褐色	ローム小ブロック少量

**遺物** P1から土師器坏片1点・土師器甕片4点・須恵器甕片3点、P2から土師器甕片5点・須恵器甕片2点、P3から土師器甕片3点・須恵器甕片2点、P4から土師器甕片4点、P6から須恵器坏片1点・須恵器甕片1点、P7から土師器甕片1点・須恵器甕片3点、P8から土師器坏片1点・須恵器高台付坏片1点・須恵器甕1点、P9から土師器甕片3点・須恵器坏片1点・須恵器甕片1点、P10から土師器甕片5点・須恵器坏片2点・須恵器高台付坏片1点が出土している。第626図2229の須恵器高台付坏はP8の埋土から、2230の須恵器甕はP1の埋土から、それぞれ出土している。

**所見** 本跡の時期は、出土土器から9世紀中葉に構築されたものと推定される。本跡は、西桁行の柱筋を同一にする第97号掘立柱建物跡と、また、本跡の梁行方向と桁行方向をほぼ同一にするL字形に配置された第86・93・105号掘立柱建物跡群と同時期に機能を果たしていたものと考えられる。

第96号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第626図 2229	高台付坏 須恵器	B (2.8) D [8.6] E 1.2	底部から体部の破片。体部は外傾して開く。高台は、ハの字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	砂粒・雲母・石英 にぶい黄橙色 普通	10%
2230	甕 須恵器	A [25.0] B (4.8)	口縁部の破片。口縁部は外反して開く。口縁端部は上下に突出させている。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい黄橙色 普通	5%



第626図 第96号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

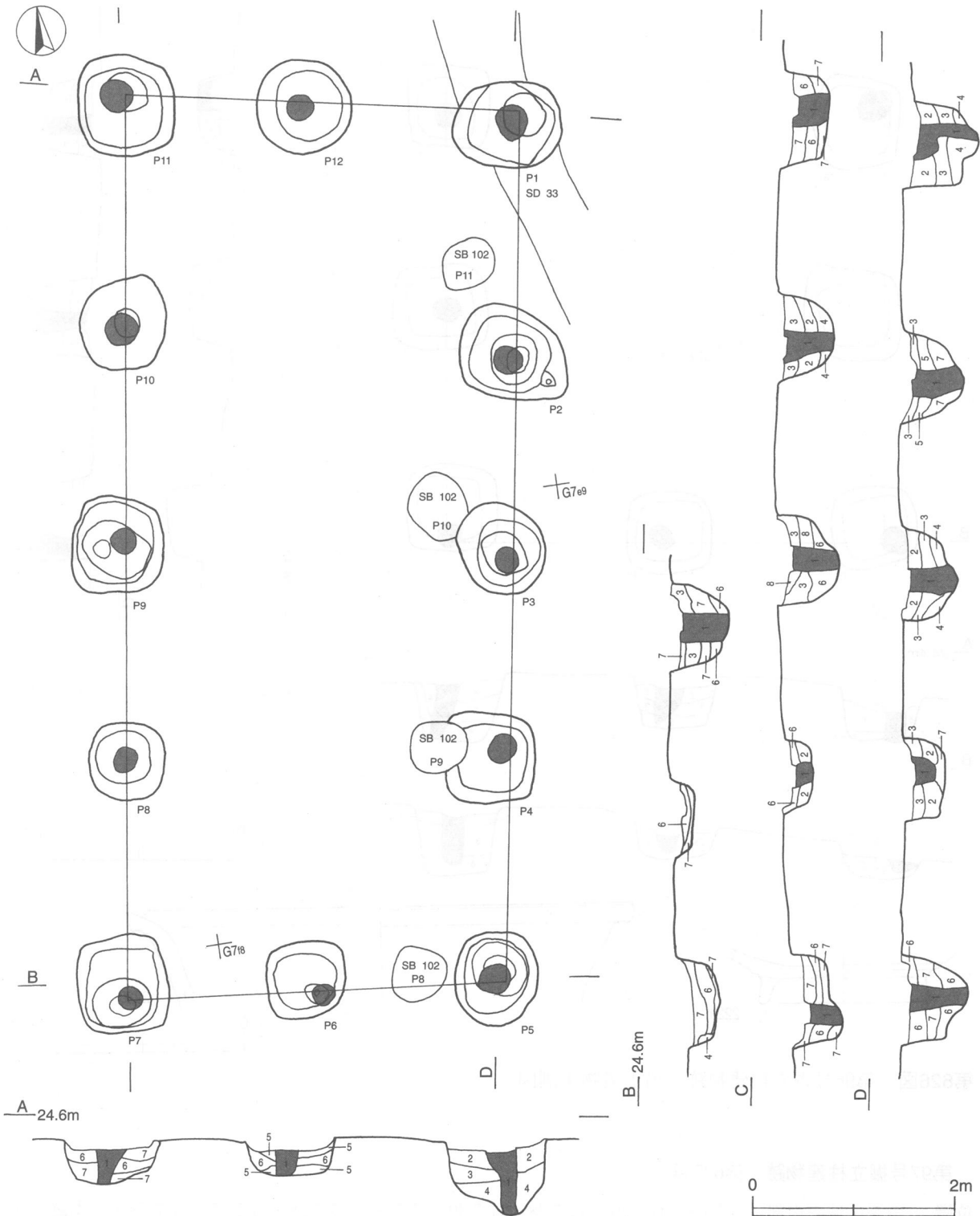
第97号掘立柱建物跡 (第627図)

位置 調査区域の南部，G 7 c 8・G 7 d 7・G 7 d 8・G 7 d 9・G 7 e 7・G 7 e 8・G 7 f 7・G 7 f 8区。本跡の北19.5mには第105号掘立柱建物跡が，南5.0mには第96号掘立柱建物跡が，北西4.5mには第93・108号掘立柱建

物跡が位置している。

**重複関係** 第102号掘立柱建物，第33号溝に掘り込まれていることから，本跡の方が古い。

**規模** 桁行4間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行8.70m，梁行3.75mで，面積は約32.63㎡である。柱間寸法は，桁行1.95～2.35m，梁行1.87m・1.99mである。柱穴は一辺（径）0.76～1.01mの隅丸方形または円形，深さ0.32～0.84mである。



第627図 第97号掘立柱建物跡実測図

桁行方向 N-9°-E

**覆土** 土層断面図中、第1層は柱抜き取り痕に相当し、粘性・しまり共に弱い。柱抜き取り痕は、すべての柱穴で遺構確認面から確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。第2～8層は埋土である。埋土は、ロームブロックを含む黒褐色土・暗褐色土・褐色土の互層で、土層断面図中、第2～4層は特に強く突き固められている。

**土層解説**

1 極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量	5 暗褐色	ローム小ブロック少量
2 黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック中量	6 黒褐色	ローム中ブロック微量
3 黒褐色	ローム小ブロック中量	7 褐色	ローム中ブロック多量
4 黒褐色	ローム小ブロック微量	8 褐色	ローム小ブロック多量

**遺物** P2から土師器甕片3点・須恵器坏片1点・須恵器甕片2点、P3から土師器甕片8点・須恵器坏片1点・須恵器甕片5点、P4から土師器坏片1点・土師器甕片4点・須恵器甕片1点、P5から土師器甕片1点、P6から土師器甕片6点・須恵器甕片2点、P7から土師器甕片1点・須恵器坏片1点、P8から土師器甕片2点・須恵器甕片1点、P9から土師器高台付坏片1点・土師器甕片1点、P10から土師器高台付坏片1点・土師器甕片2点が出土している。細片のため図示できなかった。

**所見** 本跡からの出土土器では細かな時期の判断をするのは困難である。本跡は、西桁行の柱筋を同一にする第96号掘立柱建物跡と、さらに、本跡の梁行方向と桁行方向をほぼ同一にするL字形に配置された第86・93・105号掘立柱建物跡群と同時期に機能を果たしていたものと考えられる。

**第98号掘立柱建物跡 (第628・629図)**

**位置** 調査区域の南西部、G5c8・G5c9・G5c0・G6c1・G5d8・G5d9・G5d0・G6d1・G5e0・G6e1区。南側に傾斜する台地の端部近くに位置する。北5mには第99・101号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** 第785・786・791・793号土坑に掘り込まれており、本跡が古い。

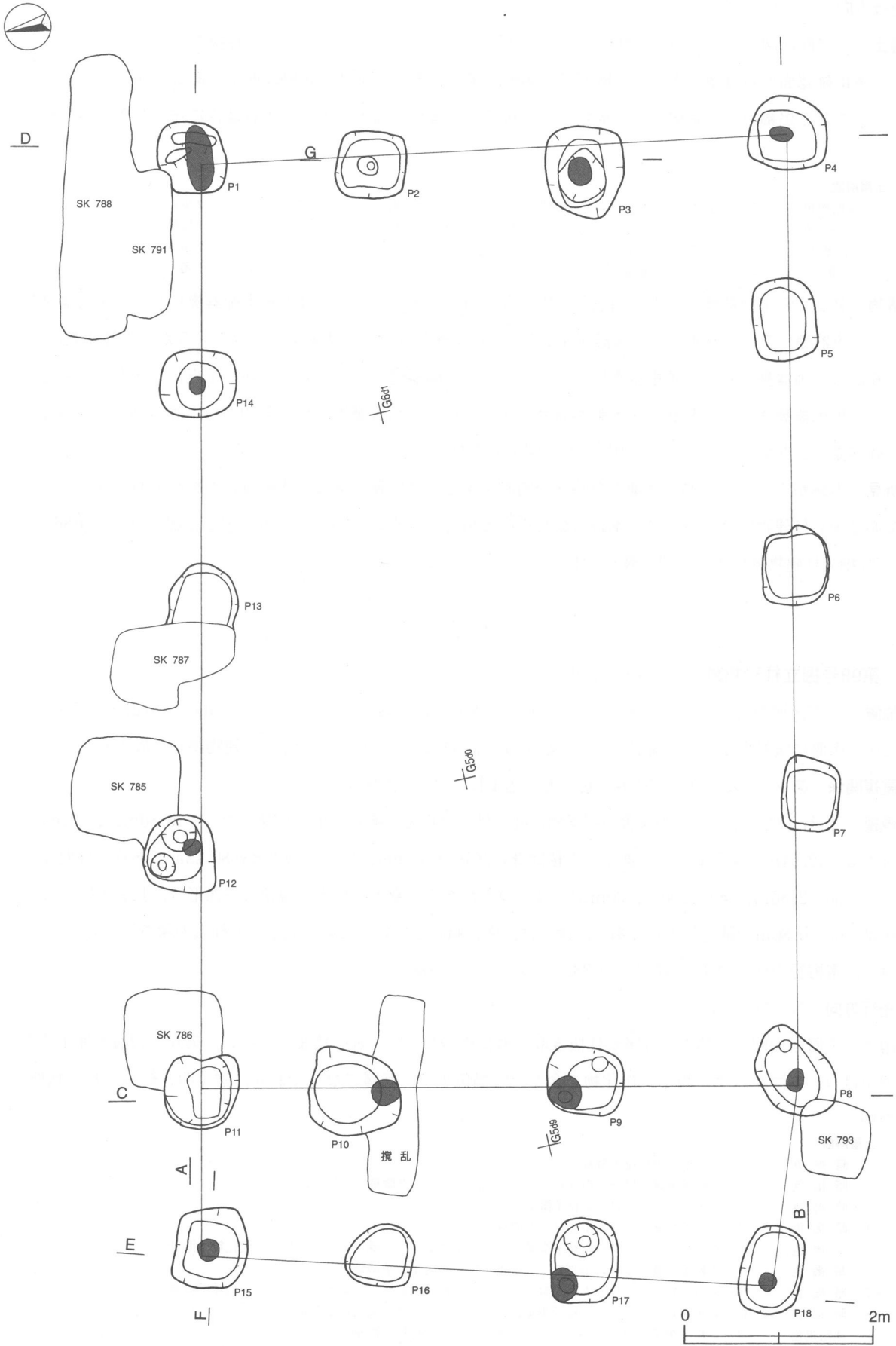
**規模** 桁行4間、梁行3間の身舎の西梁側に庇が付く建物跡である。桁行は身舎だけで10.80m、2.14mの庇も含めると12.94m、梁行6.20mである。面積は身舎部分が66.96㎡、庇も含めると約80.23㎡である。柱間寸法は、桁行2.30～2.80m、梁行1.90～2.30mで、ばらつきがある。身舎の柱穴の規模と平面形は、長軸0.79～1.02m、短軸0.60～0.80mの隅丸長方形である。深さは、南に傾斜しているため、北桁行の柱穴の深さは0.45～0.52mに対し、南桁行の柱穴の深さは0.25～0.33mと浅くなっている。

桁行方向 N-78°-W

**覆土** 土層断面図中、第1～5層が柱抜き取り痕に相当し、いずれも締まりがない。第6～12層が埋土である。埋土はロームブロック・焼土・炭化物を含んだ暗褐色土で、互層になっており、強く叩き締められた状態ではない。

**土層解説**

1 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
3 暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
5 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
6 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
7 暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック・炭化粒子微量
8 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
9 極暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
10 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量
11 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量
12 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量



第628图 第98号掘立柱建物跡実測图 (1)



第629图 第98号掘立柱建物跡実測图 (2)

遺物 出土していない。

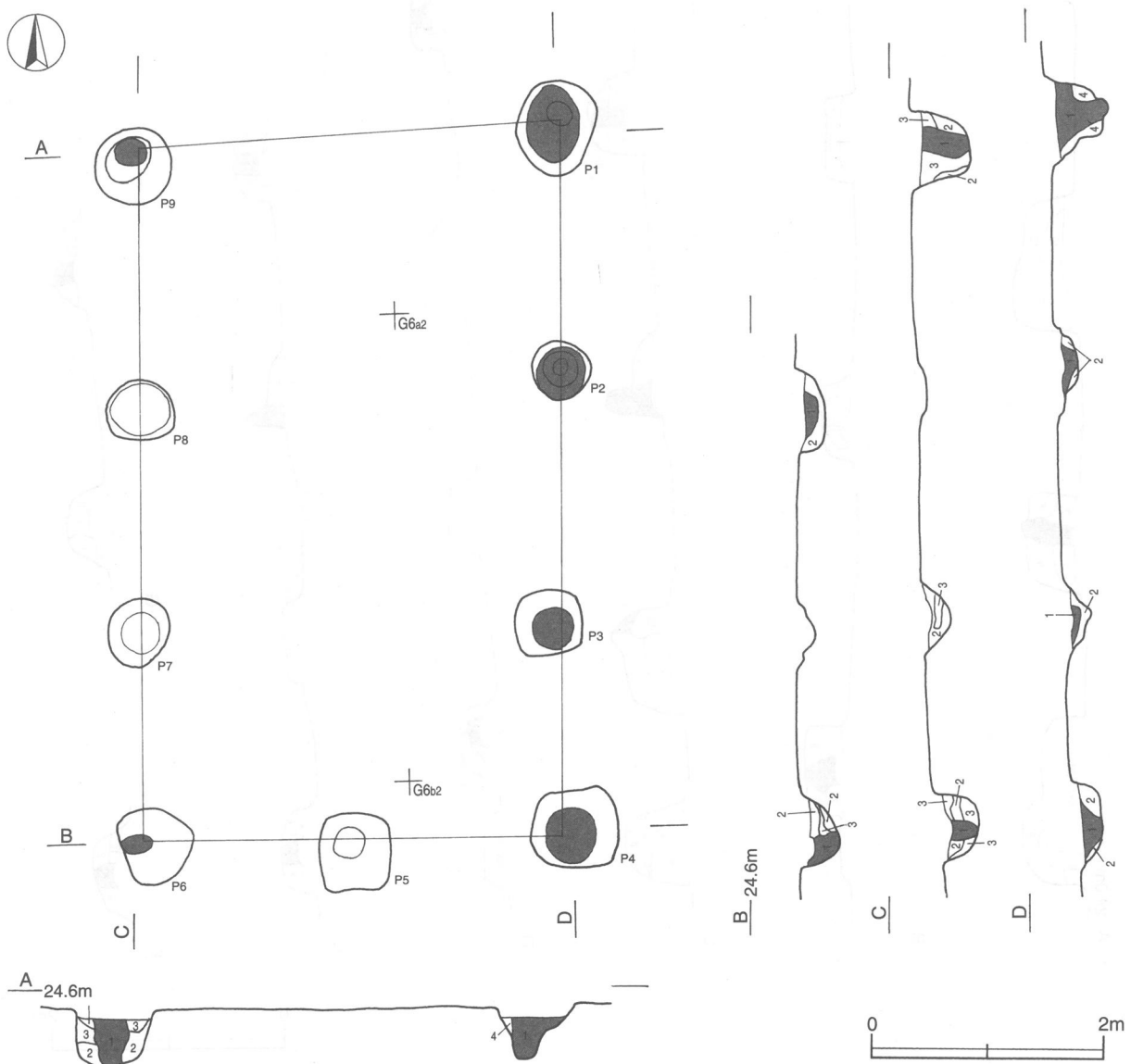
所見 本跡からの出土遺物はまったくなく、本跡と桁行方向を同じくする建物跡も周辺には見あたらない。東30.0mには、本跡と同規模・同方向の第84・88・119号掘立柱建物跡が位置しており、同時期に機能していた可能性もある。

### 第99号掘立柱建物跡 (第630図)

位置 調査区域の南西部, F 6 j1・F 6 J2・G 6 a1・G 6 a2・G 6 b1・G 6 b2区。北9.0mには第100号掘立柱建物跡が, 北15.0mには第85号掘立柱建物跡が, 西7mには第101号掘立柱建物跡が位置する。

規模 桁行3間, 梁行2間の側柱建物跡である。桁行6.20m, 梁行3.60mで, 面積は22.32 $\text{m}^2$ である。柱間寸法は, 桁行1.90~2.10m, 梁行1.80mである。柱穴の平面形は, 一辺(径)0.50~0.62mの隅丸方形又は円形である。深さは四隅のP1・P4・P6・P9が0.45~0.50mと深く, その他は0.18~0.22mと浅い。

主軸方向 N-2°-E



第630図 第99号掘立柱建物跡実測図



**覆土** 土層断面図中、第1層が柱抜き取り痕に相当し、締まりが弱い。柱抜き取り痕はP1～P4・P6・P9で確認できた。第2～4層が埋土である。埋土はロームブロックを含む暗褐色土である。

**土層解説**

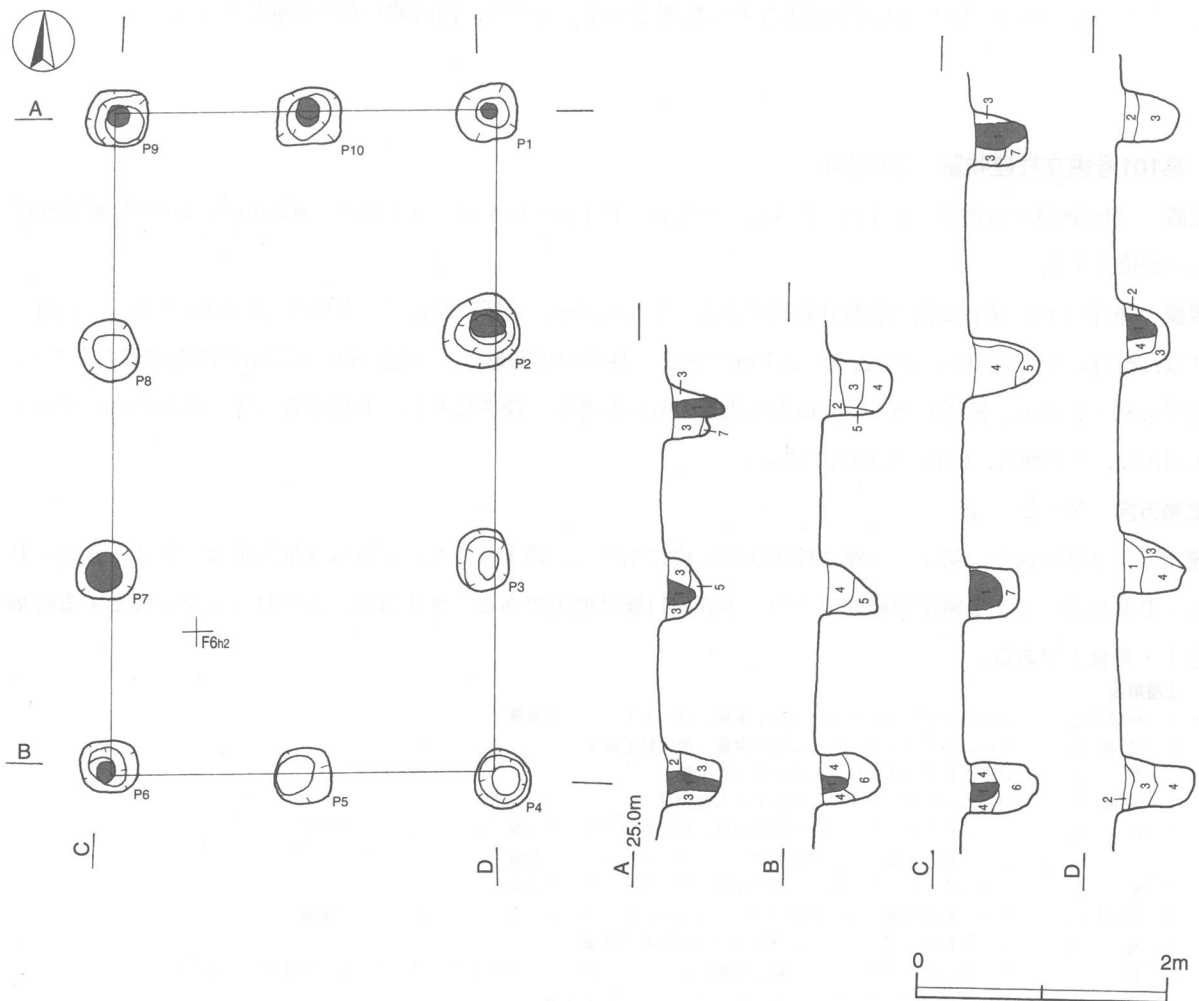
- |       |            |       |                   |
|-------|------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土小ブロック少量  | 3 暗褐色 | ローム小ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム中ブロック中量 | 4 暗褐色 | ローム中ブロック中量        |

**遺物** P2から土師器甕片1点、P4から土師器坏片1点・土師器甕片3点・須恵器坏片5点・須恵器甕片2点、P5から土師器甕片1点、P6から土師器坏片2点・土師器甕片13点・須恵器坏片1点、P7から須恵器坏片1点・須恵器甕片2点、P9から土師器甕片2点・須恵器蓋片1点が出土している。細片のため図示できる遺物はない。

**所見** 北9.0mにある第100号掘立柱建物跡とは東桁行の柱筋がそろい、西7mにある第101号掘立柱建物跡とは南梁行の柱筋がそろい、逆L字状に配置されている。おそらく同時期に機能していたと思われる。

**第100号掘立柱建物跡 (第631図)**

**位置** 調査区域の南西部、F6f1・F6f2・F6g1・F6g2・F6h1・F6h2区。南9.0mには第99号掘立柱建物跡が、北0.5mには第85号掘立柱建物跡が位置する。



第631図 第100号掘立柱建物跡実測図

**規模** 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.25m，梁行3.06mで，面積は16.07㎡である。柱間寸法は，桁行1.70～1.80m，梁行1.50～1.55mである。柱穴は一辺（径）0.45～0.50mの隅丸方形又は円形，深さ0.35～0.60mである。

**主軸方向** N-2°-E

**覆土** 土層断面図中，第1層が柱抜き取り痕に相当し，P1・P2・P6・P7・P9で確認できた。第2～7層が埋土である。埋土はロームブロックを含む暗褐色土・褐色土・極暗褐色土である。

**土層解説**

- |        |  |
|--------|--|
| 1 暗褐色  | ローム粒子・焼土粒子微量                           |
| 2 暗褐色  | ローム粒子少量，ローム小ブロック微量                     |
| 3 暗褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量            |
| 4 暗褐色  | ローム粒子微量                                |
| 5 褐色   | ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量            |
| 6 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量                       |
| 7 褐色   | ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量 |

**遺物** P6から土師器坏片3点・土師器甕片3点・須恵器甕片1点が出土している。細片のため図示できなかった。

**所見** 本跡の周辺には，第85・99・101・110号掘立柱建物跡が位置している。第85号掘立柱建物跡は，北側0.5mに近接しており，同時期の存在は不可能である。本跡の南90mには第99号掘立柱建物跡が位置し，桁行方向が同じである。また，南西9mに位置する第101号掘立柱建物跡は，規模に違いはあるが，桁行方向を同じくしている。第99・100・101号は逆L字状に配置されることから，同時期存在の可能性はある。

**第101号掘立柱建物跡（第632図）**

**位置** 調査区域の南西部，F4i8・F4i9・F4j8・F4j9・G4a8・G4a9区。東7.0mには第99号掘立柱建物跡が位置する。

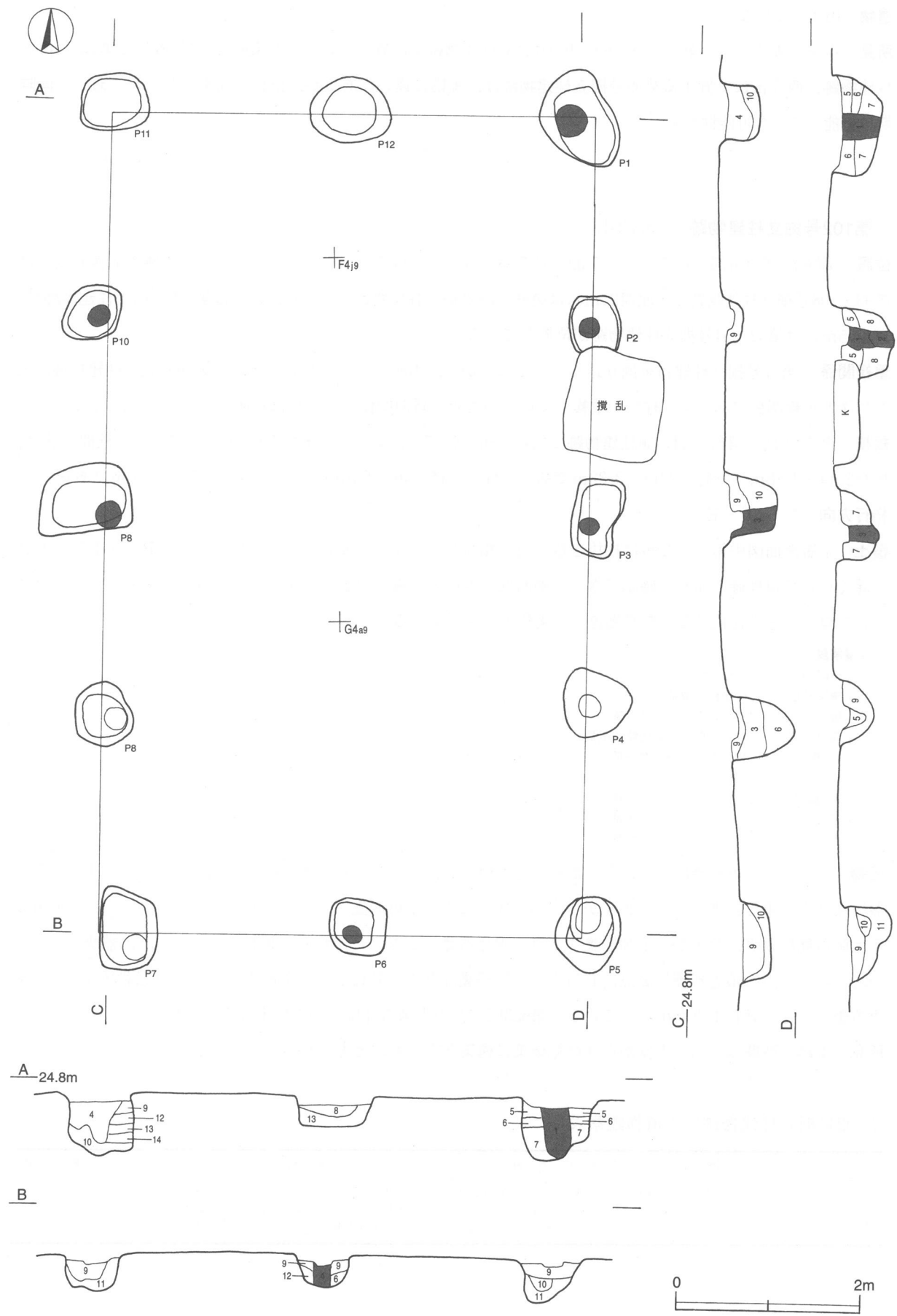
**規模** 桁行4間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行8.96m，梁行5.28mで，面積は約47.31㎡である。柱間寸法は，桁行2.00～2.50m，梁行2.60～2.70mである。柱穴の平面形は，一辺0.60～0.75mの隅丸方形のものと，長径0.80～1.02m，短径0.48～0.62mの楕円形のものがある。深さはP10・P12が特に浅くそれぞれ0.20m・0.34mで，その他は，0.48～0.66mである。

**主軸方向** N-2°-E

**覆土** 土層断面図中，第1～4層は柱抜き取り痕に相当し，締まりがない。柱抜き取り痕は，P2・P3・P6・P9において土層断面で確認できた。第5～14層は埋土である。埋土はロームブロックを主体とする暗褐色土・褐色土である。

**土層解説**

- |        |   |
|--------|---|
| 1 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量                 |
| 2 暗褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量                     |
| 3 褐色   | ローム粒子中量，ローム小ブロック少量                          |
| 4 暗褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子・山砂少量                         |
| 5 褐色   | ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，ローム大ブロック微量      |
| 6 褐色   | ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量                 |
| 7 褐色   | ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量                 |
| 8 暗褐色  | ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量      |
| 9 褐色   | ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量                     |
| 10 褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック・黒色土中ブロック少量，焼土粒子微量 |
| 11 褐色  | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量                   |
| 12 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量                   |
| 13 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量                 |
| 14 暗褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック少量                          |



第632图 第101号掘立柱建物迹实测图

遺物 出土していない。

所見 本跡の周辺には、第85・98・99・100号掘立柱建物跡が位置している。北東9.0mに位置する第100号掘立柱建物跡、西3mに位置する第99号掘立柱建物跡は、規模に違いはあるが、桁行方向を同じくしており、同時期に機能していた可能性がある。

### 第102号掘立柱建物跡（第633図）

位置 調査区域の南部、G7d8・G7d9・G7e8・G7e9・G7f8・G7f9・G7g9区。本跡の北西6mには第93・108号掘立柱建物跡が、北西21mには第86～88号掘立柱建物跡が、西16.5mには第119号掘立柱建物跡が、東13.5mには第52・54号掘立柱建物跡が位置している。

重複関係 第97号掘立柱建物を掘り込んでいることから、本跡の方が新しい。また、第96号掘立柱建物跡、第33号溝と重複関係にあるが、柱穴が重複していないため、新旧関係については不明である。

規模 桁行4間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行9.37m、梁行4.32mで面積40.48㎡である。柱間寸法は、桁行2.14～2.46m、梁行2.23m・2.32mである。柱穴は径0.46～0.70mの円形、深さ0.53～0.70mである。

桁行方向 N-10°-E

覆土 土層断面図中第1・2層は柱抜き取り痕に相当し、しまりが弱い。柱抜き取り痕は、P6・P10・P12を除く柱穴で遺構確認面から確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。第3～9層は埋土である。埋土はロームブロック・炭化粒子を含む暗褐色土・褐色土の互層である。

#### 土層解説

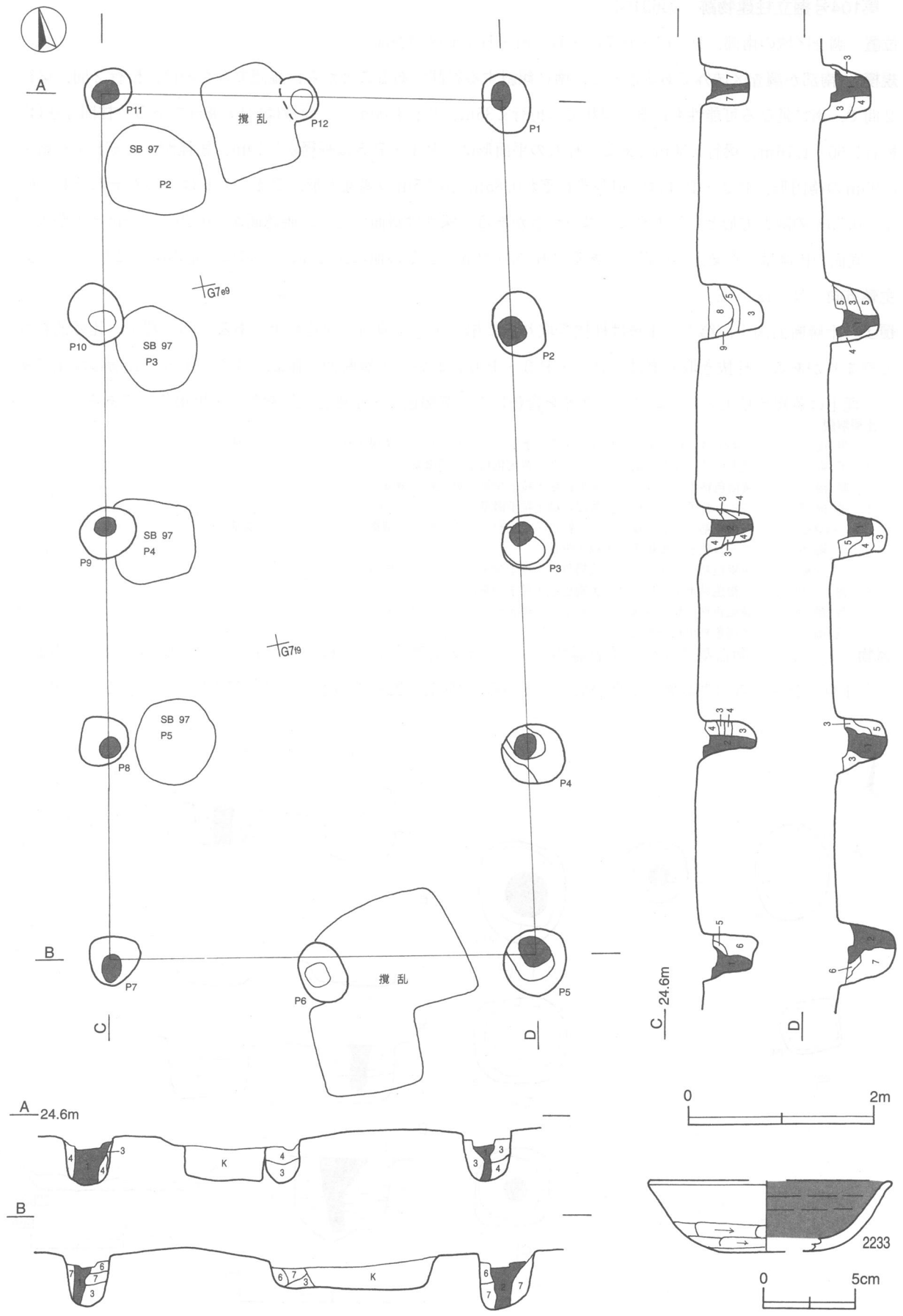
- |        |                  |
|--------|------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子微量          |
| 2 極暗褐色 | 炭化粒子微量           |
| 3 褐色   | ローム中ブロック少量       |
| 4 暗褐色  | ローム粒子・炭化粒子微量     |
| 5 暗褐色  | ローム中ブロック中量       |
| 6 暗褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 7 暗褐色  | ローム中ブロック少量       |
| 8 暗褐色  | ローム小ブロック中量       |
| 9 黒褐色  | ローム小ブロック少量       |

遺物 P1から須恵器甕片1点、P2から須恵器甕片2点、P3から土師器坏片1点・土師器甕片4点・須恵器坏片2点・須恵器甕片1点、P4から土師器坏片2点・須恵器甕片1点、P5から須恵器甕片7点、P6から土師器甕片3点、P8から土師器甕片2点・須恵器甕片1点、P10から土師器坏片5点・土師器甕片5点・須恵器坏片1点・須恵器甕片2点、P11から土師器甕片2点、P12から土師器甕片6点・須恵器坏片1点・須恵器甕片2点・砥石1点が出土している。第633図2233の土師器坏はP10の埋土から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から9世紀後葉に構築されたものと思われる。

### 第102号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第633図 2233	坏 土師器	A [13.2] B (3.8) C [4.6]	底部から体部の破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。	雲母・石英 明褐色 普通	15%



第633图 第102号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第104号掘立柱建物跡（第634図）

位置 調査区域の南部，H7c1・H7c2・H7d1・H7d2区の谷部。

規模 南部が調査区域外であることと，南に傾斜する谷部であることから，確認できたのは，桁行2間，梁行2間で，南に延びる可能性もある。現状では桁行3.36m，梁行3.00mで，面積は約10.08㎡である。柱間寸法は，桁行1.60～1.76m，梁行1.50mである。柱穴の平面形は，P1・P5は長径が1.10m，短径がそれぞれ0.80m・0.95mの楕円形，P2・P3は一辺がそれぞれ0.85m・0.95mの隅丸方形，P4・P6は一辺がそれぞれ0.60m・0.75mの隅丸方形というように，ばらつきがある。深さは斜面のため，確認面から0.20～0.90mと差が大きい。底面の標高は，北梁行の中間柱であるP6が20.40mで，その他は20.20mmとほぼ一定の深さになっている。

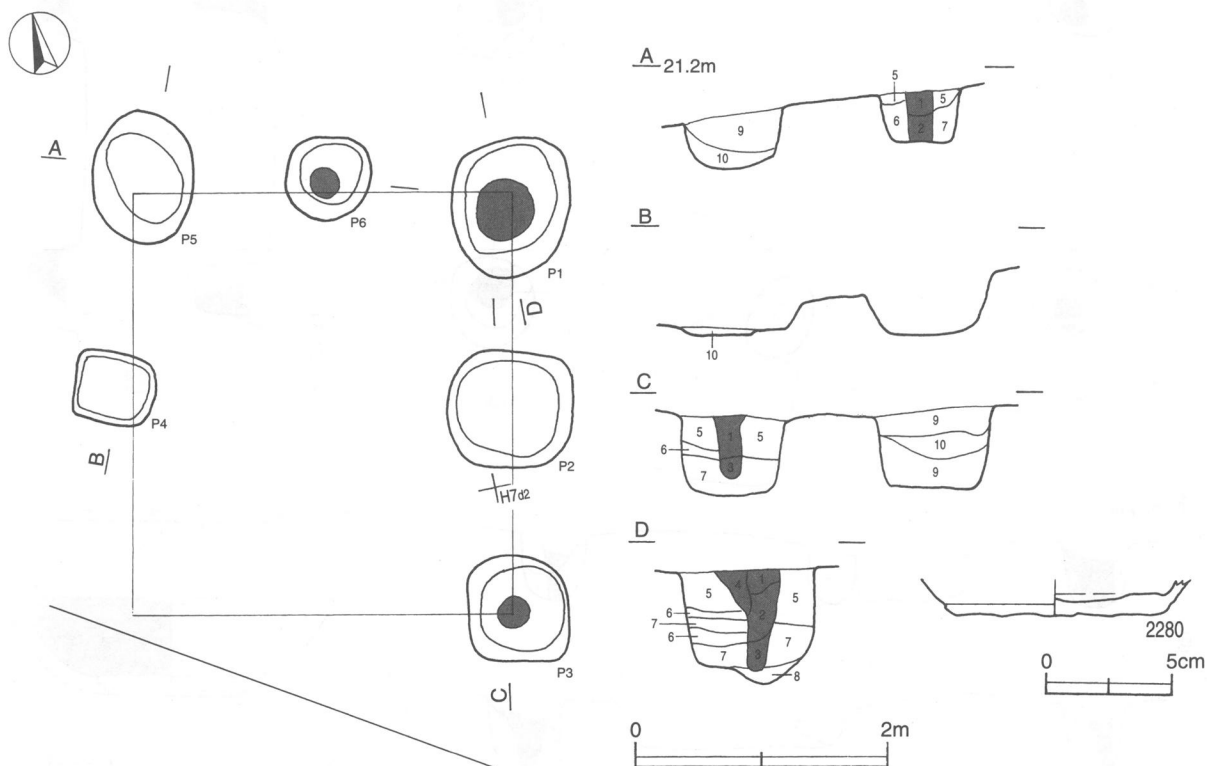
主軸方向 N-12°-E

覆土 土層断面図中，第1～4層は柱抜き取り痕に相当する。地山が砂質粘土であるため，覆土も比較的粘性と締まりがある。柱抜き取り痕は，P1・P3・P6において土層断面で確認できた。第5～10層は埋土である。埋土は黄褐色粘土・ロームブロック等を含むにぶい黄褐色土・暗褐色土・褐色土・黒褐色土である。

土層解説

- |          |  |
|----------|--|
| 1 黒褐色    | 黄褐色粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粘土小ブロック微量 |
| 2 黒褐色    | 焼土粒子・黄褐色粘土小ブロック・黄褐色粘土粒子微量              |
| 3 暗褐色    | 黄褐色粘土小ブロック・黄褐色粘土粒子少量，焼土粒子微量            |
| 4 黒褐色    | ローム粒子・炭化粒子・黄褐色粘土粒子微量                   |
| 5 にぶい黄褐色 | 黄褐色粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粘土小ブロック微量 |
| 6 黒褐色    | ローム粒子・黄褐色粘土粒子少量                        |
| 7 にぶい黄褐色 | 黄褐色粘土小ブロック・黄褐色粘土粒子少量，ローム粒子微量           |
| 8 褐色     | 黄褐色粘土小ブロック・黄褐色粘土粒子中量                   |
| 9 暗褐色    | 黄褐色粘土粒子少量，焼土粒子・黄褐色粘土小ブロック微量            |
| 10 暗褐色   | 黄褐色粘土粒子微量                              |

遺物 P1から土師器甕片3点・須恵器坏片1点・須恵器甕片1点・礫2点，P2から土師器甕片・須恵器坏片各1点，P5から須恵器甕片1点が出土している。第634図2280の須恵器坏は底部の破片で，P1から出土し



第634図 第104号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

ている。

**所見** 本跡は、標高22.0m以下の南谷部に位置しており、同じ22.0m以下の西谷部には第140号掘立柱建物跡が展開している。本跡と第140号掘立柱建物跡とは直線距離にして280mも離れてはいるが、同様に谷部に立地していること、細片のため時期を判断するには困難であるが、8世紀中葉段階と思われる土器が出土していることなどから、同時期に存在した可能性がある。

第104号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第634図 2280	坏 須恵器	B (1.2) C [8.2]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、雑なナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	10%

### 第105号掘立柱建物跡（第635図）

**位置** 調査区域の南部，F 7g7・F 7g8・F 7g9・F 7h7・F 7h8・F 7h9・F 7i9区。本跡の南10.5mには第93・108号掘立柱建物跡が，南西15mには第84・86～88号掘立柱建物跡が位置している。

**重複関係** 第298号住居跡を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

**規模** 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行7.86m，梁行4.64mで，面積は約36.47m<sup>2</sup>である。柱間寸法は桁行2.32～2.80m，梁行2.31m・2.46mである。柱穴は一辺0.80～0.95mの隅丸方形，深さ0.50～0.76mである。

**桁行方向** N-78°-W

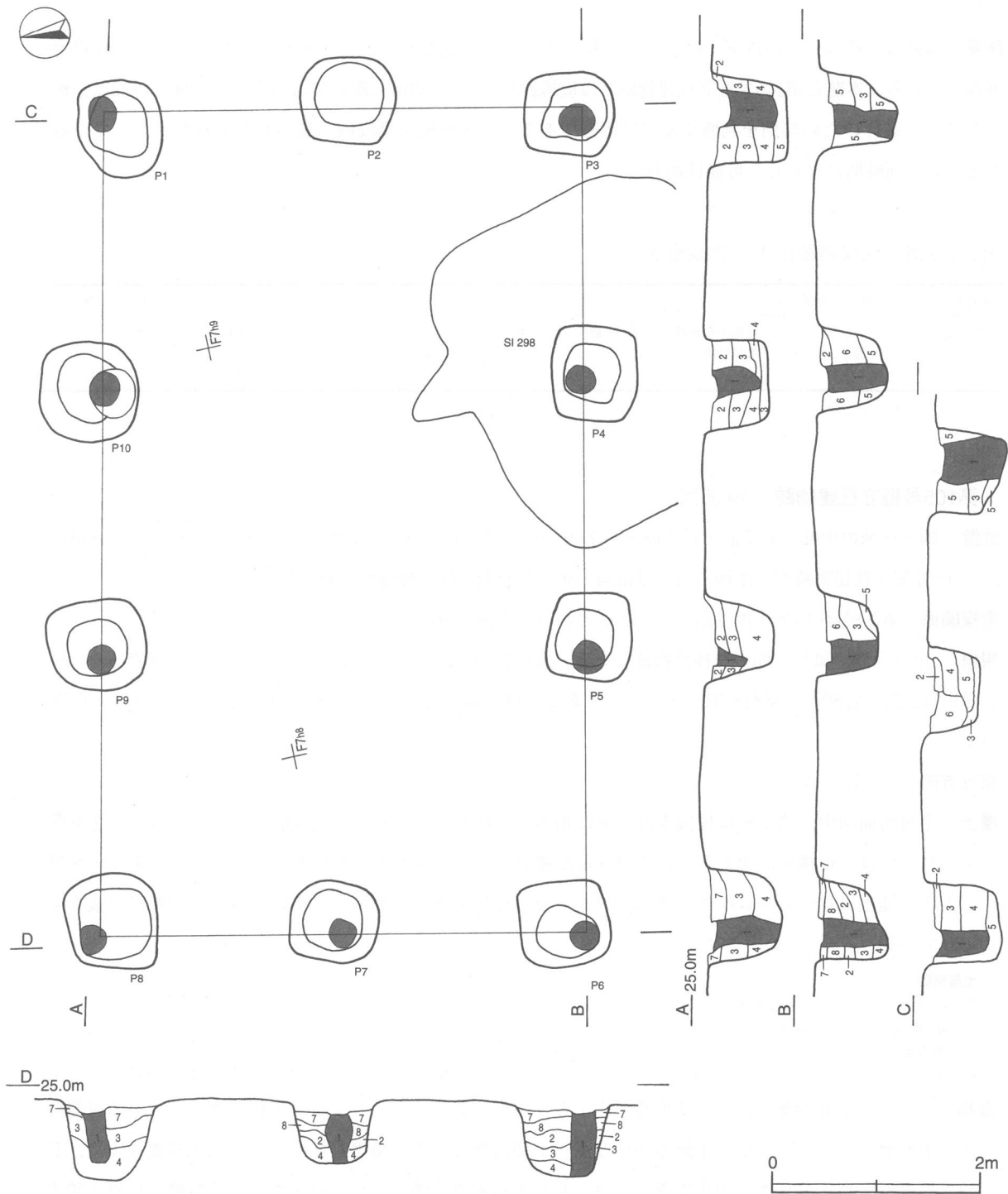
**覆土** 土層断面図中，第1層は柱抜き取り痕に相当し，粘性・しまり共に大変弱いものである。P2を除くすべての柱穴では，遺構確認面から柱抜き取り痕が確認でき，土層断面でも明瞭に確認できた。第2～8層は埋土である。埋土はロームブロック・焼土ブロックを含む暗褐色土・褐色土・極暗褐色土の互層で，強く突き固められている。

#### 土層解説

1 暗褐色	ローム粒子微量	5 褐色	ローム大ブロック多量
2 暗褐色	ローム中ブロック中量	6 褐色	ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量
3 極暗褐色	ローム大ブロック・ローム小ブロック中量	7 暗褐色	ローム中ブロック中量，ローム大ブロック少量
4 褐色	ローム大ブロック中量	8 暗褐色	ローム小ブロック多量，焼土小ブロック少量

**遺物** P1から土師器甕片12点・須恵器坏片1点・須恵器甕片8点，P2から土師器甕片7点・須恵器坏片2点・須恵器甕片7点，P3から土師器坏片3点・土師器甕片6点・須恵器坏片6点・須恵器甕片4点，P4から須恵器甕片2点，P5から須恵器甕片1点，P6から須恵器甕片1点，P7から土師器甕片14点・須恵器坏片2点・須恵器蓋片2点・須恵器甕片3点，P8から土師器甕片9点・須恵器甕片3点・土製支脚片1点，P9から土師器甕片12点・須恵器高台付坏片1点・須恵器甕片4点，P10から土師器坏片2点・土師器甕片4点・須恵器坏片1点・須恵器蓋片2点・須恵器甕片5点が出土している。細片のため図示することができなかった。

**所見** 本跡は8世紀後葉と思われる第298号住居跡を掘り込んでいることから，9世紀前葉以降に機能していたものと思われる。また，本跡の南10.5mには，第86・93号掘立柱建物跡があり，桁行方向の柱筋や柱穴規模がほぼ同じである。このことから本跡と第86・93号掘立柱建物跡は，L字形に配置され，同時期に機能を果たしていたものと考えられる。



第635図 第105号掘立柱建物跡実測図

第106号掘立柱建物跡 (第636図)

位置 調査区域の中央部, E 6 i 9・E 6 i 0区。

規模 桁行3間, 梁行2間の側柱建物跡である。桁行4.80m, 梁行3.15mで, 面積は15.12m<sup>2</sup>である。柱間寸法は, 桁行1.60m, 梁行1.45m・1.70mである。柱穴は径0.41~0.62mの円形, 深さ0.18~0.32mである。柱穴は小規模である。

桁行方向 N-90°-W



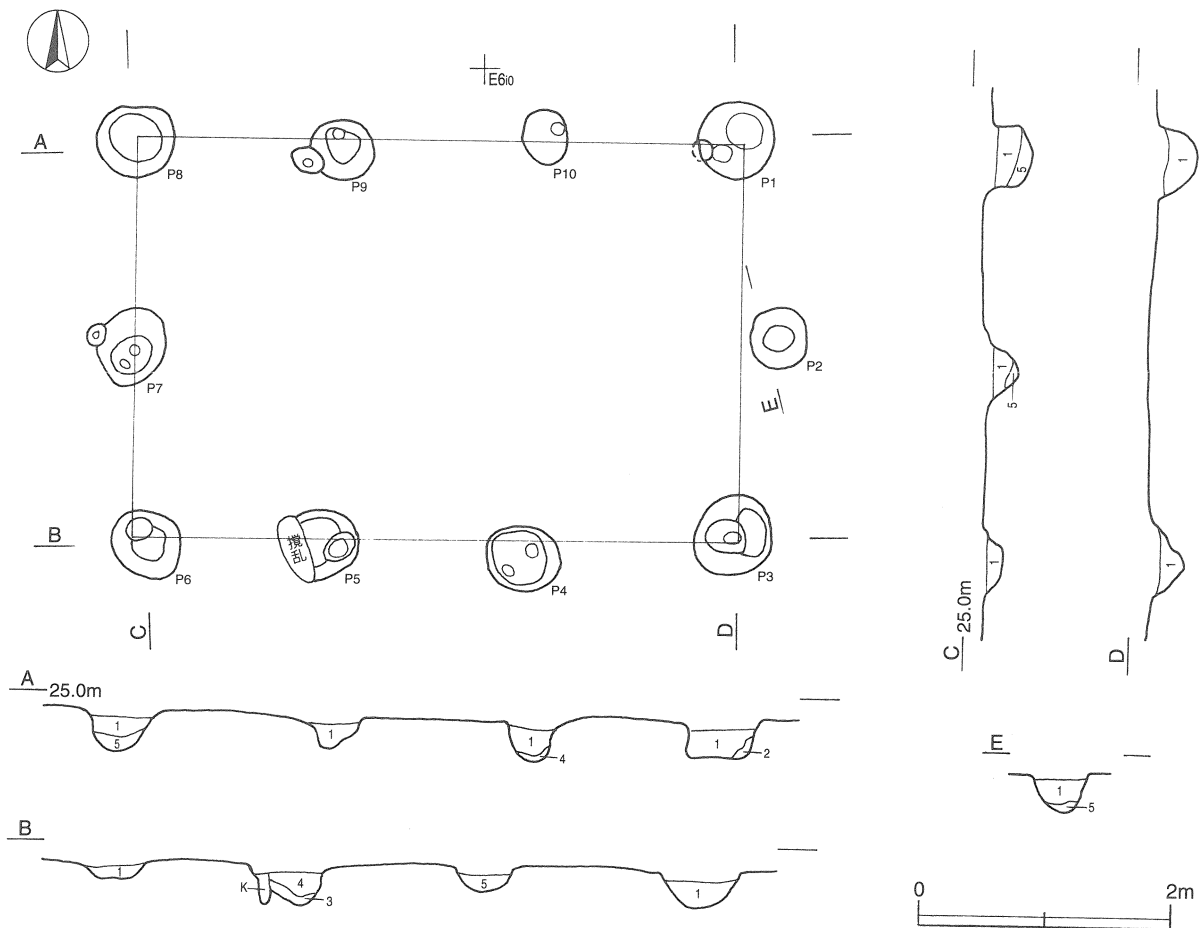
覆土 すべて抜き取り後の覆土と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム大ブロック微量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、竪穴住居跡や掘立柱建物跡等の遺構が構築されていない空白地帯に1棟だけ位置している。出土遺物もないため時期も不明である。また、本跡は、他の建物跡に比べると、小規模であり、奈良・平安時代に属するものかどうか不明である。



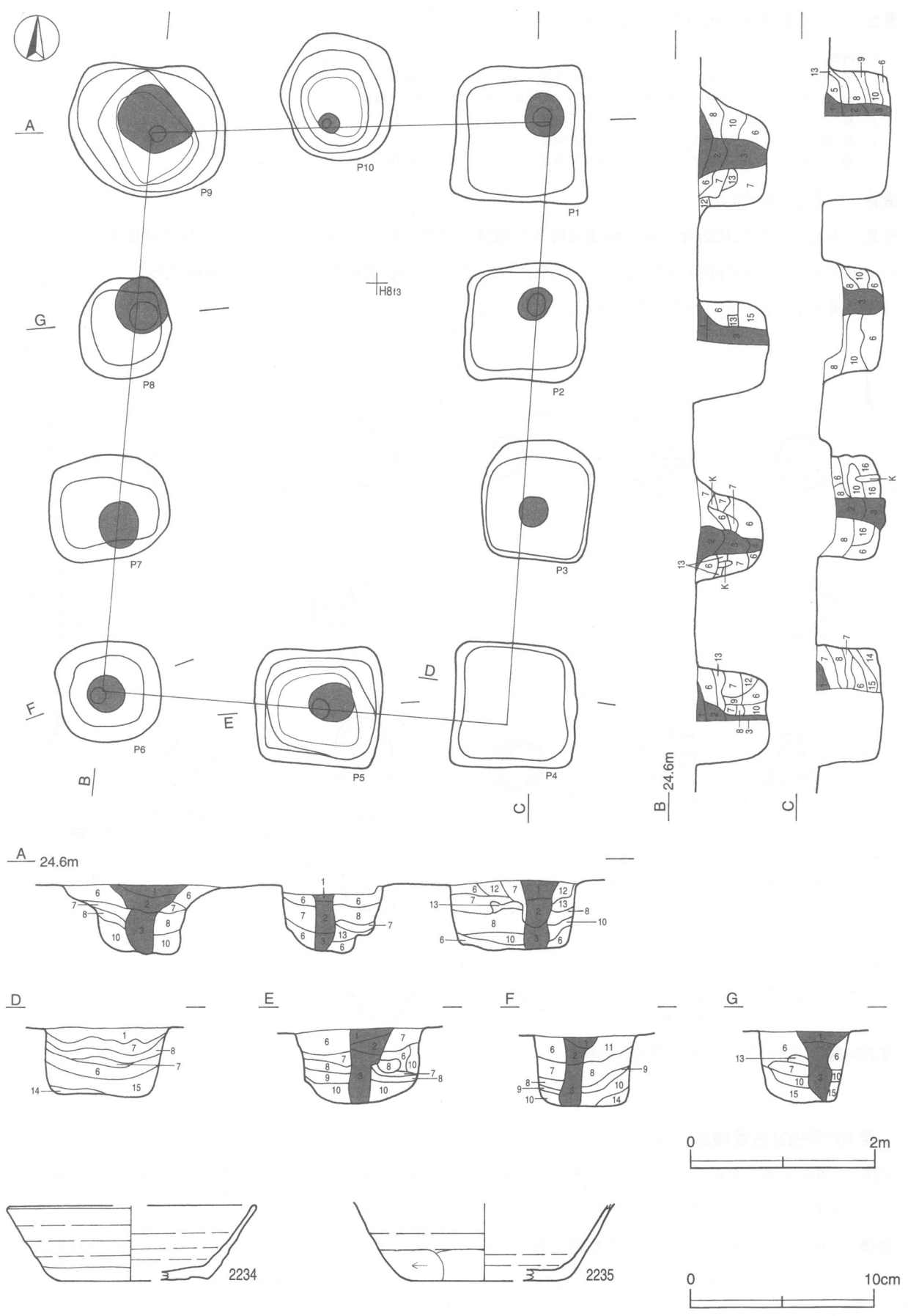
第636図 第106号掘立柱建物跡実測図

第107号掘立柱建物跡 (第637図)

位置 調査区域の南東部，H 8 e2・H 8 e3・H 8 f2・H 8 f3・H 8 g2・H 8 g3区。本跡の東3.8mには南梁行の柱筋が本跡と揃う第91号掘立柱建物跡が位置する。

規模 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行6.60m，梁行4.45mで，面積は29.37㎡である。柱間寸法は，桁行2.10~2.40m，梁行2.00~2.40mである。柱穴は一辺1.05~1.40mの隅丸方形，深さ0.70~0.80mで，大形である。

桁行方向 N-4°-E



第637图 第107号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

**覆土** 土層断面図中、第1～4層が柱抜き取り痕に相当し、締まりは弱い。第5～16層は埋土である。埋土は、ロームブロック・焼土・炭化粒子を含む暗褐色土・褐色土・黒褐色土の互層で、強く叩き締められ版築状を呈している。

**土層解説**

1	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
3	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量
5	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
6	褐色	ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量, ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
7	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック少量, ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
8	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック微量
9	黒褐色	ローム粒子微量
10	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量
11	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
12	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量
13	褐色	ローム粒子中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子微量
14	極暗褐色	ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
15	暗褐色	ローム粒子少量, ローム大ブロック・ローム小ブロック微量
16	褐色	ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量, ローム大ブロック・炭化粒子微量

**遺物** P1から土師器甕片15点・土師器高坏片1点・須恵器坏片2点・須恵器甕片5点, P2から土師器甕片4点・須恵器坏片3点・須恵器甕片2点, P3から土師器甕片9点・須恵器坏片1点・須恵器盤片1点・須恵器甕片2点, P4から土師器坏片3点・土師器甕片19点・須恵器坏片7点, 須恵器高盤片1点・須恵器甕片4点, P5から土師器坏片3点・土師器甕片13点, 土師器高坏片1点, 須恵器坏片6点, P6から土師器坏片5点・土師器甕片4点・須恵器坏片6点・須恵器蓋片3点・須恵器甕片1点, P7から土師器坏片7点・土師器甕片2点・須恵器坏片2点・須恵器高盤片1点・須恵器蓋片2点, P9から土師器坏片3点・土師器甕片2点・須恵器蓋片3点が出土している。第637図2234・2235の須恵器坏は, P1・P3の埋土からそれぞれ出土している。

**所見** 本跡は, 出土遺物から8世紀後葉に構築されたものと思われる。本跡と南梁行の柱筋が通る第91号掘立柱建物跡とは同時期に機能していたものと思われる。本跡は3間2間の建物で, 当遺跡では一般的な規模ではあるが, 柱穴の規模をみると, 大形でしっかりとしたものであるため, 「屋」の可能性はある。

**第107号掘立柱建物跡出土遺物観察表**

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第637図 2234	坏 須恵器	A [13.4]	平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部にいたる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後, ヘラナデ。	砂粒・雲母 黄灰色 普通	20%
		B 4.1				
		C [8.2]				
2235	坏 須恵器	B (4.2)	底部から体部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部多方向のヘラ削り。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	20%
		C [8.4]				

**第108号掘立柱建物跡 (第638図)**

**位置** 調査区域の南部, G7a7・G7a8・G7b7・G7b8区。本跡の北10.5mに第105号掘立柱建物跡が, 南4.0mに第97号掘立柱建物跡が位置している。

**重複関係** 第93号掘立柱建物跡と重複関係にあるが, 柱穴同士の重複はないため, 新旧関係については不明である。

**規模** 桁行3間, 梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.86m, 梁行3.20mで面積約18.75㎡である。柱間寸法は, 桁行1.89～2.09m, 梁行1.56m・1.64mである。柱穴は径0.66～0.90mの円形, 深さ0.16～0.26mである。P1とP2の間には, 柱穴の痕跡は確認されていない。

桁行方向 N-3°-E

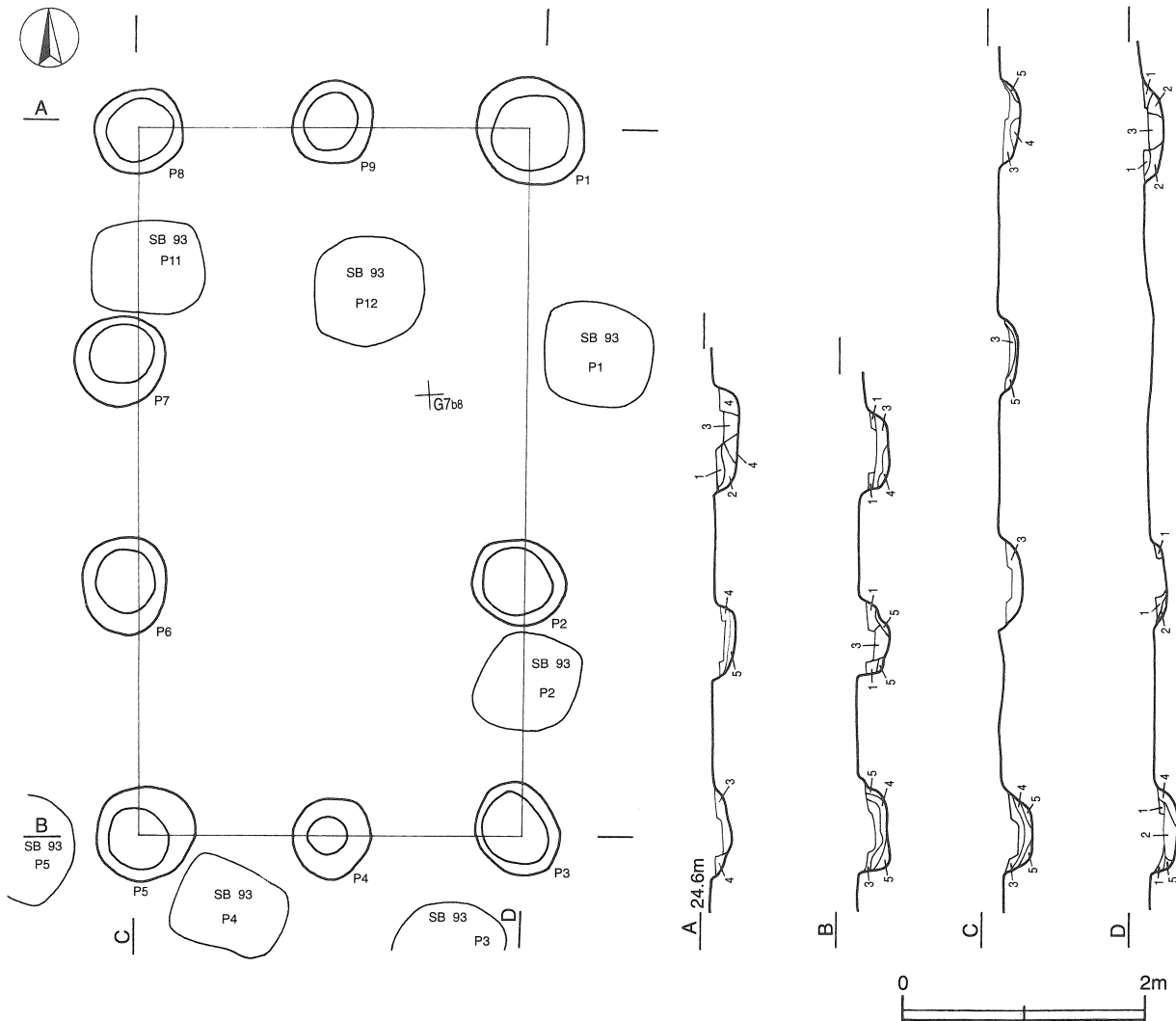
**覆土** 遺構確認面では、柱抜き取り痕を確認することができなかったが、土層観察での堆積状況・土の締め具合などから埋土と考えるよりは、柱抜き取り後の覆土とする方が妥当と思われる。

**土層解説**

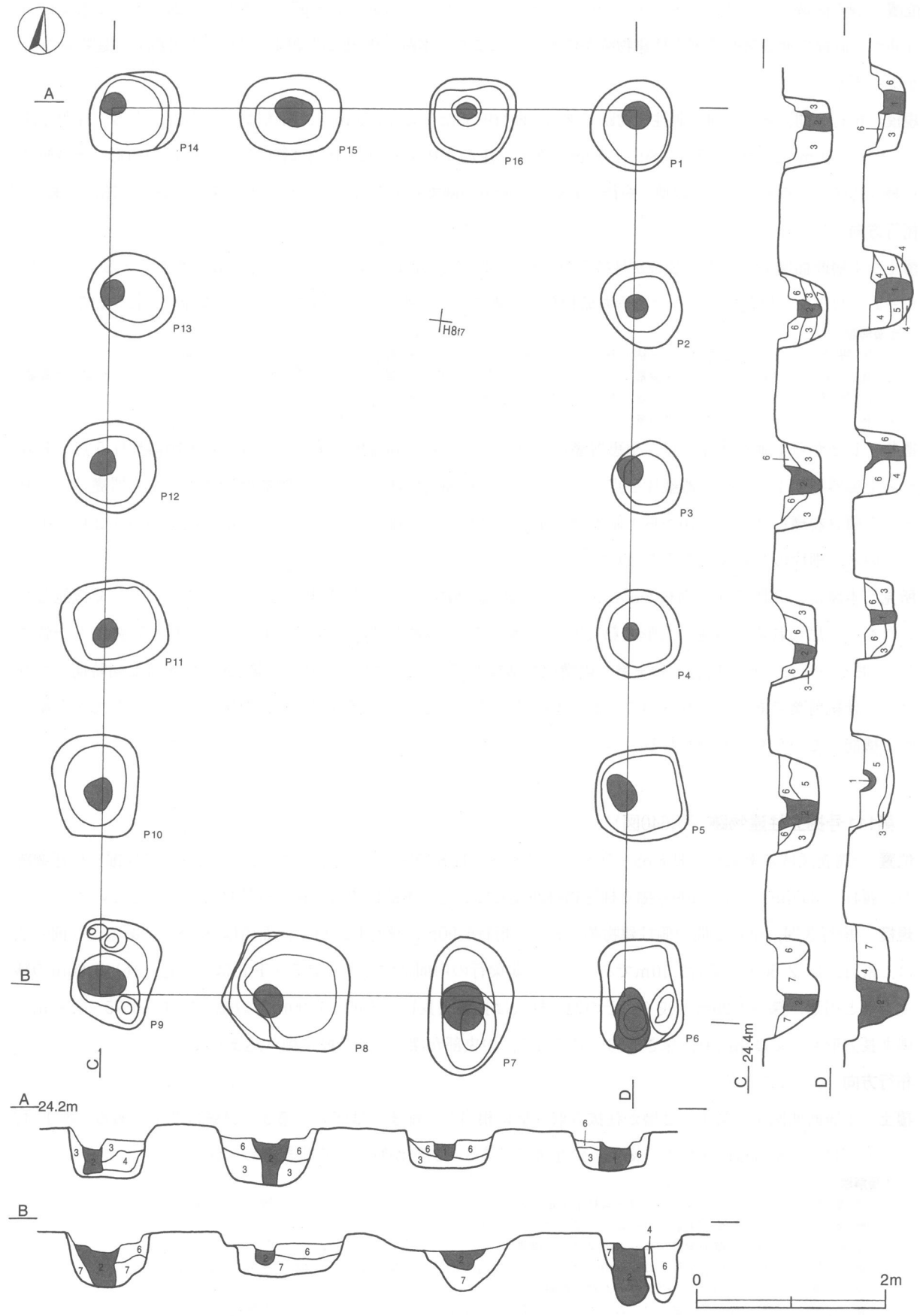
- 1 黒褐色      ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色      ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
- 3 極暗褐色    ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
- 4 褐色        ローム粒子少量
- 5 褐色        ローム粒子多量，ローム大ブロック・ローム中ブロック微量

**遺物** P3から土師器坏片1点・土師器甕片3点・須恵器蓋片2点，P4から土師器甕片3点，P5から土師器甕片3点，P7から土師器甕片4点，P8から土師器甕片2点が出土している。細片のため図示することができなかった。

**所見** 本跡からの出土土器では細かな時期の判断をするのは困難である。本跡は、9世紀中葉と推定される第93号掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴同士の重複はなく新旧ははっきりしない。しかし、同時期に存在することはなく、9世紀後葉以降に機能していたと思われる。また、本跡の南西11.0mに第281号住居跡が位置しており、第87・102号掘立柱建物跡を含む第281号住居跡を中心とする一群に属して機能していたものと考えられる。



第638図 第108号掘立柱建物跡実測図



第639图 第109号掘立柱建物迹实测图

### 第109号掘立柱建物跡（第639図）

**位置** 調査区域の南東部，H 8 e6・H 8 e7・H 8 f6・H 8 f7・H 8 g6・H 8 g7区。本跡の西24.5mには南梁行の柱筋が一直線を通る第95号掘立柱建物跡が位置する。また，本跡の周辺には第91・111・121号掘立柱建物跡などが集中する。

**規模** 桁行5間，梁行3間の側柱建物跡である。桁行9.35m，梁行5.56mで，面積は約51.99m<sup>2</sup>である。柱間寸法は，桁行1.70m・2.10m，梁行1.80～1.90mである。柱穴はP 3・P 12・P 13は径0.75～0.90mの円形，その他は長軸（長径）0.95～1.15m，短軸（短径）0.85～0.90mの隅丸長方形もしくは楕円形，深さ0.48～0.75mである。

**桁行方向** N-6°-W

**覆土** 土層断面図中，第1・2層が柱抜き取り痕に相当し，締まりは弱い。第3～7層は埋土である。埋土は，ロームブロック・黒色土ブロックを含む暗褐色土・褐色土・黒褐色土の互層で，強く叩き締められている。

#### 土層解説

1 黒褐色	ローム小ブロック・粘土小ブロック少量	5 黒褐色	ローム中ブロック少量
2 褐色	ローム小ブロック少量	6 暗褐色	黒色土大ブロック少量，ローム小ブロック微量
3 暗褐色	ローム中ブロック中量，黒色土小ブロック少量	7 褐色	ローム中ブロック中量
4 褐色	ローム大ブロック中量		

**遺物** P 2から土師器坏片2点・須恵器甕片1点，P 4から土師器甕片1点，P 5から土師器甕片5点，P 6から土師器甕片1点・須恵器甕片2点，P 7から土師器高台付坏片1点・土師器甕片4点・須恵器甕1点，P 8から須恵器甕片2点，P 10から土師器甕片1点，P 13から土師器甕片1点，P 14から土師器甕片2点が出土している。細片のため図示することができなかった。

**所見** 本跡は，3間5間で面積が50m<sup>2</sup>以上の大形の建物跡である。柱穴規模も大きく，「屋」として機能していたものと思われる。本跡と大形の第339号住居跡と建物の軸がほぼ一致し，第94号掘立柱建物跡とも一致する。おそらく「大形の住居+倉+屋」の構成で機能していたものと思われる。第339号住居跡と同時期とすれば，9世紀前葉である。これらのことから本跡は「屋」として，第95号掘立柱建物跡は「倉」として8世紀中葉に機能していたものと思われる。

### 第111号掘立柱建物跡（第640図）

**位置** 調査区域の南東部，H 8 e8・H 8 e9・H 8 f8・H 8 f9区。北0.5mには第113・114・121号掘立柱建物跡が，西4mには第91・107・109号掘立柱建物跡が並んでおり，本跡周辺には掘立柱建物跡が集中している。

**規模** 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行6.90m，梁行4.20mで，面積は28.98m<sup>2</sup>である。柱間寸法は，桁行2.1～2.50m，梁行2.10mである。南・北梁行の中間柱穴であるP 5・P 10は，一辺（径）0.80mの隅丸方形と円形，深さ0.20mと浅く，その他の柱穴は長軸（長径）0.90～1.00m，短軸（短径）0.75～0.87mの隅丸長方形もしくは楕円形，深さ0.50～0.75mで，中央部が深くなる二段に掘り込まれている。

**桁行方向** N-12°-W

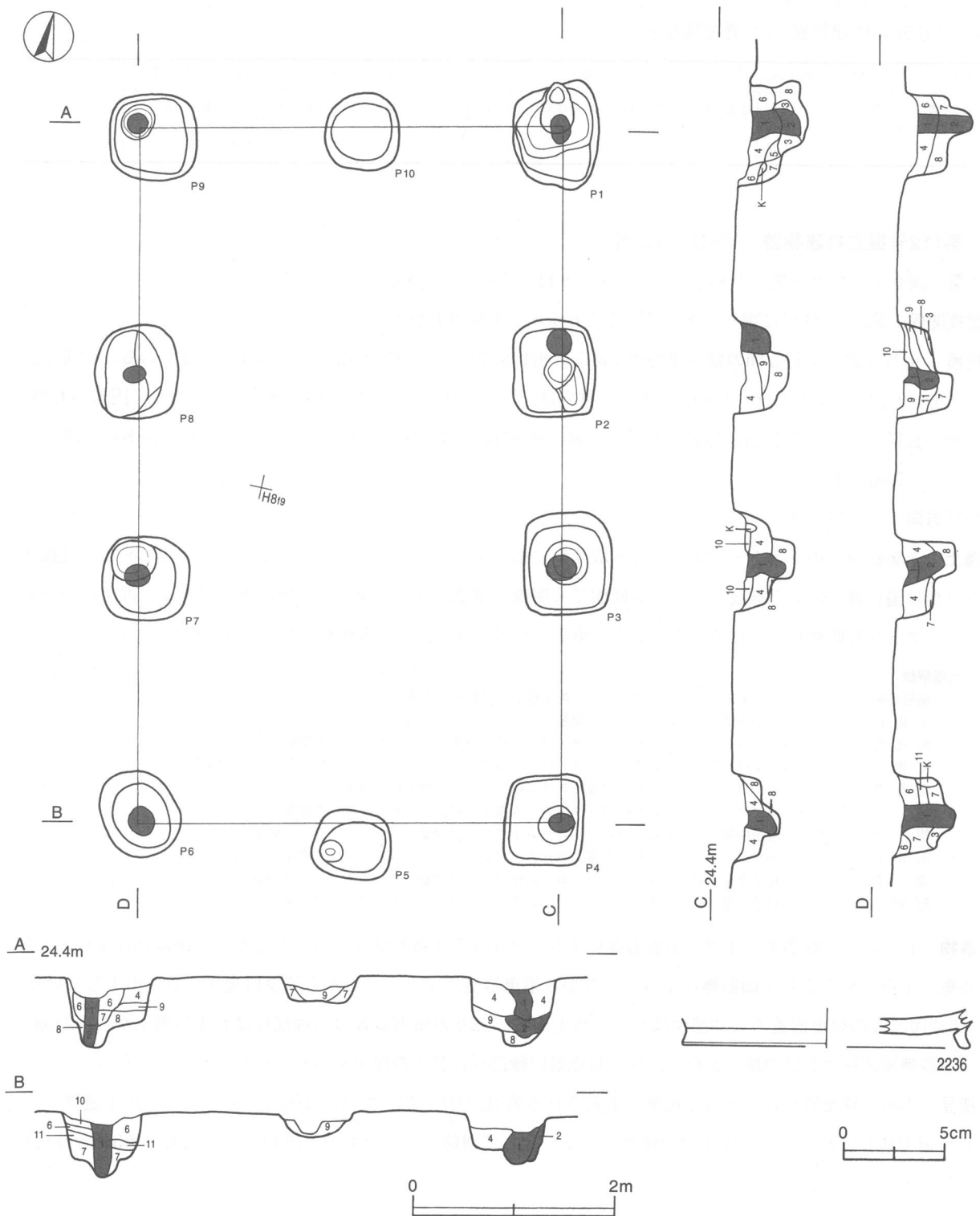
**覆土** 土層断面図中，第1・2層が柱抜き取り痕に相当し，締まりは弱い。第3～11層は埋土である。埋土は，ロームブロックを含む暗褐色土・褐色土の互層で，第8・11層が特に強く叩き締められている。

#### 土層解説

1 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
3 暗褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
4 褐色	ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・焼土粒子微量
5 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量
6 褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
7 褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
8 褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム大ブロック少量

- 9 暗褐色      ローム粒子少量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 10 暗褐色     ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
- 11 暗褐色     ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック微量

遺物 P 1 から須恵器甕片 2 点, P 2 から須恵器甕片 1 点, P 3 から土師器坏片 2 点・土師器甕片 2 点・須恵器坏片 1 点, P 4 から土師器甕片 3 点・須恵器坏片 1 点, P 5 から土師器高台付坏片 1 点・土師器甕片 2 点,



第640図 第111号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

P 6 から土師器甕片 2 点, P 7 から土師器甕片 1 点, P 9 から土師器甕片 4 点・土師器坏片 2 点・須恵器蓋片 2 点, P10から土師器甕片 1 点・須恵器坏片 1 点・須恵器蓋片 1 点・須恵器甕片 1 点が出土している。第640図 2236の須恵器盤は, P 5 の埋土から出土したものである。

**所見** 本跡の柱穴は二段掘りで, 西に12m離れた所に位置する第91号掘立柱建物跡と同様である。建物の規模や軸に違いがあるが, 出土土器は 8 世紀代には収まる時期のものなので, 第91・107号掘立柱建物跡と同時期に機能していたものとした。

#### 第111号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第640図 2236	盤 須 恵 器	B ( 1.9) D [14.0] E 1.0	底部の破片。高台は外方にふんばる。	内面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	砂粒・雲母・長石 灰白色 普通	10%

#### 第112号掘立柱建物跡 (第641・642図)

**位置** 調査区域の南東部, I 8 e3・I 8 e4・I 8 f4・I 8 f5・I 8 g4・I 8 g5区。

**重複関係** 第342号住居に掘り込まれていることから, 本跡の方が古い。

**規模** 桁行 4 間, 梁行 3 間の側柱建物跡である。桁行 8.40m, 梁行 5.25m で, 面積は 44.1m<sup>2</sup> である。柱間寸法は, 桁行 2.10m, 梁行 1.60~1.80m である。柱穴は, 一辺 (径) 0.80~0.85m の隅丸方形もしくは円形のもの, 長軸 (長径) 0.95~1.10m, 短軸 (短径) 0.80~0.85m の隅丸長方形もしくは楕円形のものがあり, 深さは 0.50~0.70m である。

**桁行方向** N-13°-W

**覆土** 土層断面図中, 第 1~4 層が柱抜き取り痕に相当する。P 2・P 5・P 7・P 8・P 10・P 12 の柱抜き取り痕は遺構確認面から確認でき, 土層断面でも明瞭に確認できた。第 5~10 層は埋土である。埋土はロームブロックを含む暗褐色土・褐色土の互層で, 第 7・9 層は特に強く叩き締められている。

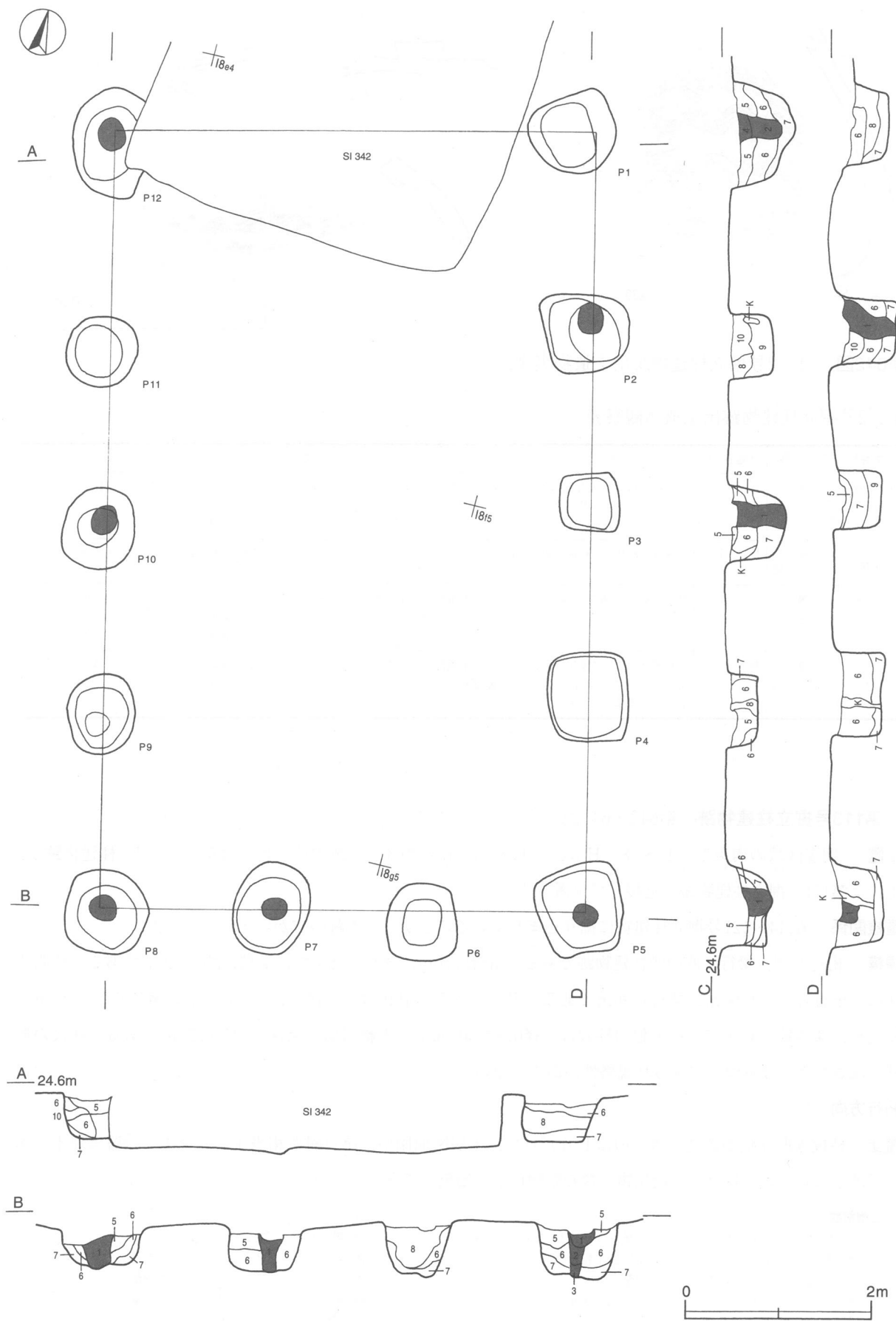
#### 土層解説

- |        |  |
|--------|--|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量                |
| 2 暗褐色  | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量                          |
| 3 暗褐色  | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム大ブロック微量        |
| 4 暗褐色  | ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・焼土粒子微量            |
| 6 褐色   | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム大ブロック微量        |
| 7 褐色   | ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量, ローム大ブロック微量     |
| 8 暗褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム大ブロック・ローム中ブロック微量        |
| 9 褐色   | ローム粒子多量, ローム中ブロック・ローム小ブロック中量, ローム大ブロック少量     |
| 10 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量        |

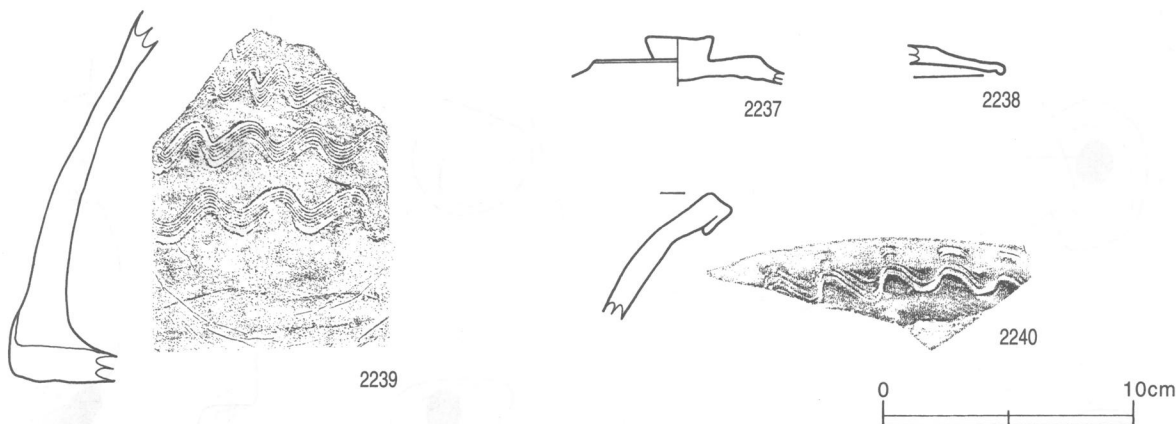
**遺物** P 1 から土師器甕片 4 点・須恵器蓋片 1 点, P 4 から土師器甕片 5 点, P 5 から土師器坏片 1 点・土師器甕片 1 点, P 7 から土師器甕片 1 点, P 9 から須恵器甕片 1 点, P 11 から須恵器甕片 1 点が出土している。第642図 2237の須恵器蓋の天井部片は P 11 の埋土から, 2238の須恵器蓋の口縁部片は P 1 の埋土から, 2239の須恵器甕頸部片は P 11 の埋土から, 2240の須恵器口縁部片は P 4 の埋土からそれぞれ出土している。

**所見** 本跡の構築時期は, 8 世紀後葉と推定される第342号住居跡に掘り込まれていることや, 出土遺物から, 8 世紀中葉と思われる。3 間 4 間の建物で「屋」として機能していたものと思われる。大形の第346号住居跡とセットとなると思われる。





第641图 第112号掘立柱建物跡実测图



第642図 第112号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第112号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第642図 2237	蓋 須恵器	B (1.9) F 2.7 G 1.0	天井部の破片。天井部は水平で、つまみは高めのボタン状である。	内面ロクロナデ。天井部回転ヘラ削り。	粗い、長石・角礫 灰色 普通	15%
2238	蓋 須恵器	B (1.2)	口縁部の破片。口縁部は短く屈曲する。	口縁部内・外面ロクロナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒・長石 灰色、普通	5%
2239	甕 須恵器	B (14.8)	頸部の破片。頸部は外反する。器壁は厚い。	頸部に7条1単位の櫛描き波状文。内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 黄灰色 普通	5% P L242
2240	甕 須恵器	B (4.9)	口縁部の破片。口縁部は大きく開き、外方に折り返す。口縁端部は平坦で断面長方形である。	頸部に5条1単位の櫛描き波状文。内面ナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色 不良	5%

### 第113号掘立柱建物跡 (第643・644図)

**位置** 調査区域の南東部，H 8 c8・H 8 c9・H 8 d8・H 8 d9区。本跡の西1mには第122号掘立柱建物跡が，南には第111号掘立柱建物跡が近接して位置する。

**重複関係** 第114・121号掘立柱建物に掘り込まれていることから，本跡の方がいずれよりも古い。

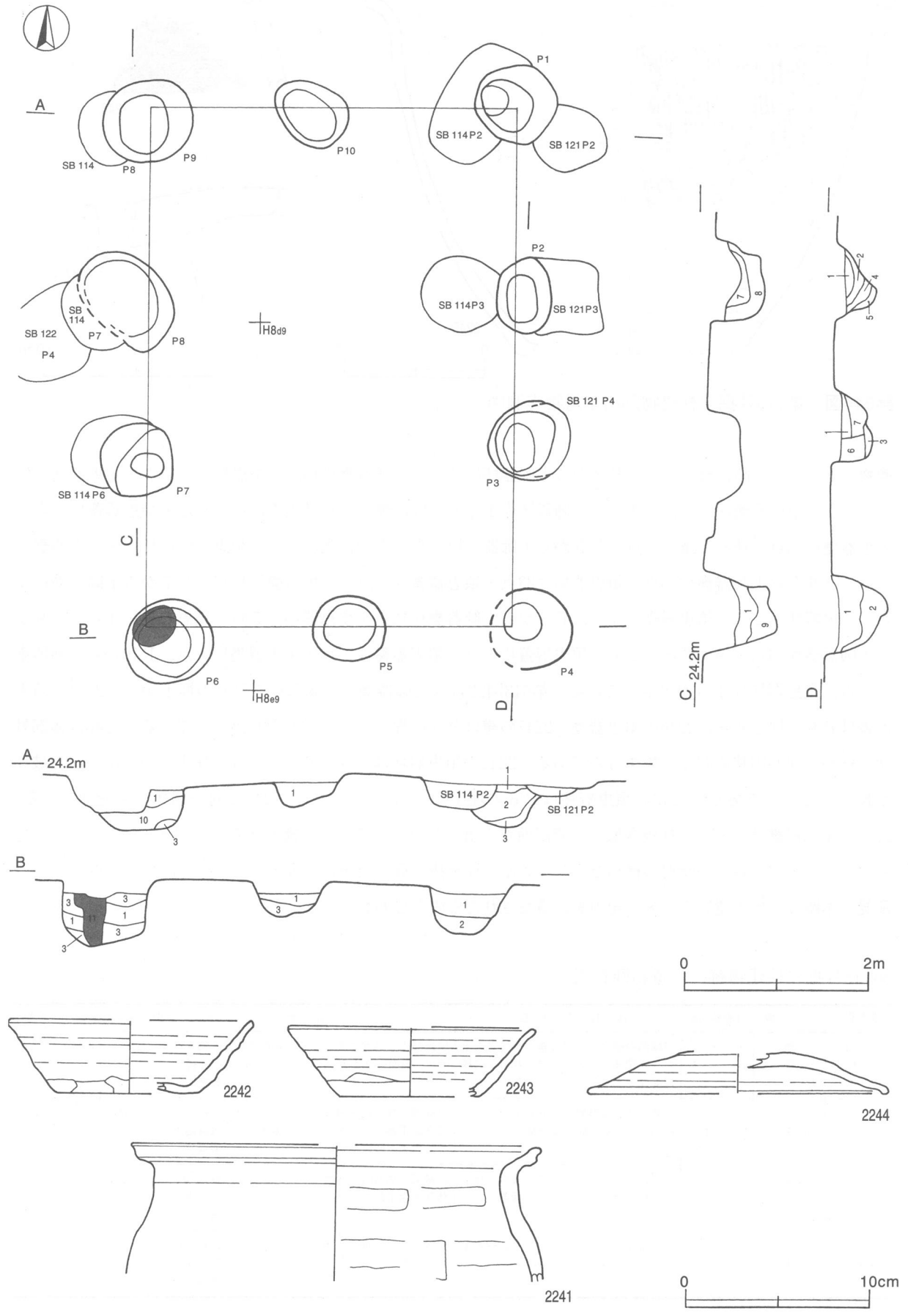
**規模** 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.60m，梁行3.98mで，面積は約22.29㎡である。柱間寸法は，桁行1.80～1.90m，梁行1.90mである。P 2・P 5・P 10は，長径0.75～0.85m，短軸0.60～0.70mの楕円形，深さ約0.40mで，その他の柱穴は，径0.80～0.90mの不整円形，深さ0.50～0.70mである。柱穴の形状，深さなどにばらつきがみられ規格性があまりない。

**桁行方向** N-0°

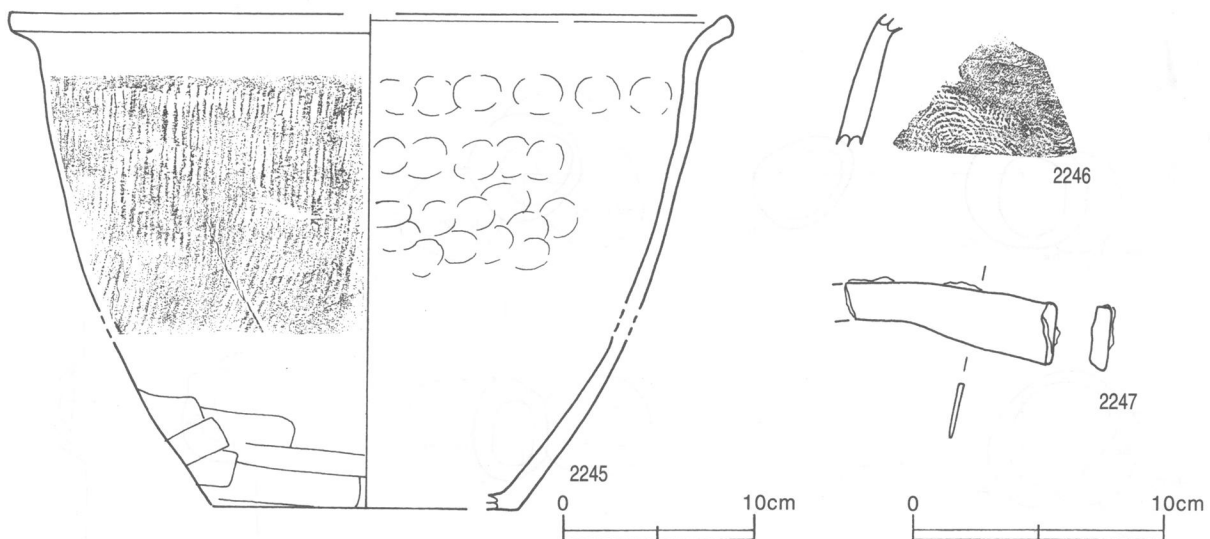
**覆土** 柱抜き取り痕が確認できたのはP 6だけで，土層断面図中，第11層が相当する。第1～10層は埋土である。埋土はロームブロック・炭化物を含む暗褐色土・褐色土である。

#### 土層解説

1 暗褐色	焼土粒子・炭化物中量，ローム小ブロック少量	7 暗褐色	焼土粒子少量
2 暗褐色	ローム小ブロック・黒色土粒子中量	8 褐色	ローム中ブロック中量
3 褐色	ローム中ブロック中量	9 褐色	ローム大ブロック多量
4 暗褐色	ローム小ブロック・炭化物少量	10 暗褐色	ローム中ブロック多量
5 暗褐色	ローム小ブロック少量	11 極暗褐色	ローム粒子微量
6 暗褐色	焼土小ブロック多量，ローム小ブロック・炭化物少量		



第643图 第113号掘立柱建物跡・出土遺物実測図



第644図 第113号掘立柱建物跡出土遺物実測図

**遺物** P 2 から土師器甕片 1 点, P 3 から土師器坏片 3 点, 土師器甕片 15 点・須恵器坏片 7 点・須恵器高台付坏片 1 点・須恵器甕片 4 点, P 4 から土師器坏片 1 点・土師器甕片 9 点・須恵器坏片 9 点・須恵器蓋片 1 点・須恵器甕片 13 点・鉄器 (鎌) 1 点, P 5 から土師器坏片 2 点・土師器甕片 13 点・須恵器坏片 13 点・須恵器甕片 6 点・P 6 から土師器甕片 33 点・須恵器坏片 33 点・須恵器蓋片 1 点・須恵器甕片 15 点, P 7 から土師器甕片 4 点・須恵器坏片 2 点・須恵器甕片 4 点, P 8 から土師器甕片 12 点・須恵器坏片 5 点・須恵器甕片 4 点, P 9 から土師器甕片 13 点・須恵器坏片 2 点・須恵器蓋片 1 点・須恵器盤片 1 点・須恵器甕片 1 点, P 10 から土師器甕片 6 点, 須恵器坏片 1 点が出土している。第643図2241は土師器甕の口縁部片でP 6 の埋土から, 2244の須恵器蓋はP 9 の埋土から, 2246の須恵器甕・2247の鎌はP 4 の埋土から, それぞれ出土している。2246は体部外面に細かい同心円状の叩きを施すものである。2242の須恵器坏はP 3・P 4・P 5 の埋土中から出土した破片が接合したものである。2243の須恵器坏はP 6 の埋土から出土しており, 2242と同一個体の可能性もある。2245の須恵器甕は, P 6 の柱抜き取りの確認面から出土したものである。縦方向の平行叩きを施しており, 他の出土土器よりも新しい時期の様相を示している。柱を抜き取った後に, 混入したものではないだろうか。

**所見** 本跡は, 出土遺物から8世紀中葉に構築されたものと思われる。

第113号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第643図 2241	甕 土師器	A [22.4] B (7.3)	口縁部の破片。体部は緩やかに立ち上がり, 頸部はくの字状に折れる。口縁端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面ナデ, 内面ヘラナデ。内面ヘラ当て痕。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	5% P L 242
2242	坏 須恵器	A [13.2] B 4.0 C [7.6]	平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部にいたる。底部は分厚い。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部多方向のヘラナデ, 回転ヘラ切り痕。	砂粒・長石・白色粒子 灰黄褐色 普通	30% P L 241
2243	坏 須恵器	A [13.3] B 3.7 C [7.6]	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部にいたる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・白色粒子 灰黄褐色 普通	15%
2244	蓋 須恵器	A [16.4] B (2.1)	天井部は高く, 丸みをもつ。口縁端部は短くつまみ出され, 丸みがある。	口縁部内・外面ロクロナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	15%

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第644図 2245	甕 須恵器	A [37.8] B (26.0) C [16.4]	平底。体部は外方に大きく立ち上がる。口縁部は外側に屈曲し、口縁端部は、つまみ上げられている。	口縁部内・外面口ロナデ。体部外面縦位の平行叩き。内面指頭押圧。	砂粒・雲母・長石 灰白色 普通	25% P L 242
2246	甕 須恵器	B (5.3)	体部の破片。	体部外面同心円状叩き。内面指頭押圧。	砂粒・雲母 灰色、普通	5%

遺物番号	器種	計測値					材質	特徴	備考
		全長(cm)	背幅(cm)	刃部最大幅(cm)	刃部最小幅(cm)	重量(g)			
2247	鎌	(8.6)	0.3	2.3	1.5	(106.7)	鉄	基部の折り曲げは0.7cm	P L 256

### 第114号掘立柱建物跡（第645図）

**位置** 調査区域の南東部，H 8 c8・H 8 c9・H 8 d8・H 8 d9区。西1mには第122号掘立柱建物跡が，南2.5mには第111号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** 第113・112号掘立柱建物跡を掘り込み，第121号掘立柱建物に掘り込まれていることから，本跡は第113・112号掘立柱建物跡より新しく，第121号掘立柱建物跡より古い。

**規模** 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.40m，梁行3.80mで，面積は20.52m<sup>2</sup>である。柱間寸法は，桁行1.80m，梁行1.90mである。P 1・P 2は，長軸1.50m・1.32m，短軸0.75mの不整楕円形，深さ約0.38m・0.25mで，その他の柱穴は，一辺0.80～1.00mの隅丸方形，深さ0.20～0.40mである。

**桁行方向** N-0°

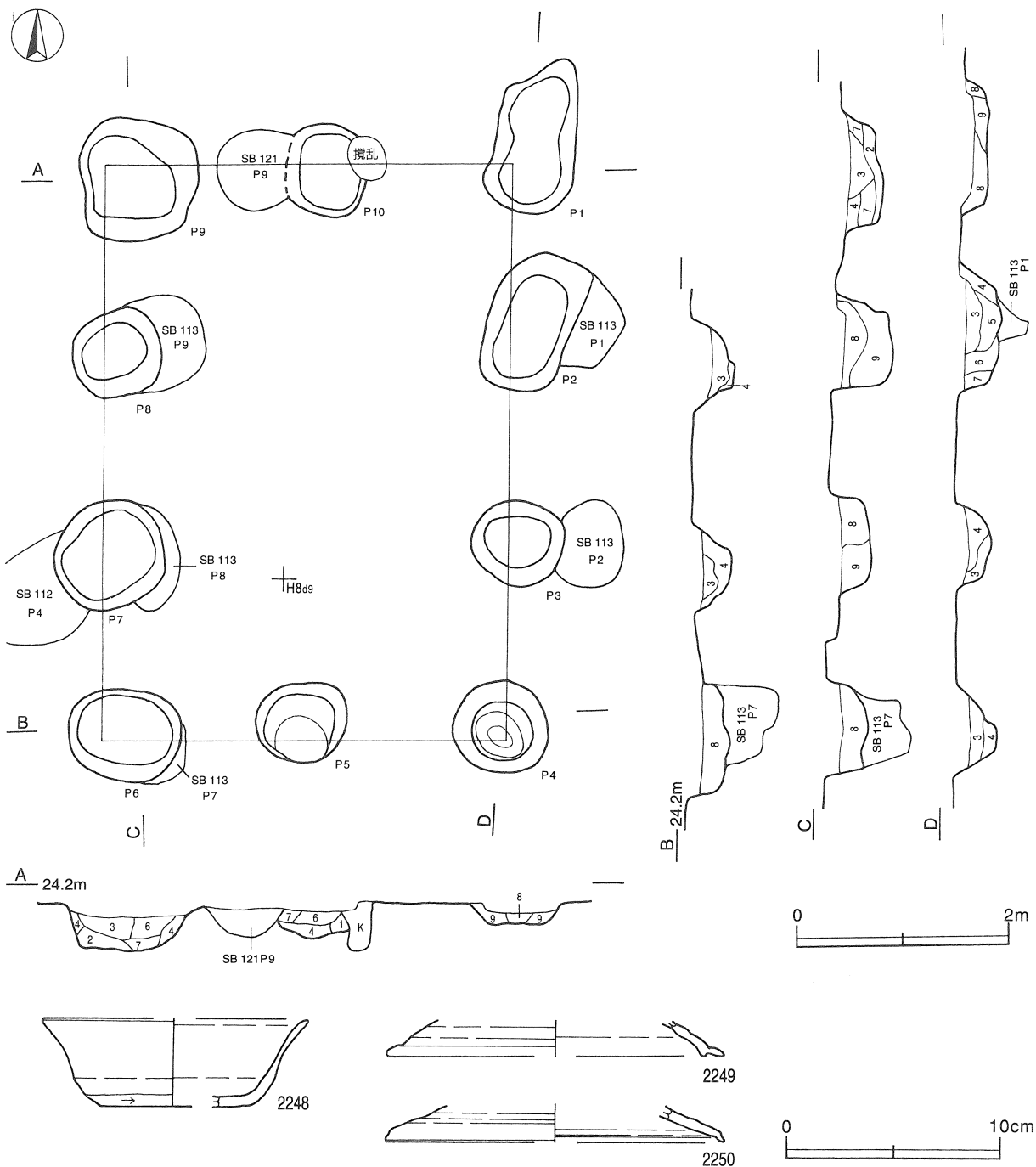
**覆土** 柱抜き取り痕は確認できなかった。埋土はロームブロック・焼土・炭化物を含む暗褐色土・褐色土である。P 6・P 8は，第113号の柱穴が埋め土された上部に構築されている。

#### 土層解説

1 褐色	ローム中ブロック多量，焼土粒子少量	6 褐色	ローム中ブロック中量，焼土中ブロック・焼土粒子少量
2 褐色	ローム大ブロック多量	7 褐色	ローム中ブロック中量
3 暗褐色	ローム小ブロック・焼土粒子少量	8 暗褐色	焼土小ブロック・炭化物中量，ローム中ブロック少量
4 褐色	ローム中ブロック中量，焼土小ブロック少量	9 暗褐色	ローム小ブロック・黒色土粒子中量
5 暗褐色	ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量		

**遺物** P 1から土師器甕片3点，P 2から土師器坏片1点，土師器甕片23点・須恵器坏片6点・須恵器高台付坏片1点・須恵器蓋1点，須恵器甕片6点，P 3から土師器坏片1点，土師器甕片11点・須恵器甕片2点，P 4から土師器皿片2点・土師器甕片7点・須恵器坏片2点・須恵器甕片2点，P 5から土師器坏片2点・土師器甕片11点，須恵器坏片3点・須恵器甕片2点，P 6から土師器甕片5点・須恵器坏片4点・須恵器蓋片1点，須恵器甕片5点，P 7から土師器甕片1点・須恵器蓋片2点・須恵器甕片2点，P 9から土師器甕片9点・須恵器坏片3点・須恵器蓋片3点・須恵器甕片4点，P 10から土師器甕片5点・須恵器甕片1点が出土している。第645図2248の須恵器坏はP 9の埋土から，2249の須恵器蓋はP 7の埋土から，2250の須恵器蓋はP 2の埋土から，それぞれ出土している。2249はかえりのある須恵器蓋であり，2248の須恵器坏などと比べるとかなり古い様相を示している。

**所見** 本跡は，出土遺物や重複関係から，8世紀後葉に構築されたものと思われる。本跡と，第113号掘立柱建物跡は規模も軸方向も同様であることから，本跡は，第113号掘立柱建物跡を北に約2mずらして建て替えられたと思われる。



第645図 第114号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第114号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第645図 2248	坏 須恵器	A [12.4] B 4.1 C [7.0]	平底。体部は内彎して立ち上がり、中位で外反する。器壁が薄い。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部1方向のへら削り。	砂粒・雲母 黄灰色 普通	10% P L241
2249	蓋 須恵器	A [15.8] B (1.7)	天井部から口縁部へは丸みをもっており。口縁部内面にはかえりをもつ。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。	砂粒・白色粒子 灰色 普通	15%
2250	蓋 須恵器	A [16.0] B (1.7)	口縁部の破片。口縁部は短く、外側につまみ出されている。	口縁部内・外面ロクロナデ。天井部回転へら削り。	砂粒・雲母・白色粒子 灰色、普通	5%

第115号掘立柱建物跡 (第646・647図)

**位置** 調査区域の南東部, H 8 h0・H 9 h1・H 9 i1・H 8 i0・H 8 j0・H 9 j1・I 8 a0・I 9 a1区。南東2.0mには, 第116号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** 第12A・13・17号溝, 第1675・1676号土坑に掘り込まれていることから, いずれよりも本跡の方が古い。

**規模** 桁行5間, 梁行3間の側柱建物跡である。桁行9.45m, 梁行4.85mで, 面積は約45.83㎡である。柱間寸法は, 桁行1.80~1.90m, 梁行1.60~1.65mである。柱穴は, P 5・P 7~P 9・P 11・P 12は長軸1.05~1.30m, 短軸0.95~1.13mの隅丸長方形, その他は一辺0.90~1.00mの隅丸方形である。P 1~P 4・P 11・P 12・P 14は特に深く0.85~0.92mで, その他は0.53~0.73mである。

**桁行方向** N-7°-W

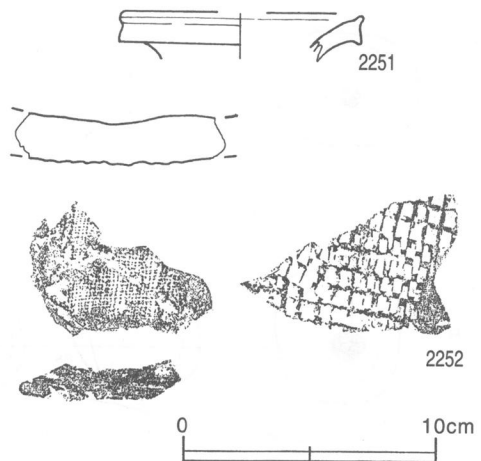
**覆土** 土層断面図中, 第1~4層が柱抜き取り痕に相当する。柱抜き取り痕は, P 8だけが土層断面でも確認できなかった。埋土は第5~13層である。埋土はロームブロック・炭化物を含む暗褐色土・褐色土・黒褐色土の互層で, 強く叩き締められて版築状を呈している。

**土層解説**

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子少量
- 3 極暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック少量
- 4 にぶい褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量, ローム大ブロック・炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック微量
- 7 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 9 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, ローム小ブロック微量
- 10 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 11 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・炭化物微量
- 12 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 13 黒褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子・炭化物微量

**遺物** P 1から土師器甕片2点, P 4から土師器甕片2点・須恵器坏片2点・須恵器甕片4点・須恵器高台付坏1点・瓦片1点, P 10から土師器甕片1点・須恵器甕片5点, P 11から土師器甕片1点・須恵器甕片3点, P 13から須恵器甕片3点が出土している。第646図2251の須恵器長頸瓶はP 4の埋土から, 2252の瓦片はP 4の確認面から出土している。

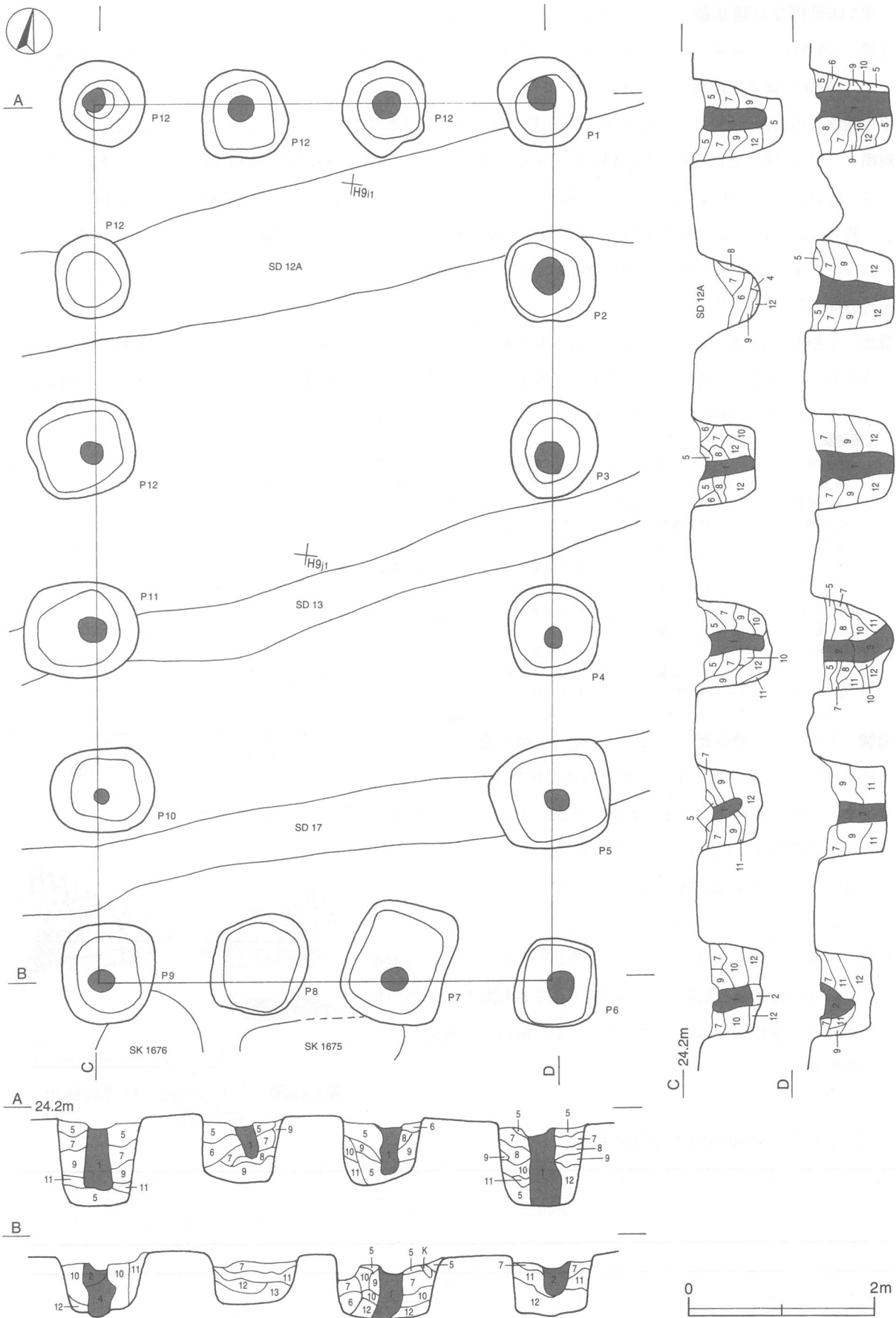
**所見** 本跡からの出土遺物では細かな時期の判断をするのは困難である。8世紀中葉と推定される第112号掘立柱建物跡と建物の規模・軸・柱穴規模等がほぼ一致することから同時期に機能していた可能性がある。



第646図 第115号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第115号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考		
第646図 2251	長頸瓶 須恵器	A [4.8] B (1.8)	口縁部の破片。口縁端部は上下に突出する。	口縁部内・外面クロロナデ。	精良, 砂粒 灰白色, 普通	5%		
遺物番号	器種	計測値					特徴	備考
		上幅(cm)	下幅(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
2252	平瓦	-	(6.5)	(5.6)	1.8	(95.8)	凸面格子目叩き。凹面布目痕。	



第647图 第115号掘立柱建物跡実測图



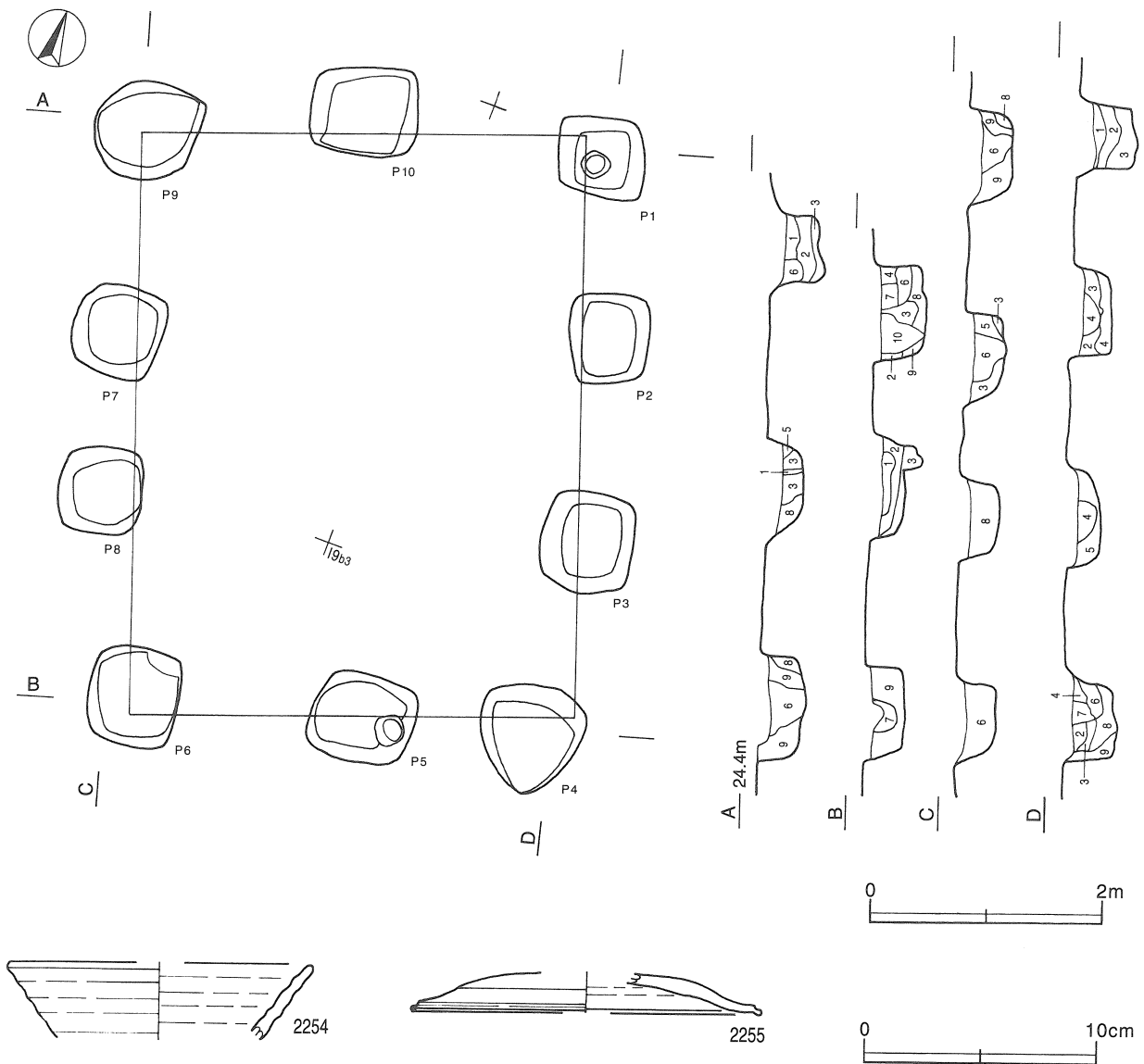
**第116号掘立柱建物跡 (第648図)**

**位置** 調査区域の南東部, I 9 a2・I 9 a3・I 9 b2・I 9 b3区。北西16.0mには第115号掘立柱建物跡が位置する。

**規模** 桁行3間, 梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.00m, 梁行3.84mで, 面積は19.2m<sup>2</sup>である。柱間寸法は, 桁行1.60~1.70m, 梁行1.90mである。柱穴は, 長軸0.78~0.95m, 短軸0.66~0.85mの隅丸長方形のもの, 一辺0.70~0.85mの隅丸方形のものがある。P 1・P 4・P 6・P 9の深さは0.48~0.52m, その他は, 0.23~0.35mで, 四隅の柱穴はほかの柱穴に比べ深くなっている。

**桁行方向** N-19°-W

**覆土** 柱抜き取り痕は, 確認面で確認できず, 土層観察でも判断しづらかったが, 土層断面図中, 第4・6・7層が相当するのではないと思われる。第1~3・5・8~10層が埋土である。埋土はロームブロック・炭化物を含む暗褐色土・褐色土・極暗褐色土で, 叩き締められた様子はなく, 判断しづらかった。



**第648図** 第116号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量, 炭化物微量
- 4 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土小ブロック微量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 9 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
- 10 極暗褐色 ローム中ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物 P1から土師器甕片1点・須恵器坏片3点, P2から土師器甕片3点・須恵器坏片1点・須恵器甕片3点, P3から土師器甕片2点・須恵器蓋片1点, P4から土師器甕片3点・須恵器坏片1点・須恵器蓋片1点, P6から須恵器坏片1点, P8から土師器甕片2点・須恵器盤片1点, 須恵器甕片2点, P9から須恵器坏片1点, P10から須恵器盤片1点・須恵器甕片4点が出土している。第648図2254の須恵器坏はP2から, 2255の須恵器蓋はP3から出土している。2255の蓋はかえり消失後, 間もない形態を示している。

所見 本跡の出土土器は8世紀中葉に属するものである。8世紀中葉に機能していたとすると, 本跡の周りでは軸方向を同じとする第112号掘立柱建物跡がある。「大形の住居+大形屋+雑舎」で構成されていたものと思われる。

第116号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第648図 2254	坏 須恵器	A [13.0] B (3.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部にいたる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。内・外面ともにロクロ目が強い。	砂粒・長石 灰色 普通	10%
2255	蓋 須恵器	A [15.0] B (1.6)	天井部は丸みをもち, 緩やかに口縁部におりる。口縁端部は外側に短くつまみ出され, 1条の沈線をもつ。	口縁部内・外面ロクロナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	5%

第117号掘立柱建物跡 (第649図)

位置 調査区域の南東部, I 9 f8・I 9 f9・I 9 g8・I 9 g9区。

重複関係 第356号住居に掘り込まれていることから, 本跡の方が古い。

規模 桁行3間, 梁行2間の側柱建物跡である。桁行7.32m, 梁行4.92mで, 面積は36.01m<sup>2</sup>である。柱間寸法は, 桁行は2.00~2.80mとばらつきがあり, 梁行は2.45mである。柱穴は, 一辺0.95~1.00mの隅丸方形, 深さ0.75~0.90mである。四隅の柱は, 建物の外側端になるように据えている。

桁行方向 N-6°-W

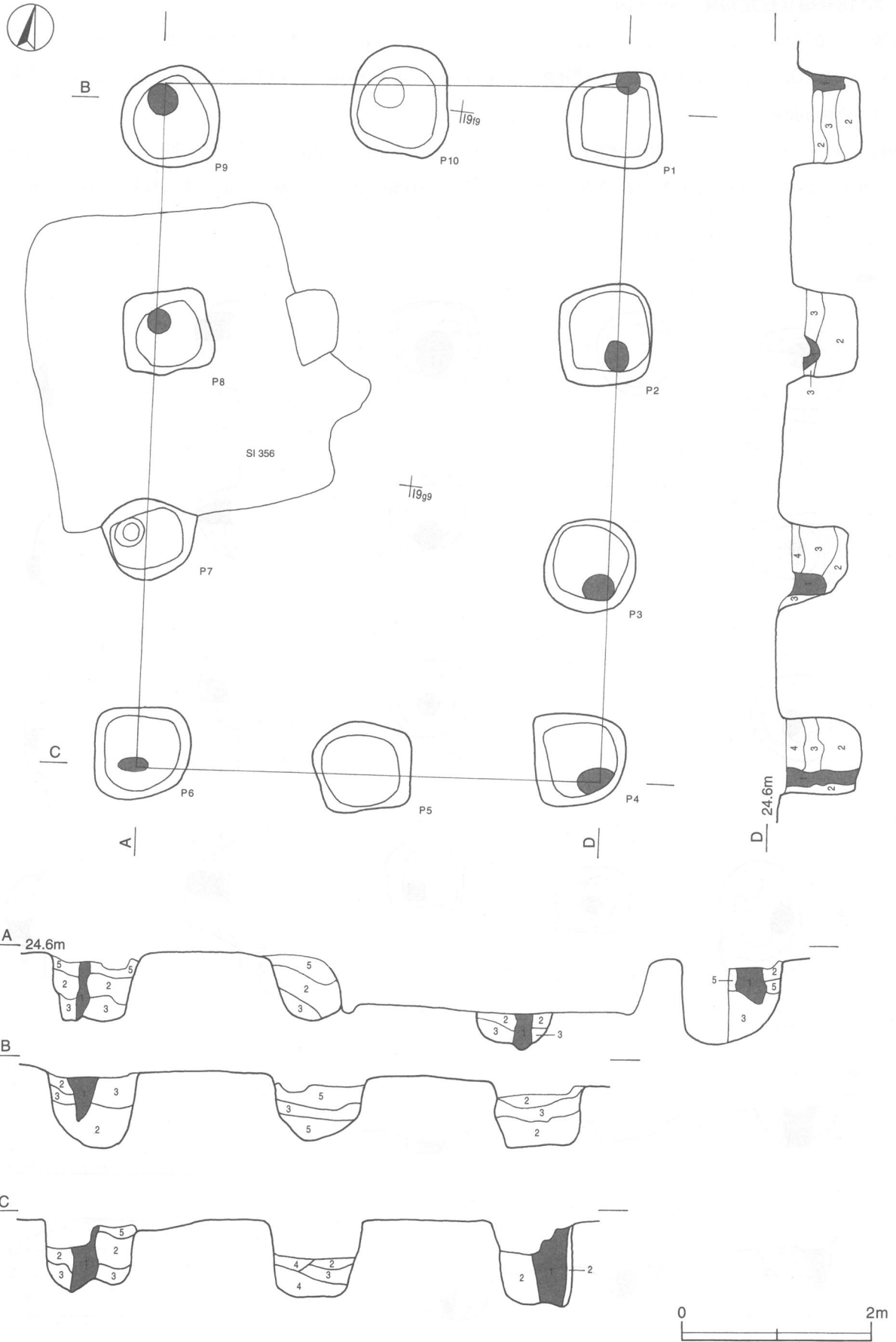
覆土 土層断面図中, 第1層が柱抜き取り痕に相当し, 締めりが大変弱い。第2~5層は埋土である。埋土はロームブロックを含む暗褐色土・褐色土の互層で, 強く叩き締められ, 版築状を呈している。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム大ブロック多量
- 3 褐色 ローム中ブロック・黒色土中ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック中量
- 5 褐色 ローム大ブロック多量, 黒色土中ブロック少量

遺物 P2から土師器甕片4点が出土している。細片のため図示できなかった。

所見 本跡は, 9世紀後葉に位置付けられている第356号住居跡に掘り込まれていることから, それ以前に機能していたものと考えられる。

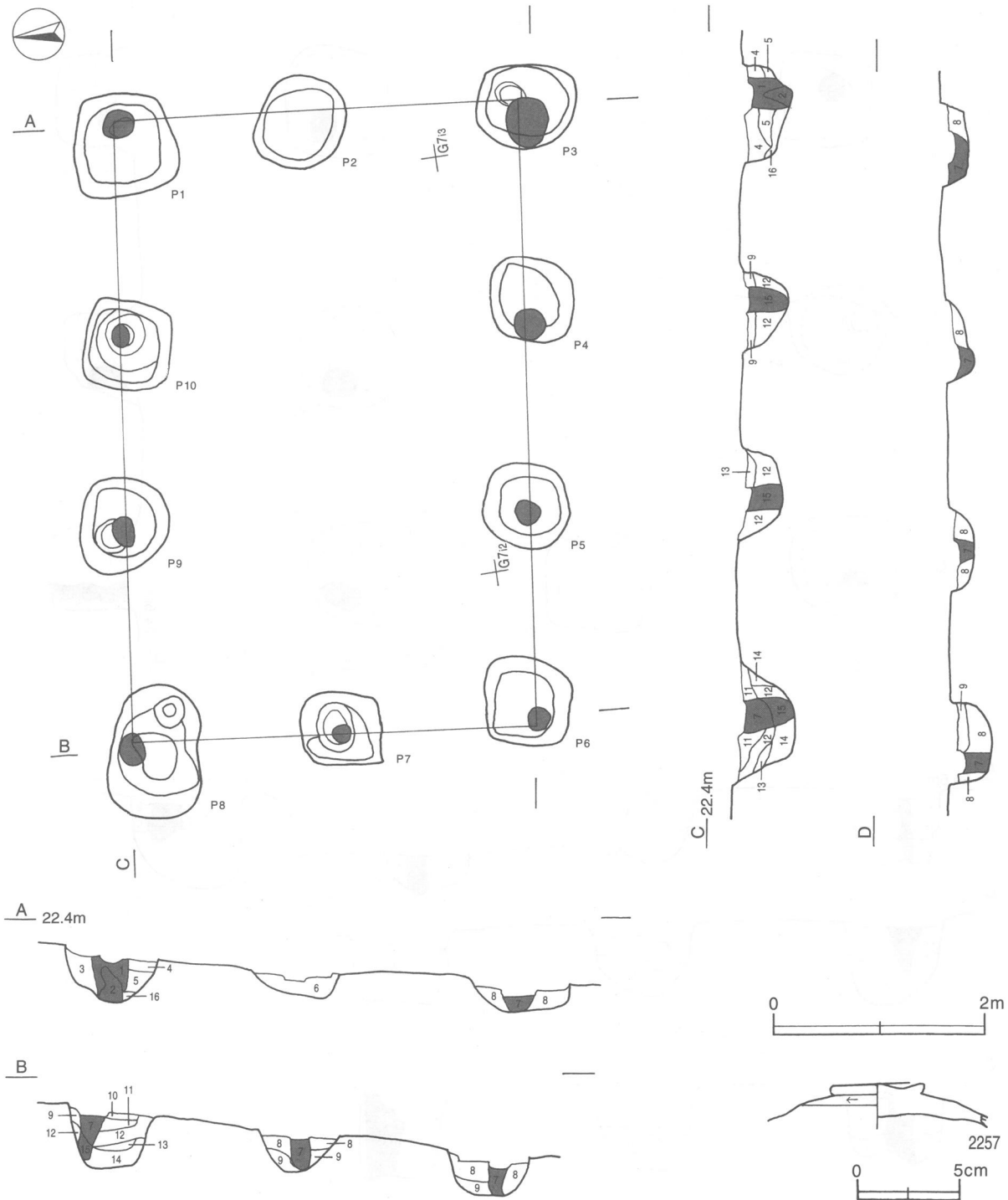


第649图 第117号掘立柱建物跡実測図

第118号掘立柱建物跡 (第650図)

**位置** 調査区域の南部, G 7 h1・G 7 h2・G 7 h3・G 7 i1・G 7 i2・G 7 i3区。本跡は南向きの傾斜地に位置する。本跡の北6 mには第119号掘立柱建物跡が, 東17.5mには第96号掘立柱建物跡が, 南16.5mには第104号掘立柱建物跡が位置している。

**規模** 桁行3間, 梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.90m, 梁行3.96mで, 面積は23.36㎡である。柱間寸法は, 桁行1.78~2.06m, 梁行1.94mである。柱穴は, P 1が長軸1.27m, 短軸0.84mの隅丸長方形, 深さ0.60m



第650図 第118号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

で、その他は一辺（径）0.78～0.98mの隅丸方形または円形、深さ0.24～0.50mである。

**桁行方向** N-85°-E

**覆土** 柱抜き取り痕は、土層断面図中、第1・2・7・15層が相当し、締まりがない。柱抜き取り痕は、P2を除く柱穴で遺構確認面から確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。第3～6・8～14・16層は埋土である。埋土はロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック・粘土粒子を含む暗褐色土・黒褐色土・浅黄色土で、第3～6・10～12層が特に突き固められている。

**土層解説**

- |    |        |                                     |
|----|--------|-------------------------------------|
| 1  | 黒褐色    | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量              |
| 2  | 黒褐色    | 粘土小ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量         |
| 3  | 暗褐色    | ローム中ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック・粘土中ブロック微量 |
| 4  | 暗褐色    | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量                   |
| 5  | 暗褐色    | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土中ブロック・粘土粒子微量  |
| 6  | にぶい黄褐色 | 粘土粒子中量、炭化物微量                        |
| 7  | 黒褐色    | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量              |
| 8  | 暗褐色    | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・暗褐色土中ブロック微量         |
| 9  | 褐色     | ローム粒子・粘土粒子微量                        |
| 10 | 浅黄色    | 砂礫多量                                |
| 11 | 暗褐色    | 粘土粒子中量、砂礫少量                         |
| 12 | 黒褐色    | 粘土中ブロック・粘土粒子微量                      |
| 13 | 暗褐色    | 粘土小ブロック・粘土粒子微量                      |
| 14 | 暗褐色    | 粘土粒子少量、砂礫微量                         |
| 15 | 黒褐色    | 粘土中ブロック少量、粘土粒子微量                    |
| 16 | 浅黄色    | 粘土中ブロック・粘土粒子少量、砂礫微量                 |

**遺物** P6から土師器甕片1点・須恵器甕片1点、P7から須恵器蓋片1点、P8から土師器坏片7点・土師器甕片7点・須恵器甕片5点、P9から土師器坏片1点・土師器甕片8点・須恵器甕片2点、P10から須恵器甕片1点が出土している。第650図2257の須恵器蓋はP7から出土しているが、埋土と柱抜き取り痕のどちらから出土しているかは不明である。

**所見** 本跡は、出土土器から8世紀中葉に機能していたものと思われる。

**第118号掘立柱建物跡出土遺物観察表**

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第650図 2257	蓋 須恵器	B (2.2) F 4.4 G 0.5	天井部の破片。天井部は丸みをもちながらだらかに下降する。つまみは扁平なボタン状。	天井頂部は左回りの回転ヘラ削り。	砂粒・雲母・石英 灰白色 普通	30%

**第119号掘立柱建物跡（第651図）**

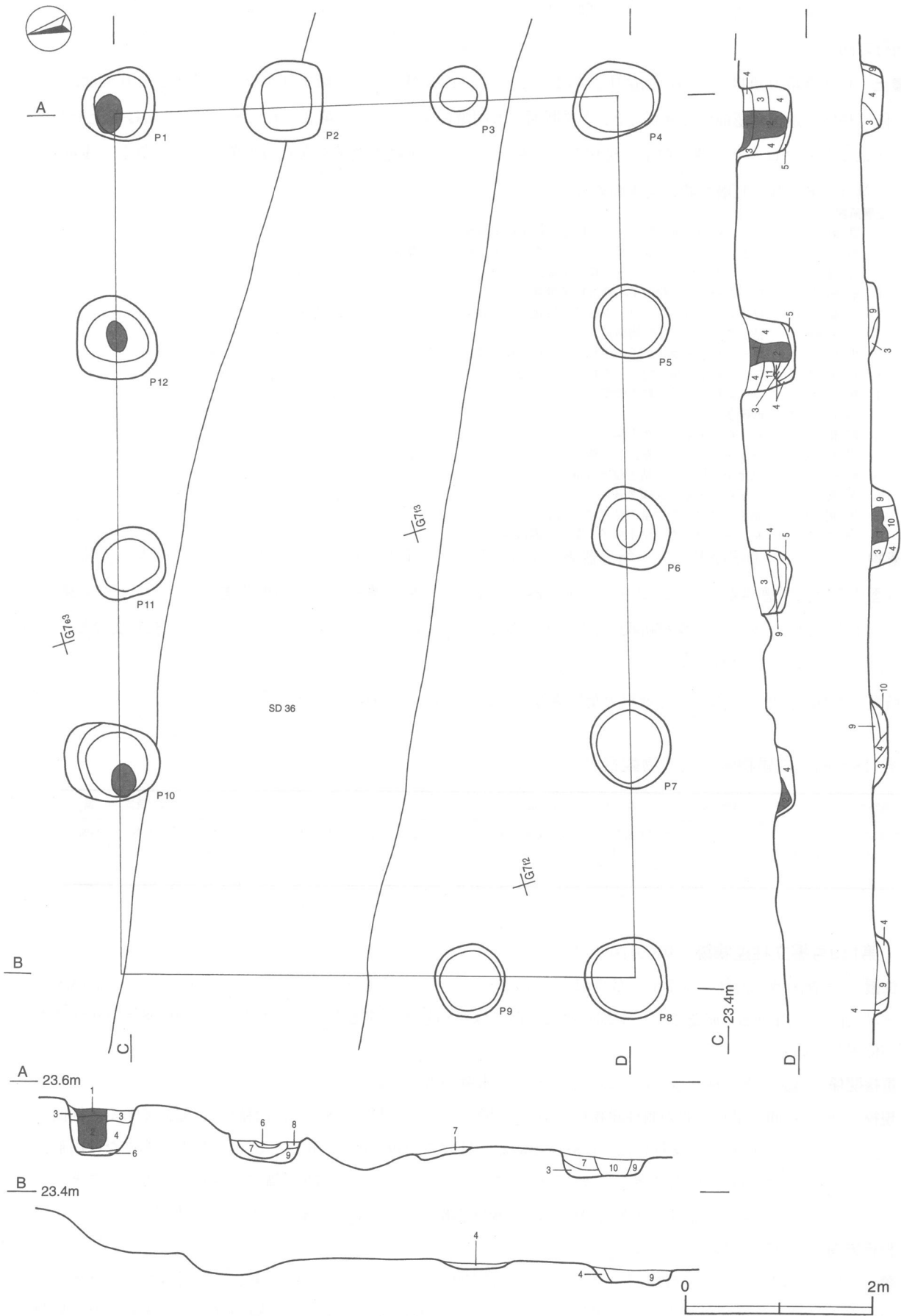
**位置** 調査区域の南部、G7d2・G7e1・G7e2・G7e3・G7e4・G7f1・G7f2・G7f3・G7f4区。本跡は南向きの斜面部で確認され、本跡の北12.5mには第86号掘立柱建物跡が、南6mには第108号掘立柱建物跡が位置している。

**重複関係** 第36号溝に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

**規模** 桁行4間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行9.64m、梁行5.48mで、面積は52.82㎡である。柱間寸法は、桁行2.24～2.62mで、梁行1.72～1.88mである。柱穴は一辺（径）0.60～1.02mの隅丸方形または円形、深さ0.14～0.60mである。柱穴の深さには、斜面部に位置していることや第36号溝に掘り込まれていることからばらつきがある。西梁行の北側の2か所の柱穴は、第36号溝によって掘り込まれており、確認できなかった。

**桁行方向** N-74°-W

**覆土** 柱抜き取り痕は、土層断面図中、第1・2層が相当し、しまりが弱い。第3～11層は埋土である。埋土はロームブロックを含む暗褐色土・褐色土の互層で、土層断面図中、第4～7層が強く突き固められ、版築状を呈している。



第651图 第119号掘立柱建物迹实测图

#### 土層解説

1 褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化粒子微量
4 褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック少量
5 極暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
6 暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
7 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
8 褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
9 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
10 暗褐色	ローム粒子少量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
11 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック微量

**遺物** P 2 から須恵器坏片 2 点・須恵器甕片 2 点, P 4 から土師器甕片 1 点・須恵器坏片 1 点, P 5 から土師器坏片 1 点・土師器甕片 4 点・須恵器坏片 2 点, P 7 から土師器坏片 2 点・土師器甕片 2 点, P 10 から土師器坏片 1 点が出土している。細片のため図示できなかった。

**所見** 本跡は出土土器から時期を決定することは困難であるが, 本跡の北12.5mには, 9世紀前葉に推定される第84・88号掘立柱建物跡があり, 桁行方向・柱穴規模等がほぼ一致することから, それらと同時期に機能していたものと思われる。

#### 第121号掘立柱建物跡 (第652図)

**位置** 調査区域の南東部, H 8 b9・H 8 c8・H 8 c9・H 8 d8・H 8 d9区。本跡の西には第122号掘立柱建物跡が, 南には第111号掘立柱建物跡が近接している。

**重複関係** 第113・114号掘立柱建物跡を掘り込んでおり, 本跡の方が新しい。

**規模** 桁行 3 間, 梁行 2 間の側柱建物跡である。桁行5.40m, 梁行3.62mで, 面積は約19.55m<sup>2</sup>である。柱間寸法は, 桁行, 梁行ともに1.80mである。P 4・P 10の平面形は, 長軸0.84m・0.85m, 短軸0.62v・0.75mの楕円形であり, その他は径0.63~0.80mの円形である。深さ0.15~0.30mで, 全体的に浅い柱穴である。

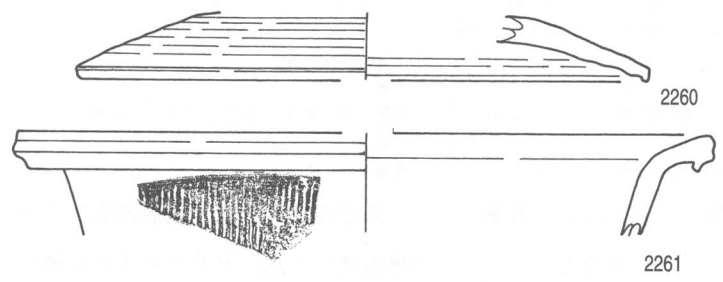
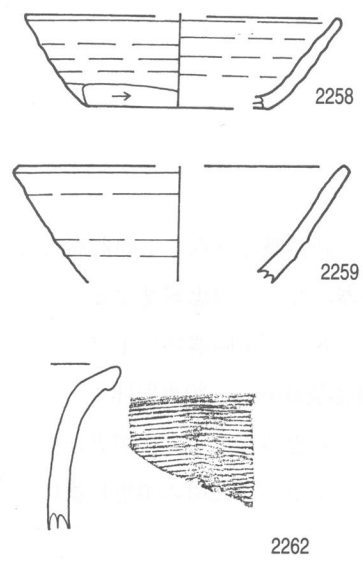
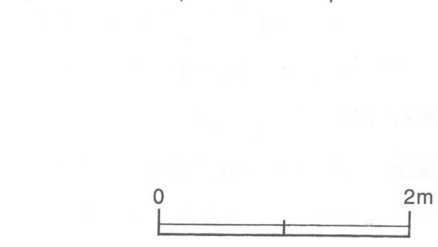
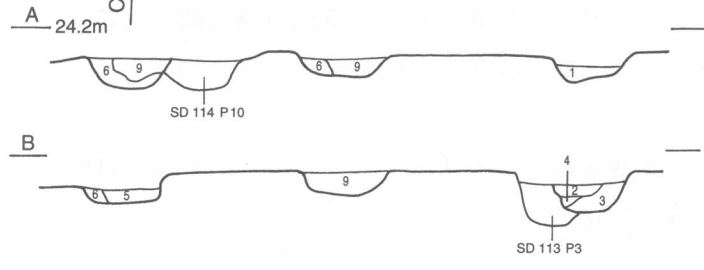
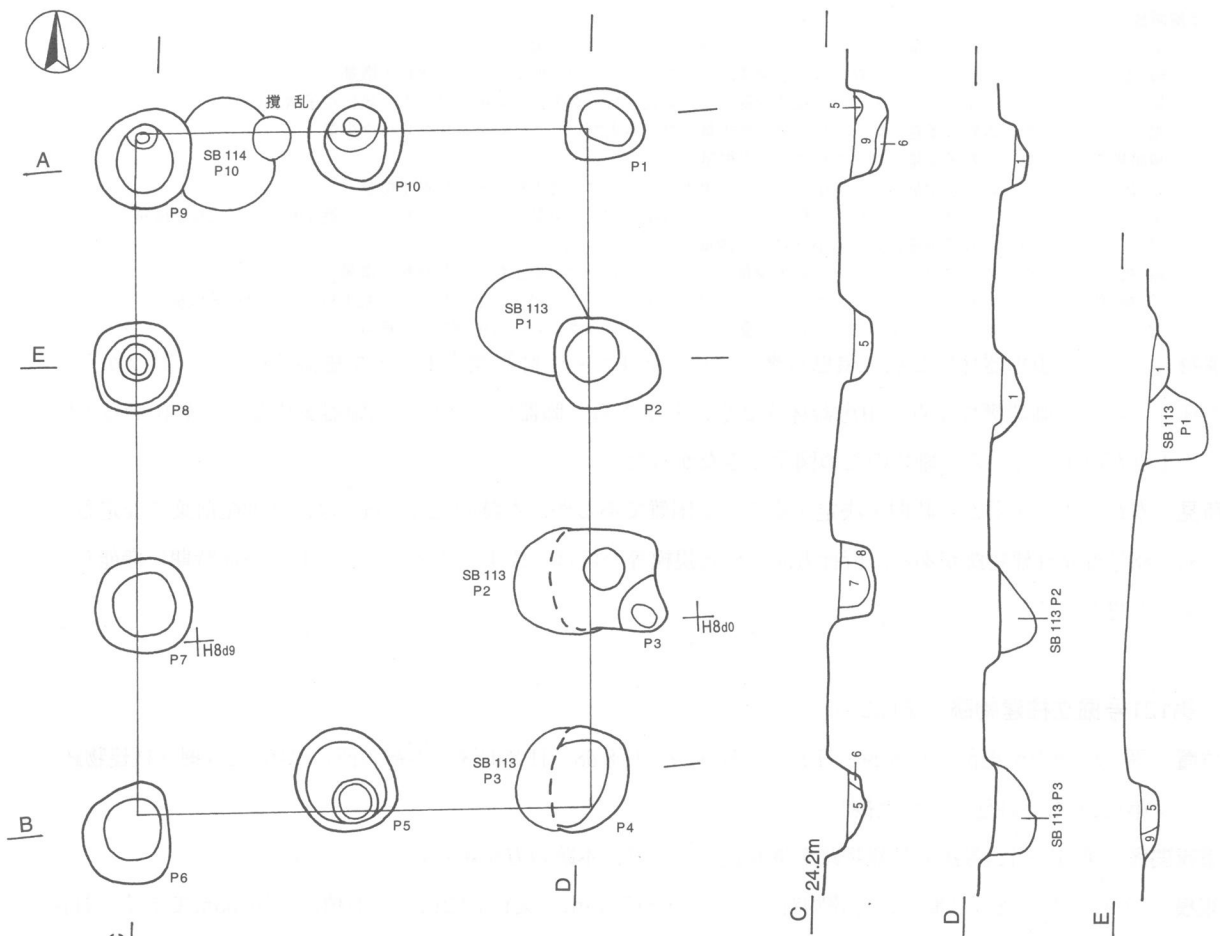
**桁行方向** N-2°-E

**覆土** 柱抜き取り痕は確認できなかった。また, 土層観察では, 堆積状況・土のしまり具合などからは埋土と考えるよりは, 柱抜き取り後の覆土とする方が妥当と思われる。

#### 土層解説

1 暗褐色	黒色土小ブロック中量, ローム小ブロック少量
2 暗褐色	焼土小ブロック・炭化物中量, ローム中ブロック少量
3 暗褐色	ローム小ブロック・黒色土小ブロック中量
4 暗褐色	焼土粒子少量
5 暗褐色	ローム小ブロック・焼土粒子少量
6 褐色	ローム中ブロック中量
7 暗褐色	ローム小ブロック中量, 焼土粒子・粘土小ブロック少量
8 褐色	ローム中ブロック少量
9 褐色	ローム大ブロック多量

**遺物** P 1 から土師器甕片 4 点・須恵器坏片 1 点・須恵器甕片 5 点, P 3 から土師器甕片 5 点・土師器高台付坏片 1 点・須恵器坏片 1 点・須恵器甕片 1 点, P 6 から土師器甕片 9 点・須恵器坏片 2 点・須恵器甕片 2 点, P 7 から土師器甕片 14 点・須恵器坏片 3 点・須恵器蓋片 3 点・須恵器甕片 3 点, P 8 から土師器坏片 1 点・土師器甕片 21 点・須恵器坏片 12 点・須恵器蓋片 3 点・須恵器甕片 7 点, P 9 から土師器甕片 6 点・須恵器坏片 1 点・須恵器蓋片 1 点・須恵器甕片 1 点, P 10 から土師器甕片 4 点・須恵器坏片 3 点・須恵器盤片 1 点・須恵器甕片 1 点が出土している。第652図2258・2259の須恵器坏はP 10の, 2260の須恵器蓋はP 9の, 2261の須恵器甕はP 6の, 2262の須恵器甕はP 1の覆土からそれぞれ出土している。



第652图 第121号掘立柱建物跡・出土遺物実測図



**所見** 本跡は、重複している第114号掘立柱建物跡と建物の規模・軸などが一致している。このことから本跡は、第114号掘立柱建物跡を東に1mずらして建て替えを行ったものと思われる。第114号掘立柱建物跡が8世紀後葉に位置付けられていることや出土土器から、本跡の時期は8世紀後葉でも第114号掘立柱建物跡より後出と捉えたい。

第121号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第652図 2258	坏 須恵器	A [12.8] B (3.7) C [7.5]	体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母・長石 灰白色 普通	20% P L 241
2259	坏 須恵器	A [13.3] B (4.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。内面のロクロ目は弱い。	粗い、砂粒・雲母・長石、灰白色 普通	20%
2260	蓋 須恵器	A [22.6] B (2.5)	天井部は高く、緩やかに口縁部におりる。口縁端部は短くつまみ出されている。	口縁部内・外面ロクロナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 灰色 普通	10%
2261	甕 須恵器	A [18.1] B (4.0)	口縁部の破片。口縁部は外側に屈曲し、口縁端部は下方につまみ出されている。口縁部断面三角形。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面縦位の平行叩き。	砂粒・雲母 暗オリーブ灰色 普通	10%
2262	甕 須恵器	B (6.4)	口縁部の破片。口縁部は緩やかに外側に折れる。口縁端部は下方につまみ出されている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面横位の平行叩き。	砂粒・雲母 オリーブ灰色 普通	5%

### 第122号掘立柱建物跡 (第653図)

**位置** 調査区域の南東部、H 8 b7・H 8 b8・H 8 c7・H 8 c8・H 8 d8区。東1mには第113・114・121号掘立柱建物跡が、北西には第92号掘立柱建物跡が位置している。

**重複関係** 第339・340号住居、第114号掘立柱建物に掘り込まれており、いずれよりも本跡の方が古い。

**規模** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.76m、梁行4.12mで、面積は約23.73m<sup>2</sup>である。柱間寸法は、桁行1.70~2.00m、梁行2.10mである。柱穴は、径0.70~0.87mの不整形円形、深さ0.35~0.55mである。

**桁行方向** N-2°-W

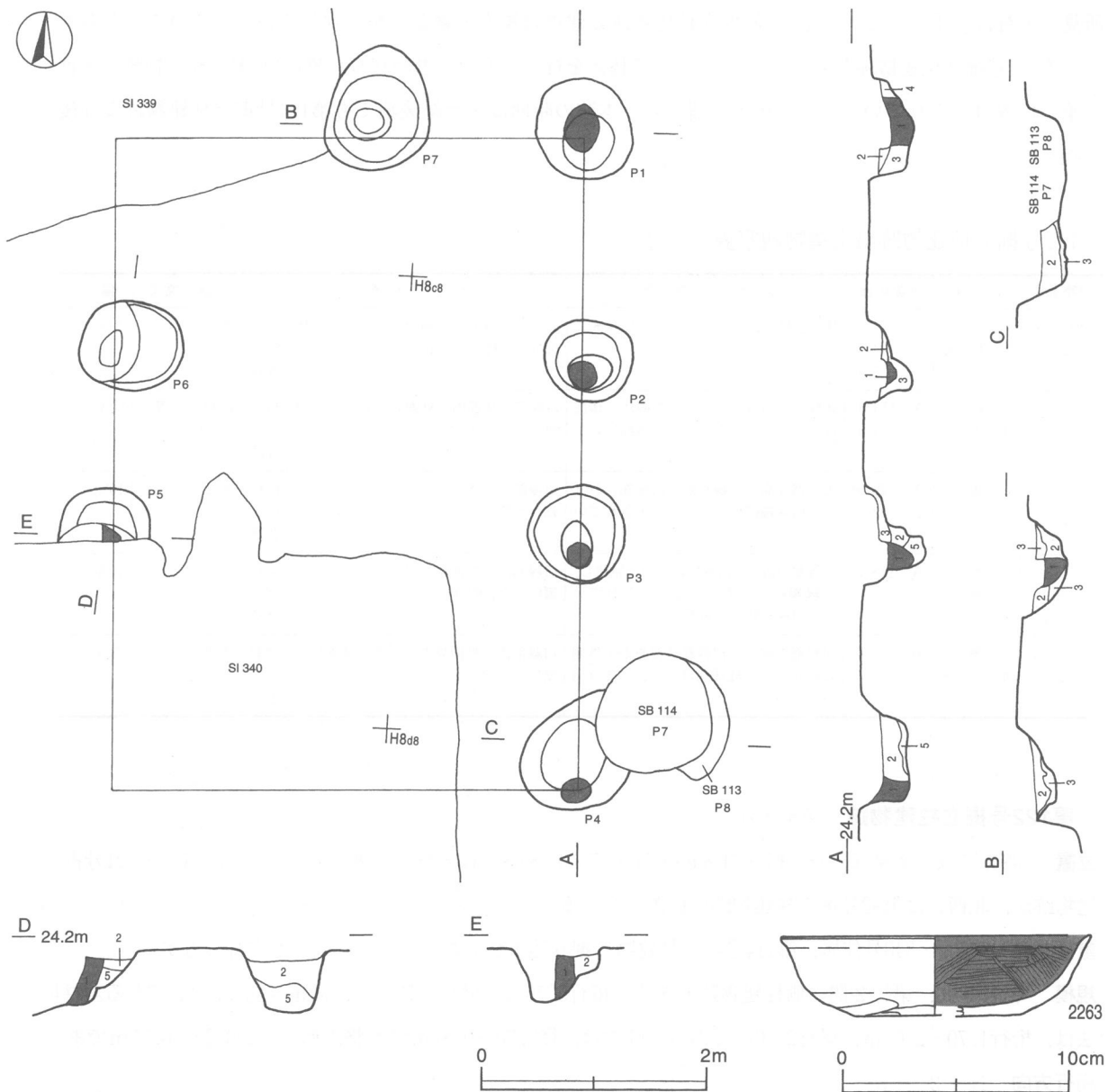
**覆土** 土層断面図中、第1層が柱抜き取り痕に相当し、締まりが大変弱い。柱抜き取り痕が確認できたのはP 1~P 5である。埋土は第2~5層である。埋土はロームを含んだ暗褐色土と褐色土であり、叩き締められている様子はない。

#### 土層解説

- |        |            |
|--------|------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子微量    |
| 2 褐色   | ローム中ブロック中量 |
| 3 暗褐色  | ローム小ブロック少量 |
| 4 褐色   | ローム小ブロック多量 |
| 5 暗褐色  | ローム中ブロック少量 |

**遺物** P 3の柱抜き取り覆土から、第653図2263の土師器坏が1点出土しているだけである。

**所見** 本跡は、8世紀後葉と思われる第114号掘立柱建物跡に掘り込まれており、8世紀後葉以前に機能していた建物である。出土遺物は1点だけで、しかも柱抜き取り後の覆土中からの出土である。この土器は9世紀前葉以前のものと思われ、抜き取り後に混入したものと思われる。本跡を重複関係から8世紀中葉段階と考えると、北西10.0mに位置する第92号掘立柱建物跡と同時期に存在したことになる。



第653図 第122号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第122号掘立柱建物跡出土遺物観察表

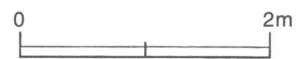
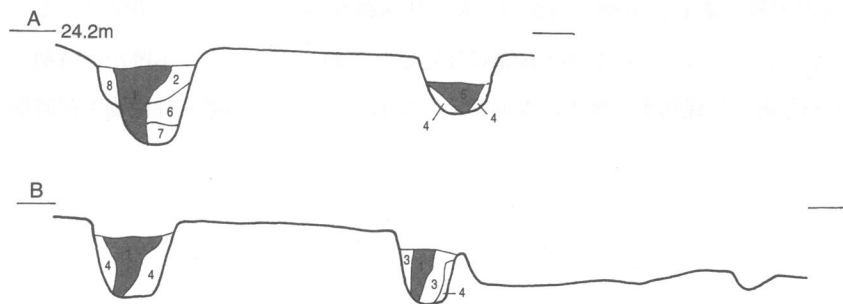
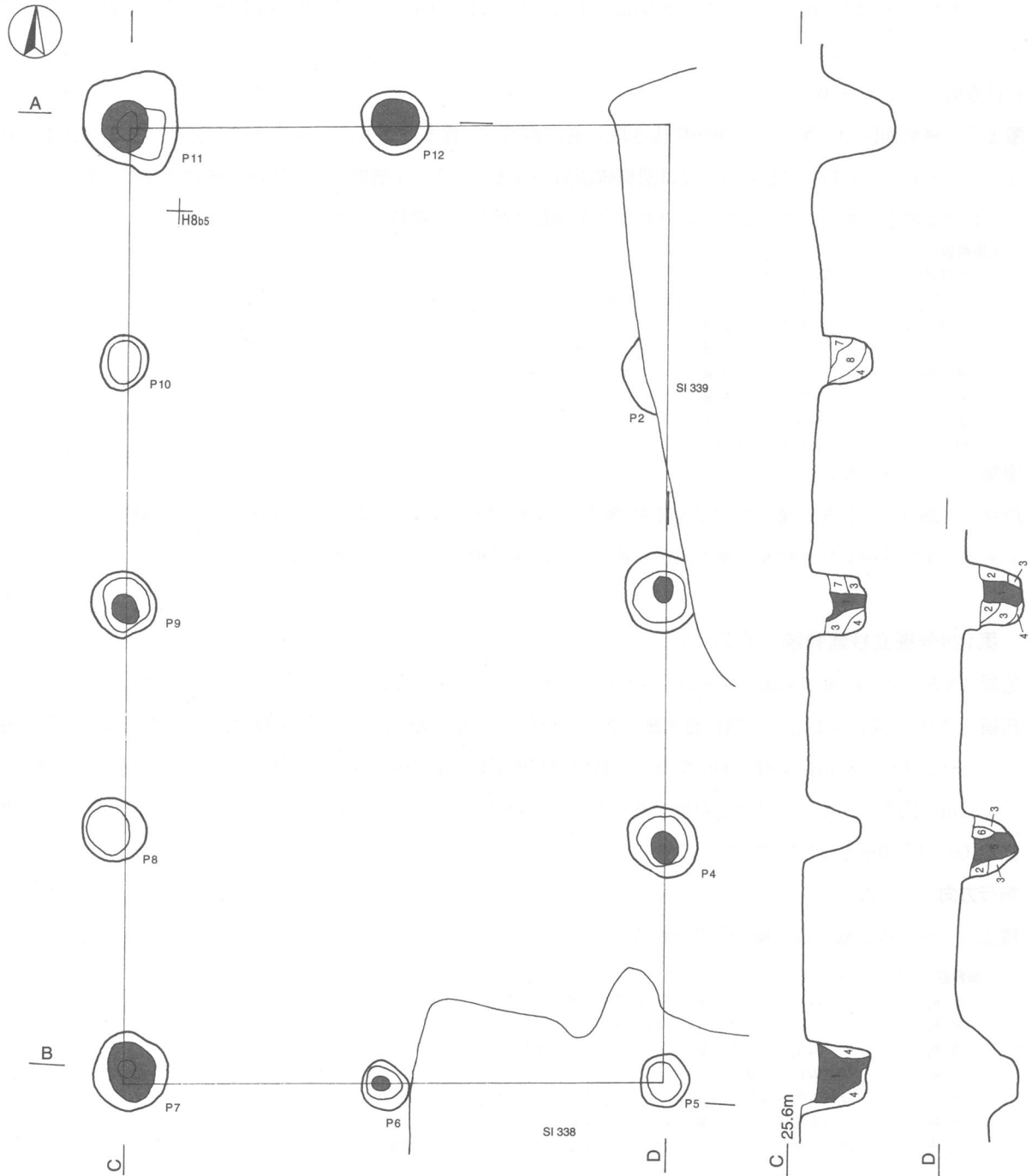
遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第653図 2263	坏 土師器	A 13.8 B 3.5 C [ 7.0]	平底。底部と体部の境に弱い稜をもつ。 体部は内彎して立ち上がる。	口縁部・体部外面ロクロナデ。体部下 端・底部手持ちヘラ削り。内面ヘラ磨 き、黒色処理。	精良, 砂粒 橙色 普通	40% PL241

第123号掘立柱建物跡 (第654図)

**位置** 調査区域の南東部, H 8 a4・H 8 a5・H 8 b4・H 8 b5・H 8 b6・H 8 c4・H 8 c5・H 8 c6・H 8 d4・H 8 d5・H 8 d6区。南には第91・107号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** 第338・339号住居に掘り込まれていることから, 本跡の方が古い。

**規模** 桁行4間, 梁行2間の側柱建物跡である。桁行8.94m, 梁行5.04mで, 面積は約45.06㎡である。柱間寸



第654图 第123号掘立柱建物跡実測図

法は、桁行2.10～2.30m、梁行2.45～2.60mである。柱穴は、径0.50～0.70vの不整形円形、深さ0.50～0.70mである。

**桁行方向** N-2°-W

**覆土** 土層断面図中、第1・5層が柱抜き取り痕に相当し、締まりが弱い。柱抜き取り痕は、P3・P4・P6・P7・P9・P11・P12については遺構確認面から確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。第2～4・6～8層は埋土である。埋土はロームブロックを含む暗褐色土・褐色土である。

**土層解説**

- |        |                       |
|--------|-----------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子少量               |
| 2 暗褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子少量      |
| 3 暗褐色  | ローム中ブロック少量            |
| 4 褐色   | ローム中ブロック少量            |
| 5 極暗褐色 | ローム小ブロック中量、ローム大ブロック少量 |
| 6 暗褐色  | ローム中ブロック中量            |
| 7 褐色   | ローム中ブロック多量            |
| 8 暗褐色  | ローム大ブロック中量            |

**遺物** 出土していない。

**所見** 本跡は、9世紀前葉と推定される第339号住居跡に掘り込まれており、9世紀前葉以前に機能していたものである。第91号掘立柱建物跡と軸方向が一致し、同時期に機能していた可能性がある。

**第124号掘立柱建物跡（第655図）**

**位置** 調査区域の南東部東端、G9i9・G9i0・G9j9・G9j0・G10j1区の東に傾斜する斜面部。

**規模** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.25m、梁行4.00mで、面積は21.00㎡である。柱間寸法は、桁行1.70～1.85m、梁行2.00mである。柱穴の平面形はP10が径0.52mの円形と小さいが、その他は径0.70～0.82mの円形である。深さは傾斜地であるため、確認面から0.22～0.48mとばらつきがみられるが、底面は標高23.00～23.20mとほぼ一定している。

**桁行方向** N-27°-W

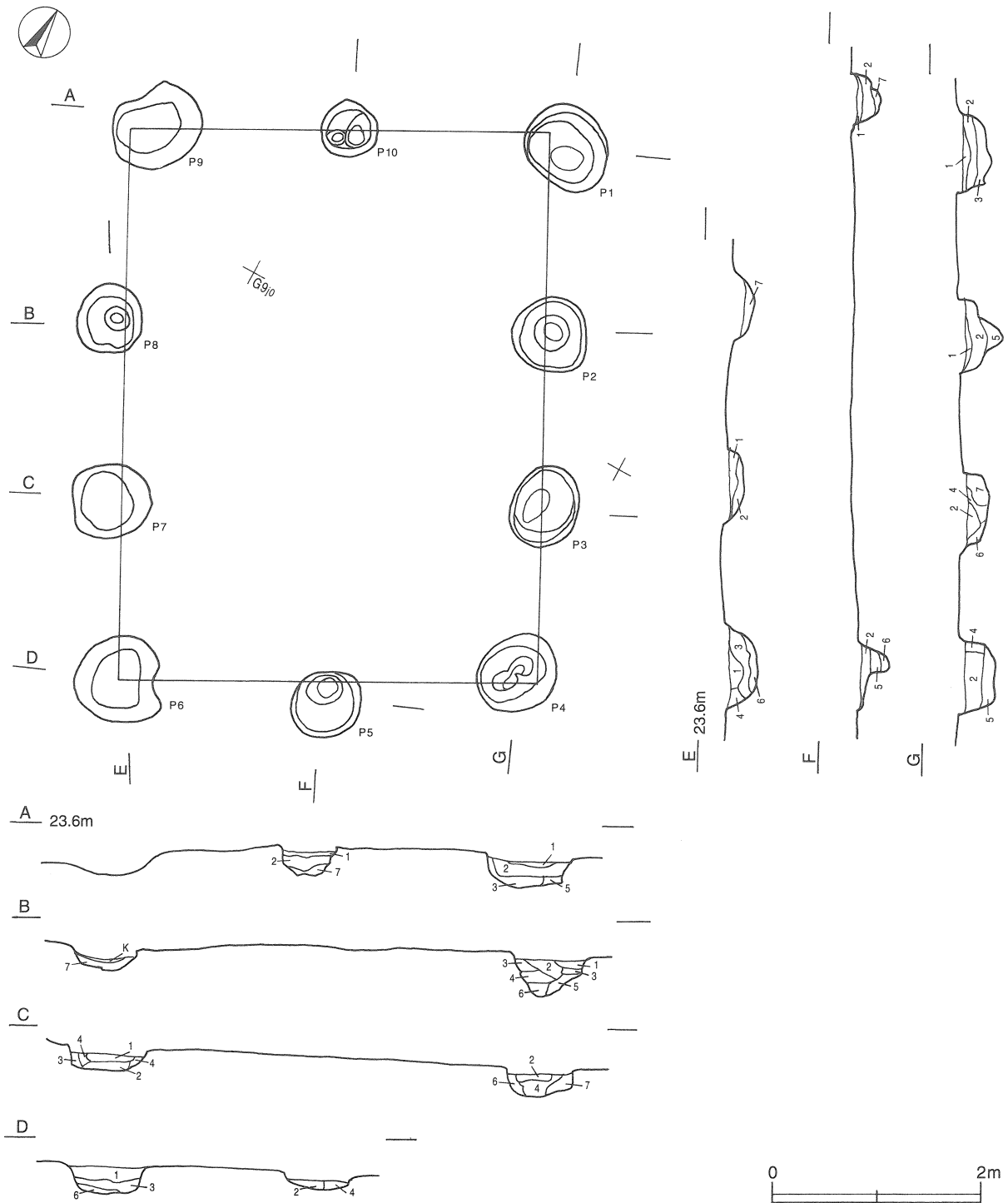
**覆土** すべて抜き取り後の覆土と思われる。

**土層解説**

- |       |                               |
|-------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子微量       |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量              |
| 3 暗褐色 | ローム中ブロック少量、ローム小ブロック微量         |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量                       |
| 5 褐色  | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量            |
| 6 暗褐色 | ローム小ブロック中量、ローム粒子少量            |
| 7 灰褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック微量 |

**遺物** P10から土師器甕片が1点出土しているだけである。細片のため図示できなかった。

**所見** 出土遺物が少なく、時期決定が困難である。主軸方向が同じ堅穴住居跡がみられ、セット関係になると思われる。第145・365号住居跡などがそれで、これらは9世紀後葉に比定されており、これらと本跡が同時期に機能していた可能性もある。第47・56号掘立柱建物等と軸方向が同じくしており、これらの掘立柱建物も同時期と考えられる。

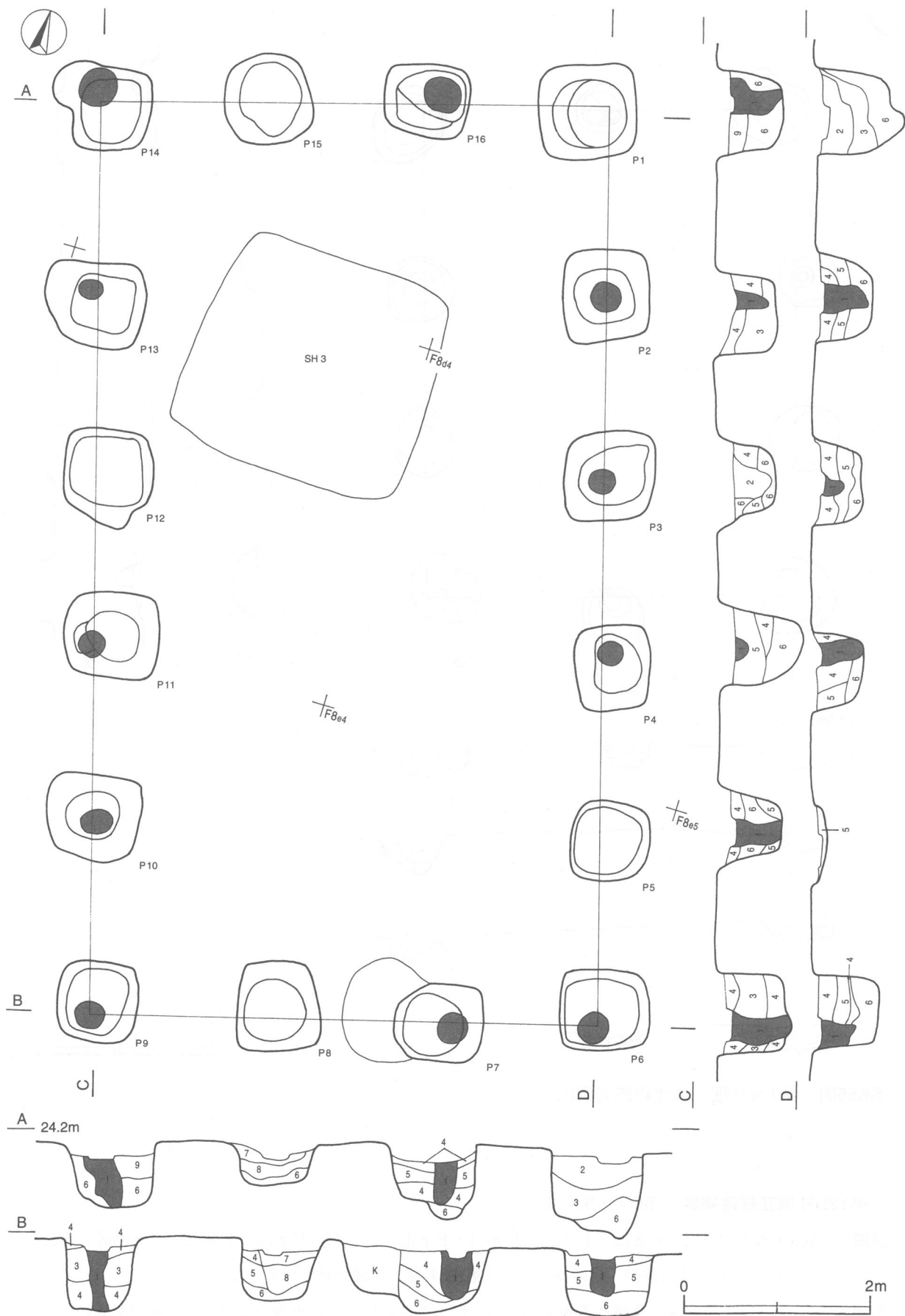


第655図 第124号掘立柱建物跡実測図

第125号掘立柱建物跡 (第656・657図)

**位置** 調査区域の中央部, F 8 c 2・F 8 c 3・F 8 c 4・F 8 d 3・F 8 d 4・F 8 e 3・F 8 e 4・F 8 e 5区。本跡の北26.0mには第64号掘立柱建物跡が, 南西18.0mには第105号掘立柱建物跡が位置している。

**重複関係** 第3号方形竪穴状遺構と重複関係にあるが, 本跡の柱穴との重複がないため, 新旧関係については不明である。



第656图 第125号掘立柱建物迹实测图

**規模** 桁行5間、梁行3間の側柱建物跡である。桁行9.90m、梁行5.52mで、面積は約54.65㎡である。柱間寸法は桁行1.90～2.06m、梁行1.74～1.96mである。柱穴は一辺0.83～1.06mの隅丸方形、深さ0.28～0.95mである。P5だけが深さ0.28mと浅いが、全体的に大形で規格性がある。

**桁行方向** N-16°-W

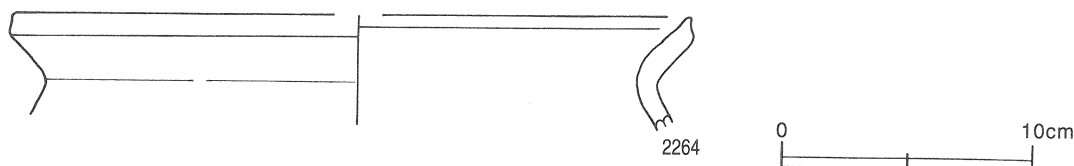
**覆土** 土層断面図中、第1層は柱抜き取り痕に相当し、粘性・しまり共に大変弱いものである。P2～P4・P6・P7・P9～P11・P13・P14では遺構確認面から柱抜き取り痕が確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。P16では土層断面で柱抜き取り痕の一部が確認できた。第2～9層は埋土である。埋土はロームブロックを含む暗褐色土・褐色土・黒褐色土の互層である。

**土層解説**

1 極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量	6 褐色	ローム中ブロック中量
2 黒褐色	ローム中ブロック中量	7 暗褐色	ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量
3 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量	8 黒褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック少量
4 暗褐色	ローム大ブロック中量	9 暗褐色	ローム小ブロック少量
5 褐色	ローム大ブロック少量		

**遺物** P1から土師器甕片2点、P5から須恵器甕片3点、P6から須恵器坏1点・須恵器甕片2点、P7から須恵器甕片2点、P16から土師器甕片1点が出土している。第657図2264の土師器甕は、P1の埋土から出土している。

**所見** 本跡は、3間5間で、面積が50㎡以上の大形の建物跡である。柱穴の規模も大きく、穎稻を収納する屋としての機能をもっていたものと思われる。本跡の北26.0mに空白域をはさんで位置する第64号掘立柱建物跡と規模・桁行方向・柱穴規模等がほぼ一致することから、それと同時期の9世紀後葉に機能していたものと考えられる。



**第657図** 第125号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第125号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第657図 2264	甕 土師器	A [26.8] B (4.7)	頸部から口縁部の破片。頸部で屈曲し、口縁部は外反して開く。口縁端部はつまみ上げられる。	口縁部、頸部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英にぶい黄橙色 普通	50%

**第126号掘立柱建物跡** (第658図)

**位置** 調査区域の南部、F8j7・G8a7・G8a8・G8b7・G8b8区。本跡の東4.5mには第380～382号住居跡が南北に平行するように位置している。

**重複関係** 第378号住居跡を掘り込んでいることから、本跡の方が新しい。

**規模** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.46m、梁行3.74mで、面積は約20.42㎡である。柱間寸法は桁行1.70～1.94m、梁行1.77m・2.10mである。P1～P3・P5・P6・P8は一辺0.66～0.93mの隅丸方形、深さ0.50～0.86mで、二段に掘り込まれ、中央部が深くなっている。P4・P9は径0.35m・0.44mの円形、深さ0.56m・0.50mで、小形である。P2とP3の間の柱穴は、攪乱を受けており確認できなかった。

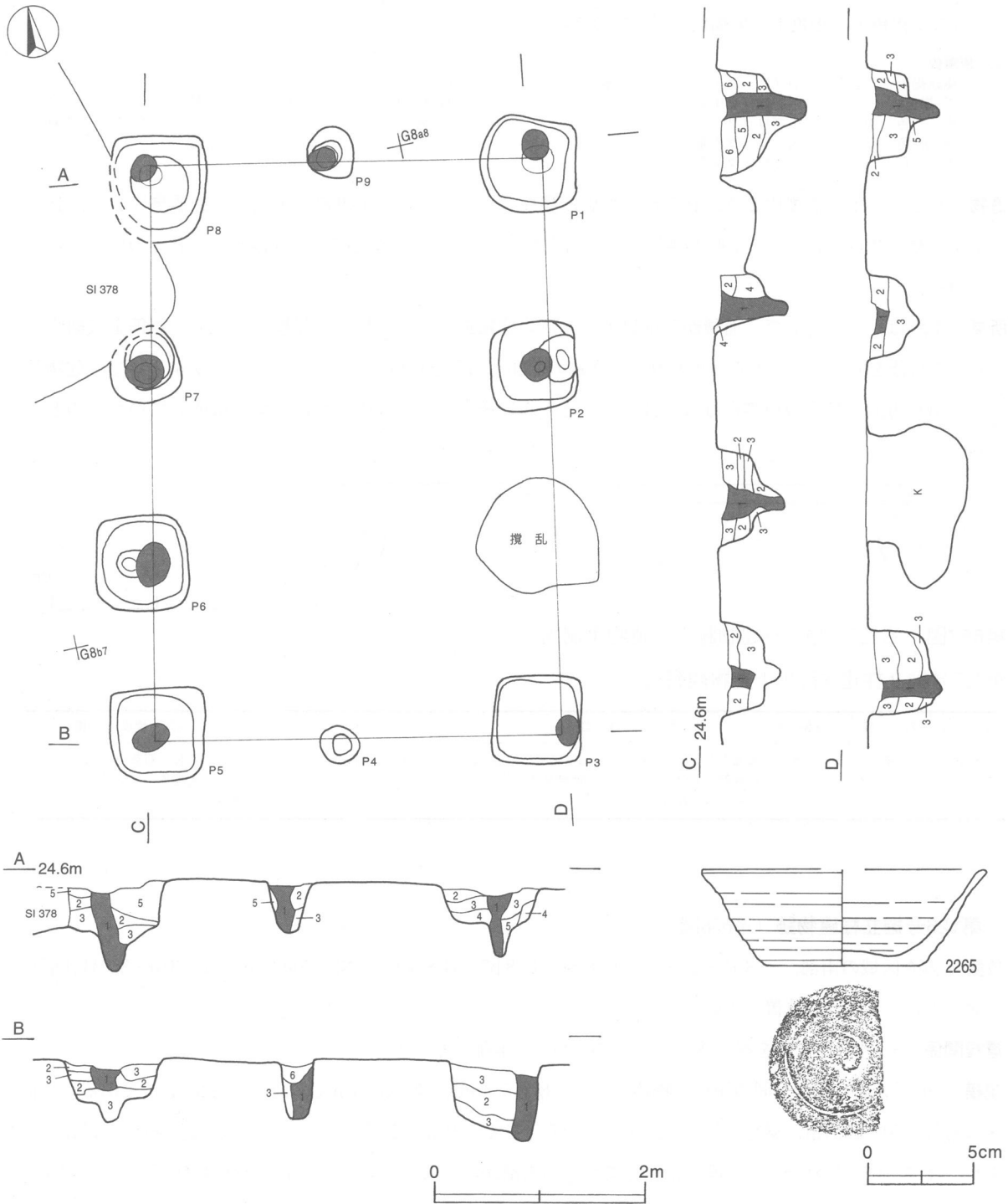
**桁行方向** N-12°-E

**覆土** 柱抜き取り痕は土層断面図中、第1層が相当し、しまりが大変弱い。柱抜き取り痕は、P1～P3・P5～P9で遺構確認面から抜き取り痕が確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。第2～5層は埋土である。埋土はロームを含んだ暗褐色土と褐色土であり、特に強く突き固められてはいない。

**土層解説**

- |       |                    |       |            |
|-------|--------------------|-------|------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・焼土小ブロック微量 | 4 褐色  | ローム小ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム中ブロック中量         | 5 褐色  | ローム中ブロック多量 |
| 3 褐色  | ローム大ブロック多量         | 6 灰褐色 | ローム粒子少量    |

**遺物** P1から土師器甕片2点・須恵器坏片2点・須恵器甕片2点、P2から土師器甕片3点・須恵器坏片1点・須恵器甕片1点、P7から土師器甕片3点、P8から土師器甕片2点・須恵器坏片1点が出土している。



第658図 第126号掘立柱建物跡・出土遺物実測図



第658図2265の須恵器坏は、P1の埋土から正位で出土している。

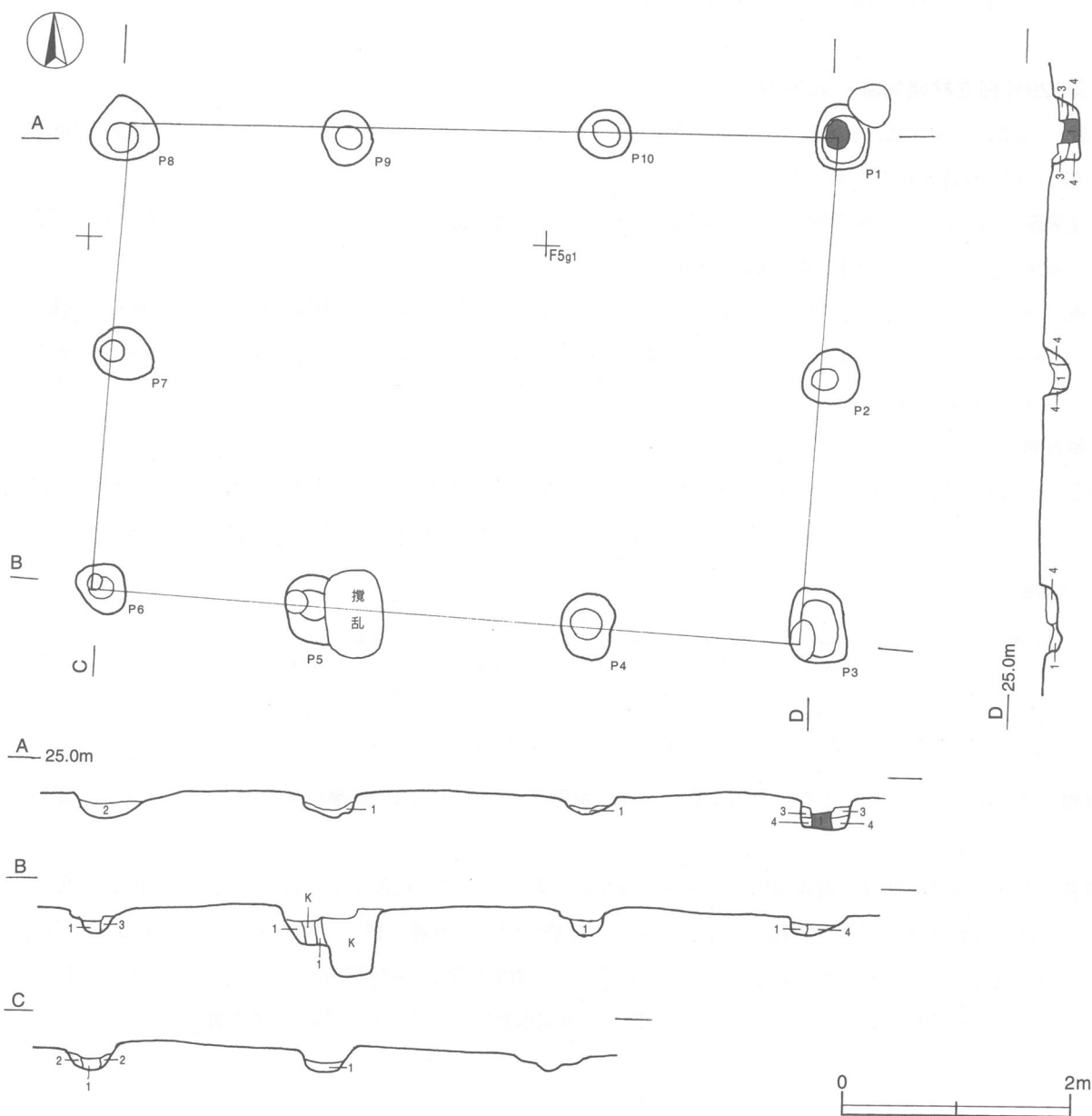
所見 本跡は8世紀後葉と思われる第378号住居跡を掘り込んでいること、また、埋土から出土した土器が8世紀後葉に属するものであることから、9世紀前葉に機能していたと考えられる。

第126号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第658図 2265	坏 須恵器	A [13.4] B 4.6 C 7.1	底部から口縁部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母・石英 灰黄色 普通	50% P L 241

第128号掘立柱建物跡 (第659図)

位置 調査区域の南部、F 4 f0・F 5 f1・F 4 g0・F 5 g1区。東には第444号住居跡が近接する。



第659図 第128号掘立柱建物跡実測図

**規模** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行6.20m、梁行4.10mで、面積は25.42㎡である。柱間寸法は、桁行1.80～2.50m、梁行2.00～2.10mである。柱穴は径0.43～0.52mの円形、深さ0.15～0.37mである。

**桁行方向** N-87°-W

**覆土** 土層断面図中、第1層は柱抜き取り痕に相当する。第2～4層が埋土で、確認できたのはP1だけである。締まりはあまりない。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

**遺物** 出土していない。

**所見** 遺物が出土していないため、時期決定が困難である。桁行方向を同じくする建物跡はないが、梁行方向と主軸を同じくする竪穴住居跡がみられる。周辺の第440・444号住居跡がそれで、8世紀中葉に比定されており、これらと本跡が同時期に機能していた可能性がある。

**第129号掘立柱建物跡（第660図）**

**位置** 調査区の中央部、E6b4・E6b5・E6b6・E6c4・E6c5・E6c6・E6d4・E6d5区。北西5.0mには第82号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** 第433号住居跡を掘り込み、第432号住居、第26号溝に掘り込まれていることから、本跡は第432号住居・第26号溝より古く、第433号住居跡より新しい。

**規模** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.34m、梁行3.98mで、面積は約21.25㎡である。柱間寸法は、桁行1.80～1.94m、梁行1.78～1.80mである。柱穴は径0.75～0.87mの円形で、深さ0.22～0.34mである。P2だけが0.60mと深い。

**主軸方向** N-85°-E

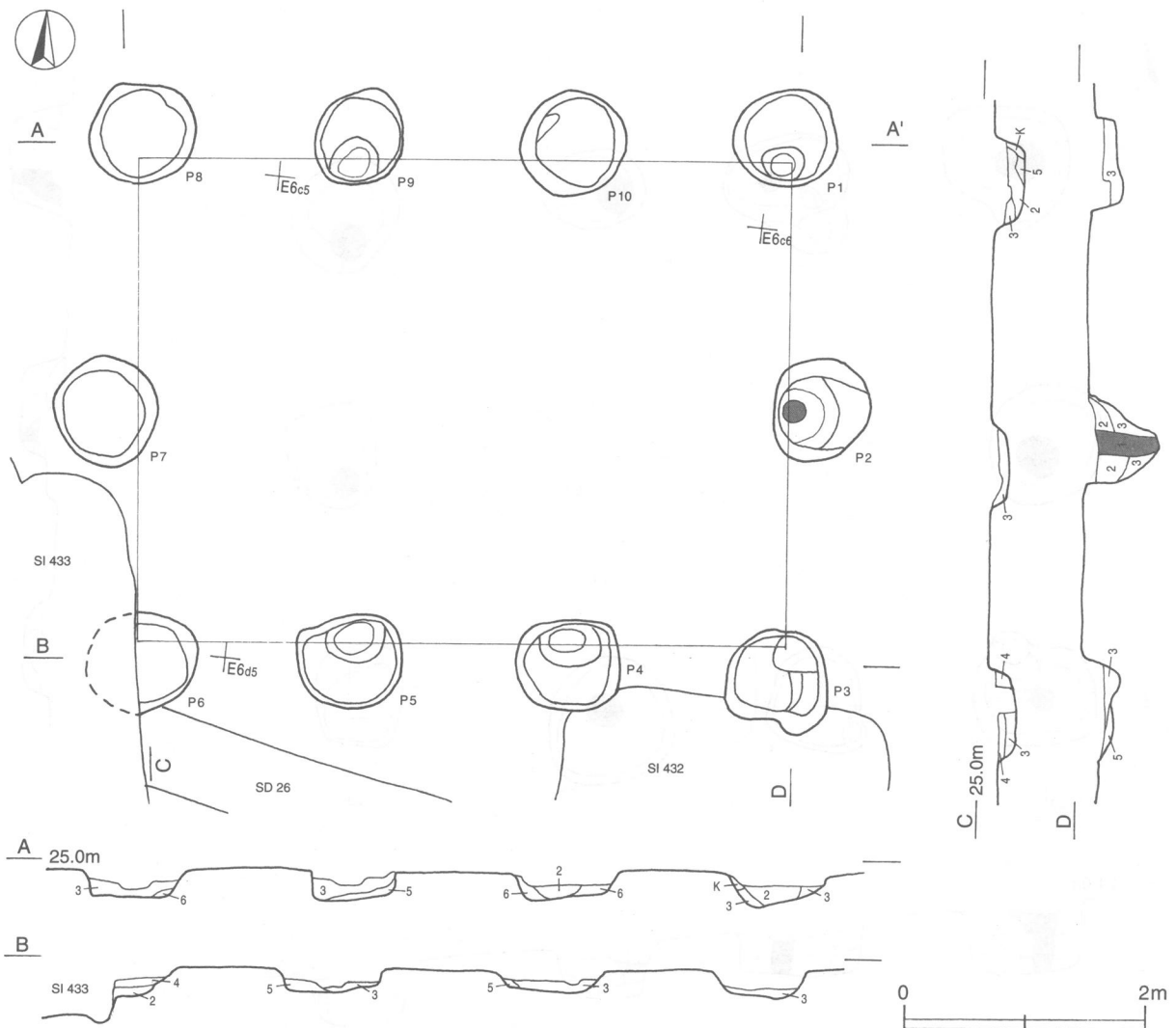
**覆土** 土層断面図中、第1層は柱抜き取り痕に相当し、締まりが大変弱い。柱抜き取り痕が確認できたのはP2だけである。第2～6層は埋土である。埋土はロームブロックを主体とする褐色土・暗褐色土である。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
- 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量

**遺物** P7から土師器坏片1点・土師器甕片8点・須恵器坏片2点・須恵器甕片7点が出土している。細片のため図示できなかった。

**所見** 本跡の構築時期は、重複関係から8世紀後葉より新しく、9世紀後葉より古い。北西21.0mに位置する第7号掘立柱建物跡の梁行の柱筋と、本跡の梁行の柱筋がほぼ一直線に揃う。軸も同じ方向であることから、同時期に機能していた可能性がある。また、第5号竪穴状遺構や第435号住居跡とも軸方向が同じで、これらとセットになると思われる。これらの住居跡の時期は9世紀前葉であることから本跡も同時期としたい。



第660図 第129号掘立柱建物跡実測図

第130号掘立柱建物跡 (第661図)

位置 調査区域の北西部西端, D 8 d9・D 8 d0・D 8 e9・D 8 e0・D 8 f9・D 8 f0区の西に傾斜する斜面部。

重複関係 第407号住居跡を掘り込んでおり, 本跡が新しい。

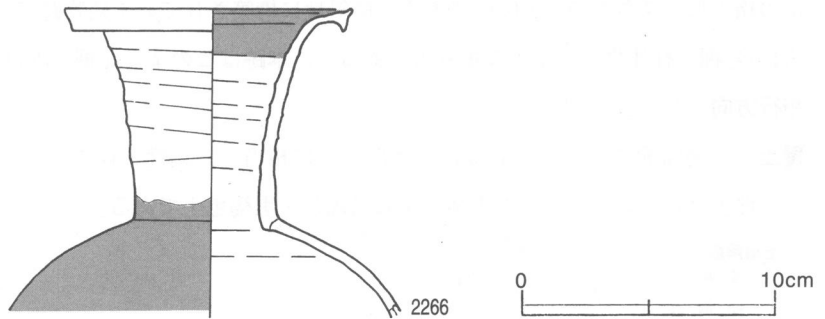
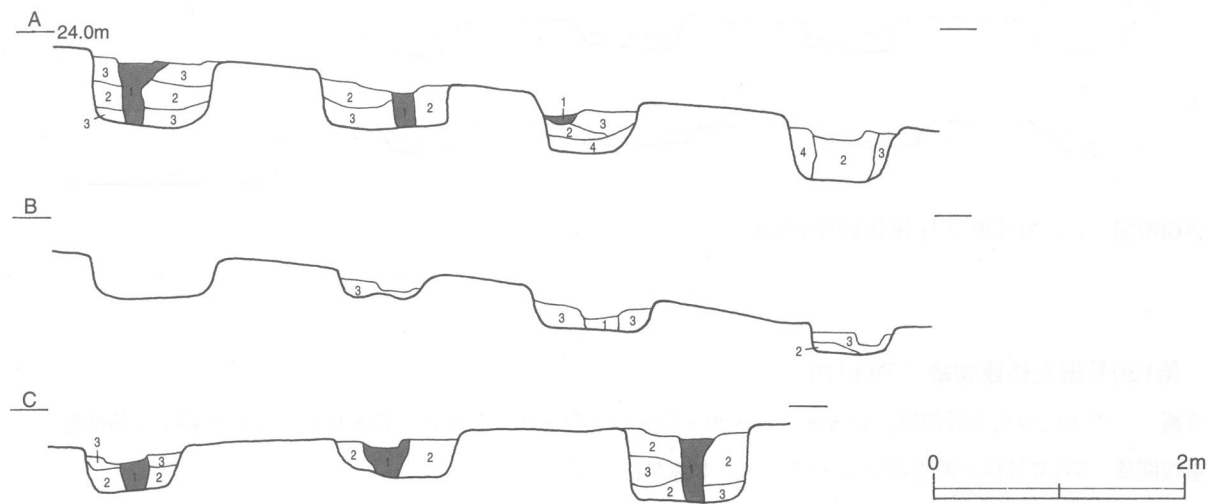
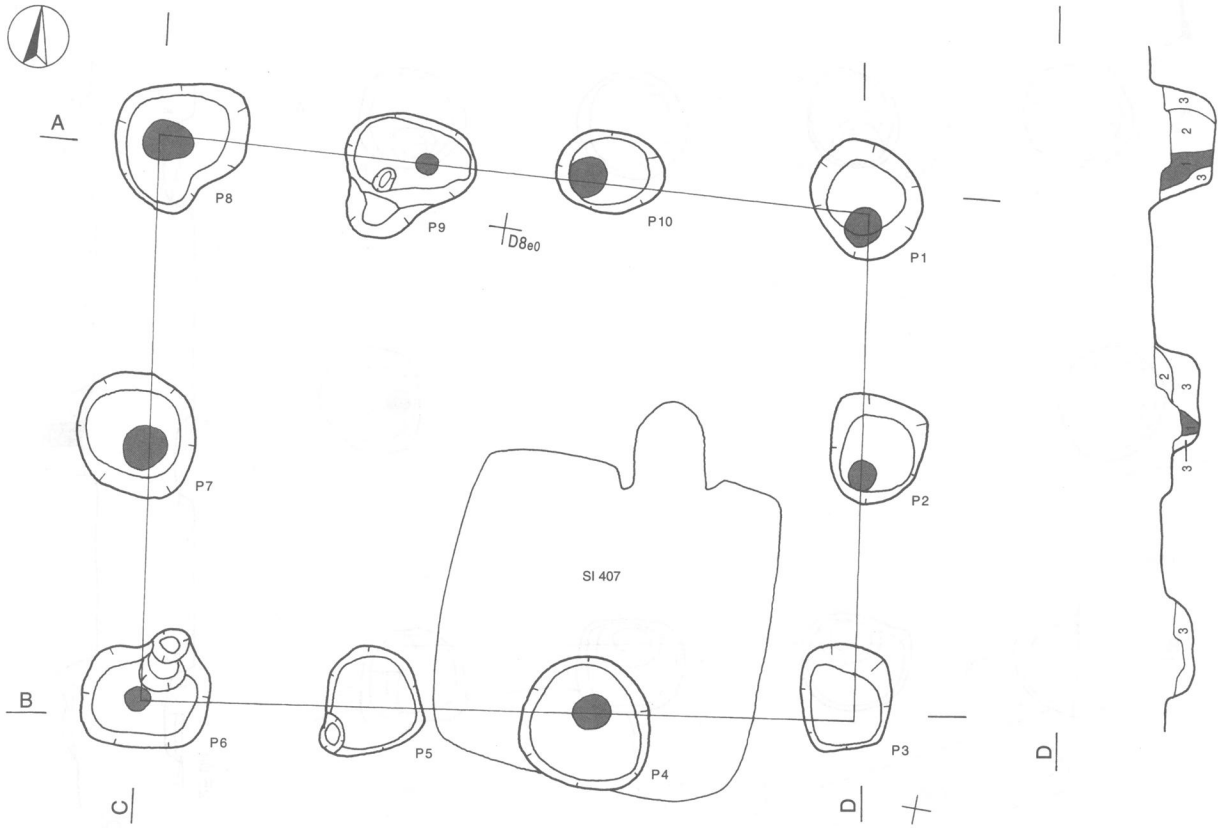
規模 桁行3間, 梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.68m, 梁行4.50mで, 面積は25.56<sup>2</sup>である。柱間寸法は, 桁行1.80~2.03m, 梁行1.90~2.40mで, ばらつきがみられる。柱穴は長径0.76~1.10m, 短径0.53~0.94mの楕円形, 深さ0.35~0.65mである。傾斜地に構築されている建物跡では, 底面の深さを一定に揃えるという第124号掘立柱建物跡のような掘り方があるが, 本跡はこのような掘り方はしていない。

桁行方向 N-27°-W

覆土 土層断面図中, 第1層は柱抜き取り痕に相当し, 粘性・締まりともに大変弱い。第2~4層は埋土である。埋土はロームブロックを主体とする暗褐色・黒褐色土である。

土層解説

- |       |            |
|-------|------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム中ブロック多量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ローム中ブロック中量 |



第661图 第130号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

**遺物** P 4 から土師器坏片 2 点・土師器甕片 12 点, P 6 から土師器坏片 2 点・須恵器坏片 2 点・須恵器甕片 1 点, P 7 から土師器甕片 1 点・須恵器高台付坏片 1 点・灰釉陶器長頸瓶片 8 点, P 8 から土師器甕片 3 点・須恵器坏片 4 点・須恵器高台付坏片 1 点, P 9 から土師器甕片・須恵器坏片各 1 点, P 10 から土師器甕片 1 点・須恵器坏片 2 点・須恵器甕片 1 点が出土している。第 661 図 2266 の灰釉陶器長頸瓶は P 7 から出土している。

**所見** 重複関係や出土遺物から, 10 世紀前葉に機能していたものと思われる。西 23~26m には, 主軸がほぼ揃う第 414・415・226 号住居跡や第 80 号掘立柱建物跡が位置しており, 本跡はこれらと同時期に機能していたものと思われる。

第 130 号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第 661 図 2266	長頸瓶 灰釉陶器	A [11.3] B (12.0)	肩部から口縁部にかけての破片。肩部は丸みもち, なだらかである。頸部は細く, 緩やかに外傾する。口縁部は強く外反し, 端部は上下につまみ出されている。	口縁部, 頸部, 肩部内・外面ロクロナデ。頸部二段接合。頸部から肩部外面, 口縁部内面施釉。	砂質分が多い。 胎土 灰色 普通, 黒色小斑点状吹き出し	20% P L 266 猿投窯産カ

### 第 131 号掘立柱建物跡 (第 662 図)

**位置** 調査区域の北西部, D 4 d0・D 4 e0・D 4 f0・D 5 d1・D 5 e1・D 5 f1 区。西 18m には, 規模も軸もほぼ一致する第 138 号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** 第 132 号掘立柱建物跡を掘り込み, 第 467 号住居に掘り込まれていることから, 第 132 号掘立柱建物跡より新しく, 第 467 号住居より古い。

**規模** 桁行 4 間, 梁行 2 間の側柱建物跡である。桁行 6.40m, 梁行 3.64m で, 面積は約 23.30m<sup>2</sup> である。柱間寸法は, 桁行 1.45~1.55m, 梁行 1.90m である。柱穴は長径 0.61~0.95m, 短径 0.60~0.70m の楕円形, 深さ 0.40m~0.60m である。

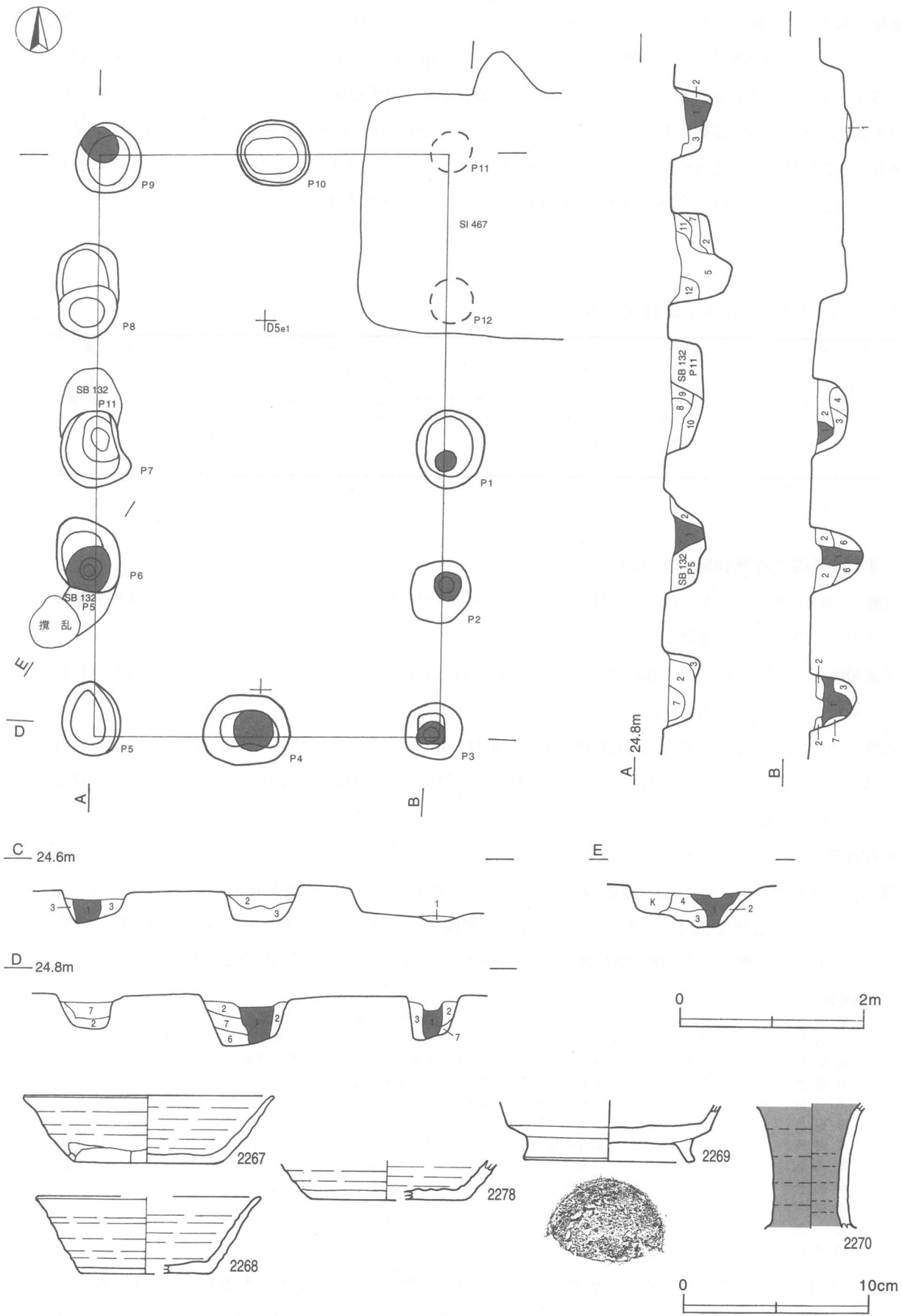
**桁行方向** N-2°-E

**覆土** 土層断面図中, 第 1 層が柱抜き取り痕に相当し, 締まりが弱い。柱抜き取り痕は, P 1~P 4・P 6・P 9 については遺構確認面から確認でき, P 1 は土層断面で確認できた。第 2~12 層は埋土である。埋土は, ロームブロック・焼土・炭化物を含む暗褐色土・褐色土で互層になっており, 強く叩き締められている。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量, 炭化物・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・焼土粒子中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック少量, 焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 8 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 11 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少量
- 12 暗褐色 ローム大ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック微量

**遺物** P 1 から土師器坏片 2 点・須恵器坏片 2 点・須恵器甕片 5 点, P 2 から土師器坏片・須恵器坏各 1 点, P 3 から須恵器坏片 2 点・須恵器甕片 1 点, P 4 から須恵器坏片 3 点・須恵器甕片 4 点, P 5 から須恵器盤



第662图 第131号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

片・須恵器甕片各1点、P6から須恵器坏片1点・須恵器甕片3点、P7から土師器坏片1点・須恵器坏片7点・須恵器甕片3点・須恵器甗片1点、P8から土師器坏片1点・須恵器坏片7点・須恵器高台付坏片2点・須恵器甕片2点・灰釉陶器片1点、P9から須恵器坏片5点・須恵器甕片1点、P10から須恵器坏片2点・須恵器甕片3点が出土している。第662図2267の須恵器坏はP9の埋土、2268・2278の須恵器坏はP7の埋土、2269の高台付坏はP8の埋土から、それぞれ出土している。2269の底部外面には爪形文状が円形に残っている。2270は灰釉陶器長頸瓶の頸部片で、P8の抜き取り痕の覆土から出土したもので、折戸10号窯式もしくは井ヶ谷78号窯式のものと思われる。

**所見** 本跡は、第467号住居に掘り込まれていることから、9世紀後葉以前に機能していたと思われる。また、埋土から出土した土器から8世紀中葉に構築されたと思われる。抜き取り痕の覆土から出土した灰釉陶器片から9世紀後葉には廃絶したと考えられる。本跡の18m西には、規模も軸もほぼ一致する第138号掘立柱建物跡があり、同時期に機能していた可能性がある。

### 第131号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第662図 2267	坏 須恵器	A 13.4 B 3.7 C 8.0	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。	粗い、砂粒・長石・角礫 灰黄色、普通	60% P L242
2268	坏 須恵器	A [12.0] B 4.2 C [7.0]	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で外反する。器壁が薄い。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端・底部外周回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、ナデ。	精良、砂粒 青灰色 良好	20% P L242
2269	高台付杯 須恵器	B (3.1) D [9.2] E 1.3	口縁部欠損。底部と体部の境に稜をもつ。体部は外傾して立ち上がる。高台はわずかに外に開く。	底部内面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後、ナデ。高台貼り付け時の爪形痕が底部外面に残る。	粗い、砂粒・長石・角礫 青灰色、良好	30% P L242
2270	長頸瓶 灰釉陶器	B (6.9)	頸部の破片。頸部は外反しながら立ち上がる。	頸部内・外面ロクロナデ。	堅緻 にぶい赤褐色 良好	5% P L242 折戸10号窯式 または井ヶ谷 78号窯式
2278	坏 須恵器	B (2.2) C [8.4]	底部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、ナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色、普通	5%

### 第132号掘立柱建物跡 (第663図)

**位置** 調査区域の北西部、D4d9・D4d0・D4e9・D4e0・D5d1・D5e1区。西17mには、本跡と軸や規模がほぼ一致する第133号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** 第131号掘立柱建物に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

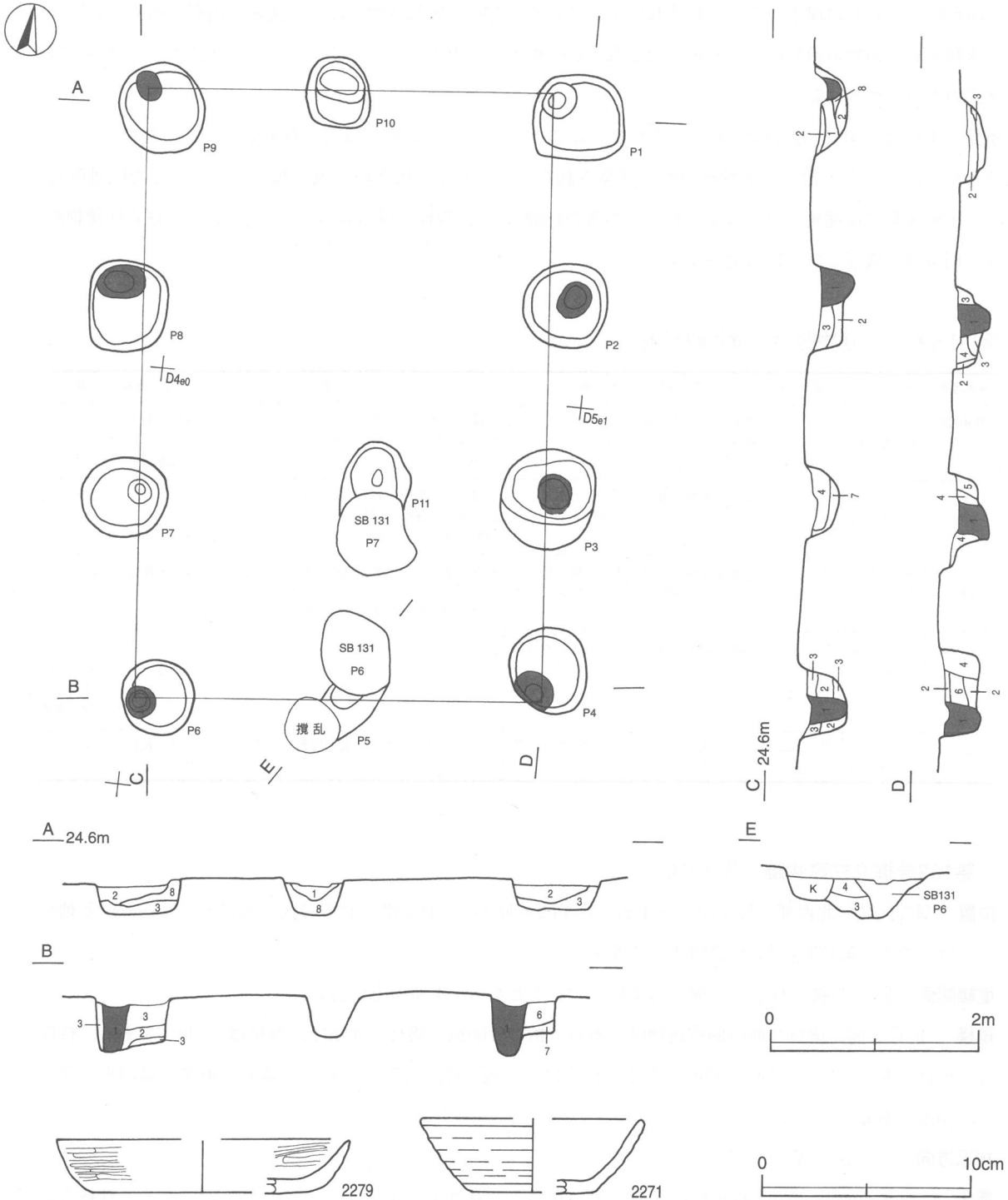
**規模** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行6.00m、梁行3.90mで、面積は23.40㎡である。柱間寸法は、桁行1.90～2.00m、梁行1.90mである。柱穴は、一辺(径)0.70～0.85mの隅丸方形または円形、深さ0.40～0.60mである。

**桁行方向** N-5°-W

**覆土** 土層断面図中、第1層が柱抜き取り痕に相当し、粘性・締まりともに弱いものである。柱抜き取り痕は、P2～P4・P6・P8・P9については遺構確認面から確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。第2～8層は埋土である。埋土はロームブロックを含んだ褐色土・暗褐色土・極暗褐色土・にぶい黄褐色土で互層になっている。

土層解説

- |          |                        |        |                             |
|----------|------------------------|--------|-----------------------------|
| 1 暗褐色    | ローム小ブロック微量             | 6 極暗褐色 | ローム中ブロック・焼土小ブロック・黒色土小ブロック少量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ローム中ブロック少量             | 7 暗褐色  | ローム中ブロック中量                  |
| 3 褐色     | ローム中ブロック多量             | 8 褐色   | ローム大ブロック多量                  |
| 4 暗褐色    | ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量     |        |                             |
| 5 暗褐色    | ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量 |        |                             |



第663図 第132号掘立柱建物跡・出土遺物実測図



**遺物** P 1 から土師器甕片12点・須恵器坏片 7 点, P 2 から須恵器甕片 1 点, P 3 から土師器甕片 2 点・須恵器坏片 2 点・灰釉陶器片 1 点, P 4 から土師器坏片 4 点・須恵器甕片 3 点・須恵器坏片 2 点, P 6 から土師器坏片・甕片各 1 点, P 7 から土師器甕片・須恵器坏片各 1 点, P 8 から土師器甕片・須恵器坏片各 2 点, P 9 から土師器甕片・須恵器坏片各 1 点が出土している。第663図2271の須恵器坏は P 7 の埋土から, 2279の土師器坏は P 4 の埋土から, それぞれ出土している。

**所見** 本跡の西側には規模も軸もほぼ一致する第16・15号掘立柱建物跡が位置し, 同時期に機能していた可能性がある。本跡は, 重複関係と出土土器から 8 世紀前葉に構築されたものと思われる。

第132号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第663図 2271	坏 須恵器	A [10.9] B 3.6 C [5.5]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり口縁部にいたる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端・底部外周回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り痕。	砂粒・雲母 灰白色 普通	30% P L 242
2279	坏 土師器	A [14.2] B 2.6 C [10.3]	低い器高で, 体部は外傾して立ち上がる。器壁は厚い。	口縁部内・外面ヘラ磨き。底部多方向のヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	5% P L 242

### 第133号掘立柱建物跡 (第664図)

**位置** 調査区域の北西部 D 4 d4・D 4 d5・D 4 e4・D 4 e5・D 4 f5区。本跡の 8.0m 北には第135号掘立柱建物跡が, 本跡と軸や規模をほぼ一致して位置する。

**重複関係** 第138号掘立柱建物に掘り込まれていることから, 本跡の方が古い。

**規模** 桁行 3 間, 梁行 2 間の側柱建物跡である。桁行 4.80m, 梁行 3.80m で, 面積は 18.24m<sup>2</sup> である。柱間寸法は, 桁行 1.50~1.60m, 梁行 1.63~2.0m である。第138号掘立柱建物の P 7 に掘り込まれているため, 西桁行の P 6 と P 7 の間の柱は検出できなかった。柱穴は, 一辺 (径) 0.53~0.60m の隅丸方形または円形, 深さ 0.30m~0.69m である。

**桁行方向** N-8°-W

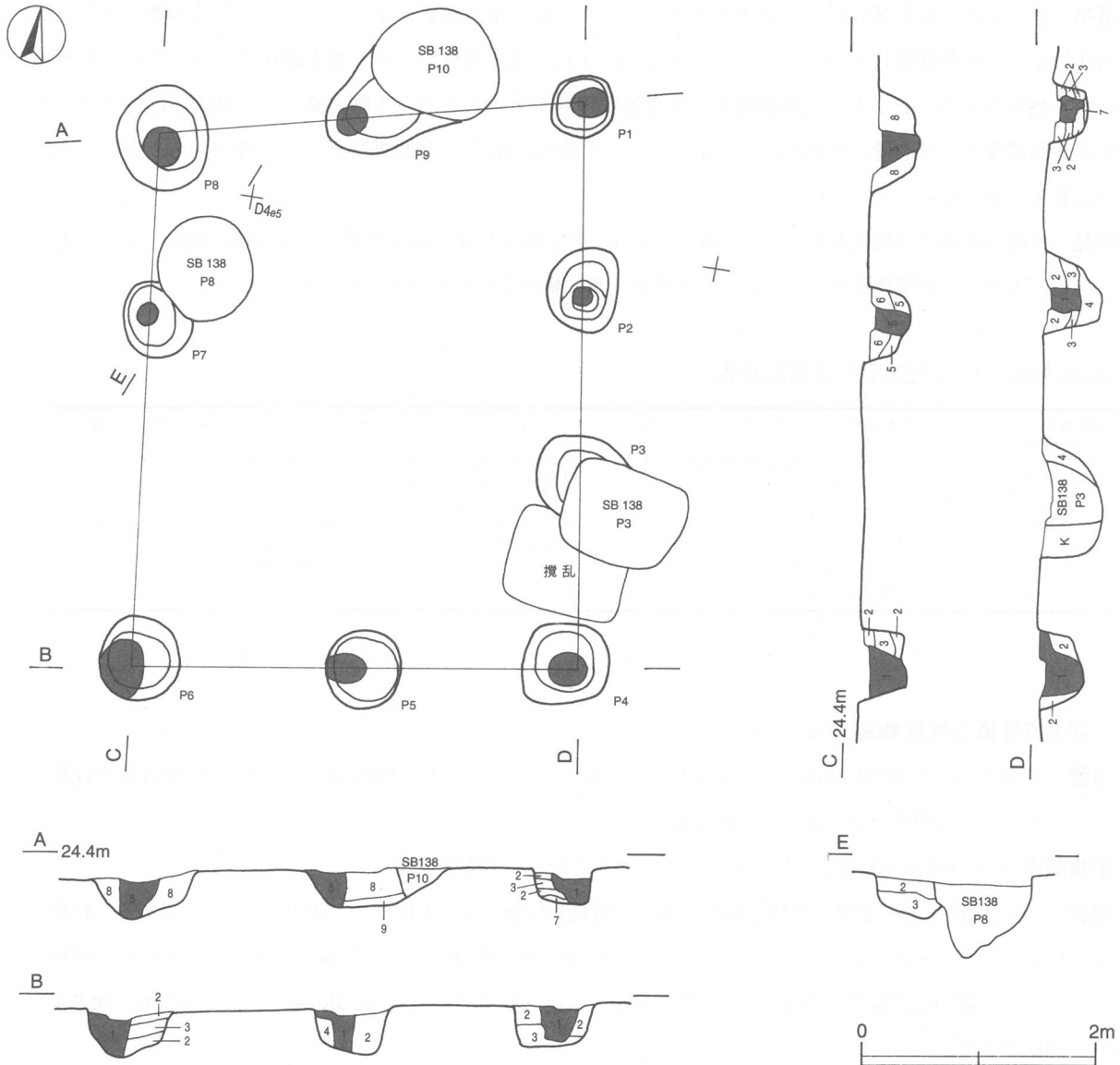
**覆土** 土層断面図中, 第 1・5 層が柱抜き取り痕に相当し, 締まりは大変弱い。柱抜き取り痕は, 遺構確認面から確認でき, 土層断面でも明瞭に確認できた。第 2~4・6~9 層は埋土である。埋土はロームを含む極暗褐色土・褐色土・暗褐色土で互層になっており, 比較的良く叩き締められている。

#### 土層解説

1 黒褐色	ローム粒子中量	6 褐色	ローム大ブロック少量
2 極暗褐色	ローム大ブロック中量	7 褐色	ローム中ブロック少量
3 極暗褐色	ローム中ブロック少量	8 褐色	ローム大ブロック多量
4 褐色	ローム大ブロック中量	9 暗褐色	ローム中ブロック少量
5 黒褐色	ローム粒子少量		

**遺物** 土師器片 1 点, 須恵器片 2 点が出土している。細片のため図示することができなかった。

**所見** 本跡は, 隣接する第135号掘立柱建物跡と桁行方向が一致することから, 同時期に一連の施設として機能していた可能性がある。また, 本跡から第138号掘立柱建物への建て替えが行なわれている。



第664図 第133号掘立柱建物跡実測図

**第134号掘立柱建物跡** (第665図)

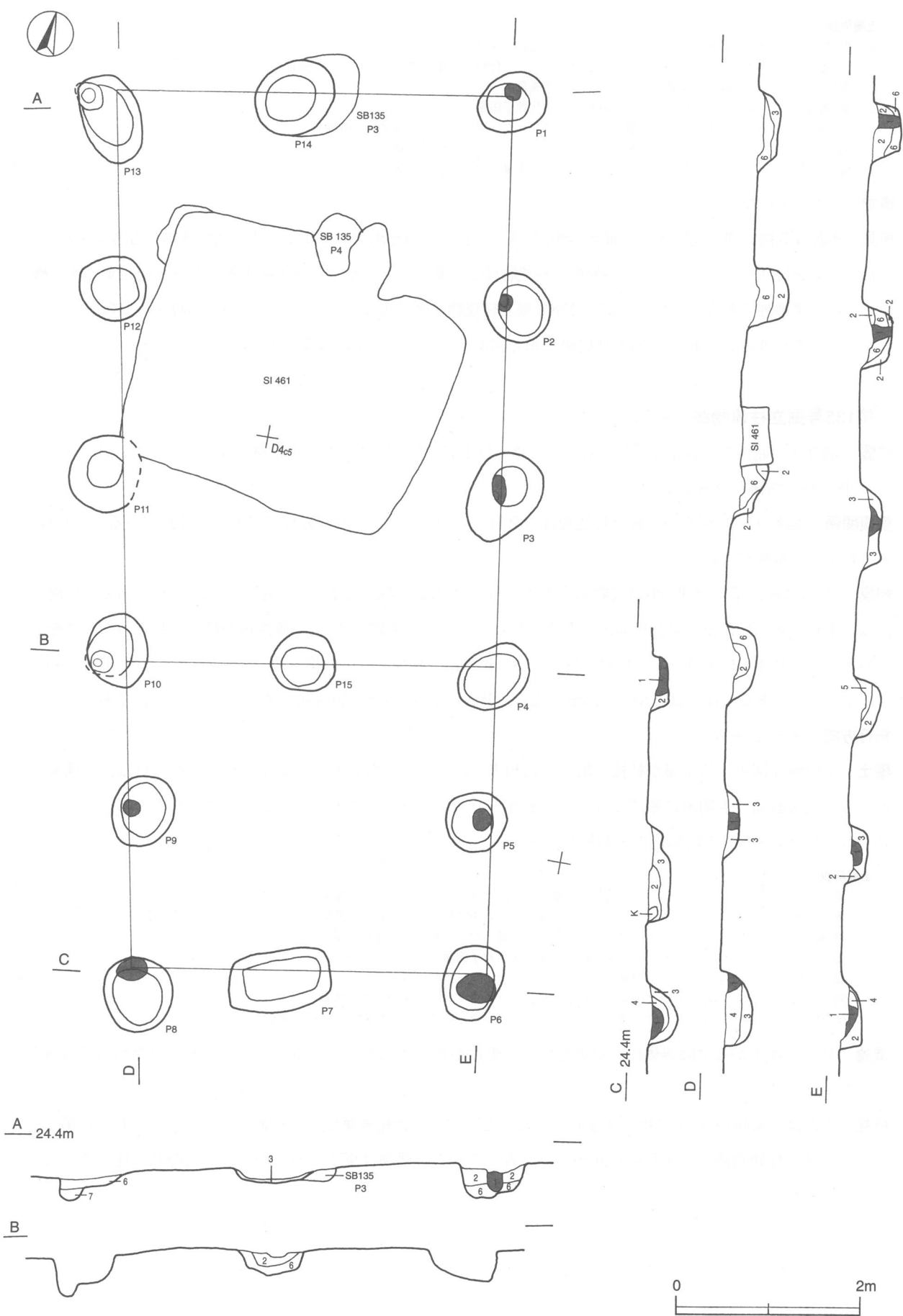
**位置** 調査区域の北西部D 4 b4・D 4 b5・D 4 c4・D 4 c5・D 4 d4・D 4 d5区。本跡周辺には第133・135・137・138号掘立柱建物跡が密集している。

**重複関係** 第461号住居に掘り込まれ、本跡のP14が第135号掘立柱建物跡のP3を掘り込んでいる。このことから、本跡は第461号住居より古く、第135号掘立柱建物跡より新しい。

**規模** 桁行5間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行9.60m、梁行4.20mで、面積は40.32㎡である。柱間寸法は、桁行1.80~2.00m、梁行1.90~2.10mである。棟筋には、柱筋を揃えP15がある。柱穴は、長径0.75~1.10m、短径0.63~0.75mの楕円形、深さ0.25~0.50mであるが、P9・P14のように深さが0.15mと浅い柱穴もある。

**桁行方向** N-9°-W

**覆土** 土層断面図中、第1層が柱抜き取り痕に相当し、締まりが弱い。柱抜き取り痕は、P5・P8・P9については遺構確認面から確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。P1~P3・P6については土層断面で確認できた。第2~7層は埋土である。埋土はロームブロック・炭化粒子を含む暗褐色土・褐色土である。



第665图 第134号掘立柱建物跡実測图

#### 土層解説

1 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量，ローム大ブロック微量
3 褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
4 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ローム中ブロック少量，ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
6 褐色	ローム中ブロック中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
7 褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム粒子少量

**遺物** 出土していない。

**所見** 本跡は5間2間の建物として捉えたが、P4・P10・P15を南梁と考える3間2間の建物とも考えられる。本跡は、第461号住居より古く、第135号掘立柱建物跡より新しいことから、8世紀中葉以降9世紀後葉以前に機能していた建物跡である。また、第137・138号掘立柱建物跡とは近接しすぎることから、同時期には機能していなかったものとする。第456・84号住居跡と軸方向が同じで、セットになるとと思われる。

#### 第135号掘立柱建物跡（第666図）

**位置** 調査区の北西部，D4a3・D4a4・D4a5・D4b4・D4b5区。本跡の周囲には第134・136・137・133・138号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** 本跡のP3が第134号掘立柱建物跡のP14に、P4とP5が第461号住居に掘り込まれていることから、いずれよりも本跡が古い。

**規模** 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行4.74m，梁行3.22mで，面積は約15.26㎡である。柱間寸法は，桁行1.40～1.70m，梁行1.60mである。P4の上部には第431号住居の竈西袖が構築されており，袖を取り外した跡にP4が検出された。柱穴は長径1.08～1.21m，短径0.85mの楕円形で大形のもの，径0.65～0.85mの円形のものがある。深さは0.10～0.25mと浅く，P4・P6・P9は0.45mと他のものより深めである。

**桁行方向** N-11°-W

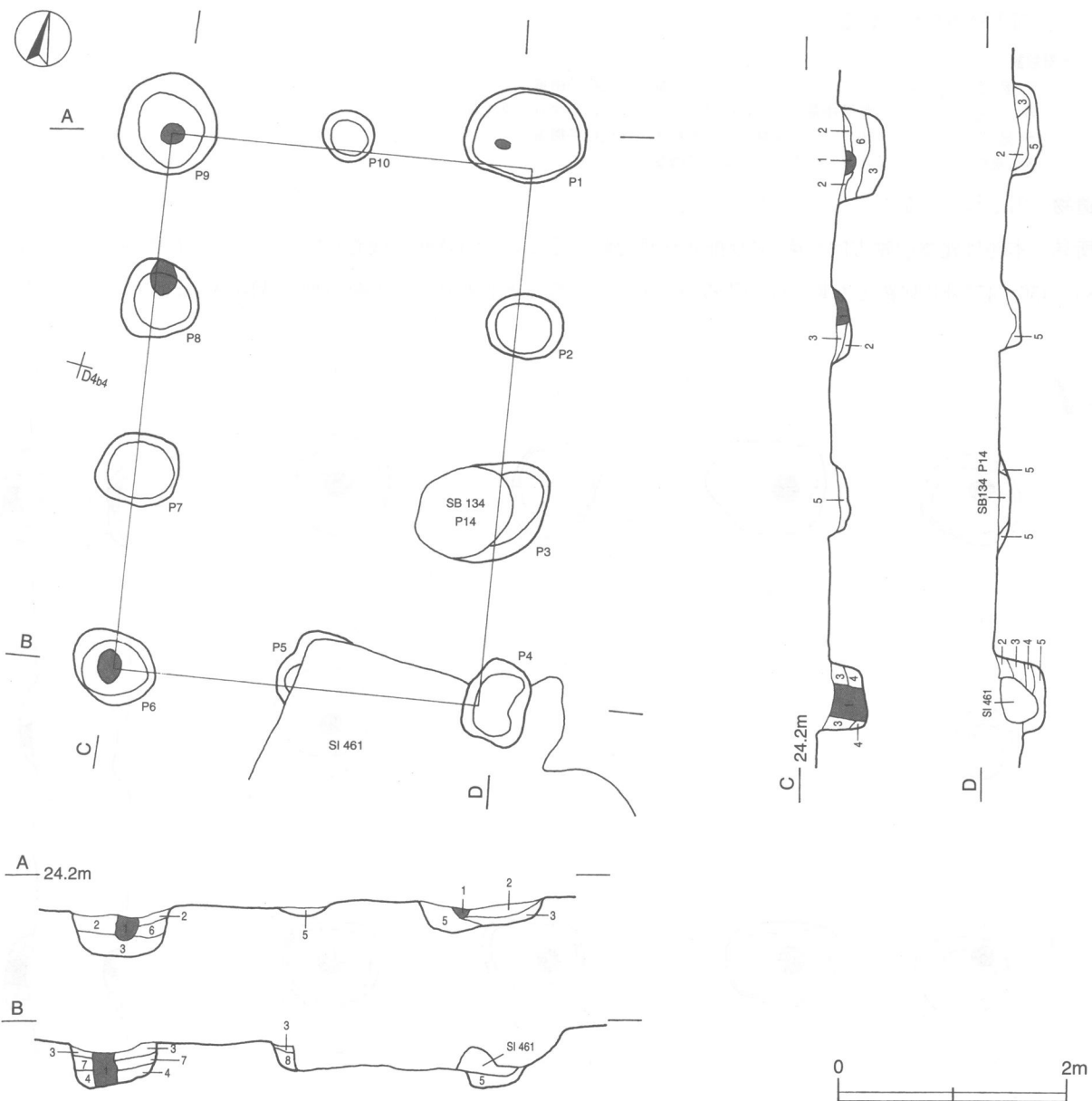
**覆土** 土層断面図中，第1層が柱抜き取り痕に相当し，締まりが弱いものである。柱抜き取り痕は，遺構確認面からと土層断面でも明瞭に確認できたのはP6・P8・P9だけである。第2～7層は埋土である。埋土はロームブロックを含んだ暗褐色土・褐色土である。

#### 土層解説

1 黒褐色	ローム小ブロック・炭化粒子少量，ローム中ブロック・ローム粒子微量
2 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
4 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
5 褐色	ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量
6 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック・炭化粒子微量
7 暗褐色	ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量

**遺物** P8の埋土から土師器甕片，須恵器坏片・甕片が各1点出土している。いずれも細片のため図示できなかった。

**所見** 本跡は，第461号住居に掘り込まれていることから，9世紀後葉以前に機能していたと思われる。第1・2・3号掘立柱建物跡と北梁行の柱筋が一致する。これらの建物は東から西にわたって同時期に建ち並んでいたものと思われる。



第666図 第135号掘立柱建物跡実測図

### 第136号掘立柱建物跡 (第667図)

**位置** 調査区の北西部，C 4 i4・C 4 i5・C 4 j4・C 4 j5・C 4 j6区。南側には第135・137号掘立柱建物跡が位置する。

**規模** 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.70m，梁行4.20mで，面積は23.94㎡である。柱間寸法は，桁行1.80～2.00m，梁行2.00～2.20mである。柱穴は，長軸0.90～1.05m，短軸0.65～0.80mの隅丸長方形のものと，一辺(径)が0.60～0.90mの隅丸方形または円形のものがあり，いずれも深さは0.15m～0.25mと浅い。

**桁行方向** N-80°-E

**覆土** 土層断面図中，第4層が柱抜き取り痕に相当し，締まりが弱い。柱抜き取り痕は，P1～P6，P8・P9については遺構確認面から確認でき，土層断面でも明瞭に確認できた。そのほかについては土層断面でも確認できなかった。第1～3層は埋土である。埋土はロームブロックを含む暗褐色土，褐色土で互層になって

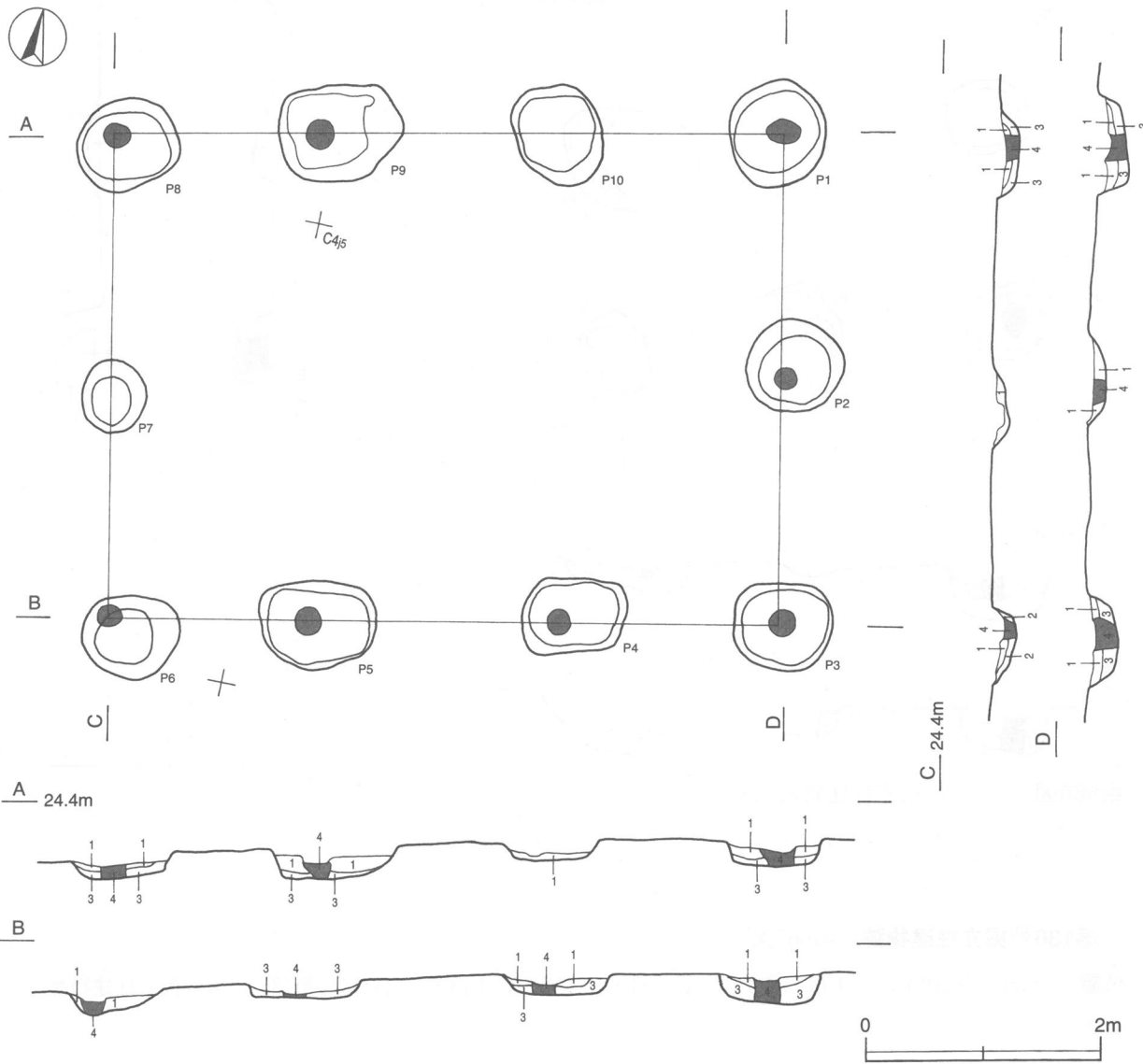
おり、叩き締められている。

**土層解説**

- 1 暗褐色      ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 2 褐色        ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色      ローム小ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 極暗褐色    ローム小ブロック・ローム粒子微量

**遺物** 出土していない。

**所見** 本跡は建物の軸方向が第134号掘立柱建物跡とそろい，同時期に機能していたものと思われる。また，第84・456・473号住居跡とも軸方向がそろい，セットになると思われ，9世紀前葉の時期が与えられる。



第667図 第136号掘立柱建物跡実測図

**第137号掘立柱建物跡 (第668図)**

**位置** 調査区の北西部D 4 a5・D 4 a6・D 4 b5・D 4 b6区。本跡の北には近接して第136号掘立柱建物跡が，西側には第135号掘立柱建物跡が，西南には第134号掘立柱建物跡が位置している。

**規模** 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行6.40m，梁行4.20mで，面積は26.88㎡である。柱間寸法

は、桁行2.00m，梁行2.10mで，ほぼ等間隔である。柱穴は一辺が0.70～0.90mの隅丸方形で，深さは0.25～0.35mと浅い。

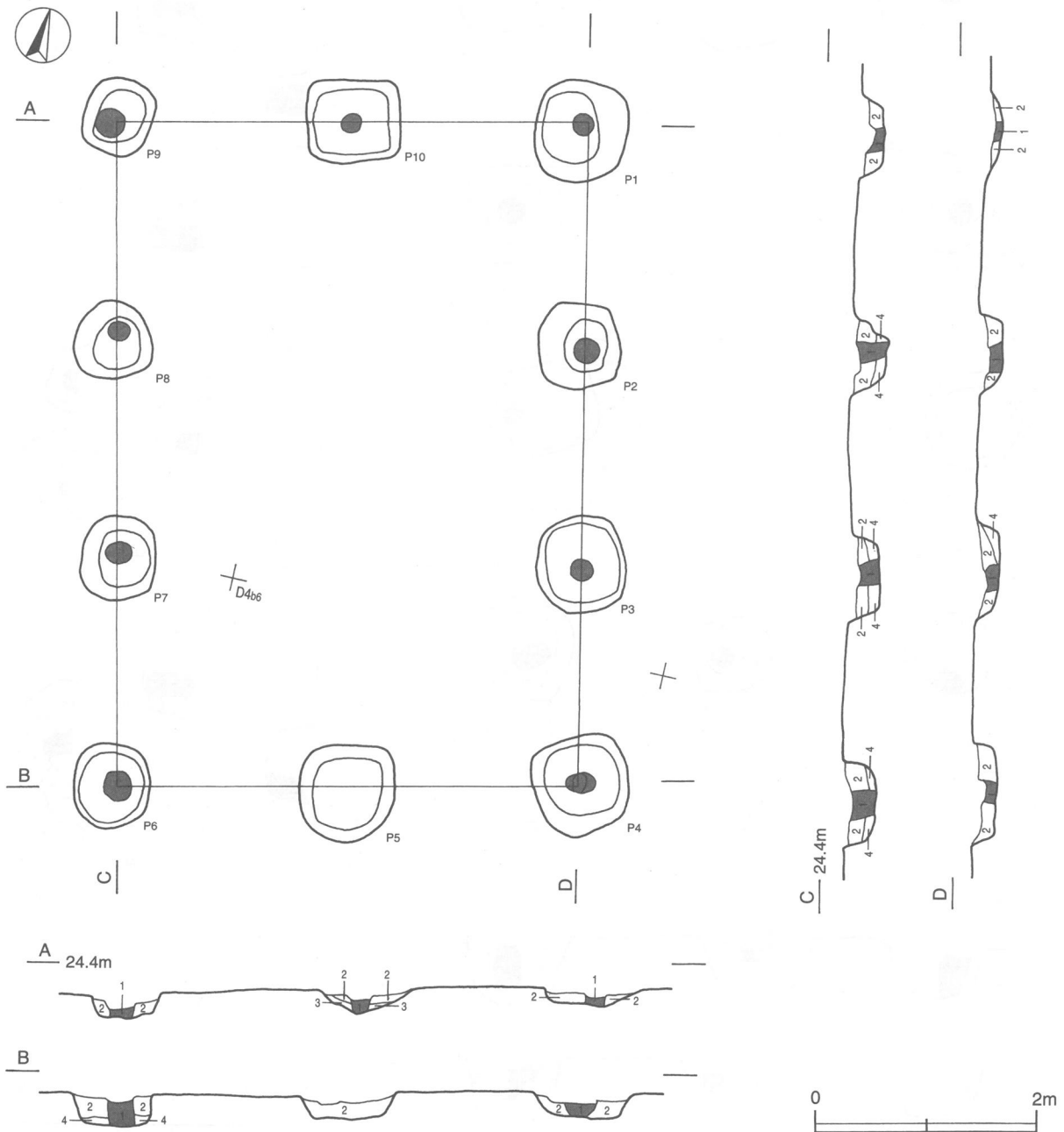
桁行方向 N-11°-W

覆土 土層断面図中，第1層が柱抜き取り痕に相当する。柱抜き取り痕はP5を除いて，遺構確認面からと土層断面でも明瞭に確認できた。第2～4層は埋土である。埋土はロームブロックを含んだ暗褐色土である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量，炭化物・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量

遺物 出土していない。

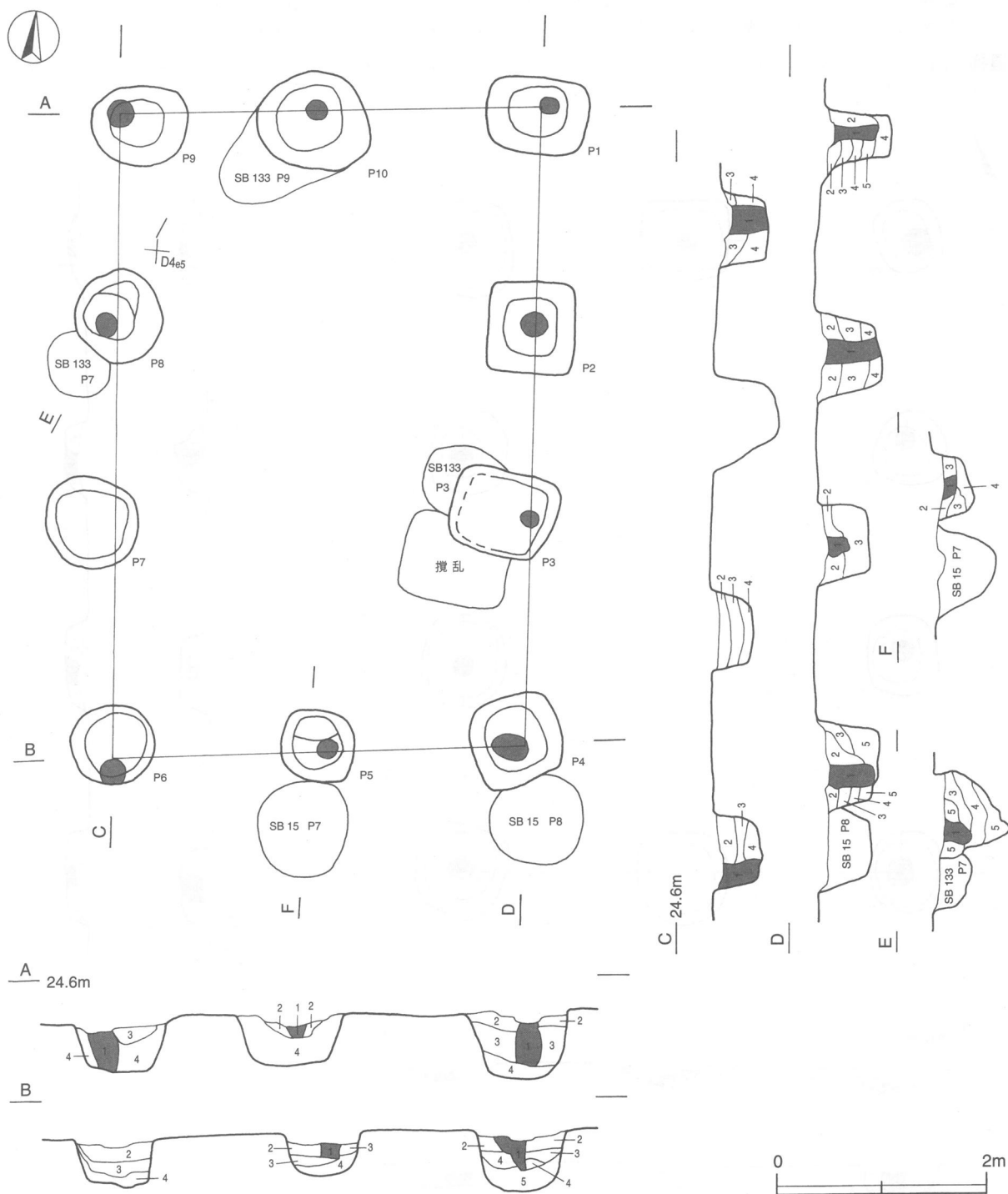


第668図 第137号掘立柱建物跡実測図

所見 本跡の西には第135号掘立柱建物跡が位置し、柱筋も通り、軸方向も一致することから、同時期に機能していた可能性が考えられる。本跡からは遺物が出土していないが、第1・2・3・24号掘立柱建物跡と同時期に存在し、時期は8世紀中葉と推定される。

### 第138号掘立柱建物跡 (第669図)

位置 調査区域の北西部D 4 d4・D 4 d5・D 4 e4・D 4 e5・D 4 f4・D 4 f5区。周辺には第15・133・134号掘立



第669図 第138号掘立柱建物跡実測図



柱建物跡、東15mには第131・132号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** 第15・133号掘立柱建物跡を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

**規模** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行6.18m、梁行4.10mで、面積は約25.34㎡である。柱間寸法は、桁行2.00～2.10m、梁行2.00～2.20mである。柱穴は、長径0.85～1.00m、短径0.75～0.90mの隅丸長方形または隅丸方形、深さ0.46～0.70mであるが、P7だけが浅く0.39mである。

**桁行方向** N-5°-W

**覆土** 土層断面図中、第1層が柱抜き取り痕に相当し、締まりが弱い。柱抜き取り痕は、P1～P4、P6・P9・P10については遺構確認面から確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。P5・P8については土層断面で確認できた。第2～5層は埋土である。埋土はロームブロックや炭化粒子を含んだ暗褐色土と褐色土が互層になっており、叩き締められている。

#### 土層解説

- |       |                            |
|-------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・炭化粒子少量            |
| 2 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量      |
| 4 褐色  | ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量   |
| 5 褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量      |

**遺物** 出土していない。

**所見** 本跡は、重複関係から第15・133号掘立柱建物跡より新しい時期に機能していた建物である。第133号掘立柱建物をわずかに東にずらして建て替えたものである。東に15mのところを位置する第131号掘立柱建物跡とは規模も軸もほぼ一致することから、同時期の8世紀中葉に機能していたと思われる。

### 第139号掘立柱建物跡（第670図）

**位置** 調査区域の北西部、C4c1・C4c2・C3d0・C4d1・C4d2区。

**重複関係** 第1194号土坑を掘り込んでいることから、本跡の方が新しい。

**規模** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.46m、梁行4.40mで、面積は約24.02㎡である。柱間寸法は、桁行1.60～1.90m、梁行2.10～2.20mである。柱穴は、長軸0.75～0.95m、短軸0.65～0.70mの隅丸長方形のもの、1辺が0.80～0.85mの隅丸方形のもの、径0.65mの円形のものがある。深さは0.20～0.50mで、特に、四隅に位置するP1・P6・P9はほかに比べて深い。

**桁行方向** N-2°-E

**覆土** 土層断面図中、第1層が柱抜き取り痕に相当する。柱抜き取り痕は、P1・P2・P4・P5・P7～P10については遺構確認面から確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。第2～6層が埋土である。埋土はロームブロックや炭化粒子を含んだ暗褐色土・にぶい黄褐色土が互層になっており、第4・6層が強く叩き締められている。

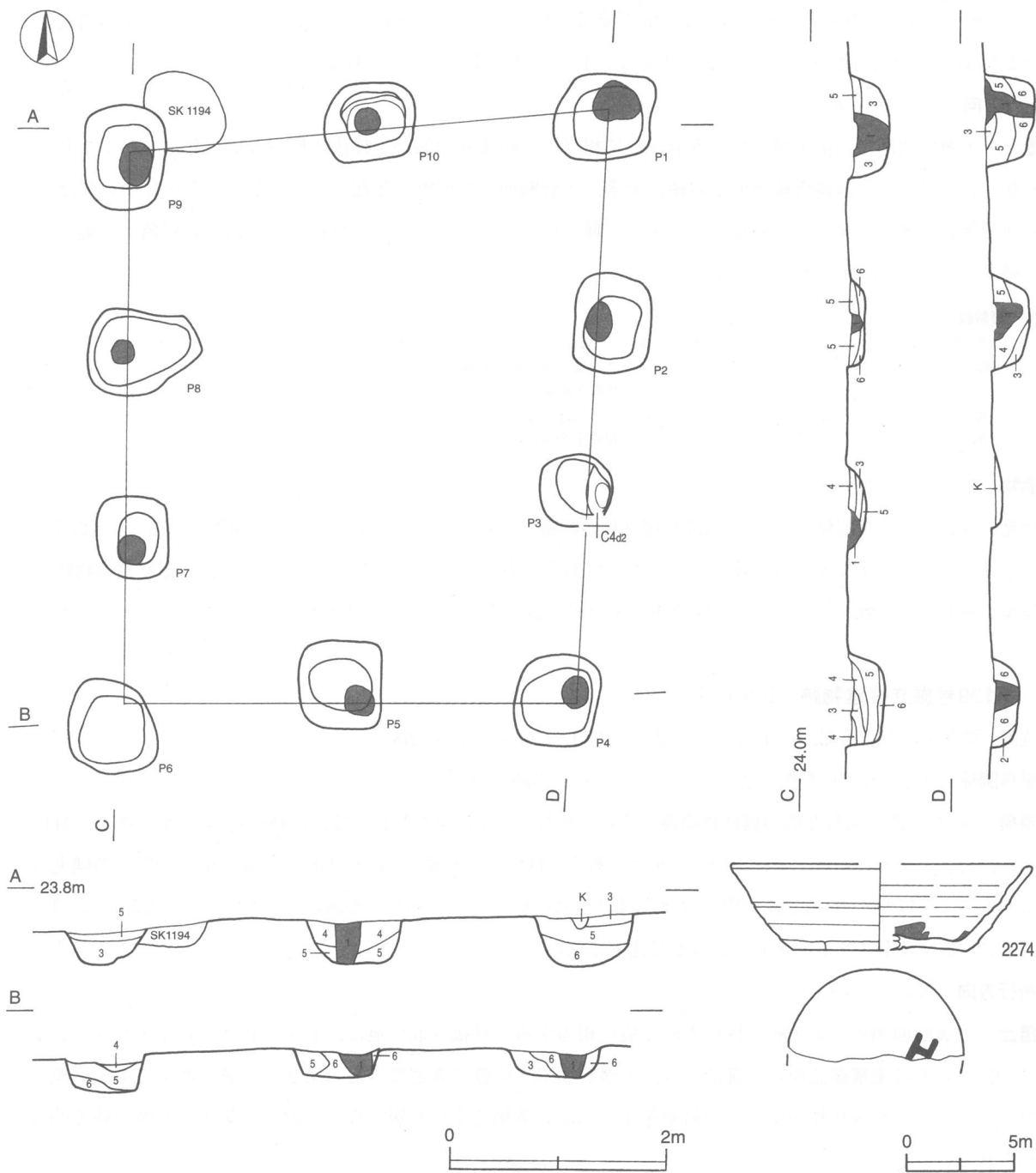
#### 土層解説

- |          |   |
|----------|---|
| 1 暗褐色    | ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量    |
| 2 暗褐色    | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量                          |
| 3 にぶい黄褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量          |
| 4 にぶい黄褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、ローム大ブロック・炭化粒子微量 |
| 5 にぶい黄褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量            |
| 6 にぶい黄褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック・炭化粒子微量 |

**遺物** P2から須恵器坏片1点、P3から土師器甕片・須恵器坏片各1点、P6から土師器坏片・須恵器甕片各1点、P8から須恵器坏片2点、P9から須恵器坏片1点、P10から土師器甕片・須恵器坏片各1点が出土している。第670図2274の須恵器坏はP2の埋土から出土している。底部外面には墨書がされているが、残存部

が2分の1のため、判読は不能である。

所見 本跡は、出土土器から8世紀後葉に構築されたものと思われる。



第670図 第139号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第139号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第670図 2274	坏 須恵器	A [14.0] B 4.0 C [ 8.2]	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部1方向のへら削り、回転へら切り痕。	砂粒・雲母・長石 黄褐色 普通	40% P L 242 内面煤附着 底部外面墨書「□」 二次焼成

第140号掘立柱建物跡（第671・672図）

**位置** 調査区域の北西端部，B 3h3・B 3h4・B 3h5・B 3i3・B 3i4・B 3i5・B 3j3・B 3j4・B 3j5区の西に傾斜する斜面部。

**規模** 桁行3間，梁行2間の身舎の南北の梁側に庇が付く2面庇の建物跡である。桁行は身舎だけで6.10m，庇も含めると7.95m，梁行4.60mである。面積は身舎部分だけで28.06㎡，庇も含めると36.57㎡である。柱間寸法は，桁行1.90～2.20m，梁行2.20～2.30mでほぼ等間隔である。身舎から庇までの柱間寸法は，1.70～2.00mである。身舎の柱穴は長軸0.90～1.05m，短軸0.85～0.95mの隅丸長方形で，深さ0.55～0.80mである。庇の柱穴は，径0.30～0.40mの円形で，深さは0.20～0.25mと，小形で浅い。

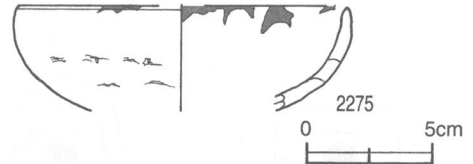
**主軸方向** N-3°-E

**覆土** 土層断面図中，第1・7層が柱抜き取り痕に相当する。柱抜き取り痕はP9を除いて，遺構確認面からと土層断面で明瞭に確認できた。第2～6・8～10層は埋土である。埋土はロームブロック・焼土・炭化物・白色粘土ブロックを含んだ暗褐色土・にぶい黄褐色土が互層になっており，比較的締まっている。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子・白色粘土粒子微量
- 4 暗褐色 白色粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化物・白色粘土小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・白色粘土小ブロック・白色粘土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 8 にぶい黄褐色 白色粘土小ブロック・白色粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 にぶい黄褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
- 10 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物** P1から土師器甕片6点・須恵器甕片2点，P2から須恵器甕片1点，P3から土師器甕片9点・須恵器甕片5点・須恵器坏片1点，P4から土師器甕片7点・須恵器坏片1点，P5から土師器坏片2点・土師器甕片2点・須恵器坏片2点・須恵器甕片1点，P6から土師器甕片・須恵器甕片各2点，P7から土師器甕片2点・須恵器甕片1点，P8から土師器甕片1点，P9から土師器甕片2点・須恵器甕片1点，P10から土師器甕片2点・須恵器坏片1点・須恵器甕片4点が出土している。第671図2275の土師器坏はP5から出土している。口縁部には油煙が付着している。

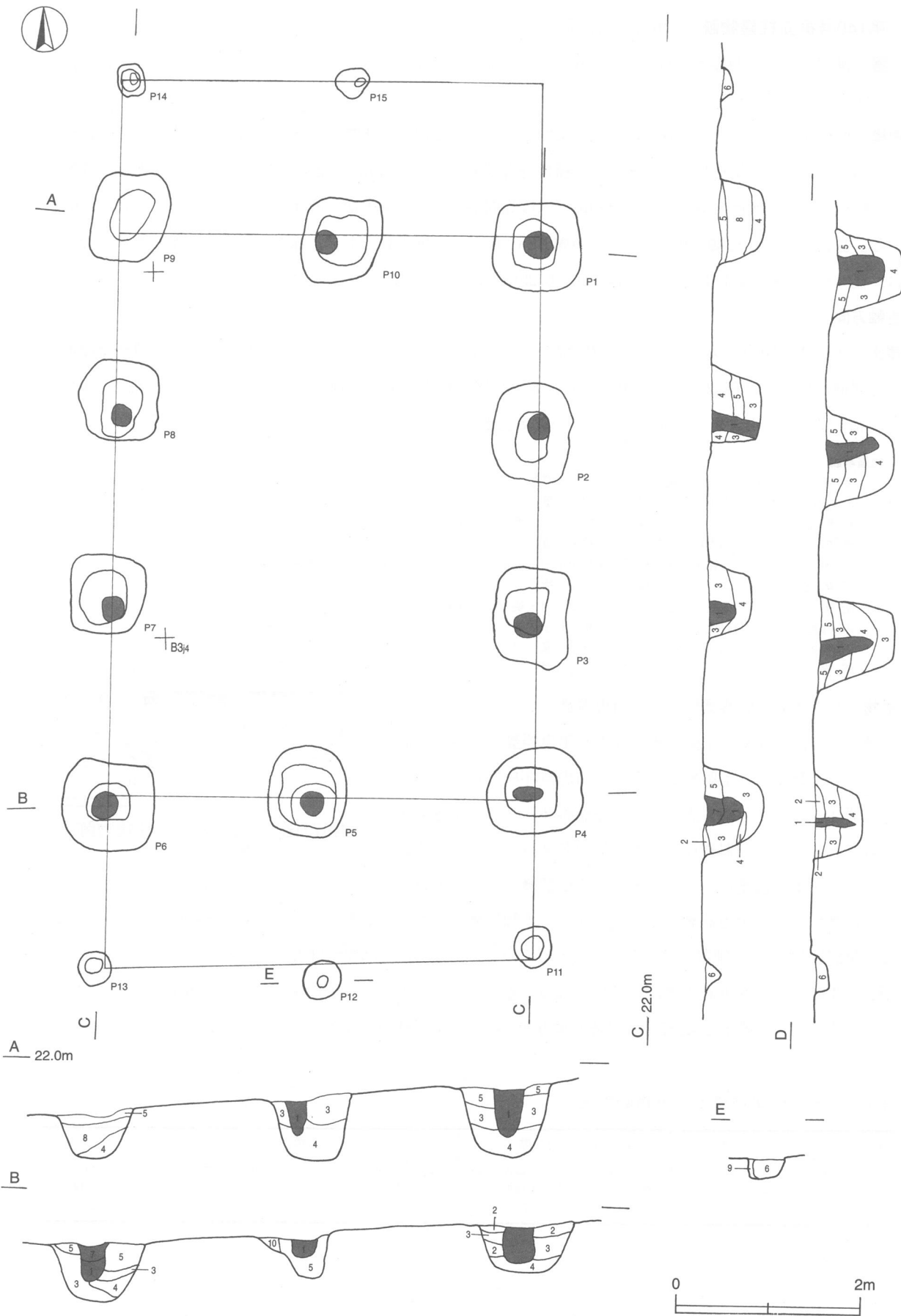


第671図 第140号掘立柱建物跡出土遺物実測図

**所見** 本跡からは8世紀中葉段階と思われる土器が出土しており，その時期には本跡は機能していたものと考えられる。東に位置する第485号住居跡と軸方向が一致し，同時期に存在していたと思われる。

第140号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第671図 2275	坏 土師器	A [13.2] B (4.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，半球形状を呈する。口縁端部は細くすぼむ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面磨滅のため調整不明。	砂粒・赤色粒子 橙色 普通	20% 口縁部油煙付着

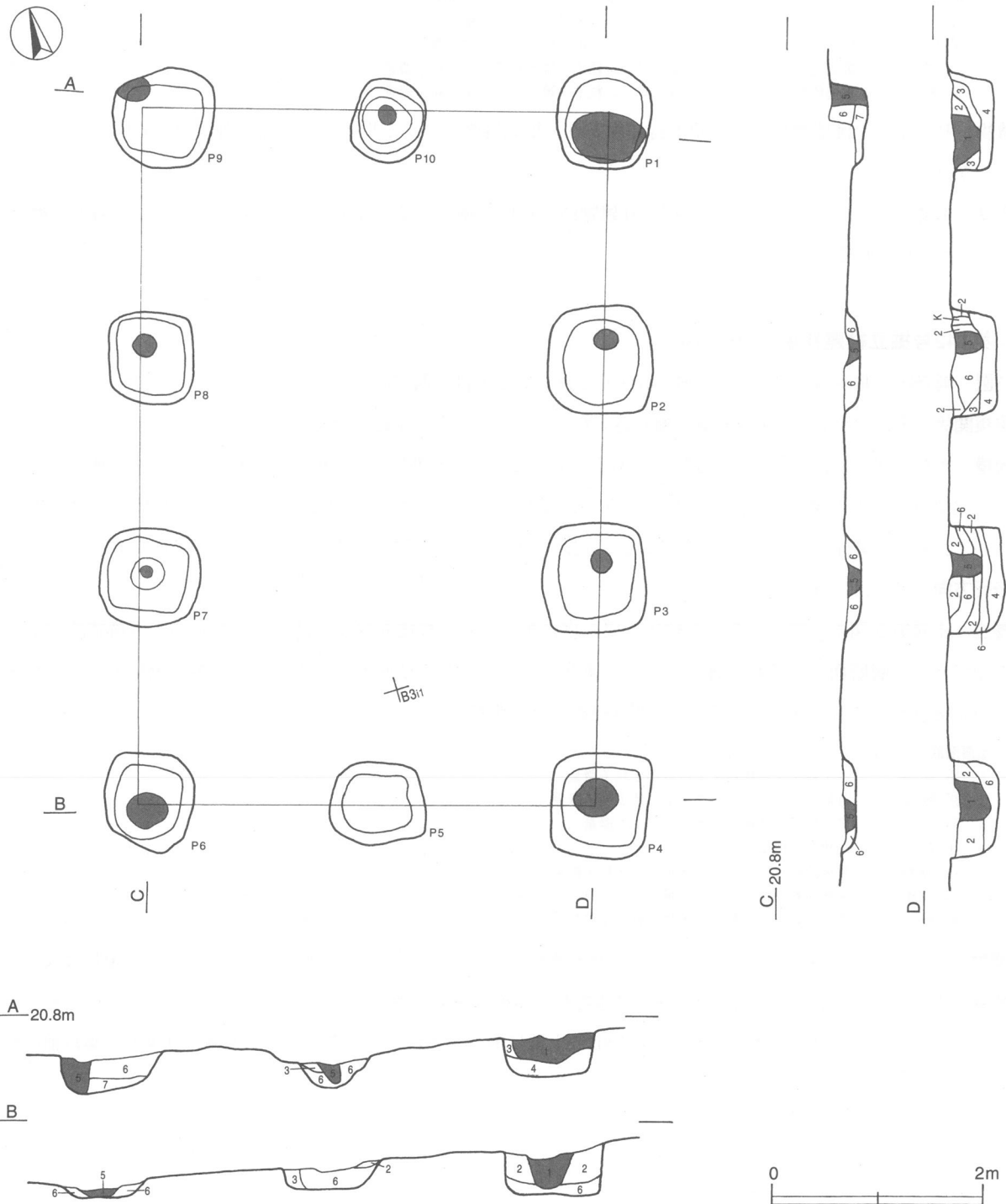


第672图 第140号掘立柱建物迹实测图

第141号掘立柱建物跡 (第673図)

位置 調査区の北西部, B 2 g0・B 2 h0・B 2 i0・B 3 g1・B 3 h1・B 3 i1区の西に傾斜する斜面部。

規模 桁行3間, 梁行2間の側柱建物跡である。桁行4.58m, 梁行4.45mで, 面積は20.38㎡である。柱間寸法は, 桁行2.10~2.20m, 梁行2.20mである。柱穴は, 一辺が0.85~1.05mの隅丸方形である。西に傾斜している台地の端部に立地しているため, 東桁行の掘り方の深さは0.45~0.55mであるのに対し, 西桁行では0.15~0.20mである。しかし, 柱の底面は標高約20.10~20.20mで, 一定の深さとなっている。



第673図 第141号掘立柱建物跡実測図

**主軸方向** N-17°-E

**覆土** 土層断面図中、第1・5層が柱抜き取り痕に相当する。柱抜き取り痕は、P5を除いて遺構確認面から確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。第2～4・6・7層は埋土である。埋土はロームブロック・黄褐色粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子を含んだ極暗褐色土と黄褐色土で、第6・7層は特に強く叩き締められて版築状を呈している。

**土層解説**

- |          |                                |
|----------|--------------------------------|
| 1 極暗褐色   | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量              |
| 2 極暗褐色   | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量             |
| 3 極暗褐色   | ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量    |
| 4 暗褐色    | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量      |
| 5 黒褐色    | ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量   |
| 6 にぶい黄褐色 | 黄褐色粘土中ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 暗褐色    | 黄褐色粘土中ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |

**遺物** P1から土師器甕片1点・須恵器坏片1点・須恵器甕片2点が出土している。細片のため図示することはできなかった。

**所見** 本跡の南側に位置する第142号掘立柱建物跡と規模も軸もほぼ一致することから、これらは同時期に機能していたと思われる。

**第142号掘立柱建物跡（第674図）**

**位置** 調査区の北西端部、B2j9・B2j0・C2a9・C2a0区の西に傾斜する斜面部。

**重複関係** 第1202号土坑、第43号溝に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

**規模** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。第1202号土坑と第43号溝に掘り込まれているため、西桁行の一部と北梁行の一部が壊されている。桁行5.76m、梁行3.85mで、面積は約22.18㎡である。柱間寸法は、桁行1.90～2.00m、梁行1.90mである。柱穴は、一辺が0.80～0.90mの隅丸方形、深さ0.60～0.65mである。

**桁行方向** N-14°-E

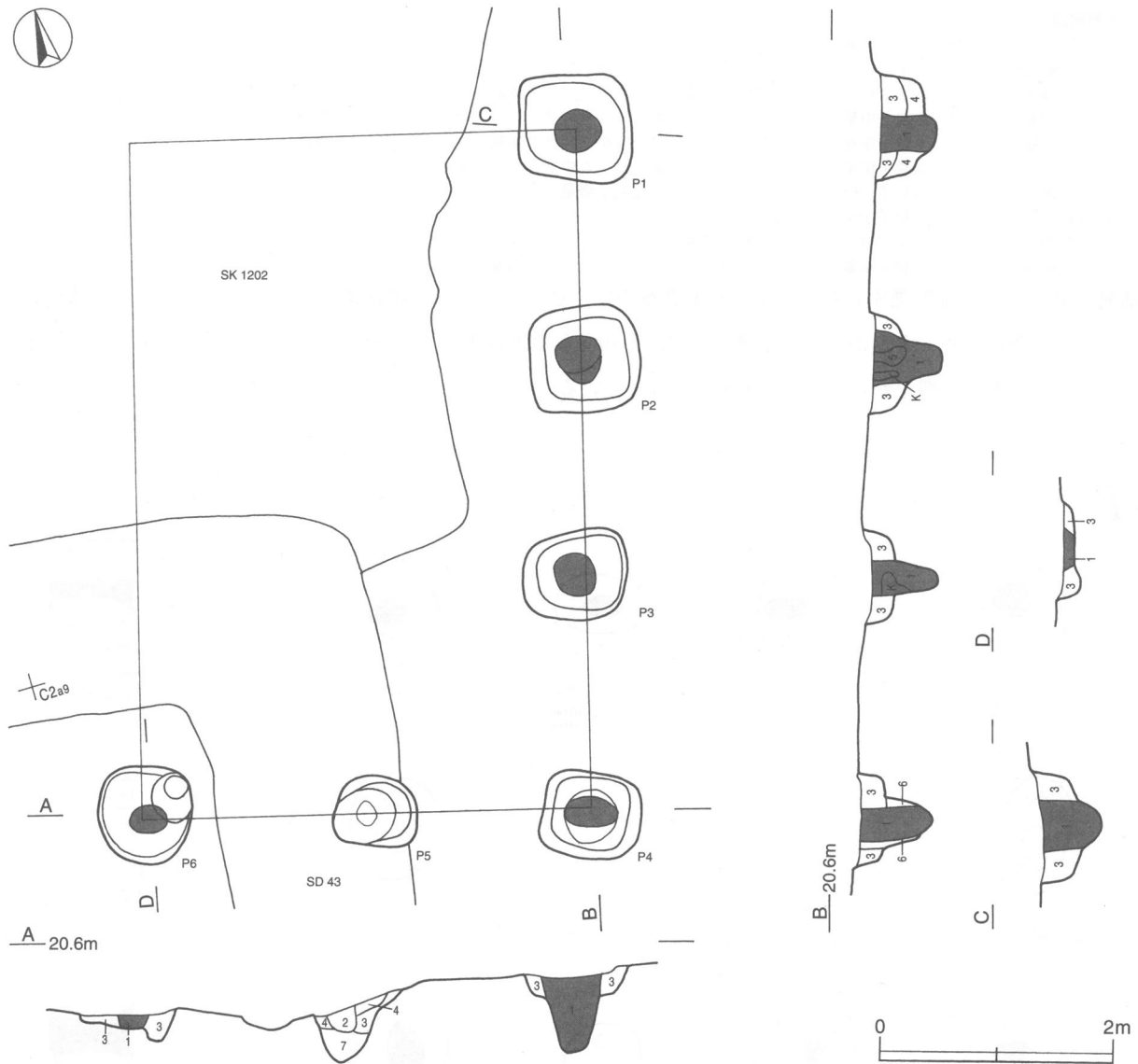
**覆土** 土層断面図中、第1・5層が柱抜き取り痕に相当する。柱抜き取り痕は、P5を除いて遺構確認面から確認でき、土層断面でも明瞭に確認できた。第2～4・6・7層は埋土である。埋土は黄褐色粘土ブロックを含む暗褐色土・にぶい黄褐色土で、強く叩き締められて版築状を呈している。

**土層解説**

- |          |                        |
|----------|------------------------|
| 1 暗褐色    | 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量     |
| 2 黒褐色    | 黄褐色粘土中ブロック少量、焼土粒子微量    |
| 3 暗褐色    | 炭化粒子・黄褐色粘土中ブロック微量      |
| 4 黒褐色    | 炭化粒子微量                 |
| 5 にぶい黄褐色 | 黄褐色粘土中ブロック多量、炭化粒子微量    |
| 6 にぶい黄褐色 | 黄褐色粘土中ブロック中量           |
| 7 暗褐色    | 焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粘土中ブロック微量 |

**遺物** P4から土師器甕片1点、P5から土師器甕片1点が出土している。細片のため図示できる遺物はない。

**所見** 本跡の北側に位置する第141号掘立柱建物跡と規模も軸も一致することから同時期に機能していたものと思われる。また、9世紀中葉と思われる第1202号土坑に掘り込まれていることから、本跡は9世紀中葉以前の建物跡と思われる。



第674図 第142号掘立柱建物跡実測図

#### 第143号掘立柱建物跡 (第675・676図)

**位置** 調査区の北西部，B 4 i3・B4i4・B 4 j3・B 4 j4区。東2.6mには第144号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** 第146号掘立柱建物跡と重複しているが，柱穴同士の切り合いがないため，新旧関係は不明である。

**規模** 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.34m，梁行3.84mで，面積は約20.51 $\text{m}^2$ である。柱間寸法は，桁行1.70~1.90m，梁行1.90mである。柱穴は，長軸0.90~1.00m，短軸0.70~0.90mの隅丸長方形，深さ0.60~0.75mの大形のもの，長径0.65~0.80m，短径0.50~0.60mの楕円形，深さ0.40~0.45mのやや小形のものがある。四隅の柱穴は深くて大形である。

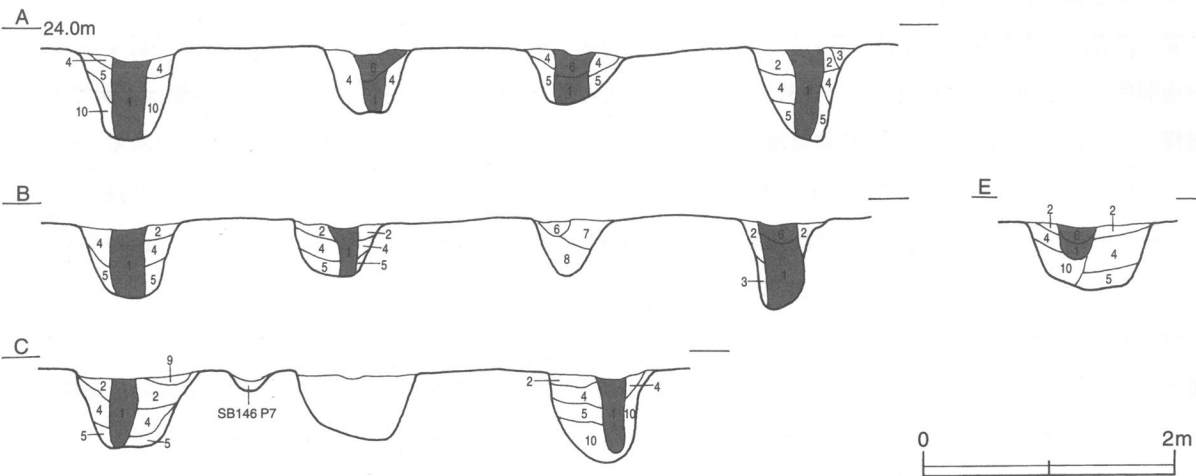
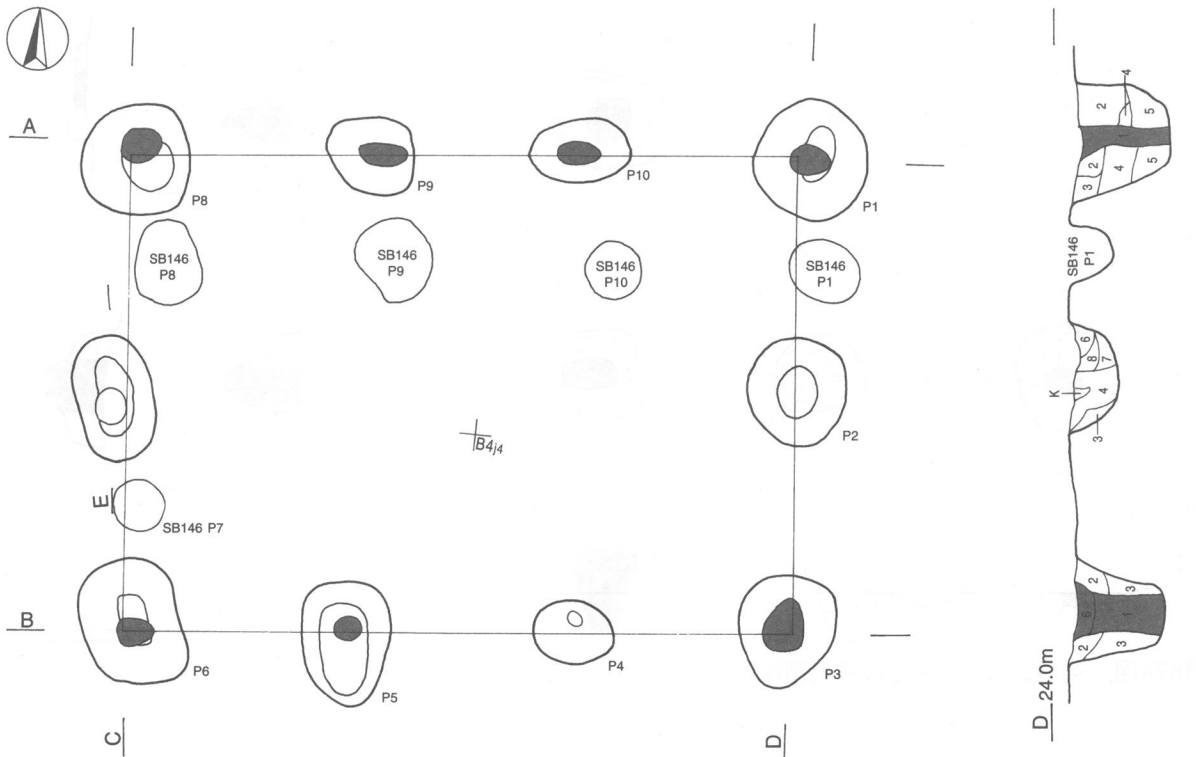
**桁行方向** N-85°-E

**覆土** 土層断面図中，第1・6層が柱抜き取り痕に相当する。柱抜き取り痕は，P 2・P 4を除いて遺構確認面から確認でき，土層断面でも明瞭に確認できた。第2~5・7~10層は埋土である。埋土はロームブロックを含む暗褐色土・にぶい黄褐色土・黒褐色土が互層になっており，強く叩き締められている。

**土層解説**

- 1 暗褐色      ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色      ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 3 にぶい黄褐色      ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
- 4 にぶい黄褐色      ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
- 5 にぶい黄褐色      ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量
- 6 にぶい黄褐色      ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
- 7 暗褐色      ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 8 暗褐色      ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 9 暗褐色      ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 10 黒褐色      ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量

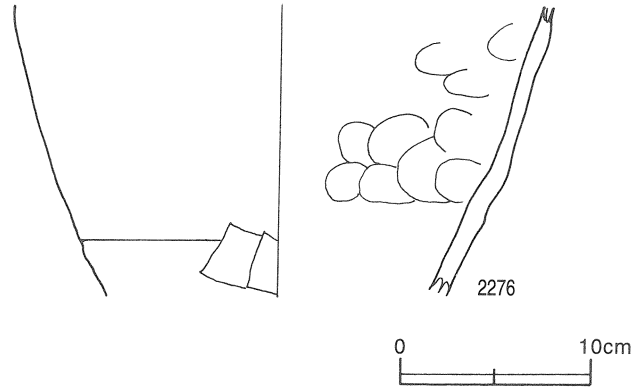
**遺物** P 2 から土師器甕片 2 点，P 4 から須恵器坏片 1 点，P 5 から土師器甕片 2 点，P 8 から土師器甕片 2 点・須恵器蓋片 1 点，P 9 から須恵器甕片 14 点，P 10 から須恵器甕片 1 点が出土している。第 676 図 2276 の須恵器甕は P 4 ・ P 5 の埋土から出土した破片が接合している。



第675図 第143号掘立柱建物跡実測図



所見 本跡の東側に位置する第144号掘立柱建物跡の北梁行の柱筋と、本跡の北桁行の柱筋が一直線に揃うことから同時期に機能していた可能性がある。また、本跡と重複している第146号掘立柱建物跡は規模も軸も一致するので、建て替えが行われたものと思われる。柱穴同士の切り合いがないため、新旧は捉えられない。



第676図 第143号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第143号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第676図 2276	甕 須恵器	B (15.4)	体部の破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面斜位の平行叩き。体部内面指頭押圧後、ナデ。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・白色粒子 青灰色 普通	30% P L242

第144号掘立柱建物跡 (第677図)

位置 調査区の北西部, B 4 i5・B 4 i6・B 4 j5・B 4 j6・C 4 a5・C 4 a6区。西2.6mには第143・146号掘立柱建物跡が位置する。

規模 桁行3間, 梁行2間の側柱建物跡である。桁行6.40m, 梁行4.40mで, 面積は28.16㎡である。柱間寸法は, 桁行2.00~2.30m, 梁行2.10~2.30mである。柱穴の平面形は, P 1~P 9は大形で, 長軸1.20~1.30m, 短軸0.70~0.80mの隅丸長方形である。P 10だけが小形で, 長径0.60m, 短軸0.50mの楕円形である。深さは, 四隅の柱が0.70~0.80mと深く, その他は0.50~0.60mである。

桁行方向 N-5°-W

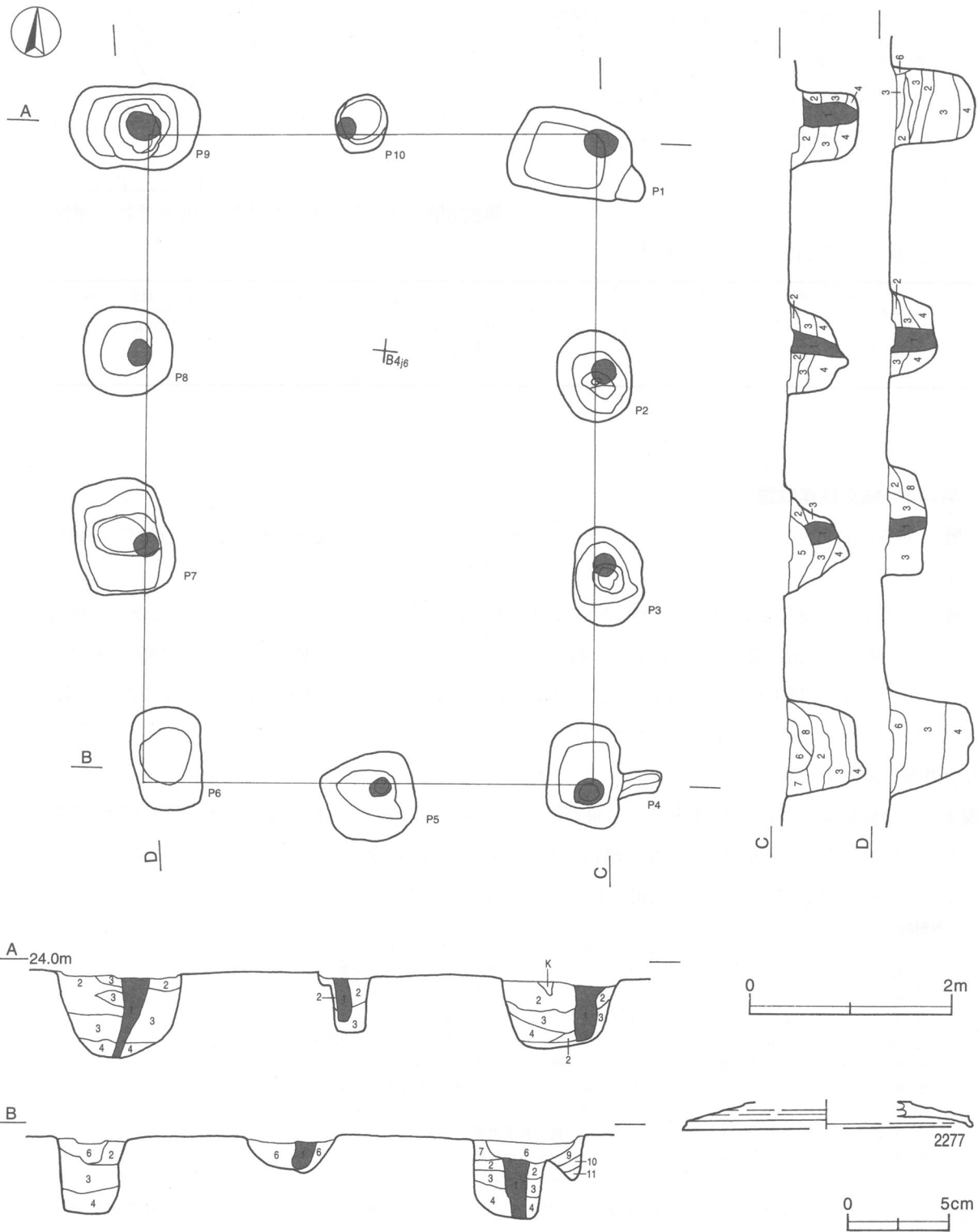
覆土 土層断面図中, 第1層が柱抜き取り痕に相当し, 締まりが弱い。柱抜き取り痕は, P 6を除いて遺構確認面から確認でき, 土層断面でも明瞭に確認できた。第2~11層は埋土である。埋土はロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含んだ暗褐色土・黒褐色土・にぶい黄褐色土が互層になっている。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, ローム大ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 5 にぶい黄褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・焼土粒子微量
- 8 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 10 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 11 にぶい黄褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量

遺物 P 2から土師器甕片2点・須恵器蓋片1点, P 3から土師器甕片9点, P 4から土師器甕片11点・須恵器坏片2点・須恵器甕片1点, P 6から土師器甕片7点・須恵器坏片8点・須恵器甕片1点・須恵器蓋片1点・土玉1点, P 7から土師器甕片4点・須恵器坏片2点・須恵器甕片1点・須恵器蓋片1点, P 8から土師器甕片1点, P 9から土師器坏片1点・土師器甕片12点・須恵器坏片1点, P 10から土師器甕片2点が出土している。第677図2277の須恵器蓋は, P 6の埋土から出土している。

所見 本跡の北梁行の柱筋と第143号掘立柱建物跡の北桁行が一直線に揃い、同時期に機能していた可能性がある。出土土器から、本跡は9世紀代に構築されたものと思われる。



第677図 第144号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第144号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第677図 2277	蓋 須恵器	A [14.4] B (1.3)	口縁部の破片。天井部は低く扁平である。口縁部は短く、外側につまみ出されている。	口縁部内・外面クロナテ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	10%

第145号掘立柱建物跡（第678図）

**位置** 調査区域の北東部，D 8 a7・D 8 b5・D 8 b6・D 8 b7・D 8 b8・D 8 c5・D 8 c6・D 8 c7区。

**重複関係** 第328・411号住居跡に掘り込まれており，いずれよりも本跡が古い。

**規模** 桁行4間，梁行2間の側柱建物跡である。桁行8.20m，梁行4.50mで，面積は36.90㎡である。柱間寸法は，桁行1.90～2.20m，梁行2.25mである。柱穴は径0.62～0.92mの円形，深さ0.36～0.57mである。P 3・P 7・P 9の隅の柱穴は，掘り方の中央に柱を据えるのではなく，掘り方の隅に柱を据えるという方法を採用している。

**桁行方向** N-77°-E

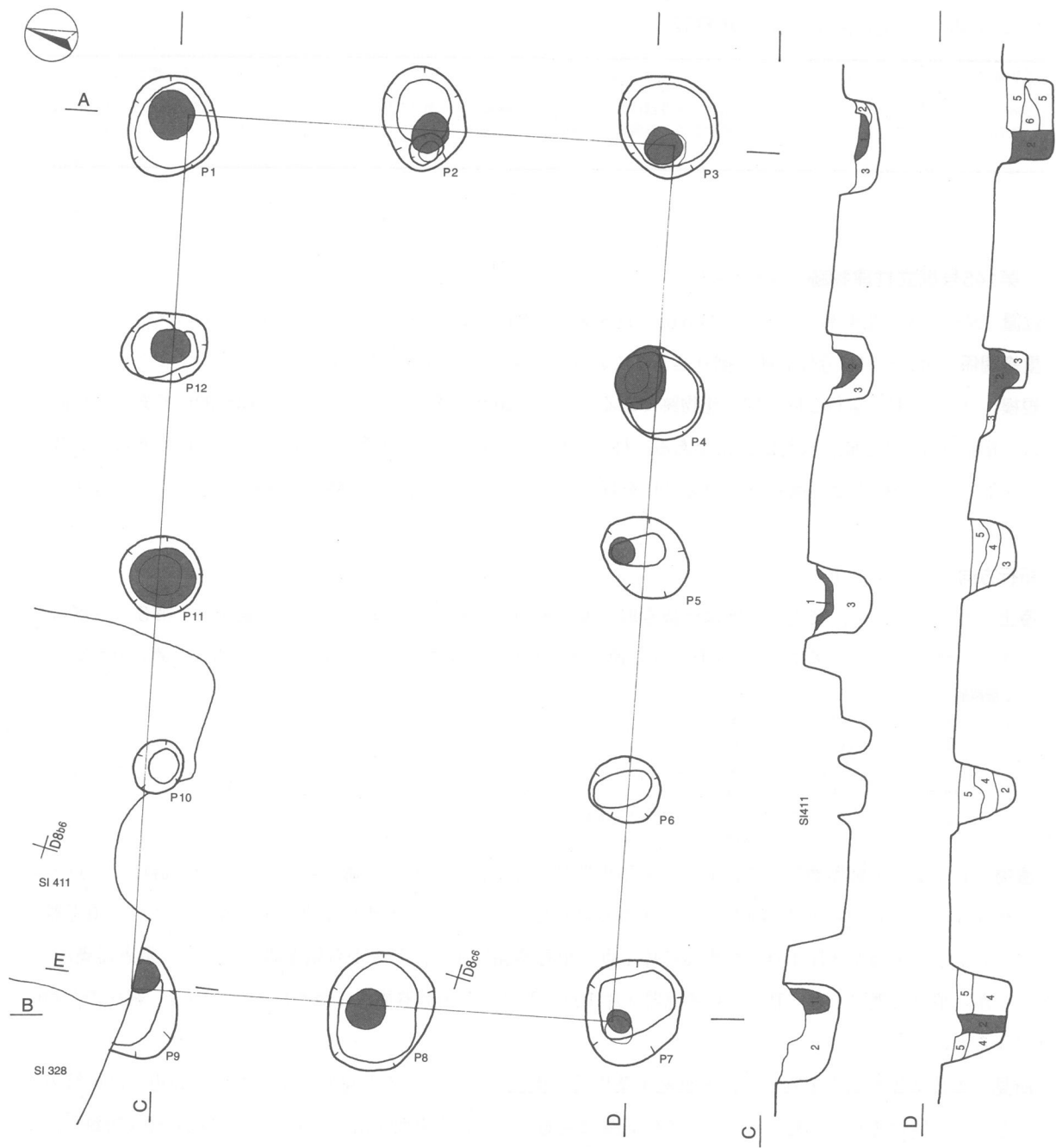
**覆土** 土層断面図中，第1・2層は柱抜き取り痕に相当し，粘性・しまりともに大変弱い。第3～6層は埋土である。埋土はロームブロックを主体とする暗褐色・褐色土が互層になっており，強く叩き締められている。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック微量
- 3 褐色 ローム大ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
- 6 褐色 ローム大ブロック多量

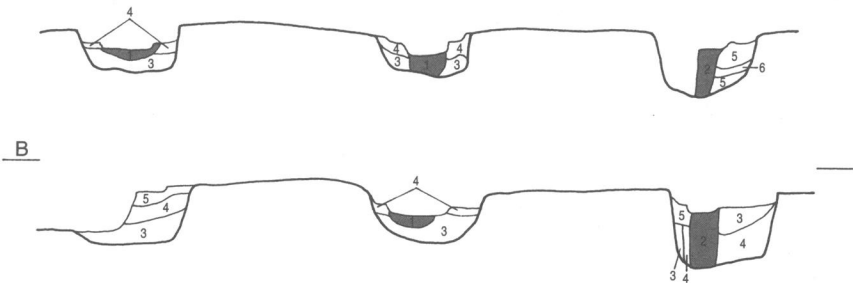
**遺物** P 1から土師器甕片1点，P 3から須恵器甕片2点，P 4から土師器坏片1点・須恵器坏片2点・須恵器甕片3点，P 6から土師器坏片1点・土師器高台付坏1点・土師器甕片1点・須恵器坏片2点・須恵器甕片1点，P 7から土師器坏片1点・須恵器坏片1点・須恵器甕片4点，P 8から須恵器坏片1点・須恵器甕片3点，P 9から須恵器甕片1点，P 11から須恵器坏片1点，P 12から土師器甕片1点が出土している。細片のため図示できるものはない。

**所見** 重複関係や出土遺物から，8世紀中葉以前に機能していたものと思われる。本跡の周辺では桁行方向を同じくする建物跡や，主軸を同じにする住居跡は見あたらない。南西20mには第71・65号掘立柱建物跡が，本跡と軸方向をほぼ同じくしており，これらと同時期に機能していたと思われる。



A 24.8m

E



第678图 第145号掘立柱建物跡実測图

第146号掘立柱建物跡 (第679図)

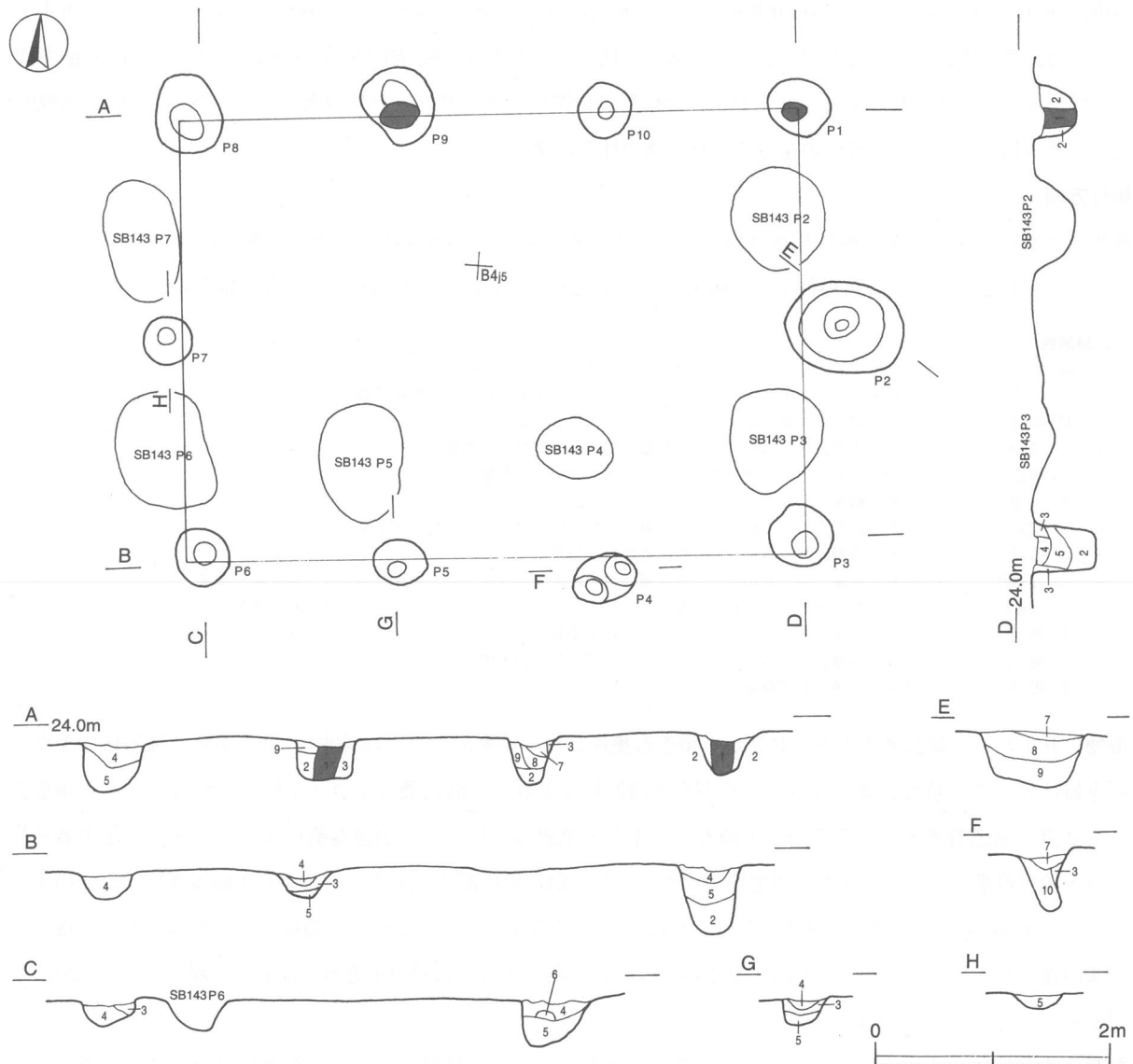
**位置** 調査区の北西部, B 4 i4・B 4 i5・B 4 j4・B 4 j5区。東2.6mには第144号掘立柱建物跡が位置する。

**重複関係** 第143号掘立柱建物跡と重複しているが, 柱穴同士の切り合いがないため, 新旧関係は不明である。

**規模** 桁行3間, 梁行2間の側柱建物跡である。桁行5.36m, 梁行3.80mで面積約20.37<sup>2</sup>mである。柱間寸法は, 桁行1.70~1.80m, 梁行1.60~1.90mである。柱穴の平面形は, 長径0.70~1.00m, 短径0.55~0.70mの楕円形のもの, 径0.40~0.55mの円形のものがある。深さはP 2~P 4は0.45~0.55mと深く, その他は0.35~0.40mである。

**桁行方向** N-85°-E

**覆土** 土層断面図中, 第1層が柱抜き取り痕に相当し, 締まりが弱い。柱抜き取り痕は, P 1・P 9については遺構確認面から確認でき, 土層断面でも明瞭に確認できた。第2~10層は埋土である。埋土はロームブロックを含む暗褐色土・にぶい黄褐色土・黒褐色土が互層になっており, 特に第2・4・5・10層は叩き締められ硬く締まっている。



第679図 第146号掘立柱建物跡実測図

#### 土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・炭化粒子微量
3 におい黄褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック微量
4 におい黄褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
5 におい黄褐色	ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量, ローム大ブロック微量
6 におい黄褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量
7 暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量
8 暗褐色	ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
9 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量
10 黒褐色	ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量

**遺物** P 8 から土師器甕片 1 点が出土している。細片のため図示することはできなかった。

**所見** 本跡と第143号掘立柱建物跡は、柱穴同士の重複がないため新旧関係は捉えられないが、規模も軸も一致することから建て替えが行われ、第144号掘立柱建物跡と並存していたものと思われる。

#### 第147号掘立柱建物跡 (第680・681図)

**位置** 調査区域の北西部, B 5 h8・B 5 h9・B 5 h0・B 5 i8・B 5 i9・B 5 i0区。

**重複関係** 第481・482号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

**規模** 桁行 3 間, 梁行 2 間の側柱建物跡である。桁行 8.36m, 梁行 4.50m で, 面積は 37.60m<sup>2</sup> である。柱間寸法は, 桁行 2.60~3.20m, 梁行 2.05~2.45m である。柱穴の平面形は, 長径 0.88~0.98m, 短径 0.75~0.82m の楕円形である。梁の中間柱である P 2・P 7, 北桁行の中間柱である P 9・P 10 の深さは, 0.38~0.52m と比較的浅い。その他は, 0.65~0.87m の深さで, 特に隅の柱穴は深い。

**桁行方向** N-82°-W

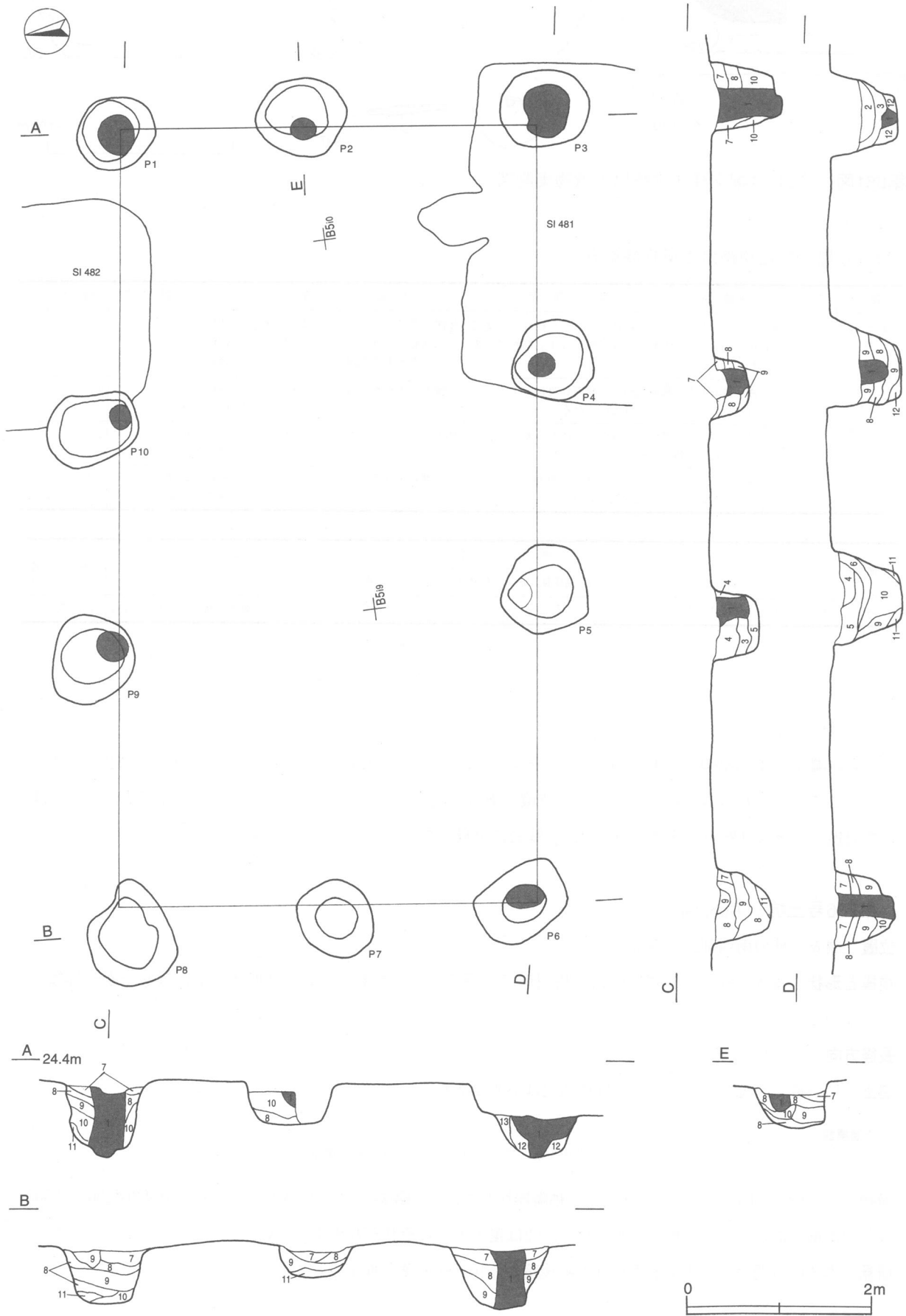
**覆土** 土層断面図中, 第 1 層は柱抜き取り痕に相当する。第 2~13 層は埋土である。埋土はロームブロック・焼土・炭化物を含むにおい黄褐色土・暗褐色土・黒褐色土が互層になっており, 強く叩き締められている。

#### 土層解説

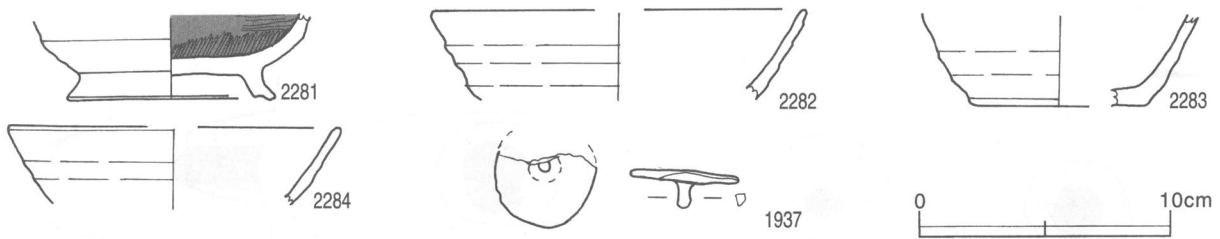
1 暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
4 におい黄褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量
5 におい黄褐色	ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
6 黒褐色	ローム粒子微量
7 におい黄褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・炭化粒子微量
8 暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量
9 におい黄褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子微量
10 におい黄褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化粒子微量
11 黒褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子微量
12 暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
13 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量

**遺物** P 1 から土師器甕片 1 点, P 3 から須恵器甕片 2 点・鉄製品 1 点 (紡錘車), P 4 から土師器坏片 1 点・須恵器坏片 2 点・須恵器甕片 3 点, P 6 から土師器坏片 1 点・土師器甕片 1 点・土師器高台付坏 1 点・須恵器坏片 2 点・須恵器甕片 1 点, P 7 から土師器坏片 1 点・須恵器坏片 1 点・須恵器甕片 4 点, P 8 から須恵器坏片 1 点・須恵器甕片 3 点, P 9 から須恵器甕片 1 点, P 11 から須恵器坏片 1 点, P 12 から土師器甕片 1 点が出土している。第 681 図 1937 の鉄製紡錘車は P 3 の柱抜き取り後の覆土から, 2281 の土師器高台付椀は P 6 の柱抜き取り後の覆土から出土している。2282 の須恵器坏は P 3 の埋土から, 2283 の須恵器坏は P 4 の埋土から, 2284 の須恵器坏は P 5 の埋土から出土している。

**所見** 重複関係と出土土器から, 8 世紀後葉から 9 世紀前葉には構築され 9 世紀後葉には廃絶されたものと思われる。



第680图 第147号掘立柱建物迹实测图



第681図 第147号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第147号掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第681図 2281	高台付碗 土師器	B (3.2) D 8.4 E 1.1	高台部から体部にかけての破片。底部と体部との境に稜をなす。高台は外方に大きくふんばる。	体部下端回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け、ナデ。内面黒色処理。	砂粒 褐色 普通	10%
2282	坏 須恵器	A [15.0] B (3.6)	口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石 灰色、普通	10%
2283	坏 須恵器	B (3.5) C [7.0]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部雑なヘラナデ。	砂粒・長石 緑灰色、普通	20%
2284	坏 須恵器	A [13.4] B (3.0)	口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色、普通	10%

遺物番号	器種	計測値					材質	特徴	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	軸棒長(cm)	軸棒太(cm)	重量(g)			
1937	紡錘車	4.1	0.3	(1.0)	0.4	6.65	鉄	軸棒の断面は方形に近い。	P L 257

#### (4) 土坑

今回の調査では、819基の土坑を確認した。そのうち、奈良・平安時代に属すると考えられる土坑は751基である。ここでは、これらの土坑の中で、特に特徴のある土坑や注目される遺物が出土した土坑17基については文章で記述し、それ以外の土坑については、一覧表に記載した。

#### 第736号土坑 (第682図)

**位置** 調査区域の南西部，F 5 d0区。

**規模と形状** 長径0.86m，短径0.68mの楕円形で，深さ0.10mである。底面は皿状，壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。

**長径方向** N-6°-E

**覆土** 単一層で，覆土が薄いため，堆積状況は不明である。

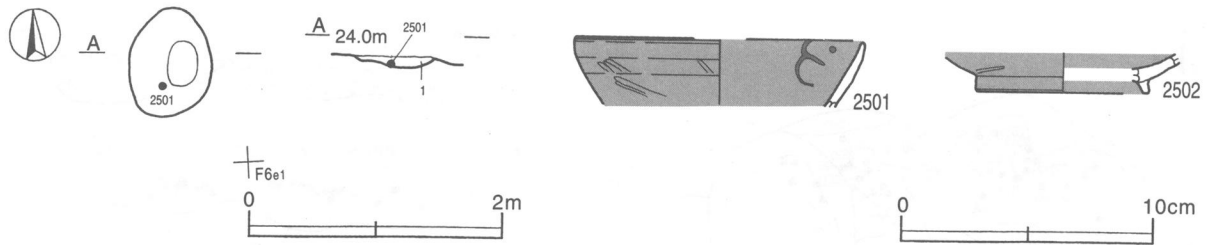
##### 土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック・炭化粒子微量

**遺物** 土師器片4点，須恵器片9点，灰釉陶器片6点，緑釉陶器片2点が出土している。第682図2501・2502は緑釉陶器碗である。2501は覆土下層から，2502は覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 本跡の時期は，出土土器から9世紀後葉から10世紀前葉と推定される。





第682図 第736号土坑・出土遺物実測図

第736号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第682図 2501	緑彩文碗 緑釉陶器	A [11.5] B (2.2)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。内・外面施釉。内面花文の緑彩文。	軟質、胎土 灰黄色 オリーブ灰色、緑彩文は暗オリーブ色 普通	5%
2502	碗 緑釉陶器	B (1.6) D [7.0] E 0.7	底部の破片。	内・外面、高台部施釉。高台貼り付け後、ナデ。	緻密、胎土 灰色 オリーブ黄色 普通	5%

第740A・B号土坑（第683・684図）

**位置** 調査区域の中央部F 5 d0区。第85号掘立柱建物跡の身舎と北庇の間に位置する。

**重複関係** 第85号掘立柱建物のP 9と第908号土坑を掘り込んでおり、本跡が新しい。なお、後で述べるように、第740A・B号土坑は同時期に機能し、同時期に埋没したものと判断したので、1基と捉える。

**規模と形状** 第740A・B号土坑はA・Bが連なって、めがね形を呈している。第740A号土坑は、長径2.00m、短径1.50mの不整楕円形で、深さ0.35mである。底面はわずかに凹凸がみられ、壁面は外傾して立ち上がる。第740B号土坑は長径1.62m、短径1.39mの不整楕円形で、深さ0.40mである。底面は皿状で、壁面は外傾して立ち上がる。

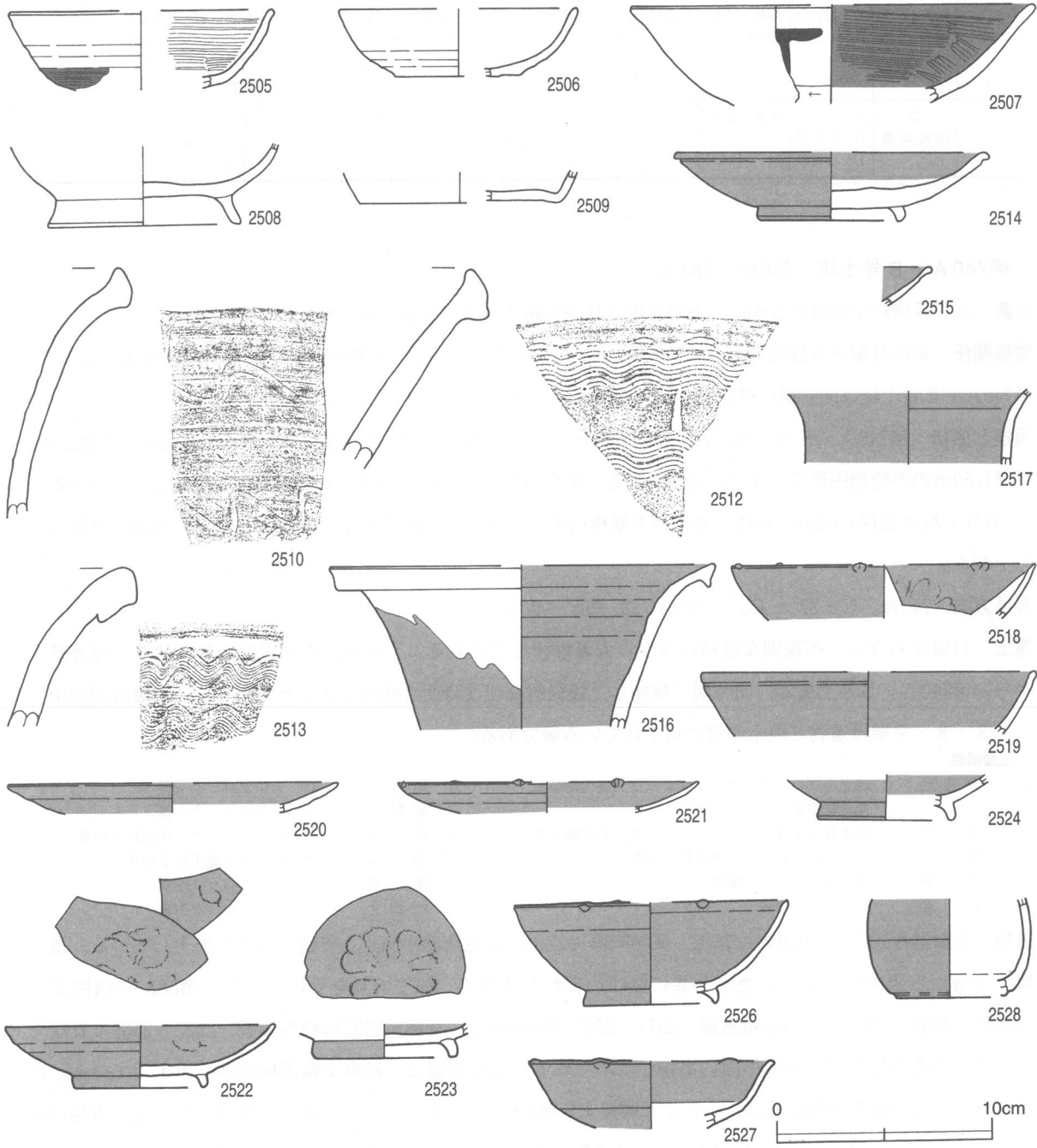
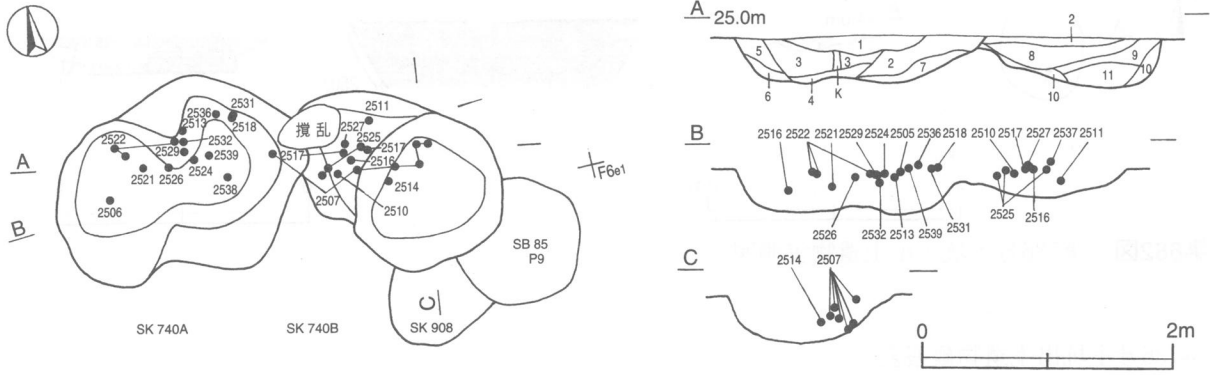
**長径方向** 740A N-87°-E, 740B N-50°-W

**覆土** 11層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。土層断面の重複部分の形状、土層堆積状況から、第740A・B号土坑は、同時期に機能し、最終的な埋没時期も同時であると判断した。土層断面図中、第1～3・8・9層は遺物と焼土が投げ込まれている層である。

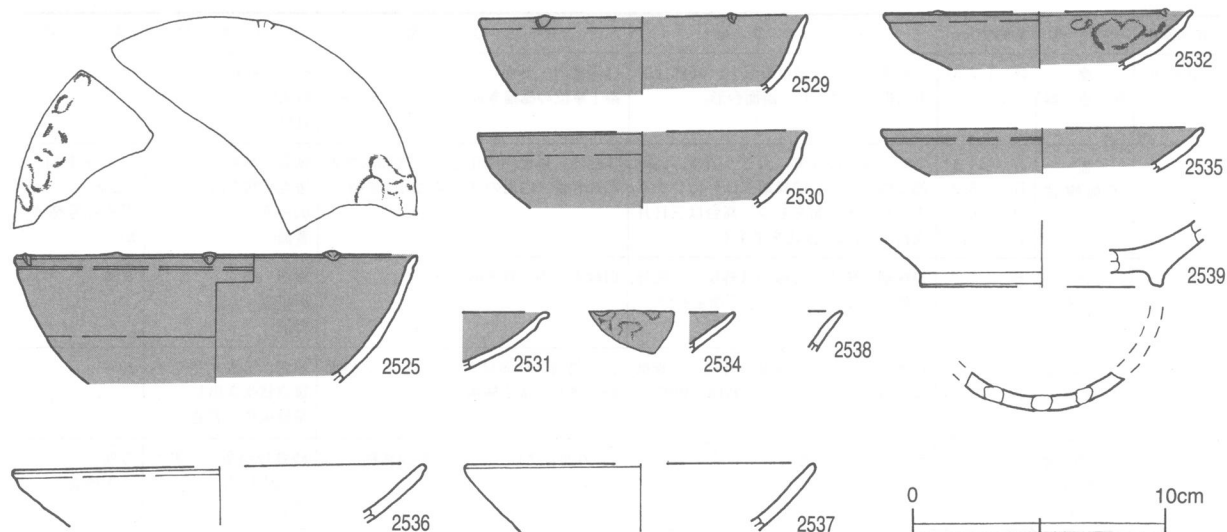
**土層解説**

1 赤褐色	焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物多量、炭化材少量	6 褐色	ローム中ブロック少量
2 褐色	焼土粒子中量、ローム小ブロック・炭化物少量	7 暗褐色	ローム中ブロック少量
3 褐色	ローム小ブロック・焼土粒子少量	8 褐色	ローム小ブロック・炭化粒子中量
4 褐色	ローム中ブロック少量	9 褐色	ローム粒子・焼土粒子中量
5 褐色	ローム粒子中量	10 褐色	ローム中ブロック中量
		11 暗褐色	ローム小ブロック少量

**遺物** 土師器片107点、須恵器片78点、灰釉陶器片22点、緑釉陶器片34点、青磁片15点が出土している。遺物は覆土上層から出土しており、焼土と共に投げ込まれた状況で、強く火熱を受けている。第683・684図2505～2508は土師器、2509～2513は須恵器、2514～2517は灰釉陶器、2518～2535は緑釉陶器、2536～2539は青磁である。2507の高台付坏は、体部外面に墨書が認められる。緑釉陶器は、緑彩文輪花碗が多く出土している。2527の稜碗、2532の緑彩文輪花碗は、それぞれ隣接する第898号土坑から出土した破片と接合している。青磁は越州窯系産で、すべて精製で、生産時期は9世紀前葉～中葉といわれているものである。細片ではあるが、少なくとも4個体はあると思われる。



第683图 第740A·B号土坑·出土遺物実測図



第684図 第740A・B号土坑・出土遺物実測図

**所見** 本跡は、第85号掘立柱建物跡の身舎と北庇の間に位置すること、本跡から出土している緑釉陶器や青磁の破片と同類と思われるものが、第85号掘立柱建物跡のP 8・10・15・23・24の柱抜き取り後の覆土からも出土していることなどから、本跡から出土した遺物は第85号掘立柱建物に保管されていたものと推測される。また、第85号掘立柱建物跡の中央部に位置する第898号土坑から出土した緑釉陶器は、本跡の2527や2532と接合しており、本跡と第898号土坑は同時期に同じ目的で使用されたと思われる。出土陶器類は強く火熱を受け変色している。これらのことから、本跡は、第85号掘立柱建物跡が焼失後、第85号掘立柱建物で保管されていた青磁・緑釉陶器をはじめとする土器類を投棄した土坑と推測される。本跡が機能していた時期は出土遺物から、9世紀後葉と思われる。

第740A・B号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第683図 2505	坏 土師器	A [12.2] B (3.5) C [8.5]	丸底気味の平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部下 端・底部・内面ヘラ磨き。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	20%
2506	小皿 土師器	A [11.0] B 3.1 C [5.8]	平底。底部は突出気味。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。 底部回転ヘラ切り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	20%
2507	高台付坏 土師器	A [18.8] B (4.6)	高台部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で外反する。	口縁部・体部外面ロクロナデ。内面ヘ ラ磨き。体部下端回転ヘラ削り。 内面黒色処理。	砂粒・赤色粒子 橙色 普通	40% 体部外面墨書 「□」
2508	高台付坏 土師器	B (4.7) D 9.0 E 1.4	底部から高台部にかけての破片。底部と体部の境に稜をもつ。高台はハの字状に開く。	体部下端・底部回転ヘラ削り。高台貼 り付け後、ロクロナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色	20% 二次焼成
2509	コップ形 土器 須恵器	B (1.4) C [9.2]	底部は上げ底気味。体部はほぼ直立する。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘ ラ切り後、雑なヘラナデ。	精良、砂粒・黒色斑点 灰色 良好	100%
2510	甕 須恵器	B (11.8)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は外反する。口縁端部は上下につみ出され、断面三角形。	口縁部内・外面ロクロナデ。頸部ヘラ 状工具による波状文。頸部内面自然釉。	砂粒・長石 暗灰色 普通	10%
2512	甕 須恵器	B (7.3)	口縁部の破片。口縁部は外反し、端部は、断面三角形に上下につまみ出されている。	口縁部内・外面ロクロナデ。口縁部8 条1単位の飾描き波状文。内面自然釉。	砂粒・長石 暗灰色 良好	10%

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第683図 2513	甕 須恵器	B (7.3)	口縁部片。口縁部は外反し、端部は下方に折り曲げられ、断面台形。	口縁部内・外面ロクロナデ。口縁部9条1単位の櫛描き波状文。内面自然釉。	砂粒・長石 暗灰色 良好	10%
2514	皿 灰釉陶器	A [14.4] B 3.2 D 6.4 E 0.7	平底。体部は外方に大きく開き、口縁部で外反する。口縁端部は外につまみ出され、水平面をもつ。高台は三日月高台で、外面が弧状を呈する。	体部内・外面釉刷毛塗り。底部内面重ね焼き痕、内面の高台接地面は無釉。	軟質、砂粒・黒色小斑点状吹き出し 灰白色 普通	45% P L242・268 黒笹90号窯式か
2515	皿 灰釉陶器	B (1.7)	口縁部の破片。口縁部は外反し、端部は外につまみ出され、水平面をもつ。	口縁部、内・外面刷毛塗り。	緻密 灰白色 普通	5%
2516	長頸壺 灰釉陶器	A [17.9] B (7.6)	口縁部の破片。口縁部は外反し、端部は下方につまみ出され、断面三角形。	口縁部内・外面ロクロナデ。内・外面刷毛塗りによる施釉。	緻密、砂粒・黒色小斑点状吹き出し 暗緑灰色、普通	20%
2517	長頸壺 灰釉陶器	B (3.5)	頸部の破片。頸部はほぼ直立する。	内・外面ロクロナデ。内・外面施釉。	砂質分が多い、黒色小斑点状吹き出し 灰色	5% 二次焼成
2518	緑彩文 輪花碗 緑釉陶器	A [14.1] B (2.5)	口縁部の破片。口縁部は内彎して立ち上がり、口縁端部は細くすぼむ。口縁端部に輪花。	口縁部内面に緑彩文を施す。	軟質、胎土 灰黄色 被熱のため釉はオリ ーブ黒色に変色	5% 二次焼成
2519	碗 緑釉陶器	A [15.5] B (2.9)	口縁部の破片。口縁部は内彎して立ち上がる。口縁部外面に1条の沈線。	内・外面施釉。	緻密、胎土 灰白色 被熱のため釉はオリ ーブ黒色に変色	5% 二次焼成
2520	皿 緑釉陶器	A [15.4] B (1.3)	口縁部の破片。口縁部は外方に大きく開く。口縁部に弱い稜をもつ。	内・外面施釉。	緻密、胎土 灰色 オリーブ灰色	5% 二次焼成
2521	緑彩文 輪花皿 緑釉陶器	A [13.9] B (1.5)	口縁部の破片。口縁部は内彎しながら外方に大きく開く。口縁部に輪花。	口縁部内面に緑彩文を施す。	緻密、胎土 灰色 オリーブ灰色釉、緑 彩文は緑色釉	5% 二次焼成
2522	緑彩文皿 緑釉陶器	A [13.9] B 2.9 D [6.0] E 0.6	体部は内彎して立ち上がり、外方に大きく開く。口縁部外面に弱い沈線。	底部内・外面、高台部施釉。底部内面・口縁部内面に緑彩文。底部回転ヘラ削り、高台貼り付け後、ナデ。	緻密、胎土 灰白色 被熱のため釉はオリ ーブ黒色に、文様は 暗赤褐色に変色	20% 二次焼成
2523	緑彩文皿 緑釉陶器	B (1.6) D 6.6 E 0.8	底部の破片。高台は三日月高台。	底部内・外面、高台部施釉。底部内面に緑彩文。底部回転ヘラ削り、高台貼り付け後、ナデ。	軟質、胎土 灰黄色 被熱のため釉はオリ ーブ黒色に変色	5% 二次焼成
2524	碗 緑釉陶器	B (1.8) D [6.3] E 0.8	底部の破片。高台は三日月高台。	底部内・外面、高台部施釉。	軟質、胎土 灰黄色 被熱のため釉はオリ ーブ黒色に変色	5% 二次焼成
第684図 2525	緑彩文 輪花碗 緑釉陶器	A [16.0] B (5.0)	口縁部から体部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、半球形を呈する。口縁部外面に1条の沈線。口縁端部に輪花。	内・外面施釉。内面緑彩文。	軟質、胎土 灰黄色 被熱のため釉はオリ ーブ黄色に変色	5% P L268 二次焼成
第683図 2526	輪花碗 緑釉陶器	A [12.8] B 4.7 D [6.2] E 0.7	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。高台は三日月高台。口縁部に輪花。	高台貼り付け後、ナデ。内・外面、高台部施釉。	被熱のため釉はオリ ーブ黒色に変色	25% P L269 二次焼成
2527	輪花稜碗 緑釉陶器	A [11.4] B (3.2)	体部から口縁部にかけての破片。底部と体部との境に稜をもつ。口縁部は外傾し、端部は外反する。口縁端部に輪花。	内・外面施釉。	緻密、胎土 灰白色 被熱のため釉はオリ ーブ黒色に変色。	5% P L269 二次焼成 第898号土坑 の破片と接合
2528	小瓶 緑釉陶器	B (4.6) C [5.0]	体部の破片。体部下端に最大径をもち、下膨れ状を呈する。	体部下端回転ヘラ削り。外面施釉。	緻密、胎土 灰白色 淡黄色釉	5% 二次焼成
第684図 2529	輪花碗 緑釉陶器	A [13.0] B (3.0)	口縁部の破片。口縁部は内彎して立ち上がる。口縁部外面に弱い沈線あり。口縁端部に輪花。	内・外面施釉。	緻密、胎土 灰白色 被熱のため釉はオリ ーブ黒色に変色	5% 二次焼成
2530	碗 緑釉陶器	A [13.2] B (3.0)	口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。	内・外面施釉。	緻密、胎土 灰白色 被熱のため釉はオリ ーブ黒色に変色	5% 二次焼成
2531	皿 緑釉陶器	B (2.3)	口縁部の破片。体部は外方に大きく開き、口縁部は外反する。端部はわずかにつまみだされ、水平面をもつ。	内・外面施釉。	緻密、胎土 灰白色 オリーブ黄色釉	5% 二次焼成

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第684図 2532	緑彩文 輪花碗 緑釉陶器	A [12.4] B (2.2)	口縁部の破片。体部は外方に大きく開き、口縁部にいたる。口縁部外面に弱い沈線。口縁端部は細くすぼむ。口縁端部に輪花。	内・外面施釉。内面緑彩文。	緻密、胎土 灰白色 被熱のため釉はオリ ーブ黒色に、文様は 暗赤褐色に変色	5% 二次焼成 第898号土坑 の破片と接合
2534	緑彩文 輪花碗 緑釉陶器	B (1.7)	口縁部の破片。	内・外面施釉。内面緑彩文。	軟質、胎土 灰白色 被熱のため釉はオリ ーブ黒色に、文様は 暗赤褐色に変色	5% 二次焼成
2535	皿 緑釉陶器	A [13.0] B (1.8)	口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、外方に大きく開く。口縁部外面に沈線。	内・外面施釉。	緻密、胎土 灰色 オリーブ黄色釉	5% 二次焼成
2536	碗 青磁	A [16.4] B (2.3)	口縁部の破片。体部は直線的に外方に開く。口縁部外面に弱い沈線。	内・外面施釉。精製品。	堅密、胎土 灰色	10% P L 269 二次焼成 越州窯系
2537	碗 青磁	A [14.0] B (2.7)	口縁部の破片。体部は直線的に外方に開く。	内・外面施釉。精製品。	堅密、胎土 灰色	10% P L 269 二次焼成 越州窯系
2538	不青 明磁	B (1.6)	口縁部の破片。口縁部は直線的に外方に開く。	内・外面施釉。精製品。	堅密、胎土 灰色	5% 二次焼成 越州窯系
2539	碗(鉢カ) 青磁	B (2.1) D [9.8] E 0.6	底部の破片。輪高台。畳付内外の削り出しが明瞭で、体部と高台の境が明らか。	全面施釉後、畳付の釉を掻き取り、目跡の位置が畳付に認められる。目跡の形は不定形。精製品。	堅密、胎土 灰色	10% P L 269 二次焼成 越州窯系

### 第812号土坑（第685図）

**位置** 調査区域の南西部，F 6 h5区。

**重複関係** 第278A・278B号住居跡，第814号土坑を掘り込んでおり，第807号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径0.86m，短径0.55mの楕円形で，深さ0.61mである。底面は皿状で，壁面は外傾して立ち上がる。

**長径方向** N-15°-E

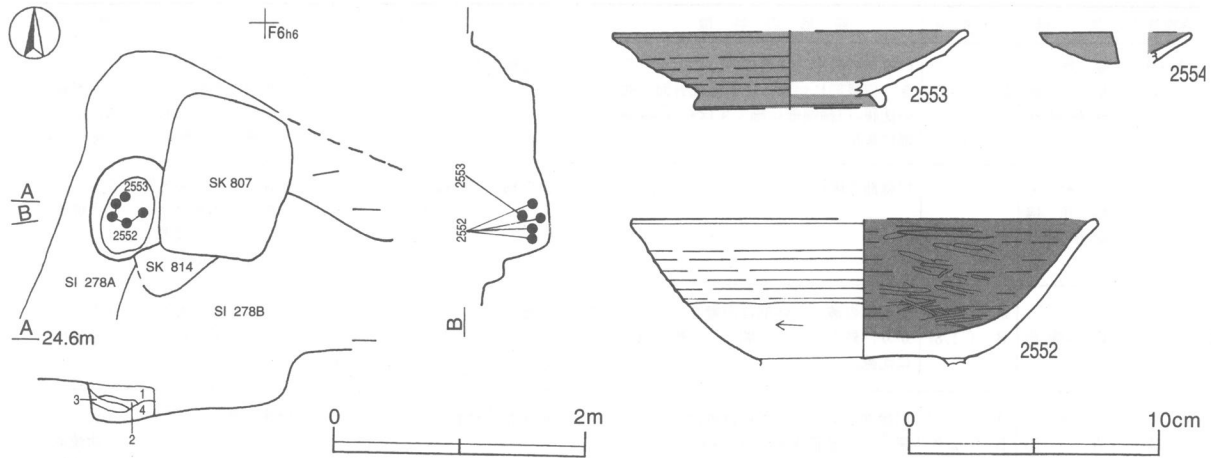
**覆土** 4層からなる。ロームブロックを多量に含み，ブロック状の堆積状況がみられることから，人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- |   |    |                      |
|---|----|----------------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子中量，ローム中ブロック少量   |
| 2 | 褐色 | ローム中ブロック少量           |
| 3 | 褐色 | ローム小ブロック中量           |
| 4 | 褐色 | ローム中ブロック中量，焼土小ブロック少量 |

**遺物** 土師器片17点，緑釉陶器片3点が出土している。第685図2552の土師器高台付碗，覆土下層と覆土上層から出土した破片が接合したものである。2553の緑釉陶器皿は覆土中層から，2554の緑釉陶器皿は覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 本跡の時期は，重複関係と出土土器から10世紀前葉と推定される。



第685図 第812号土坑・出土遺物実測図

第812号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第685図 2552	高台付 土師器	A [18.6] B (5.8)	底部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下位回転ヘラ削り、内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り。高台剥離。内面黒色処理。	小礫・砂粒・雲母に ぶい黄橙色 普通	40% P L242
2553	皿 緑釉陶器	A [14.2] B 3.0 D [7.6] E 0.8	体部から口縁部の破片。体部は内彎はしながら外方に大きく開き、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。高台貼り付け後、ナデ。内・外面施釉。	緻密、胎土 灰黄色 灰オリブ釉 良好	30% P L242
2554	皿 緑釉陶器	B (1.2)	口縁部の破片。口縁部は外方に大きく開き、端部はわずかに外反する。	口縁部内・外面ロクロナデ。内・外面施釉。	緻密、胎土 浅黄色 オリブ黄色釉、良好	5%

第898号土坑 (第686図)

**位置** 調査区域の中央部、F 5 e0区。第85号掘立柱建物跡の中央部に位置する。

**重複関係** 第259号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。第85号掘立柱建物跡の柱穴とは重複がないため新旧関係は不明である。

**規模と形状** 長径2.08m、短径1.58mの楕円形で、深さ0.53mである。底面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。

**長径方向** N-3°-W

**覆土** 7層からなる。上層から中層にかけては、遺物と共に焼土が投げ込まれており、人為堆積と思われる。

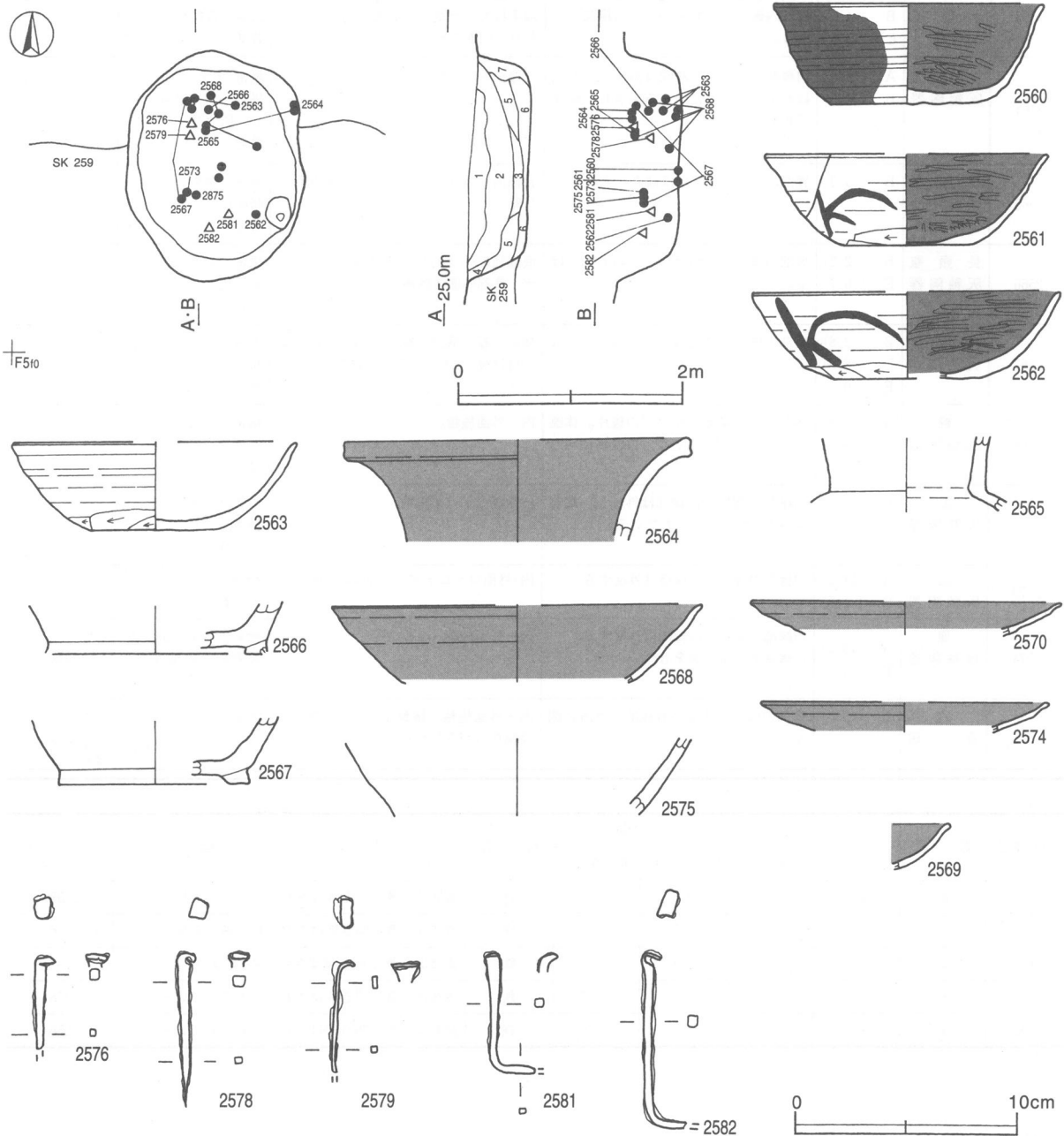
土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・炭化物中量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、炭化物中量
- 3 暗褐色 焼土粒子中量、ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム中ブロック微量
- 6 褐色 ローム大ブロック多量、灰少量
- 7 暗褐色 灰中量、ローム中ブロック少量

**遺物** 土師器片119点、須恵器片34点、灰釉陶器片22点、緑釉陶器片5点、青磁片1点、鉄製品12点(釘)が出土している。第686図2560・2561の土師器坏が底面から出土している以外は、覆土中層から上層で出土しているものが大部分である。本跡出土の緑釉陶器稜椀片・緑彩文輪花椀片は、第740A・B号土坑から出土した破片と

接合している (2527・2532)。2561・2562の土師器坏である。前者は底面から、後者は覆土下層から出土しており、いずれの体部外面に横位で「万」の文字が墨書されている。

**所見** 本跡の遺物は第740A・B号土坑から出土した破片と接合関係にあること、出土遺物が灰釉陶器・緑釉陶器・青磁などで、第740号土坑から出土している遺物と同類のものと思われることなどから、本跡は第740号A・B号土坑と共に第85号掘立柱建物に保管されていたであろうものを、焼失後に廃棄するという目的で掘られ、使用されたものと思われる。また、釘の出土も多く、やはり、第85号掘立柱建物で使用されていたものではないかと思われる。これらのことから本跡の時期は、9世紀後葉と思われる。



第686図 第898号土坑・出土遺物実測図

第898号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第686図 2560	杯 土師器	A 12.3 B 4.5 C 6.8	平底。底部と体部の境に弱い稜をもち、外傾して立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部・体部外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、ナデ。内面ヘラ磨き、黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 褐色 普通	70% P L 242 体部外面煤付着
2561	杯 土師器	A [12.8] B 4.1 C 6.0	平底。底部と体部の境に稜をもつ。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で外反する。	口縁部・体部外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。内面ヘラ磨き、黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	50% P L 242 体部外面墨書 横位「万」
2562	杯 土師器	A [14.0] B 3.9 C [ 6.6]	平底。底部と体部の境に稜をもつ。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部・体部外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。内面ヘラ磨き、黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	40% P L 242 体部外面墨書 横位「万」
2563	杯 土師器	A [12.8] B 4.0 C [ 5.6]	平底。底部と体部の境に稜をもつ。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部・体部外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	40% P L 242
2564	長頸瓶 灰釉陶器	A [15.6] B ( 4.5)	口縁部の破片。口縁部は外反し、端部はわずかに下方につまみ出され、断面三角形。	口縁部内・外面ロクロナデ、施釉。	緻密、胎土 灰白色・ 黒色小斑点状吹き出し、 灰オリーブ色 普通	10% P L 242 ・270
2565	長頸瓶 灰釉陶器	B ( 3.3)	頸部の破片。頸部はほぼ直立する。	頸部内・外面ロクロナデ。頸部外面自然釉。	緻密、胎土 灰色 暗灰色 普通	10%
2566	長頸瓶 灰釉陶器	B ( 2.2) E 0.7	底部の破片。高台は太く、短くふんばる。	底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後ナデ。底部外面自然釉。	緻密、胎土 灰色 暗灰色 良好	10%
2567	長頸瓶 灰釉陶器	B ( 2.8) D [ 8.6] E 0.7	底部の破片。高台は太く、短くふんばる。	体部下端・底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後、ナデ。底部内面自然釉。	緻密、胎土 灰色 暗灰色 普通	10%
2568	碗 灰釉陶器	A [16.8] B ( 3.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。	内・外面施釉。	緻密、胎土 灰色 良好	10%
2569	皿 灰釉陶器	B ( 2.0)	口縁部の破片。口縁部は外反し、端部は外方につまみ出されている。	口縁部内・外面施釉。	砂質が多い、胎土 淡黄色、灰オリーブ 色、普通	5%
2570	皿 灰釉陶器	A [14.2] B ( 1.5)	口縁部の破片。口縁部は外反する。	内・外面ロクロナデ。内・外面施釉。	緻密、胎土 灰色 灰色釉、良好	5%
2574	皿 緑釉陶器	A [13.2] B ( 1.3)	口縁部の破片。口縁部は外反する。口縁端部に水平面をもつ。	内・外面施釉。	軟質、胎土 灰黄色 被熱のため釉はオリ ーブ黒色に変色	5% 二次焼成
2575	碗 青磁	B ( 3.3)	体部の破片。体部は直線的に外方に開く。	内・外面施釉。精製品。外面の施釉には釉むらがみられる。	堅密、胎土 灰色	10% 二次焼成 越州窯系

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
2576	釘	(4.3)	0.5	0.5	( 3.6)	鉄	頭部は、薄く叩き伸ばされ、折り曲げられている。	P L 256
2578	釘	7.0	0.4	0.5	5.3	鉄	頭部は、薄く叩き伸ばされ、折り曲げられている。	P L 256
2579	釘	(5.0)	0.6	0.3	( 2.5)	鉄	頭部は、薄く叩き伸ばされ、丸められている。	P L 256
2581	釘	(5.5)	0.7	0.4	( 5.5)	鉄	頭部は、薄く叩き伸ばされ、丸められている。	P L 258
2582	釘	(8.0)	0.5	0.5	(11.8)	鉄	頭部は、薄く叩き伸ばされ、丸められている。	P L 256

第940号土坑 (第687図)

位置 調査区域の中央部、E 5 b8区。

規模と形状 長径1.95m、短径1.86mの円形で、深さ0.42mである。底面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。



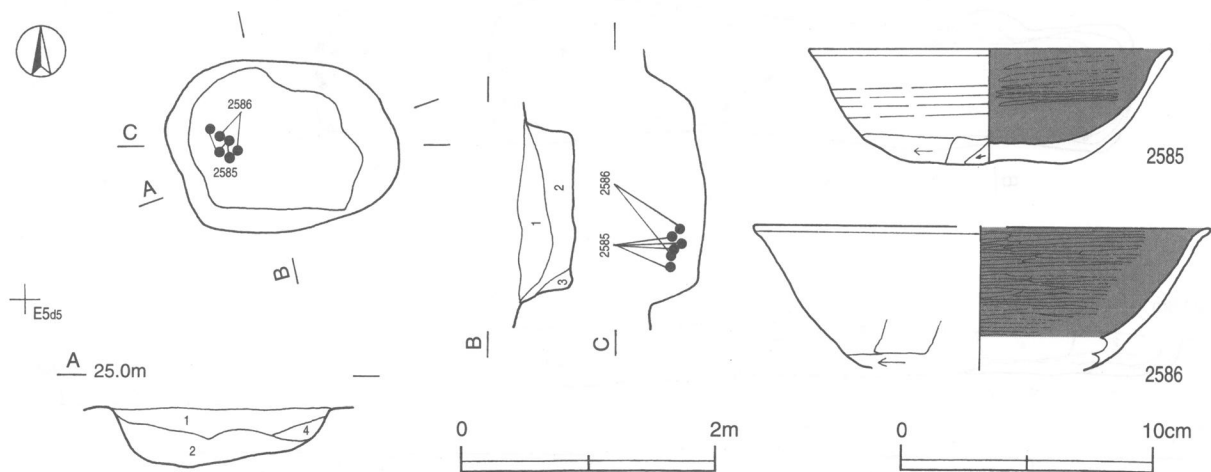
**覆土** 4層からなる。ロームブロック・焼土ブロックを含むことから、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量, ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量

**遺物** 土師器片14点, 須恵器片1点が出土している。第687図の高台付椀と思われる2585・2586は、いずれも覆土中層から出土した破片が接合したものである。

**所見** 本跡の性格については不明であるが、遺物は覆土中層に集中していることから、一括投棄されたと考えられる。遺物が投棄された時期は、9世紀後葉と推定されることから、本跡の時期は、8世紀中葉以降9世紀後葉以前と推定される。



第687図 第940号土坑・出土遺物実測図

第940号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第687図 2585	椀 土師器	A 14.6 B 4.5 C 6.3	底部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り, 内面ヘラ磨き。底部1方向のヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子にぶい黄橙色	75% PL243 二次焼成 口縁部内面に油煙付着
2586	高台付椀か 土師器	A [18.2] B (5.6)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部外面一部ヘラナデ, 下端手持ちヘラ削り。体部内面ヘラ磨き, 黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子にぶい黄橙色 普通	20%

第949号土坑 (第688図)

**位置** 調査区域の中央部, F 6h7区。

**規模と形状** 長軸5.15m, 短軸0.95mの隅丸長方形で、深さ0.48cmである。底面はほぼ平坦で、壁面は直立する。本跡の西側の底面に長径82cm, 短径37cmの楕円形, 厚さ10cmほどの粘土塊がみられるが、性格は不明である。

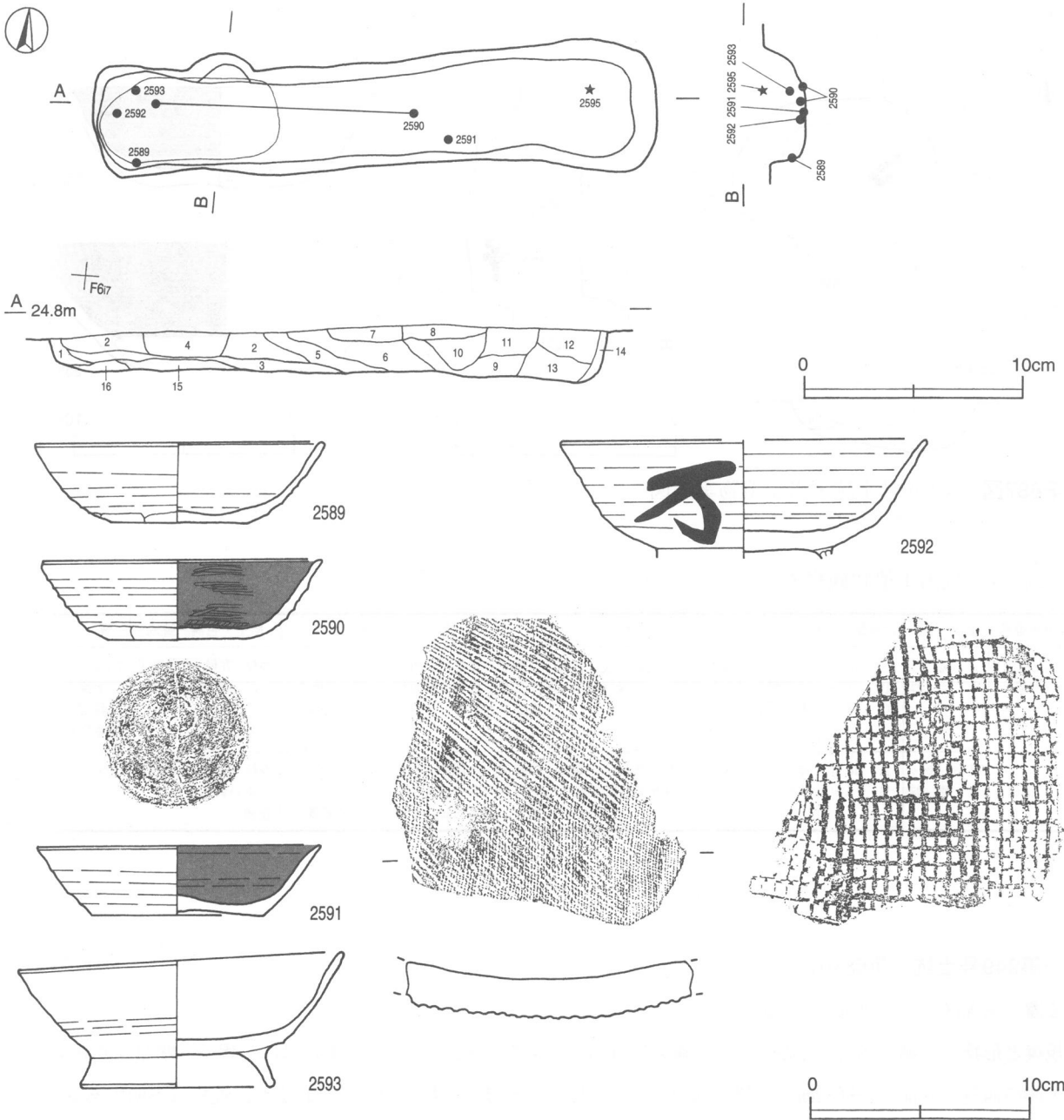
**長軸方向** N-85°-E

**覆土** 16層からなる。土器片が多量に出土していること, ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子

を多く含んでいること、ブロック状に堆積していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- |        |                                    |
|--------|------------------------------------|
| 1 明褐色  | ローム粒子中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック少量       |
| 2 褐色   | ローム中ブロック・焼土中ブロック・炭化物少量, ローム小ブロック微量 |
| 3 褐色   | ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物少量             |
| 4 黒褐色  | 焼土小ブロック少量, ローム小ブロック・炭化物微量          |
| 5 褐色   | ローム中ブロック・ローム小ブロック・粘土中ブロック少量        |
| 6 暗褐色  | 焼土小ブロック微量                          |
| 7 褐色   | ローム粒子・焼土小ブロック少量                    |
| 8 褐色   | ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量           |
| 9 褐色   | ローム粒子少量, 焼土粒子微量                    |
| 10 褐色  | 焼土小ブロック・炭化粒子・粘土小ブロック少量             |
| 11 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量                   |
| 12 暗褐色 | ローム粒子・炭化物・粘土小ブロック微量                |



第688図 第949号土坑・出土遺物実測図

- 13 褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック微量  
 14 褐色 ローム粒子少量  
 15 暗褐色 粘土粒子中量, 焼土粒子・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化材・炭化物・炭化粒子少量  
 16 暗褐色 粘土粒子中量, 焼土粒子少量, ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量

**遺物** 土師器片88点, 須恵器片31点, 瓦片1点, 混入と思われる陶器片1点が出土している。第688図2589の土師器坏は覆土中層から, 2591の土師器坏は覆土下層から, 2592の土師器高台付椀は覆土下層から, 2593の土師器高台付椀は覆土中層から, 2595の平瓦は覆土上層から, 2590の土師器坏は覆土中からそれぞれ出土している。  
**所見** 本跡の時期は, 出土土器から10世紀前葉と推定される。

第949号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第688図 2589	坏 土師器	A 13.1	体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部にいたる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・雲母・石英 橙色 普通	95% P L243
		B 3.7				
		C 6.1				
2590	坏 土師器	A 12.6	体部から口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部外面は明瞭なロクロ目。体部下端手持ちヘラ削り, 内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 にぶい黄橙色 普通	90% P L243
		B 3.6				
		C 6.4				
2591	坏 土師器	A 13.0	底部から口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り痕を残す回転ヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	65% P L243
		B 3.3				
		C 8.0				
2592	高台付椀 土師器	A [16.8]	高台部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。高台はハの字状に開く。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後, ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	50% P L243 体部外面墨書 正位「万」
		B (5.4)				
2593	高台付椀 土師器	A 14.8	体部から口縁部にかけて一部欠損。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。高台は長くハの字状に開く。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。高台貼り付け後, ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	70% P L243
		B 6.1				
		D 8.7				
		E 1.6				

遺物番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
2595	平瓦	(15.4)	(14.5)	1.8	(309.0)	凹面布目痕, 凸面格子目叩き。	

第957号土坑 (第689図)

**位置** 調査区域の北西部, F 4 j6区。

**重複関係** 第449号住居跡を掘り込んでおり, 本跡が新しい。

**規模と形状** 長径2.25m, 短径1.96mの楕円形で, 深さ0.70mである。底面は皿状で, 壁面は外傾して立ち上がる。

**覆土** 9層からなる。土器片が多量に出土し, ロームブロック・焼土ブロック・炭化物を含んでいることから, 人為堆積と考えられる。

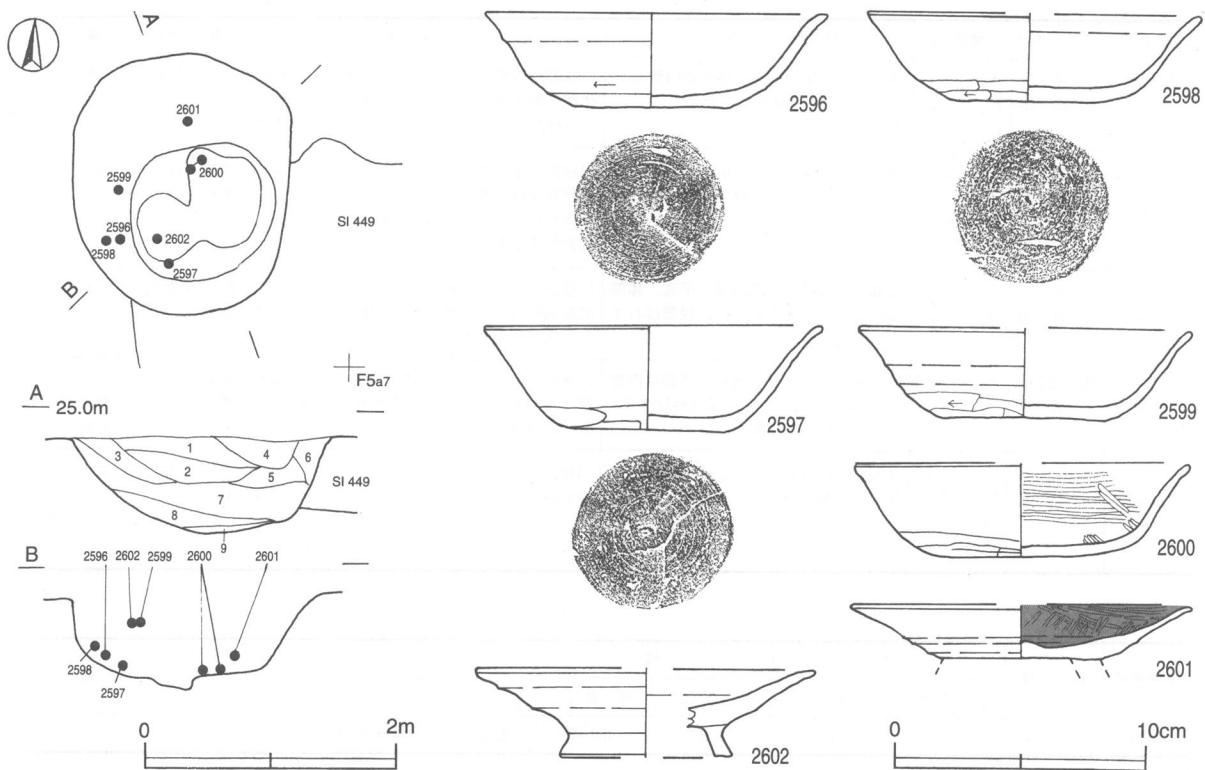
土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量, ローム大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化材・炭化物・炭化粒子微量  
 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量  
 3 暗褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化材・炭化物・炭化粒子微量  
 4 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化材・炭化物・炭化粒子微量  
 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 極暗褐色 焼土粒子・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土中ブロック・炭化材・炭化物微量
- 8 極暗褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・炭化材・灰微量
- 9 極暗褐色 炭化粒子多量, 焼土小ブロック・焼土粒子中量, ローム小ブロック・粘土小ブロック少量

**遺物** 土師器片244点, 須恵器片18点が出土している。遺物は覆土中層から覆土上層にかけて集中して出土している。第689図2596~2600は土師器坏である。2597・2600は覆土下層から, 2596・2598は覆土中層から, 2599は覆土上層からそれぞれ出土している。2601・2602は土師器高台付皿で, いずれも覆土中層から出土している。

**所見** 時期は, 重複関係と出土土器から10世紀前葉と推定される。



第689図 第957号土坑・出土遺物実測図

第957号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第689図 2596	坏 土師器	A 13.5 B 3.7 C 6.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母・赤色粒子にぶい橙色 普通	95% P L243
2597	坏 土師器	A 13.4 B 4.1 C 6.3	体部から口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	60% P L243
2598	坏 土師器	A [13.2] B 3.4 C 6.1	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母・赤色粒子 浅黄橙色 普通	40% P L243
2599	高台付坏 土師器	A [13.4] B 3.6 C 6.2	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	40%

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第689図 2600	坏 土師器	A [13.4] B 3.6 C 6.0	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り、内面丁寧なヘラ磨き。底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙色 普通	40%
2601	高台付碗 土師器	A [13.6] B (2.1)	高台部から口縁部一部欠損。体部は外方に大きく開き、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部・底部内面ヘラ磨き。高台貼り付け。内面黒色処理。	砂粒・雲母 橙色	70%
2602	高台付碗 土師器	A [13.6] B 3.4 D 6.8 E 1.0	高台部から口縁部の破片。高台はハの字状に開く。体部は外方に大きく開き、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。高台貼り付け後、ロクロナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	35%

### 第1198号土坑（第690図）

**位置** 調査区域の北西部，D 4 c9区。

**規模と形状** 長径1.74m，短径1.53mの楕円形，深さ0.34mである。底面は凹凸があり，壁面は緩やかに立ち上がる。

**長径方向** N-90°-E

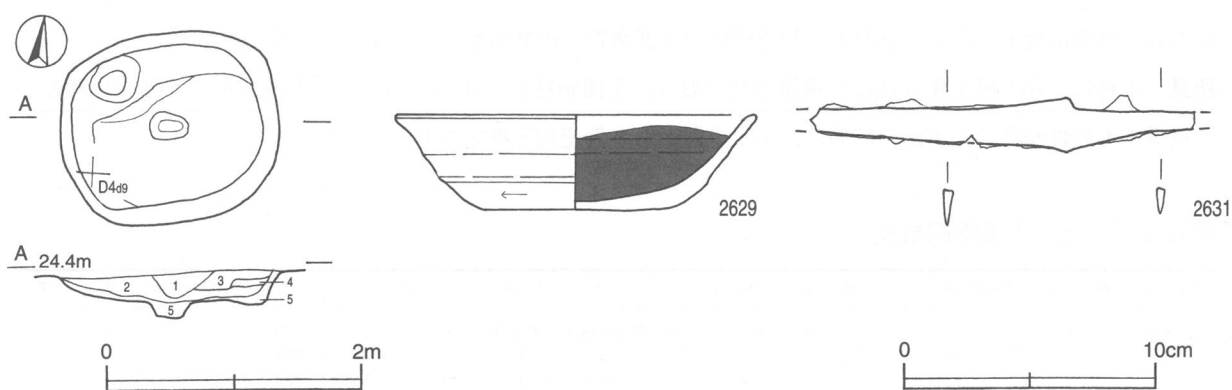
**覆土** 5層からなる。ブロック状に堆積していること，焼土ブロック・炭化物・ロームブロック・粘土ブロックが多く含まれていることから，人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子中量，ローム中ブロック・焼土小ブロック少量，焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・粘土小ブロック中量，焼土中ブロック・焼土粒子少量，炭化物・炭化粒子微量
- 4 褐色 粘土粒子多量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量

**遺物** 土師器片38点，須恵器片2点，灰釉陶器片1点，鉄器1点（刀子）が出土している。第690図2629の土師器坏，2631の刀子はそれぞれ覆土中から出土している。

**所見** 本跡の時期は，出土土器から10世紀前葉と推定される。



第690図 第1198号土坑・出土遺物実測図

### 第1198号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第690図 2629	坏 土師器	A 14.2 B 3.8 C 6.7	底部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	90% PL243 体部内面煤付着

遺物番号	器種	計測値						材質	特徴	備考
		全長(cm)	刀身長(cm)	身幅(cm)	重ね(cm)	茎長(cm)	重量(g)			
第690図2631	刀子	(15.3)	(10.3)	1.5	0.4	(5.0)	(22.3)	鉄	両関。	P L 255

### 第1202号土坑 (第691図)

**位置** 調査区域の西端部, B 2 j9区。

**重複関係** 第43号溝に掘り込まれており, 本跡が古い。

**規模と形状** 長径6.88m, 短径5.66mの不整楕円形, 深さ1.35mである。底面は凹凸があり, 壁面は外傾して立ち上がる。

**長径方向** N-30°-E

**覆土** 29層からなる。第1・2層はレンズ状に堆積しており, 自然堆積と考えられる。第3~29層はブロック状に堆積していること, 黄褐色の粘土ブロックを多く含んでいることから, 人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	16 黄褐色	粘土小ブロック・粘土粒子少量
2 黒褐色	炭化粒子・粘土粒子微量	17 黄褐色	粘土中ブロック少量
3 暗褐色	粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	18 褐色	粘土中ブロック多量
4 暗褐色	焼土粒子・粘土粒子微量	19 黒褐色	粘土粒子少量
5 黄褐色	粘土小ブロック中量, 炭化粒子微量	20 黄褐色	粘土粒子中量, 炭化粒子・粘土小ブロック微量
6 暗褐色	粘土粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック微量	21 黄褐色	粘土中ブロック中量
7 黒褐色	炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子微量	22 暗褐色	粘土粒子少量, 粘土小ブロック微量
8 黄褐色	粘土小ブロック・粘土粒子中量	23 黄褐色	粘土小ブロック中量
9 暗褐色	粘土粒子微量	24 褐色	ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
10 暗褐色	粘土小ブロック中量	25 黄褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
11 黒褐色	粘土粒子微量	26 暗褐色	粘土中ブロック中量
12 暗褐色	粘土粒子・炭化粒子微量	27 暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
13 黄褐色	粘土粒子少量	28 黄褐色	粘土大ブロック少量
14 黄褐色	粘土小ブロック少量	29 黄褐色	粘土大ブロック中量
15 黄褐色	ローム粒子・粘土小ブロック少量		

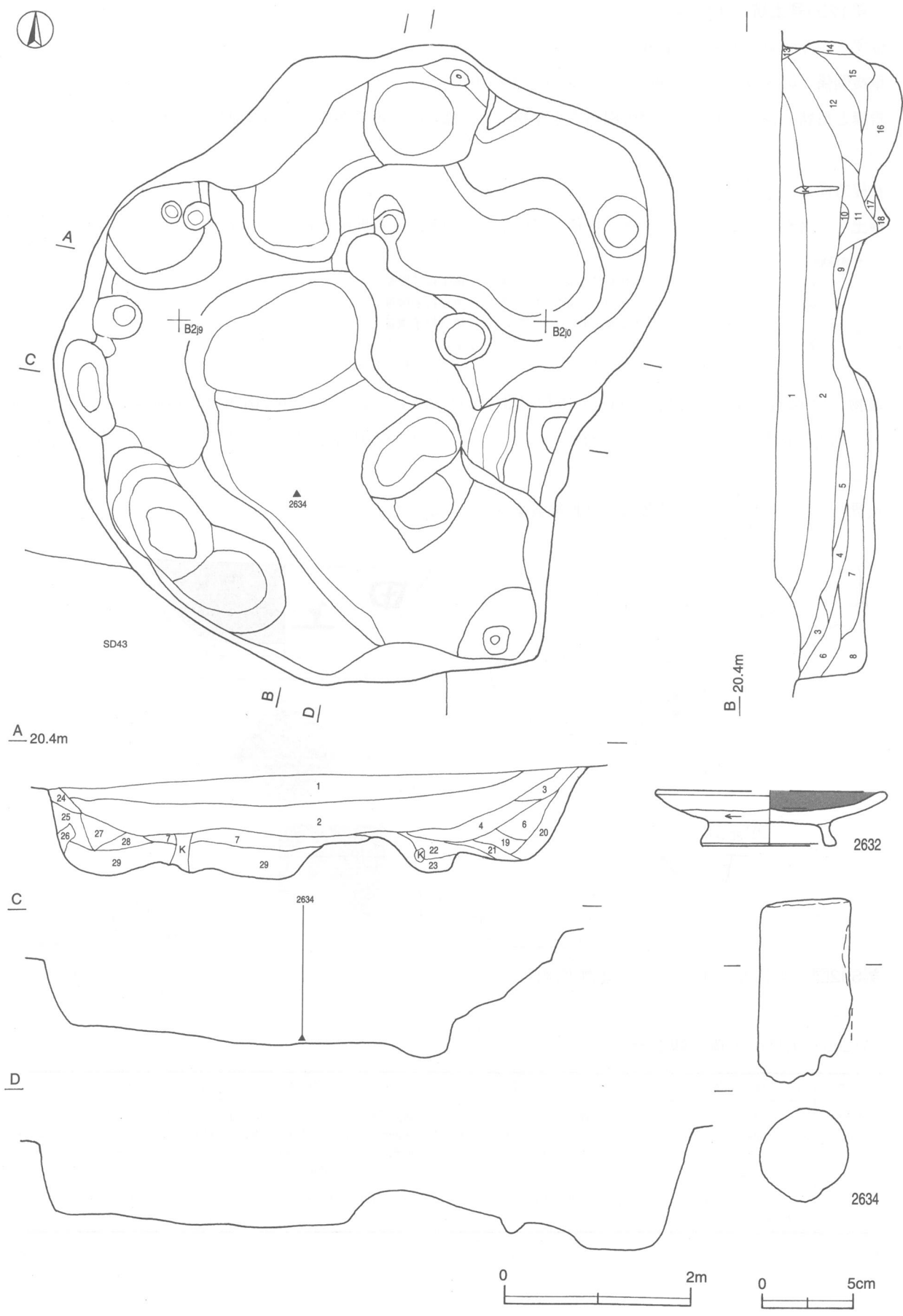
**遺物** 土師器片72点, 須恵器片66点, 土製品1点(支脚), 鉄器1点(釘)が出土している。第691図2632の土師器高台付皿は覆土中から, 2634の土製支脚は中央部南寄りの底面から, 出土している。

**所見** 本跡は, 粘土層を掘り込んで構築されており, 全面が粘土の底面であることから, 粘土採掘を目的とした遺構の可能性が高い。本跡の時期は, 出土土器から9世紀代と推定される。

#### 第1202号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第691図 2632	高台付 土師器	A [12.4] B 3.0 D 7.2 E 1.3	高台部から口縁部の破片。体部は内彎して外方に大きく開き, 口縁部にいたる。高台はハの字状に開く。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後, ロクロナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙色 普通	40%

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	最大径(cm)	最小径(cm)	重量(g)			
2634	支脚	(10.1)	5.1	4.8	(365.0)	土製	円筒形。上面・側面ナデ。被熱痕。	



第691图 第1202号土坑·出土遗物实测图

第1295号土坑（第692図）

位置 調査区域の北端部，B 6h8区。

重複関係 第397号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と形状 長径1.05m，短径0.84mの不整楕円形，深さ0.53mである。底面は皿状で，壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-0°

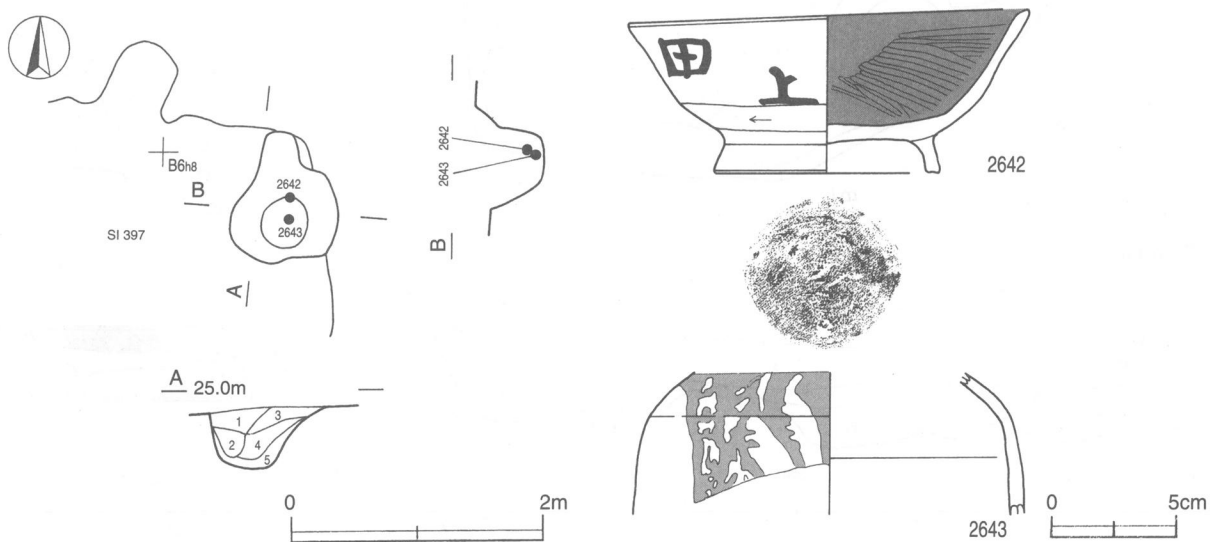
覆土 5層からなる。ブロック状に堆積していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
- 5 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片47点，須恵器片11点，灰釉陶器片1点が出土している。第692図2642の土師器高台付椀，2643の灰釉陶器長頸瓶はそれぞれ覆土下層から出土している。2642の体部外面には正位で「田上」の墨書が認められる。

所見 本跡の時期は，出土土器から9世紀後葉以降と推定される。



第692図 第1295号土坑・出土遺物実測図

第1295号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第692図 2642	高台付椀 土師器	A 15.9 B 6.5 D 9.0 E 1.3	高台部から口縁部一部欠損。高台は長くハの字状に大きく開く。体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り，内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後，ロクロナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙色 普通	80% P L 243 体部外面墨書 正位「田上」
2643	長頸瓶 灰釉陶器	B ( 5.5)	体部の破片。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。	緻密，胎土 黄灰色 暗オリーブ釉，普通	20% P L 243



**第1570号土坑（第693図）**

**位置** 調査区域の南東部，G 8 g3区。

**規模と形状** 長径1.29m，短径1.02mの楕円形，深さ0.47mである。底面は皿状で，壁は外傾して立ち上がる。

**長径方向** N-20°-E

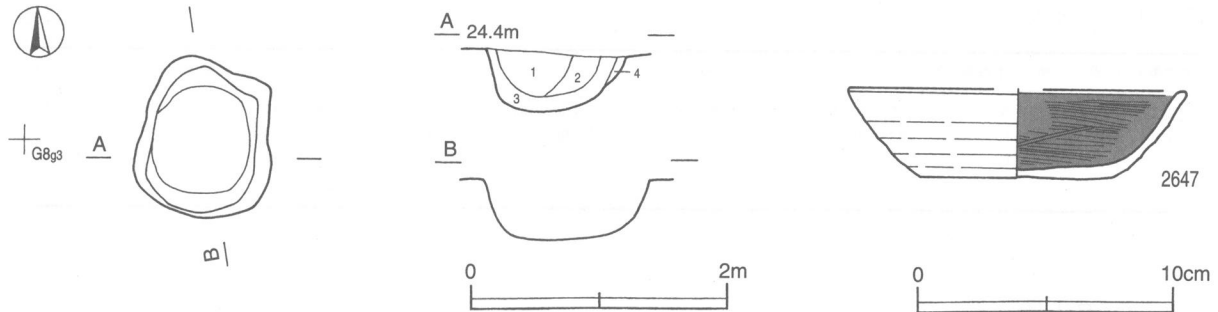
**覆土** 4層からなる。不規則に堆積していること，焼土粒子・炭化物・ロームブロックがブロック状に堆積している層（土層断面図中，第1層）がみられることから，人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物中量
- 2 褐色 ローム大ブロック中量，焼土粒子少量
- 3 暗褐色 焼土粒子少量
- 4 褐色 ローム中ブロック・焼土粒子少量

**遺物** 土師器片13点，須恵器片5点が出土している。第693図2647の土師器坏は，覆土中層から出土している。

**所見** 本跡の時期は，出土土器から9世紀後葉と推定される。



第693図 第1570号土坑・出土遺物実測図

**第1570号土坑出土遺物観察表**

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第693図 2647	坏 土師器	A [13.4] B 3.5 C 7.8	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。口縁部・体部・底部内面へラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子にぶい黄橙色普通	60% PL243

**第1580号土坑（第694図）**

**位置** 調査区域の南東部，G 7 g0区。

**重複関係** 第308号住居跡・第4号方形堅穴状遺構を掘り込んでおり，いずれよりも新しい。

**規模と形状** 長径1.60m，短径1.35mの楕円形，深さ0.23mである。底面は皿状で，壁は外傾して緩やかに立ち上がる。

**長径方向** N-90°

**覆土** 3層からなる。炭化材や焼土粒子が多量に含まれていることから，人為堆積と考えられる。

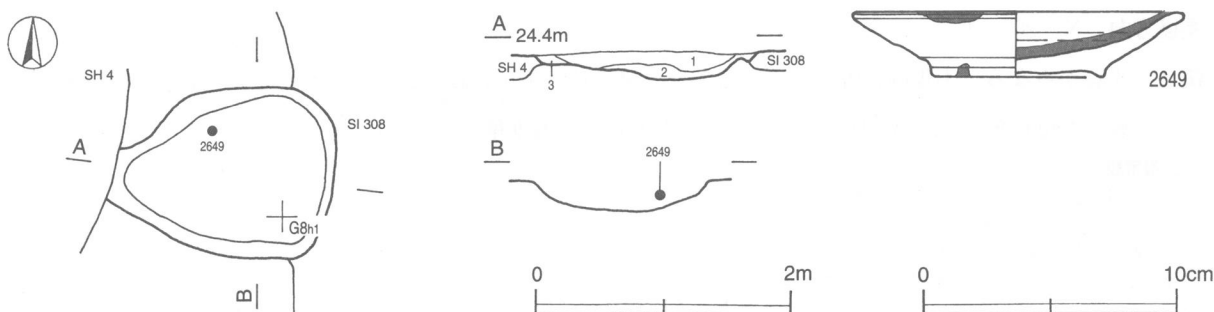
**土層解説**

- 1 暗褐色 焼土粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 炭化材多量，ローム中ブロック・焼土小ブロック少量
- 3 褐色 ローム中ブロック少量

**遺物** 土師器片29点，須恵器片17点が出土している。第694図2649の須恵器高台付皿は覆土下層から出土して

いる。

所見 本跡の時期は、重複関係と出土土器から9世紀後葉以降と推定される。



第694図 第1580号土坑・出土遺物実測図

第1580号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第694図 2649	高台付皿 須恵器	A 13.3 B 2.6 D 6.9 E 0.5	体部は内彎して外方に大きく開き、口縁部は外反する。高台は短く垂下する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後ロクロナデ。	小礫・砂粒・石英 灰白色 普通	100% P L 243 内・外面煤着

### 第1588号土坑（第695・696図）

位置 調査区域の南東部，H 7 j8区。北東8mには第95号掘立柱建物跡が位置する。

規模と形状 径4.33mの円形，深さ2.33mである。中央部は径9.50mの円形の二段掘りになっており，断面漏斗状を呈する。底面はほぼ平坦で，壁面には径0.40m前後の円形の掘り込みが上位に5か所ある。二段掘りの部分は粘土層を掘り込んでいる。

覆土 14層からなる。覆土上層と中層には，ローム粒子・ロームブロック・焼土・炭化物と共に遺物が多量に投げ込まれており，人為堆積と思われる。

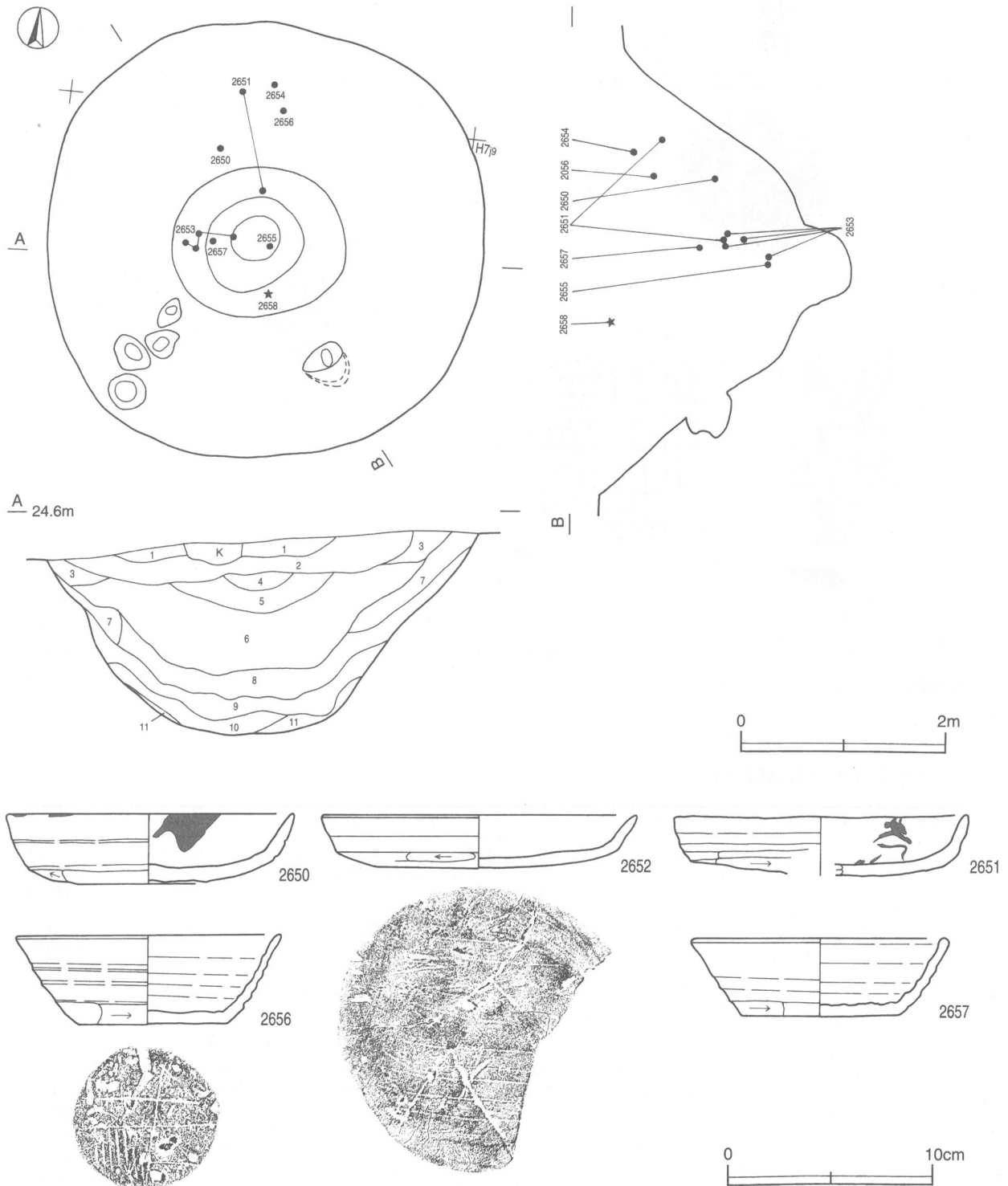
#### 土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化物・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 4 にぶい褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック少量，焼土粒子微量
- 5 極暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック少量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物・炭化粒子微量
- 7 褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
- 8 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 9 褐色 ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
- 10 褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 11 褐色 炭化粒子少量，ローム粒子微量
- 12 暗褐色 ローム大ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 13 褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
- 14 褐色 ローム中ブロック多量，ローム大ブロック中量

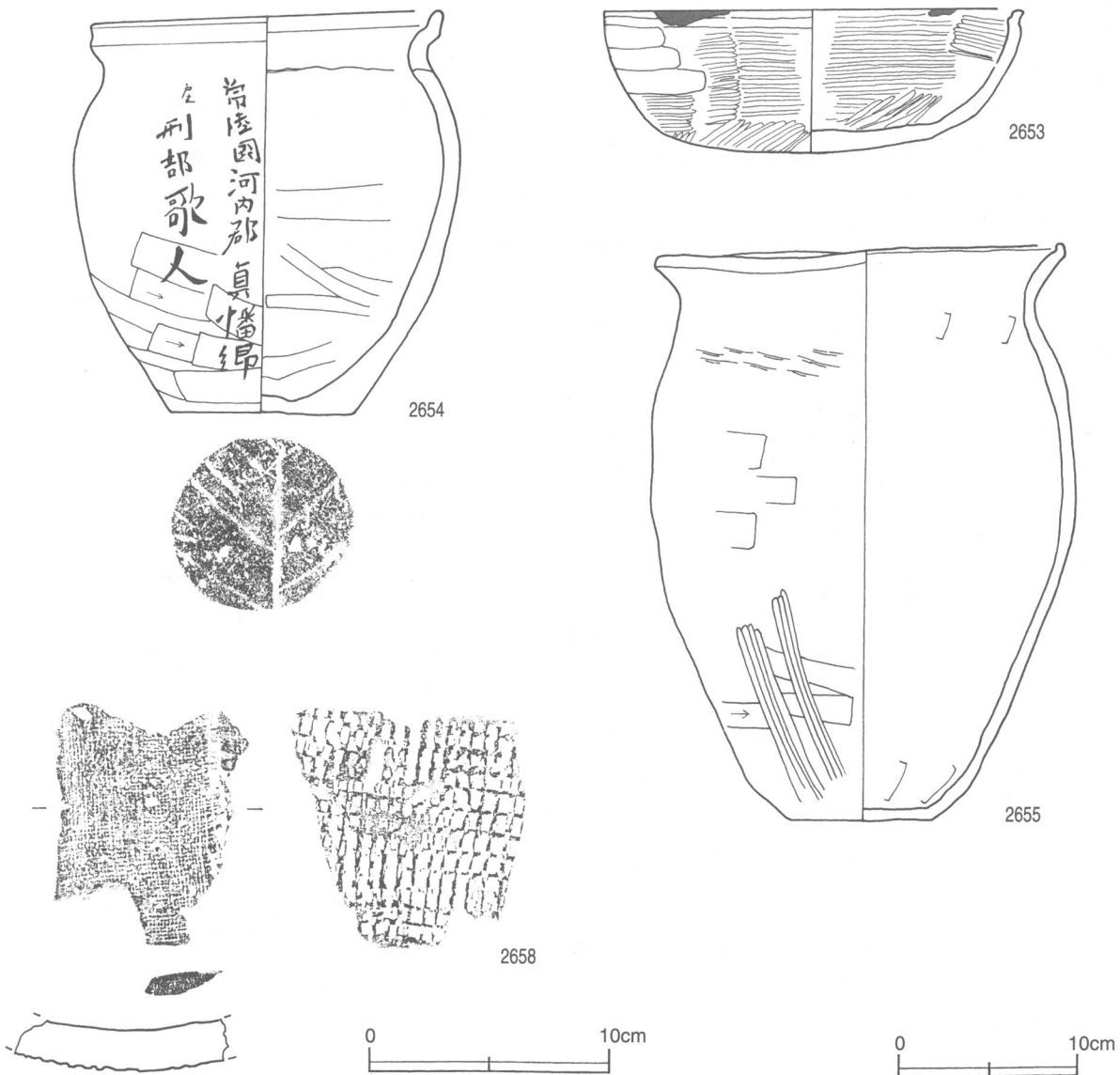
遺物 土師器片522点，須恵器片135点，瓦片1点，鉄滓2点，混入した縄文土器片6点が出土している。第695図2650・2651・2653の土師器杯，2655の土師器甕，2657の須恵器杯は覆土中層から，2654の土師器小形甕・2656の須恵器杯，2658の平瓦は覆土上層からそれぞれ投棄された状態で出土している。2650・2651・2653の口縁部にはいずれも油煙が付着している。2654の小形甕の体部には正位で「常陸國河内郡真播郷戸主刑部歌人」

の文字が墨書されている。これも他の土器と同様本跡に投棄されていたものである。

**所見** 本跡の底面は、二段掘りになっている。いずれにしても、本来の機能を終えてから多量の遺物が投棄されており、投棄された遺物は覆土中層には8世紀前葉のものが多く、覆土上層には8世紀中葉以降のものが多い。このことから本跡は8世紀前葉までは本来の機能をしていたはずである。人名墨書土器は、人面墨書土器と同様に祭祀行為に用いられたものと思われる。土器の形態からは、この小形甕はあまり変化をみせないことから、いつの時期の土器なのか決定つけるのは、困難だが、8世紀代には入るものと思われる。



第695図 第1588号土坑・出土遺物実測図



第696図 第1588号土坑・出土遺物実測図

第1588号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第695図 2650	坏 土師器	A 14.2 B 3.5	丸底。口縁部は丸みをもって緩やかに立ち上がる。	口縁部・体部内面横ナデ。底部手持ちヘラ削り。器壁は比較的厚い。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 橙色，普通	80% P L 243 口縁部内・外面，油煙附着
2651	坏 土師器	A 14.8 B 3.0	丸底。口縁部は短く，わずかに外傾して立ち上がる。	口縁部・体部内面横ナデ。底部手持ちヘラ削り。口縁部は肥厚する。	砂粒・長石・赤色粒子 粘土粒子を含みマーブル状，橙色，普通	80% P L 243 口縁部内面油煙附着
2652	坏 土師器	A 15.6 B 2.6	丸底。半球形状を呈する。口縁部は短く立ち上がる。口縁部内面は肥厚する。	口縁部内・外面横ナデ。底部内面ヘラ磨き，外面手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	70% P L 243
第696図 2653	坏 土師器	A 17.8 B 6.0	丸底。底部からの立ち上がりに明瞭な段をもつ。口縁部は短く，わずかに外傾して立ち上がる。	口縁部外面横ナデ。体部外面一部手持ちヘラ削り。体部・底部外面，内面ヘラ磨き。	砂粒・長石 暗赤褐色 普通	90% P L 243 口縁部内・外面，油煙附着
2654	小形甕 土師器	A 14.8 B 17.0 C 7.8	平底。体部は内彎して立ち上がり，最大径を上位にもつ。頸部はくの字状に折れる。口縁端部はつまみ上げられる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面上半ナデ。体部外面下半手持ちヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	95% P L 265, 体部外面墨書正位，「常陸國河内郡真，播郷戸主刑部歌人」

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第696図 2655	甕 土師器	A 21.0	平底。体部は長胴形を呈し、頸部は緩やかに折れる。口縁部は外傾し、端部内面に1条の沈線あり。	口縁部・体部内面横ナデ。体部内・外面、底部外面ヘラナデ。体部外面上位ヘラ当て痕。体部下位ヘラ磨き。	砂粒・長石 褐色 普通	80% PL243
		B 32.4				
		C 7.8				
第695図 2656	坏 須恵器	A 13.0	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。	粗い、砂粒・雲母・ 角礫・小石 灰色、普通	90% PL243 底部ヘラ記号 「卍」
		B 4.4				
		C 7.4				
2657	坏 須恵器	A 12.6	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。口縁端部は肥厚する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部多方向のヘラ削り。	粗い、砂粒・雲母・ 角礫・小石 灰色、普通	90% PL243
		B 3.9				
		C 8.0				

遺物番号	種別	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第696図2658	平瓦	(10.2)	(9.1)	1.8	(218.0)	凸面格子目叩き。凹面布目痕。	

### 第1692号土坑（第697図）

**位置** 調査区域の南東部南端，I 8g2区。

**重複関係** 第345号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

**規模と形状** 長径1.02m，短径1.00mの円形，深さ0.72mである。底面は皿状で，壁はほぼ直立する。

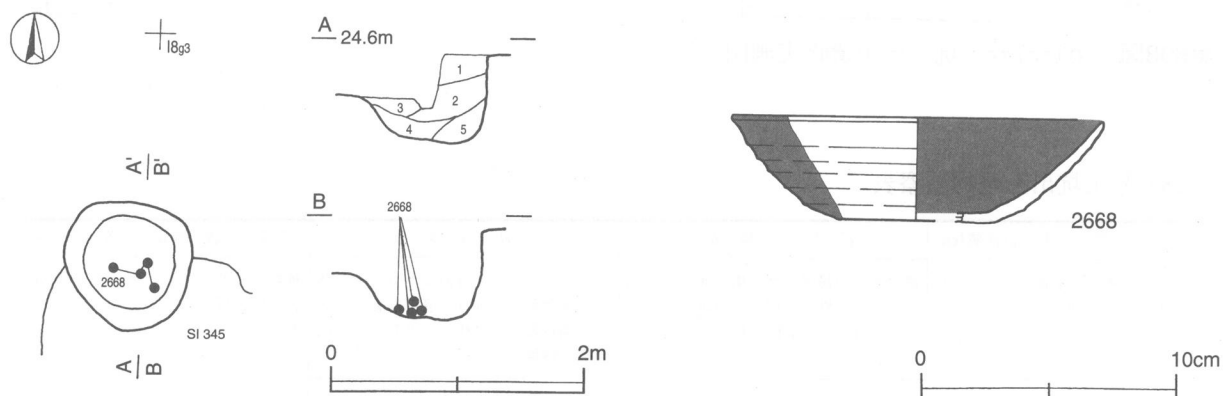
**覆土** 5層からなる。ブロック状に堆積していることから，人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量
- 5 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック中量

**遺物** 土師器片32点，須恵器片3点が出土している。第697図2668の土師器坏は，底面から覆土中層にかけて出土した破片が接合したものである。このことから，埋め戻しの過程で遺物の投棄が行われたか，または埋土の中に混入していたと考えられる。

**所見** 本跡の時期は，重複関係と出土土器から10世紀前葉と推定される。



第697図 第1692号土坑・出土遺物実測図

第1692号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第697図 2668	坏 土師器	A 14.8 B 4.1 C 6.1	底部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・雲母・赤色粒子 黒褐色 普通	60% PL243 内面器面剝離、体部内・外面煤付着

第1857号土坑（第698図）

位置 調査区域の中央部，E 7 f7区。

重複関係 第63号掘立柱建物のP 8に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と形状 平面形は径0.86mのほぼ円形と推定される。深さは0.21mである。底面はほぼ平坦で，壁はほぼ直立する。

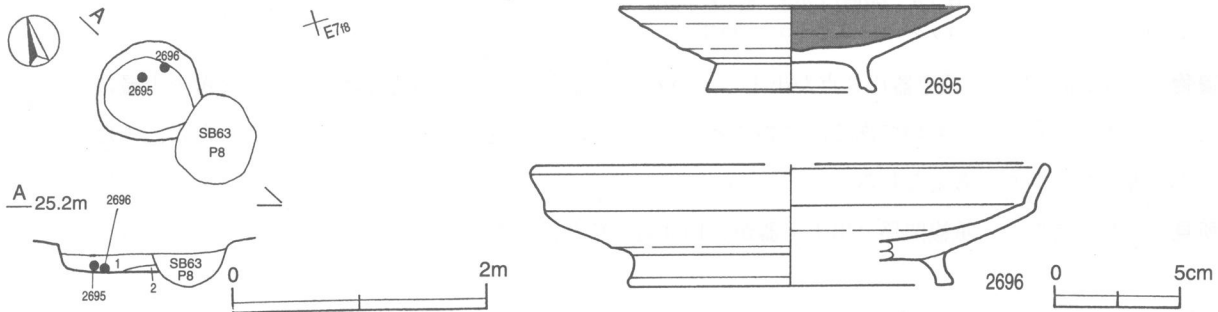
覆土 2層からなる。ブロック状に堆積していること，灰・ロームブロックを多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム中ブロック・灰中量
- 2 褐色 ローム大ブロック中量

遺物 土師器片11点，須恵器片2点が出土している。第698図2695の土師器高台付皿は，覆土下層から出土している。2696の須恵器盤は覆土上層から出土しており，年代的にも他よりさかのぼることから混入と考えられる。

所見 本跡の時期は，2695などの出土土器から9世紀後葉から10世紀代と推定される。



第698図 第1857号土坑・出土遺物実測図

第1857号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第698図 2695	高台付皿 土師器	A 13.8 B 3.4 D 6.8 E 1.2	高台部・口縁部一部欠損。体部は外傾して大きく外方に開き，口縁部にいたる。高台はハの字状に開く。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後，ロクロナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	90% PL243
2696	盤 須恵器	A [20.2] B 4.8 D [13.0] E 1.3	高台部から口縁部の破片。体部は内彎気味に外方に開き，屈曲して口縁部にいたる。口縁部はわずかに外反する。高台はハの字状に開く。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。高台貼り付け後，ロクロナデ。	小礫・砂粒・雲母 灰色 普通	20%

第1891号土坑（第699図）

位置 調査区域の中央部，E 7 g9区。

規模と形状 径0.62mの円形，深さ0.45mである。底面は皿状で，壁は外傾して立ち上がる。

覆土 3層からなる。ブロック状に堆積していることから，人為堆積と考えられる。

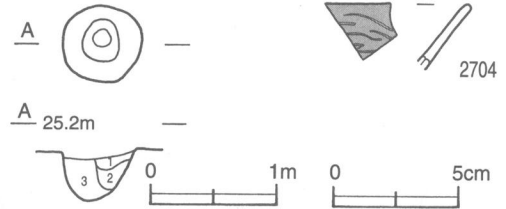
土層解説

- 1 褐色 ローム中ブロック中量
- 2 褐色 ローム大ブロック多量
- 3 褐色 ローム中ブロック少量



遺物 土師器片7点，須恵器片4点，緑釉陶器片1点が出土している。第966図2704の緑釉陶器花文椀は覆土中層から出土している。

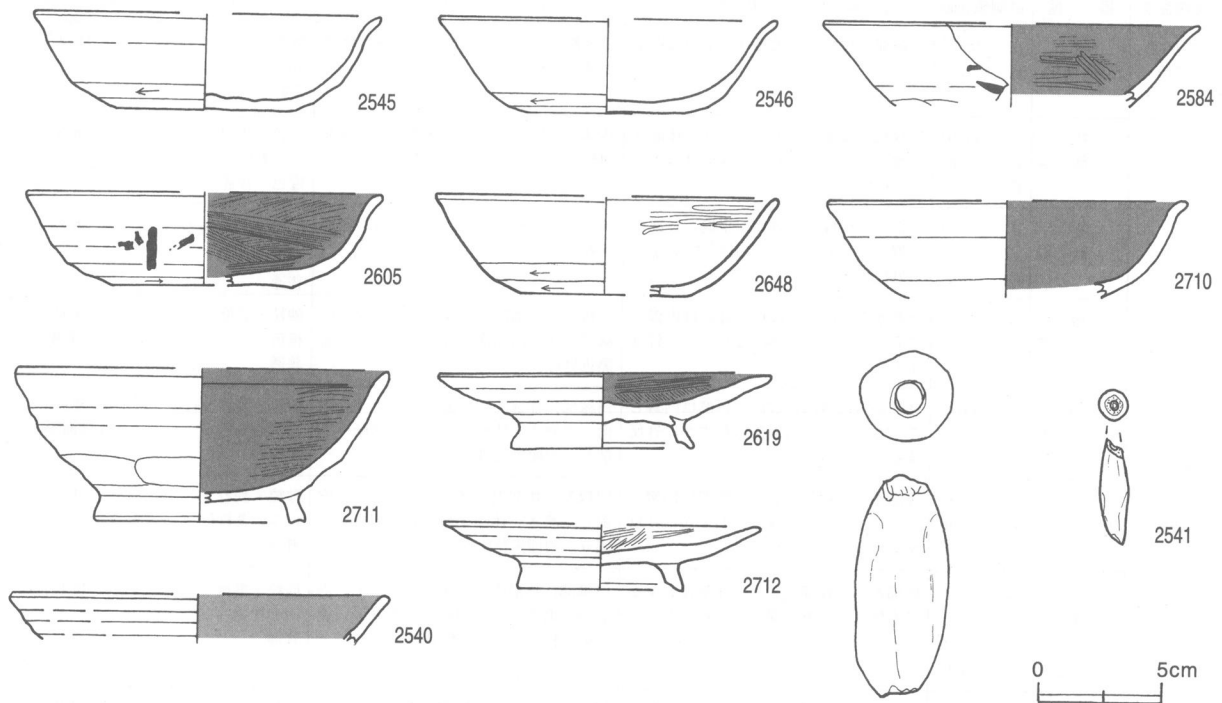
所見 本跡の時期は，出土土器から9世紀後葉から10世紀代と推定される。



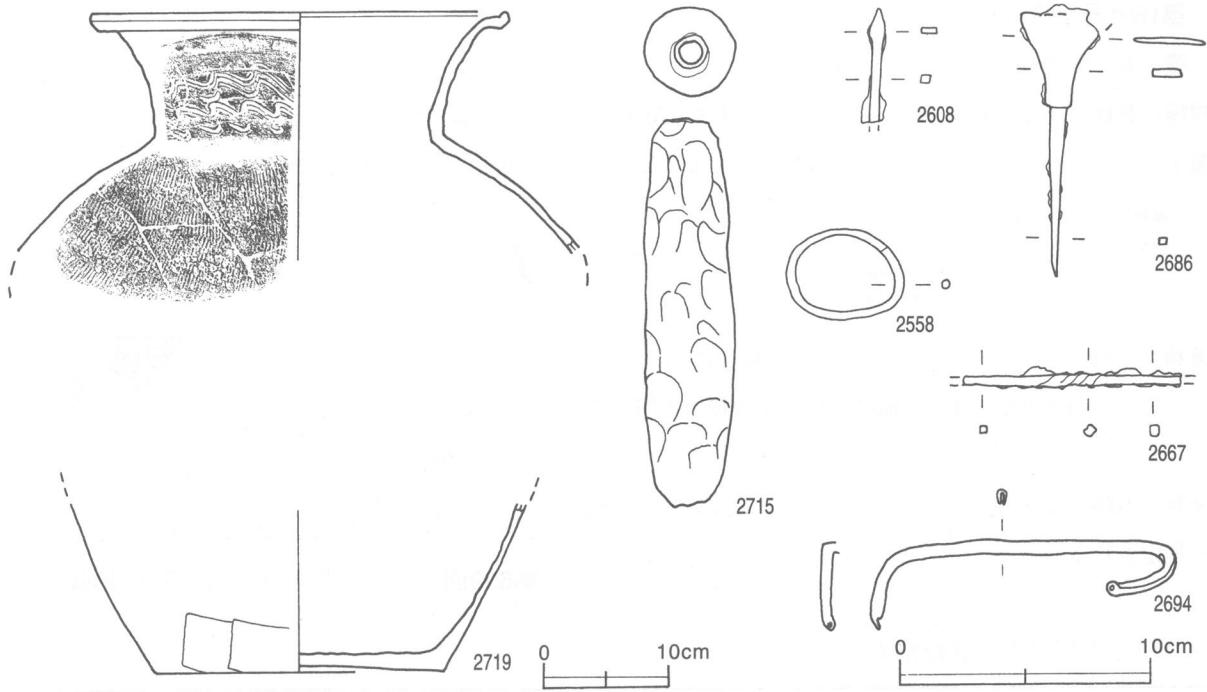
第699図 第1891号土坑・出土遺物実測図

第1891号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第699図 2704	印刻花文椀 緑釉陶器	B (2.6)	口縁部の破片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ロクロナデ。内面に沈線による花文を施す。	緻密，胎土 灰黄色 灰オリーブ釉，普通	5% PL270



第700図 その他の土坑出土遺物実測図 (1)



第701図 その他の土坑出土遺物実測図 (2)

第741・787・908・976・1112・1923・1953号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第700図 2540	碗 灰釉陶器	A [15.0] B (1.9)	口縁部の破片。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面ロクロナデ。釉は刷毛がけ。	緻密、胎土 灰白色 灰オリーブ釉 良好	5% SK741
2545	坏 土師器	A [14.0] B (3.8) C 7.0	口縁部・体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部内・外面横ナデ。体部下端、底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母・黒色粒子 赤色粒子 橙色、普通	70% SK787
2546	坏 土師器	A [13.4] B 3.8 C 6.4	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部内・外面横ナデ。体部下端、底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙色 普通	50% SK787
2584	碗 土師器	A [15.0] B (3.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。口縁部、体部内面横位のヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	5% SK908 体部外面墨書「□」
2605	坏 土師器	A [14.2] B 3.7 C 7.2	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。体部下端、底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 にぶい褐色 普通	5% SK976 体部外面墨書「□」
2618	坏 土師器	A [13.6] B 3.9 C [6.6]	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。体部下端、底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	20% SK1112
2619	高台付皿 土師器	A 13.4 B 2.8 D [7.2] E 1.0	底部から口縁部の破片。体部はわずかに内彎して外方に開く。高台はわずかに外方にふんばる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。内面黒色処理。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	55% SK1112
2710	碗 土師器	A [14.4] B (3.8)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。口縁部、体部内面横位のヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	20% SK1923
2711	高台付碗 土師器	A [14.8] B 6.0 D [8.4] E (1.0)	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。高台はわずかに外方にふんばる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。体部下端手持ちヘラ削り後、高台貼り付け。内面黒色処理。	砂粒・雲母 橙色 普通	30% SK1923
2712	高台付皿 土師器	A [12.6] B 2.6 D [6.6] E 1.1	底部から口縁部の破片。体部はわずかに内彎して外方に開く。高台はわずかに外方にふんばる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% SK1923



遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第701図 2719	甕 須恵器	A 33.0 B [32.3] C 18.0	底部から体部, 体部から口縁部の破片。 体部は内彎して立ち上がり, 頸部で屈曲する。口縁部は外反して開き, 端部は上下に突出している。	口縁部, 頸部横ナデ。体部外面縦位の平行叩き。体部下端横位のヘラ削り。頸部外面に歯状工具による波状文が2条巡る。	砂粒・長石・赤色粒子に多い褐色普通	30% SK1953

第752・807・1928号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
2541	管状土鍾	3.9	1.1	0.3	4.1	土製	側面指頭押圧後, ナデ。	SK752
2548	管状土鍾	8.6	3.7	1.1	98.3	土製	側面指頭押圧後, ナデ。	SK807
2715	管状土鍾	15.4	3.6	1.1	167.4	土製	側面指頭押圧後, ナデ。	SK1928

第993号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値							材質	特徴	備考
		全長(cm)	鎌身長(cm)	鎌身幅(cm)	頸長(cm)	頸幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
2608	鎌	(4.5)	1.4	0.7	(3.1)	0.4	0.3	(3.3)	鉄	鎌身部は小形の長三角形を呈す。	

第1759号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値					材質	特徴	備考
		全長(cm)	鎌身長(cm)	茎長(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
2686	鎌	10.7	3.9	6.8	0.8	(12.2)	鉄	鎌身部は扇形を呈す。鎌身部一部欠損。	P L 255

第845・1649・1853号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
2558	不明	6.5	5.1	1.1	41.1	銅	扁平なリング状を呈し, 断面は円形。	P L 258 SK845
2667	不明	(8.7)	0.4	0.4	(6.2)	鉄	中央部で捻られている。両端の断面は方形。両端部欠損。	P L 258SK1649
2694	不明	12.2	0.5	0.3	11.4	銅	コの字状を呈していたと思われ, 両端に小孔を有す。断面はU字状を呈す。	P L 258SK1853

表11 土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ (cm)					
735	E 6 h1	N-74°-W	長方形	2.63×0.83	51	直立	凹凸	自然	土師器, 須恵器	本跡→SD26
736	F 5 d0	N-6°-E	楕円形	0.86×0.68	10	緩斜	皿状	不明	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 緑釉陶器	
737	E 6 i2	N-11°-E	長方形	1.48×0.77	38	直立	平坦	自然	土師器, 須恵器, 陶器	
738	E 5 f8	N-0°	円形	1.30×1.24	48	緩斜	皿状	不明	土師器, 須恵器	SI236→本跡
740A	F 5 d0	N-87°-E	不整楕円形	2.00×1.50	35	外傾	凹凸	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 緑釉陶器	SB85→本跡
740B	F 5 d0	N-50°-W	不整形	1.62×1.39	40	外傾	皿状	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 緑釉陶器, 青磁	SB85→本跡
741	F 6 d1	N-89°-W	不整楕円形	1.40×0.74	23	-	-	-	灰釉陶器	
745	E 6 c1	N-46°-W	[楕円形]	0.98×0.70	64	外傾	平坦	自然	土師器, 須恵器	本跡→SK746
746	E 6 c1	N-45°-E	円形	0.81×0.80	37	緩斜	皿状	自然		SK745→本跡
747	E 6 d2	N-80°-E	不定形	0.64×0.45	24	直立	皿状	自然	土師器, 須恵器	
748	E 6 d2	N-6°-W	不定形	0.60×0.41	27	外傾	皿状	自然		
749	E 6 d1	N-10°-E	方形	1.40×1.30	74	外傾	平坦	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 瓦, 鉄滓	SI255→本跡→SK750
750	E 6 d1	N-7°-E	方形	1.20×1.10	32	外傾	凹凸	人為	土師器, 須恵器, 陶磁器	SI255, SD26, SK749→本跡
751	E 5 b7	N-89°-W	方形	1.00×0.94	60	外傾	平坦	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	
752	E 5 c7	N-14°-E	方形	1.03×1.00	44	外傾	平坦	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 管状土鍾	SI252→本跡
753	E 5 c8	N-86°-W	長方形	1.85×1.60	62	直立	平坦	人為	土師器, 須恵器, 刀子, 不明鉄, 縄文土器	
754	E 5 c6	N-0°	長方形	2.30×(0.86)	40	外傾	ほぼ平坦	人為	土師器, 須恵器, 陶器	
757	E 5 c4	N-5°-E	長方形	1.33×1.12	45	直立	平坦	自然	土師器, 須恵器	SI243→本跡
758	E 5 d6	N-82°-W	方形	1.17×1.10	54	直立	平坦	自然	土師器, 須恵器	本跡→SK759
759	E 5 d6	N-23°-E	楕円形	(0.98)×1.00	16	緩斜	皿状	自然	土師器, 須恵器	SK758→本跡
760	E 5 d6	N-30°-W	楕円形	1.75×1.40	39	緩斜	皿状	自然	土師器, 須恵器	SK761→本跡
761	E 5 d6	N-0°	楕円形	1.57×1.22	32	緩斜	皿状	自然	土師器, 須恵器	本跡→SK760
762	E 5 d6	N-5°-E	楕円形	1.44×1.24	35	緩斜	凸凹	自然	土師器, 須恵器	
763	E 5 d6	N-4°-E	長方形	1.32×1.17	55	外傾	平坦	自然	土師器, 須恵器	
764	E 5 d7	N-8°-E	[楕円形]	0.90×[0.55]	20	緩斜	皿状	人為		SI252→本跡
765	E 5 e7	N-0°	円形	0.52×0.52	32	外傾	皿状	自然		
769	E 5 d5	N-5°-W	楕円形	0.55×0.47	26	緩斜	皿状	自然	土師器, 須恵器	
773	E 5 b9	N-0°	円形	3.20×3.20	132	段状	傾斜	人為	土師器, 須恵器, 鉄鏃, 陶器, 縄文土器	
778	E 6 b3	N-70°-W	楕円形	0.88×0.71	77	直立	凹凸	人為		
782	E 5 b0	N-90°-E	円形	0.94×0.84	29	直立	平坦	自然	土師器, 須恵器	
783	E 5 c0	N-66°-E	楕円形	1.12×0.81	21	直立	平坦	自然	土師器, 須恵器	
784	E 5 d0	N-75°-W	楕円形	1.02×0.84	34	外傾	平坦	自然		
785	G 4 c0	N-18°-E	方形	1.12×1.05	33	直立	皿状	自然		SB98→本跡

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (m)		壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)					
786	G 5 c9	N-80°-W	方形	1.12×1.03	40	直立	平坦	自然		SB98→本跡
787	E 5 c0	N-0°	隅丸長方形	1.34×0.64	54	外傾	皿状	自然	土師器	
788	G 6 c1	N-77°-W	長方形	3.00×0.74	36	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器, 縄文土器, 陶器	SK791→本跡
789	G 5 c0	N-38°-E	円形	1.04×1.00	46	外傾	平坦	自然	土師器	
790	G 5 d0	N-81°-W	長方形	1.47×0.62	49	直立	平坦	人為		
791	G 6 c1	N-77°-W	長方形	1.58×(0.44)	22	直立	平坦	人為		本跡→SK788 SB98→本跡
792	G 5 d9	N-0°	円形	0.40×0.40	38	外傾	平坦	自然		
793	G 5 d8	N-15°-E	方形	0.74×0.74	12	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器	SB98→本跡
794	G 4 c0	N-17°-E	長方形	1.20×0.94	17	緩斜	傾斜	人為		
795	D 5 j0	N-0°	円形	1.29×1.20	38	緩斜	皿状	人為	土師器, 須惠器	
798	D 5 j6	N-65°-E	楕円形	1.00×0.70	18	緩斜	皿状	人為	土師器, 須惠器	
799	D 5 i6	N-90°-E	円形	0.70×0.63	38	外傾	凸凹	人為		
800	D 5 i8	N-0°	円形	0.89×0.76	57	外傾	皿状	人為	土師器	
801	F 6 b8	N-90°-E	円形	0.68×0.66	52	外傾	皿状	人為	土師器, 須惠器, 磁器	
802	E 6 b7	N-0°	円形	0.52×0.50	34	直立	皿状	自然		
803	F 6 b0	N-90°-E	円形	1.16×1.09	30	外傾	平坦	人為	陶器, 瓦	SI268A→本跡
807	F 6 h5	N-15°-E	長方形	1.26×1.02	50	外傾	平坦	自然	管状土錘	SI278AB, SK814・812→本跡
808	F 6 f7	N-27°-E	楕円形	1.65×0.98	52	外傾	凹凸	自然	土師器, 須惠器, 緑釉陶器, 砥石	SI270→本跡
810	F 7 c2	N-90°-E	円形	0.54×0.50	32	外傾	凹凸	自然		
811	F 6 i9	N-90°-E	方形	1.18×1.11	52	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 磁器, 紡錘車	SI277→本跡
812	F 6 h5	N-15°-E	円形	0.86×(0.55)	61	外傾	皿状	自然	土師器, 緑釉陶器	SI278, SK814→本跡→SK807
814	F 6 h5	N-15°-E	不定形	(0.50)×(0.38)	12	緩斜	皿状	不明	土師器, 須惠器	SI278A・B→本跡→SK807・812
816	G 7 i6	N-75°-W	方形	0.94×0.88	20	外傾	凹凸	人為		SI327→本跡
817	F 7 e3	N-10°-W	円形	0.71×0.65	50	外傾	凹凸	自然	土師器, 須惠器	
818	F 6 e9	N-90°-E	楕円形	1.11×0.70	30	外傾	凹凸	自然		
819	E 5 c2	N-10°-E	長方形	1.33×0.44	26	直立	平坦	人為		
820	F 6 e0	N-90°-E	円形	0.60×0.56	30	外傾	凹凸	自然		
821	F 6 e0	N-0°	楕円形	0.60×0.52	38	外傾	凹凸	自然		
822	F 6 f0	N-0°	円形	0.58×0.56	40	外傾	皿状	自然		
823	F 6 f9	N-0°	円形	0.45×0.42	32	外傾	皿状	自然		
824	F 6 f0	N-58°-E	楕円形	0.79×0.49	42	外傾	皿状	人為		
825	F 6 f0	N-59°-W	楕円形	0.64×0.54	49	直立	皿状	人為		
826	F 6 f9	N-58°-W	不定形	0.37×0.29	26	外傾	皿状	人為		
827	F 6 f9	N-69°-W	不定形	0.66×0.48	21	外傾	凹凸	人為	不明鉄	
828	F 6 e9	N-62°-E	楕円形	0.70×0.40	23	外傾	皿状	人為	土師器	
829	F 5 i0	N-20°-E	方形	0.95×0.94	55	直立	平坦	自然		
830	F 5 j0	N-20°-W	長方形	0.73×0.65	51	直立	平坦	自然	磁器	
831	G 5 a9	N-72°-W	方形	0.84×0.83	76	直立	平坦	自然	土師器	
832	G 5 b0	N-15°-E	方形	1.04×0.94	53	直立	平坦	自然		
833	G 6 b2	N-0°	円形	1.14×1.07	52	緩斜	平坦	自然	土師器, 須惠器, 磁器	SI282→本跡
834	F 5 j8	N-10°-E	方形	1.24×1.14	62	直立	平坦	自然		SI282→本跡
835	F 7 i5	N-88°-W	隅丸長方形	[1.19×0.95]	94	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器, 陶器, 磁器	SK836→本跡
836	F 7 i5	N-2°-E	隅丸長方形	[1.32×0.75]	95	直立	平坦	人為		本跡→SK835
838	F 7 h1	N-0°	円形	0.87×0.85	60	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 砥石, 鉄滓, 陶器, 縄文土器	
839	F 7 h1	N-0°	円形	0.65×0.65	74	直立	皿状	人為	土師器, 須惠器, 瓦, 鉄滓	
840	F 7 b6	N-14°-W	隅丸長方形	1.63×1.25	45	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器	
841	F 7 d6	N-10°-E	不定形	0.50×0.35	40	直立	平坦	人為		
842	F 7 d6	N-0°	円形	0.82×0.75	28	外傾	皿状	自然		
843	F 7 b7	N-89°-E	隅丸長方形	0.95×0.81	44	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器, 磁器, 雲母片岩	
844	F 7 c7	N-0°	円形	0.75×0.70	33	直立	平坦	人為		
845	F 7 d6	N-0°	隅丸長方形	0.95×0.62	23	直立	平坦	人為	土師器, 磁器, 銅製品	
846	F 7 d7	N-90°-E	隅丸長方形	1.23×1.00	48	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器, 釘, 陶器, 黒曜石	
847	F 7 b5	N-17°-W	長方形	1.11×0.83	41	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器, 陶器	
848	F 7 b5	N-11°-W	長方形	1.05×0.90	19	直立	平坦	人為		
849	F 7 b5	N-1°-W	長方形	0.95×0.70	26	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器	
851	F 7 b5	N-7°-W	長方形	1.11×0.76	26	直立	平坦	人為		
854	F 7 j8	N-87°-E	楕円形	1.75×1.59	67	直立	平坦	人為		SI301→本跡
855	F 7 j8	N-10°-E	不定形	1.00×(0.80)	31	直立	平坦	人為		本跡→SK854・856
856	F 7 j8	N-14°-W	不定形	1.45×(0.77)	56	直立	平坦	人為		SK855→本跡→SK857
857	F 7 j8	N-0°	円形	1.95×1.94	92	直立	平坦	人為		SK856→本跡
858	F 7 f0	N-90°-E	長方形	1.08×0.86	48	直立	平坦	自然		SI298→本跡
859	F 7 f9	N-9°-W	方形	0.95×0.95	38	直立	平坦	自然		
860	F 7 f9	N-4°-W	方形	0.96×0.88	33	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 陶器	
861	F 7 e6	N-8°-W	長方形	0.94×0.68	35	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 黒曜石	
862	F 7 c7	N-0°	長方形	1.45×1.06	78	直立	平坦	自然		SK863→本跡
863	F 7 d7	N-4°-W	長方形	1.45×0.83	44	直立	平坦	自然		本跡→SK862
864	F 7 e7	N-0°	円形	0.99×0.96	64	直立	平坦	自然		SK872→本跡
865	F 7 d7	N-84°-E	方形	1.35×1.25	47	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 陶器, 磁器, 黒曜石	
866	F 7 d8	N-2°-W	方形	1.49×1.40	63	直立	平坦	自然		
867	F 7 c6	N-6°-W	長方形	1.23×0.90	30	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器	
868	F 7 e7	N-20°-W	楕円形	1.39×0.78	60	直立	平坦	自然		
869	F 7 d8	N-0°	円形	0.83×0.79	49	直立	平坦	自然		
871	F 7 d7	N-10°-W	長方形	0.92×0.73	48	直立	平坦	自然		
872	F 7 e7	N-3°-W	長方形	1.61×0.92	39	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 陶器	本跡→SK864
873	F 7 f7	N-85°-E	方形	1.18×1.09	75	直立	平坦	自然	土師器, 磁器, 古銭, 貝	SK874→本跡
874	F 7 f7	N-83°-E	[長方形]	1.04×[0.86]	62	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 瓦	本跡→SK873・875
875	F 7 f7	N-4°-E	[不定形]	1.17×0.91	35	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器	SK874→本跡

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (m)		壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ (cm)					
876	F 7 e6	N-64°-E	橢円形	0.49×0.36	64	直立	平坦	自然	土師器	
877	F 7 f9	N-7°-W	橢円形	0.49×0.33	34	外傾	皿状	人為		
878	F 7 f0	N-0°	長方形	1.22×0.94	56	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 黒曜石	
879	F 7 f9	N-85°-E	橢円形	0.52×0.38	25	外傾	皿状	自然		
880	E 5 c5	N-60°-W	[橢円形]	[0.91]×0.77	41	緩斜	平坦	自然		
882	F 5 g8	N-80°-W	不定形	1.04×0.38	65	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器	
883	F 5 h9	N-28°-E	不定形	1.53×0.78	89	外傾	平坦	人為	須惠器	
889	F 5 g5	N-0°	円形	0.53×0.48	48	外傾	皿状	自然	土師器	
890	F 5 g9	N-15°-W	不整楕円形	0.70×0.52	38	外傾	皿状	自然		
891	F 5 h0	N-0°	円形	0.23×0.20	45	外傾	皿状	人為		
892	F 5 h9	N-0°	円形	0.43×0.35	15	外傾	皿状	自然		
893	F 5 i9	N-68°-W	楕円形	0.40×0.38	28	外傾	皿状	自然		
894	F 5 i0	N-85°-W	楕円形	0.54×0.37	39	外傾	皿状	自然		
895	F 5 i9	N-85°-W	楕円形	0.50×0.42	21	外傾	皿状	自然		
896	F 6 f1	N-65°-W	不定形	(0.97)×0.86	55	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器	本跡→SI896
898	F 5 e0	N-3°-W	楕円形	2.08×1.58	53	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 灰釉陶器, 緑釉陶器, 雲母片岩, 釘, 鉄滓	SI259→本跡
899	G 5 c7	N-0°	円形	0.47×0.47	56	直立	皿状	人為		
901	F 5 i9	N-83°-W	楕円形	0.46×0.40	64	外傾	皿状	人為		
902	F 5 i8	N-0°	円形	0.90×0.90	40	緩斜	皿状	自然		
903	G 5 a0	N-1°-W	楕円形	0.55×0.45	61	直立	皿状	自然		
904	G 5 b8	N-17°-E	楕円形	0.53×0.45	55	直立	平坦	自然		
905	F 6 d3	N-0°	楕円形	0.42×0.38	40	直立	皿状	自然		
907	F 5 e0	N-74°-E	[楕円形]	[0.7]×0.7	12	外傾	平坦	自然		本跡→SB85
908	F 5 e0	N-47°-E	[楕円形]	0.9×0.75	17	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器	
909	F 6 e1	N-0°	円形	0.82×0.70	21	外傾	皿状	自然		
910	F 6 e1	N-0°	円形	0.75×0.70	41	外傾	皿状	自然	須惠器	
911	F 6 f1	N-0°	円形	0.79×0.75	67	直立	皿状	人為		
912	F 6 e3	N-0°	円形	1.17×1.05	36	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器	
913	F 6 d4	N-0°	円形	0.55×0.54	61	直立	皿状	人為	土師器, 須惠器	
914	F 6 c5	N-0°	円形	0.70×0.60	43	直立	平坦	自然		
915	F 6 e1	N-32°-E	隅丸長方形	1.81×0.95	30	緩斜	平坦	自然		
917	F 6 i2	N-0°	円形	1.32×1.23	17	緩斜	平坦	自然	土師器, 須惠器	
918	F 6 i3	N-0°	円形	1.22×1.11	33	緩斜	平坦	自然	土師器, 須惠器	
919	F 5 h0	N-78°-W	長方形	1.15×0.87	35	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器	
920	F 7 i1	N-80°-W	長方形	0.99×0.70	45	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 縄文土器	
921	F 7 i1	N-6°-E	長方形	1.11×0.96	35	直立	平坦	自然		
922	F 7 i1	N-90°-E	長方形	1.02×0.85	47	直立	平坦	自然		
928	G 6 c1	N-27°-E	楕円形	1.53×0.90	48	外傾	平坦	人為		
930	C 5 i8	N-0°	円形	0.80×0.78	50	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器	
931	C 5 i7	N-21°-E	楕円形	1.20×0.70	75	直立	皿状	人為	土師器, 須惠器	
932	G 5 a6	N-73°-W	長方形	1.19×0.81	71	直立	平坦	人為		
933	G 5 b8	N-72°-W	長方形	0.88×0.67	56	直立	平坦	人為		
934	G 5 b8	N-19°-E	方形	1.25×1.16	74	直立	平坦	人為		
935	G 5 b8	N-0°	円形	0.33×0.30	65	直立	皿状	人為		
936	G 5 b6	N-75°-W	長方形	1.04×0.66	72	直立	平坦	人為		
938	G 5 a7	N-85°-W	楕円形	1.01×0.87	31	外傾	平坦	人為		
940	E 5 b8	N-80°-W	楕円形	1.89×1.35	49	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器	
944	F 5 i7	N-0°	円形	1.95×1.86	42	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器, 灰釉陶器, 緑釉陶器	SI262→本跡
945	F 5 h7	N-80°-E	楕円形	1.05×0.82	62	直立	平坦	自然		SI262→本跡
946	F 6 j8	N-90°-E	[長方形]	2.71×2.40	57	緩斜	平坦	自然	土師器, 須惠器, 不明鉄	本跡→SI279
949	F 6 h7	N-85°-E	長方形	5.15×0.95	48	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 瓦, 陶器, 雲母片岩	
951	G 5 j6	N-82°-E	不定形	1.17×1.00	29	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器, 陶器	
952	F 5 c6	N-0°	楕円形	0.98×0.83	22	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器	
953	F 5 c5	N-80°-E	不定形	1.94×0.56	42	直立	凹凸	自然	土師器	
956	F 5 c5	N-15°-E	長方形	1.41×1.01	38	直立	平坦	自然		
957	E 5 j0	N-0°	円形	2.25×1.96	70	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器	SI449→本跡
958	E 5 j6	N-0°	円形	1.65×1.53	47	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器	
959	F 5 j5	N-79°-W	方形	1.11×1.01	70	直立	平坦	自然		
960	F 5 j6	N-18°-E	長方形	1.01×0.70	97	直立	平坦	自然	土師器	
961	G 5 a5	N-5°-E	隅丸方形	0.70×0.60	29	直立	平坦	自然		
962	G 5 a5	N-8°-E	長方形	0.88×0.69	40	直立	平坦	自然		
963	G 5 a5	N-69°-W	不定形	1.14×0.72	34	直立	平坦	自然		
965	G 5 a5	N-17°-E	長方形	1.20×0.95	40	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器	
966	G 5 a5	N-10°-E	長方形	0.88×0.69	32	直立	平坦	自然	須惠器	SK986→本跡
967	G 5 b4	N-21°-E	方形	1.04×0.95	54	直立	平坦	自然		SI387→本跡
969	F 5 i6	N-12°-W	楕円形	1.05×0.85	41	外傾	皿状	自然	土師器	
971	G 4 j1	N-70°-W	方形	1.10×1.07	67	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器	SI440→本跡
972	G 5 a1	N-7°-E	長方形	1.40×0.99	54	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 不明鉄	SI439・450→本跡
975	F 4 j2	N-73°-W	長方形	1.03×0.68	75	直立	平坦	不明	土師器, 須惠器	SI450→本跡
976	G 5 a2	N-11°-E	長方形	1.09×0.94	46	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 磁器, 鉄製品	
977	G 5 a1	N-82°-W	方形	1.09×0.92	41	直立	平坦	自然	土師器	本跡→SK978
978	G 5 a0	N-79°-W	長方形	1.18×1.01	57	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器	SK977→本跡
979	G 5 a2	N-12°-E	長方形	1.10×0.96	53	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 鉄製品	SI439・450→本跡
980	F 5 e4	N-0°	方形	1.00×0.92	48	直立	平坦	自然		SI447→本跡
981	F 5 f4	N-0°	円形	1.36×1.30	22	外傾	皿状	自然		SI447→本跡
982	G 5 b2	N-14°-E	長方形	1.08×0.85	47	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器	SK984→本跡

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (m)		壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ (cm)					
983	G 5 b2	N-72°-W	長方形	2.03×0.95	41	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器	SI436→本跡
984	G 5 c2	N-17°-E	方形	1.07×1.02	43	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 土製品, 陶器	本跡→SK982
986	G 5 b5	N-71°-W	長方形	0.89×0.63	44	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器	本跡→SK966
987	G 5 a4	N-76°-W	隅丸長方形	1.25×0.95	88	直立	平坦	自然		
988	F 4 j2	N-10°-W	長方形	1.21×0.95	56	直立	平坦	人為	須惠器, 雲母片岩, 不明鉄	本跡→SK975
993	E 5 i3	N-0°	円形	0.92×0.91	27	緩斜	平坦	自然	土師器, 須惠器, 鉄鏃	
994	E 5 i3	N-0°	円形	0.81×0.79	23	直立	平坦	自然	土師器	
995	D 5 j4	N-0°	円形	0.83×0.72	21	外傾	皿状	自然		
996	D 5 a4	N-0°	円形	0.85×0.75	19	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器	
997	E 5 i3	N-0°	円形	1.03×0.95	61	直立	皿状	自然	土師器, 須惠器	
998	E 4 h2	N-73°-W	長方形	1.20×0.94	65	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 陶器	
999	E 5 h3	N-0°	円形	1.40×1.24	28	緩斜	平坦	自然	土師器, 須惠器, 縄文土器	
1000	E 5 h4	N-0°	円形	1.06×0.99	56	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器	
1001	F 4 d0	N-65°-W	不定形	0.92×0.76	44	直立	皿状	人為	土師器, 須惠器, 縄文土器	SI445→本跡
1002	F 5 i4	N-73°-W	方形	0.80×0.73	78	外傾	傾斜	人為		SI389→本跡
1003	D 5 a4	N-61°-E	楕円形	0.95×0.74	59	直立	平坦	自然		
1004	F 5 c8	N-70°-W	不定形	1.42×1.13	40	外傾	凹凸	人為		
1005	F 5 d7	N-0°	円形	0.51×0.46	38	直立	皿状	自然		
1006	F 5 d7	N-36°-W	楕円形	0.85×0.65	38	直立	平坦	人為		
1007	F 5 e7	N-0°	円形	0.44×0.42	53	直立	平坦	人為		
1008	F 5 e7	N-0°	円形	0.41×0.40	31	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 灰釉陶器	
1009	F 5 e5	N-74°-W	方形	1.02×0.95	29	直立	平坦	人為		SK1011→本跡
1010	F 5 e5	N-75°-W	方形	1.17×0.85	32	直立	平坦	人為		SK1011→本跡
1011	F 5 e5	N-76°-W	[方形]	1.01×(1.00)	38	直立	平坦	人為		本跡→SK1009・1010
1012	F 5 a5	N-90°-E	方形	0.83×0.83	43	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器	
1013	F 5 a5	N-10°-E	長方形	1.28×0.85	29	直立	平坦	自然		
1014	F 5 b5	N-90°-E	不定形	1.28×0.65	38	直立	平坦	自然		本跡→SK1016
1016	F 5 b5	N-9°-E	隅丸長方形	1.26×1.10	60	外傾	皿状	人為		SK1014・1017→本跡
1017	F 5 b5	N-69°-W	隅丸長方形	1.04×0.85	75	直立	凹凸	人為		本跡→SK1016・1018
1018	F 5 b4	N-58°-W	長方形	0.95×0.65	22	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器	SK1017・1019→本跡
1019	F 5 b4	N-36°-W	隅丸長方形	1.07×0.60	30	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器	SK1020→本跡→SK1018
1020	F 5 c4	N-45°-E	[長方形]	1.64×[0.94]	16	外傾	平坦	自然		本跡→SK1019
1021	F 5 d8	N-84°-W	不定形	1.29×1.15	60	外傾	平坦	人為		
1022	F 5 d4	N-5°-E	方形	1.05×1.02	44	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器	SI448→本跡
1023	F 5 d4	N-0°	方形	1.05×1.02	41	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 泥面子	SI448→本跡
1025	F 5 d1	N-0°	楕円形	0.46×0.36	74	外傾	皿状	自然		
1026	F 5 d1	N-90°-E	不整楕円形	0.57×0.38	46	外傾	凹凸	人為		
1027	F 5 c1	N-42°-W	楕円形	0.68×0.44	60	外傾	皿状	自然		
1028	F 5 c1	N-5°-W	不整長方形	1.40×1.03	32	直立	凹凸	人為		
1029	F 5 a2	N-60°-E	楕円形	1.18×0.82	19	外傾	段状	自然		
1030	F 5 e2	N-70°-W	不整楕円形	0.98×0.72	25	外傾	段状	人為		
1031	F 5 e2	N-0°	不整円形	0.60×0.60	35	外傾	凹凸	自然		
1032	F 5 e2	N-20°-W	不定形	1.08×0.74	33	外傾	凹凸	自然		
1033	F 5 f2	N-80°-W	不定形	2.08×0.83	28	緩斜	凹凸	人為		
1034	F 5 f2	N-0°	不定形	0.78×0.44	60	外傾	皿状	自然		
1036	F 4 h5	N-38°-E	方形	1.08×1.07	36	直立	平坦	自然		
1037	F 4 g4	N-55°-W	不整長方形	1.68×1.00	26	直立	平坦	自然		
1038	F 4 g3	N-45°-E	不整長方形	1.65×1.18	47	直立	段状	自然		
1039	F 4 g2	N-57°-W	不整楕円形	1.63×1.04	50	外傾	凹凸	自然	土師器, 瓦, 陶器	
1040	E 6 e9	N-10°-E	方形	0.98×0.8	23	外傾	凹凸	自然		
1041	E 6 d9	N-9°-E	長方形	1.78×1.02	56	外傾	平坦	自然		
1042	E 6 b0	N-3°-E	不整長方形	2.06×1.58	27	緩斜	皿状	人為	土師器, 須惠器, 不明鉄	SD26→本跡→SK1043
1043	E 6 b0	N-10°-E	不整長方形	1.68×0.95	38	外傾	凹凸	人為	土師器, 須惠器, 灰釉陶器, 磁器	SD26, SK1042→本跡
1044	E 6 d3	N-23°-W	不定形	1.69×1.33	28	外傾	平坦	人為		本跡→SI434
1046	F 4 f1	N-15°-E	隅丸方形	0.7×0.65	26	外傾	平坦	人為		
1047	F 4 i9	N-45°-W	楕円形	0.95×0.65	20	緩斜	凹凸	自然		
1048	G 5 b4	N-67°-W	楕円形	0.8×0.65	48	直立	皿状	自然		
1049	G 5 a3	N-33°-E	楕円形	1.00×0.80	32	外傾	凹凸	自然		
1050	G 5 a4	N-20°-W	不整楕円形	1.50×1.32	52	外傾	凹凸	自然		
1051	E 6 i6	N-0°	長方形	0.70×0.37	39	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器, 陶器	
1052	E 6 i5	N-15°-E	隅丸長方形	0.57×0.46	51	外傾	皿状	人為		
1055	E 6 g4	N-10°-E	隅丸長方形	0.69×0.55	51	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 陶器, 磁器	
1056	E 6 f4	N-79°-W	隅丸長方形	0.66×0.39	44	外傾	皿状	人為	土師器, 須惠器	
1057	E 6 g3	N-3°-W	隅丸方形	0.57×0.52	60	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器, 灰釉陶器	
1058	E 6 h3	N-6°-E	隅丸長方形	1.25×0.47	26	緩斜	皿状	人為		
1059	E 6 i3	N-78°-W	[隅丸長方形]	1.07×[0.37]	32	外傾	凹凸	自然		
1060	F 6 g3	N-82°-W	隅丸長方形	0.88×0.60	63	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 陶器	
1061	E 6 b3	N-0°	不整方形	0.48×0.47	40	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器	
1063	F 5 i5	N-90°-E	不整楕円形	1.19×1.00	57	緩斜	平坦	自然		
1064	F 5 i5	N-85°-W	不整方形	1.10×1.02	86	直立	平坦	人為	須惠器	
1065	F 5 g4	N-25°-E	不整方形	1.26×1.24	54	直立	凹凸	人為	土師器, 須惠器	SK1079→本跡
1066	F 5 h3	N-14°-E	不整長方形	1.43×1.05	51	段状	凹凸	人為	土師器, 須惠器, 鉄鏃, 陶器	
1067	F 5 i3	N-72°-W	不整長方形	[1.47]×0.93	52	外傾	皿状	人為		
1068	F 5 i2	N-24°-E	不整長方形	1.06×0.90	61	直立	平坦	人為		
1069	F 5 h3	N-5°-E	不整方形	1.25×1.12	57	外傾	平坦	自然		
1070	F 5 g6	N-60°-W	楕円形	1.40×0.80	74	外傾	皿状	人為		

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (m)		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ (cm)					
1071	F 5 g6	N-62°-W	隅丸長方形	1.33×1.11	78	直立	平坦	人為		
1072	F 5 g6	N-21°-W	不整長方形	0.71×0.61	41	段状	皿状	人為		
1073	F 5 g7	N-45°-W	不整楕円形	1.40×0.58	59	段状	皿状	人為	土師器, 須惠器	
1074	F 5 g7	N-75°-W	不整楕円形	[0.67]×0.49	46	外傾	皿状	人為	土師器, 須惠器	
1075	F 5 g7	N-75°-W	不整楕円形	0.76×0.52	32	外傾	凹凸	人為		
1076	F 5 h6	N-5°-E	不整方形	0.85×0.89	66	外傾	凹凸	人為	土師器, 須惠器	
1077	F 5 h5	N-45°-E	不整楕円形	0.98×0.64	54	外傾	凹凸	人為		
1078	E 6 e5	N-82°-W	隅丸長方形	0.78×0.43	26	外傾	平坦	人為	須惠器, 瓦	
1079	F 5 g4	N-65°-W	隅丸長方形	1.03×0.91	77	外傾	皿状	人為		本跡→SK1065
1080	F 5 g3	N-15°-E	不整長方形	1.55×0.9	54	外傾	凹凸	人為		
1081	F 5 h3	N-16°-E	不整隅丸長方形	1.25×0.94	20	外傾	凹凸	人為		
1082	F 5 f2	N-26°-W	不定形	0.87×0.64	34	外傾	凹凸	人為		
1083	F 5 f3	N-0°	不定形	1.26×1.14	20	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器	
1084	F 5 e4	N-38°-E	楕円形	1.37×0.53	31	外傾	凹凸	人為		
1085	F 5 e3	N-95°-W	楕円形	1.19×1.09	58	段状	皿状	人為		
1086	F 5 e3	N-82°-W	隅丸方形	1.11×1.11	70	外傾	皿状	人為		
1087	F 5 c2	N-0°	不整円形	0.95×0.93	23	外傾	凹凸	人為		
1088	F 5 c2	N-52°-W	楕円形	1.12×1.09	18	緩斜	皿状	人為		
1089	E 5 j2	N-78°-W	不定楕円形	1.02×0.76	38	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器	
1090	E 5 j2	N-0°	不定形	1.10×0.93	33	緩斜	皿状	自然	土師器, 須惠器, 瓦	
1091	E 5 i1	N-35°-E	不定楕円形	0.99×0.72	17	緩斜	皿状	人為	土師器	
1092	E 6 b5	N-0°	円形	0.35×0.32	15	緩斜	凹凸	人為	須惠器	
1093	E 6 b6	N-0°	円形	0.52×0.50	28	緩斜	皿状	自然	土師器, 須惠器, 磨石	
1094	E 6 b6	N-0°	円形	0.45×0.45	45	段状	皿状	人為		
1095	E 6 c4	N-80°-E	楕円形	0.43×0.33	21	緩斜	凹凸	自然		
1096	E 6 c6	N-0°	楕円形	0.86×0.56	28	外傾	凹凸	人為		
1097	E 6 c5	N-56°-E	楕円形	0.59×0.40	36	外傾	凹凸	人為		
1098	E 6 c4	N-0°	円形	0.30×0.30	19	緩斜	凹凸	人為		
1099	E 6 b6	N-0°	楕円形	[0.96]×0.71	40	緩斜	凹凸	人為	土師器, 須惠器	SK1100→本跡
1100	E 6 b6	N-5°-E	楕円形	[0.83]×[0.7]	15	緩斜	凹凸	人為	土師器, 須惠器, 灰釉陶器	本跡→SK1109
1101	E 6 a6	N-17°-E	楕円形	[0.6]×0.55	29	緩斜	皿状	人為		
1102	E 6 b8	N-53°-E	円形	0.53×0.57	26	緩斜	皿状	自然		
1103	E 6 b8	N-0°	楕円形	0.35×0.28	22	緩斜	皿状	自然		
1105	E 7 b1	N-0°	円形	1.00×0.94	37	緩斜	段状	自然	土師器, 須惠器, 陶器	
1106	E 7 b2	N-90°-E	円形	0.44×0.42	48	外傾	皿状	自然		
1107	E 7 b2	N-90°-E	円形	0.64×0.60	42	外傾	皿状	人為		
1108	E 7 a3	N-0°	円形	1.00×0.96	10	緩斜	皿状	人為		
1109	E 7 a2	N-0°	楕円形	1.30×0.86	28	緩斜	皿状	人為		
1110	D 5 h2	N-66°-W	楕円形	1.66×1.42	32	緩斜	皿状	人為	土師器, 須惠器, 灰釉陶器, 釘	
1111	D 5 g1	N-0°	円形	1.37×1.33	24	緩斜	皿状	人為	土師器, 須惠器	
1112	D 5 g1	N-90°-E	円形	1.78×1.58	34	緩斜	皿状	人為	土師器, 須惠器	
1113	D 4 g0	N-0°	円形	1.80×1.68	38	緩斜	皿状	人為	土師器, 須惠器	
1115	D 5 e2	N-10°-E	方形	0.95×0.95	41	外傾	平坦	自然		
1116	D 5 e1	N-68°-W	楕円形	0.62×0.48	35	直立	凹凸	不明	土師器, 須惠器	
1117	C 5 i1	N-15°-W	楕円形	1.45×1.25	32	外傾	皿状	人為	土師器, 灰釉陶器	SK1197→本跡
1120	D 5 f5	N-4°-E	不定形	1.05×(0.55)	17	外傾	凹凸	人為	土師器, 須惠器	SK1165→本跡
1121	D 4 f3	N-82°-W	不整長方形	1.03×0.85	44	外傾	平坦	人為		
1122	D 4 f3	N-6°-E	不整隅丸方形	1.00×0.98	50	外傾	凹凸	自然		
1123	D 4 f3	N-60°-W	不整長方形	[0.93]×[0.78]	44	外傾	皿状	自然		
1124	D 4 e2	N-4°-E	隅丸方形	1.07×1.00	60	直立	平坦	自然		
1125	D 4 e2	N-6°-E	隅丸方形	0.88×0.87	56	直立	皿状	自然		
1126	D 5 h2	N-90°-E	円形	0.90×0.84	19	緩斜	皿状	人為	土師器, 須惠器	
1127	D 4 e1	N-7°-E	隅丸方形	1.01×0.96	71	外傾	平坦	人為		
1128	D 4 e1	N-0°	隅丸方形	0.88×0.87	62	外傾	平坦	人為		
1129	D 4 d1	N-80°-W	不定形	1.15×1.10	60	直立	平坦	自然		
1130	D 4 d1	N-2°-E	不整長方形	[1.22]×1.03	31	外傾	平坦	人為		
1131	D 4 d1	N-0°	隅丸方形	1.03×1.03	38	外傾	平坦	自然		
1132	D 4 b2	N-12°-E	隅丸方形	0.98×0.97	26	外傾	凹凸	自然		
1133	D 4 b2	N-2°-E	隅丸長方形	0.95×0.70	32	外傾	皿状	人為		
1136	D 4 a2	N-11°-E	隅丸長方形	0.87×0.67	15	緩斜	平坦	人為		
1137	D 4 a3	N-0°	不整円形	1.03×0.95	59	緩斜	凹凸	自然		
1138	C 4 i9	N-0°	円形	1.22×1.14	41	緩斜	皿状	人為	土師器, 須惠器	
1139	C 4 j8	N-0°	円形	1.23×1.16	36	外傾	皿状	人為	土師器, 須惠器	
1140	C 4 j9	N-0°	隅丸方形	1.16×1.15	46	外傾	平坦	人為		
1141	C 4 j7	N-0°	円形	1.07×1.00	22	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器	
1142	C 4 g8	N-7°-E	隅丸方形	0.37×0.34	25	緩斜	皿状	人為		SI475→本跡→SK1143
1143	C 4 g8	N-26°-E	不整楕円形	0.49×[0.40]	31	緩斜	皿状	人為		SI475, SK1142→本跡
1144	C 4 h7	N-55°-W	不整楕円形	1.45×1.05	26	外傾	皿状	人為		
1145	D 4 e6	N-10°-E	隅丸長方形	1.07×0.91	53	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器	
1146	D 4 a7	N-0°	円形	0.60×0.59	20	緩斜	皿状	自然		
1147	D 4 a7	N-64°-W	楕円形	0.57×0.48	23	緩斜	皿状	自然		
1149	C 4 f0	N-9°-E	隅丸方形	0.84×7.80	22	緩斜	平坦	人為	土師器, 須惠器	
1150	C 5 h3	N-2°-E	不整長方形	1.49×0.87	24	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器	
1152	D 5 f1	N-11°-E	隅丸方形	0.71×0.70	26	緩斜	凹凸	人為	土師器	
1153	D 4 f0	N-0°	不定形	0.74×0.33	10	緩斜	皿状	自然		
1154	D 1 f0	N-0°	楕円形	0.85×0.83	10	外傾	平坦	自然	土師器	

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (m)		壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考 新旧關係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)					
1155	C 4 j9	N-3°-E	隅丸長方形	1.50×0.97	42	外傾	平坦	人為		
1156	D 4 b7	N-13°-E	不定形	0.97×0.75	27	緩斜	皿状	人為		
1158	C 4 j6	N-0°	円形	0.98×0.82	22	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器, 灰釉陶器	
1159	E 5 b2	N-0°	隅丸方形	1.27×1.16	53	外傾	平坦	自然		
1160	C 4 g5	N-83°-W	方形	0.95×0.84	15	外傾	平坦	人為		SI469→本跡
1165	D 4 b5	N-78°-W	楕円形	0.80×0.44	36	外傾	平坦	自然		本跡→SK1120
1166	E 5 b3	N-3°-E	隅丸長方形	1.80×0.80	31	直立	凸凹	人為		
1167	D 5 b1	N-10°-W	長方形	1.30×0.60	23	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器	
1168	C 4 j0	N-0°	円形	0.87×0.83	25	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器, 灰釉陶器	
1170	D 4 f6	N-13°-E	不定形	1.58×0.88	40	外傾	平坦	人為		
1171	C 4 f5	N-78°-W	隅丸長方形	1.58×1.05	58	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器, 瓦, 刀子	SI469→本跡
1174	C 4 g3	N-7°-E	隅丸長方形	1.67×0.87	34	直立	平坦	自然	土師器	本跡→SK1175
1175	C 4 g3	N-78°-W	不定長方形	2.08×1.16	73	外傾	凸凹	人為	土師器, 須惠器, 不明鉄, 陶器	SK1174→本跡
1176	C 4 f3	N-85°-W	不整長方形	2.49×0.53	85	直立	凹凸	人為	土師器, 陶器, 磁器	
1177	C 4 g3	N-90°-E	[不整長方形]	[0.88]×0.70	21	外傾	皿状	人為	土師器, 須惠器, 陶器	本跡→SK1178・1179
1178	C 4 f3	N-5°-E	[不定形]	0.72×0.62	10	緩斜	凹凸	人為		SK1177→本跡→SK1179
1179	C 4 g3	N-90°-E	不整方形	1.31×1.28	72	外傾	皿状	人為		SK1177・1178→本跡
1180	C 4 f2	N-85°-W	不整長方形	2.03×0.42	92	直立	凹凸	人為		
1181	C 4 g2	N-0°	[楕円形]	0.79×[0.66]	25	緩斜	皿状	人為		本跡→SK1182
1182	C 4 g2	N-15°-E	不整長方形	1.53×1.18	67	外傾	平坦	人為	土師器, 陶磁器	SK1181→本跡
1183	C 4 f2	N-90°-E	楕円形	1.28×1.15	88	外傾	凹凸	人為	陶器	
1184	C 4 f2	N-75°-W	隅丸長方形	1.33×0.53	78	直立	凹凸	人為	陶器, 瓦	
1185	C 4 f2	N-75°-W	隅丸長方形	1.03×0.61	73	直立	平坦	人為	須惠器	
1186	C 4 g2	N-0°	楕円形	1.01×0.98	33	外傾	平坦	人為	刀子	
1187	C 4 f1	N-90°-E	不定形	3.07×0.44	84	外傾	凹凸	人為	土師器, 須惠器, 灰釉陶器, 瓦, 羽釜, 鉄製品	
1188	C 4 f1	N-90°-E	不整長方形	2.04×0.58	73	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器, 土製品	
1189	C 3 f0	N-0°	(不整円形)	1.43×[1.23]	71	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 瓦, 陶器	
1190	C 3 g0	N-0°	不整楕円形	[1.42]×1.18	82	外傾	凹凸	人為	土師器, 須惠器	
1191	C 4 f4	N-82°-W	不整長方形	1.55×0.63	97	直立	平坦	人為		
1192	C 4 f4	N-45°-W	円形	0.94×0.86	64	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器, 磁器	
1193	C 4 f4	N-45°-W	円形	0.68×0.62	20	緩斜	皿状	人為		
1194	C 4 c1	N-45°-W	楕円形	0.86×0.64	23	緩斜	平坦	人為		SB139→本跡
1196	C 3 j7	N-48°-E	楕円形	1.13×0.84	26	緩斜	皿状	自然	土師器, 須惠器	
1197	C 5 i1	N-23°-W	[不定形]	1.30×(0.65)	30	外傾	平坦	自然		本跡→SK1117
1198	D 4 c9	N-90°-E	楕円形	1.74×1.53	34	緩斜	凹凸	人為	土師器, 須惠器, 灰釉陶器, 刀子	
1199	D 5 e1	N-16°-E	楕円形	0.64×0.54	35	外傾	凹凸	不明		
1201	C 4 e4	N-46°-W	楕円形	1.37×0.87	43	緩斜	皿状	人為		
1202	B 2 j9	N-30°-E	不整円形	6.88×5.66	135	外傾	凹凸	人為	土師器, 須惠器, 土製支脚, 釘	SB142, SD43→本跡
1203	C 4 e2	N-0°	円形	1.09×1.07	18	緩斜	平坦	自然	土師器, 須惠器, 灰釉陶器	
1204	C 4 e2	N-0°	長方形	2.15×0.70	52	直立	平坦	人為	須惠器, 陶器	
1205	C 4 b3	N-77°-W	長方形	1.04×0.74	14	外傾	平坦	自然		
1206	B 4 j3	N-72°-W	楕円形	0.87×0.63	22	緩斜	皿状	自然		
1207	B 4 j2	N-50°-W	円形	0.72×0.66	22	緩斜	皿状	自然		
1208	B 4 j2	N-0°	円形	0.56×0.54	26	緩斜	皿状	自然		
1210	C 3 i1	N-10°-E	隅丸長方形	0.75×0.70	47	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器, 磁器	
1211	C 3 b1	N-15°-E	隅丸長方形	1.23×0.50	25	緩斜	皿状	自然	土師器, 須惠器, 磁器	
1213	B 3 i1	N-10°-E	隅丸長方形	1.16×1.06	29	外傾	皿状	自然		
1214	C 3 b1	N-10°-E	隅丸長方形	1.10×0.65	59	外傾	皿状	自然		
1218	B 6 i6	N-5°-W	隅丸長方形	0.90×0.65	25	外傾	凹凸	自然		
1219	C 6 a9	N-80°-E	隅丸長方形	0.94×0.91	34	外傾	凹凸	自然		
1220	B 6 h7	N-0°	楕円形	1.08×0.84	44	外傾	平坦	人為		本跡→SK1297
1224	B 6 j1	N-80°-W	隅丸長方形	1.63×0.95	10	緩斜	皿状	自然		
1225	G 6 j0	N-0°	円形	0.95×0.90	18	外傾	皿状	自然		
1227	B 6 h1	N-15°-E	隅丸長方形	0.72×0.55	40	外傾	皿状	自然		
1228	B 6 h1	N-45°-W	楕円形	0.77×0.64	39	外傾	凹凸	自然		
1229	B 6 h2	N-48°-E	楕円形	0.80×0.72	29	緩斜	凹凸	自然		
1230	B 1 h1	N-35°-W	隅丸長方形	0.80×0.42	34	直立	凸凹	自然		
1231	B 6 g1	N-35°-E	隅丸長方形	0.70×0.50	29	外傾	凹凸	自然		
1248	E 5 h7	N-89°-W	長方形	1.45×0.78	32	外傾	凹凸	自然	鉄製品	SI248→本跡
1249	B 4 g7	N-20°-W	楕円形	1.76×1.46	55	外傾	皿状	人為		
1251	B 4 b5	N-20°-E	隅丸方形	0.98×0.83	26	直立	皿状	人為		
1252	B 4 c5	N-10°-E	隅丸長方形	1.50×0.55	95	直立	平坦	人為		
1253	B 4 c5	N-10°-E	隅丸長方形	1.38×0.50	80	直立	平坦	人為		
1254	B 4 c5	N-0°	隅丸長方形	2.53×2.12	50	外傾	皿状	自然	土師器	
1255	B 4 d5	N-90°-E	隅丸長方形	1.62×0.80	50	直立	平坦	自然		
1256	B 4 f5	N-0°	楕円形	0.92×0.78	30	直立	皿状	自然	土師器, 須惠器	
1257	B 4 f5	N-0°	楕円形	0.82×0.78	38	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器	
1258	B 4 g5	N-0°	円形	0.80×0.80	58	外傾	皿状	人為		
1259	B 4 a4	N-80°-W	[不定形]	[1.03]×0.88	102	外傾	段状	自然	土師器, 須惠器, 瓦, 小刀	
1260	B 5 d9	N-90°-E	楕円形	1.17×0.87	34	外傾	皿状	人為		
1263	C 6 i7	N-90°-E	不定形	1.75×1.31	60	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器	
1264	C 6 i7	N-90°-E	隅丸長方形	1.56×1.18	70	直立	皿状	人為	土師器, 須惠器, 鉄鏃	
1265	C 6 i8	N-60°-W	隅丸長方形	1.42×1.10	36	直立	平坦	自然		
1266	C 6 i9	N-90°-E	不定形	1.83×0.80	97	外傾	凹凸	自然		
1267	C 6 i8	N-90°-E	長方形	1.02×0.80	46	直立	平坦	自然		
1268	C 6 h7	N-45°-W	楕円形	1.03×0.80	25	外傾	皿状	自然		



土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (m)		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)					
1269	C 6 g7	N-60°-W	楕円形	1.03×0.76	37	外傾	凹凸	自然		
1270	C 6 h7	N-0°	不定形	0.70×0.71	17	外傾	皿状	自然	須惠器	
1272	C 6 e7	N-70°-W	楕円形	1.28×1.14	70	外傾	凹凸	自然		
1273	C 6 e9	N-15°-E	長方形	0.96×0.78	38	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器	
1274	C 6 e9	N-30°-E	楕円形	1.08×0.86	21	直立	皿状	自然		
1275	C 6 e9	N-15°-E	長方形	0.82×0.80	33	外傾	皿状	自然		
1276	C 6 e7	N-0°	楕円形	0.78×0.78	36	直立	凹凸	自然		
1277	C 6 b7	N-0°	楕円形	0.98×0.95	26	外傾	皿状	自然		
1278	C 6 d7	N-0°	不整形	0.82×0.85	35	外傾	皿状	自然		
1279	C 6 c7	N-15°-E	楕円形	0.97×0.78	41	外傾	皿状	自然		
1280	C 6 c8	N-0°	円形	0.94×0.95	27	外傾	凹凸	自然	陶器	
1281	C 6 c9	N-80°-W	不整形長方形	1.02×0.88	39	外傾	平坦	自然		本跡→SK1282
1282	C 6 c9	N-0°	不整形	0.98×0.97	37	外傾	平坦	自然		SK1281→本跡
1283	C 6 c7	N-80°-W	不整形長方形	1.43×1.10	52	外傾	平坦	自然		
1284	C 6 c7	N-40°-E	不整形	1.18×1.07	62	外傾	皿状	自然		
1285	C 6 b8	N-20°-E	楕円形	1.50×0.43	41	直立	段状	自然	土師器	
1286	C 6 a8	N-20°-E	不整形	1.07×1.02	50	外傾	皿状	自然		
1287	B 6 j8	N-90°-E	不整形長方形	1.14×0.96	50	外傾	平坦	自然		
1288	C 6 a7	N-10°-W	隅丸長方形	0.98×0.58	50	外傾	段状	自然		
1289	F 6 i6	N-85°-W	長方形	1.70×1.04	92	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器, 瓦, 磁器	
1290	F 6 j6	N-0°	[不整形]	[0.75]×0.83	31	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器	
1291	B 6 j6	N-90°-E	隅丸長方形	1.28×0.95	48	外傾	凹凸	自然	土師器, 須惠器, 不銹鉄, 陶器	
1292	B 6 i8	N-0°	円形	0.85×0.81	15	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 灰釉陶器	
1293	B 6 h9	N-0°	円形	0.75×0.62	23	緩斜	皿状	人為		
1294	B 6 h8	N-40°-E	楕円形	0.95×0.80	32	外傾	皿状	自然		SI397→本跡
1295	B 6 h8	N-0°	不定形	1.05×0.84	53	外傾	皿状	人為	土師器, 須惠器, 灰釉陶器	SI397→本跡
1296	B 6 h7	N-0°	不整形	[0.80]×1.01	35	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 陶器	SI397→本跡
1297	B 6 h7	N-10°-E	長方形	3.46×0.57	75	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 磁器, 瓦	SI397, SK1220→本跡
1299	B 6 g8	N-60°-W	不整形長方形	1.85×[0.43]	66	外傾	皿状	人為		
1501	F 7 e9	N-75°-E	楕円形	0.54×0.37	44	直立	凹凸	人為		
1502	F 7 f9	N-0°	楕円形	0.52×0.38	25	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器	
1503	F 7 e8	N-0°	円形	0.43×0.43	36	直立	皿状	人為	須惠器	
1504	F 7 f0	N-84°-E	楕円形	0.54×0.44	26	外傾	皿状	人為	土師器	
1505	F 8 d1	N-38°-E	円形	9.40×8.80	48	緩斜	平坦	人為	土師器, 須惠器, 灰釉陶器, 陶器	
1506	F 8 e1	N-10°-W	隅丸長方形	16.0×15.6	77	緩斜	平坦	人為	土師器, 須惠器, 磁器, 鉄製品	
1507	F 7 c6	N-0°	長方形	1.06×0.77	34	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 陶器	
1508	F 7 e7	N-2°-W	長方形	1.86×1.27	72	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 陶器, 磁器, 炭化材	
1509	F 7 d7	N-0°	円形	0.40×0.40	40	外傾	皿状	人為		
1511	F 7 c0	N-0°	長方形	0.85×0.53	42	外傾	平坦	自然		
1512	F 7 c8	N-0°	長方形	1.29×1.17	45	外傾	平坦	自然		
1513	F 8 d1	N-5°-W	隅丸長方形	1.60×1.28	62	外傾	平坦	人為		SK1514→本跡
1514	F 8 e1	N-5°-W	隅丸長方形	1.44×1.00	58	外傾	平坦	人為		本跡→SK1513・1515
1515	F 8 e1	N-5°-W	隅丸長方形	1.60×1.50	90	緩斜	平坦	人為		SK1514・1516→本跡
1516	F 7 e0	N-0°	隅丸長方形	1.10×1.08	43	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 縄文土器	本跡→SK1515
1517	F 8 e1	N-80°-E	隅丸長方形	1.30×1.14	58	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器, 陶器, 磁器	
1518	F 8 g1	N-0°	円形	0.45×0.42	52	直立	平坦	自然		
1519	F 8 h1	N-0°	長方形	0.92×0.80	48	直立	平坦	自然		
1521	F 7 g0	N-90°-E	楕円形	0.45×0.40	54	外傾	皿状	自然		
1522	F 7 i0	N-82°-E	方形	0.68×0.62	15	外傾	平坦	自然		
1524	E 7 b9	N-0°	楕円形	0.63×0.50	36	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器	
1527	F 7 h7	N-20°-W	長方形	1.12×0.91	28	緩斜	平坦	人為		
1528	F 7 i8	N-8°-W	長方形	0.90×0.55	42	外傾	凹凸	人為		SK1530→本跡
1529	F 7 i7	N-90°-E	長方形	2.32×1.30	72	緩斜	段状	人為	土師器, 須惠器, 磁器, 黒曜石	
1530	F 7 i8	N-8°-W	[長方形]	(0.66)×0.56	23	外傾	平坦	人為		本跡→SK1528
1531	F 7 i6	N-0°	不整形	0.84×0.84	18	直立	凹凸	自然		SK1532→本跡
1532	F 7 i6	N-0°	方形	(0.94)×0.65	11	直立	平坦	自然		本跡→SK1531
1548	F 7 d0	N-7°-W	長方形	0.84×0.68	18	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 釘, 陶器	本跡→SK1549
1549	F 7 e0	N-0°	長方形	0.96×0.56	34	外傾	平坦	人為		SK1548・1550→本跡
1550	F 7 e0	N-82°-E	[長方形]	1.10×(0.52)	16	外傾	皿状	人為		本跡→SK1549・1551
1551	F 7 e0	N-90°-E	不定形	1.08×1.00	30	外傾	平坦	人為		SK1550・1552→本跡→SK1553・1555
1552	F 7 e0	N-90°-E	長方形	1.73×0.86	19	外傾	平坦	人為		本跡→SK1551・1553
1553	F 7 e0	N-5°-W	長方形	1.52×1.32	49	外傾	平坦	人為		SK1551・1555・1556→本跡→SK1558
1554	F 7 e0	N-90°-E	長方形	1.08×0.90	34	直立	平坦	人為		本跡→SK1557・1556
1555	F 7 e0	N-6°-W	[長方形]	(0.64)×0.58	37	直立	平坦	人為		SK1551・1557→本跡→SK1553
1556	F 7 e0	N-7°-W	[長方形]	(0.46)×(0.26)	24	外傾	平坦	人為		SK1554→本跡→SK1553・1558
1557	F 7 e9	N-0°	長方形	1.18×0.70	28	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 陶器	SK1554→本跡→SK1555
1558	F 7 e0	N-0°	方形	1.08×1.00	54	外傾	平坦	人為		SK1556→本跡→SK1559
1559	F 7 e0	N-0°	方形	1.13×1.06	58	直立	平坦	人為		SK1556・1558→本跡
1560	G 8 c1	N-55°-W	楕円形	0.60×0.41	38	外傾	平坦	人為		
1561	G 8 c1	N-19°-W	楕円形	0.42×0.36	35	外傾	皿状	人為		
1570	G 8 g3	N-20°-W	楕円形	1.29×1.02	47	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器	
1571	G 8 h2	N-0°	円形	0.58×0.54	31	緩斜	皿状	自然	土師器, 須惠器	SI312→本跡
1572	G 6 b8	N-8°-E	不整形長方形	1.23×1.02	32	外傾	段状	自然	須惠器	
1573	G 6 b8	N-83°-W	楕円形	0.88×0.71	32	外傾	皿状	自然	須惠器, 瓦, 鉄滓, 陶磁器	
1574	G 6 b9	N-90°-E	不整形長方形	1.41×1.08	66	外傾	皿状	人為	土師器, 須惠器	
1575	G 6 b8	N-14°-E	不整形長方形	1.22×1.09	59	外傾	凹凸	自然	土師器, 須惠器, 陶器	

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (m)		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)					
1578	G 7 a1	N-82°-W	長方形	0.98×0.80	20	緩斜	段状	自然		
1580	G 7 g0	N-90°-E	楕円形	1.60×1.35	23	緩斜	皿状	人為	土師器, 須惠器, 炭化材	SI308・309→本跡
1582	H 7 d9	N-85°-W	円形	1.37×1.29	19	緩斜	皿状	人為	土師器, 須惠器, 剥片	
1584	H 8 b4	N-85°-W	楕円形	1.40×0.97	59	外傾	傾斜	人為		
1585	H 8 i2	N-12°-W	長方形	3.28×2.48	12	緩斜	皿状	自然	土師器, 須惠器	SI317→本跡
1588	H 7 j8	N-0°	円形	4.33×4.33	233	段状	皿状	人為	土師器, 須惠器, 縄文土器, 瓦, 雲母片, 炭化物, 黒曜石	
1589	H 8 b1	N-17°-W	長方形	2.02×0.60	57	外傾	平坦	人為		SB94→本跡
1590	H 8 b1	N-15°-W	長方形	2.62×0.76	38	直立	平坦	人為		SB94→本跡
1593	G 6 a6	N-70°-W	長方形	1.42×0.90	61	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 陶器, 磁器, 瓦	
1594	H 8 c4	N-0°	円形	0.94×0.90	26	外傾	皿状	自然	土師器, 黒曜石, 釘	
1596	H 8 h0	N-0°	円形	1.50×1.40	58	直立	凹凸	人為	土師器, 須惠器, 縄文土器	本跡→SB95 P 4
1598	G 7 f6	N-0°	不定形	1.52×1.24	40	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 灰釉陶器, 黒曜石, 陶器	
1599	G 7 f6	N-42°-E	方形	0.95×0.88	38	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 磁器	
1600	I 8 e1	N-90°-E	楕円形	0.99×0.82	35	緩斜	皿状	人為	土師器, 縄文土器	SI318→本跡
1601	I 8 e1	N-4°-E	長方形	1.20×0.70	57	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器	SI318→本跡
1602	I 8 a2	N-38°-E	楕円形	1.02×0.81	44	緩斜	平坦	人為	土師器, 須惠器	本跡→SD12A
1603	I 8 a2	N-0°	円形	0.59×0.55	31	緩斜	皿状	人為	土師器, 陶器, 土製品	SI319→本跡→SD12A
1604	J 8 a8	N-7°-W	長方形	1.45×0.79	25	外傾	平坦	自然		
1605	J 8 a8	N-90°-E	長方形	1.05×0.63	33	外傾	平坦	自然		
1606	J 8 b9	N-56°-W	長方形	1.56×0.82	44	直立	平坦	自然	土師器	
1607	J 8 b9	N-0°	円形	0.66×0.64	26	緩斜	皿状	自然	土師器	
1608	J 8 b0	N-84°-W	長方形	1.63×0.75	28	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器, 縄文土器	本跡→SK1691
1609	J 8 b0	N-65°-W	楕円形	2.72×0.50	80	外傾	凹凸	自然	土師器	
1610	J 8 c0	N-65°-W	長方形	0.98×0.68	35	直立	皿状	自然		
1611	J 9 b3	N-90°-E	長方形	2.03×0.89	33	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 磁器	
1612	J 9 c3	N-90°-E	円形	1.01×0.97	12	緩斜	皿状	平坦		
1613	J 9 b3	N-90°-E	不整長方形	1.50×1.35	48	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 縄文土器	
1614	J 9 b4	N-90°-E	長方形	1.16×0.62	54	直立	平坦	人為		
1615	J 9 c4	N-72°-W	楕円形	1.18×0.85	32	外傾	凹凸	人為		
1616	J 9 c5	N-0°	長方形	1.02×0.87	31	外傾	平坦	自然		
1617	J 9 d5	N-90°-E	長方形	1.17×0.79	22	外傾	平坦	自然		
1618	J 9 b1	N-0°	円形	0.91×0.89	15	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器	
1619	J 9 c5	N-0°	方形	0.74×0.74	30	直立	平坦	自然		
1620	J 9 c6	N-90°-E	長方形	1.30×0.85	43	直立	平坦	自然		
1621	J 9 d4	N-90°-E	円形	0.78×0.76	30	外傾	皿状	人為		
1622	J 9 c7	N-90°-E	長方形	1.24×0.86	21	緩斜	平坦	自然		
1623	I 9 j3	N-90°-E	円形	0.78×0.72	36	直立	平坦	自然	土師器	
1624	I 9 i1	N-90°-E	長方形	1.20×1.04	35	外傾	平坦	自然		
1625	I 9 i2	N-0°	方形	1.12×1.08	40	外傾	平坦	自然	土師器	
1626	I 9 i6	N-55°-E	楕円形	1.68×1.02	31	緩斜	皿状	人為		
1627A	J 9 a2	N-90°-E	円形	1.18×1.00	57	外傾	平坦	自然	土師器	
1627B	J 9 a2	N-90°-E	方形	0.76×0.65	33	外傾	平坦	自然	土師器	
1628	J 9 e6	N-5°-E	方形	1.24×1.15	15	緩斜	皿状	人為		
1629	I 9 j2	N-85°-W	長方形	1.16×0.75	39	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器	
1630	I 9 j3	N-90°-E	長方形	1.30×0.72	60	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器	
1631	I 9 j3	N-82°-W	方形	0.83×0.80	72	直立	平坦	自然		
1632	I 9 j4	N-90°-E	長方形	1.08×0.66	44	直立	皿状	自然	土師器, 須惠器	
1633	I 9 j4	N-90°-E	長方形	1.36×0.83	60	直立	平坦	自然		
1634	I 9 i3	N-90°-E	長方形	1.06×0.75	29	外傾	平坦	自然		
1635	I 9 i3	N-90°-E	長方形	1.16×0.90	38	直立	平坦	自然	土師器	
1636	I 9 i4	N-90°-E	長方形	1.36×1.05	29	直立	平坦	自然		
1637	I 9 i5	N-90°-E	長方形	1.26×0.72	49	直立	平坦	人為	土師器	
1638	I 9 i5	N-0°	不定形	1.41×1.20	40	直立	凹凸	人為	不明鉄	
1639	I 9 i6	N-90°-E	長方形	1.35×0.77	40	直立	平坦	自然		
1640	I 9 i7	N-90°-E	長方形	1.12×0.75	41	直立	平坦	自然		
1641	I 9 h7	N-90°-E	長方形	1.25×0.76	59	直立	段状	自然		
1642	I 9 h7	N-87°-E	長方形	1.39×0.86	49	直立	平坦	自然		
1643	I 9 i8	N-90°-E	長方形	1.27×0.73	52	直立	平坦	自然		
1644	I 9 i9	N-0°	不定形	1.08×0.97	51	外傾	凹凸	自然		
1645	I 9 i9	N-53°-W	楕円形	1.08×0.88	20	緩斜	平坦	自然		
1646	I 9 h8	N-90°-E	長方形	1.09×0.70	22	直立	平坦	自然		
1647	I 9 g6	N-50°-W	楕円形	0.95×0.66	13	緩斜	皿状	自然	土師器, 須惠器	
1649	I 9 e7	N-10°-E	長方形	1.81×0.90	90	外傾	皿状	自然	土師器, 不明鉄	
1650	I 9 e7	N-45°-E	楕円形	0.63×0.54	22	外傾	皿状	自然		
1651	I 9 e6	N-90°-E	円形	1.70×1.62	45	緩斜	皿状	自然	土師器	
1652	I 9 d6	N-18°-W	楕円形	0.86×0.69	18	緩斜	皿状	人為		
1653	I 9 d4	N-80°-E	長方形	1.20×0.96	13	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器	
1654	I 9 d5	N-73°-E	円形	0.90×0.85	34	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器	
1655	I 9 c4	N-18°-W	長方形	1.12×0.88	56	直立	皿状	自然		
1656	I 9 c5	N-18°-W	長方形	1.19×0.82	65	外傾	段状	自然		
1657	I 9 b5	N-72°-E	楕円形	1.42×0.92	37	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器	
1658	I 9 b6	N-79°-E	長方形	1.32×0.92	63	直立	平坦	自然		
1659	I 9 b4	N-0°	楕円形	1.47×1.24	26	外傾	平坦	自然	縄文土器	
1660	I 9 b5	N-0°	円形	0.78×0.78	16	緩斜	平坦	自然	土師器, 須惠器	
1661	I 9 b6	N-8°-W	楕円形	1.34×1.03	14	緩斜	皿状	自然		
1662	I 9 a6	N-90°-E	円形	0.56×0.53	28	外傾	皿状	自然		



土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (m)		壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ (cm)					
1663	I 9 a6	N-0°	円形	0.56×0.56	29	緩斜	皿状	自然		
1664	I 9 b5	N-90°-E	円形	0.83×0.78	24	緩斜	皿状	自然		
1665	I 9 a5	N-0°	円形	1.34×1.32	13	緩斜	平坦	自然		
1666	I 9 b4	N-90°-E	円形	0.91×0.86	24	外傾	平坦	自然		
1667	I 9 f4	N-10°-W	長方形	1.20×0.80	50	直立	平坦	自然	土師器	
1668	I 9 d2	N-0°	円形	0.90×0.88	32	緩斜	平坦	自然		
1669	I 9 d2	N-61°-E	楕円形	0.48×0.39	48	直立	皿状	人為		
1670	H10g4	N-10°-W	長方形	1.25×0.90	10	緩斜	平坦	自然		
1671	I 9 c2	N-0°	楕円形	0.54×0.38	45	外傾	皿状	自然		
1672	I 9 b2	N-27°-W	楕円形	1.85×1.43	23	緩斜	凹凸	自然		
1673	I 9 b1	N-0°	不整長方形	1.20×0.86	18	直立	凹凸	自然		
1674	I 9 a1	N-12°-W	長方形	1.10×0.72	31	外傾	皿状	自然		
1675	I 9 a1	N-80°-E	長方形	1.73×0.68	40	外傾	皿状	自然		SB115P 7 →本跡
1676	I 8 a0	N-0°	円形	1.10×1.10	20	外傾	皿状	自然		SB115P 9 →本跡
1677	I 8 a2	N-90°-E	円形	0.76×0.72	65	外傾	平坦	自然		SI319 →本跡→SD15
1678	I 8 a2	N-17°-W	長方形	1.15×0.71	35	外傾	段状	自然		SI319 →本跡→SD15
1679	I 9 f8	N-70°-E	長方形	0.87×0.70	26	外傾	平坦	人為		SI356, SB117 →本跡
1680	I 9 e3	N-75°-E	長方形	0.89×0.53	28	直立	平坦	自然		SI355 →本跡
1682	I 8 b7	N-90°-E	楕円形	0.90×0.80	30	外傾	平坦	自然		SI350 →本跡
1683	I 8 b8	N-74°-E	楕円形	1.66×1.00	50	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器, 灰釉陶器	SI350 →本跡
1684	I 8 g9	N-90°-E	円形	0.88×0.84	39	外傾	平坦	自然	土師器, 縄文土器	
1685	I 8 g9	N-0°	円形	0.62×0.60	23	緩斜	平坦	自然	土師器, 須惠器	
1686	I 8 f9	N-11°-W	楕円形	0.95×0.84	36	外傾	平坦	自然	縄文土器	
1687	I 8 f0	N-0°	円形	0.84×0.77	23	外傾	平坦	自然	土師器, 須惠器	
1688	I 9 c2	N-90°-E	円形	0.48×0.45	25	外傾	平坦	自然		
1689	I 9 b3	N-0°	楕円形	1.17×1.05	25	緩斜	皿状	自然		
1690	J 8 b0	N-90°-E	楕円形	1.42×(0.79)	45	緩斜	皿状	人為		SK1608 →本跡
1691	J 8 b0	N-0°	楕円形	0.78×(0.55)	40	緩斜	皿状	人為		SK1608 →本跡
1692	I 8 g2	N-0°	円形	1.02×1.00	72	直立	皿状	自然	土師器, 須惠器, 縄文土器	SI345 →本跡
1694	I 8 j6	N-11°-E	楕円形	1.41×1.28	76	直立	皿状	自然	土師器, 須惠器, 縄文土器, 陶器	
1695	I 8 h7	N-0°	円形	0.92×0.92	77	外傾	皿状	自然		
1696	I 8 g6	N-90°-E	円形	0.77×0.73	45	外傾	皿状	人為	土師器, 縄文土器	
1697	I 8 a8	N-72°-E	長方形	1.04×0.70	26	直立	平坦	自然		
1698	I 8 a8	N-0°	円形	0.60×0.60	9	外傾	平坦	自然		
1699	I 8 a9	N-85°-E	不整楕円形	1.54×0.85	31	外傾	平坦	自然		
1700	J 8 a8	N-0°	円形	1.04×1.02	10	緩斜	平坦	自然	土師器, 縄文土器	
1701	I 8 a2	N-4°-W	長方形	1.20×0.65	33	直立	平坦	自然		
1702	I 8 b1	N-0°	円形	1.08×1.06	23	外傾	平坦	自然		
1703	I 7 b8	N-78°-E	長方形	0.40×0.13	51	外傾	平坦	自然		
1704	I 7 b8	N-12°-W	長方形	1.86×0.65	51	外傾	平坦	自然		SD50 →本跡→SD12A
1705	G 6 f8	N-16°-E	方形	0.80×0.76	15	外傾	平坦	自然	土師器	
1710	G 6 f0	N-0°	円形	0.42×0.40	13	外傾	皿状	自然		
1711	G 6 e0	N-34°-W	楕円形	0.40×0.33	14	緩斜	皿状	自然		
1712	G 6 e0	N-0°	円形	0.35×0.35	20	外傾	皿状	自然		
1713	G 6 e0	N-0°	円形	0.30×0.30	16	外傾	皿状	自然		
1714	G 7 f1	N-0°	円形	0.51×0.51	50	外傾	凹凸	人為	土師器, 須惠器	
1715	G 7 f1	N-0°	円形	0.51×0.50	36	外傾	皿状	自然		
1716	G 7 f1	N-38°-W	楕円形	0.75×0.55	43	直立	皿状	自然		
1717	G 7 f1	N-13°-E	楕円形	0.77×0.68	31	緩斜	皿状	自然		
1718	G 7 e1	N-0°	楕円形	0.40×0.35	18	外傾	皿状	自然		
1719	G 7 f1	N-72°-W	楕円形	0.58×0.40	34	外傾	凹凸	人為		
1723	G 6 a5	N-65°-W	長方形	1.39×0.78	23	直立	平坦	自然	須惠器	SD35 本跡
1724	G 6 a5	N-65°-W	長方形	1.50×0.78	26	直立	凹凸	自然	土師器, 須惠器	SD35 本跡
1725	G 6 a4	N-67°-W	不整長方形	0.72×0.38	49	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器, 陶器, 不明鉄	SD35 →本跡
1737	H10j5	N-84°-E	楕円形	0.87×0.77	43	直立	平坦	人為		
1739	H10j7	N-90°-E	不整楕円形	1.68×1.39	24	外傾	皿状	人為		
1740	H10i6	N-71°-E	楕円形	1.15×0.99	18	緩斜	皿状	人為		
1741	H10i7	N-17°-W	不定形	1.96×1.20	36	外傾	平坦	自然	須惠器, 陶器, 磁器	
1742	H10i6	N-72°-E	楕円形	1.30×1.05	33	外傾	凹凸	自然		本跡→SK1743
1743	H10i6	N-0°	円形	0.72×0.70	22	緩斜	皿状	自然		SK1742 →本跡
1744	H10i6	N-11°-W	方形	0.80×0.76	42	緩斜	皿状	自然		
1745	H10j5	N-28°-W	楕円形	1.28×0.70	33	緩斜	皿状	自然		
1746	H 9 i8	N-17°-W	不定形	1.17×1.45	106	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 縄文土器, 陶器	
1747	H10h6	N-65°-E	長方形	1.18×0.95	40	外傾	皿状	自然	陶器	
1748	H10h5	N-20°-W	長方形	14.8×0.53	23	外傾	平坦	自然		
1749	H10h5	N-70°-E	隅丸方形	0.90×0.80	12	外傾	平坦	自然		
1750	H10g5	N-75°-E	[隅丸方形]	1.34×(0.6)	60	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器	
1751	I 10d3	N-64°-E	不整長方形	1.20×0.85	18	外傾	平坦	自然		
1752	I 10c3	N-0°	円形	1.09×0.97	20	外傾	平坦	人為		
1753	I 10c4	N-79°-W	方形	1.05×0.98	28	外傾	平坦	自然	土師器	
1755	H 9 j8	N-18°-W	楕円形	1.00×0.65	68	直立	皿状	自然		
1756	I 10c5	N-0°	円形	1.00×0.95	40	直立	平坦	自然	須惠器, 磁器, 不明鉄	
1757	H10i6	N-10°-E	楕円形	0.68×0.56	30	外傾	皿状	自然		
1758	H10j4	N-78°-E	長方形	2.00×0.70	16	外傾	平坦	人為		
1759	H10g4	N-72°-E	長方形	1.76×1.10	25	外傾	平坦	人為	鉄鏃	
1760	H10i4	N-14°-W	長方形	2.00×0.66	44	緩斜	平坦	自然		

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (m)		壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)					
1761	G10f1	N-0°	円形	1.03×0.95	17	外傾	平坦	人為		
1762	H10b1	N-27°-W	不整楕円形	1.42×0.80	21	緩斜	皿状	人為	土師器, 縄文土器	
1781	H10e1	N-0°	不定形	1.34×1.12	15	外傾	平坦	自然		
1782	H10d1	N-90°-E	楕円形	1.02×0.83	30	外傾	平坦	人為	須惠器, 縄文土器	
1783	H10c1	N-0°	楕円形	1.06×0.72	45	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器	
1784	H10b1	N-90°-E	円形	1.20×1.14	27	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 縄文土器	
1785	H9a0	N-0°	円形	1.25×1.25	56	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 縄文土器	
1786	H9a0	N-0°	円形	0.85×0.84	26	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器, 縄文土器	
1787	G10j1	N-57°-E	楕円形	1.20×0.94	11	緩斜	平坦	自然	土師器, 須惠器, 縄文土器	
1788	H10b2	N-0°	円形	1.00×0.92	31	外傾	皿状	人為	土師器, 須惠器	
1789	G10h1	N-0°	楕円形	1.12×0.92	16	緩斜	皿状	自然		
1790	G10h1	N-0°	円形	1.15×1.12	19	外傾	平坦	人為		
1791	G10g1	N-0°	円形	0.95×0.93	10	緩斜	皿状	自然	土師器, 須惠器	
1792	G10g3	N-90°-E	円形	0.70×0.67	20	外傾	皿状	自然		
1793	H8a0	N-86°-E	隅丸方形	0.98×0.89	35	外傾	皿状	自然		
1794	H8b9	N-17°-E	方形	0.95×0.93	27	外傾	平坦	自然	土師器	
1795	H8b9	N-0°	円形	0.88×0.83	17	緩斜	皿状	自然	土師器, 須惠器, 縄文土器, 陶器	
1796	H8b8	N-0°	円形	0.96×0.86	37	外傾	皿状	人為	土師器, 須惠器, 縄文土器	
1797	H8b8	N-90°-W	隅丸方形	0.90×0.75	40	直立	平坦	自然		
1798	H8b8	N-88°-E	隅丸方形	1.00×0.84	70	直立	平坦	人為	縄文土器	
1799	H8b8	N-71°-E	不定形	0.64×0.53	57	直立	傾斜	人為		
1800	H8b9	N-0°	円形	0.54×0.52	50	直立	傾斜	人為		
1801	H8a9	N-68°-E	楕円形	0.58×0.43	45	直立	傾斜	人為		
1802	H8a8	N-0°	円形	0.48×0.47	40	直立	傾斜	人為	土師器	
1803	H8b8	N-77°-W	楕円形	0.63×0.45	33	直立	凹凸	人為		
1804	H8b9	N-0°	円形	0.72×0.68	43	外傾	段状	人為		
1805	H8b8	N-0°	円形	0.50×0.46	53	直立	傾斜	人為		
1806	H8c0	N-16°-W	楕円形	0.70×0.60	20	外傾	皿状	人為	土師器, 須惠器	
1807	H8e9	N-0°	円形	0.58×0.50	30	直立	皿状	自然	土師器, 須惠器	
1808	H8d9	N-60°-E	不定形	1.75×1.03	24	緩斜	皿状	人為		
1809	H8d8	N-44°-E	楕円形	0.48×0.40	40	直立	傾斜	人為		
1810	G9b1	N-75°-E	隅丸長方形	1.15×0.96	13	外傾	平坦	自然		
1811	G8b0	N-73°-E	不整長方形	1.17×0.88	22	外傾	平坦	自然	土師器	
1812	C8b8	N-13°-E	方形	0.93×0.86	70	外傾	凹凸	自然	土師器, 須惠器	
1813	G8c7	N-80°-W	不定形	1.15×1.05	92	外傾	平坦	自然		
1814	G8c7	N-78°-E	不定形	2.30×1.53	52	直立	平坦	自然		
1815	G8c7	N-75°-E	隅丸長方形	1.15×0.72	40	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器	
1820	G8a6	N-82°-W	楕円形	1.17×0.95	26	緩斜	皿状	自然	土師器, 須惠器	SI377→本跡
1823	F8b4	N-28°-W	楕円形	1.24×1.08	27	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器	
1824	E7i7	N-22°-E	円形	1.04×1.00	50	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 瓦, 磁器,	
1825	E7i8	N-30°-W	円形	1.02×0.98	61	直立	平坦	自然		
1826	E7i7	N-51°-E	楕円形	1.28×1.06	106	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器, 陶器, 砥石	
1827	E7j0	N-0°	楕円形	1.56×1.24	94	外傾	皿状	人為		
1828	H8c9	N-0°	円形	0.65×0.55	30	外傾	傾斜	自然	土師器, 須惠器	
1829	H8c8	N-0°	円形	0.73×0.68	27	外傾	傾斜	人為	土師器, 須惠器	
1830	H8d9	N-0°	円形	0.58×0.58	17	外傾	皿状	人為	須惠器	
1831	H8e8	N-68°-W	楕円形	0.80×0.64	24	外傾	凹凸	人為	土師器	
1832	H8d8	N-60°-E	楕円形	0.77×0.6	35	外傾	凹凸	自然		
1833	E7i9	N-32°-W	不定形	2.20×1.10	47	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器, 瓦, 陶器, 磁器	SI393→本跡
1834	E7i0	N-23°-E	楕円形	1.24×0.94	54	外傾	皿状	自然		
1835	E7j0	N-1°-W	楕円形	1.7×1.08	82	直立	皿状	人為	土師器, 須惠器, 陶器, 磁器, 不明鉄	
1836	E8h4	N-90°-E	隅丸長方形	0.88×0.68	22	外傾	平坦	自然		
1837	E8h4	N-42°-E	楕円形	0.88×0.72	62	直立	皿状	人為		
1838	E8h5	N-90°-E	円形	0.84×0.80	24	緩斜	皿状	自然		
1839	E8g4	N-53°-W	円形	0.84×0.78	36	緩斜	皿状	人為		
1840	E8g5	N-35°-E	円形	1.02×0.96	31	緩斜	平坦	自然		
1841	E8g5	N-31°-E	楕円形	0.92×0.8	36	外傾	皿状	人為	土師器, 須惠器, 瓦	
1842	E8g5	N-79°-E	隅丸長方形	0.9×0.42	39	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 陶器, 磁器	
1843	E8g6	N-85°-E	隅丸長方形	1.44×0.62	38	緩斜	平坦	自然		
1844	E8g7	N-77°-E	隅丸長方形	2.72×1.04	53	外傾	平坦	人為		
1845	E8g8	N-75°-E	隅丸長方形	0.90×0.66	33	直立	平坦	自然		
1846	E8g8	N-0°	円形	0.84×0.84	34	直立	平坦	自然		
1847	D8i8	N-47°-E	楕円形	1.48×1.28	45	直立	平坦	自然		
1848	D8i0	N-20°-W	楕円形	1.40×0.70	56	外傾	平坦	人為	土師器, 須惠器	
1849	D9h1	N-40°-E	円形	0.94×0.86	58	外傾	平坦	人為		
1850	E9a2	N-10°-E	隅丸長方形	1.78×0.80	55	外傾	平坦	人為	須惠器, 陶器	
1853	E7j9	-	-	(1.16)×(0.80)	67	-	凹凸	自然	不明銅製品	
1857	E7f7	N-56°-E	円形	0.86×[0.85]	21	直立	平坦	人為	土師器, 須惠器	本跡→SB63
1867	E8b7	N-57°-E	不定形	3.00×2.20	77	緩斜	皿状	人為	土師器, 須惠器, 縄文土器	SD25→本跡
1868	E8b9	N-73°-E	不定形	2.90×1.80	77	緩斜	皿状	人為		SI247→本跡
1870	C8j8	N-8°-W	[円形]	0.93×[0.55]	51	直立	平坦	自然		
1871	C8j8	N-0°	不定形	1.45×0.97	46	直立	平坦	自然	土師器, 須惠器, 縄文土器	
1872	C8j8	N-55°-E	円形	1.06×0.97	57	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器, 陶器, キセル	
1873	C8j8	N-63°-E	円形	0.98×0.94	41	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器, 瓦, 羽釜, 土錘	
1874	C8j7	N-43°-E	円形	1.07×1.01	42	外傾	皿状	自然	土師器, 須惠器, 灰釉陶器, 瓦, 縄文土器	
1875	C8j7	N-52°-W	不定形	1.30×1.20	39	緩斜	平坦	自然	須惠器	
1876	C8j4	N-65°-W	円形	0.86×0.8	29	外傾	平坦	自然	須惠器	

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (m)		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ (cm)					
1877	C 8 i3	N-20°-W	円形	0.80×0.73	16	外傾	平坦	自然		SI321→本跡
1878	C 8 i3	N-56°-E	円形	0.86×0.77	26	直立	平坦	自然		
1879	C 8 i3	N-27°-E	円形	0.83×0.76	24	外傾	平坦	自然		
1880	C 8 i3	N-90°-E	不定形	1.30×1.10	32	外傾	平坦	自然		
1881	C 8 i2	N-18°-E	不定形	1.35×0.94	33	直立	平坦	自然	土師器, 須恵器, 瓦	
1882	C 8 i2	N-15°-E	円形	1.25×1.13	43	外傾	皿状	自然	土師器, 須恵器, 瓦	
1883	C 8 i1	N-25°-E	楕円形	1.29×0.96	24	外傾	皿状	自然		
1884	C 8 i1	N-19°-W	不定形	1.44×0.75	36	外傾	平坦	人為	土師器, 須恵器	
1885	C 8 i1	N-62°-E	円形	1.05×1.03	38	緩斜	平坦	自然		
1886	C 7 i0	N-60°-E	不定形	1.35×0.93	35	外傾	凹凸	人為		
1887	D 8 b5	N-28°-W	円形	1.04×0.96	27	直立	平坦	自然	土師器, 須恵器	SI328→本跡
1888	E 7 g8	N-70°-E	楕円形	0.87×0.66	46	外傾	皿状	自然		
1889	E 7 f8	N-0°	円形	1.0×0.97		直立	平坦	自然	土師器, 須恵器	
1890	E 7 f8	N-29°-W	楕円形	0.87×0.72	34	外傾	皿状	自然	土師器, 須恵器, 刀子, 陶器	
1891	E 7 g9	N-30°-W	円形	0.62×0.62	45	外傾	皿状	人為	土師器, 須恵器, 緑釉陶器	
1892	E 7 g9	N-3°-E	円形	1.09×0.97	43	外傾	皿状	自然	土師器, 須恵器	
1893	E 7 g9	N-68°-E	円形	1.05×0.89	21	外傾	平坦	人為	土師器, 須恵器	
1894	E 7 g8	N-30°-E	楕円形	1.02×0.98	40	外傾	皿状	自然	土師器, 須恵器	
1895	E 7 g9	N-15°-E	円形	0.8×0.7	41	外傾	平坦	人為	土師器, 須恵器	
1896	E 7 g8	N-40°-E	円形	0.93×0.91	37	直立	平坦	人為		
1897	E 7 h8	N-24°-W	不定形	0.93×0.81	59	直立	平坦	自然		
1898	E 7 h8	N-45°-W	円形	0.80×(0.44)	39	緩斜	皿状	自然		
1899	E 7 g9	N-67°-W	楕円形	0.84×0.69	49	外傾	皿状	人為	土師器, 須恵器	
1900	E 7 h9	N-0°	円形	0.9×0.9	46	外傾	皿状	人為	須恵器	
1901	E 7 h9	N-0°	円形	0.85×0.84	79	直立	平坦	自然	土師器, 須恵器, 陶器	
1902	E 7 i9	N-35°-E	楕円形	1.3×0.98	81	外傾	皿状	自然	土師器, 須恵器, 陶器, 瓦	
1903	E 7 h9	N-70°-E	不定形	1.3×[1.0]	87	外傾	平坦	人為	土師器, 須恵器, 陶器, 瓦	
1904	E 7 f8	N-84°-W	隅丸方形	0.87×[0.81]	36	外傾	皿状	自然		SI396→本跡
1905	E 7 f8	N-55°-W	不定形	1.15×0.86	34	直立	平坦	人為		SI396→本跡
1907	E 8 h1	N-17°-W	円形	0.57×0.50	40	外傾	皿状	自然	土師器	
1908	E 8 h1	N-90°-E	円形	0.59×0.51	33	外傾	皿状	人為	須恵器	
1909	E 8 h1	N-58°-E	円形	0.6×0.55	30	直立	皿状	自然		
1910	E 8 h1	N-27°-E	円形	0.37×0.32	29	外傾	皿状	人為		
1911	E 8 g1	N-67°-W	円形	0.66×0.62	33	直立	平坦	人為	土師器	
1912	E 8 g1	N-0°	円形	0.58×0.55	56	外傾	皿状	自然		
1913	E 8 h2	N-15°-W	楕円形	0.85×0.58	31	外傾	平坦	人為		
1914	E 7 h9	N-0°	円形	0.85×[0.86]	71	直立	平坦	人為	土師器, 須恵器, 陶器	
1919	E 7 f9	N-80°-E	楕円形	1.10×0.80	68	外傾	皿状	人為	土師器, 須恵器	
1920	E 7 g9	N-18°-W	楕円形	1.0×0.78	56	緩斜	皿状	人為	土師器, 須恵器	
1922	D 9 d1	N-78°-E	隅丸長方形	1.91×0.9	68	外傾	平坦	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	
1923	D 8 c8	N-0°	円形	1.51×1.47	82	緩斜	平坦	人為	土師器, 須恵器	
1924	D 8 c7	N-0°	楕円形	1.64×1.4	30	外傾	平坦	自然	土師器, 須恵器	
1927	D 8 d6	N-0°	楕円形	1.43×1.2	56	外傾	平坦	人為		
1928	D 8 c6	N-61°-W	楕円形	1.0×0.85	22	外傾	平坦	自然	土師器, 須恵器, 土錘	
1929	D 9 f1	N-90°-E	隅丸長方形	1.15×0.93	20	外傾	平坦	自然	土師器	
1931	D 8 b5	N-72°-E	円形	0.71×0.69	35	外傾	平坦	人為	土師器	
1932	D 8 b4	N-84°-E	隅丸長方形	1.4×0.86	26	外傾	平坦	人為		
1933	D 8 c4	N-52°-E	不定形	1.81×1.03	63	外傾	平坦	人為		
1934	D 8 c4	N-45°-E	円形	0.54×0.5	42	外傾	皿状	自然		
1935	D 8 d4	N-7°-W	円形	0.61×0.56	19	緩斜	平坦	人為		
1936	D 8 e4	N-48°-W	楕円形	1.12×0.98	25	緩斜	皿状	人為	土師器, 須恵器	
1937	D 8 d3	N-32°-W	楕円形	1.40×1.30	101	緩斜	凹凸	人為	土師器, 須恵器, 陶器	SI414→本跡
1938	D 8 c3	N-29°-E	円形	0.65×0.58	32	外傾	皿状	自然		
1939	D 8 c3	N-35°-W	円形	0.65×0.62	39	外傾	皿状	自然		
1941	C 7 i9	N-19°-E	不正楕円形	1.74×1.13	47	緩斜	皿状	自然		
1942	C 8 h1	N-16°-W	不定形	2.04×1.33	49	緩斜	平坦	人為	土師器, 須恵器	
1943	C 7 h0	N-15°-E	隅丸長方形	1.26×0.62	20	直立	平坦	自然		
1944	C 8 h1	N-25°-W	円形	0.68×0.66	21	直立	平坦	自然		
1945	C 7 i9	N-84°-W	円形	1.38×1.24	30	緩斜	皿状	自然	須恵器	
1946	C 7 h0	N-81°-W	円形	0.86×0.8	31	外傾	凹凸	自然	土錘, 刀子	
1947	C 8 h4	N-15°-E	楕円形	0.85×0.58	7	緩斜	平坦	自然	土師器	SI323→本跡
1948	C 8 i2	N-24°-W	楕円形	1.28×0.89	31	外傾	皿状	自然		
1949	C 8 h2	N-80°-E	円形	0.58×0.55	38	外傾	皿状	自然		
1950	C 8 g2	N-73°-W	楕円形	0.52×0.46	30	緩斜	皿状	自然		
1951	E 7 f0	N-9°-W	円形	[0.85]×0.81	29	外傾	皿状	自然		SI202→本跡
1952	E 7 e0	N-0°	隅丸長方形	0.99×[0.78]	33	直立	凹凸	自然		SI202→本跡→SD49
1953	D 8 b5	N-22°-E	円形	0.39×0.36	10	緩斜	皿状	人為	土師器, 須恵器	
1954	C 8 g2	N-62°-E	不定形	0.73×0.56	46	緩斜	皿状	自然		
1955	C 8 f2	N-32°-W	隅丸長方形	1.48×1.13	52	外傾	平坦	自然		
1956	C 8 f2	N-61°-W	不定形	1.96×0.98	97	緩斜	凹凸	人為		
1957	C 8 i2	N-18°-W	円形	1.13×1.07	87	直立	皿状	人為	土師器, 須恵器, 陶器	
1958	C 8 i2	N-5°-E	隅丸長方形	1.19×0.64	40	直立	凹凸	自然	土師器, 砥石, 不明鉄, 陶器	
1959	D 8 d3	N-6°-W	楕円形	1.38×[1.13]	38	直立	平坦	人為		SI414→本跡
1960	D 8 d2	N-11°-W	楕円形	1.26×1.18	47	直立	平坦	人為		SI414→本跡
1963	C 8 e1	N-47°-W	円形	1.28×1.22	90	直立	平坦	自然		
1964	C 8 e4	N-88°-W	不定形	2.18×1.27	30	外傾	平坦	自然		

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (m)		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)					
1965	C 8 f7	N-29°-E	楕円形	1.02×0.85	77	直立	平坦	自然		
1966	C 8 f7	N-15°-E	隅丸長方形	1.13×0.65	29	外傾	皿状	自然		
1967	C 8 f7	N-66°-W	円形	0.96×0.90	65	外傾	皿状	自然	土師器, 釘	
1968	D 7 f0	N-85°-E	隅丸長方形	1.36×1.11	60	直立	平坦	人為		
1969	D 7 f9	N-65°-E	楕円形	0.40×0.32	42	外傾	皿状	人為		
1970	D 7 f8	N-10°-W	円形	0.40×0.37	51	外傾	皿状	人為		
1971	D 7 f8	N-35°-W	円形	0.92×0.86	32	外傾	平坦	自然	土師器, 須恵器, 雲母片岩	
1972	D 7 f8	N-86°-E	楕円形	0.99×0.85	23	緩斜	平坦	自然	土師器, 須恵器, 陶器	
1973	D 7 e0	N-75°-E	隅丸長方形	1.00×1.04	53	直立	平坦	人為	須恵器, 磁器	
1974	D 7 d0	N-16°-W	円形	0.98×0.93	53	直立	平坦	自然	土師器, 須恵器, 瓦	
1975	D 7 d0	N-67°-W	楕円形	1.41×1.25	66	直立	平坦	自然	土師器, 須恵器, 陶器	
1976	D 7 c0	N-2°-W	楕円形	1.40×1.26	35	外傾	皿状	自然		
1977	D 8 d1	N-22°-E	楕円形	1.45×1.34	33	外傾	平坦	自然		
1978	D 8 b0	N-14°-W	隅丸長方形	1.20×0.55	24	緩斜	皿状	人為		
1980	D 7 f8	N-90°-E	隅丸長方形	1.33×0.86	41	直立	平坦	自然	土師器, 須恵器	
1981	D 7 c0	N-2°-W	隅丸長方形	1.22×1.07	56	直立	平坦	人為	土師器, 須恵器, 陶器	
1983	D 8 f1	N-82°-E	隅丸長方形	1.15×0.93	36	外傾	平坦	自然		
1984	D 8 a8	N-42°-E	円形	0.39×0.38	26	緩斜	皿状	自然		
1985	D 8 a9	N-43°-W	円形	0.73×0.68	21	外傾	皿状	自然		
1986	D 8 a0	N-75°-E	隅丸長方形	1.03×1.00	52	外傾	平坦	自然	土師器, 須恵器	
1987	D 8 a9	N-0°	[円形]	0.66×(0.32)	26	外傾	皿状	自然		
1989	F 7 j2	N-90°	長方形	0.60×0.55	18	外傾	平坦	人為		
1991	F 7 j3	N-90°	長方形	0.77×0.68	25	外傾	平坦	人為		
1999	F 7 j2	N-6°-E	正方形	0.79×0.78	24	外傾	平坦	自然		

## 5 中・近世

### (1) 地下式墳

#### 第1号地下式墳(第702図)

**位置** 調査区域の北東部, D 8 b9区。

**重複関係** 第408号住居跡を掘り込んで構築されていることから, 本跡が新しい。

**堅坑** 上面は, 長軸1.45m, 短軸1.18mの, 長軸が主軸に平行する長方形で, 深さ0.86~1.13mである。底面は, 一辺が1.30mのほぼ方形で, 主室に向かって下るスロープ状を呈している。

**主室** 底面は, 長軸2.19m, 短軸1.76mの, 長軸が主軸に直交する長方形で, 平坦である。確認面から底面までの深さは1.67mである。天井部は崩落しており, 残存していない。

**主軸方向** N-82°-W

**壁** 堅坑と主室ともに, ほぼ直立する。主室の壁高は1.54mである。

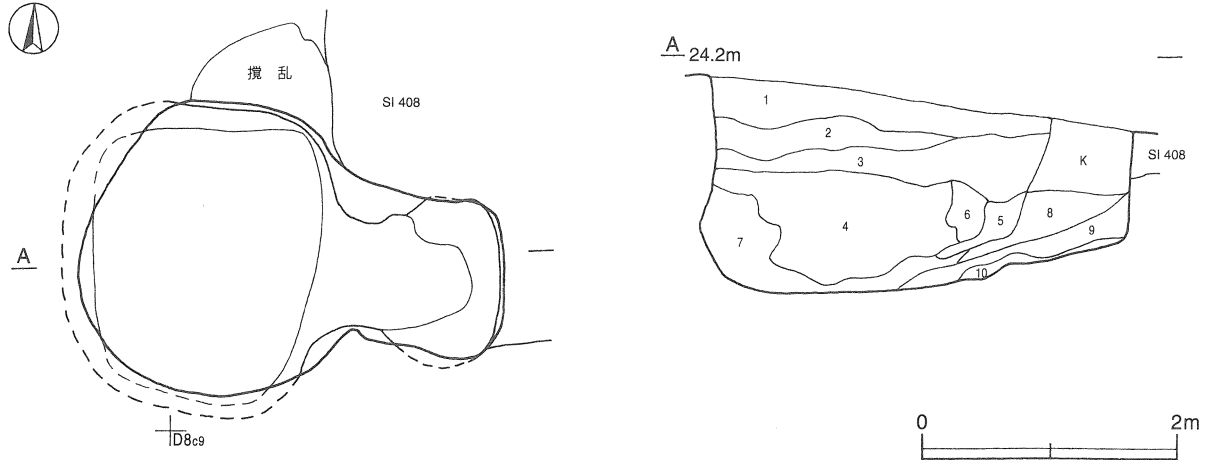
**覆土** 10層からなる。土層断面図中第4層のローム大ブロックは, 天井部が崩落したものと考えられる。第8~10層は堅坑から流れ込んだものと考えられる。第5~7層は, ブロック状に堆積しているため, 人為堆積と考えられる。第1~3層はレンズ状に堆積しており, 自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量, ローム大ブロック・粘土大ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム大ブロック・ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム大ブロック多量, ローム粒子中量
- 5 黒色 ローム小ブロック少量
- 6 褐色 ローム小ブロック中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック少量
- 7 褐色 ローム大ブロック少量
- 8 黒褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・粘土大ブロック・粘土中ブロック・粘土粒子中量
- 9 暗褐色 ローム中ブロック・粘土大ブロック中量, ローム大ブロック・粘土中ブロック・粘土粒子少量
- 10 暗褐色 粘土大ブロック少量

**遺物** 須恵器片1点が出土している。須恵器片は混入したものと思われる。

**所見** 本跡の時期は, 出土土器からは判断できないが, 重複関係と遺構の形態から中世と推定される。



第702図 第1号地下式墳実測図

(2) 溝

今回の調査では、溝35条が確認された。出土遺物は混入と考えられるものがほとんどで、その性格は不明であるが、多くが奈良・平安時代の遺構を掘り込んでおり、最近の地籍図の筆境と位置がほぼ一致していることから、平安時代前期以降の区画を目的とした溝の可能性が高い。第12A・13・17号溝及び第34号溝の一部は、並行して確認されていることから、道路状遺構の側溝であった可能性が考えられる。確認された溝の位置や規模などの特徴については、一覧表に記載するとともに、全体図と第703・704図に掲載する。

第12A号溝土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック中量
- 4 褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子微量
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 7 褐色 ローム小ブロック少量
- 8 褐色 ローム大ブロック多量

第12B号溝土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック中量

第13号溝土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック中量

第17号溝土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・焼土小ブロック微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 4 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

第24号溝土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

第25号溝土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、炭化物少量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量

第26号溝土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第27A号溝土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 炭化粒子微量
- 5 褐色 焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量
- 7 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 8 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 10 褐色 ローム粒子少量

第27B号溝土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量

第27C号溝土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック少量、ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量

第27F号溝土層解説

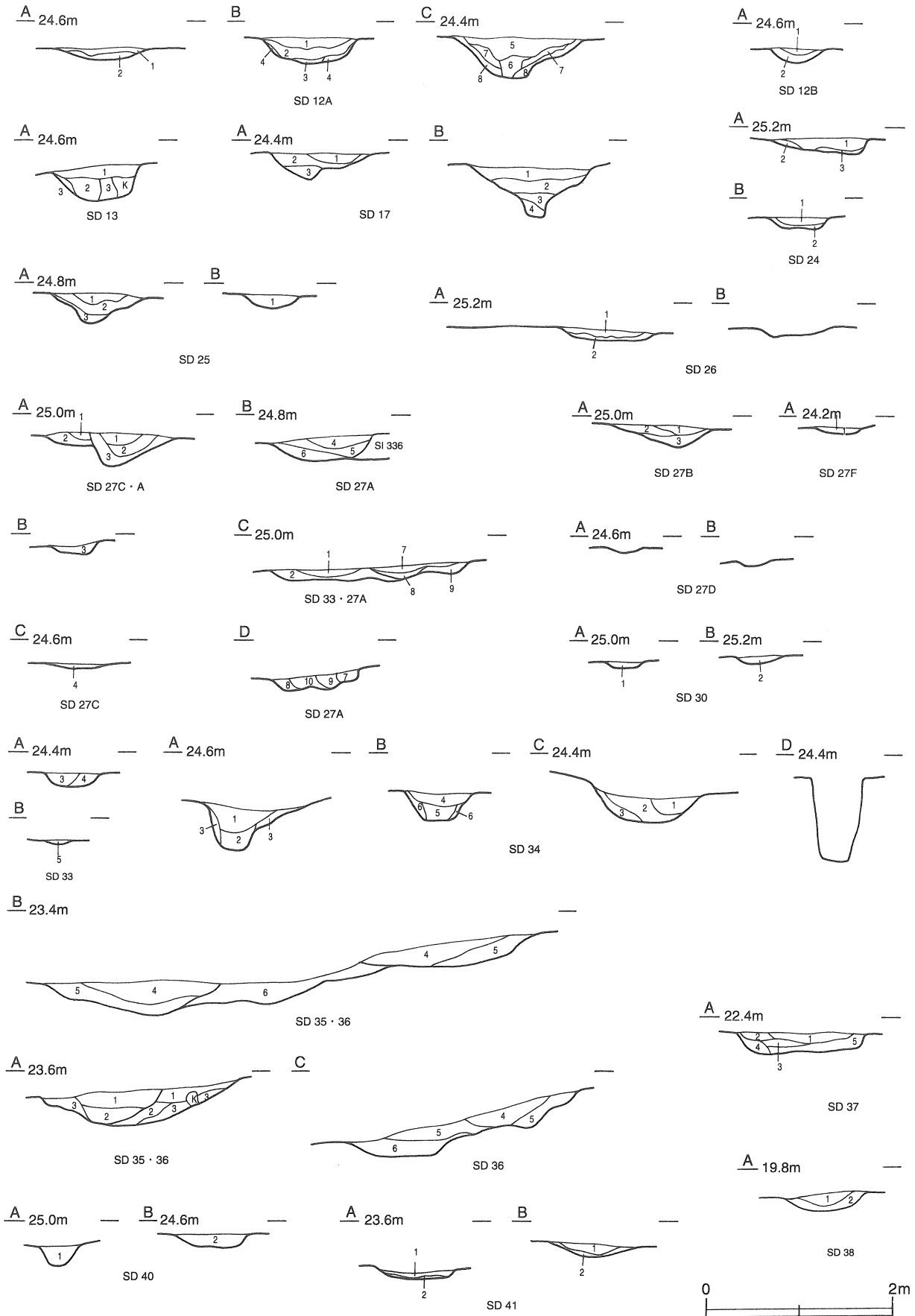
- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

第30号溝土層解説

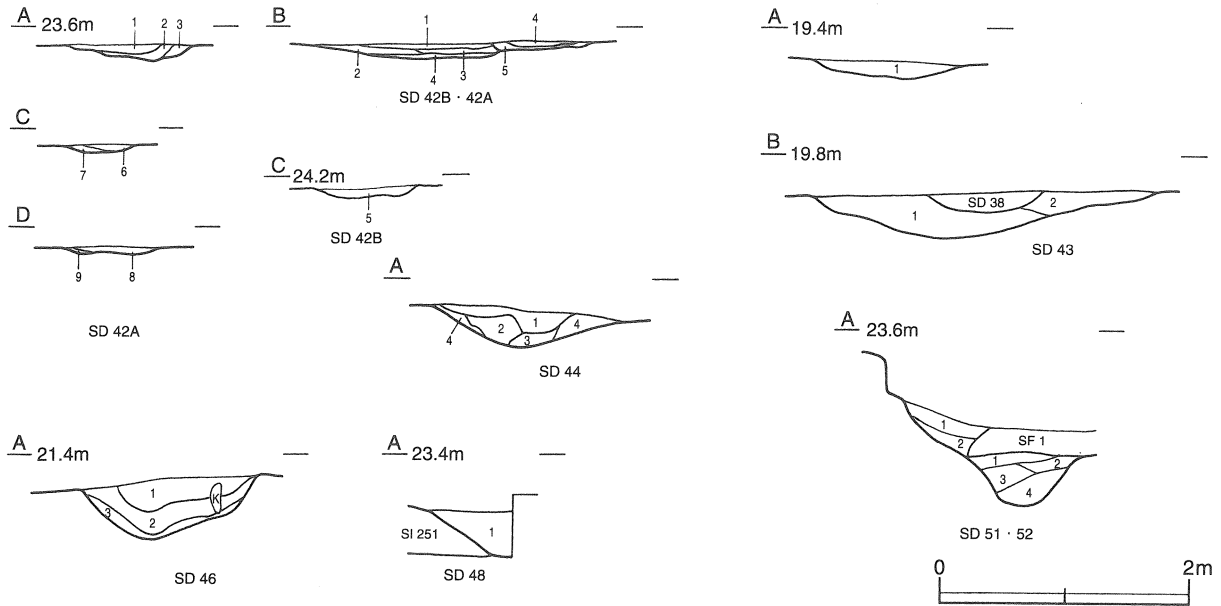
- 1 暗褐色 ローム粒子中量・ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量

第33号溝土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック少量、ローム小ブロック微量
- 2 褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 5 極暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック微量



第703图 沟渠测图 (1)



第704図 溝実測図 (2)

第34号溝土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム中ブロック多量, ローム大ブロック少量
- 3 褐色 ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム中ブロック少量

第35号溝土層解説

- 1 褐色 粘土小ブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 粘土小ブロック多量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 砂粒中量, ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 砂粒多量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック微量

第36号溝土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量

第37号溝土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量
- 2 極暗褐色 粘土粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 焼土粒子・粘土粒子微量
- 4 極暗褐色 炭化粒子・粘土粒子微量
- 5 暗褐色 粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第38号溝土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 黒褐色 粘土小ブロック少量, 炭化粒子・粘土粒子微量

第40号溝土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

第41号溝土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子少量, 炭化物微量

第42 A号溝土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 8 黒褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量
- 9 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

第42 B号溝土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・炭化物微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量

第43号溝土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子微量

第44号溝土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック中量

第46号溝土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 黄褐色粘土小ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 にぶい黄褐色 黄褐色粘土小ブロック多量, 焼土粒子微量

第48号溝土層解説

- 1 極暗褐色 焼土小ブロック少量, ローム中ブロック微量

第51号溝土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量

第52号溝土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化物・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック中量

表7 溝一覧表

溝番号	位置	走行方向	規模				壁面	断面	出土遺物	備考 新旧関係(古一新) その他
			長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)				
12A	I7c8~H9f6	N-75°-E	(75.4)	0.64~1.30	0.10~0.62	13~46	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	SI319, SB115→本跡→SD31・50 SD13・17と平行 H9g2以東については第159集参照
12B	I7c8~I8a2	N-68°-E	17.4	0.58~0.94	0.19~0.47	10~28	緩斜	U字状	土師器, 須恵器, 縄文土器	本跡→SD50
13	I7d9~H9h5	N-73°-E	(68.8)	0.30~1.10	0.15~0.80	20~37	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	SI319・359, SB115→本跡→SD31 SD12A・17と平行 H9i2以東については第159集参照
17	I8a7~H9i6	N-73°-E	(38.6)	0.50~1.22	0.20~0.42	33~63	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	SI350, SB115→本跡→SD31 SD12A・13と平行 H9i2以東については第159集参照
24	C7d7~D7e3	N-12°-E N-23°-E	(86.0)	0.46~1.03	0.60~0.77	10~28	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	SI207・217・218・220・221・417・ 422・SD25→本跡 D7f6以南については第159集参照
25	D7f5~D8f5 D8f5~E8d7 E8d4~E8d7	N-90°-E N-28°-W N-80°-E	(82.4)	0.38~1.32	0.15~0.55	15~32	緩斜	U字状	土師器, 須恵器, 陶器	SI200・211・226~228, SB80→ 本跡→SD24 D7f5~D8f4間については第159集参照
26	E6c1~E7e2 E6c1~E5h0	N-79°-W N-9°-E	(67.2)	0.48~1.18	0.30~0.83	8~22	緩斜	U字状	土師器, 須恵器, 陶器	SI232・255・432~434, SH2, SB129→本跡
27A	F7b4~F7i5 F7i5~F8i0	N-8°-W N-85°-E	(58.4)	0.47~1.15	0.10~0.67	15~35	緩斜	U字状	土師器, 須恵器, 陶器, 磁器	SI286・288・299・336, SD27C・27D・33→本跡
27B	F7b3~F7c4	N-12°-W	(7.0)	0.58~1.13	0.13~0.19	22~25	緩斜	U字状	土師器, 須恵器, 陶器	
27C	F7h4~G7e5	N-10°-W	(36.0)	0.33~0.91	0.21~0.72	5~15	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	SI282→本跡→SD27A
27D	F7i5~G7d6	N-10°-E	(18.0)	0.27~0.45	0.13~0.25	5~10	緩斜	U字状	土師器, 須恵器, 陶器	SI282, SB93→本跡→SD27A
27F	H7c8~H7c0	N-78°-E	(7.2)	0.45~0.55	0.22~0.28	5	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	SI325→本跡
28	D5j3~E5a3	N-5°-E	(6.8)	0.65~1.65	0.23~0.62	22	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	SI453→本跡
29	E5c2~E5d2	N-20°-E	(6.7)	1.30~2.14	1.01~1.47	16~44	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	SI249, SB89・90→本跡
30	E8h3~E8g8	N-83°-E	23.0	0.31~0.58	0.10~0.30	5~15	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	
31	I7a0~I7c0	N-4°-E	(6.4)	0.38~0.61	0.16~0.32	10	緩斜	U字状		SD12A・12B・13→本跡→SD34
33	F7i9~H8i2	N-0° N-15°-W	(90.0)	0.25~0.85	0.10~0.43	5~15	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	SI311・337, SB97・102→本跡→SD27A
34	I7d8~I8a6 I8a6~J8a8	N-70°-E N-14°-W	(73.6)	0.58~1.40	0.12~0.76	45~86	緩斜, 一部箱葉 部外傾	U字状	土師器, 須恵器, 縄文土器, 陶器	SI333・348・359, SD31→本跡
35	G6a4~G6d0 G6d0~G6g9	N-67°-W N-20°-E	(43.0)	1.38~2.10	0.30~0.90	37	緩斜	U字状	土師器, 須恵器, 陶器, 磁器	SD36→本跡
36	G6d0~G7h7	N-64°-W	(35.6)	2.12~2.81	0.36~0.92	28	緩斜	U字状	土師器, 須恵器, 陶器, 磁器	SI276, SB119→本跡→SD35
37	C6e8~C6g8	N-0°	(8.8)	1.19~1.32	0.96~1.17	18~30	緩斜	U字状	土師器, 須恵器, 陶器	SI385→本跡
38	B2g7~B2j7	N-11°-E	(13.0)	0.60~0.75	0.28~0.41	17	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	SI480, SD43→本跡
40	F4d9~F4j7	N-26°-E	(29.0)	0.38~0.84	0.21~0.66	15~25	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	
41	D3b0~D4b3	N-84°-W	(15.5)	0.62~1.04	0.22~0.52	7~14	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	
42A	C3b0~C4f0	N-90°-E	(38.8)	0.39~1.33	0.14~0.59	7~12	緩斜	U字状		
42B	C4f6~C4i6	N-5°-E	10.4	0.40~0.97	0.17~0.54	7~17	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	SI469→本跡
43	B2i2~B2j9 B2j9~C2i9	N-78°-W N-9°-E	(37.2)	0.45~2.31	0.18~0.78	13~35	緩斜	U字状	土師器, 須恵器, 陶器, 磁器	SI480, SB142→本跡→SD38
44	B4b4~B4e4	N-0° N-76°-W	(11.8)	0.52~1.52	0.24~0.34	5~28	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	



溝番号	位置	走行方向	規模				壁面	断面	出土遺物	備考 新旧関係(古→新) その他
			長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)				
46	H7b2~H7d2	N-11°-E	6.3	0.87~1.85	0.51~1.20	20~46	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	SI202・306・375→本跡
47	E7g0~E8j1	N-9°-W	(18.6)	0.65~1.17	0.32~0.75	16~21	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	SI251→本跡
48	D9e1~D9i2	N-7°-W	(19.6)	(0.30~0.73)	(0.22)	(38)	緩斜	V字状か	土師器, 須恵器	SI396, SB63→本跡
49	E7f4~E8e1	N-86°-E	(15.5)	0.23~0.70	0.10~0.40	10	緩斜	U字状		SI359, SD12A・12B→本跡
50	I7b8~I7d8	N-13°-W	(8.4)	0.51~0.68	0.38~0.40	12~20	緩斜	U字状	土師器, 須恵器	SI330→本跡→SF1
51	H10f4~H10f5	N-73°-E	(3.5)	0.72~1.20	0.46~0.81	30	緩斜	U字状	土師器, 須恵器, 陶器, 磁器	SI330→本跡→SF1
52	H10f4~H10f5	N-73°-E	(3.5)	0.74~1.02	0.28~0.35	43	外傾	V字状	土師器, 須恵器, 陶器, 磁器	

### (3) 道路跡

調査区域の南東部から道路跡1条を検出した。以下、検出された道路跡の特徴や出土遺物について記載する。

#### 第1号道路跡 (第705図)

**位置** 調査区域の南東部, H10f4~H10f5区。

**重複関係** 第330号住居跡, 第51・52号溝の覆土上で硬化面が確認されており, 本跡が新しい。

**規模と形状** 確認できた部分は長さ3.5m, 最大幅3.3mで, 直線的に延びており, 東端部及び西端部は調査区域外に続いている。路面は平坦である。

**方向** N-73°-E

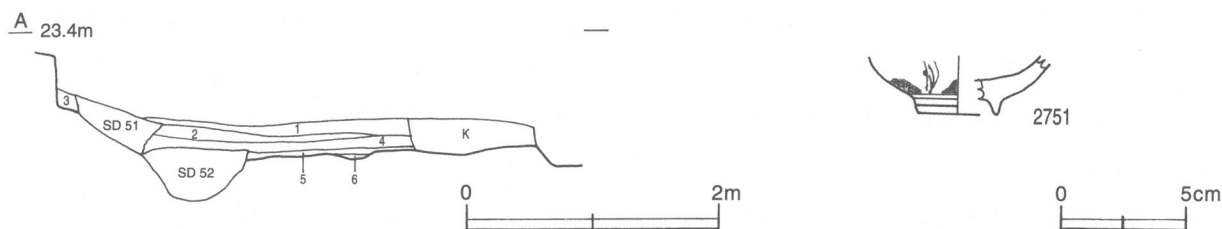
**土層** 6層からなる。第1層から第6層まで, 硬く締まっている。人為的に構築された様子が確認されなかったことから, 自然堆積した暗褐色土が, 人の往来と共に踏み固められ, 硬化したと思われる。

##### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量, 炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化物少量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量, 炭化物微量

**遺物** 陶器片21点, 磁器片16点, 土師器片38点, 須恵器片30点, 灰釉陶器片1点が出土している。第705図2751の磁器染付丸碗は, 土層断面図中, 第4層から出土している。土師器片・須恵器片・灰釉陶器片は混入したものと思われる。

**所見** 本跡の時期は, 重複関係や出土した陶磁器片から近世以降と推定される。



第705図 第1号道路跡・出土遺物実測図

## 第1号道路跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第705図 2751	染付丸碗 磁器	B (2.4) D [3.2] E 0.6	底部から体部にかけての破片。高台は、断面三角形。体部は内彎して立ち上がる。	外面に雪輪草花文、体部下端に圈線。高台に二重圈線を染め付ける。透明釉施釉。	緻密 灰白色 釉 透明 良好	10% 肥前系

## 6 その他の遺構と遺物

### (1) 遺物包含層

調査区域南部の谷部で、遺物包含層を確認した。以下、その特徴と出土遺物について記載する。

#### 遺物包含層（第706～709図）

**位置** 調査区域の南部，H7区。

**重複関係** 平安時代の第499号住居跡が土層断面図中，第1層の中層で確認されている。

**規模と形状** 調査区域の南部中央から，調査区域外の南西方向に向かって谷津が形成されている。調査した範囲での規模は，東西約16m，南北約18m，厚さは最大で70cmである。

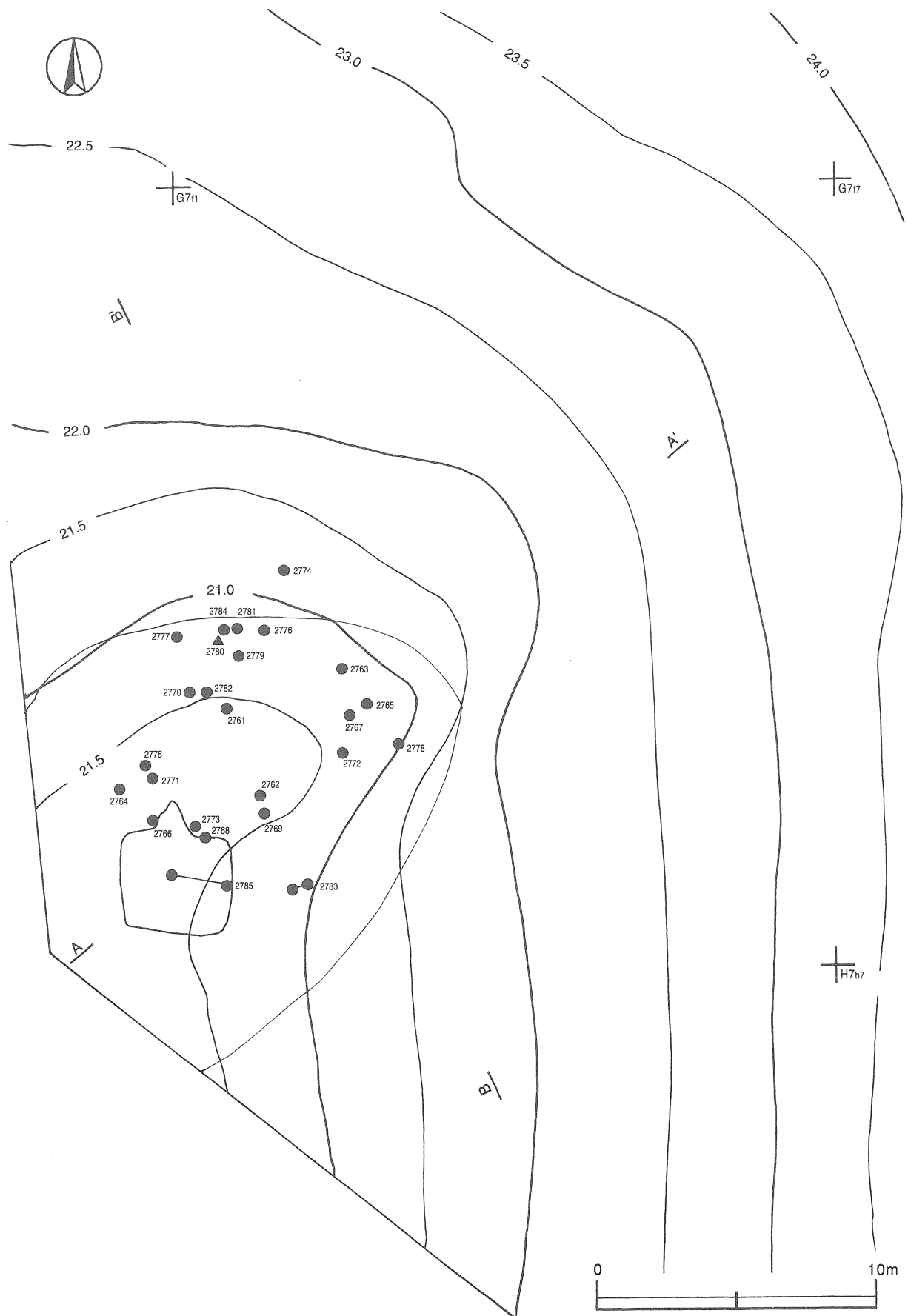
**土層** 7層に分層された。谷底に向かって自然に流れ込んだ，暗褐色土や褐色土及び黒褐色土の堆積層である。

#### 土層解説

- |       |  |       |                    |
|-------|--|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・<br>焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量  |
| 2 褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量                          | 5 黒褐色 | ローム粒子少量            |
| 3 褐色  | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量                        | 6 黒褐色 | ローム粒子少量，ローム小ブロック微量 |
|       |  | 7 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量   |

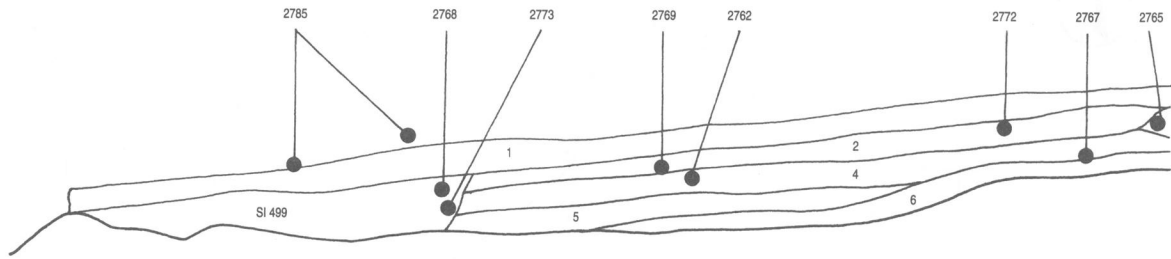
**遺物** 縄文土器片127点，土師器片594点，須恵器片569点，灰釉陶器片13点，緑釉陶器片4点，土製品3点（玦状耳飾，羽口，支脚），黒曜石（剥片）4点，鉄滓4点が出土している。土層断面図中，第2～4層からは縄文時代の遺物が多く出土しており，第1層からは奈良・平安時代の遺物が多く出土している。第708・709図2761～2780は，縄文時代の遺物である。2761～2768は，胎土に繊維が含まれる前期前葉の黒浜式の土器である。2761～2767は胴部片で，2768は底部片である。2761・2762はLRの単節縄文が施されている。2763はRLの単節縄文が施されている。2764・2765はRの無節縄文が施されている。2766はRとLの無節縄文により，羽状縄文が施されている。2767・2768は櫛状工具により，文様を描出している。2769～2775は，前期後葉の浮島Ⅱ式の土器である。2769～2771は口縁部片で，口唇部外面に縦位のキザミが施されている。2769・2770の口縁部には貝殻波状文が，2771の口縁部には半截竹管による押し文が施されている。2772～2775は胴部片で，肋のある貝により貝殻波状文が施されている。2776・2777は，中期初頭と思われる土器である。2776は口縁部片で，口唇部はわずかに肥厚している。口縁部には縄の原体により圧痕文が施され，隆帯を巡らしている。2777は頸部片で，沈線により文様を描出している。2778は，中期後葉の加曾利EⅢ式の口縁部付近の破片である。沈線により文様を描出しており，地文としてLRの単節縄文が施されている。2779は，後期前葉と思われる胴部片で，LRの単節縄文が施されている。2780は，前期前葉の土製の玦状耳飾片である。第709図2781～2785は，奈良・平安時代の土器である。2781は土師器皿，2782は須恵器杯，2783は須恵器高台付杯，2784は須恵器皿，2785は緑釉陶器皿である。

**所見** 本包含層の堆積時期は，出土土器及び重複関係から，第5～7層が縄文時代前期前葉以前，第2～4層が縄文時代前期，第1層が縄文時代中期以降と推定される。

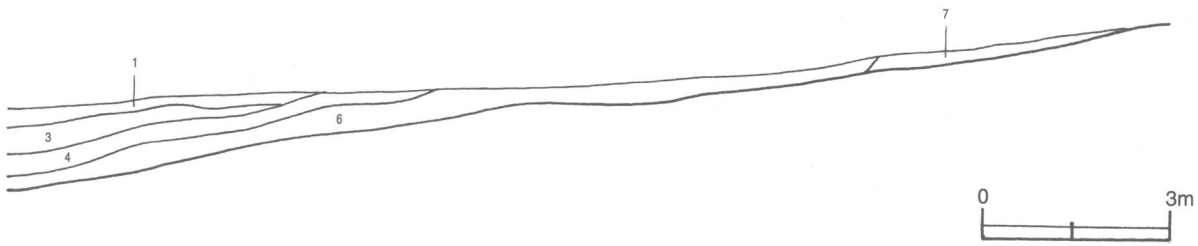


第706図 遺物包含層実測図 (1)

A 23.0m



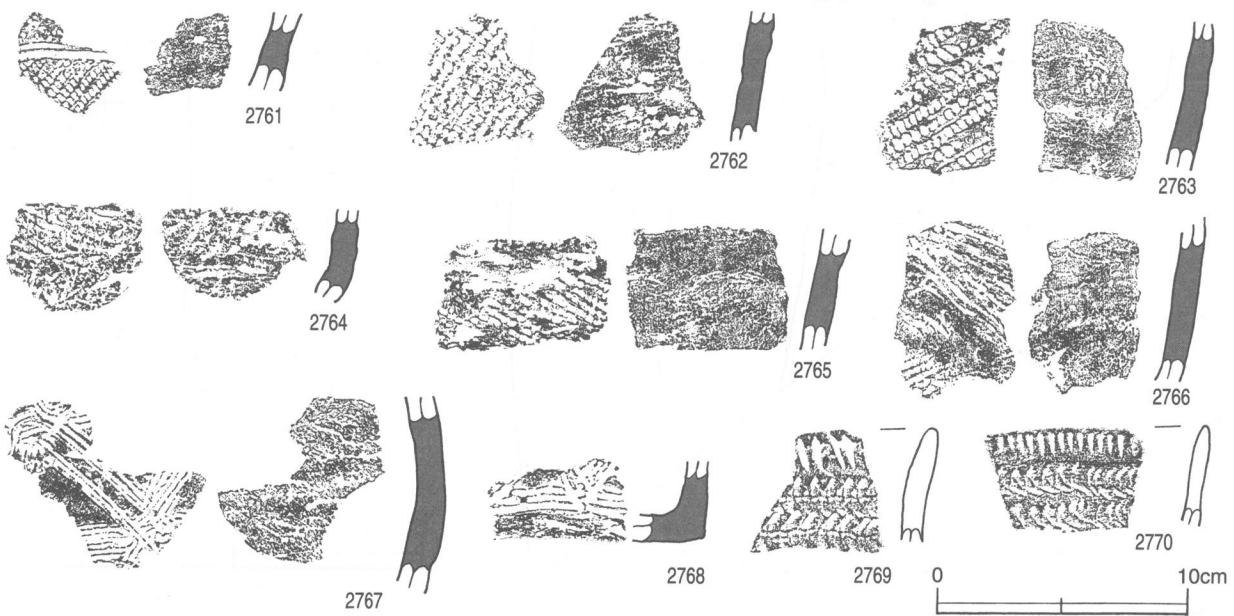
A'



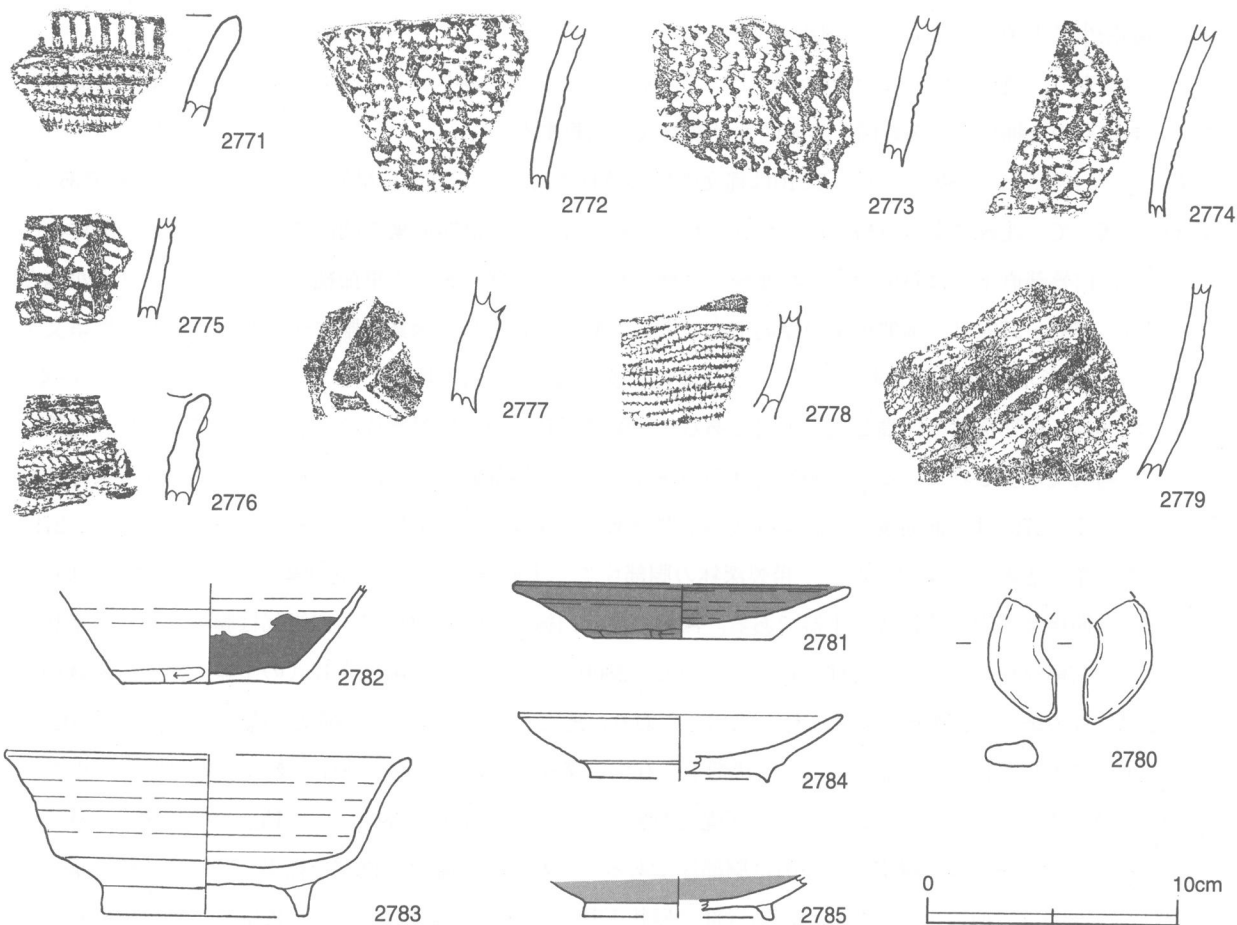
B 23.0m



第707图 遺物包含層実測図 (2)



第708图 遺物包含層出土遺物実測図 (1)



第709図 遺物包含層出土遺物実測図 (2)

遺物包含層出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第709図 2780	块状耳飾	(4.9)	(2.7)	1.0	(12.7)	土製	ほぼ円形を呈し、中央に小孔を有する。一端に小孔に連続する切り込みがある。	40% P L 263
遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴		手法の特徴		胎土・色調・焼成	備考
第709図 2781	皿 土師器	A [13.5] B 2.1 C [7.1]	底部から口縁部の破片。体部は外方に大きく開き、口縁部はわずかに外反する。		口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部1方向のへら削り。内・外面黒色処理。		砂粒・石英 黒色 普通	40% P L 263
2782	坏 須恵器	B (3.9) C 7.0	口縁部欠損。体部は外傾して立ち上がる。		体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部多方向のへら削り。		砂粒・雲母・長石・ 石英、灰色 普通	60% P L 263 内面漆付着
2783	高台付坏 須恵器	A [16.0] B 6.4 D 7.8 E 1.4	口縁部一部欠損。底部と体部の境に稜をもつ。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。高台はほぼ垂下する。		口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端・底部回転へら削り。高台貼り付け後、ロクロナデ。		砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい褐色 不良	60% P L 263
2784	高台付皿 須恵器	A [12.8] B 2.5 D [7.0] E 0.4	底部から口縁部の破片。体部は外方に大きく開き、口縁部にいたる。		口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転へら削り後、高台貼り付けロクロナデ。		砂粒・長石・石英 灰色 普通	25% P L 263
2785	皿 緑釉陶器	B (1.4) D [7.6] E 0.6	底部から体部にかけての破片。体部は外方に大きく開く。高台は角高台。		体部内・外面ロクロナデ。底部回転へら削り後、高台貼り付け、ナデ。体部内・外面、高台部施釉。		緻密、胎土 灰白色 萌葱色釉 良好	10% P L 263

(2) 遺構外出土遺物 (第710・711図)

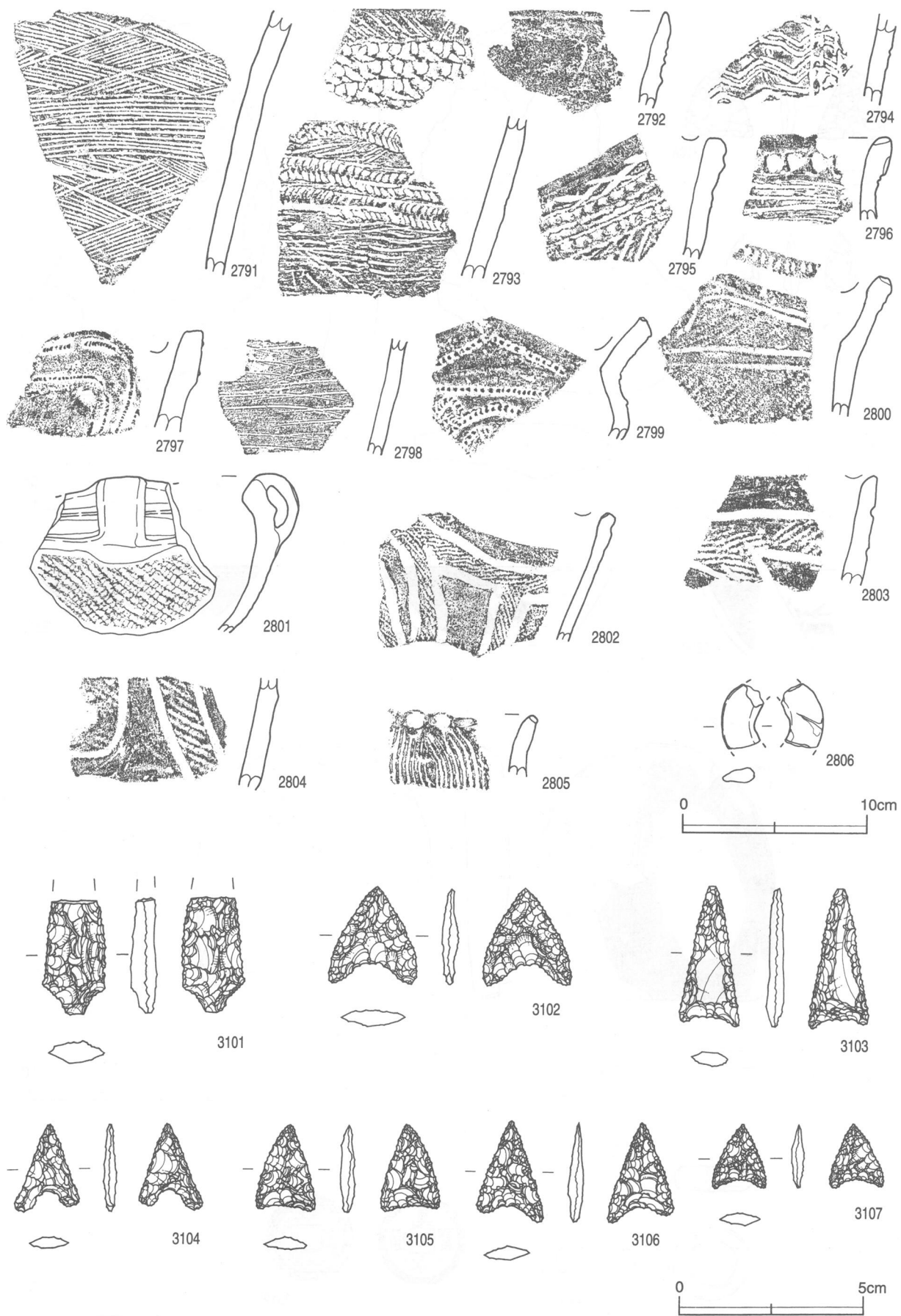
今回の調査で、遺構に伴わない遺物が出土している。ここではその中から、縄文時代から近世までの遺物で特色のあるものを抽出し、拓影図、実測図及び観察表で記載する。

第710・711図2791～2806, 3101～3110は縄文時代の遺物である。2791は、早期中葉の三戸式の土器である。深鉢の胴部片で、沈線による斜格子目文が施されている。2792は、前期前葉の関山式の土器である。深鉢の口縁部片で、口唇部直下には斜位の沈線が連続して施され、その下部にR Lの単節縄文を用いたループ文が施されている。2793・2794は、前期後葉の浮島Ⅰ式の土器である。いずれも深鉢の胴部片である。2793は捺糸文を地文とし、変形爪形文が施されている。2794は捺糸文を地文とし、半截竹管により文様を描出している。2795・2796は、前期後葉の浮島Ⅱ式の土器である。2795は深鉢の波状口縁部片で、半截竹管による平行沈線を巡らし、刺突文が施されている。2796は深鉢の口縁部片で、口唇部直下に凹凸文を巡らし、横方向に条線文が施されている。2797は、前期後葉の諸磯b式の土器である。深鉢の口縁部片で、浮線文が施されている。2798は、前期後葉と思われる土器である。粗製深鉢の胴部片で、半截竹管により平行沈線が横位に施されている。2799は、前期後葉の十三菩提式の土器である。深鉢の波状口縁部付近の破片で、口縁部は胴部からくの字状に外傾する。結節浮線文により、文様を描出している。2800は、中期中葉の阿玉台Ⅳ式の土器である。深鉢の波状口縁部付近の破片で、沈線により文様を描出しており、地文としてR Lの単節縄文が施されている。2801は、中期後葉の加曾利EⅣ式の土器である。橋状把手を有する深鉢の口縁部付近の破片である。橋状把手を起点に、2条の隆帯を巡らし、その下部にL Rの単節縄文が施されている。2802～2804は、後期前葉の称名寺Ⅰ式の土器である。2802・2803は口縁部片、2804は胴部片である。それぞれ沈線で区画文を描出し、区画文外を磨り消している。2805は後期の土器と思われ、口縁部に櫛状工具で条線文が施されている。2806は、前期後葉の土製の塊状耳飾片である。3101は有茎尖頭器、3102～3109は石鏃、3110は礫器である。2807は古墳時代の遺物で、耳環である。2808～2811は奈良・平安時代の遺物である。2808・2809は土師器坏で、それぞれ体部外面に墨書が認められる。2810は緑釉陶器緑彩花文椀、2811は土師器二面硯である。2812は近世の遺物で、古銭である。

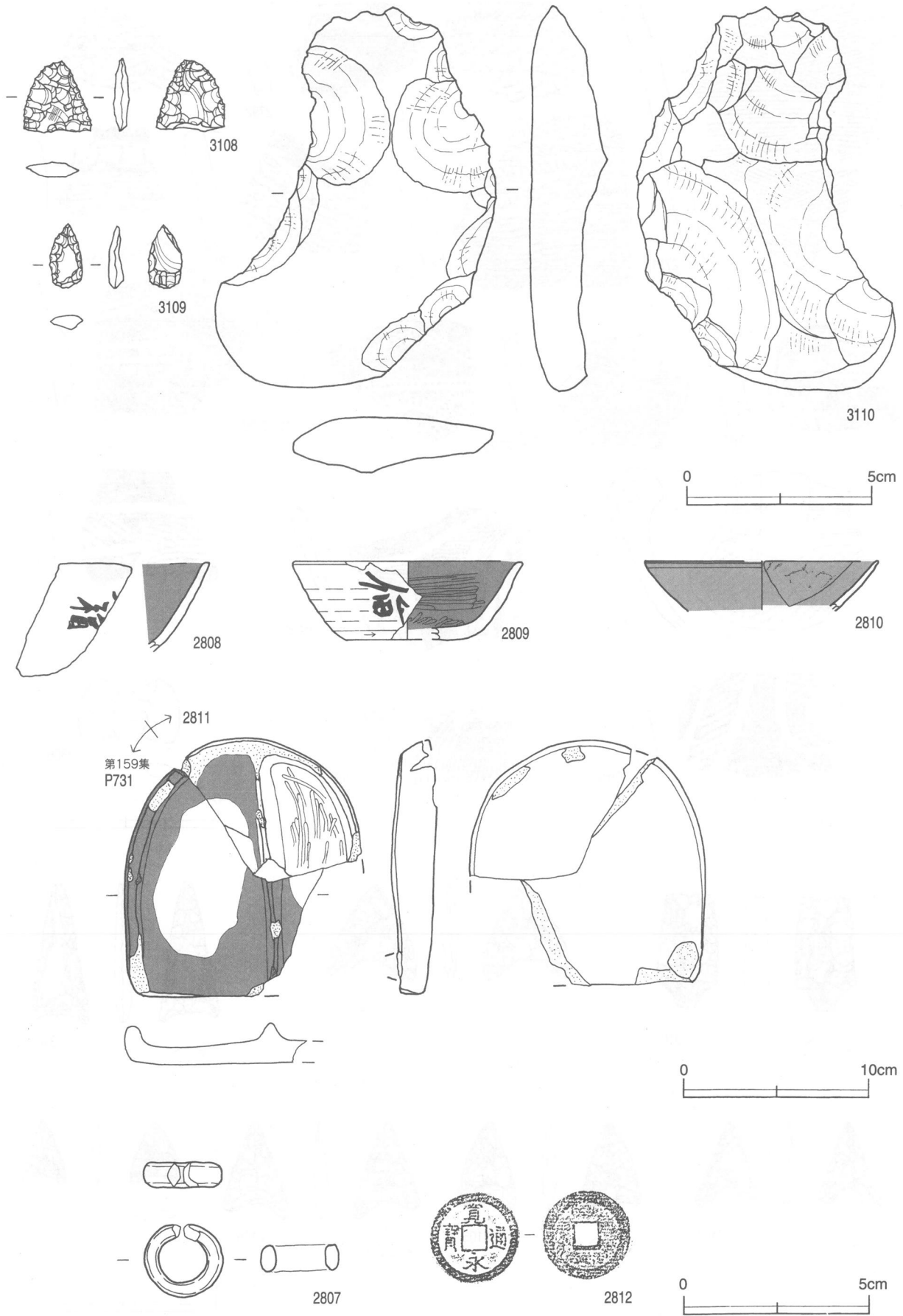
遺構外出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第710図2806	塊状耳飾	(3.5)	(2.2)	0.8	(5.4)	土製	ほぼ円形を呈し、中央に小孔を有する。	20% P L 264

遺物番号	器種	計測値				石材	出土地点		剥離と調整の特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		出土地区	標高(m)		
3101	有茎尖頭器	(3.1)	1.6	0.7	4.0	チャート	SI394覆土中	—	両面にわたって平坦な加工が施され、断面形態がレンズ形に調整されている。両側縁は直線状に調整され、基部は緩やかな弧状の挟りによって作出されている。基部と先端部を欠損している。両面にわたって稜線上に茶色の物質が付着している。	P L 264



第710图 遺構外出土遺物実測図 (1)



第711図 遺構外出土遺物実測図 (2)



遺物番号	器種	計測値				石 材	出 土 地 点		特 徴	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		出土地区	標高(m)		
第710図 3102	石 鏃	2.7	2.4	0.4	1.8	チャート	SI465覆土中	—	凹基無茎の石鏃。両面にわたって調整が施されている。幅広とりわけ基部付近に最大幅が認められる。	P L 264
3103	石 鏃	3.9	1.7	0.5	2.4	安山岩	SI444覆土中	—	凹基無茎の石鏃。表裏にわたって周縁部に鋸歯状の調整が施され、平面形態は二等辺三角形を呈する。	P L 264
3104	石 鏃	2.4	1.7	0.4	1.3	安山岩	SI272覆土中	—	凹基無茎の石鏃。両面にわたって調整が施されている。左右のかえしは丸くて、非対称形である。	P L 264
3105	石 鏃	2.4	1.6	0.4	1.1	チャート	SI288覆土中	—	凹基無茎の石鏃。両面にわたって調整が施されている。先端部はやや右側縁側に彎曲している。	P L 264
3106	石 鏃	2.8	1.8	0.5	1.2	チャート	表 採	—	凹基無茎の石鏃。両面にわたって調整が施されている。左右のかえしが非対称形を呈する。	P L 264
3107	石 鏃	1.8	1.4	0.4	0.5	黒曜石	表 採	—	凹基無茎の石鏃。両面にわたって調整が施されている。小形で左右対称形を呈する。	P L 264
3108	石 鏃	1.9	1.7	0.4	1.2	黒曜石	SB92覆土中	—	下端を欠損するため判然としないが、石鏃ないし尖頭器の可能性がある。両面にわたって平坦な調整が施されている。やや左右非対称である。	
3109	石 鏃	1.7	0.9	0.4	0.5	チャート	SB111覆土中	—	小形の縦長削片を素材とし、極めて細やかな調整により、両面にわたり周辺加工を施し、尖頭部を作出している。背面には自然面を残し、主要削離面にやや彎曲している。	
3110	磔 器	11.1	7.7	2.2	128.3	ホルンフェルス	表 採	—	扁平な磔を半割して素材とし、背面には大きく自然面を残している。調整は大きく平坦な削離によってなされ、両側縁は鋭く加工されている。下端は未調整で、丸みを帯びている。	

遺物番号	器種	計測値				材 質	特 徴	備 考
		径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第711図2807	耳 環	2.1	0.7	0.4	8.7	金 銅	表面に緑青。金の含有量が少ないためか、銀色をしている。	P L 264

遺物番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
2808	坏 土 師 器	B (4.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き、黒色処理。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	5% P L 248 体部外面墨書 横位「□福」
2809	坏 土 師 器	A [12.1] B 4.2 C [6.4]	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部・体部外面ロクロナデ。体部下端・底部回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き、黒色処理。	砂粒・雲母・長石 赤色粒子 にぶい橙色、良好	40% P L 248 体部外面墨書 横位「福」
2810	緑彩花文碗 緑釉陶器	A [12.6] B (2.7)	口縁部の破片。口縁部外面に1条の沈線が巡る。	口縁部内面に緑彩花文を施す。	緻密、胎土 灰白色 被熱のため釉はオリ ーブ黒色、文様は暗 オリーブ色	5%
2811	土 師 器 二 面 硯	奥行き(7.6) 幅 (8.8) 高さ(2.3)	硯面部の破片。硯首にかけ縁帯が巡り、中央に内堤を設ける。	硯面部内・外面ナデ。縁帯部内面から内堤にかけヘラ磨き。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	40% P L 264 墨痕、第159 集P731と接合

遺物番号	銭 名	計測値				初鑄年(時代, 年号)	特 徴	備 考
		径(cm)	孔(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
2812	寛永通寶	2.2	0.6×0.6	0.1	3.1	江戸, 元禄10年(1697年)	銅銭, 背面無文。	P L 264

表8 縄文時代住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設							出土遺物	備 考 新旧関係(古→新),その他
							壁溝	柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	炉	覆土		
316	H8g2	N-61°-E	楕円形	4.13×3.57	8~14	平坦	-	-	-	-	-	1	自然	縄文土器, 黒曜石	
445	F4e0	N-13°-W	隅丸長方形	4.56×3.20	13~20	凸凹	-	1	-	12	-	1	自然	縄文土器, 黒曜石	本跡→SK1001
495	B6j9	N-44°-E	[楕円形]	[4.02]×[3.69]	0~5	平坦	-	-	-	-	-	1	不明	縄文土器	

表9 古墳時代住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設							出土遺物	備 考 新旧関係(古→新),その他
							壁溝	柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	炉・竈	覆土		
319	I8a3	N-11°-W	長方形	5.57×4.55	10	平坦	一部	4	2	6	-	炉1	自然	土師器, 球状土錘	本跡→SD12A・13 SK1603・1677・1678
322	H710	N-9°-W	方形	5.40×5.22	30~36	平坦	全周	4	2	-	1	炉1	自然	土師器, 不明土製品, 石製模造品	
341	I8e1	N-16°-W	方形	7.00×6.74	10~36	平坦	全周	2	2	1	-	炉1	自然	土師器	本跡→SI318→SK1600
344	I8f3	N-5°-W	長方形又は方形	2.88×(1.94)	4~18	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	土師器	
347	I8h4	N-58°-W	不明	(5.35)×(4.57)	10~17	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	土師器	
355	I9e3	N-18°-W	方形	3.74×3.68	12~22	平坦	全周	-	1	2	-	炉1	自然	土師器	本跡→SK1680
386	G6e6	N-42°-W	方形又は長方形	5.57×(4.12)	14	平坦	-	-	-	2	-	竈1	自然	土師器	本跡→SI385

表10 奈良・平安時代住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設						覆土	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新),その他
								柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	棚	竈			
1	C4d7	N-2°-E	長方形	2.86×2.57	2~9	平坦	-	-	-	-	-	-	1	不明	土師器, 須恵器, 緑釉陶器	SI472→本跡
7	C5f2	N-8°-W	長方形	4.96×3.18	47~53	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	
26	C6c7	N-5°-E	方形	3.05×3.00	4~18	平坦	一部	-	-	1	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 鉄滓	SI27→本跡
27	C6c6	N-10°-E	方形	3.47×3.40	16~17	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器	本跡→SI26
53	D615	N-10°-E	方形	4.32×4.12	46~52	平坦	一部	1	-	3	-	両棚	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 砥石, 陶器	SI54→本跡
56	D6h8	N-2°-E	方形	7.08×6.95	41~51	平坦	全周	4	-	4	3	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 瓦, 土製品(支脚, 土錘, 紡錘車), 火打金	
65	D6i0	N-0°	方形	3.45×3.25	37	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 鉄滓, 黒曜石	本跡→SK128, 131, 132
80	C6f9	N-9°-W	方形	3.68×3.40	24~32	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	
84A	D4g7	N-93°-E	方形	3.30×3.03	28~20	起伏	-	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	SI84B→本跡→SB14
84B	D4g7	N-5°-W	長方形	4.97×3.95	45~47	平坦	全周	4	-	1	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 門, 陶器	本跡→SI84A, SB14
85	D4j9	N-25°-W	長方形	3.94×3.45	13~19	平坦	一部	2	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器	

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設						覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新),その他
								主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	棚	竈			
103	F4j1	N-23°-W	方 形	5.42×5.22	42	平坦	一部	3	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 砥石, 鉄鏃, 刀子, 鉸具, 陶器	SI102→本跡→SI101
163	G8d3	N-13°-E	[長方形]	4.86×(4.30)	15~22	パツ状	一部	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 砥石, 釘	
171	G8j7	N-1°-E	方 形	5.15×5.10	50	平坦	全周	4	-	1	1	-	1	不明	不明鉄	本跡→SI170, 173
172	G8j9	N-6°-W	長 方 形	6.09×5.93	40~42	平坦	中央部が びくねり	2	-	2	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	本跡→SK573 (平成10年度調査)
176	G8d8	N-37°-E	方 形	3.10×2.90	20~22	平坦	全周	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 鉄器, 不明鉄	本跡→SI166
194	F8f0	N-13°-W	長 方 形	4.67×4.05	25~29	平坦	全周	4	-	3	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 鉄鏃, 刀子	本跡→SI366
200	E8c6	N-3°-W	方 形	3.42×3.32	10~32	平坦	一部	-	-	1	-	-	1	自然	土師器, 須恵器	本跡→SD25
202	E7e0	N-8°-W	方 形	5.57×5.28	28~40	わずかに 起伏	一部	4	-	1	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 砥石, 石製 紡錘車, 刀子, 鉸具(銅製), 銅器, 鉄滓	SI306→本跡→SI203, SB64, SK606・1951・1952, SD47・49
203	E7e9	N-0°	長 方 形	4.92×3.96	17~20	ゆるい 傾斜	一部	4	-	1	1	-	2	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 砥石, 石製紡錘車, 刀子, 釘, 不明鉄	SI202・396→本跡→SD49
211	D8j6	N-14°-W	方 形	6.74×6.18	35~54	平坦	全周	4	-	1	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 土製品(壺状土錘・不明)	本跡→SD25
226	D8f3	N-6°-W	方 形	3.46×3.19	8~29	平坦	一部	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器	本跡→SD25
227	D8f2	N-11°-W	方 形	3.76×3.42	35~44	平坦	一部	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器	SI413→本跡→SD25
228	D7f0	N-8°-W	長 方 形	4.72×3.90	35~45	平坦	一部	1	-	3	-	-	1	自然	土師器, 須恵器	本跡→SB80, SK680, SD25
229	E5d5	N-71°-E	方 形	4.73×4.38	41~52	平坦	全周	4	-	-	1	-	2	人為	土師器, 須恵器, 灰釉, 瓦, 土製品(紡 錘車・土錘・支脚), 鉄鏃, 刀子, 鉄滓	SI244→本跡→SK775
232	E6d1	N-11°-W	方 形	3.17×3.14	30~45	平坦	一部	4	-	1	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 砥石	SI255→本跡→SD26
233	E5d9	N-6°-W	方 形	3.13×2.92	22~33	平坦	一部	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 砥石, 鉄鏃, 雲母片岩	
234	E5e9	N-10°-W	方 形	3.53×3.26	50~60	平坦	一部	-	-	-	-	両棚	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 釘, 刀子, 鉸具, 雲母片岩	
235	E5h0	N-20°-W	方 形	2.65×2.65	56~58	平坦	[全周]	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 陶器	
236	E5e8	N-20°-W	方 形	2.77×2.68	25~35	平坦	全周	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 刀子, 鉄滓	本跡→SK738
237	E5f7	N-20°-W	長 方 形	3.85×3.26	40~47	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 砥石, 刀子, 釘	
238	E5g8	N-20°-W	長 方 形	4.12×3.62	40~50	平坦	一部	-	-	-	1	両棚	1	自然	土師器, 須恵器, 土玉, 刀子, 釘	
239	E5g7	N-18°-W	[長方形]	3.37×2.96	20~32	平坦	[全周]	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器	
240	D5a9	N-0°	長 方 形	4.96×4.34	30~40	平坦	一部	-	-	8	3	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 瓦, 土製紡錘車, 刀子, 釘	SI246→本跡
241	E5a9	N-2°-W	方 形	4.65×4.36	50~55	平坦	全周	4	-	1	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 鉄鏃, 刀子, 不明鉄	本跡→SI246
242	E5a5	N-11°-E	[長方形]	4.96×3.35	28~38	平坦	一部	-	-	2	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉, 瓦, 管状土錘, 砥石, 雲母片岩	SI254→本跡→SI243
243	E5b4	N-5°-W	方 形	4.01×3.86	37~42	平坦	一部	2	-	-	1	東棚	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 緑釉陶器, 土製紡錘車, 土錘, 釘, 雲母片岩	SI242→本跡→SK757
244	E5c4	N-12°-W	[長方形]	3.45×3.05	45	平坦	[全周]	-	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 土玉	本跡→SI229
245	G5e6	N-16°-W	不 明	[5.05]×(1.55)	4	平坦	-	2	-	-	-	-	1	不明	土師器, 須恵器	
246	E5a9	N-8°-W	長 方 形	(3.90)×3.40	48	わずかに 起伏	一部	-	-	2	-	西棚	1	自然	土師器, 須恵器, 瓦, 刀子	SI241→本跡→SI240
247	E8a9	N-11°-W	方 形	4.98×4.77	3~35	平坦	一部	2	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 石製紡錘車	本跡→SK1868
248	E5h6	N-21°-W	方 形	3.46×3.37	10~18	平坦	全周	2	-	1	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 不明鉄, 鉄滓	本跡→SK1248
249	E5d1	N-79°-E	[長方形]	(4.62)×(4.20)	20	パツ状	一部	-	-	1	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 緑 釉陶器, 瓦, 鏃, 不明鉄, 陶器	本跡→SD28

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設						覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新),その他
								柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	棚	竈			
250	D5h0	N-9°-W	方 形	3.14×2.92	40	平坦	-	-	-	1	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 刀子	
251	D9h1	N-18°-W	[方 形]	3.80×(3.10)	32~55	平坦	[全周]	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 刀子	本跡→SD48
252	E5c7	N-7°-W	[方 形]	3.136×(2.20)	2~10	平坦	-	-	-	-	-	-	-	不明	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 管状土錘, 鉄鏃, 鉄滓	本跡→SK752
253	E7g1	N-3°-W	方 形	3.15×2.95	40	平坦	-	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 雲母片岩	SI264→本跡
254	E5b5	N-13°-W	方 形	3.55×3.34	30~45	平坦	全周	-	-	-	-	-	1	不明	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	本跡→SI242・243
255	E6d1	N-94°-E	[方 形]	[3.10]×[2.85]	7	平坦	-	-	-	2	-	-	1	不明	土師器, 須恵器, 白磁	本跡→SI232, SD26, SK749, 750
257	F5a0	N-0°	長 方 形	3.51×2.72	36~45	平坦	-	-	-	15	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 瓦	
258	F6e2	N-20°-W	長 方 形	4.15×3.66	45~50	平坦	一部	4	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 帶金具, 鎌, 陶器	本跡→SB85
259	F5e0	N-2°-W	長 方 形	4.51×3.73	38~41	平坦	一部	3	-	2	1	-	-	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 不明鉄	SK896→本跡→SB85, SK898
260	F5g0	N-2°-W	方 形	5.00×4.73	35~40	平坦	一部	4	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 緑釉陶器, 鎌, 不明鉄	本跡→SB85
261	F6h4	N-17°-E	[方 形]	(3.69)×(2.62)	15~24	パッド状	一部	-	-	2	-	-	-	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 鉄鏃, 刀子, 椀状滓, 瓦	
262	F5h7	N-8°-E	方 形	4.05×3.85	40~50	平坦	全周	4	-	2	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	本跡→SK944・945
263	F5j7	N-10°-W	方 形	3.82×3.55	35~40	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 刀子, 鉄先	
264	E7g2	N-80°-E	[長方形]	[2.75]×[2.29]	43	平坦	[全周]	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器	本跡→SI253
265	G5b6	N-8°-E	方 形	4.42×4.39	23	平坦	-	4	-	2	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 鉄斧	
266	F6c7	N-98°-E	方 形	2.92×2.87	41~	平坦	一部	2	-	1	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 陶器, 銅製品	SI267→本跡
267	F6c7	N-7°-E	[長方形]	[3.68]×[2.81]	38~40	平坦	[全周]	-	-	-	1	-	1	不明	土師器, 須恵器	本跡→SI266
268A	F7b1	N-19°-E	方 形	2.80×2.58	8~15	平坦	一部	2	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 陶器, 椀状滓	SI268B→本跡→SK803
268B	F7b1	N-115°-E	方 形	[2.38]×[2.30]	8~15	平坦	-	2	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器	本跡→SI268A
269	F6d0	N-10°-W	方 形	4.68×4.68	50~65	平坦	全周	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 陶器, 鎌, 瓦	
270	F6g7	N-22°-E	方 形	4.50×4.20	7~14	平坦	一部	4	1	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	本跡→SK808
271	F6g8	N-13°-E	方 形	4.05×3.77	50~55	平坦	全周	3	-	-	1	両棚	1	自然	土師器, 須恵器, 刀子, 釘	
272	F7e1	N-19°-W	方 形	4.24×3.92	49~60	平坦	全周	4	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 刀子, 釘	
273	F6g0	N-4°-W	方 形	3.12×2.99	39~45	平坦	全周	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 陶器	
274	F7g2	N-0°	方 形	2.95×2.95	28~30	凹凸起伏	-	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 鉄滓	SI275・335→本跡
275	F7g2	N-0°	長 方 形	4.60×3.80	47~63	平坦	全周	-	-	1	1	1	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 刀子, 釘	SI335→本跡→SI274
276	G7f5	N-9°-E	方 形	4.41×4.28	14~22	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 砥石, 陶器	本跡→SD36
277	F6i8	N-6°-W	長 方 形	3.97×3.52	35~44	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	本跡→SK811
278A	F6i6	N-19°-E	方 形	[6.01]×[5.95]	9~16	平坦	一部	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 管状 土錘, 刀子, 棒状金具羽釜	SI278B→本跡→SK807・ 812・814
278B	F6i6	N-19°-E	長 方 形	5.95×5.25	9~16	平坦	全周	2	-	-	1	-	1	人為		
279	F6j8	N-11°-E	方 形	3.48×3.24	8~30	平坦	一部	1	1	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 陶器	
280	G7b1	N-4°-E	[方 形]	2.81×(2.65)	6~8	平坦	-	-	-	2	-	-	1	自然	土師器, 須恵器	本跡→SB87

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設						覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新),その他
								主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	棚	竈			
281	G7d3	N-16°-E	方 形	6.36×6.36	21~73	平坦	全周	4	-	-	1	1	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 瓦, 鎌	
282	G7a5	N-10°-E	方 形	3.91×3.68	14~22	平坦	全周	-	-	1	-	-	1	人為	土師器, 須恵器	本跡→S K833・834, SD27 C・27D
283	G7e5	N-5°-E	方 形	3.53×3.52	15~47	平坦	全周	3	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	
284	G7d6	N-17°-W	方 形	3.86×3.83	15~34	平坦	一部	4	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	
285	F7d3	N-10°-E	長 方 形	3.15×2.75	25~28	平坦	一部	2	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 緑釉陶器	
286	F7d4	N-7°-W	方 形	4.25×4.25	20~41	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 刀子, 鎌	本跡→SD27A
287	F7b7	[N-10°-W]	不 明	4.14×(2.18)	48~53	平坦	全周	1	-	3	1	-	-	人為	土師器, 須恵器	
288	F7f5	N-0°	長 方 形	5.52×4.85	27~54	平坦	全周	4	-	2	1	-	1	自然	土師器, 須恵器	本跡→SD27A
289	F7b9	[N-10°-W]	不 明	4.32×(2.62)	47~50	平坦	全周	2	-	3	1	-	-	自然	土師器, 須恵器	
290	F7c9	N-15°-E	長 方 形	2.60×2.27	10~14	平坦	-	1	-	1	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 刀子	
291	F8d8	N-20°-E	方 形	2.89×2.77	15~18	平坦	一部	1	-	1	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 石製支脚	
293	F8d2	N-5°-E	長 方 形	3.72×3.28	28~30	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 鉄鎌, 鉄滓	
294	F7d0	N-15°-W	方 形	3.16×3.05	26~35	平坦	全周	2	-	1	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	
295	F7g0	N-9°-W	方 形	3.78×3.61	48~60	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 刀子, 鉄鎌	
296	F8f3	N-12°-W	方 形	4.49×4.38	40~45	平坦	全周	4	-	2	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	
297	F7h0	N-13°-E	方 形	2.97×2.97	27~35	平坦	一部	2	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	
298	F7h8	N-8°-W	長 方 形	3.18×2.75	32~35	平坦	-	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器	本跡→SB105, SK858
299	F8i1	N-7°-W	方 形	3.17×3.17	10~34	平坦	一部	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器	本跡→SD27A
300	F8h4	N-11°-W	長 方 形	4.31×3.56	25~45	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	
301	F7j7	N-16°-E	方 形	4.20×3.60	8~20	凹凸	一部	1	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 鎌	本跡→SK854
302	G8b1	N-9°-W	方 形	4.77×4.70	27~43	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 管状土錘, 石製紡錘車	
303	F8f4	N-12°-W	方 形	4.10×4.06	40~56	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 石器	SI374→本跡
304	H8d1	N-3°-W	[方 形]	2.81×(2.68)	5~9	凹凸	-	-	-	-	1	-	1	不明	土師器, 須恵器	
305	G8c2	N-34°-E	方 形	3.14×3.06	27~39	平坦	一部	-	-	-	-	2	1	人為	土師器, 須恵器, 緑釉陶器, 砥石	
306	E7f0	N-5°-W	長方形又は 方形	2.80×(0.78)	24~30	起伏	一部	-	-	-	-	-	-	自然	土師器, 須恵器	本跡→SI202, SD47
307	G7f0	N-11°-E	長 方 形	4.16×3.57	31~36	平坦	全周	1	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	
308	G8g1	N-2°-E	長 方 形	3.58×3.21	14~21	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 土製支脚	本跡→SK1580
310	G7h9	N-28°-E	長 方 形	3.36×3.01	12~42	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器	本跡→SI337
311	G7i9	N-5°-E	長 方 形	3.03×2.34	46~50	平坦	全周	2	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器	本跡→SI337, SD33
312	G8i3	N-5°-E	長 方 形	3.58×2.65	45~56	平坦	全周	1	-	-	1	2	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 砥石	SB54→本跡→SK1571
313	H8a2	N-16°-E	方 形	3.36×3.16	20~37	平坦	一部	1	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 鉄鎌, 釘	SB94→本跡
314	H8a4	N-3°-E	方 形	3.41×3.41	32~35	平坦	全周	-	-	1	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	SB92→本跡

住居跡 番 号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設						覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新),その他
								主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	棚	竈			
315	H8f4	N-3°-E	長方形	3.33×2.87	35~45	平坦	全周	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 雲母片岩	SB91→本跡
317	H8i3	N-5°-W	方 形	6.40×6.40	52~57	平坦	全周	4	-	1	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 土製紡錘車, 鎌, 鉸具	本跡→SK1585
318	I8e1	N-1°-W	方 形	3.06×2.98	31~37	平坦	一部	-	-	2	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 鉄鍔, 刀子, 鉄製紡錘車, 不明鉄, 雲母片岩	SI341→本跡→SK1600・1601
320	D8a2	N-7°-W	方 形	5.20×4.92	30~42	平坦	一部	4	-	1	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 土製紡錘車, 砥石, 鉄滓	本跡→SI418・419
321	C8I3	N-0°	長方形	2.43×2.17	2~6	平坦	一部	-	-	-	-	-	1	不明	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	本跡→SK1877, SI323との 新旧関係不明
323	C8i4	N-0°	方 形	2.68×2.60	10~15	平坦	一部	-	-	-	-	-	-	人為	土師器, 須恵器, 管状土鍔, 鉄鍔	本跡→SK1947, SI321との 新旧関係不明
324A	B4b7	N-95°-E	長方形	3.36×2.90	33~36	平坦	-	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器	SI324 B→本跡
324B	B4b7	N-10°-E	長方形	3.36×(2.20)	13~27	ほぼ 起伏	-	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 瓦	本跡→SI324 A
325	H7c9	N-13°-E	方 形	3.60×3.52	29~32	平坦	[全周]	-	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	本跡→SD27 F
326	H7b9	N-7°-E	[方 形]	(4.15)×(3.80)	-	平坦	-	-	-	-	-	-	1	-	土師器, 須恵器	
327	G7j7	N-0°	[方 形]	4.15×(3.72)	9~31	平坦	一部	4	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 陶磁器片	
328	D8a5	[N-2°-W]	長方形又 は 方 形	(3.30)×(1.88)	34~42	平坦	一部	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 鉄滓	SB145→本跡→SI411, SK1887
329	D7e5	N-21°-W	方 形	4.18×3.96	12~30	ほぼ 平坦	一部	4	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 刀子	本跡→SI416
330	H10f5	N-23°-W	長方形	4.78×4.25	20~25	平坦	[全周]	4	-	1	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 緑 釉陶器, 瓦, 土製支脚, 釘, 鉄滓	本跡→SD51・52, SF 1
331	B6g1	N-0°	方 形	3.41×3.35	38~43	平坦	全周	-	-	1	1	-	1	自然	土師器, 須恵器	
332	B6g2	N-0°	方 形	3.06×2.95	25~33	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 手鎌	
333	J8a8	N-0°	方 形	2.64×2.40	-	平坦	一部	-	-	-	-	-	-	-	土師器	本跡→SD34
335	F7g1	N-0°	方 形	5.35×5.23	56~58	平坦	一部	4	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 刀子, 不明鉄鍔	本跡→SI274・275, SB84
336	F7i6	N-86°-E	方 形	3.78×3.64	20~30	平坦	一部	1	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器	本跡→SD27 A
337	G7I9	N-18°-E	方 形	3.52×3.35	14~16	平坦	一部	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器,	SI310・311→本跡→SD33
338	H8d6	N-2°-E	方 形	3.86×3.58	40~48	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 刀子, 棒状金具, 銅製品, 陶器	SB123→本跡
339	H8b6	N-13°-W	長方形	6.50×6.16	47~52	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 土製支脚, 刀子	SB122・123→本跡
340	H8d7	N-0°-	方 形	4.32×4.10	48~52	平坦	全周	-	-	2	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 土製品(紡錘車, 管状土鍔, 支脚), 鉄鍔, 不明鉄	SB122→本跡
342	I8d4	N-10°-E	長方形	3.93×3.53	48~58	平坦	全周	-	-	3	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 椀状滓, 鉄滓	SB112→本跡
343	I8c5	N-10°-E	方 形	2.72×2.60	36~46	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	
345	I8g3	N-1°-E	方 形	4.10×3.97	24~28	平坦	全周	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 刀子	本跡→SK1692
346	I8h3	N-17°-E	長方形	3.53×2.99	13~18	平坦	全周	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	
348	I8d6	N-7°-W	[方 形]	3.70×[3.70]	10	平坦	-	-	-	-	-	-	-	人為	土師器, 須恵器	本跡→SD34
349	H8e1	N-0°	長方形	3.45×2.98	6	平坦	-	-	-	-	-	-	-	不明	土師器, 須恵器, 砥石	
350	I8b7	N-11°-W	方 形	3.24×3.24	5~10	平坦	-	3	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器	本跡→SK1682・1683, SD17
351	I8c9	N-12°-E	長方形	5.64×4.13	25~35	平坦	全周	-	-	1	1	[西棚]	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 刀子, 不明鉄	
352	I8g0	N-8°-E	長方形	3.38×2.82	28~39	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 鉄斧, 刀子, 椀状滓, 鉄滓	

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設						覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新),その他
								主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	棚	竈			
353	J9a1	N-8°-W	長方形	3.64×3.40	26~30	平坦	全周	-	-	1	1	[西棚]	1	自然	土師器, 須恵器, 釘, 不明鉄, 鉄滓	
354	I9d2	N-8°-W	長方形	4.26×3.84	21~32	パッド	一部	-	-	-	-	[西棚]	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 刀子, 不明鉄, 鉄滓	
356	I9f8	N-77°-E	長方形	3.22×2.84	18~38	平坦	全周	2	-	2	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	SB117→本跡→SK1679
357	I9g3	N-13°-W	長方形	3.76×3.36	16~18	平坦	一部	2	-	2	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 土製紡錘車	
358	H9j4	N-8°-E	長方形	3.81×3.33	25~37	平坦	一部	-	-	-	1	[西棚]	1	自然 人為	土師器, 須恵器, 釘, 鉄鏝, 不明鉄	
359	I7d9	N-3°-E	[方形]	3.00×(2.00)	10	平坦	-	-	-	-	-	-	1	不明	土師器, 須恵器	本跡→SD13・34・50
360	G10d1	N-0°	長方形	3.28×2.85	12~30	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器	
361	G9e9	N-6°-E	方形	4.30×4.30	6~8	平坦	一部	-	-	1	1	-	1	不明	土師器, 須恵器, 鉄滓	
362	G10e1	N-13°-W	長方形	3.95×3.55	12~22	平坦	一部	-	-	1	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 砥石	
363	G9f9	N-15°-W	方形	3.38×3.35	24~25	平坦	一部	-	-	1	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 土製支脚	
364	G10f2	N-0°	方形	4.45×4.32	2~36	平坦	一部	2	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器	
365	G9g9	N-22°-W	方形	3.00×2.80	24~28	平坦	-	-	-	1	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 土製紡錘車	
366	F8g0	N-0°	方形	3.41×3.14	19~30	平坦	一部	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 鉸具	SI194→本跡
367	G10j2	N-17°-W	長方形	3.55×3.22	6~24	平坦	一部	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 刀子, 鏝, 不明鉄	
368	H10c3	N-24°-W	方形	3.00×2.79	18~36	平坦	一部	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 石製支脚	SI369→本跡
369	H10c3	N-24°-W	長方形	2.70×2.20	10~27	平坦	-	-	-	-	-	-	-	人為	土師器, 須恵器	本跡→SI368
370	H10e3	N-13°-W	長方形	2.72×2.47	24~44	平坦	一部	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 刀子	本跡→SI371
371	H10e3	N-12°-W	長方形	3.44×2.83	7~10	起伏	一部	-	-	-	-	-	1	不明	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 釘	SI370→本跡
372	F8c8	N-10°-W	方形	3.82×3.70	29~36	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器	
373	F8d6	N-9°-W	方形	3.52×3.48	18~21	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 土製支脚	
374	F8f5	N-0°	不明	2.68×(1.35)	20~27	平坦	[全周]	-	-	-	-	-	1	人為	土師器	本跡→SI303
375	E7h0	N-4°-W	長方形	2.87×2.40	36~51	平坦	全周	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器	本跡→SD47
376	F8h6	N-9°-E	方形	3.50×3.36	22~24	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 不明鉄製品	
377	F8j6	N-12°-W	方形	[2.54]×[2.54]	-	平坦	-	-	-	-	-	-	-	-	土師器, 須恵器	本跡→SI378, SK1820
378	F8j6	N-13°-W	方形	3.75×3.60	29~40	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	SI377→本跡→SB126
379	F8j9	N-82°-E	方形	2.67×2.44	29~31	平坦	全周	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器	SI380→本跡
380	F8j0	N-3°-W	方形	4.56×4.51	45~47	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 土製支脚, 火打金	本跡→SI379
381	G8b9	N-0°	長方形	4.20×3.57	47~53	平坦	全周	4	-	1	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 鉄鏝	
382	G8c9	N-0°	方形	2.86×2.85	34~39	平坦	全周	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器	
383	G6h0	N-7°-E	長方形	3.90×3.50	26~36	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	本跡→SI384
384	G6g0	N-104°-E	[方形]	(3.53)×(3.50)	5~31	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 鉄滓	SI383→本跡
385	G6f8	N-11°-E	[方形]	(3.43)×(3.43)	19	平坦	-	-	-	-	-	-	1	不明	土師器, 須恵器	SI386→本跡→SD37

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設						覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新),その他
								主柱	貯蔵穴	ピット	入口	棚	竈			
387	G5c4	N-1°-W	方 形	4.78×4.75	11~46	平坦	全周	4	-	3	1	1	1	自然	土師器,須恵器,刀子,釘	本跡→SK967
388	G6b6	N-7°-E	方 形	4.33×4.22	14~28	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	自然	土師器,須恵器	
389	F5j5	N-9°-E	方 形	3.35×3.15	32~37	平坦	[全周]	-	-	-	-	-	1	自然	土師器,須恵器,灰釉陶器	本跡→SK987・1002
390	H7d2	N-0°	不 明	(4.20)×(3.20)	8~45	平坦	一部	-	-	1	-	-	1	人為	土師器,須恵器,土製支脚	
391	E8h9	N-20°-W	方 形	4.04×3.72	21~27	平坦	一部	2	-	-	-	-	1	人為	土師器,須恵器	
392	E8i7	N-14°-W	方 形	3.22×3.18	28~33	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	人為	土師器,須恵器,砥石,刀子	
393	E7i8	N-6°-W	方 形	3.94×3.86	28~30	平坦	一部	4	-	-	1	-	1	人為	土師器,須恵器	本跡→SK1833A・1833B・1833C
394	E7i4	N-9°-W	長 方 形	3.84×3.20	36~50	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	人為	土師器,須恵器	
395	E7f5	N-11°-W	方 形	3.60×3.54	35~43	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	人為	土師器,須恵器,灰釉陶器	
396	E7f8	N-10°-W	方 形	3.20×3.02	28~37	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	自然	土師器,須恵器,土製支脚,刀子	本跡→SI203,SB63,SK1904・1905→SD49
397	B6h7	N-13°-E	長 方 形	3.80×3.20	4~8	平坦	-	-	-	-	-	-	1	不明	土師器,須恵器,瓦	本跡→SK1294~1297
398	B6h6	N-11°-W	方 形	2.75×2.65	10~14	平坦	一部	-	-	1	1	-	1	自然	土師器,須恵器,灰釉陶器	本跡→SK1298
399	B6i2	N-17°-E	長 方 形	4.32×3.76	26~32	平坦	一部	-	-	1	1	-	1	自然	土師器,須恵器,灰釉陶器,砥石,刀子,鉄鏝	
400	E8f4	N-16°-W	方 形	4.92×4.52	45~50	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	自然	土師器,須恵器,灰釉陶器,小札,鉄鏝,鎌,釘,火打金	
401	E8e6	N-30°-W	方 形	4.52×4.30	28~38	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	自然	土師器,須恵器,土製支脚,刀子,不明鉄	
402	D8g9	N-0°	方 形	3.84×3.80	10~20	平坦	一部	-	-	1	1	-	1	自然	土師器,須恵器,刀子	
403	D8g8	N-90°-E	方 形	3.52×3.20	23~34	平坦	一部	-	-	1	1	-	1	自然	土師器,須恵器,釘,鉄滓	
404	D8h6	N-0°	長 方 形	3.96×3.24	15~22	平坦	一部	-	1	-	-	-	1	人為	土師器,須恵器,鉄鏝,椀状滓	
405	C6f7	N-14°-E	方 形	3.42×3.28	30~32	平坦	一部	-	-	1	1	西棚	1	自然	土師器,須恵器,砥石,鉄鏝	
406	D8e7	N-4°-E	長 方 形	6.08×5.10	9~29	平坦	一部	4	-	3	1	-	1	自然	土師器,須恵器,灰釉陶器,砥石,刀子,鉄滓	
407	D8e0	N-4°-E	方 形	2.52×2.49	32~34	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	自然	土師器,須恵器	本跡→SB130
408	D8b9	N-5°-W	方 形	3.34×3.24	35~37	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	人為	土師器,須恵器,瓦,鎌	本跡→第1号地下式墳
409	D8j9	N-12°-W	方 形	3.84×3.68	8~30	平坦	一部	3	-	-	-	-	1	自然	土師器,須恵器,灰釉陶器,鉄鏝	SI410→本跡
410	D8a7	N-13°-W	[長方形]	3.38×(2.84)	5~9	平坦	-	-	-	-	1	-	1	不明	土師器,須恵器,釘	本跡→SI409
411	D8a6	N-4°-E	方 形	3.48×3.34	23~30	平坦	一部	4	-	-	1	-	-	自然	土師器,須恵器,瓦	SI328→本跡→SB145
412	D8e5	N-1°-E	方 形	3.36×3.12	28~35	平坦	全周	2	-	-	1	-	1	自然	土師器,須恵器,灰釉陶器,管状土鏝,砥石,不明鉄	
413	D8e2	N-4°-W	方形又は長方形	2.90×(2.15)	40~44	平坦	-	-	-	-	-	-	1	自然	土師器,須恵器,土製支脚,砥石	本跡→SI227
414	D8d2	N-4°-W	方 形	3.10×3.03	26~30	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	人為	土師器,須恵器,緑釉陶器,不明鉄	本跡→SK1937・1959・1960
415	B8e1	N-10°-W	長 方 形	3.60×3.26	15~21	起伏	一部	-	-	-	-	-	1	自然	土師器,須恵器,管状土鏝,釘	
416	D7e6	N-0°	方 形	3.72×3.40	15~37	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	人為	土師器,須恵器,瓦	SI329→本跡
417	D7b7	N-89°-E	長 方 形	6.48×4.40	32~40	平坦	一部	-	-	4	-	-	1	人為	土師器,須恵器,緑釉陶器,羽口,鉄鏝,鉄滓,椀状滓,粒状滓,鍛造銅片	本跡→SD24 鍛冶炉1
418	D8c2	N-5°-W	長 方 形	4.20×3.42	34	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	自然	土師器,須恵器,灰釉陶器,銭貨	SI320→本跡



住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設						覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新),その他
								主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	棚	竈			
419	D8a2	N-9°-E	長方形	3.60×3.20	5~20	平坦	-	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 土製品, 瓦, 土製支脚, 雲母片岩	SI320→本跡
420	D8a1	N-0°	方形	2.80×2.72	34~40	平坦	一部	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 土製紡錘車, 鉄鏃, 刀子, 鉄滓	
421	C7j7	N-103°-E	長方形	3.73×3.40	55~62	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 土製支脚, 釘, 椀状滓	
422	C7e9	N-0°	方形	3.50×3.30	34	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 土製紡錘車	本跡→SD24
423	C7i5	N-6°-W	方形	3.77×[3.73]	2~3	平坦	一部	-	-	2	1	-	1	不明	土師器, 須恵器	
424	C8f4	N-6°-W	長方形	3.41×2.56	16	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 石製支脚	
425	E6a0	N-4°-E	方形	3.77×3.50	21~25	平坦	一部	-	-	3	1	東棚	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 鉄鏃, 刀子, 鎌, 釘, 不明鉄	
426	E6a9	N-8°-W	長方形	3.55×3.08	22~27	凹凸	一部	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 瓦, 雲母片岩, 縄文土器	
427	E6c9	N-11°-W	方形	3.10×3.00	40~45	起伏	一部	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 瓦, 刀子	
428	E6c7	N-2°-E	方形	2.75×2.70	4~10	平坦	-	-	-	2	-	-	1	不明	土師器, 須恵器, 不明鉄, 陶器	本跡→SI429A
429A	E6c8	N-10°-E	長方形	4.65×3.48	18~24	平坦	-	-	-	3	1	東棚	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 釘, 雲母片岩, 陶器	SI428・429B→本跡
429B	E6c8	N-88°-W	方形	3.14×2.73	5~10	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	不明	土師器	本跡→SI429A
431	E6a5	N-7°-W	方形	3.73×3.60	41~45	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 鉄鏃, 鎌, 釘, 陶器	
432	E6d6	N-5°-W	方形	2.80×2.78	7~12	平坦	-	-	-	1	1	-	1	不明	土師器, 須恵器, 砥石, 雲母片岩, 陶器	SB129→本跡→SD26
433	E6d4	N-10°-W	方形	3.52×3.50	37~50	平坦	[全周]	3	-	3	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 土製紡錘車, 鉄鏃	本跡→第6号方形竪穴状遺構, SB129, SD26
435	E6e3	N-3°-W	[方形]	3.15×(2.00)	40	平坦	[全周]	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器	
436	G5c2	N-0°	方形	6.58×6.1	3~60	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 石製紡錘車, 鉄鏃	本跡→SK983
437	G4c0	N-11°-E	[方形]	5.84×(4.93)	42	平坦	[全周]	4	-	1	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	
438	G4a9	N-46°-E	不整形	3.82×3.42	30~45	平坦	-	4	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器	
439	G5a1	N-0°	方形	3.20×3.20	5~20	平坦	-	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器	SI450→本跡→SK972・SK979
440	F5j1	N-10°-E	方形	5.80×4.80	26~45	平坦	全周	4	-	2	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	本跡→SI450
441	F4j9	N-10°-W	方形	3.55×3.35	14~32	平坦	一部	3	-	1	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 瓦, 不明鉄鏃, 刀子, 鎌	
442	F4h9	N-3°-W	長方形	2.95×2.69	30~40	平坦	全周	-	-	1	-	両棚	1	人為	土師器, 須恵器, 瓦	
443	F5h2	N-7°-W	方形	3.32×3.15	12~17	平坦	一部	-	-	2	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 釘, 鉄滓	SI444→本跡
444	F5g2	N-4°-W	方形	4.00×3.70	43~48	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 刀子, 釘, 不明鉄	本跡→SI443
446	F5e2	N-3°-W	方形	3.34×3.24	40	平坦	一部	-	-	3	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 雲母片岩	
447	F5f4	N-11°-W	長方形	4.40×3.91	40	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 刀子, 鉄鏃, 雲母片岩	SI448→本跡→SK980・981
448	F5d5	N-0°	方形	6.85×6.70	35~43	平坦	[全周]	4	-	1	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 鉄滓, 雲母片岩	本跡→SI447・452, SK1022・102
449	F5a6	N-8°-W	方形	3.49×3.37	50	平坦	[全周]	1	-	5	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 瓦	本跡→SK957
450	G5a2	N-89°-E	[長方形]	3.60×3.04	16~35	平坦	-	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 瓦, 砥石	SI440→本跡→SI439, SK979・975・972
451	F3f0	N-0°	[長方形]	4.92×4.66	20~45	平坦	[全周]	3	-	5	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 瓦, 球状土錘, 砥石, 刀子	
452	F5e5	N-0°	[長方形]	3.17×3.00	35~40	平坦	-	-	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 雲母片岩	SI448→本跡

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設						覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新),その他
								主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	棚	竈			
453	E5a3	N-105°-W	長方形	4.55×4.40	19~21	平坦	全周	-	-	7	1	北棚	1	人為	土師器,須恵器,灰釉陶器,瓦,土製品(紡錘車,管状錘,支脚),刀子,鍬具,銅製品	本跡→SD28
454	E4a0	N-1°-E	方形	2.87×2.76	10~17	平坦	ペリ状	-	-	-	-	-	1	不明	土師器,須恵器,灰釉陶器	SI455→本跡
455	D4j0	N-2°-E	方形	3.54×3.54	20~25	平坦	全周	-	-	1	1	-	1	自然	土師器,須恵器,灰釉陶器,土製支脚,石製紡錘車	本跡→SI454
456	D4d7	N-14°-W	方形	2.80×2.62	24~34	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	自然	土師器,須恵器	
457	D3d0	N-12°-E	方形	3.56×3.42	9~11	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	自然	土師器,須恵器	
458	D3c0	N-13°-E	方形	4.9×4.77	20~30	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	人為	土師器,須恵器	
459	D4b9	N-0°	方形	3.47×3.37	6~26	平坦	一部	-	-	1	-	-	1	自然	土師器,須恵器,灰釉陶器,緑釉陶器,刀子,鎌,鏝先	SI460→本跡
460	D4b9	N-6°-W	方形	5.56×5.26	44~69	平坦	全周	4	-	8	1	-	1	自然	土師器,須恵器,灰釉陶器,石製紡錘車,砥石,鉄鏝,鎌,銅椀	本跡→SI459
461	D4b5	N-16°-E	長方形	3.40×2.87	20~23	平坦	全周	2	-	-	1	-	1	自然	土師器,須恵器,灰釉陶器	SB134・135→本跡
462	C4h9	N-3°-W	方形	4.30×4.24	32~40	平坦	全周	-	-	2	1	-	1	人為	土師器,須恵器,灰釉陶器,不明土製品,鉄鏝	SI475→本跡
463	C4j0	N-5°-W	方形	3.36×3.08	3~7	平坦	-	-	-	-	-	-	2	不明	土師器,須恵器,灰釉陶器,刀子	
464	D4a0	N-3°-E	方形	3.22×2.92	12~24	平坦	全周	-	-	1	1	-	1	自然	土師器,須恵器	本跡→第7号方形竈穴状遺構
465	D5b1	N-6°-W	方形	3.70×3.70	30~32	平坦	一部	-	-	3	1	-	1	人為	土師器,須恵器,灰釉陶器	SI466→本跡
466	D5a1	N-2°-W	方形	3.11×2.88	18~20	平坦	全周	-	-	1	-	-	1	自然	土師器,須恵器,灰釉陶器	本跡→SI465
467	D5d1	N-3°-E	方形	2.66×2.66	20~27	平坦	一部	-	-	1	1	-	1	人為	土師器,須恵器,刀子,鉄鏝	SB131→本跡
468	C4i5	N-11°-E	方形	3.53×3.26	14~15	平坦	全周	-	-	5	1	-	1	自然	土師器,須恵器	
469	C4g5	N-0°	方形	3.37×3.20	18~26	平坦	一部	-	-	-	-	-	1	人為	土師器,須恵器	本跡→SK1160・1171,SD42B
470	C3g0	N-13°-E	方形	3.00×2.56	10~14	平坦	-	-	-	-	-	-	1	自然	土師器,須恵器,雲母片岩	
471	C4e5	N-14°-W	方形	3.98×3.90	27~36	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	人為	土師器,須恵器,砥石,鉄鏝	本跡→SI472
472	C4e6	N-2°-W	長方形	3.35×3.03	18~36	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	人為	土師器,須恵器,灰釉陶器	SI471→本跡→SI 1
473	C4c5	N-13°-W	長方形	5.28×4.14	20~38	平坦	全周	4	-	1	1	-	1	人為	土師器,須恵器,灰釉陶器,刀子	
474	C4d3	N-15°-W	長方形	4.65×4.18	43~52	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	人為	土師器,須恵器,土玉,鉄鏝,鎌,不明鉄	
475	C4h9	N-1°-E	方形	3.08×2.90	18~26	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	人為	土師器,須恵器	本跡→SI462, SK1142・1143
476	C4g9	N-7°-W	方形	3.33×3.23	22~27	平坦	一部	-	-	1	1	-	2	自然	土師器,須恵器,灰釉陶器,瓦	本跡→SI477
477	C4h0	N-1°-E	長方形	3.00×2.53	14~19	平坦	全周	-	-	2	-	-	1	自然	土師器,須恵器,灰釉陶器	SI476→本跡
478	C4b2	N-4°-E	[方形]	(3.24)×3.20	28~36	平坦	一部	-	-	1	1	-	-	自然	土師器,須恵器,瓦	
479	C2a7	N-21°-W	長方形	4.24×3.52	16~36	平坦	全周	-	-	-	1	-	1	人為	土師器,須恵器	
480	B2i7	N-3°-E	長方形	5.03×4.13	25~31	平坦	全周	4	-	1	1	-	1	自然	土師器,須恵器,土製支脚,石製紡錘車	本跡→SD38・43
481	B519	N-12°-E	長方形	3.57×3.10	28~35	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	人為	土師器,須恵器,土製紡錘車,鉄製紡錘車,不明鉄	本跡→SB147
482	B5h9	N-6°-E	方形	2.40×2.33	14~18	平坦	-	-	-	2	1	-	1	自然	土師器,須恵器,羽口,刀子,椀状滓,鉄滓,粒状滓,鍛造剥	本跡→SB147 鍛冶炉 1
483	B3j1	N-2°-E	方形	2.92×2.70	7~25	平坦	-	-	-	-	1	-	1	人為	土師器,須恵器,鉄滓	
484	B3j2	N-11°-E	方形	2.925×2.74	8~12	平坦	-	-	-	-	-	-	-	不明	土師器,須恵器	

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設						覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新),その他
								主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	棚	竈			
485	B3j6	N-3°-E	長方形	5.10×3.90	20~42	平坦	-	-	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器	
486	C3b3	N-38°-E	方形	2.87×2.64	12~26	平坦	一部	-	-	1	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	SI488→本跡
487	C3b6	N-11°-E	長方形	4.13×3.65	15~20	平坦	全周	4	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器	
488	C3b3	N-6°-E	方形又は 長方形	4.48×(2.43)	23~56	平坦	[全周]	2	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	本跡→SI486
489	B5d1	N-10°-W	方形	3.40×3.30	32~40	平坦	一部	-	-	2	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 砥石	SI490→本跡
490	B5e1	N-6°-W	方形	3.20×3.16	34~38	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 砥石	本跡→SI489
491	B5f1	N-6°-E	長方形	3.68×3.35	45~50	平坦	全周	-	-	2	1	両棚	1	自然	土師器, 須恵器, 鉄製紡錘車, 釘, 鉄滓	
492	B5g4	N-13°-E	長方形	3.03×2.69	30~35	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	
493	B5e7	N-4°-E	方形	3.16×2.98	12~18	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器	
494	B5h6	N-9°-E	長方形	4.00×3.56	28~30	平坦	一部	-	-	-	1	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 土製紡錘車	SI496→本跡
496	B5h7	N-2°-E	[方形]	2.90×(1.03)	26~31	平坦	一部	-	-	-	-	-	1	自然	土師器, 須恵器	本跡→SI494
497	B3h6	N-5°-E	方形又は 長方形	3.50×(1.70)	18~40	平坦	一部	-	-	-	-	-	-	人為	土師器, 須恵器	
499	H7b1	N-0°	長方形	3.90×3.50	47~53	平坦	-	-	-	1	-	-	1	自然	土師器, 須恵器, 鉄鏝, 不明鉄	

表11 方形竪穴状遺構一覧表

遺構 番号	位 置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	ピット	覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新),その他
1	E 6 g2	N-9°-W	方形	2.67×2.42	24~25	平坦	全周	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	
2	E 6 g1	N-22°-W	方形	3.07×3.04	35~45	平坦	一部	-	自然	土師器, 須恵器	本跡→SD26
3	F 8 d3	N-3°-E	方形	2.61×2.44	29~32	平坦	一部	1	人為	土師器, 須恵器	
4	G 7 f0	N-64°-W	長方形	3.14×2.72	17~20	平坦	-	-	人為	土師器, 須恵器	
5	E 6 b5	N-9°-W	隅丸方形	2.78×2.75	25~28	平坦	-	1	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 瓦	
6	E 6 d3	N-5°-W	方形	3.25×2.96	40~45	平坦	-	-	自然	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 鉄鏝, 雲母片岩	SI433→本跡
7	D 4 a0	N-0°	方形	2.40×2.20	10	平坦	-	-	不明	土師器, 須恵器	SI464→本跡

表12 掘立柱建物跡一覧表

※規模及び面積の欄の上段は身舎部分の数値であり, 下段は底部分を含めた数値である。

遺構 番号	位 置	桁行方向	柱間数 (桁行×梁行)	規模(m) (桁行×梁行)	面積 (㎡)	構 造	桁柱間寸法 (m)	梁行柱間寸法 (m)	柱穴平面形	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
14	D 4 g7~D 4 h8	N-11°-W	3×2	6.26×4.43	27.73	側柱	2.05~2.15	2.10~2.40	隅丸長方形 楕円形		SI84A・B→本跡
15	D 4 f4~D 4 h5	N-7°-W	3×2	6.40×4.46	28.54	側柱	2.10	2.20~2.35	隅丸方形, 隅丸長方形, 楕円形		本跡→SB138
52	G 8 f2~G 8 g4	N-92°-E	3×2	5.50×4.25	23.38	側柱	1.70~1.90	2.00~2.20	隅丸長方形	土師器, 須恵器	
54	G 8 h2~G 8 i4	N-89°-E	3×2	7.65×4.90	37.49	総柱	2.40~2.80	2.40~2.50	隅丸長方形, 隅丸方形	土師器, 須恵器, 雲母片岩	本跡→SI312
63	E 7 d7~E 7 f8	N-11°-W	2×2	4.34×3.92	17.01	総柱	2.13・2.20	1.90・2.03	隅丸長方形, 不整形 円形	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	SI396, SK1857→本跡→SK605・609・610, SD49

遺構 番号	位 置	桁行方向	柱間数 (桁行×梁行)	規模 (m) (桁行×梁行)	面積 (㎡)	構 造	桁行柱間寸法 (m)	梁行柱間寸法 (m)	柱穴平面形	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
64	E 7 d0~E 8 g1	N-16°-W	4×3	9.33×6.30 10.91×6.30	58.78 68.73	側柱 一面庇	2.24~2.40	2.00~2.10	隅丸方形, 円形	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 鉄滓	SI202→本跡→SB60, SK606
80	D 7 f9~D 8 h1	N-13°-W	3×2	8.12×4.80	38.98	側柱	2.70	2.40	隅丸長方形, 楕円形	土師器, 須恵器	SI215・216・228→ 本跡→SD25
81	D 6 i2~D 6 j3	N-5°-W	2×1	4.06×4.34	17.62	側柱	2.05~2.10	—	円形		
82	D 6 j2~E 6 b3	N-3°-W	3×2	5.38×4.10	22.06	側柱	1.75~1.80	2.00~2.10	楕円形	土師器, 須恵器	
84	F 6 h0~F 7 i2	N-86°-W	4×3	8.20×5.20	42.64	側柱	1.94~2.16	1.70~1.80	隅丸方形, 不定形	土師器, 須恵器	SI335→本跡
85	F 5 d9~F 6 f2	N-90°-E	3×2	7.32×4.20 11.70×9.60	30.74 112.32	側柱 四面庇	1.80~3.00	2.10	隅丸方形, 円形	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 緑釉陶器, 青磁, 釘, 不明鉄	SI258・259・260→ 本跡→SK740
86	F 7 j2~G 7 b4	N-78°-W	4×2	7.90×5.26	41.55	側柱	1.60~2.28	2.39・2.55	隅丸方形, 隅丸長方形, 円形, 楕円形, 不定形	土師器, 須恵器	本跡→SB87
87	F 7 j1~G 7 b2	N-13°-E	4×2	8.32×4.82	40.10	側柱	1.85~2.63	2.30・2.50	隅丸方形, 円形	土師器, 須恵器	SB86・88→本跡
88	F 6 j9~G 7 a1	N-80°-E	4×3	8.30×5.00	41.50	側柱	1.91~2.20	1.51~1.91	隅丸方形, 円形	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 砥石	本跡→SB87
89	E 5 d2~E 5 f3	N-29°-W	3×不明	—	—	—	1.60~1.70	—	隅丸方形	土師器, 須恵器	SK796→本跡→SD29 SB90との新旧関係不明
90	E 5 e2~E 5 f2	N-29°-W	3×不明	—	—	—	1.60~1.70	—	隅丸方形		SK796→本跡→SK797, SD29 SB89との新旧関係不明
91	H 8 e4~H 8 g5	N-2°-W	4×3	7.70×5.30	40.81	側柱	1.60~2.00	1.50~1.90	隅丸方形	土師器, 須恵器, 石製模造品	本跡→SI315
92	G 8 j3~H 8 a4	N-0°	3×2	6.53×4.14	27.03	側柱	2.00~2.30	2.00~2.10	隅丸方形	土師器, 須恵器, 不明鉄	本跡→SI314
93	G 7 a6~G 7 c8	N-73°-E	4×2	7.83×5.08	39.77	側柱	1.83~2.04	2.41・2.67	隅丸方形, 円形	土師器, 須恵器	本跡→SD27D SB108との新旧関係不明
94	G 7 j0~H 8 b2	N-2°-W	3×3	6.35×4.75	30.16	総柱	2.00~2.20	1.50~1.60	隅丸方形	土師器, 須恵器	本跡→SI313, SK1589・ 1590
95	H 7 g8~H 7 h0	N-8°-W	3×3	6.30×4.50	28.35	総柱	2.10	1.50	隅丸方形	土師器, 須恵器	SK1596→本跡
96	G 7 f7~G 7 h8	N-5°-E	3×2	6.41×4.36	27.95	側柱	1.94~2.25	2.15・2.21	隅丸方形, 円形	土師器, 須恵器	
97	G 7 c8~G 7 f8	N-9°-E	4×2	8.70×3.75	32.63	側柱	1.95~2.35	1.87・1.99	隅丸方形, 円形	土師器, 須恵器	本跡→SB102, SD33
98	G 5 c8~G 6 e1	N-78°-W	4×3	10.80×6.20 12.94×6.20	66.96 80.23	側柱 一面庇	2.30~2.80	1.90~2.30	隅丸長方形		本跡→SK785・786・ 791・793
99	F 6 j1~G 6 b2	N-2°-E	3×2	6.20×3.60	22.32	側柱	1.90~2.10	1.80	隅丸方形, 円形	土師器, 須恵器	
100	F 6 f1~F 6 h2	N-2°-E	3×2	5.25×3.06	16.07	側柱	1.70~1.80	1.50~1.55	隅丸方形, 円形	土師器, 須恵器	
101	F 4 i8~G 4 a9	N-2°-E	4×2	8.96×5.28	47.31	側柱	2.00~2.50	2.60~2.70	隅丸方形, 楕円形		
102	G 7 d8~G 7 g9	N-10°-E	4×2	9.37×4.32	40.48	側柱	2.14~2.46	2.23・2.32	円形	土師器, 須恵器	SB97→本跡→SD33
104	H 7 c1~H 7 d2	N-12°-E	(2×2)	3.36×3.00	10.08	不明	1.60~1.76	1.50	隅丸方形, 楕円形	土師器, 須恵器	
105	F 7 g7~F 7 i9	N-78°-W	3×2	7.86×4.64	36.47	側柱	2.32~2.80	2.31・2.46	隅丸方形	土師器, 須恵器, 土製支脚	SI298→本跡
106	E 6 i9~E 6 i0	N-90°	3×2	4.80×3.15	15.12	側柱	1.60	1.45・1.70	円形		
107	H 8 e2~H 8 g3	N-4°-E	3×2	6.60×4.45	29.37	側柱	2.10~2.40	2.00~2.40	隅丸方形	土師器, 須恵器	
108	G 7 a7~G 7 b8	N-3°-E	3×2	5.86×3.20	18.75	側柱	1.89~2.09	1.56~1.64	円形	土師器, 須恵器	SB93との新旧関係 不明
109	H 8 e6~H 8 g7	N-6°-W	5×3	9.35×5.56	51.99	側柱	1.70~2.10	1.80~1.90	円形, 隅丸長方形	土師器, 須恵器	
111	H 8 e8~H 8 f9	N-12°-W	3×2	6.90×4.20	28.98	側柱	2.10~2.50	2.10	隅丸方形, 隅丸 長方形	土師器, 須恵器	
112	I 8 e3~I 8 g5	N-13°-W	4×2	8.40×5.25	44.10	側柱	2.10	1.60~1.80	隅丸方形, 隅丸 長方形, 楕円形	土師器, 須恵器	本跡→SI342
113	H 8 c8~H 8 d9	N-0°	3×2	5.60×3.98	22.29	側柱	1.80~1.90	1.90	楕円形, 不整円形	土師器, 須恵器	本跡→SB114・121

遺構 番号	位 置	桁行方向	柱間数 (桁×新)	規模 (m) (桁行×梁行)	面積 (㎡)	構 造	桁柱間寸法 (m)	梁柱間寸法 (m)	柱穴平面形	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
114	H 8 c8~H 8 d9	N-0°	3×2	5.40×3.80	20.52	側柱	1.80	1.90	隅丸方形, 不整 楕円形	土師器, 須恵器	SB113・122→本跡 →SB121
115	H 8 h0~I 9 a1	N-7°-W	5×3	9.45×4.85	45.83	側柱	1.80~1.90	1.60~1.65	隅丸方形, 隅丸 長方形	土師器, 須恵器, 瓦	本跡→SK1675・1676, SD12A・13・17
116	H 9 a2~I 9 b3	N-19°-W	3×2	5.00×3.84	19.20	側柱	1.60~1.70	1.90	隅丸方形, 隅丸 長方形	土師器, 須恵器	
117	I 9 f8~I 9 g9	N-6°-W	3×2	7.32×4.92	36.01	側柱	2.00~2.80	2.45	隅丸方形	土師器	本跡→SI356
118	G 7 h1~G 7 i3	N-85°-W	3×2	5.90×3.96	23.36	側柱	1.78~2.06	1.94	隅丸方形, 隅丸 長方形, 円形	土師器, 須恵器	
119	G 7 d2~G 7 f4	N-74°-W	4×2	9.64×5.48	52.82	側柱	2.24~2.62	1.72~1.88	隅丸方形, 円形	土師器, 須恵器	本跡→SD36
121	H 8 b9~H 8 d9	N-2°-E	3×2	5.40×3.62	19.55	側柱	1.80	1.80	円形, 楕円形	土師器, 須恵器	SB113・114→本跡
122	H 8 b7~H 8 d8	N-2°-W	3×2	5.76×4.12	23.73	側柱	1.70~2.00	2.10	不整円形	土師器	本跡→SI339・340, SB114
123	H 8 a4~H 8 d6	N-2°-W	4×2	8.94×5.04	45.06	側柱	2.10~2.30	2.45~2.60	不整円形		本跡→SI338・339
124	G 9 i9~G10j1	N-27°-W	3×2	5.25×4.00	21.00	側柱	1.70~1.85	2.00	円形	土師器	
125	F 8 c2~F 8 e5	N-16°-W	5×3	9.90×5.52	54.65	側柱	1.90~2.06	1.74~1.96	隅丸方形	土師器, 須恵器	
126	F 8 j7~G 8 b8	N-12°-E	3×2	5.46×3.74	20.42	側柱	1.70~1.94	1.77・2.10	隅丸方形 円形	土師器, 須恵器	SI378→本跡
128	F 4 f0~F 5 g1	N-87°-W	3×2	6.20×4.10	25.42	側柱	1.80~2.50	2.00~2.10	円形		
129	E 6 b4~E 6 d5	N-85°-E	3×2	5.34×3.98	21.25	側柱	1.80~1.94	1.78~1.80	円形	土師器, 須恵器	SI433→本跡→SI432, SD26
130	D 8 d9~D 8 f0	N-27°-W	3×2	5.68×4.50	25.56	側柱	1.80~2.03	1.90~2.40	楕円形	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	SI407→本跡
131	D 4 d0~D 5 f1	N-2°-E	4×2	6.40×3.64	23.30	側柱	1.45~1.55	1.90	楕円形	土師器, 須恵器	SB132→本跡→SI467
132	D 4 d9~D 5 e1	N-5°-W	3×2	6.00×3.90	23.40	側柱	1.90~2.00	1.90	隅丸方形, 円形	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	本跡→SB131
133	D 4 d4~D 4 f5	N-8°-W	3×2	4.80×3.80	18.24	側柱	1.50~1.60	1.63~2.00	隅丸方形, 円形	土師器, 須恵器	本跡→SB138
134	D 4 b4~D 4 d5	N-9°-W	5×2	9.60×4.20	40.32	側柱	1.80~2.00	1.90~2.10	楕円形		SB135→本跡→SI461
135	D 4 a3~D 4 b5	N-11°-W	3×2	4.74×3.22	15.26	側柱	1.40~1.70	1.60	楕円形, 円形	土師器, 須恵器	本跡→SI461, SB134
136	C 4 i4~C 4 j6	N-80°-E	3×2	5.70×4.20	23.94	側柱	1.80~2.00	2.00~2.20	隅丸方形, 隅丸 長方形, 円形		
137	C 4 j5~D 4 b6	N-11°-W	3×2	6.40×4.20	26.88	側柱	2.00	2.10	隅丸方形		
138	D 4 d4~D 4 f6	N-5°-W	3×2	6.18×4.10	25.34	側柱	2.00~2.10	2.00~2.20	隅丸方形, 隅丸 長方形		SB15・133→本跡
139	C 3 co~C 4 d1	N-2°-E	3×2	5.46×4.40	24.02	側柱	1.60~1.90	2.10~2.20	隅丸方形, 隅丸 長方形, 円形	土師器, 須恵器	SK1194→本跡
140	B 3 h3~B 3 j5	N-3°-E	3×2	6.10×4.60 7.95×4.60	28.06 36.57	側柱 二面庇	1.90~2.20	2.20~2.30	隅丸長方形	土師器, 須恵器	
141	B 2 g0~B 3 i1	N-17°-E	3×2	4.58×4.45	20.38	側柱	2.10~2.20	2.20	隅丸方形	土師器, 須恵器	
142	B 2 j9~C 2 a0	N-14°-E	3×2	5.76×3.85	22.18	側柱	1.90~2.00	1.90	隅丸方形	土師器	本跡→SK1202, SD43
143	B 4 i3~B 4 j4	N-85°-E	3×2	5.34×3.84	20.51	側柱	1.70~1.90	1.90	隅丸長方形, 楕 円形	土師器, 須恵器, 土製品	SB146との新旧関係 不明
144	B 4 i5~C 4 a6	N-5°-W	3×2	6.40×4.40	28.16	側柱	2.00~2.30	2.10~2.30	隅丸長方形, 楕 円形	土師器, 須恵器	
145	D 8 a7~D 8 c7	N-77°-E	4×2	8.20×4.50	36.90	側柱	1.90~2.20	2.25	円形	土師器, 須恵器	本跡→SI328・411
146	B 4 i4~B 4 j5	N-85°-E	3×2	5.36×3.80	20.37	側柱	1.70~1.80	1.60~1.90	円形, 楕円形	土師器	SB143との新旧関係 不明
147	B 5 h8~B 5 i0	N-82°-W	3×2	8.36×4.50	37.60	側柱	2.60~3.20	2.05~2.45	楕円形	土師器, 須恵器, 鉄製品	SI481・482→本跡

## 第4節 まとめ

中原遺跡からは、既に刊行されている『第155集』「中原遺跡1」、『第159集』「中原遺跡2」と今回報告分を併せて、竪穴住居跡507軒、掘立柱建物跡133棟、土坑833基、溝1条が検出されている。これらのうち、縄文時代の竪穴住居跡3軒、古墳時代の竪穴住居跡7軒、中世の地下式墳1基を除くすべてが、奈良・平安時代の8世紀から10世紀前葉に営まれていたものである。ここでは、中原遺跡の中心となる「奈良・平安時代の土器の変遷」、「文字資料について」、「集落の変遷」、「中原遺跡の性格について」にふれ、まとめとしたい。なお、既に刊行されている『第155・159集』の報告分についても、同一視点で観察するという観点から、今回再検討を加えたので、既刊の報告とは時期が異なっている場合もある。

### 1 奈良・平安時代の土器の変遷

中原遺跡から出土した土器の概要及び器種については、竪穴住居跡・掘立柱建物跡などの項で述べたので、ここでは、出土した土器を7期に分類し、その変遷を把握し、本遺跡の動向を知る基礎としたい。

なお、坏・甕については形態や製作技法によって以下のように分類した。

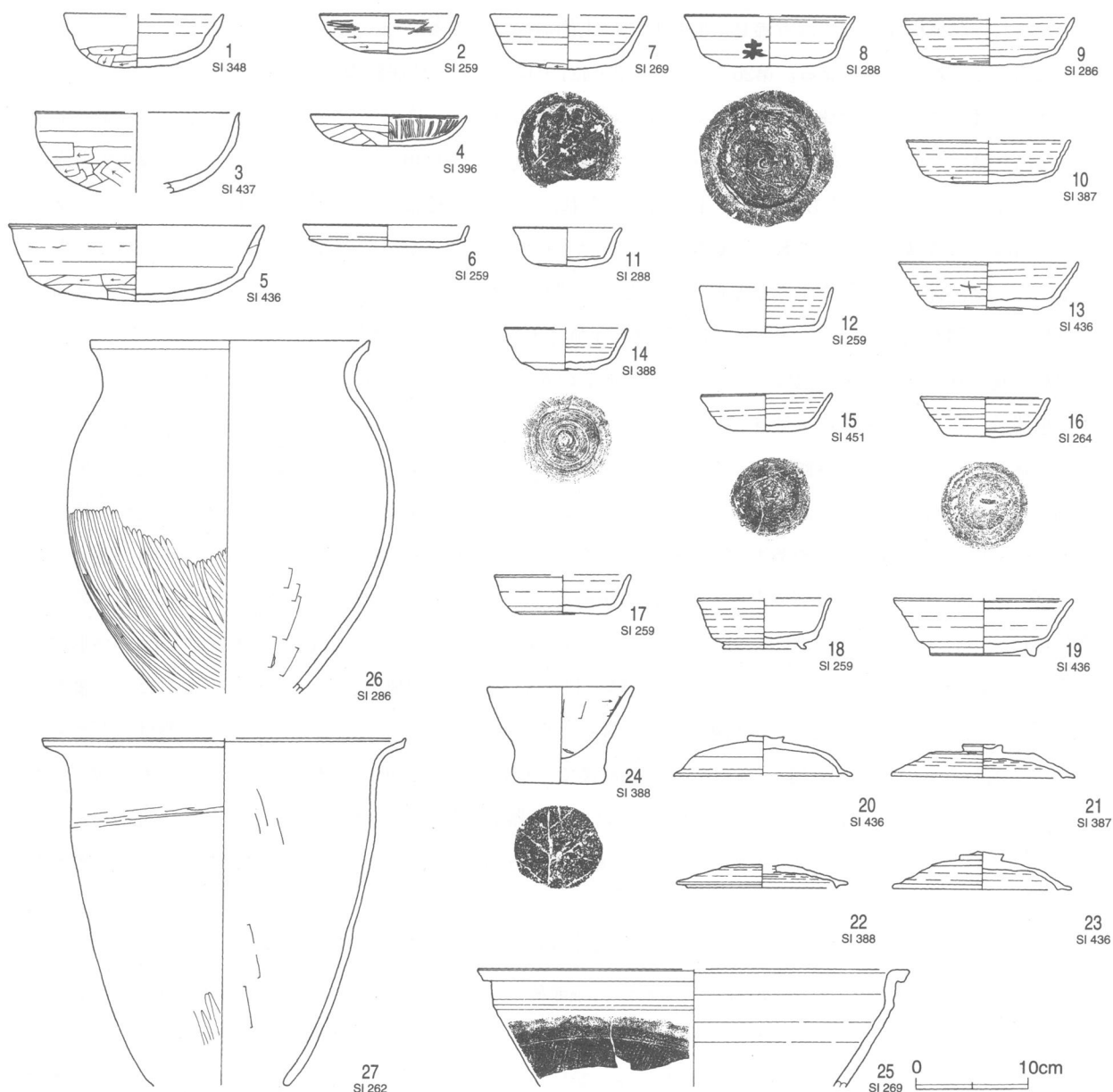
- 土師器坏A類 丸底で、半球形状を呈するもので、口縁部が内彎するものと、直立するものがある。
- B類 丸底で、口縁端部内面に沈線をもつもの。
- C類 丸底もしくは扁平気味の丸底で、底部と口縁部の境に稜をもつもの。いわゆる内彎口縁坏といわれているもの。
- D類 器高が高く、底部と口縁部の境に稜をもち、口縁部が直立、もしくは外傾するもの。
- E類 ロクロ成形のもの。
- 土師器椀A類 体部が直線的に外方に開くもの。
- B類 体部はわずかな丸みをもち、外方に開くもの。
- C類 体部は内彎し、丸みをもち、口縁部で外反するもの。
- D類 器高が比較的 low、半球形状を呈するもの。
- E類 器高が高く、体部は球形状を呈し、高台が低いもの。
- 須恵器坏A類 丸底で、口径と底径の差が小さいもので、底部外周に段があり、いわゆる二次底面を有するもの。
- B類 平底で、口径と底径の差が小さいもので、底部外周に段があり、いわゆる二次底面を有するもの。
- C類 平底のもの。
- 土師器甕A類 体部外面にヘラ磨きが施されるもの。いわゆる「常総型」といわれているもの。
- B類 体部外面にヘラ削りが施されるもの。
- C類 寸胴形で、口縁部が外に大きく開くもの。最大径は口縁部にあるもの。

### 第I期 (第712図)

古墳時代後期に属する第386号住居跡以降約1世紀の間において、中原遺跡の奈良・平安時代の集落が展開される。器種構成は、土師器坏・皿・甕・甑・捏鉢、須恵器坏・高台付坏・蓋・鉢である。須恵器生産の操業開始後間もない時期であり、土師器と須恵器の割合は須恵器が多くなっていく段階である。第259・387・437・439号住居跡などの土器群が該当する。

土師器坏は、丸底で、半球形状を呈するA類（2・3）、丸底で、口縁端部内面に沈線をもつB類（4）、丸底で、底部と口縁部の境に稜をもつC類（1・5）がみられる。A・C類は、大形と小形があり、いずれも底部は手持ちヘラ削り調整が、口縁部には横ナデが施される。B類の底部には手持ちヘラ削りが、内面は放射状のヘラ磨きが、口縁部には横ナデが施されており、畿内系暗文土器の影響を受けているものである。皿は、底部と口縁部の境に稜をもち、底部には回転ヘラ削りが・口縁部には横ナデが施される（6）。

須恵器は新治古窯跡群の一丁田窯跡に後続する段階の製品である。須恵器坏は丸底のA類（7～11）と平底のB類（12～17）があり、両者ともに大・中・小に法量分化しており、口径は大形が約15cm、中形が約12cm、小形が約10cmである。A類の底部調整は、一方向の雑なナデまたは手持ちヘラ削り後、外周に手持ちヘラ削りを施すものと、回転ヘラ削り後、外周にロクロナデを施すものがある。B類の底部調整は、底部及び段をもつ底部外周まで回転ヘラ削りを施すものが大部分で、一部、底部外周がロクロナデのものがみられる。A・B類の間には形態的にも丸底から平底、技法的にも手持ちヘラ削りから回転ヘラ削りという変化がみられることか



第712図 中原遺跡 I 期の土器群

ら時間差がみられるが、当遺跡では両者が共伴することから明確には時期差としては区別できないので当該期に含めた。これらの坏のなかの大形・中形にはかえりが付く蓋がセットになると思われる(20~23)。蓋は天井が高くなだらかに口縁部にいたるものと、低く扁平なものがみられる。つまみは扁平なボタン状である。高台付坏は大(19)・小(18)が認められる。底部は丸底のものに高台が付くもので、高台は低く底部の外側に付いており、断面台形を呈し、高台径が大きい。

貯蔵具・煮沸具では、土師器が多くみられ、須恵器では、甕の破片が認められるだけで、全容は明らかではない。土師器甕A類は、体部中位に最大径をもち、球形状を呈するもので、体部下半に縦位のヘラ磨きが施され、口縁端部のつまみ上げは明瞭ではない(26)。土師器甕は古墳時代後期から続くもので、砲弾形を呈する無底式である(27)。須恵器鉢は体部が内彎し、口縁部で外側に屈曲し、端部断面は長方形を呈する(25)。

## 第Ⅱ期 (第713・714図)

しちや

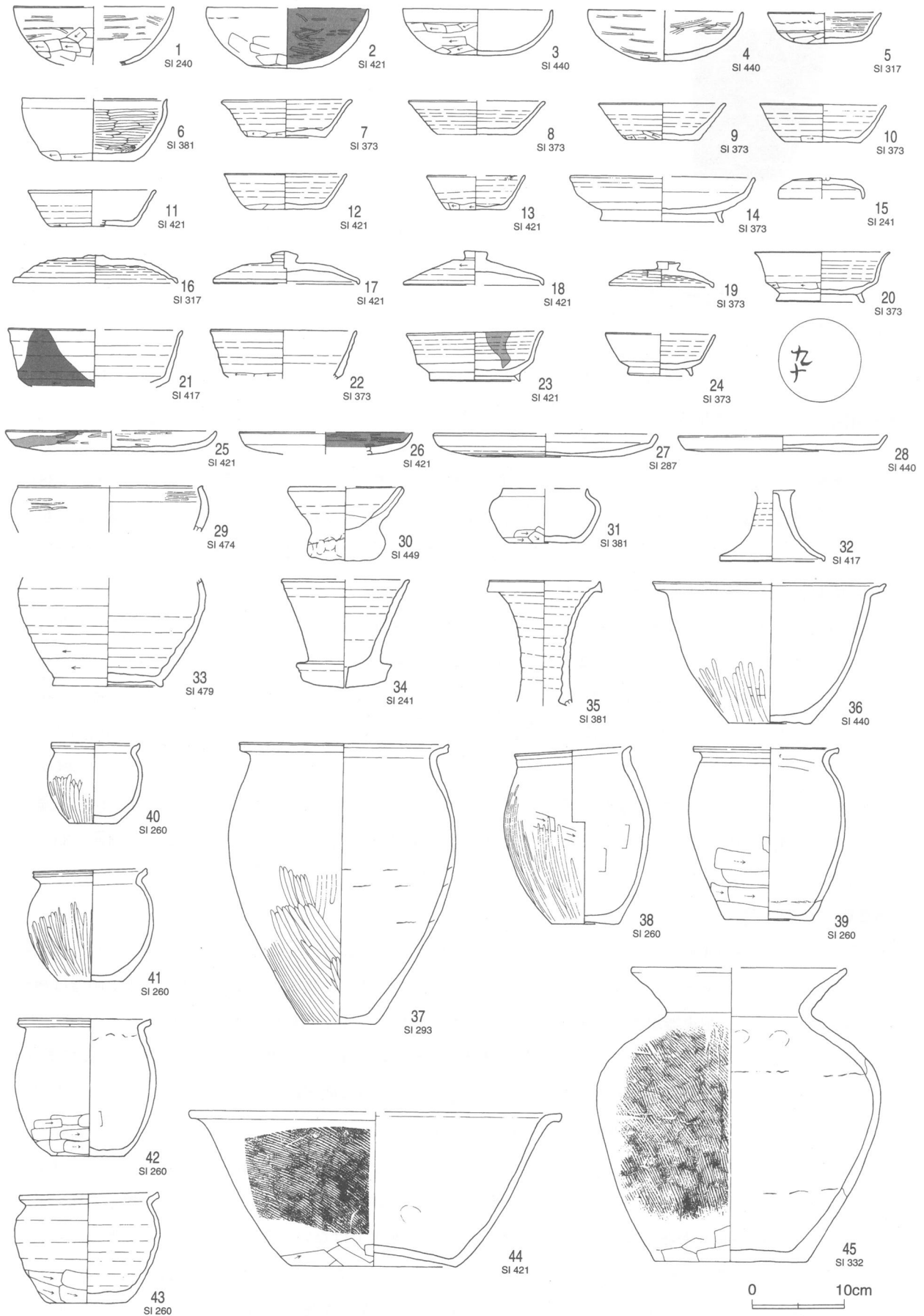
当期に新たに加わる器種は、土師器鉢・鉄鉢形、須恵器盤・皿・甕・鉄鉢形、捏鉢である。器種構成は、土師器坏・皿・甕・甕・鉢・鉄鉢形土器・捏鉢、須恵器坏・高台付坏・盤・皿・蓋・甕・鉢・鉄鉢形・葉壺・長頸瓶である。器種構成としては煮沸具・貯蔵具では土師器のほうが多いが、食膳具では土師器は少なく、須恵器が大部分を占めるようになる。第260・322・373・421・440・480号住居跡などの土器群が該当する。

土師器坏は、丸底で、半球形状を呈するA類、扁平気味の丸底で、底部と口縁部の境に稜をもつC類、平底で、器高が高く、底部と口縁部の境に稜をもち、口縁部が直立するD類がみられる。A類は、口縁部が内彎するもの(1・2)、直立するもの(3・4)に分けられ、いずれも底部には手持ちヘラ削りが、内面はヘラ磨きが、口縁部には横ナデが施される。C類の底部には手持ちヘラ削りが、口縁部には横ナデが施される(5)。D類(6)は、鉢ともいえるような器形をしており、器高が高い。体部下端は、手持ちヘラ削り、体部は回転ヘラ削り、口縁部には横ナデ、内面にはヘラ磨きが施される。皿は扁平な丸底気味のものである(25・26)。土師器の食膳具は、坏C類の他はいずれも大形であるのが特徴である。

須恵器は、新治古窯跡群の東城寺寄居前A・東城寺窯跡段階の製品である。須恵器坏は、C類の平底だけになり、体部の立ち上がりの外傾が強くなる。計測値は大(9~12)・小(13)の2種である。口径は大形が約16cm、小形が約11cmである。調整は、①底部回転ヘラ削りのもの、②底部回転ヘラ削りで体部下端が手持ちヘラ削りのもの、③底部1方向や多方向の手持ちヘラ削りで体部下端が手持ちヘラ削りのものがある。割合をみると①・②は少量で、③が大部分を占め、新治古窯跡群の手持ちヘラ削り技法の定着する時期と思われる。高台付坏は大(12)・中(20・23)・小(24)が認められる。口径は大形が約18cm、中形が約16cm、小形は約12cmである。体部は外反しており、高台は前段階に比べると底部の内側に付けられ、細く高くなる。蓋も大(16)・中(17・18)・小(19)の計測値が認められ、高台付坏とセットになると思われる。盤は当期から器種構成に加わるものである(14)。盤は口径20cm前後で、底部は丸底気味で、体部の立ち上がりも内彎しており、高台は底部と体部の境に付けられ、径が大きい。須恵器皿は当該期にだけみられる器種で、丸底(27)と平底(28)があり、前者は底部が回転ヘラ削り、後者は多方向の手持ちヘラ削り、外周回転ヘラ削り調整が施される。

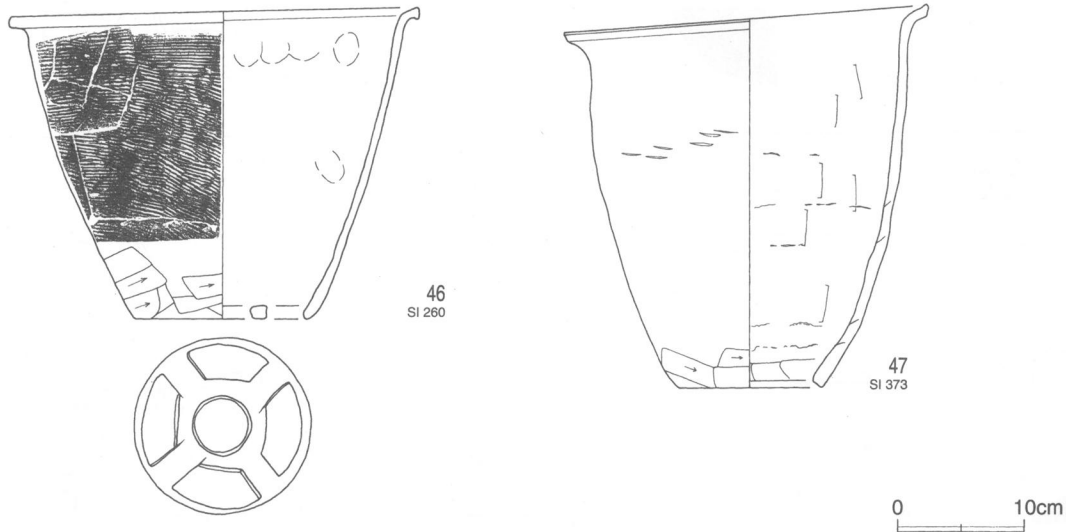
土師器甕は、常総型のA類とヘラ削りの施されるB類がみられる。A類は、大(37)・中(41)・小(40)に法量が分化し、口径は大形が20cm前後、中形が13cm前後、小形が10cm前後である。大形は前期よりも体部の最大径が小さくなるものの、依然として体部中位が張っている。中・小形は球形状を呈している。いずれも口縁端部のつまみ上げ明瞭である。B類は中形(28・39)・小形(42・43)があり、体部下位に横位の手持ちヘラ削り調整が施される。口縁端部はA類のようにつまみ上げられるものと断面長方形に角張るものがある。こ





第713図 中原遺跡第Ⅱ期の土器群 (1)

809



第714図 中原遺跡第Ⅱ期の土器群 (2)

の外に客体的ではあるが、緩やかなカーブを描き細長い体部で、頸部のくびれが不明瞭なものもみられる (38)。甑は前期と同様で変化は見られない (47)。鉢は体部に丸みを持ち、口縁部で外側に屈曲し水平面をもつものである (36)。体部は縦位のヘラ磨き、口縁端部は上方につまみ上げられ、技法的にはA類の甕と同様である。捏鉢は前期と同様で変化はみられない (30)。

須恵器甕は、体部上位に最大径をもち、肩が張り、頸部がくの字状を呈する (45)。口縁端部はつまみ出しなどはされずにおさまる。鉢は、前段階に比べると体部の丸みがなくなり、口縁部で外側に屈曲し、水平面をもつ (44)。甕・鉢共に体部は斜位の細かい平行叩きである。甑は鉢形で、中央部が円形、周りが扇形の孔が開く5孔式である (46)。鉄鉢形の土器は当期に出現する。口縁端部のつくりがシャープで断面三角形を呈し、須恵器でありながら、口縁部内・外面には丁寧な磨きが施される (29)。捏鉢は、直線的に外傾し、口縁端部は細くつまみ出さる (34)。須恵器小形葉壺は、肩が大きく張り出し、器高が低く、扁平であり、体部下端には手持ちヘラ削りが施される。この外に破片ではあるが、須恵器長頸瓶 (35)・高盤 (32)・短頸壺 (33)・短頸壺蓋 (15) がみられる。

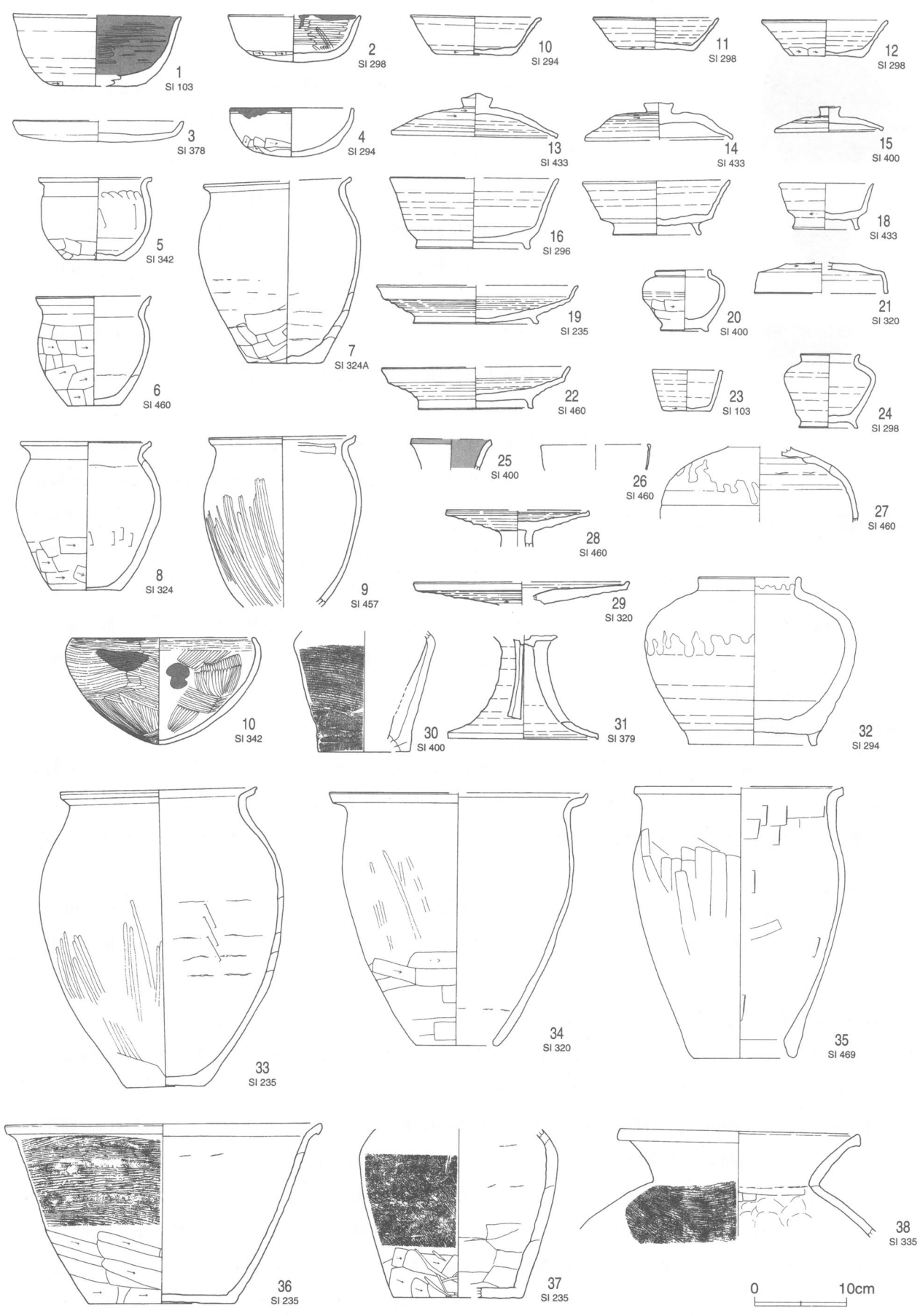
第Ⅲ期 (第715・716図)

ル 後

当期から灰釉陶器長頸瓶が共伴するようになる。器種構成は、土師器坏・皿・甕・甑・鉄鉢形土器、須恵器坏・高台付坏・盤・高盤・小形短頸壺・コップ形土器・甕・甑・鉢・長頸瓶である。食膳具では土師器は極稀れにみられるだけで、須恵器が大部分を占める。第294・298・320・434号住居跡などの土器群が該当する。

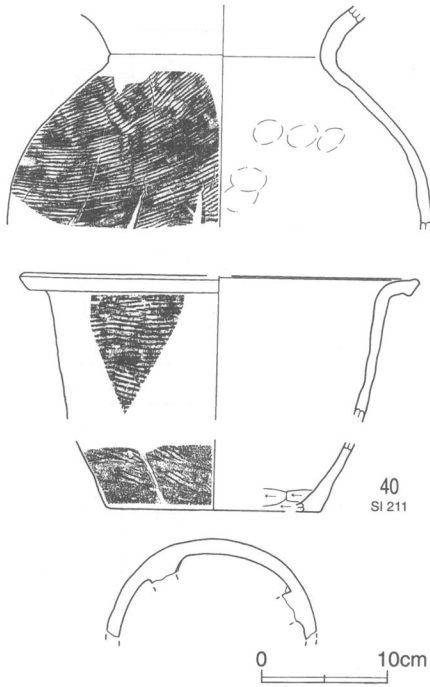
土師器坏はA (2・4)・D (1) 類のみで、個体数は極少量である。D類は前段階と同様に大形であり、内面にはヘラ磨き・黒色処理が、外面はロクロナデが施される。皿は底部に手持ちヘラ削り、口縁部ロクロナデが施されるようになる (3)。土師器皿は当期をもって消失する。

土師器甕のA類で確認できたのは大形と中形である。いずれも体部最大径が体部の上位にあり、最大径が小さくなり肩の張りも弱くなる (9・33)。B類で確認できたのは中形と小形である。B類もA類と同様、最大径が小さくなり肩の張りが弱くなる傾向があるが、A類ほど顕著ではない (5～7)。甑は砲弾形は見られなくなり、変わって、甕形の甑が出現する。この甕形の甑は当期にだけみられるもので、体部下半には手持ちヘラ削り、上位にはヘラ磨きが施される無底式 (34) と縦位のヘラ削りが施される無底式 (35) がある。鉄鉢形土器は尖底で、口縁部は内側に屈曲する。底部付近は縦位、体部は横位、口縁部内・外面は横位に丁寧な磨き



第715図 中原遺跡第Ⅲ期の土器群 (1)

SC 後



第716図 中原遺跡第Ⅲ期の土器群(2)

が施される(10)。

須恵器は新治古窯跡群の東城寺桑木窯跡段階の製品である。須恵器坏は、口径13~14cm、底径9cm、器高3.5~4.5cmで、前段階よりも底径が小形化する(10~12)。底部調整は1方向または多方向の手持ちヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削りが主体である。高台付坏は、前段階まで底部と底部外周にあった段が不明瞭になる。計測値は前段階と同様、大(16)・中(17)・小(18)がみられ、蓋も同様に大(13)・中(14)・小(15)がある。蓋の口縁端部は短くつまみ出される。盤は体部の立ち上がりが外傾して直線的になる(19・22)。高盤の坏部は直線的に外に開き、脚部の裾も大きく開く(28・29・31)。高盤は前段階ではわずかに破片でのみ確認されてはいるが、定着するのは当期からである。

須恵器甕は、全容がうかがえる資料がないが、口縁端部が上下につまみ出されるようになる(38)。また、肩部の張りは前段階より弱くなる(37・39)。鉢(36)と鉢形の甑(40)は底部が残存しなければ区別が困難であるが、この段階では、鉢の方が器高

が浅い。両者共に、体部の形態は前段階と同様であるが、口縁端部が上下につまみ出されるようになる。甕・鉢・鉢形甑の体部は横位・斜位の平行叩きで、体部下端に手持ちヘラ削り調整が施される。コップ形土器は器高が低いものである(23)。外に、須恵器短頸壺(32)・短頸壺蓋(21)・小形短頸壺(20・24)・長頸瓶(25)、灰釉陶器長頸瓶(26)、捏鉢に似た器形のもの(30)がみられる。

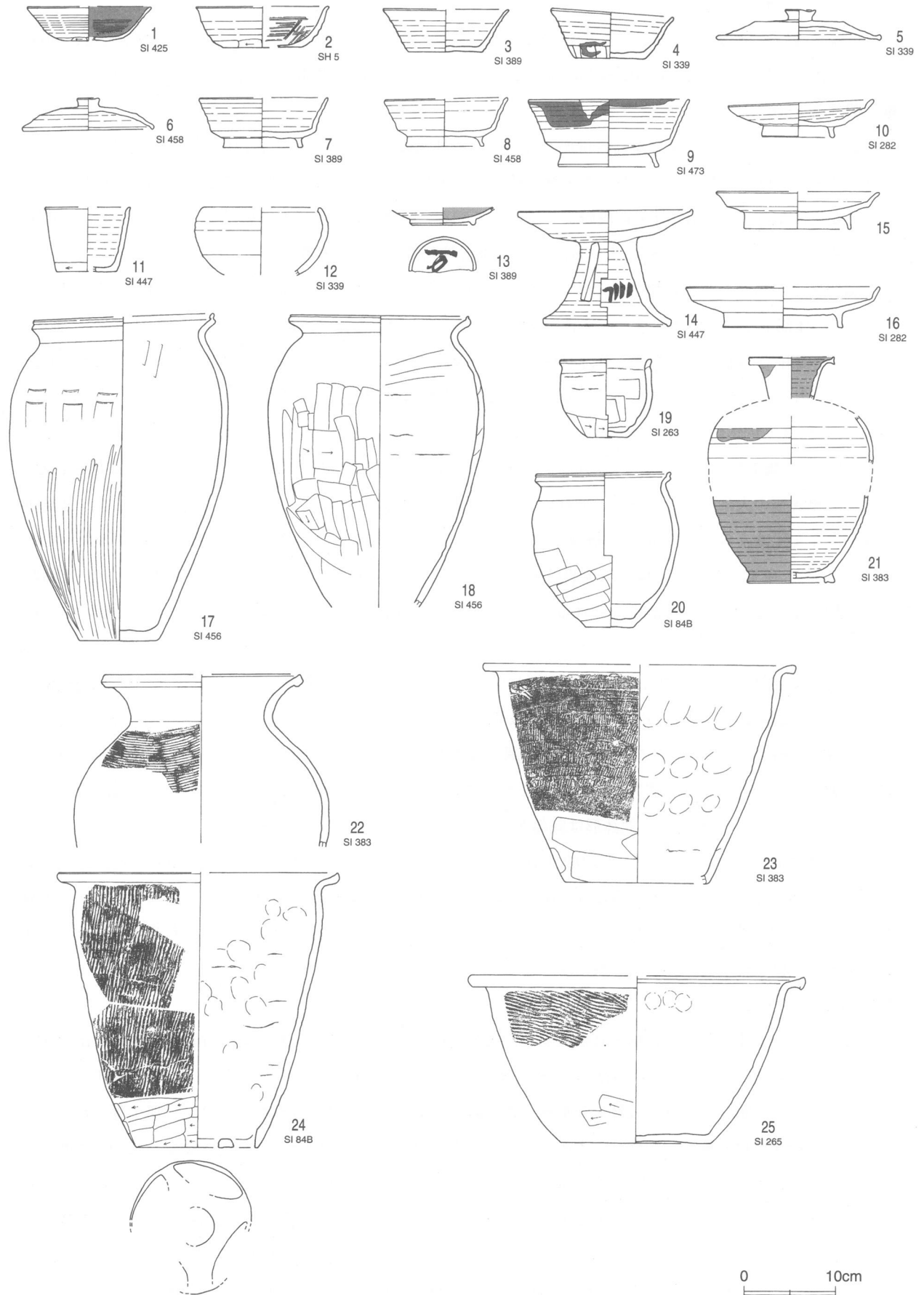
第Ⅳ期(第717図) 9c前

この段階から灰釉陶器の長頸瓶(21)に加えて黒笹14号窯式段階の皿(13)も共伴するようになる。前期と同様、食膳具では須恵器が主体で土師器はごく少量であるものの、土師器は新たにロクロ使用のものに変わる。器種構成は、土師器坏・甕、須恵器坏、高台付坏・盤・高盤・蓋・コップ形土器・甕・鉢・甑・鉄鉢形土器である。第265・282・339・383・389・447号住居跡などの土器群が該当する。

土師器坏は、古墳時代からの流れを汲んだA~D類はなくなり、変わってロクロ使用のE類が出現する(1・2)。体部は内彎気味に立ち上がり、口径と底径の差が小さいものである。体部内面にはヘラ磨き・黒色処理が、外面にはロクロナデが、底部・体部下端には手持ちヘラ削り調整が施される。この段階では、ロクロ土師器の出土量はごく少量である。

土師器甕A類は、前段階よりも長胴化し細長くなる(17)。B類の大形のものA類と同様に長胴化する(18)。B類の中・小形は前段階と同様で変化はあまりみられない(19・20)。

須恵器は新治古窯跡群の小高村内・東城寺寄居前B窯跡段階の製品である。須恵器坏は、口径14cm、底径8cm、器高5cmで前段階よりも底径が小さくなり、器高が増し、口縁部で外反するものが増える(3・4)。底部・体部下端の調整は手持ちヘラ削りで、体部下端のヘラ削りの幅は広がる。高台付坏は、大(9)・中(7・8)の2法量になる。蓋も同様に大(5)・中(6)の2法量で、形態は天井部が低くなり扁平になる傾向がある。盤は大(16)・中(15)・小(10)の3法量がみられる。高台は径が小さくなると共に高くなり、前段階では体部が深かったのに対し体部が浅くなる(16)。高盤は、坏部は内彎し、脚部は太く、裾の反りは弱くなる。高盤は当期で消失する。コップ形土器は器高が高く細長い(11)。鉄鉢形土器は内彎したまま口縁



第717図 中原遺跡第IV期の土器群

部にいたり、球形状を呈する(12)。

須恵器甕は口縁端部のつまみ出しが明瞭になる(22)。鉢(23・25)・鉢形甕(24)の形態は前段階とほぼ同様である。体部の叩きが縦位のものがみられるようになる。甕の底部は中央部が円形、周りが木の葉形になる。

#### 第V期(第718図)

当期から新たに土師器・須恵器高台付皿が加わる。器種構成は、土師器坏・高台付坏・高台付皿・甕・甕、須恵器坏・高台付坏・盤・高台付皿・蓋・甕・鉢・甕・鉄鉢形土器である。食膳具では須恵器坏が主体ということに変化はないが、土師器坏も前段階よりは増えてくる。貯蔵・煮沸具でも須恵器が圧倒的に多く、生産様相を反映している。第202・228・238・384・426・438号住居跡などの土器群が該当する。

土師器坏のE類がわずかに増加する。口径13~15cm、底径6~7cmで、前段階よりは底径が小さくなる。(1~3)。体部下端・底部は手持ちヘラ削り調整が施されるものが主体で、わずかに体部下端手持ちヘラ削り、底部回転ヘラ削り調整のものもみられ、回転糸切りのものは1点である。内面は前段階と同様にヘラ磨き・黒色処理が施される。高台付坏の割合は、坏よりも少なく、器形は定形化していないようである(4)。技法は坏と同様で、内面は黒色処理、外面にはロクロナデが施される。また、この段階から高台付皿がみられるようになる(5)。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部でわずかに外反するもので、内面はヘラ磨き、黒色処理が施される。

土師器甕A類の大形品は、前段階と同様のものが長胴化したものである(24)。中(22)・小形は、出現期以来大きな変化はみられず、体部は球形状を呈する。B類については、確認された資料が中形のものだけである(15・16)。中形もA類と同様、出現期以来、大きな変化はみられない。甕も須恵器が主体となり、土師器の甕は極少量になる。把手付甕がみられるが1点のみである(19)。なお、前段階にみられた甕形甕はみられなくなる。

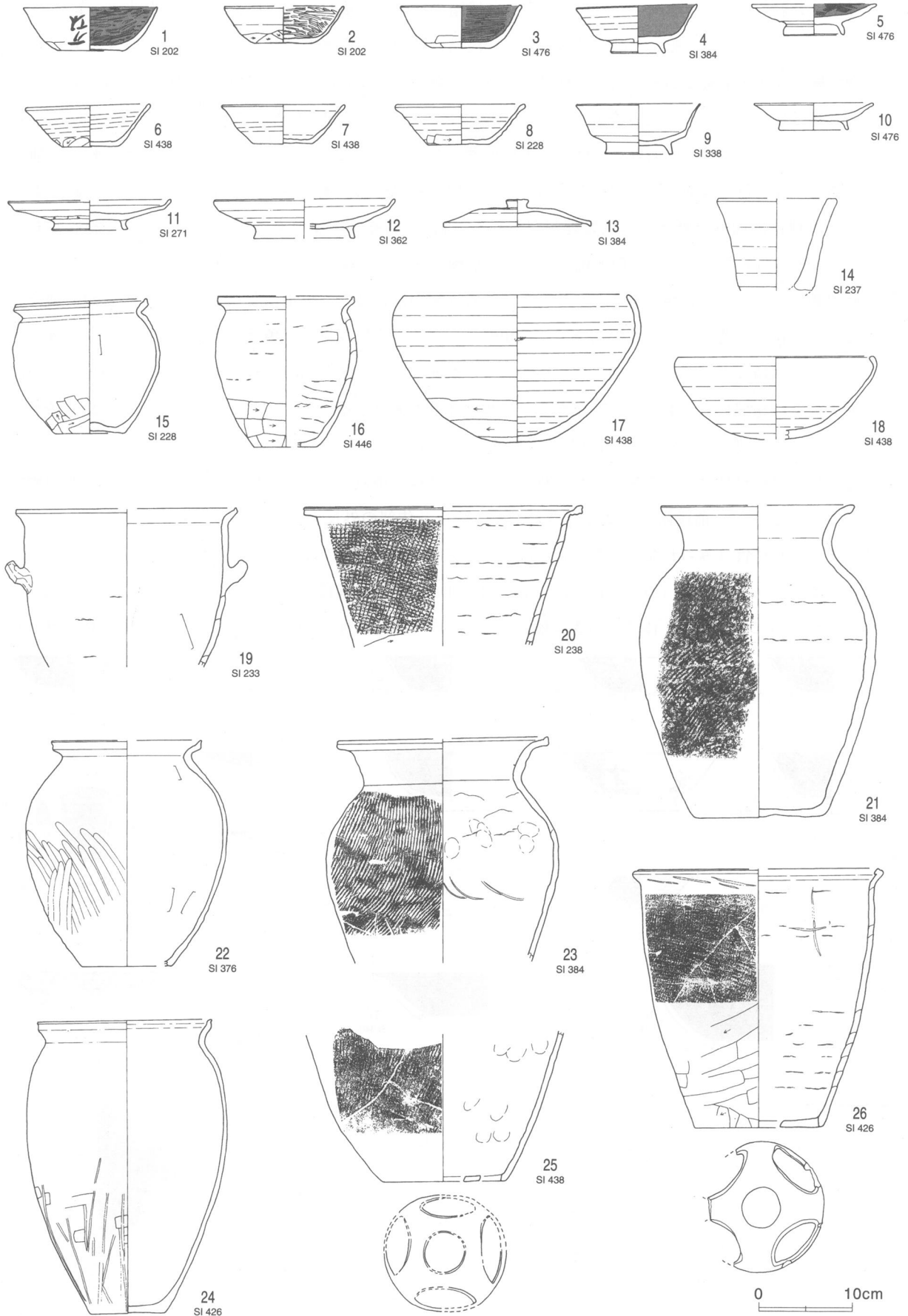
須恵器は新治古窯跡群小野1号窯段階の製品である。須恵器坏は口径13~14cm、底径6~7cm、器高約4.5cmで、前段階よりも底径が小さくなる。口縁部は外反し、端部は肥厚するものが多い。(6~8)。底部・体部下端は手持ちヘラ削り調整である。底部の調整は多方向のものより1方向のものが多く、体部下端のヘラ削りは幅が広くなり、技法の省力化が顕著になる。高台付坏や蓋は少なくなる(9・13)。盤は前段階よりも高台径が小さくなる(11・12)。鉄鉢形は底部が丸くなる(17・18)。

須恵器甕は最大径が小さくなり、形の張りがなくなり、長胴化し、口縁端部はつまみ出され尖る(21・22)。鉢(20)・鉢形甕(25・26)の形態は前段階とほぼ同様だが、口縁端部は内側につまみ出され尖っている。甕の底部の孔は円形、周りは木の葉形に空く5孔式である。体部の叩きは格子目叩きがみられるようになる。体部の叩きは縦位・格子目・擬格子が多くみられる。

#### 第VI期(第719・720図)

当期から新たに土師器高台付椀・耳皿・羽釜、須恵器把手甕が加わる。灰釉陶器・緑釉陶器が多く出土するようになることと、舶載陶磁器の青磁・白磁が出土することが特筆される。器種構成は、土師器坏・高台付椀・高台付皿・耳皿・大形椀・浅鉢・筒形椀・甕・鉢・羽釜、須恵器坏・高台付坏・高台付皿・甕・甕・鉢である。前段階までは食膳具・貯蔵具・煮沸具のいずれも須恵器の占める割合が圧倒的に多かったが、食膳具に関しては当期から土師器が主体となる。第VからVI期への移行は、須恵器から土師器へ割合が徐々に増えていくという緩やかな移行ではなく、急激な転換である。貯蔵・煮沸具に関しては、前段階に引き続き須恵器が主体となる。第247・330・340・351・352・354・358・370・399号住居跡などの土器群が該当する。

土師器坏は、基本的には前段階と同様の形態である。調整方法は、①体部下端・底部が手持ちヘラ削り(1)、②体部下端は手持ちヘラ削り、底部は回転ヘラ削り(2・3)、③体部下端・底部が回転ヘラ削り(4・5)



第718図 中原遺跡第V期の土器群

9c 中

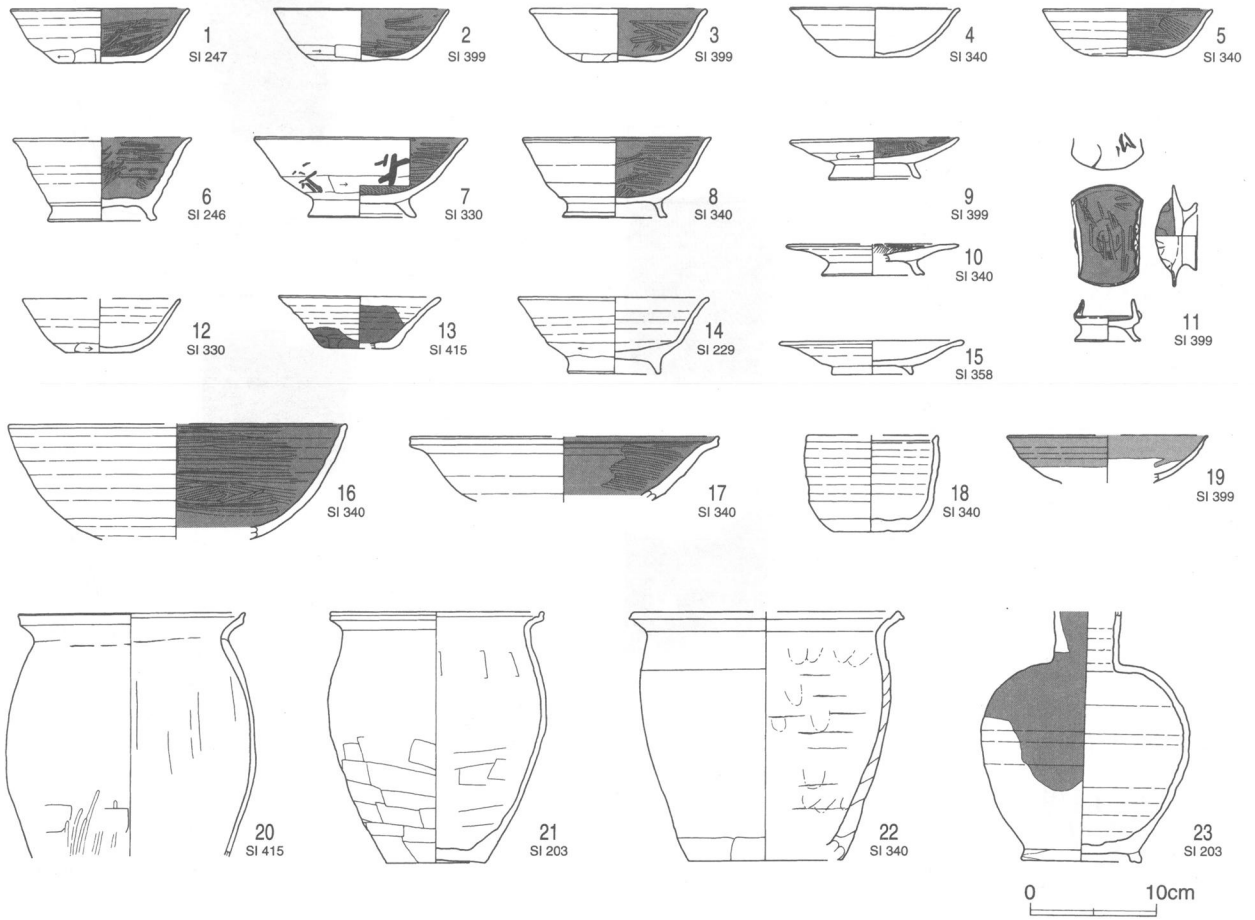


の3種類に大別され、バラエティーがみられる。前段階の技法は数量が少ないながら①の手持ちヘラ削り技法であったので、おそらく回転ヘラ削り技法が新しい段階の技法であると思われる。当期から出現するものとして高台付椀・耳皿・羽釜がある。高台付椀はA・B・C類の3類に分けられ、A類は直線的に外方に開くもの(6)、B類は体部にわずかに丸みを持ち、外方に開くもの(7)、C類は体部が内彎し、口縁部で外反するもの(8)である。いずれも内面はヘラ磨き・黒色処理がなされ、体部下端は、手持ちヘラ削りか回転ヘラ削り調整である。高台付皿は前段階と同様のもの(9)の他に、口縁部が強く外反するもの(10)もみられるようになる。耳皿は内面ヘラ磨き・黒色処理がなされる(11)。羽釜はA類の甕に鏝を付けたような器形である(33)。この外に特殊なものとして筒形椀(18)・大形椀(16)・浅鉢(17)がみられる。

土師器甕は、A・B・C類がある。ヘラ磨きであるA類の割合はごく少量になり、ヘラ削りのB類が割合をます。また、新しい器形として寸胴形を呈すC類がみられるようになる。A類は大形(20)のものしか確認されていない。B類は大(30)・中(21)・小形(27)があり、前段階と同じ様相である。B類の小形のものには、最大径を口縁部にもつもの(26)がある。C類の体部外面は丁寧にナデられており、胎土は比較的精製されている(22)。寸胴形には、口縁部が直立する筒状のもの(24・25)があり、胎土が精製されている。

須恵器杯・高台付杯はごく少量みられる程度である。杯は、前段階よりは底径が小さくなり、体部が内彎するもの(12)があり、前段階より底径がさらに小さくなり体部の外反が強くなるもの(13)、というように、前段階までの規格性はみられなくなる。高台付杯は、底部外周と体部の段は全くみられなくなる(14)。

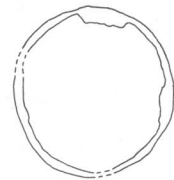
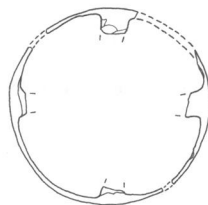
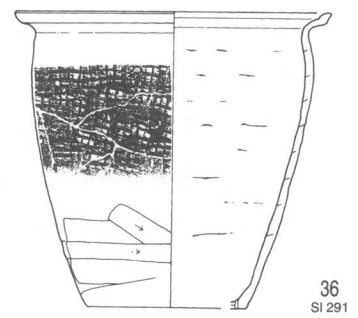
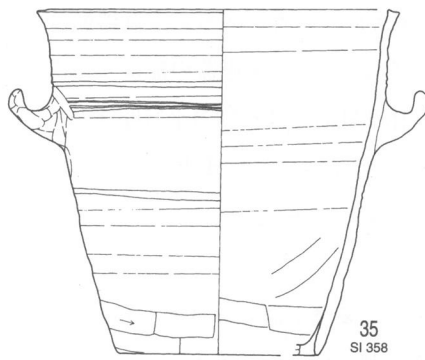
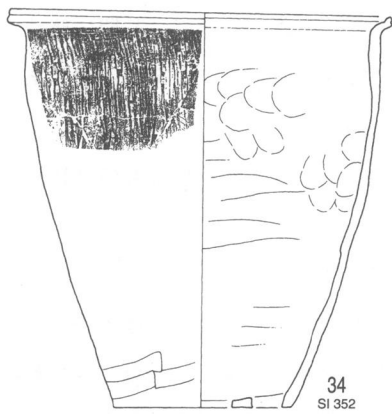
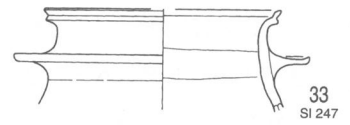
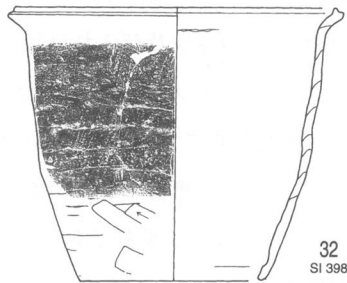
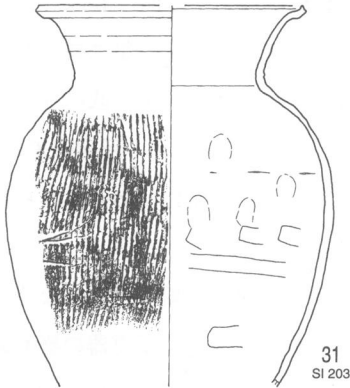
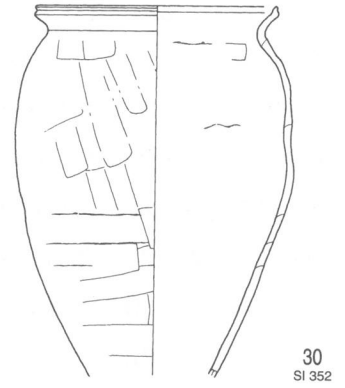
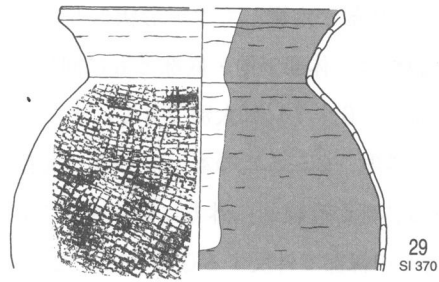
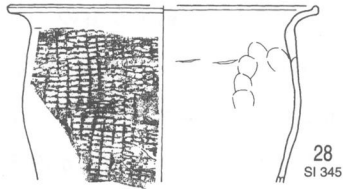
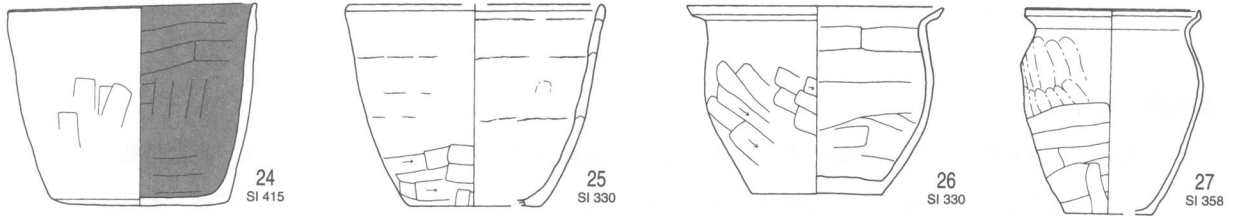
須恵器甕(29・31)・鉢(28)・鉢形甕(32・34・36)の形態は前段階と同様である。但し、口縁端部のつまみ出しがさらに鋭くなる。体部の叩きは縦位の平行叩き・格子目叩きが多い。格子目には正方形格子目と長



第719図 中原遺跡第VI期の土器群 (1)

9C後





0 10cm

第720図 中原遺跡第VI期の土器群 (2)

方形格子目があり、後者は当期からみられるようになる。把手付甑はほぼ直立し、寸胴に近い。体部下端には手持ちヘラ削り、体部にはロクロナデが施される (35)。

#### 第Ⅶ期 (第721図)

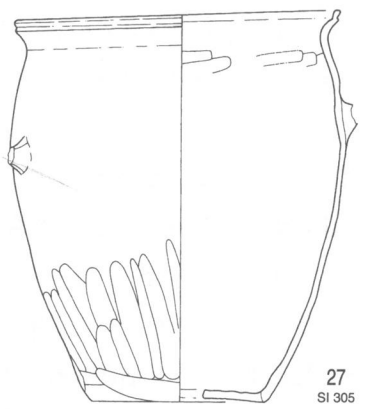
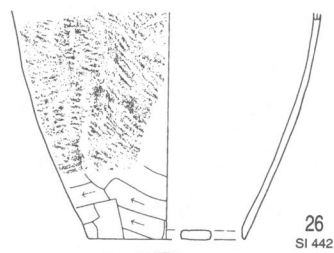
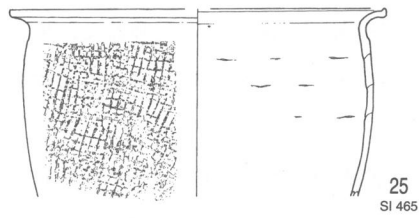
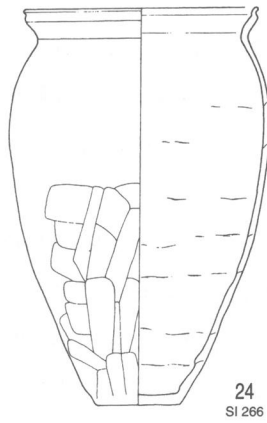
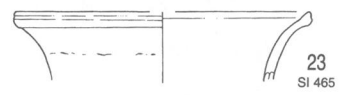
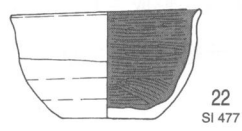
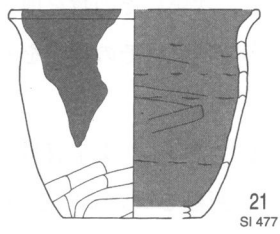
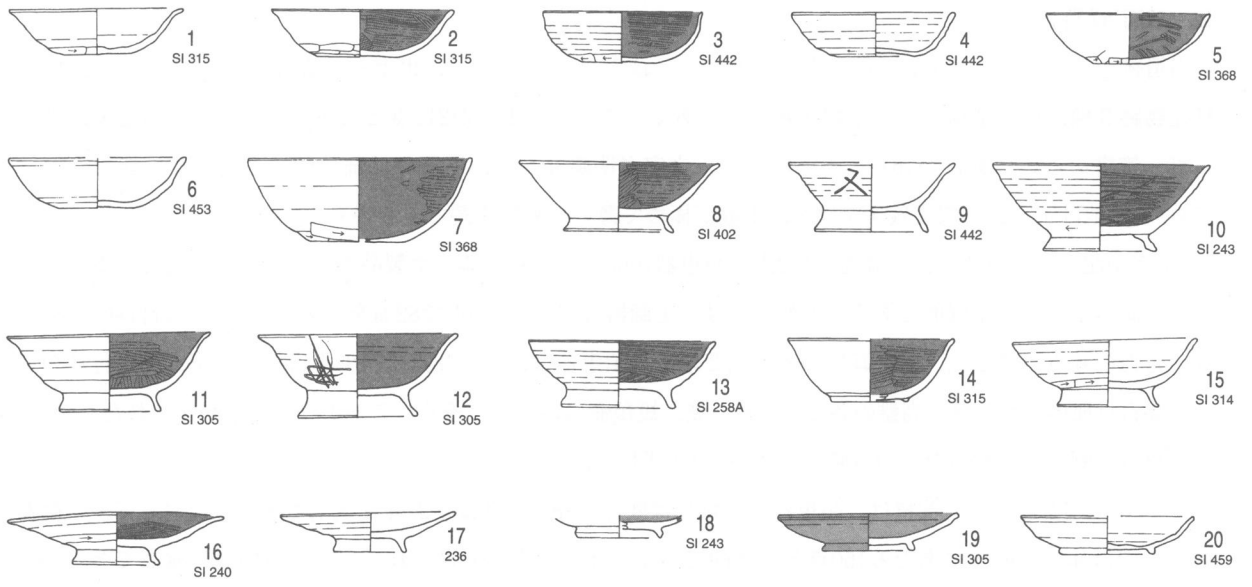
第Ⅵ期同様、緑釉陶器・灰釉陶器が多く出土する。器種構成は土師器坏・椀・高台付椀・高台付皿・甕、須恵器甕・鉢・甑である。食膳具は土師器坏・椀・高台付椀などすべて土師器で構成され、貯蔵・煮沸具も須恵器よりも土師器の割合が多くなる傾向にある。第305・315・442・477号住居跡などの土器群が該当する。

土師器坏・高台付椀は器形・技法共にバリエーション豊富な時期である。土師器坏E類は形態により、口縁部が外反するもの (1・2・6)、体部が内彎して半球形状のもの (3・5)、内彎気味で扁平なもの (4)、大形のもの (5) がある。底部調整は、体部下端・底部ともに回転ヘラ削りのもの (1～5)、体部下端が手持ちヘラ削りで底部は回転ヘラ削り (6・7) に大別できる。また、内・外面ともにロクロナデのもの (1・6・7) と、内面ヘラ磨き・黒色処理 (2～5) のものがあり、後者の方が割合は多いものの、前者が増えている傾向がみられる。高台付椀は体部が直線的に外方に開くA類 (8・9)、体部にわずかな丸みがあり、外方に開くB類 (10)、体部が内彎し口縁部で外反するC類 (11・12)、器高が低く半球形状を呈するD類 (13・15)、器高が高く体部が球形状を呈するE類 (14) に分けられる。これらの調整技法は内・外面ともにロクロナデのもの、内面ヘラ磨き・黒色処理、外面ロクロナデのものに分けられる。高台はA～D類は高いものである。これらに対しE類は、ひも状の粘土を底部に貼り付けたような高台で、リング状の非常に低いものである。これらの高い高台と極端に低い高台はこの時期及びこれ以降の特徴である。また、坏・椀の形態の差は、時期差ではなく、この時期のバリエーションととらえている。高台付皿は前段階と同様で変化はあまりみられない (16・17)。この外に内面ヘラ磨き・黒色処理された器高の高い椀がみられる (22)。

甕は土師器B類の大形 (24) と、C類 (21)、須恵器 (23) である。ヘラ磨きの土師器A類はみられなくなる。体部調整にヘラ削りを用いる土師器B類が残るが少量である。土師器C類も少量である。須恵器の甕が確認できたのはごくわずかであり、口縁部だけであるので全容は不明である (23)。須恵器甕は、口縁端部が、断面三角形につまみ上げられており、シャープなつくりである。甕が少なくなるのに対して、鉢は比較的まだよく見られる。この段階でも底部が残存していないと鉢と甑の区別はつかない。これらの叩きは長方形の格子目叩きである (25)。甑は土師器・須恵器の両者がある。土師器甑は、把手付の5孔式のもので、Ⅴ期に確認されたものより体部の丸みが少なくなる (27)。須恵器の甑は、体部と底部の残存であるので全容は不明であるが、確認できたものは5孔式で、体部外面には斜位の平行叩きが施される (26)。

共伴する灰釉陶器の皿は、底部に回転糸切り痕を残すもので、折戸53号窯式のものと思われるもの (18)、また緑釉陶器は黒笹90号窯式のものである (19・20)。

以上、中原遺跡の土器は7期にわたる変遷が認められる。各期の年代的な位置付けについては、須恵器が、数点を除いて、大部分が新治窯跡群産の製品であることから、当地における近年の窯編年による須恵器の年代観を参考に、また、灰釉陶器の編年観を参考にして、次のように考えておく。第Ⅰ期は8世紀前葉、第Ⅱ期は8世紀中葉、第Ⅲ期は8世紀後葉、第Ⅳ期は9世紀前葉、第Ⅴ期は9世紀中葉、第Ⅵ期は9世紀後葉、第Ⅶ期は10世紀前葉である。



第721図 中原遺跡第Ⅶ期の土器群

10L 3

## 2 文字資料について

当遺跡から出土した文字資料は、表13に示したとおり231点にのぼり、出土した遺構は、住居跡109軒、掘立柱建物跡3棟、竪穴遺構3基、土坑10基などである。このうち墨書が211点と大多数を占め、その他朱墨書が5点、窺書あるいは刻書が16点である。また、文字が明瞭なもの、あるいは部分的にも判読が可能なものは154点で、他は字形の一部を残すだけか、墨痕が極めて薄いために釈読できないものである。

文字が記された材質は、土師器が162点、須恵器が65点、灰釉陶器、土製品が各2点で、時期を考慮しなければ土師器が70%と圧倒的である。器形別では、土師器は、坏が135点で82%を占め、以下、高台付坏の18点、高台付皿の6点、甕2点、盤、耳皿の各1点と続く。須恵器は、坏が48点で74%を占め、以下、高台付坏の7点、高台付皿の3点、盤、高盤の各2点、蓋、甕、短頸壺の各1点と続く。このように文字が記されたものは、その材質を問わず坏や皿などの供膳具に多いことが明らかである。

さらに文字が記された部位は、須恵器の坏類では底部が38点と体部が22点と底部が多いのに対して、土師器の坏類では体部が93%にあたる150点と圧倒的である。体部に文字が書かれたものの方向は、確認できるものは須恵器の場合、正位が10例、横位が2例、倒位が1例である。土師器の場合は、正位が58例、横位が32例、倒位が9例で、全体的にも正位が多い。

こうした墨書土器を主体とする文字資料は、集落が形成された8世紀前葉から出現し、次第にその数を増して9世紀後半に盛期を迎え、集落が終焉となる10世紀前葉まで継続している。以下、各時期毎にその様相をみていくことにする。

まず8世紀前葉のものとしては、165・288・289号住居跡から墨書土器各1点が出土している。文字資料を出土した住居跡の割合は、9%と少ない。3軒の住居跡は、165号住居跡がやや南東に距離を置いているが、おおむねまとまりをみせている。このうち165号住居跡のものは土師器で、他の2点は須恵器である。文字が判読できるものは289号住居跡の「主万」のみである。これらは、県域における文字資料としては初期のものである。

次の8世紀中葉のものは、176・373号住居跡から墨書2点、346号住居跡から窺書1点が出土している。3軒の住居跡は、346号住居跡が南端部に存在しているが、他の2軒は中央部東側に存在している。文字資料を出土した住居跡の割合は、4%と前の時期より下回っている。材質はすべて須恵器である。文字は「富」「九十」などがみられるが、その意味するところは不明である。

8世紀後葉では、住居跡13軒、掘立柱建物跡1棟、土坑3基から25点確認されている。このうち19・335号住居跡及び68号掘立柱建物跡から出土している墨書土器3点は、9世紀後葉のものが何らかの理由で混入したものとみられるので、実質的には22点である。19・335号住居跡を除いた、文字資料を出土した住居跡の割合は、20%と前の時期より上昇する。住居跡は、342号住居跡が南端部に隔絶しているほかは、ほぼ中央部に存在しており、2ないし3グループに分けることが可能である。文字資料の内訳は、墨書13点、朱墨書2点、窺書3点、刻書4点である。材質は、209号住居跡から出土している土師器盤以外は須恵器である。文字が書かれた部位は、土師器1点と須恵器2点が体部である以外は底部である。文字の方向は、確認できるものは正位である。文字は31号住居跡と296号住居跡及び384号土坑の「度」、56号住居跡の「十」（朱墨）と373号住居跡の「十」（刻書）、48号住居跡の「□山□」と56号住居跡の「山川」に共通点がみられるが、住居跡は離れて存在していることから関連は不明である。また、当遺跡から出土した墨書土器のなかで、唯一多文字で、しかも「常陸国河内郡真幡郷 戸主刑部歌人」と、人名とその本貫地が記されている土師器小形甕が1588号土坑から出土している。土坑の時期は8世紀前葉であるが、土器はこの時期のもので、他の多くの土器類と

共に投棄されている。この土器は、墨書の記載から道教思想の影響により、病を封じこめた土器と考えられるが、当集落が存在するのは河内郡でも菅田郷であり、郡衙による徴発など、何らかの理由でこの地に赴いて居た際に記したもので、その後何らかの理由で廃棄されたものと考えられる。そのほか、298号住居跡から出土した「大家カ」は、官衙遺跡あるいはその周辺の集落跡から出土する例が多いもので、当集落の性格あるいは河内郡衙との関連で注目されるものである。

9世紀前葉になると、出土遺構、出土点数ともに前の時期よりやや減少し、7軒の住居跡と1基の竪穴遺構及び土坑から15点となる。文字資料を出土した住居跡の割合も、15%と下降している。住居跡は、84B号住居跡が北西部に位置しているほかは、おおむね南半部の2グループにまとまりをみせている。263号住居跡から出土した2点が漆書、275号住居跡から出土した「酒」が鏡書であるほかは、墨書である。この時期も須恵器が主流で、土師器が2例みられるほか、灰釉陶器が登場する。文字が書かれた部位は、前の時期より体部が増加し、体部と底部の数がほぼ同数となる。文字の方向は、この時期に初めて横位と倒位のものが出現する。文字では5号竪穴遺構の「万坏カ」が、この時期以降継続してみられることから注目される。そのほか、258号住居跡に「万」、275号住居跡に「酒」、310号住居跡に「家」などの文字がみられる。

9世紀中葉のものは、18軒の住居跡及び1棟の掘立柱建物跡から合わせて32点確認され、前の時期より出土遺構、出土点数ともに増加している。文字資料を出土した住居跡の割合は、29%となる。住居跡は、10軒ほどが北半部にまとまりをみせているほか、南半部には4軒が散在している。大部分は墨書であるが、そのうちには朱墨書1点、鏡書3点、刻書2点が含まれている。墨書土器26点と朱墨書土器のうち須恵器は10点で、土師器が16点と前の時期より増加している。この割合は、この時期の供膳具における土師器と須恵器の割合とおおむね符合している。文字が書かれた部位は、前の時期と同じように体部と底部の割合がほぼ同じである。体部に記された文字の方向は、確認できるものは正位を主体とし、倒位が2例、横位が1例みられる。文字では、前の時期に登場した「万坏」が、202号住居跡から1例、426号住居跡から2例と微増している。ほかに38号住居跡から「宗門」、39A号住居跡から「本戸」が出土しているが、その意味するところは明らかでない。

9世紀後葉のものは、出土遺構、出土点数ともに飛躍的に増加し、住居跡54軒、竪穴遺構、掘立柱建物跡各1棟、土坑4基および遺構外から合わせて117点確認されている。文字資料を出土した住居跡の割合も45%と上昇し、半数に近い住居跡から出土していることになる。文字資料のうち、朱墨書・鏡書各2点、刻書1点以外は墨書である。材質は須恵器13点、灰釉陶器1点、土製品2点以外は土師器で、土師器が圧倒的である。文字がかかれた部位は、土製品を除けば95%が体部であり、底部は3例と減少している。文字がかかれた方向は、正位が44例と多く、横位の29例、倒位の9例と続く。文字では、9世紀前葉から継続してみられる「万坏」が、74・403・415・422・492・494号住居跡の各1例、247・251・414号住居跡の各2例の12例と増加している。これに「万坏」との関連が想定できる「万」の3例、「坏」の2例を加えたものは、およそ集落の北半部に位置する住居跡から出土している。なお、9世紀前葉及び中葉のものも、同様に北半部の住居跡から出土している。また、この時期に多くみられる文字に「又上」があり、154・185・354・366号住居跡から各1例、163号住居跡から4例の合わせて8例出土している。この文字は、集落の南東部に位置する住居跡から出土しており、先の「万坏」とは分布域を異にしている。このことは、その意味するところはともかくとして、それぞれを共通の標識文字とする集団に分かれていたことが考えられる。また、「又上」と記されたもののうち、163号住居跡から出土している灰釉陶器は、底部内面に鏡書きされたものであり、墨書との関わりで注目される。すなわち、大別して墨書が灰釉陶器の「又上」を手本として書かれたか、この地の郡司層等の財力者が「又上」と記すように生産者に発注したかの二者が想定できる。前者については、さらに生産者の意図で記されたもの、当地以外の発注者からの依頼で記したものの両者の可能性が想定できる。このことにつ

いては、灰釉陶器の生産地や他県に「又上」の例がみられるかなどを探索した上で検討しなければならないが、原則的には前者の可能性が考えられよう。ほかには「上」の7例、「十」の4例、「富」「本」の3例、「永成」「徳」「川」「大門」(朱書)の2例などがみられる。「富」「福」「徳」などが吉祥的な文字である以外は、その意味するところは不明である。

10世紀前葉のものは、前の時期より大幅に減少し、住居跡11軒、竪穴遺構1基、土坑2基から27点となる。文字資料を出土した住居跡の占める割合は、26%である。住居跡の分布状況は、210・212・213号住居跡など6軒が集落の北東部にまとまりをみせている以外は、北西部から南部にかけて散在している。これらの住居跡のうち、北東部に存在する212・213号住居跡は、この時期としては例がないほど大形のものである。文字資料はすべて墨書であり、材質もすべて土師器である。器形は、坏が20点を占め、他は高台付坏である。文字が書かれた部位は、体部が24点と多数を占め、残りの3点は底部である。体部に書かれた文字の方向は、正位が12例と最多で、以下横5例、倒位1例である。文字では、前の時期から継続する「万」あるいは「万□」が212号住居跡と949号土坑にみられる。また、この時期に初めて登場するものとして「生」があり、210号住居跡から3点、213号住居跡から2点出土している。両住居跡は、北東部のまとまりのなかにあり、9mほどの距離をもって南北に位置している。そのほかには、「成万」「上田」「又」「南」などの文字がみられる。

各時期ごとの様相は以上の様であり、8世紀中葉までは量的に少ないが、8世紀後葉に増加し、以後は集落の盛衰とおおむね合致していることが明らかになった。1軒の住居跡からの出土数は、9世紀前葉までは多くて3例であるが、9世紀中葉になると271号住居跡の6例、9世紀後葉には163・323号住居跡の8例、10世紀前葉には212号住居跡の7例など、多数を出土するものがみられるようになる。

当遺跡において確認された文字資料は、前に述べたとおり231点である。この数は本県域において確認された1遺跡における文字資料としては、鹿嶋市神野向遺跡の512点、結城市峯崎遺跡の250点に次ぐものであり、文字資料の在り方を考えるうえにおいては有効な資料となるであろう。ただ、当遺跡が河内郡衙に近接し、郡衙と何らかの関わりが考えらるに足らず、神野向遺跡の例のように、その遺跡の性格を示唆するような文字・語句はみることができず、その意味を解することが不可能なものが多い。文字数も、人名と本貫地を記したものを除けば、3文字の可能性が想定できるものが1例みられるほかは、1ないし2文字である。

そうしたなかで、集落における共通の標識ともいえる文字として「万坏」「又上」「度」「生」が、時期を限ってみられることはすでに述べたとおりである。それ以外に、時期的には集中しないが、通してみられるものに「川」6例、「富」4例、「十」11例、「本」5例など東日本における他の遺跡とも共通する文字がある。そのうち「十」は墨書6例、刻書3例、朱墨書・漆書各1例で、8世紀後葉以降継続してみられる。この「十」は「×」である可能性も有り、「井」や「☆」などのように呪符の魔除け記号の可能性が考えられているものである。2文字のものとしては、「万坏」「又上」のほかは複数例のものは少なく、30号住居跡の「永成」、229号住居跡「大門」の各2例がみられるのみである。

以上のように、当遺跡において確認された出土文字資料は、人名と考えられる例もあるが、吉祥的なものなど東日本の多くの遺跡から出土する文字、あるいはその意味を解することができない語句が大部分で、記載内容に基づいて分類することが不可能なものが多い。このことは、官衙遺跡における所属・所有などを意味するものとは異なり、平川南氏などが述べているように、集落内における祭祀や儀礼行為に際して、一種の符号あるいは記号として記されたものと考えることができよう。よって、当集落は河内郡衙との関わりあるいは郡領層の居宅などが想定されているが、文字資料が一般の集落より多いこと以外に、文字の内容からはそのような性格を読み取ることはできない。

表13 出土文字資料一覽表

文 字	種 別	器 種	部 位・方 向	遺構番号	遺物番号	出土遺構時期	備 考
本井	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI16	P120	9世紀後葉	『155集』参照
大山	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI19	P143	9世紀後葉	『155集』参照
工	墨書	須惠器高台付皿	体部内面	SI27	P206	9世紀中葉	『155集』参照
永成	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI30	P217	9世紀後葉	『155集』参照
永成	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI30	P219	9世紀後葉	『155集』参照
度	墨書	須惠器坏	底部外面	SI31	P222	8世紀後葉	『155集』参照
宗門	墨書	土師器高台付坏	底部外面	SI38	P267	9世紀中葉	『155集』参照
本戸	墨書	土師器坏	底部外面	SI39 A	P273	9世紀中葉	『155集』参照
壬	墨書	灰釉陶器碗	底部外面	SI39 A	P289	9世紀中葉	『155集』参照 猿投窯産（黒笹14号窯式）
前	墨書	須惠器坏	底部内面	SI47	P323	9世紀中葉	『155集』参照
□山□	墨書	須惠器高台付坏	底部外面	SI48	P329	8世紀後葉	『155集』参照
□	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI53	106	9世紀中葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI53	107	9世紀中葉	
□	墨書	土師器坏	底部外面	SI53		9世紀中葉	
+	朱書	須惠器坏	底部外面	SI56	117	8世紀後葉	
山川	刻書	須惠器坏	体部外面正位	SI56	P363	8世紀後葉	『155集』参照
富	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI67	P422	9世紀後葉	『155集』参照
千	墨書	土師器高台付坏	体部外面正位	SI71	P441	9世紀後葉	『155集』参照
万	墨書	須惠器高台付坏	体部外面横位	SI72	P443	9世紀後葉	『155集』参照
万坏	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI74	P449	9世紀中葉	『155集』参照
吓	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI74	P450	9世紀中葉	『155集』参照
□	墨書	須惠器坏	底部外面	SI84 B	134	9世紀前葉	
□	墨書	須惠器坏	底部外面	SI84 B	136	9世紀前葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI94	P 47	9世紀後葉	『159集』参照
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI101	P 49	9世紀後葉	『159集』参照
仲	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI106	P 71	9世紀後葉	『159集』参照
前東	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI109	P 81	9世紀後葉	『159集』参照
十八	墨書	須惠器坏	体部外面正位	SI116	P 106	9世紀中葉	『159集』参照
大□	刻書	土師器小形甕	体部外面	SI135	P 173	9世紀中葉	『159集』参照
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI140	P 202	9世紀後葉	『159集』参照
川	墨書	土師器高台付坏	体部外面正位	SI140	P 203	9世紀後葉	『159集』参照
上	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI147	P 252	9世紀後葉	『159集』参照
又上	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI154	P 758	9世紀後葉	『159集』参照
又上	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI163	151	9世紀後葉	
又上	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI163	152	9世紀後葉	
本	墨書	土師器坏	体部外面倒位	SI163	153	9世紀後葉	
又上カ	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI163	154	9世紀後葉	
本カ	墨書	土師器坏	体部外面倒位	SI163	155	9世紀後葉	
又上	墨書	須惠器坏	体部外面	SI163	P 804	9世紀後葉	『159集』参照
又上	墨書	土師器皿	体部外面横位	SI163	P 805	9世紀後葉	『159集』参照
又上	篋書き	灰釉陶器碗	底部内面	SI163	P 811	9世紀後葉	『159集』参照 猿投産（黒笹90号窯式）
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI165	P 818	8世紀前葉	『159集』参照
主	刻書	須惠器坏	底部外面正位	SI168A	P 830	9世紀中葉	『159集』参照
富	墨書	須惠器蓋	天井部内面	SI176	168	8世紀中葉	
春	刻書	須惠器坏	底部外面正位	SI180	P 289	9世紀中葉	『159集』参照
井	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI182	P 299	9世紀中葉	『159集』参照

文 字	種 別	器 種	部 位・方 向	遺構番号	遺物番号	出土遺構時期	備 考
又上	墨書	土師器高台付皿	体部外面正位	SI185	P 308	9世紀後葉	『159集』参照
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI200	P 502	9世紀後葉	『159集』参照
□	墨書	須惠器坏	底部外面	SI201	P 503	8世紀後葉	『159集』参照
□	墨書	須惠器坏	底部外面	SI201	P 504	8世紀後葉	『159集』参照
万坏	墨書	土師器坏	体部外面倒位	SI202	177	9世紀中葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI202		9世紀中葉	
犬	刻書	須惠器坏	底部外面	SI206	P 552	9世紀中葉	『159集』参照
□	墨書	須惠器坏	体部外面	SI207	P 544	9世紀後葉	『159集』参照
上カ	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI207	P 551	9世紀後葉	『159集』参照
□	墨書	土師器盤	体部外面	SI209	P 563	8世紀後葉	『159集』参照
生	朱書	土師器坏	体部外面正位	SI210	P 573	10世紀前葉	『159集』参照
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI210	P 574	10世紀前葉	『159集』参照
生	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI210	P 575	10世紀前葉	『159集』参照
生	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI210	P 576	10世紀前葉	『159集』参照
万□	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI212	P 594	10世紀前葉	『159集』参照
念カ	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI212	P 595	10世紀前葉	『159集』参照
封	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI212	P 596	10世紀前葉	『159集』参照
万□	墨書	土師器高台付坏	体部外面横位	SI212	P 598	10世紀前葉	『159集』参照
南	墨書	土師器高台付坏	底部外面	SI212	P 599	10世紀前葉	『159集』参照
□	墨書	土師器高台付坏	体部外面	SI212	P 600	10世紀前葉	『159集』参照
合	墨書	土師器高台付坏	底部外面	SI212	P 601	10世紀前葉	『159集』参照
生	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI213	P 614	10世紀前葉	『159集』参照
生	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI213	P 615	10世紀前葉	『159集』参照
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI213	P 616	10世紀前葉	『159集』参照
本	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI214	P 623	10世紀前葉	『159集』参照
十	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI215	P 629	9世紀後葉	『159集』参照
十	墨書	須惠器坏	体部外面正位	SI215	P 631	9世紀後葉	『159集』参照
十	刻書	土師器高台付皿	体部外面正位	SI215	P 634	9世紀後葉	『159集』参照
□	墨書	須惠器高台付皿	体部外面	SI217	P 648	9世紀後葉	『159集』参照
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI218	P 658	9世紀後葉	『159集』参照
上	墨書	須惠器高台付皿	体部外面正位	SI218	P 660	9世紀後葉	『159集』参照
上	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI219	P 663	8世紀後葉	『159集』参照
集	墨書	須惠器坏	底部外面正位	SI224	P 688	9世紀中葉	『159集』参照
芋	朱書	須惠器高盤	裾部内面正位	SI224	P 703	9世紀中葉	『159集』参照
呻	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI226		10世紀前葉	
万□	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI227	P 711	9世紀後葉	『159集』参照
□十カ	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI227		9世紀後葉	
十カ	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI227		9世紀後葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI227		9世紀後葉	
古	墨書	土師器坏	底部外面	SI229	232	9世紀後葉	
大門	朱書	土師器坏	体部外面横位	SI229	233	9世紀後葉	
大門	朱書	土師器坏	体部外面横位	SI229	234	9世紀後葉	
七十	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI229	235	9世紀後葉	
古	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI229	236	9世紀後葉	
福カ	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI229	237	9世紀後葉	
徳カ	墨書	土師器坏	体部外面倒位	SI229	238	9世紀後葉	
徳	墨書	土師器坏	体部外面倒位	SI234	264	9世紀後葉	



文字	種別	器種	部位・方向	遺構番号	遺物番号	出土遺構時期	備考
徳	墨書	土師器坏	底部外面	SI234	265	9世紀後葉	
万	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI234		9世紀後葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI234		9世紀後葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI234		9世紀後葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI236	287	10世紀前葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI237	293	9世紀中葉	
□	墨書	土師器坏	底部外面	SI240	318	10世紀前葉	
万坏	墨書	土師器碗	体部外面正位	SI247	364	9世紀後葉	
坏	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI247	366	9世紀後葉	
万坏	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI247	367	9世紀後葉	
□	墨書	土師器坏	底部外面	SI250	385	9世紀中葉	
万坏カ	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI251	389	9世紀後葉	
万カ坏	墨書	須惠器坏	体部内面横位	SI251	394	9世紀後葉	
万	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI258	408	9世紀前葉	
万	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI261	438	9世紀後葉	
万	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI261	439	9世紀後葉	
十	漆書	須惠器坏	底部外面	SI263	448	9世紀前葉	
□	漆書	須惠器坏	底部外面	SI263	450	9世紀前葉	
九カ	匱書	須惠器高台付坏	底部外面	SI263	451	9世紀前葉	
成万	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI266	482	10世紀前葉	
□□	墨書	須惠器坏	底部外面	SI271	512	9世紀中葉	
□上	墨書	須惠器坏	底部外面	SI271	515	9世紀中葉	
太	墨書	須惠器坏	体部外面倒位	SI271	516	9世紀中葉	
田	墨書	須惠器坏	底部外面	SI271	517	9世紀中葉	
十	刻書	須惠器坏	底部外面	SI271	1278	9世紀中葉	
十	刻書	須惠器高台付盤	底部内面	SI271	1280	9世紀中葉	
酒	匱書	須惠器短頸壺	体部外面横位	SI275	524	9世紀前葉	
下カ	墨書	土師器坏	体部外面倒位	SI285	580	10世紀前葉	
未カ	墨書	須惠器坏	体部外面正位	SI288	582	8世紀前葉	
主万	墨書	須惠器高台付坏	底部内面	SI289	585	8世紀前葉	
中	匱書	須惠器高台付坏	底部外面	SI294	616	8世紀後葉	
度	墨書	須惠器坏	底部外面	SI296	627	8世紀後葉	
大家カ	墨書	須惠器坏	底部外面	SI298	635	8世紀後葉	
川カ	墨書	須惠器坏	体部外面正位	SI298	642	8世紀後葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI305	606	10世紀前葉	
家	墨書	土師器高台付坏	体部外面倒位	SI310	693	9世紀前葉	
合	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI312	695	9世紀後葉	
介カ□	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI312	698	9世紀後葉	
十	墨書	土師器坏	外面正位	SI323	845	9世紀後葉	
坏	墨書	土師器碗	外面横位	SI323	846	9世紀後葉	
坏	墨書	土師器坏	外面横位	SI323	847	9世紀後葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI323		9世紀後葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI323		9世紀後葉	
五カ	墨書	須惠器坏	体部外面横位	SI323		9世紀後葉	
□	墨書	須惠器坏	体部外面	SI323		9世紀後葉	
□	墨書	須惠器坏	体部外面	SI323		9世紀後葉	
□/□	墨書	土師器高台付碗	体部外面	SI330	872	9世紀後葉	2カ所

文 字	種 別	器 種	部 位・方 向	遺構番号	遺物番号	出土遺構時期	備 考
九カ□	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI332	2813	8世紀中葉	
本	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI335	913	8世紀後葉	
上	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI337	934	9世紀後葉	
□	墨書	須惠器坏	体部外面	SI339	953	9世紀前葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI340	982	9世紀後葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI340	983	9世紀後葉	
草	墨書	須惠器坏	底部外面	SI342	1005	8世紀後葉	
十	墨書	須惠器坏	体部外面正位	SI350	1026	9世紀中葉	
廿カ	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI351	1028	9世紀後葉	
廿万一	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI352	1043	9世紀後葉	
又上	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI354	1060	9世紀後葉	
田	墨書	土師器坏	底部外面	SI357	1166	9世紀後葉	
東	墨書	須惠器坏	体部外面正位	SI357	1167	9世紀後葉	
川	刻書	土製品	側面	SI357	1171	9世紀後葉	
又上	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI358	1173	9世紀後葉	
又上カ	墨書	土師器皿	体部外面正位	SI358	1174	9世紀後葉	
□下カ	墨書	土師器坏	体部外面倒位	SI366	919	9世紀後葉	
上	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI366	939	9世紀後葉	
又上	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI366	1095	9世紀後葉	
□	墨書	土師器高台付椀	体部外面	SI366	1098	9世紀後葉	
九十	墨書	須惠器坏	底部外面	SI373	1143	8世紀中葉	
「H」字状	刻書	須惠器坏	底部内面	SI378	1191	8世紀後葉	
万	墨書	灰釉陶器椀	底部外面	SI389	1268	9世紀前葉	猿投産（黒笹14号窯式）
□	墨書	土師器耳皿	体部外面	SI399	1342	9世紀後葉	
□□	墨書	土師器坏	体部外面	SI402	1387	10世紀前葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI403	1393	9世紀後葉	
万坏	墨書	須惠器坏	体部外面横位	SI403	1394	9世紀後葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI406	1415	9世紀後葉	
谷	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI407	1428	9世紀後葉	
上	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI407	1429	9世紀後葉	
□	墨書	土師器椀	体部外面	SI412	1444	9世紀後葉	
万坏	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI414	1454	9世紀後葉	
万坏カ	墨書	土師器坏	体部外面倒位	SI414	1456	9世紀後葉	
万坏	墨書	土師器坏	体部外面倒位	SI415	1460	9世紀後葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI415	1461	9世紀後葉	
上富	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI416	1469	9世紀後葉	
□	墨書	土師器高台付坏	体部外面	SI416	1471	9世紀後葉	
万坏カ	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI422	1525	9世紀後葉	
□	墨書	須惠器坏	体部外面	SI422	1529	9世紀後葉	
万坏	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI426	1544	9世紀中葉	
本	墨書	土師器高台付皿	体部外面正位	SI426	1545	9世紀中葉	
万カ	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI426		9世紀中葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI426		9世紀中葉	
富	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI428	1557	9世紀中葉	
又	墨書	土師器高台付椀	体部外面正位	SI442	1655	10世紀前葉	
万	墨書	土師器椀	体部外面正位	SI443	1659	9世紀後葉	
川	墨書	須惠器坏	底部外面	SI447	2043	9世紀前葉	

文 字	種 別	器 種	部 位・方 向	遺構番号	遺物番号	出土遺構時期	備 考
川	墨書	須恵器坏	底部外面	SI447	2046	9世紀前葉	
川カ	墨書	須恵器高盤	脚部内面	SI447	2050	9世紀前葉	
下	刻書	須恵器高台付坏	底部外面	SI460	1794	8世紀後葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI465	1829	10世紀前葉	
仲村	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI472	1864	9世紀後葉	
□	朱書	須恵器坏	底部外面	SI488	1958	8世紀後葉	
上カ	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI491	1979	9世紀後葉	
万坏	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI492	1992	9世紀後葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SI492	1993	9世紀後葉	
本カ	墨書	土師器坏	体部外面横位	SI492	1994	9世紀後葉	
万カ	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI494	2006	9世紀後葉	
□大	墨書	土師器坏	体部外面正位	SI494	2009	9世紀後葉	
□	墨書	土師器碗	体部外面	SH4	690	9世紀後葉	
万坏カ	墨書	須恵器坏	体部外面正位	SH5	2814	9世紀前葉	
七	墨書	土師器坏	体部外面横位	SH6	1591	10世紀前葉	
富	墨書	土師器坏	体部外面倒位	SB68	P 724	8世紀末葉	『159集』参照
□	墨書	須恵器坏	底部外面	SB86	2219	9世紀前葉	
□	墨書	須恵器坏	底部外面	SB139	2274	8世紀後葉	
度	墨書	須恵器坏	底部外面	SK384	P604	8世紀後葉	『155集』参照
□	墨書	土師器高台付皿	体部外面	SK417	P 220	8世紀後葉～ 9世紀中葉も しくはそれ以 前	『159集』参照
新	墨書	須恵器坏	底部外面	SK417	P 216		『159集』参照
中	墨書	須恵器高台付坏	底部外面	SK417	P 223		『159集』参照
九	刻書	須恵器高台付坏	底部外面	SK443	P 351	9世紀中葉も しくはそれ以 前	『159集』参照
「川」字状	刻書	須恵器盤	底部外面	SK443	P 352		『159集』参照
□	刻書	土製紡錘車	上面	SK633	DP108	9世紀後葉	『159集』参照
□	墨書	土師器坏	体部外面	SK635	P 740	9世紀後葉	『159集』参照
□	墨書	土師器高台付坏	体部外面	SK740A・B	2507	9世紀後葉	
万	墨書	土師器坏	体部外面横位	SK898	2561	9世紀後葉	
万	墨書	土師器坏	体部外面横位	SK898	2562	9世紀後葉	
□	墨書	土師器坏	体部外面	SK908	2584	不明	
万	墨書	土師器高台付坏	体部外面正位	SK949	2592	10世紀前葉	
上田	墨書	土師器高台付碗	体部外面正位	SK1295	2642	10世紀前葉	
常陸國河内郡真播郷 戸主 刑部歌人	墨書	土師器甕	体部外面正位	SK1588	2654	8世紀前葉以前	
山川	鏡書	須恵器高台付坏	底部外面	SD11	P553	8世紀代	『155集』参照
□	墨書	土師器坏	体部外面	遺構外	P 360		『159集』参照
□	墨書	土師器坏	体部外面	遺構外	P 743		『159集』参照
下	墨書	土師器坏	体部外面横位	遺構外	P 744		『159集』参照
太	墨書	土師器坏	体部外面横位	遺構外	P 745		『159集』参照
「宍」か「定」	墨書	土師器高台付坏	体部外面正位	遺構外	P 746		『159集』参照
□	墨書	土師器高台付皿	体部外面	遺構外	P 747		『159集』参照
□	墨書	土師器高台付皿	体部外面	遺構外	P 748		『159集』参照
□	墨書	須恵器高台付皿	体部外面	遺構外	P 749		『159集』参照
□福	墨書	土師器坏	体部外面横位	遺構外	2808		
福	墨書	土師器坏	体部外面横位	遺構外	2809		

### 3 集落の変遷

前項で示した土器の変遷に基づく時期区分に従って集落の変遷を述べる。特に掘立柱建物跡が集中している区域を、便宜上北西部から時計回りにA～E群と称して記述する。

#### 第Ⅰ期

第113・120・160・165・188・191・194・259・262・264・269・272・276・284・286・288・289・360・374・380・387・388・390・391・393・396・436・437・446・448・451号住居跡の31軒，第6・9・13・14・15・16・18・22・27・52・54・92・122・132号掘立柱建物跡の14棟，第1号堀が該当する。

中原集落の出現期である。竪穴住居が集中している区域と掘立柱建物が集中している区域が意図的な空白域と堀により明確に区画されている。

北西部には第1号堀によって区画された掘立柱建物A群がある。しっかりとした規格性はないものの，第9・22・27・14・15号掘立柱建物跡が東西に並び，その北側には第6・18・16・132号掘立柱建物跡が東西に並び，さらに北側に第13号掘立柱建物跡が位置する。いずれの建物も軸方向が4～11度西に振れており，堀と軸方向が一致する。第6号掘立柱建物跡は3間×3間の総柱建物で，面積は40m<sup>2</sup>を超え，A群の中では最も大きい。第13・16号掘立柱建物跡が総柱建物で，そのほかは側柱建物である。面積は第9・22号掘立柱建物跡が30m<sup>2</sup>を超えるが，その他は30m<sup>2</sup>以下と小規模である。掘立柱建物跡A群の建物は小規模であるが，10棟もの建物が建ち並んでおり，倉庫群としての機能は十分果たせたものと思われる。堀によって明確に区画されているということから，郡衙関連の倉庫群の可能性がある。

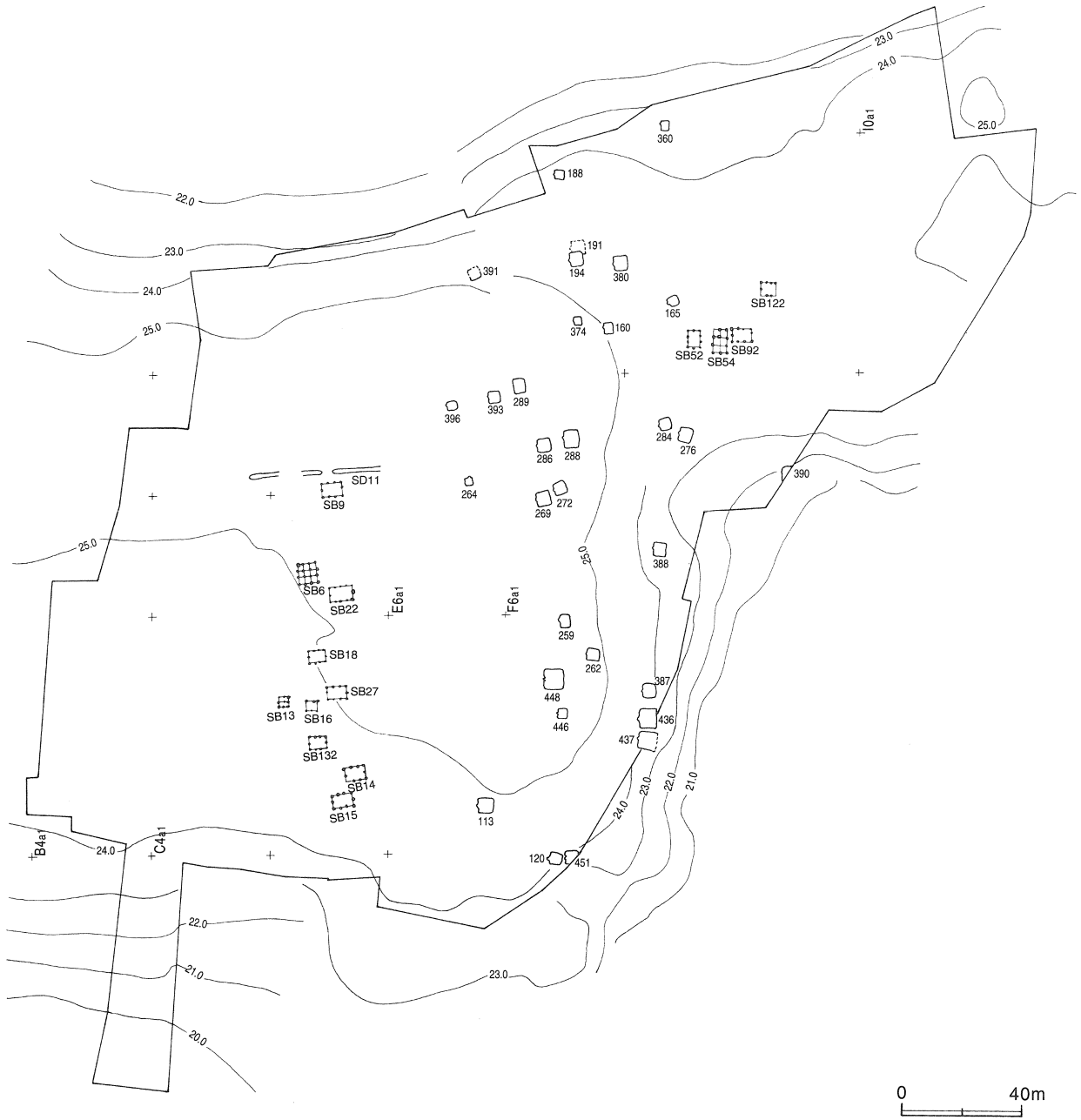
集落の南東部には掘立柱建物C群の第52・54・92・122号掘立柱建物跡が展開する。これらは第160・380号住居跡等の軸方向とほぼ同一である。第1号堀に区画されている掘立柱建物A群同様，しっかりとした規格性は見られないものの，第52・54・92・122号掘立柱建物跡は，L字形の配置をとっている。第54号掘立柱建物跡は面積30m<sup>2</sup>を超える総柱建物である。C群の建物群は，おそらく集落の倉庫として，穀・穎類などを保管していたものであろう。

竪穴住居は第113・120・451号住居跡の1単位，一辺が6mを超える比較的大形の第436・437・448号住居跡のほか第259・262・446号住居跡で構成される1単位，第264・269・272・286・288・289・391・393・396号住居跡の1単位，第160・165・191・194・374・380号住居跡の1単位，第276・284・388・390号竪穴住居跡の1単位の5単位に分けられる。これらの住居の軸方向は，東に振れるものはごく一部で，大部分が真北から0～11度西に振れており，第1号堀，掘立柱建物A群の軸方向と一致している。

#### 第Ⅱ期

第2・3・14・17・20・24・44・58・76・79・80・81・85・87・91・102・104・117・125・126・129・152・153・156・159・171・176・177・184・187・189・190・241・244・253・257・260・287・293・295・297・300・302・311・317・324B・328・332・346・348・373・381・382・392・401・408・421・440・444・449・474・479・480・484・485・487・497号住居跡の67軒，第3号竪穴状遺構の1軒，第1・2・3・12・17・24・25・29・30・131・133・135・137・138号掘立柱建物跡のA群，第65・70・71・79・145号掘立柱建物跡のB群，第45・95・112・113・115・116号掘立柱建物跡のC群，第104・118号掘立柱建物跡のD群，第44・100・101・128号掘立柱建物跡のE群が該当する。

第Ⅰ期の段階では，居住区域と掘立柱建物の倉庫群が堀や空白域によって明確に分離・区画されていたが，当期には堀がなくなり，住居も台地全体に拡散する。竪穴住居・掘立柱建物は共に前期に比べ倍の数に膨れ上がり，集落の成長期といえる。



第722図 中原遺跡第I期遺構群

掘立柱建物A群の周りにはこれを区画するように第3・14・44・58・80・474号住居跡等が配されている。このA群は、第I期の第1号堀に区画された倉庫群の規模と規格を受け継いでいると思われ、建物の軸は前期に存在した第1号堀の軸と同様に、3～8度西に振れ、周囲の住居跡の軸も同様な方向である。当期には堀の区画はなくなり、A群の周りの空白域が長方形にとられ居住域と区別されている。掘立柱建物跡A群は第17・30・131・133・138号掘立柱建物跡が北の梁行きの柱筋を通して、東西に配列される。その北東側に、第1・2・3・12・24・25号掘立柱建物跡が北の桁行きの柱筋を通して配列される。掘立柱建物跡の規模は、面積15～39㎡と小形である。前期の特徴を残していることから、この段階までは、郡衙関連の倉庫群として機能し続けていると思われる。また、この倉庫群の南側には比較的大形の第44・58号住居跡があり、倉庫群の管理的役割をもった階層の住居と考えられる。

また、第I期には全く建物跡がみられなかった掘立柱建物A群の北側にも第2・3・14・474号住居跡をはじめとした、竪穴住居群が展開する。この一群の第324B・474号住居跡からは鉄鉢形土器が、第2号住居跡からは金床石・金槌が出土している。さらに、北西端部にも第485・487・484号住居跡、第140号掘立柱建物跡がみられるようになる。

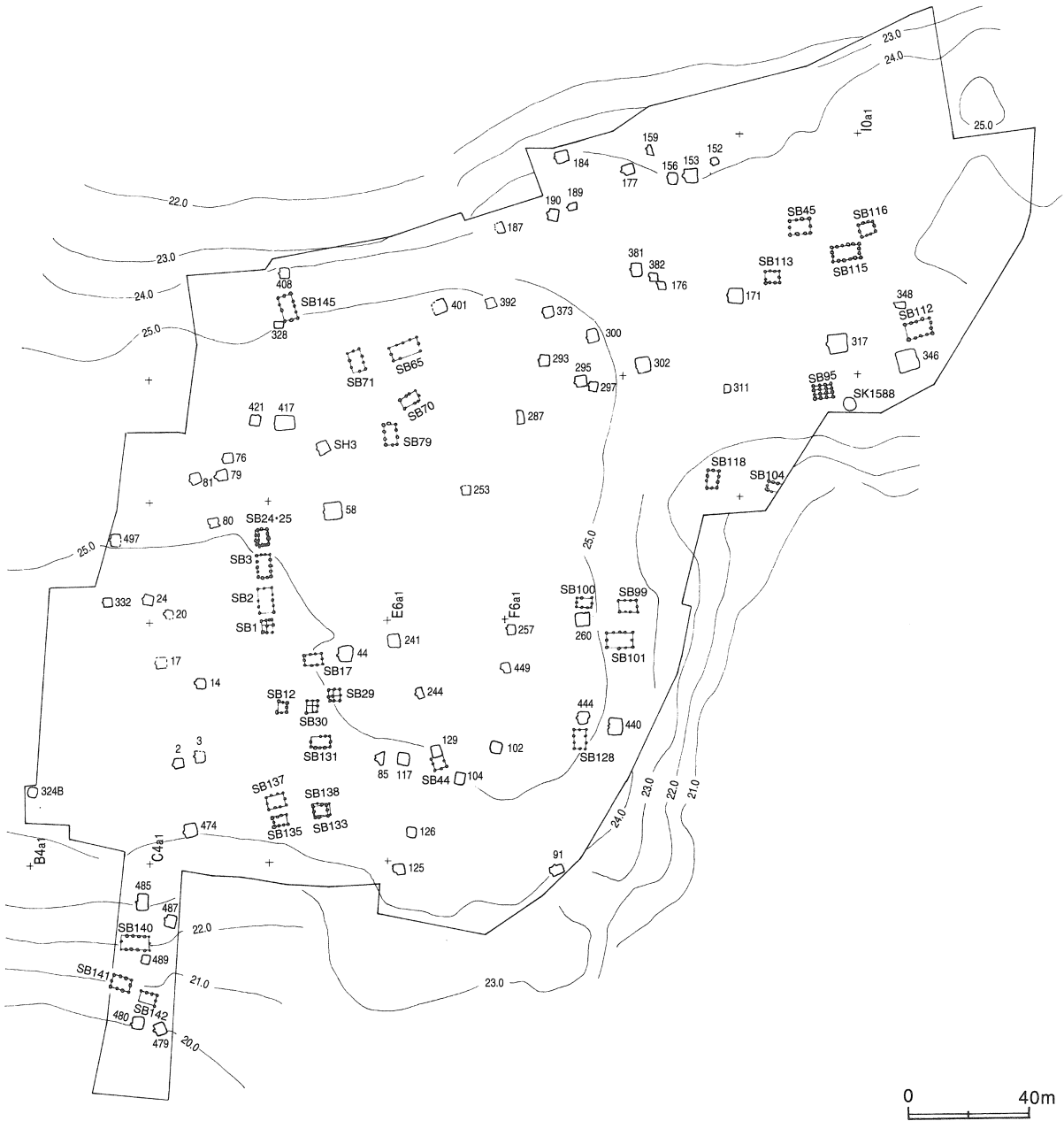
北東部には掘立柱建物B群が、軸方向が西に20度前後の振れで、不規則に配置される。第65号掘立柱建物跡は面積40㎡以上の南北棟の側柱建物で比較的大形であるが、それ以外は小規模である。掘立柱建物B群の周りも空白域で、居住域と区別され、その外周に第329・401・408・417号住居跡が配置されている。第417号住居跡からは、鍛冶関連遺物が出土し、床面には3か所の鍛冶炉が検出されており、鍛冶工房と考えられる。この区域では、当期から鉄関連の手工業が始められたと思われる。このことから、掘立柱建物B群は、穀・穎類だけの倉庫として機能していたというよりは、鍛冶関連の倉庫としても使用されていた可能性がある。

南東部には第I期から引き続いて掘立柱建物C群があり、6棟の掘立柱建物と、5軒の竪穴住居からなる建物群がみられる。建物群の西端には第1588号土抗があり、「常陸國河内郡眞樺郷戸主刑部歌人」の人名墨書土器が出土している。C群の建物の中心となるのは、第95号掘立柱建物跡と大形の第317・346号住居跡である。第112・115号掘立柱建物跡は3間×5間で面積50㎡以上、柱穴は一辺が約1m、深さが70cmと大形のもので、穎稲類保管の「屋」と考えられる。第95号は3間×3間の総柱建物で、面積約30㎡、柱穴は一辺が約1m、深さ1mであり、穀類保管の「倉」と考えられる。第317・346号住居跡は一辺が6mを超える比較的大形のものである。このように、この一群は大形の第346号住居跡を中心に、小形の第348号住居跡、第112号掘立柱建物跡の屋で構成される1単位、大形の第317号住居跡を中心に、中形の171号住居跡、第95号掘立柱建物跡の倉、第115号掘立柱建物跡の屋、第45・113・116号掘立柱建物跡の雑舎で構成されている。

掘立柱建物D群は、第104・118号掘立柱建物跡がみられるのみで、住居跡もみられず、周りは空白域になっている。D群は集落の中央部南端に位置するため、2棟だけの構成に見えるが、D群の建物群はさらに南もしくは西に展開されるものと思われる。

南西部には新たにみられるようになった掘立柱建物E群の4棟の建物、3軒の住居からなる建物群がみられる。この建物群は、第260号住居跡と第100号掘立柱建物跡、第444号住居跡と第128号掘立柱建物跡、第440号住居跡と第101号掘立柱建物跡がセットになり、長方形の配置をとっている。

以上のように掘立柱建物A群はI期の影響を残した配置をとり、機能としても受け継いでいると思われる。掘立柱建物B群は新たに展開されるようになる。C・E群は「大形住居跡+掘立柱建物跡+小・中形住居跡」という構成になっている。また、住居だけで構成される一群は、5軒前後が一単位となり、12単位みられる。当期には、鉄鉢形土器や銅鏡を保有するようになり、集落内に仏教の浸透がみとめられる。また、刀子は10点、



第723図 中原遺跡第Ⅱ期遺構群

鎌2点、短刀2点、石製・鉄製・土製の紡錘車は5点出土している。第417号住居跡は鍛冶工房であり、この外の住居跡からも鉄滓が出土している。これらのことから、中原の集落では第Ⅱ期から鉄関連・繊維関連に関わる手工業が開始されたと思われる。

### 第Ⅲ期（第724図）

第4・6・13・31・35・36・39B・41・48・56・73・75・90・103・108・110・124・131・137・141・158・170・172・174・179・186・201・206・209・211・216・219・225・232・289・283・294・296・298・308・320・324A・325・331・335・342・372・378・379・395・400・405・411・433・457・460・469・471・481・482・488号竪穴住居跡の61軒、第4A・4B・5・19・23・26・42・61・66・67・68・81・82・89・90・91・107・111・114・123・139号掘立柱建物跡の21棟が該当する。

前期の集落規模を保ち、中原集落の充実期である。

第Ⅰ・Ⅱ期と受け継がれてきた北西部の掘立柱建物A群にはこれまでのような明確な区画はみられなくなる。ここには9棟の掘立柱建物と10軒の住居跡の建物群がみられる。第23・81・82号掘立柱建物跡と第5・19号掘立柱建物跡が逆L字状に配置されている。この北側には第4A・4B・第26号掘立柱建物跡が北梁行きを通して並んでいる。これらの周りには、灰釉陶器の長頸瓶や「十」の朱書土器、「山川」の刻書土器、短刀、刀子7本等が出土した、一辺が6mを超える大形の第56号住居跡が、西側には火打金や鉄滓が出土した第35号住居跡がある。これらの建物群の北西部には第41・39B号住居跡が重複して位置するが、出土土器からは大きな時期差は認められないことから、短期間のうちに第41号から第39B号住居に建て替えがおこなわれたものと思われる。

A群の北側には5軒1単位の住居がみられ、住居の規模はすべて小形である。このうちの第4号住居跡からは石製紡錘車、第6号住居跡からは3点の刀子、第13号住居跡からは石製紡錘車、2点の刀子、灰釉陶器平瓶が出土している。

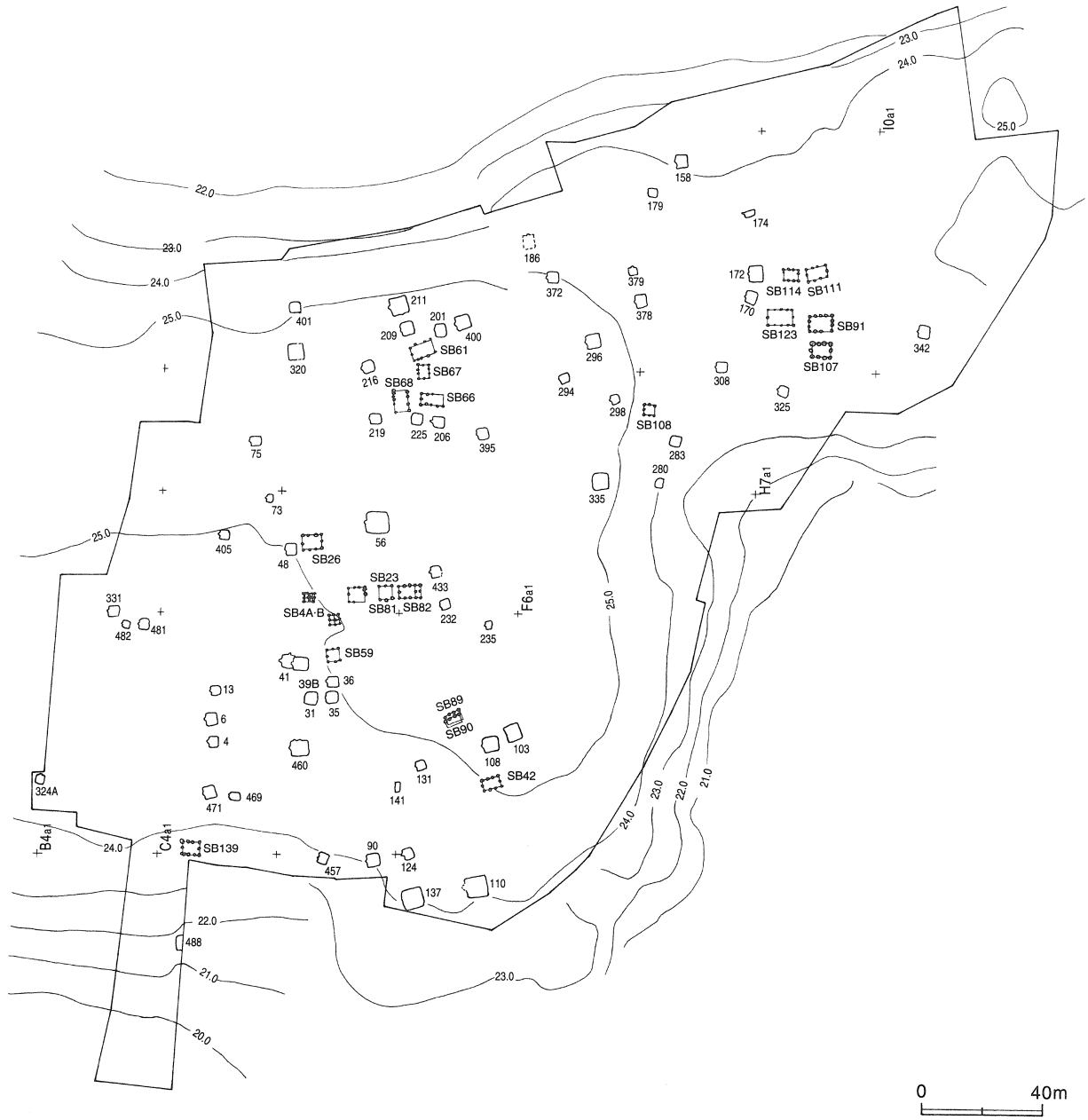
北東部の掘立柱建物B群の区域には、4棟の掘立柱建物と8軒の住居の建物群がみられる。第219・225・206・395号住居跡の軸方向は10度前後東に振れ、第201・209・211・216・400号住居跡の軸方向は15度前後西に振れて、ハの字状に建ち並び、その内側に掘立柱建物群が配される。第61・66・67・68号掘立柱建物跡に規格性はないものの、第61・66号掘立柱建物跡は、住居跡同様にハの字状に並ぶ。この区域の中心となる第211号住居跡は一辺が6m以上の大形で、短刀・刀子などが出土している。この外の住居からも短刀・刀子の外に紡錘車や鉄滓が出土していることから、この区域は第Ⅱ期に引き続き、鉄・繊維関連の手工業が行われていたものと思われる。そして掘立柱建物は手工業関連の屋としての役目をしていたのであろう。

B群の南側には空白域があり、その南には、第294・296・378号住居跡をはじめとする6軒の住居跡で構成される建物群がある。これらは軸方向が12度前後西に振れる一群で、第296号住居跡からは「度」の墨書土器、第294号住居跡からは「中」の篋書土器、第378号住居跡からは「十」の刻書土器が出土している。

南東部の掘立柱建物C群の区域には、5棟の掘立柱建物跡と6軒の住居跡の建物群がみられる。建物の軸方向は、第111号掘立柱建物跡が12度西に振れ、外の第91・107・114・123号掘立柱建物跡は2度前後東に振れる。第Ⅱ期には3間×5間の大形の屋が存在しており、当期にも面積をわずかに縮小した3間×5間の第91号掘立柱建物跡がある。これらの掘立柱建物跡群の北側には一辺が6mを超える第172号住居跡や170号住居跡があり、「大形住居+屋」で構成されている。南端には、鉄鉢形土器や「草」の墨書土器が出土した第342号住居跡がある。

第Ⅱ期に存在した南部の掘立柱建物D群は当期にはなくなり、中央部寄りに竪穴住居が移動する。第280・





第724図 中原遺跡第Ⅲ期遺構群

283・298・325号住居跡の4軒がみられる。住居跡の規模は中形と小形で、掘立柱建物跡も小形である。第298号住居跡からは「大家」,「川刈」の墨書土器が出土している。

第Ⅱ期に存在した南部の掘立柱建物E群の区域には全く建物跡はみられなくなり、大きな空白地域となる。

中央部西端には3棟の掘立柱建物跡と7軒の住居跡がみられる。これらの建物群の軸方向はいずれも5～15度西に振れている。第89・90号掘立柱建物跡は調査区域外であるため詳細は不明であるが重複しており、当期内で建て替えがおこなわれているものと思われる。一辺7mを超える大形の第110・137号住居跡をはじめ、第103・108・124・137号住居跡からは複数の刀子、鎌、鉄鏃、紡錘車、鉄滓が出土している。集落の北東部の第211号住居跡を中心とする建物群と出土遺物の様相が似ており、鉄関連・繊維関連の手工業が行われていたと思われる。

以上のように当期には鉄器の出土量が多くなり、住居跡3軒に1軒の割合で保有している。鉄関連・繊維関連遺物の内訳をみると、刀子26点、鎌5点、短刀・小刀3点、鉄鏃6点、斧1点、石製・土製・鉄製紡錘車14点である。特に、大形住居では必ず鉄器・紡錘車等を保有しており、各建物群を形成した集団間に建物規模や保有物等で具体的に格差が生じてきている。鉄器の保有率は手工業の発展を示すと共に、中央部と北東部が保有率が高いことから集団間の格差も意味している。

#### 第Ⅳ期（第725号）

第7・9・11・28・32・50・65・70・80・84A・84B・105・123・132・134・138・143・148・150・155・157・173・192・204・239・252・254・255・258・263・265・275・277・282・301・303・307・310・327・336・339・353・363・383・389・418・425・427・435・447・456・458・473・499号竪穴住居跡の54軒、第5号竪穴状遺構の1軒、第7・8・58・59・62・69・72・73・75・78・84・88・98・119・121・126号掘立柱建物跡の16棟、第417号土坑が該当する。

前期まで増加していた建物も、当期には数を減らし、集落の規模が縮小する時期である。

集落の北西部では、4～6軒を1単位とするまとまりが5単位みられる。第473号住居跡を中心とする単位、第458号住居跡を中心とする単位、第252号住居跡を中心とする単位、第50号住居跡を中心とする単位、第435号住居跡を中心とする単位の5単位である。この内、第50号住居跡を中心とする単位は第7・8号掘立柱建物跡を、第435号住居跡を中心とする単位は第129号掘立柱建物跡を含む建物群である。第5号竪穴状遺構からは、「万坏」の墨書土器が出土している。第65・425号住居跡からは鉄鏃・釘・鉄滓が出土しており、北東部の掘立柱建物B群の区域内でⅡ～Ⅲ期を通して行われていた鉄関連の手工業が西に区域を広げたものと思われる。

北東部にはⅡ期から継続される掘立柱建物B群の建物群がみられる。Ⅲ期には掘立柱建物群の東西には大形の住居跡が配されていたが、当期は南に小規模の第204号、北には第418号住居跡が配されるだけである。中央部に第62・69・72号掘立柱建物跡がみられる。第62号掘立柱建物跡は2間×5間の身舎の南面に庇が付く。柱穴も大きく、面積は庇も含めると約80m<sup>2</sup>で大規模な建物である。この北西側には小規模な2間×3間の側柱建物である第69号掘立柱建物跡が、西側には2間×3間の総柱建物である第72号掘立柱建物跡がある。この掘立柱建物B群は、Ⅱ期以来、鉄関連の遺物や紡錘車などが多く出土し、鍛冶工房跡も確認されていて、早くから手工業による経済活動がみられる区域であることから、第62号掘立柱建物跡はその優位な経済基盤をもつ有力者の居住施設と考えられ、第69・72号掘立柱建物跡は付属の倉庫と思われる。このように大規模な居宅が出現したことは、管理者と働き手の階層分化も意味する。労働力を提供したのは、先に述べた第65・425号住居跡の居住者であろう。

B群の南から集落の中央部には空白域があり、その南には3軒の住居跡と6棟の掘立柱建物跡の建物群があ



第725図 中原遺跡第Ⅳ期遺構群

る。第148・192・303号住居跡，第58・59・73・75・78・126号掘立柱建物跡である。

南東部はⅠ期以来掘立柱建物C群の建物群がみられる区域で，第Ⅲ期も，大形の倉や屋，大形の住居を中心に栄えており，当期にも4軒の住居と2棟の掘立柱建物で構成される。そのなかでも第339号住居跡は一辺が6mを超える大形のもので，灰釉陶器・刀子・鉄鉢形土器が出土しており，中心的な存在であったことがうかがえる。この周りには，3間×3間で面積30㎡以上の総柱建物である第94号掘立柱建物跡，3間×5間で面積50㎡以上の側柱建物である第109号掘立柱建物跡が配され，「大形住居+倉+屋」の構成をとる。第155号住居跡から短刀・刀子・石製紡錘車，第173号住居跡からは刀子が出土している。第121号掘立柱建物跡は2間×3間の小形の側柱建物である。

第Ⅲ期には小規模であった掘立柱建物D群は当期になると，10軒の住居と3棟の掘立柱建物の大規模な建物群になる。第84・88・119号掘立柱建物跡を囲むように住居が配される。これらの掘立柱建物跡はいずれも3間×4間の面積40㎡以上の側柱建物で，柱穴も大きい。第275号住居跡からは「酒」と窺書された短頸壺が出土しており，労働力確保の饗宴などに関連している可能性もある。第310号住居跡からは「家」の墨書土器が出土している。

第Ⅲ期には空白域であったE群には，再び5軒の住居跡と1棟の掘立柱建物が出現する。第99号掘立柱建物跡は3間×4間の身舎に西面庇が付く大形の建物である。この北側に位置する第258号住居跡からは帯金具・鎌・灰釉陶器，「生」の墨書土器，第389号住居跡からは「万」と墨書された灰釉陶器椀，第263号住居跡からは刀子，「十」の漆書の土器，第256号住居跡からは鉄斧，第447号住居跡からは3点の「川」の墨書土器が出土している。

中央部西端には6軒の住居跡があり，第Ⅲ期同様に建物の軸方向は西に15度前後振れ，前期からの特徴を受け継いでいる。第105号住居跡からは釘・不明鉄製品，第134号住居跡からは帯金具・刀子・鉄鏃，第138号住居跡からは火打金出土している。

以上のように，南西部から南部にかけて展開する掘立柱建物C・D群は「大形住居+倉+屋」，「大形住居+屋」で構成され，北東部の掘立柱建物B群とは異なり経済基盤は農業であったことが想定される。

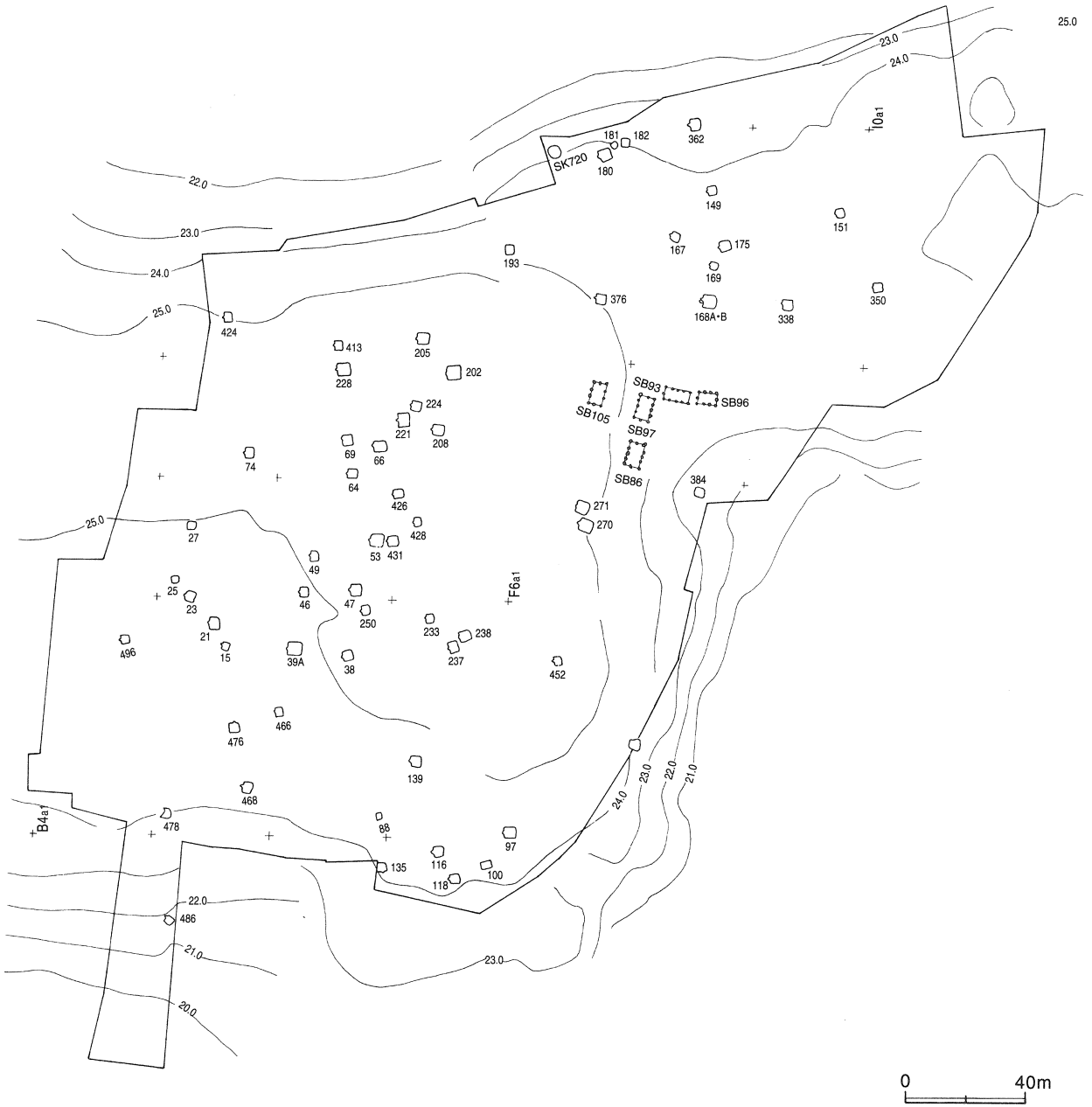
#### 第Ⅴ期（第726図）

第15・21・23・25・27・38・39A・46・47・49・53・64・66・69・74・88・97・100・116・118・135・139・149・151・167・168A・168B・169・175・180・181・182・193・202・205・208・221・224・228・233・237・238・250・270・271・338・350・362・376・384・413・424・426・428・431・438・452・466・468・476・478・486・496号住居跡の63軒，第86・97・93・96・105号掘立柱建物跡の5棟，第417・720号土坑が該当する。

集落が再び増大する時期である。掘立柱建物跡はD群だけになる。

北西部は第Ⅳ期同様，4～6軒1単位の住居跡群が3単位みられる。第38号住居跡からは，灰釉陶器長頸瓶・刀子，「宗門」の墨書土器，第39A号住居跡からは，灰釉陶器椀，5点の刀子，2点の鉄鏃，「壬」「本戸」の墨書土器，第47号住居跡からは鉄滓，漆容器，「前」の墨書土器，第46号住居跡からは鉄鎖が出土しており，これらの住居跡は1単位を構成している。第426号住居跡からは「万坏」「万」「本」の墨書土器が出土しており，Ⅳ期に初出した「万坏」の文字が同じ群の中で受け継がれている。この外にも第74号，B群の第202号住居跡でも出土している。

北東部の掘立柱建物B群の区域は前期までとは異なり，住居跡のみで構成される。第202号住居跡からは前出の「万坏」の墨書土器をはじめ，石製紡錘車・鉸具・刀子・鉄滓，第205号住居跡からは灰釉陶器3点，短刀，刀子3点，手鎌2点，鉄製紡錘車・門・鉄滓各1点，不明鉄製品3点，第208号住居跡からは灰釉陶器1



第726図 中原遺跡第V期遺構群

点、鉄滓・不明鉄製品、第224住居跡からは灰釉陶器1点・鉄鏃2点、第228号住居跡からは土製紡錘車が出土しており、Ⅱ期以降から開始された鉄関連・繊維関連の手工業生産が定着し、この区域は経済的にも優位になってきたことがうかがえる。

南東部は2～4軒で1単位の住居跡群が4単位点在する。

南東部の前期まで存在していた掘立柱建物C群の建物群は、当期には住居だけになり、建物群の主体はD群に移動している。第86・93・96・97号掘立柱建物は軸方向が12・13度東に振れる側柱建物で、逆L字形の配置をとる。この建物群の北に第105号掘立柱建物跡がある。この建物群の周りは空白域になっており、居住空間との区別をしている。

前期まで存在した南部のE群は、当期には無くなり、再び空白域となり、わずかに第452・438号住居跡がみられる。第438号住居跡からは2点の鉄鉢形土器が出土している。

中央部西端には第97・100・116・118・135・139号住居跡があり、1単位を形成している。これらの住居跡からはⅣ期に引き続き、刀子・手鎌・釘・不明鉄製品・土製紡錘車等が出土している。

#### 第Ⅵ期（第727図）

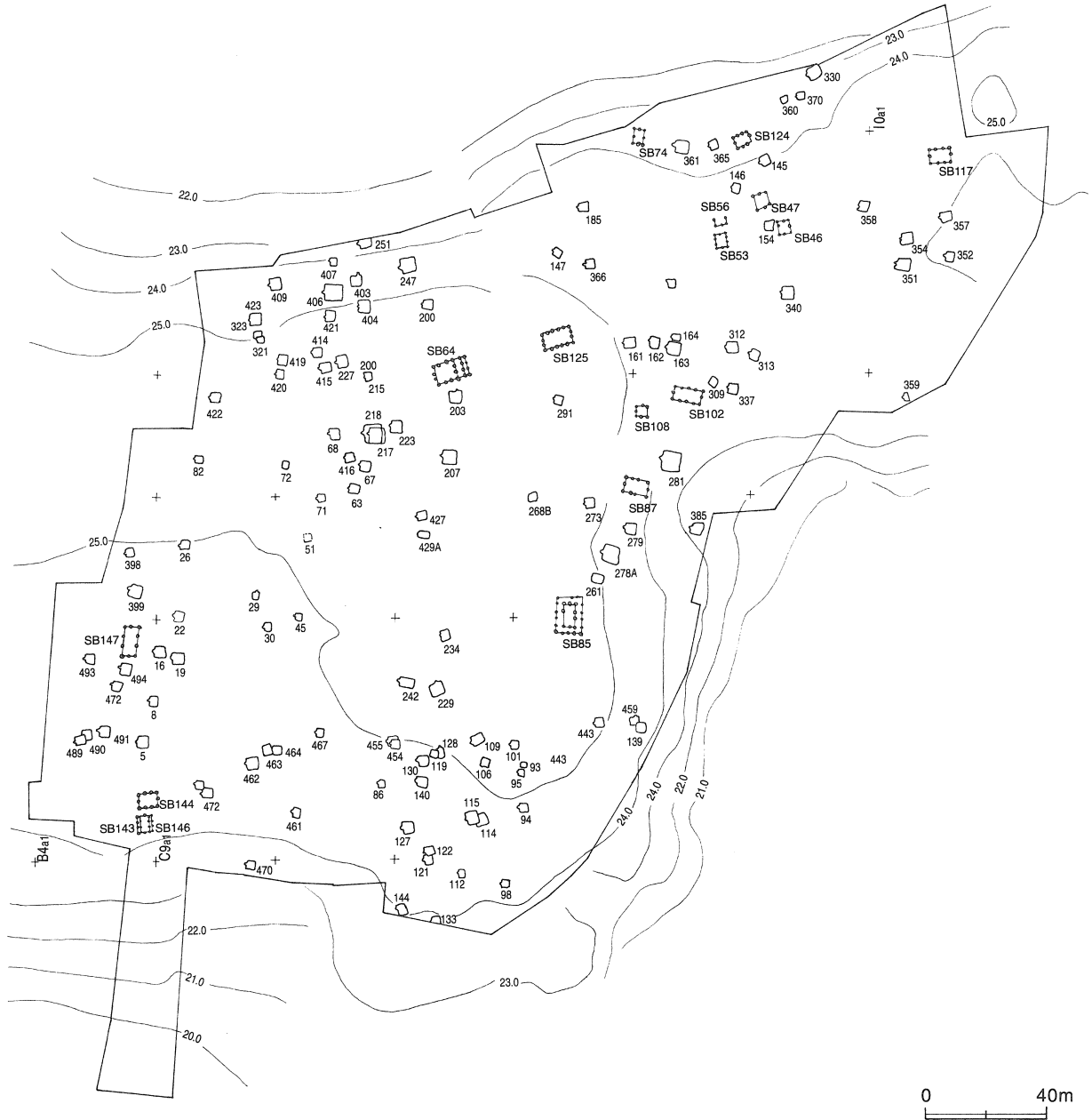
第1・5・8・16・19・22・26・29・30・45・51・63・67・78・71・72・82・86・93～95・98・101・106・109・112・114・115・119・121・122・127・128・130・133・140・144～147・154・161～164・166・185・200・203・207・215・217・218・223・227・229・234・242・247・251・261・268B・273・278A・279・281・291・312・313・321・323・330・337・340・351・352・354・357～359・361・365・366・369・370・385・398・399・403・404・406・407・409・412・414～416・419・420・422・423・439・443・450・454・455・461～464・467・470・472・489・490～494号住居跡の119軒，第4号竪穴状遺構の1軒，第46・47・53・56・63・64・74・85・87・102・108・124・125・136・144・146・147号掘立柱建物跡の17棟が該当する。

中原集落の最盛期であり、転換期でもある。一般的に9世紀後葉という時期は住居跡が小形化し、数も減少する傾向にあるなか、中原の集落では一辺が6mを超す大形の住居跡がみられ、軒数も集落の出現以来最大になる。さらにこれまでは、鉄関連遺物や繊維関連遺物、灰釉陶器等の遺物は北東部の区画と中央部西端の区域に集中してみられたが、当期には集落全体に及び、点数の多少はみられるが、ほぼどの住居跡からも出土するようになる。

北西部ではこれまで中央付近にみられた住居跡は、北端部と西寄りに分離するようになる。北端部の住居跡の軸は0～8度東に振れるものが多く、「万坏」「本」「本井」「大山」の墨書土器が出土している。なお、第ⅠからⅤにかけて掘立柱建物跡A群が展開していた区域は、当期には空白域になる。

北東部には住居跡が密集する。大形の第217・218号住居跡を中心とする単位，第207号住居跡と第64掘立柱建物跡を中心とする単位，第227号住居跡を中心とする単位，大形の第406号住居跡を中心とする単位の4単位がある。これら住居群は東寄りのブロックと西寄りのブロックに分かれる。これらの住居からは鉄関連・繊維関連の遺物のもとより、外の建物群よりも多くの灰釉陶器や緑釉陶器が出土しており、最も経済基盤が優位であることを裏付けている。また、また東寄りのブロックは「万坏」の墨書土器を多量に保有している。この一群と北西部北端の一群は共に「万坏」を使用しており、これらは同族集団で、その表示記号としてこの文字を使用していたものと思われる。

北東部南側の空白域を隔て、南東部には3～6軒で1単位の住居が6単位ある。集落は南端まで広がりを見せている。この一群からは「又上」の墨書土器が多く出土している。後に「文字資料について」の項でもふれるが、灰釉陶器碗に焼成前に「又上」の文字が窺書されており、流通経済の発展がうかがえる。この南東部の



第727図 中原遺跡第Ⅵ期遺構群

中央には、小規模の第46・47・53・56・124号掘立柱建物跡が点在する。

南部の中央には大形の住居と3棟の掘立柱建物で構成される建物群がある。これらは前期の掘立柱建物跡D群を引き継いだ建物群である。これらの建物群は軸方向が5～20度東に振れている。掘立柱建物の南には大形の第281号住居跡が、西には大形の第278A号住居跡が、東には小形の住居跡が弧を描くように南北に立ち並ぶ。

中央部南側には、2間×3間の身舎に四面庇が付く大形の掘立柱建物跡が配される。周りは空白域になっており、意図的な空間づくりが感じられる。この建物は火災で焼失しており、第740号廃棄土抗から多量の灰釉陶器・緑釉陶器と共に越州窯系の青磁が出土している。このような陶器類を保有していた第85号掘立柱建物跡は仏堂的建物と思われる。

中央部西端には前期から引き続き、住居が密集する。これらの住居の軸方向は西に15度前後振れるものが多い。集落の出現以来、この区域は規模を増大している。

中原の集落では 期以降、鉄鉢形土器・銅鏡等をはじめとする仏教関連の遺物が出土しているが、仏堂とみられる建物は確認できなかった。当期ではじめて仏堂が出現することになる。これは、おそらく谷を隔てたところに存在していた郡寺が衰退したことに起因すると思われる。ここで仏堂が出現する背景には、郡寺の盛衰が影響しているものと思われる。

#### 第Ⅶ期 (第728図)

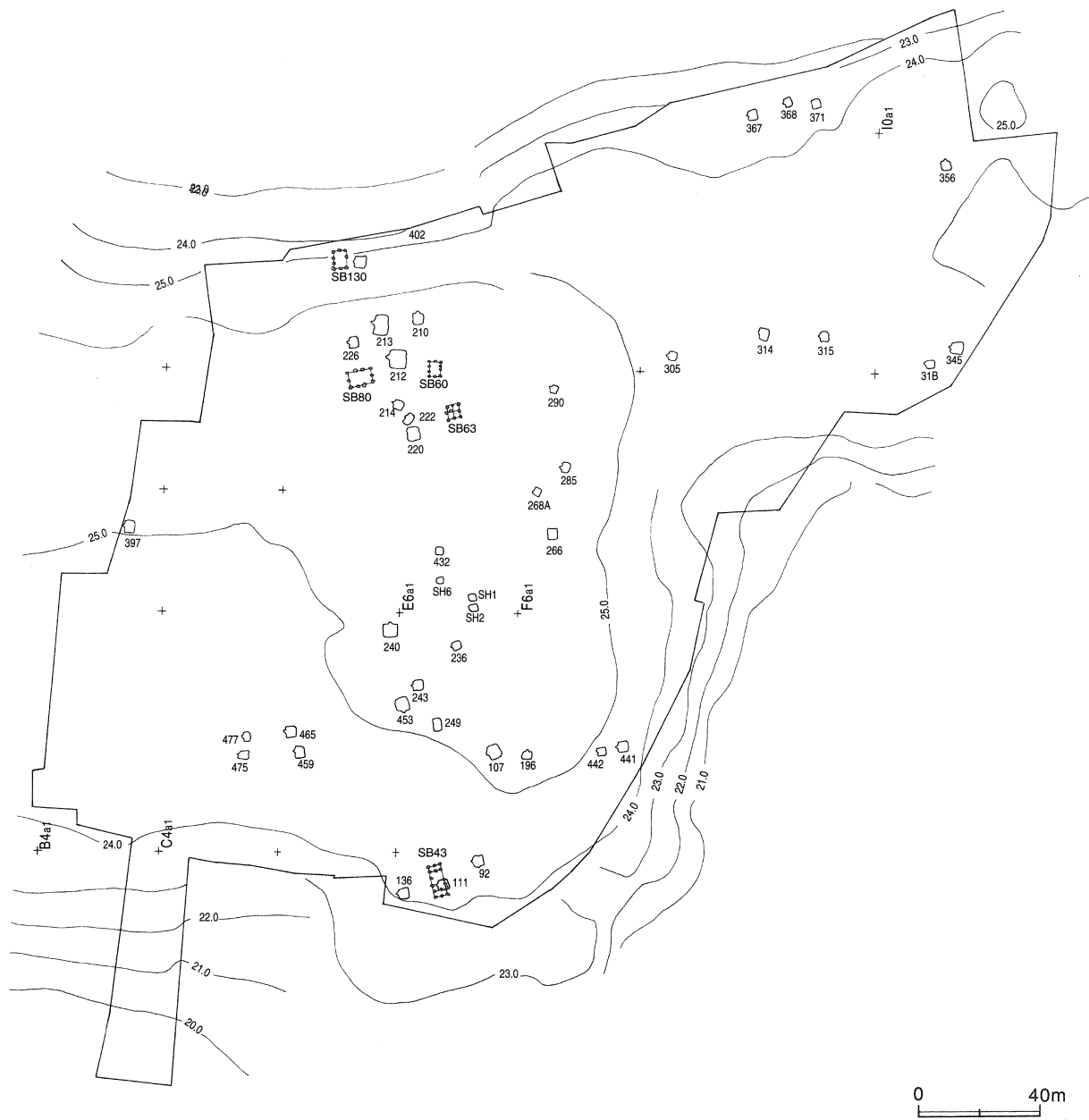
第92・107・111・136・196・210・212・213・214・220・222・226・236・240・243・249・266・268A・285・290・305・314・315・318・345・356・367・368・371・397・402・432・441・442・453・459号住居跡の36軒、第1・2・6号竪穴状遺構の3軒、第60・63・80・130号掘立柱建物跡の4棟が該当する。

中原集落が衰退する時期である。

住居は中央部に集中し、そのほかの区域には数軒ずつ点在する。依然として、北東部の一群は大形の第212・213号住居跡を中心に配置され、灰釉陶器・緑釉陶器・刀子・釘・鉄製紡錘車・石製紡錘車・鉄滓等が出土している。北東部の区域は、第Ⅵ期には「万坏」の墨書土器を所有する集団の居住区であったが、当期には「生」の墨書土器を所有する集団の居住区になる。この外の区画からも、鉄関連・繊維関連の手工業に関わる遺物が出土している。当期の住居跡は火災で焼失しているものが多い、その状況は、床面や床面近くから遺物が出土している場合が多く、食膳具類をあらかじめ持ち出した形跡は見られないことなどから、自発的に放棄したとは考えられない。この時期は東国が乱れ始めている時期で、集落を自発的に放棄したというよりは、第三者によって放棄せざるを得ない状況に陥れられたことも考えられる。

以上、中原遺跡の集落の変遷を概観してきた。8世紀前葉に突然出現した中原の集落は、当初、区画を設け、計画的に居住域と倉庫域を分けていた。郡衙と密接な関係を持ちながら、農業生産や手工業による経済活動を行い成長していく。第Ⅵ期の、集落として最も栄えているなか転換期を迎える。しかし、急激に衰退し、第Ⅶ期をもって200年以上に及んだ集落は突如として姿を消していく。まさに律令制と消長とを共にした集落である。





第728図 中原遺跡第Ⅶ期遺構群

#### 4 中原遺跡の性格

中原遺跡の調査は、河内郡衙・郡寺と密接に関係をもった集落を念頭において調査を行ってきた。その結果、多数の竪穴住居跡、掘立柱建物跡を検出した。遺物も豊富で、地方では、国府跡・国分寺跡などからしか出土しないような舶載陶磁器の青磁・白磁や緑釉陶器・灰釉陶器が出土した。これらのことから、中原遺跡は一般集落とは異なるという感が強く、律令期の郡衙周辺の集落とはどのような景観であったのだろうかという問題提起にもなった。

まず、一般集落との対比という意味で、中原遺跡の遺構・遺物の特色を挙げてみる。

- ① 堀で区画された掘立柱建物跡が存在する。
- ② 大形住居跡と掘立柱建物跡等で構成される建物群がある。
- ③ 鍛冶遺構があり、鉄関連の遺物が出土している。
- ④ 富裕な生活を繁栄して、灰釉陶器442点、緑釉陶器98点、青磁16点、白磁が1点など、嗜好品が多く出土している。
- ⑤ 銅鏡破片3点、鉄鉢形土器6点、灯明具（坏転用が大部分）など仏具が多く出土している。
- ⑥ 刀子（109点）、短刀及び小刀12点、硯、朱墨書、腰帯具など、官人に関わる遺物が多い。
- ⑦ 石製紡錘車27点、土製紡錘車23点、鉄製紡錘車4点。など繊維関連などの遺物が多量に出土している。
- ⑧ 竈の部材として瓦を使用している住居跡がある。（特に9世紀後葉以降に多くなる。）
- ⑨ 8世紀初めから10世紀初めまでの約200年間に及ぶ集落である。

以上のような特徴から、「官衙」的な遺跡、「公的」性格をもつ集落、「官衙とは言い難いが一般集落とも違う」というように、「官衙関連遺跡」の範疇に入れることができる。「官衙関連遺跡」といわれるなかでも、特に地理的・歴史的な環境からも河内郡衙・九重廃寺の関連遺跡として考えられてきた。そして、時期別の遺物の変遷や遺構の変遷をみていくなかで、時期毎にあるいは、区域毎にそれぞれ違った機能を持っていることが明らかになってきた。そこで、ここでは前項の「3集落の変遷」の時期別遺構群全体図をもとに、どの建物がどの建物へ発展したり、機能が移転したのかを推定し、各機能を担った建物群がどのように推移したかを探ることを心がけ、中原遺跡の性格に迫れればと考えている。

中原第I期の集落の景観は、倉庫群である掘立柱建物A群と、居住区域である住居群ははっきりと区別されていた。何よりも重要なことは、この倉庫群が全長44m、幅1.2~1.8m、深さ約0.7mの堀によって明確に区画されていることである。建物は小規模な総柱建物と側柱建物が、ある程度の企画性をもって立ち並んでいる。これらの倉庫群と居住域はさらに、空白域で隔てられている。このような区画をもった集落はまさしく官的な様相を示している。そこで、中原の集落から東へ700mほどに所在する「河内郡衙」との関わりが想定される。常陸国の郡の成立の事情は『常陸国風土記』に記載があり、比較的明らかになっている。しかし、河内郡については、その記事がなく明らかでない。河内郡の成立は、『新編常陸国誌』による、「難波長柄豊崎朝筑波郡ヲ割テ置キシト見エタリ、…」という説が有力である。分割されて成立した河内郡は、郡の成立当時から大規模な正倉をもっていたのか、そして、その時期はいつ頃になるのだろうかという疑問が出てくる。

河内郡の元とされる筑波郡でも、正倉である平沢官衙の成立時期は8世紀初頭とされている。さらに、大化5年に下総国海上国造の部内の1里と、那賀国造部内の5里を割いて置かれた鹿島郡の郡衙である神野向遺跡の成立も8世紀初頭である。このように、当初から存在した郡衙でも、分割されて成立した郡衙でも正倉の成立は8世紀初頭である。一概に、現時点で判明している常陸国内の正倉だけを根拠には、河内郡衙正倉成立についても論じることはできない。各郡の政治・経済によって様々な様相があると思われる。河内郡衙について

は、中原遺跡の東700mにある西坪遺跡から、4間×3間の総柱の掘立柱建物跡が3棟確認され、炭化米が出土しており、正倉に比定されていた。最近の当財団の試掘調査により、区画溝・総柱の掘立柱建物跡3棟・基壇建物が確認され、正倉である可能性が高くなっている。調査段階である上、未報告のため、成立時期についても不明である。あくまでも、河内郡衛成立の時期が不明ということが前提になるが、以上のことから、中原の第Ⅰ期の集落は、郡衛正倉の成立までの期間に、正倉の一部を担っていたという仮説を立ててみた。つまり、分割されて成立した河内郡は、大規模な正倉の成立までの期間は、中原のような集落に小規模な倉庫群を置いていたのではないだろうかということである。中原遺跡は、河内郡衛正倉の成立前夜の景観を呈しているということである。中原第Ⅰ期の時期は出土土器から8世紀前葉としており、筑波郡衛正倉の成立時期とほぼ同じである。

第Ⅱ期になると、掘立柱建物A群は、Ⅰ期にみられた区画堀や明確な空白域による区画は失われるものの、ある程度の企画性をもちながら、小規模な倉庫群が立ち並ぶ。この時期には、郡衛正倉も本格的に機能し始めた可能性があり、区画堀の必要性も無くなったものと思われる。また、『延暦交替式』の天平勝宝元年（749年）八月四日勅に「諸国正倉。就村里、借用他倉」とあるように、河内郡衛の正倉が成立した後も、中原第Ⅱ期の掘立柱建物A群は補完的に機能していたものと思われる。このように、第Ⅰ・Ⅱ期の掘立柱建物A群は、山中敏史氏の分類のⅡ類、「在地の政治経済状況・地形条件に応じ、適宜、設置・移転・廃止された補完的な性格の強い官衛施設、必要に応じて郡衛の諸機能の一部を補う役割を担うべく設置された施設」に属するものであろう。

第Ⅰ期の中原の集落には、郡衛の下級官人に連なる有力者と、その支配下にある血縁、地縁で結ばれた農民層が居住していたと考えられ、南東部の掘立柱建物C群はこの集落の倉庫と思われる。第Ⅱ期になると、集落全体に居住域は広がる。主たる産業は農業であるが、北東部の区域では特に鉄関連、他の区域でも繊維関連の手工業が開始される。北東部にはB群、南東部にはC群、南部にはD群・E群の掘立柱建物群が配置される。特にC群は、有力者層の居宅と思われる第171・317・346号の大形住居を中心に総柱建物、3間×5間、3間×4間の大形側柱建物で構成され、Ⅰ期よりも規模を増す。中原の集落にもⅡ期には仏教が浸透し始めたことから、集落の300mほど東にある九重廃寺もこのころには存在したものと思われる。

第Ⅲ期以降は、第Ⅱ期までの官の様相は全くみられなくなり、有力者層が経済基盤を整える時期である。どの区域でも大形住居と掘立柱建物の倉庫がセットとなる。第Ⅲ期の北東部の一群は鉄関連・繊維関連の手工業が盛んになり、住居群の中央には掘立柱建物B群の倉庫群を持っている。第Ⅳ期にはその繁栄を裏付けるかのように、南面庇の居住目的と思われる掘立柱建物と倉庫を配する。この後も、この北東部の区域は手工業を背景に経済的に優位な状況にあり、集落が終焉を迎えるまで、繁栄し続ける。北東部ほどの経済的繁栄はみられないものの、これに次いで手工業が盛んなのが南西部区域である。言い換えれば、中原の集落の動産的経営基盤を成していた区域といえよう。これらに対して、第Ⅰ期からみられた南東部の掘立柱建物C群の区域、第Ⅲ期に性格を変える北西部の掘立柱建物A群の区域、第Ⅳ期にC群から移動した南部の掘立柱建物D群の区域は、わずかに手工業は行っていたものの、経済基盤は農業であった。これらの区域内は、穀類・穎稻を保管していたと思われる比較的大形の倉・屋と思われる掘立柱建物が配置されていること、第Ⅴ・Ⅵ期にはこの区域の住居跡から鉄鎌等が出土することからも裏付けられる。農業生産の地はおそらく、集落の東にある谷津や南部から南西部の花室川流域であった。このように、第Ⅲ期以降に集落内に複数の掘立柱建物群がみられるようになったということは、集落内に有力な戸がその数だけ成長し始めた表れである。また、第Ⅲ期から第Ⅵ期までの屋が建ち並ぶ背景には、有力者・富豪層による土地開発、私出挙の実施が関連しているのであろう。

中原の集落の転換期は第Ⅵ期であり、流通経済の発展と、これまでの中原集落の経済基盤をもとに、嗜好品

である緑釉陶器・灰釉陶器・舶載青磁・白磁等を保有するようになる。また、集落の南部に大規模な仏堂が建てられる。仏教の信仰は第Ⅱ期以降認められ、九重廃寺のもと、中原の集落は郡寺を結節点として精神的・経済的に密接に結びついていた。この時期の村落内寺院の出現は有力富豪層の成長と、中原集落の自立的活動、集団の強い結びつきを示している。さらに、「万坏」「又上」の墨書土器を所有する血縁・地縁集団からも強い結びつきが読みとれる。集落内に仏堂をもった第Ⅵ期には、九重廃寺は衰退したものと思われる。そして、10世紀初めの東国の乱れは、中原集落の消滅につながっていく。

以上のように、8世紀前葉に河内郡衙正倉が成立するまでの間、中原の集落は正倉の一部の機能を担って出現したと仮説をたてた。正倉の成立以後は、郡衙の下級官人である有力者のもと、郡衙・郡寺と密接な関係を持ちながら、自立していったと結論づけた。近年、郡衙周辺や郡衙の末端組織について多く論じられているが、中原遺跡の性格はどの類に属するものなのか、結論をだした今でも、未だ釈然としない部分が多い。それは、郡衙・郡衙関連遺跡それぞれが多様かつ複雑であり、どれ一つとして同じものがないということからくるものであろう。それには、国レベルの政策だけにとらわれず、各郡が置かれた社会・政治・経済状況を考慮しなければならぬということであるが、浅学ゆえにそこまで踏み込んで考えることができなかった。中原集落の成立期の評価については、今後の河内郡衙の調査報告を待たなければならない。郡衙及び周辺集落の様相がどのようなものであったのか、本書がその一助となれば幸いである。

末筆になりましたが、3年間にわたる調査期間、並びに整理期間中、多数の方々に来跡・来館いただき、貴重なご意見をいただきました。感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 赤井博之 「古代常陸国新治窯跡群の基礎的研究(1)」『婆良岐考古』第20号 婆良岐考古同人会 1998年
- 天野 努 「古代東国村落と集落遺跡—下総国印旛郡村神郷の様相—」『研究紀要』16(財)千葉県文化財センター 1995年
- 石毛彩子 「古代豪族居宅の構造—官衙・集落の比較から—」『古代豪族居宅の構造と類型』発表要旨・資料集奈良国立文化財研究所 1998年
- 井上尚明 「郷家に関する一試論」『埼玉考古学論集』(財)埼玉埋蔵文化財事業団 1991年
- 大西雅弘 「船橋遺跡出土の白磁について」『船橋遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989年
- 古代生産史研究会 『東国の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜—』 1997年
- 古代の土器研究会 『古代の土器研究』3 1994年
- 佐々木義則 「茨城県北半部における土師器碗の形式変遷」『婆良岐考古』第21号 婆良岐考古同人会 1999年
- 田中広明 「古代東国と豪族の家」『古代豪族居宅の構造と類型』発表要旨・資料集 奈良国立文化財研究所 1998年
- 田中広明 「関東地方の施釉陶器の流通と古代の社会」『研究紀要』第11号 (財)埼玉県埋蔵文化財事業団 1995年
- 津野 仁 「遺跡から見た郷長の性格」『大平臺史窓』10号 1991年
- 東国土器研究会 『東国土器研究』第4号 1995年
- 土橋理子 「日本出土の古代中国陶磁」『貿易陶磁—奈良・平安の中国陶磁』榎原考古学研究所付属博物館編 1993年
- 奈良国立文化財研究所 『律令国家の地方末端支配機構をめぐって』発表要旨・資料集 1996年
- 奈良国立文化財研究所 『郡衙正倉の成立と変遷』報告資料集 2000年
- 日本考古学協会 シンポジウム資料3『地方官衙とその周辺』 1995年
- 山中敏史 『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房 1994年
- 山中敏史 「古代官衙論」『展望考古学』考古学研究会 1995年
- 「常陽藝文」編集部 『常陸国風土記』 1992年
- 中山信名 『新編常陸国誌』塙書房 1964年復刻

茨城県教育財団文化財調査報告第170集

中根・金田台特定土地区画整理  
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

中原遺跡  
(中巻)

平成13(2001)年3月15日 印刷

平成13(2001)年3月21日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

印刷 野澤印刷株式会社

TEL 029-248-0117